

寝取りチンポ vs 異世界
【邪神によって異世界に送り込まれた俺に与えられたスキルが寝取りチンポだった件】

うたかたとわ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

邪神によって異世界に転移させられたユーリに与えられたスキルは寝取りチンポと
いうよく分からないスキルだった。ほのぼのとした異世界生活をユーリは送っていく
※この作品はノクターンノベルズ、アルファポリス、pixivにも投稿しています※
エッチなシーンがある話には♡が付けてあります。※2021年11月18日タイ
トル一部修正

目次

異世界転移	1
ステータス割り振り	9
ファーストの街	16
リゼさんと……♡	24
リゼさんのお店で食事	35
ジャンヌと……♡	41
異世界生活二日目の朝♡	57
腹ごしらえ	63
工房に行こう♡	68
剣を買おう	78
冒険者登録	85
マリーと……♡	93

薬草採集♡	114
つまみ食い♡	137
マリー寝取り♡	149
アンナの日記♡	167
アンナちゃんと……♡	187
雑用を済ませよう	206
マジミラ馬車でジャンヌと♡	210
工房での一幕	219
ミューさんと……♡	228
スキル獲得	248
錬金術ギルドへ行こう	257
ジャンヌでお試し♡	265
ジャンヌ完堕ち♡	280

ユズハさんに淫紋を♡	522
エミリア墮とし♡	492
墮ちていくエミリア♡	470
エミリアを性的に開発♡	451
エミリアにセクハラ♡	432
ユズハさんに出し♡	402
新たな旅の仲間♡	388
ルルルウに淫紋を♡	368
ルルルウと初エッチ♡	348
ルルルウの調教♡	334
ルルルウ墮とし♡	321
狼人族の村	308
旅立ち	304

帝国の工作員ソニア♡	715
ベッケンバウム家の思惑	707
フリーエの街	698
アリスちゃんのオナニー♡	679
アリスちゃんといけない遊び♡	660
アリスちゃんと内緒の♡	638
旅の途中の出会い♡	615
ダンジョン作成	610
エルフ母娘寝取り♡	587
エミリアの葛藤	579
エミリアのお母さんとエッチ♡	564
ターニヤ分らせ♡	546
エミリアの故郷	540

アリスちゃんと初エッチ♡	743
ナターシャさんに淫紋♡	773
マーガレット・ベッケンバウム♡	801
宿屋経営	821
フリードニヒ8世ちゃんとのエッチ♡	830
私、異世界転移にハーレムはいらないっ てお願いしたよねっ!?	861
ダンジョン前の宿屋さん	868
えっ!?私、もしかしてヤツちやいましたあ!?	875
わらひい……♡やつらいまひらあ……♡	

グレッグとロイをお見送り♡	899
おまけ ミズハの映像記録球♡	931
宿屋への来訪者	942
パミラちゃんと……♡	948
パミラちゃんの母親	967
リンゼイさんと……♡	974
グレッグとロイの裏の顔	997
グレッグちゃんとロイちゃん♡	1002
竜人族の里	1037
ダンジョンへの潜入	1045
決戦!ダンジョンアリーナ	1055
ダンジョンルームにて♡	1063

退魔のシノビ	ユキノルート〜プロローグ	1079
ユキノ処女消失		1084
ユキノの娼婦修行		1101
ユキノ堕ちる		1133
退魔のシノビ	リンネルルート編	1150
閑話	リンネ処女喪失	1171
エーデンリッツ学園編		1190
校内見学		1194
とある日の午後		1202
深夜的一幕……		1211
麗しき学園生活		1231

ソフィア先輩の味見		1238
動き始めた困惑		1246
マリアーナの味見		1256
新入生歓迎の野外演習		1270
ヴィヴィ先輩の味見		1276
ヴィヴィ先輩と学校で		1295
ヴィヴィ先輩完堕ち		1310
マリアーナ完堕ち		1322
堕ち始めたニコル		1333
墮落するソフィア		1350
ニコルとソフィア完堕ち		1361
エーデンリッツ学園卒業式		1379
ラグーンの冒険		1390

1614	ラグーンちゃん苗床化♡	1582
	ヤバイやつをナンパ♡	1565
	慈愛の女神セーラ♡	1555
	戦いの女神ポーラ	1542
	ポーラとの勝負♡	1536
	ポーラとの騎乗位エッチ♡	1522
	異世界召喚の現場	1504
	ステータス鑑定の儀	1493
	異世界召喚された次の日	1479
	訓練開始	1457
	マーシャさんと食事♡	1431
	マーシャさんとの居残りエッチ♡	

3	ずっと憧れていたボクの師匠が、異世界から来た男に簡単に股を開いて、すっごく気持ちよさそうに腰を振っていました	1647
2	ずっと憧れていたボクの師匠が、異世界から来た男に簡単に股を開いて、すっごく気持ちよさそうに腰を振っていました	1640
1	ずっと憧れていたボクの師匠が、異世界から来た男に簡単に股を開いて、すっごく気持ちよさそうに腰を振っていました	1633

から来た男に簡単に股を開いて、すつごく
気持ちよさそうに腰を振っていました

4

1664

ずっと憧れていたボクの師匠が、異世界
から来た男に簡単に股を開いて、すつご
く気持ちよさそうに腰を振っていました

5
♡

1676

シャル処女喪失1♡

1700

シャル処女喪失2♡

1726

ずっと両思いだと思っていた爆乳でボー
イツシユな幼なじみが、僕の知らない所
で僕以外の男に股を開いてすつごく気持
ちよさそうに腰を振っていました1

1748

ずっと両思いだと思っていた爆乳でボー
イツシユな幼なじみが、僕の知らない所
で僕以外の男に股を開いてすつごく気持
ちよさそうに腰を振っていました2

1759

ずっと両思いだと思っていた爆乳でボー
イツシユな幼なじみが、僕の知らない所
で僕以外の男に股を開いてすつごく気持
ちよさそうに腰を振っていました3

1772

ずっと両思いだと思っていた爆乳でボー
イツシユな幼なじみが、僕の知らない所

で僕以外の男に股を開いてすっごく気持ちよさそうに腰を振っていました4

1784

ずっと両思いだと思っていた爆乳でボーイッシュな幼なじみが、僕の知らない所で僕以外の男に股を開いてすっごく気持ちよさそうに腰を振っていました5

1794

ずっと両思いだと思っていた爆乳でボーイッシュな幼なじみが、僕の知らない所で僕以外の男に股を開いてすっごく気持ちよさそうに腰を振っていました6

1807

ずっと両思いだと思っていた爆乳でボーイッシュな幼なじみが、僕の知らない所で僕以外の男に股を開いてすっごく気持ちよさそうに腰を振っていました7

1813

レイナちゃん寝取り1

レイナちゃん寝取り2

レイナちゃん寝取り3

レイナちゃん寝取り4

レイナちゃん寝取り5

隠し部屋

悪女エルザ

エルザとタマモ

19001893188918731865185818451831

	聖女エルザと悪女タマモの物語	1966
	帝国での事件解決と高校生勇者たちのその後	1912
	タマモと中出しエッチ♡	1919
	タマモをスライムで調教♡	1949
	エルザの初体験中出しエッチ♡	1962
	ハマっていたネットゲームの低身長H	2008
	カップロリ爆乳生意気メスガキキャラで	2009
	異世界に転移したので、異世界の大人たちをわからせて遊ぶことにしました。	2014
1983		
	ユーリとシラユリのパイズリ勝負♡	2011
1991		
	墮ちるシラユリ♡	2000
	閑話 ロクサーシャの処女喪失セックス	2000
	♡	2024
	世界最悪の都市ロストエデン	2060
	ベニコとの戦闘♡	2068
	ロストエデン散策	2086
	ベニコと路地裏の休憩所で♡	2092
	ユーリとベニコの会話	2106
	血まみれのキリノ	2142
	キリノのお店で食事	2132
	ベニコの調教「乳首責め」♡	2133
	ベニコの調教「アナル墮ち」♡	2150
	キリノとエッチ♡	2169

ベニコとキリノと3P
♡

—

2183

異世界転移

「あれ？ここはどこだ？」

気がついたら俺は真っ白な世界に来ていた。たしか俺は部屋でウイスキーをしこたま飲んで……

「私が貴様を召喚した」

突然、俺の目の前に、スーツ姿にオールバックのいかにもインテリ系悪役ポジションの男が現れる

「貴様には、世界に混沌をもたらしちゃもらう。あの世界には、娯楽が少ない」

「えーと……どういうことでしょうか？」

もしかして異世界召喚というやつか？でも、なんだか悪役ポジションのような気がするのだが……

「貴様には、我が邪神陣営としてお前らが言う異世界に飛び、世界に混乱をもたらしてもらう」

まじかよ!?!邪神陣営ってなんだよ？ヤバイんじゃないの？

「ヤバくはないぞ」

え!?!心を読まれてる？

「神にとつて、そのようなこと容易いことだ。まあヤバいことがあるとすれば、創造神の使徒が、貴様を殺しにくるくらいだろう」

「ヤバすぎるだろ!」

俺は思わず突っ込んでしまう。しかし目の前の邪神は、何事もなかったように会話を続けた

「貴様にはスキルを与えるから、それをうまく使って生き残れ。別に貴様だけではない。他に何人も、あの世界には貴様のような人間を送っている。自分を小物だと思おうのなら、あまり目立たなければ使徒からの攻撃を受けることもあるまい」

「俺以外にもたくさん、召喚された人間が居るんですか？」

俺は疑問に思ったことを聞いてみる

「あの世界には定期的に人間を送り込んでいる。そしてダンジョンを作ってもらい、そこを拠点にして世界に干渉してもらうことになっている、まあ例外も居るが……」

「ダンジョンって、あのダンジョンですか？」

「うむ。迷宮を作って宝を餌に人間を呼び寄せ、命を喰らうことでダンジョンポイントを貯め、そのポイントを使ってダンジョンを大きくしてくれれば良い。そういう物語が貴様の居た世界にはいくらでもあつただらう?」

「すげー!俺がダンジョンマスターか!」

「やる気が出てきたか?」

「はい!頑張ります!」

「良い返事だ。異世界にはダンジョンが数百はあるから、あまり凶悪なダンジョンを作らなければ、まあ、長生きは出来るだろう」

「凶悪なダンジョンを作ると、どうなるんですか?」

「例えるなら、ダンジョンポイントを稼ごうとして致死率100%の凶悪なダンジョンを作ってしまうと、創造神の加護を受けた勇者がダンジョンを破壊しに来る。お前の世

界で言うチート勇者がお前を殺しに来るわけだ。あまりに危険なダンジョンは世界に悪い影響を及ぼすからな」

「やさしいダンジョンを作ったらどうなるんですか？」

「あまり簡単なダンジョンにしてしまうと、ダンジョンコアを奪われて貴様が死ぬ。ダンジョンコアは高価で取引されているからな。ダンジョンマスターはダンジョンコアを奪われると、死ぬから気をつけろ」

「バランスが大切ってことか」

「そうだ。凶悪なダンジョンは異世界の住人に悪影響を及ぼすから狩られる。しかし軟弱なダンジョンは異世界の住人の利益になるから狩られる。まあ、貴様の腕次第ってことだな」

「分かりました」

「ではこれから、貴様に特典のスキルを授ける。このルーレットを回してみろ」

俺の目の前に、スロットマシンのような機械が現れた。これでスキルを獲得できるようだ。俺がレバーを引くと、スロットマシンの目がまわり始める。俺は祈りながら、ストツプボタンを押した

ジャジャーン！

ふざけた効果音とともに目が止まる。スロットマシンには、寝取りチンポと書かれていた

「寝取りチンポだな。おめでどう。強力なスキルだ」

「おめでどうじゃねーよ！何なんだよこれ！」

俺は思わず突っ込んでしまうが、邪神に無視されてしまう

「あとはこのステータスボードを使って、基本的なステータスの振り分けをしてもらうか。100ポイントあるから、これを使って、貴様が異世界でどう生活をしていきたいかを決めろ」

「ポイントを、ステータスとかスキルに割り振れるということですか？」

「そうだ。先程のような特殊なスキルはないが、基本的なスキルを獲得出来るようになってる。貴様が魔道士として生きたいのなら魔法スキルと魔力を、剣の道に進みたいのなら、剣のスキルと力のステータスを、と言う風に割り振ればいい。至れり尽くせりだろう？」

「アイテムボックスとかはあるんですか？」

「アイテムボックス、異世界言語は標準装備にしてある。アイテムボックスは時間停止機能付きだ」

「ありがとうえ！」

「うむ。ではさっそくステータスを割り振るがよい。レベルアップでもスキルポイントを獲得できるし、ポイントを取っておいて後から振ることもできるから気楽にな」

「そうするか！」

俺は早速、ステータスを割り振ることにした

ステータス割り振り

さて早速ステータスを割り振っていくとするか。名前も自由に決められるらしい。名前はユーリとでもしようか。向こうの世界に未練はないし、心機一転だな！

ステータスボードを見ると、ステータス表が現れる。

HP	100
MP	100
力	5
体力	5
器用さ	5
素早さ	5
魔力	5
精神	5

これが異世界の一般的な大人のステータスらしい。ここからステータスを振ってい

くようだ。次にスキル欄を確認する

スキル

異世界言語 アイテムボックス 寝取りチンポ

スキルの欄には、こう書いてあった

「さて、ポイントを割り振るか……」

スキル表にあるおかしな文字は無視して、俺は試しにステータスにポイントを割り振ってみる。どうやら1ポイントで各ステータスが1、HP、MPは100ずつ増やせるらしい

容姿も変えられるのか……

容姿も自由に変えられるらしい。性別すら変更可能だ。まるでRPGゲームのようだ。今現在は、15歳位の俺の姿になっている。若返りもしてくれようだ

獲得可能スキルも見てみる。剣術、槍術などの武器スキルや、火魔法、水魔法の魔法スキル。錬金術、調合などの生産スキルが、各20ポイントで獲得できるようだ。スキルのレベルアップにも20ポイント必要になるらしい

スキルレベルは1で駆け出し、2でビギナー、3で一人前、4でベテラン、5で実力者、というように向こうでは評価されるらしい。注意欄に書いてある。最高は10のようだ

一つのスキルにすべてを注ぎ込んで実力者クラスから始めるのか、各スキルをバランスよくとって、自分で実力を上げていくか、バランスが大切なようだ

さらにはバフやデバフなどの補助魔法や、鑑定、料理などの補助スキル、剣の才能や、魔法の才能など成長率をあげるスキルもあり、正直悩む

しかし、レベルアップ以外にもダンジョンポイントを使うことでも割り振りポイントが獲得できるということが注意事項として書いてあった。どうやらこれは、ゲームのス

タートと同じのようだ

俺がうんうん唸りながら悩んでいると、邪神が俺に声をかける

「私も忙しい身でな、ここからはお前一人でやってくれ。ステータスを割り振り終わったら、その扉に入れば異世界に行ける」

「はい。分かりました」

「ダンジョンを作りたい場所は、異世界に行つてから自分で見つけてくれ。最初に降り立った地でも良いし、世界中を旅して決めても良い。ダンジョン同士の縄張り争いや、他のマスターとの兼ね合いもあるからよく考えろ」

「ダンジョンを作るにはどうすればいいのですか？」

「アイテムボックスにダンジョンコアを入れておくから、ダンジョンを作りたい場所でダンジョンコアを使えばいい。ちなみにダンジョンコアを使うまで、貴様は生身の人間

だから気をつけろ」

「ダンジョンコアを使うとどうなるのですか？」

「貴様の種族がダンジョンマスターになり、寿命がなくなる。それまでは人間だから老いるし、年を取れば死ぬ。まあダンジョンマスターにならずに、人間のまま寿命をまっとうする者もおるが、それは貴様の好きにしろ」

「分かりました」

「ダンジョンマスターになる前に、魔物によって殺されたり、人間同士のいざこざで死ぬ者もいるから十分に注意しろ」

「ありがとうございます」

「うむ。何かあったら邪神像に祈れ」

そう言うのと邪神は去っていった。存分に考えたい俺は、要らぬ気苦労をせずに済むことに内心喜ぶ

「さて、とりあえずステータスボードを最後まで確認してみるか」

時間を掛けてステータスボードを隅々まで観察していると、一番下に管理者専用ページという隠し項目を見つける。ステータスボードを指で長押ししてからドラッグすると、リンクを踏める隠し文字が現れるという古の仕様だ

「とりあえず、適当にパスワードを入れてみるか……」

いわゆる初期設定とされるパスワードや、思いつく限りのパスワードを片っ端から入れてみる。するとあっけなく、パスワードを突破することが出来てしまった

「すげえ……」

管理者専用の隠しページに入ると、獲得可能隠しスキルという一覧が現れた。俺が獲

得したような変なスキルもたくさんある。その中で俺は最高のスキルを見つけた

異世界スターターセット

生産マスター、武術マスター、魔術マスター、盗賊マスター

現代物資調達のスキル

異世界辞典スキル

このスキル達がスターターセットとしてまとめて100ポイントで取れるようになってきているのだ。俺は速攻でそれらを獲得し、邪神にバレる前に異世界に旅立つことにした

ファーストの街

「お！異世界に着いたのか？」

のどかな草原の真ん中に俺は佇んでいた。街道らしき道が遠くまで伸びている。近くには城壁のようなものが見える。あれが街なのか？

街らしき建物にいく前にステータスを確認してみることにする。急いで転移をしたため、容姿は前世の平凡な姿のままだ

名前：ユーリ
HP 100
MP 100
力 5
体力 5

器用さ 5

素早さ 5

魔力 5

精神 5

スキル

生産マスター：生産スキルを全て使用可能

武術マスター：武術スキルを全て使用可能

魔術マスター：魔術スキルを全て使用可能

盗賊マスター：盗賊スキルを全て使用可能

現代物資調達：ニホンからインターネットで買える物ができる※お金が必要

異世界辞典スキル：異世界のことを何でも知ることができる

寝取りチンポ：寝取り確率が大幅アップ。イチモツの形状が女性にとって極上になる

おかしなスキルのことは置いておいて、各スキルの効果を確認してみる。スキルを得た効果なのか何となく、格闘においての体の動かし方や、生産においてのレシピ、作り方などが頭に浮かんだ。最初から知っていたかのように、体を動かそうだ

街道を見ても、盗賊マスターの効果か人の足跡や車輪の跡を見つけやすくなっている。街の城壁に向かって異世界辞典のスキルを使ってみる。すると目の前に、ゲームの鑑定スキルのような画面が浮かんだ

ファーストの街：転移をしてきた異世界人が、多く訪れる街として知られる。治安良し

簡単な街の情報のようなだ。調べようとすれば、街の歴史や領主の名前など、もっと調べられるらしい。これは便利なスキルだ

ちなみにイチモツを確認してみた所、前世よりデカく太くなっていた

ステータスを確認し終えた俺は街らしき建物を目指して街道を歩く。やはり中世の世界の街のようだ。近づくと門番が立っている場所があった

街の入口に近づくと、門番らしき兵士に声をかけられる

「生まれ！この街へは何の用事で来た？」

「田舎から仕事を探しに出てきました」

「そうか。身分証は？」

「持っていません。冒険者ギルドに登録して身分証を作ろうと思っています」

「そうか。田舎から出てくる奴は大抵そうだからな。とりあえずこの水晶に手を当ててみてくれ」

兵士に言われたまま水晶に手を当てると、水晶が青く光った

「犯罪歴もないようだ。ようこそファーストの街へ。通行税は銅貨三枚だ」

（あっ！やばい！）

俺は内心焦りながらもアイテムボックス内を確認してみる。するとアイテムボックスの中には金貨10枚、銀貨10枚、銅貨100枚があった。なんだかんだ至れり尽くせりである。あの邪神は実はツンデレなのではないだろうか？

ポケットから取り出すふりをしてアイテムボックスを使い、銅貨三枚を兵士に渡す

「うむ。騒ぎを起こさぬように」

「分かりました。ありがとうございます。冒険者ギルドへはどう行けばいいですか？」

「ああ。それなら……」

「ジョシユ〜」

兵士と話をしていると、愛嬌のある綺麗な女性が話に割り込んできた。腰の辺りまで金髪を伸ばした20歳くらいの女の子だ

「リゼ！もしかして俺に会いに来てくれたのか！」

リゼという名前の女性を見た門番の兵士は鼻の下が伸び切ってデレデレになっている。まあ少しくらいはおべっかを使ってみるか

「お二人は恋人同士なんですか？」

「お！そう見えるか！」

俺の言葉を聞いた兵士がすかさず喜ぶが、すぐさまリゼに否定をされてしまう

「違うのよ。私が経営している酒場に、ジョシユはよく来てくれるのよ」

一瞬だけテンションが爆上がりしていた門番のジョシユだが、リゼという美女に恋人であることを否定されて、分かりやすくシユンとしてしまった

「あなた、冒険者ギルドに用があるの？うちの店はギルドの近くだから、よかつたら案内するわよ」

「おいよせ！こんな得体のしれない奴と二人きりはまずいだらう！」

門番のジョシユガリゼを止めようとする。まあ、当たり前だろう

「大丈夫よ！田舎から出てきたばかりなんでしよう？じゃあ、助けてあげなきゃ。その代わり、私のお店に食事に来てね」

美女にウインクされて、ついドキリとしてしまう。これは今日、食事をする場所は決まったな

何だか知らないが、リゼは親切に俺を冒険者ギルドまで案内してくれるようだ。せつかくだしこの展開に乗っかることにしよう

「リゼは優しいな。おい、お前！リゼに何かしたら承知しないからな！」

「大丈夫です。人通りもありますし、冒険者ギルドに行くだけですから」

よく分からない展開に戸惑いながらも、紳士的な態度でその場を後にする

「じゃあ行きましょっか。私はリゼって言うの。よろしくね」

「俺はユーリって言います。よろしくお願いします。リゼさん」

さあ、俺の異世界生活の始まりだ

リゼさんと……♡

じゅぷ♡じゅぷ♡

(どうしてこうなった……)

俺は突然の展開に戸惑いながらも、現在の状況を確認する。ベッドに座り込む俺のイチモツをリゼさんが美味しそうにペロペロと舐め取っていた

冒険者ギルドに行く前に、リゼさんのお店に誘われて、まだ開店前のお店でお茶を御馳走になっていたら、あれよあれよという間に自宅部分のベッドルームに誘われて、いつの間にかフェラをされてしまった

「うふふ。顔に似合わずスゴイものを持っているのね……」

れろ♡れろ♡

(やばい……メチャクチャ気持ちいい……)

外で見せていた愛嬌のある顔とは違い、妖艶な笑みを浮かべたりゼさんが俺のチンポを口に咥え込んで顔を前後に動かしていく。リゼさんの口の中は温かくてヌルヌルとされていて、そのお口で丁寧に龟头や竿の部分を吸い取ってくれるのだ。たまらない

(そうだ。鑑定スキルを使ってみよう)

俺は盗賊スキルの一つである鑑定スキルをリゼさんに掛けてみる。これでリゼさんのステータスが分かるはずだ

名前；リゼ

スキル；童貞食い

効果；相手が童貞かどうか分かる

スキル欄にヤバイスキルを見つけた。どうやらリゼさんは俺が童貞だと知って声を掛けてきたらしい

「あなた初めてでしょ？お姉さんに任せてくれれば大丈夫だから……ね？」

俺の耳元で妖しくリゼさんがささやく。先程まで俺のチンポを舐め啜っていた口から漏れる熱い吐息に、体がゾクゾクとしてしまう。異世界に来てからデカくなったチンポも、ビキビキに勃起し尽くしていた

リゼさんは意思を確認することもなく、酒場の制服であろう茶系のドレスとエプロンを着けたまま下着だけを脱ぎ捨て、慣れた手付きでおまんこへとペニスを誘導していく

くにゅ♡

座位の状態で俺の肩に手を当て、リゼさんが少しだけ腰を落とす。すると亀頭の前が柔らかい何かをかき分け、ヌルヌルで温かい何かに埋まる

「いただきます♡」

——ツにゆうゆううん♡

リゼさんがあつという間に腰を落としきり、おまんこに当たる亀頭の感触を楽しむ間もなく、俺のペニスがリゼさんのおまんこをぬるりとかき分けるように入っていく。俺のチンポが根本まですっぽりと、リゼさんの体内に埋まりこんだ

チンポ全体が全て、うねうねとした気持ちいいメス穴に包まれていく。生まれて初めての体験だ

「ユーリくんもこれで大人の仲間入りね。どう？気持ちいい？」

「気持ちいいです！」

リゼさんの体内に俺のチンポが全て入りきった状態で、少し火照った顔のリゼさんを見つめながらそう答える。リゼさんと一つにつながっている。チンポを相手の体内に

入れるだけなのに、そんな気持ちいい感覚になれることを知った

「でもあなたのは少し大きすぎるから、もうちよつと待って——あんっ♡だめっ♡」

ズチュ♡ズチュ♡

童貞を卒業したばかりの俺は興奮し、ピストン運動を開始する。リゼさんのヌルヌルとしたおまんこの肉をかき分けながらチンポを出したり挿れたりする感覚が、最高に気持ちいい。リゼさんの膣壁を使ってチンポをぬるぬると擦りあげていく

座位の状態でリゼさんの腰を両手でがっしりと掴み、彼女の腰を前後に揺らしながら俺も腰を振る。リゼさんのおまんこの奥から愛液が吹き出し、膣内がグチュグチュになつていくのが分かる。リゼさんも気持ちがいいようだ

「あっ♡あっ♡何でええ……初めてなんれしょおお……♡」

リゼさんが両腕で俺にギュツと抱きつきながら気持ちよさそうに尋ねてくる。寝取

リチンポのスキルの効果なのか、どう動けばリゼさんが気持ちよくなるかが分かってしまおう

リゼさんは体をギュツと縮こませるようにして両足を使い、必死に俺の腰にしがみついていた

「何となく分かるんです。俺たち、体の相性がいいのかもしれないね」

ずぼ♡ずぼ♡ずぼ♡ずぼ♡

「らめええええ♡♡♡」

だいしゆきホールド状態のままのリゼさんを押し倒し、正常位の状態でおまんこの奥深くまでをチンポでグチャクチャにしてい

グチュ♡グチュ♡グチュ♡グチュ♡グチュ♡

俺は中腰になり、リゼさんの内もも全体に体を預けるようにしながら、種付けピストンプレスで彼女の子宮を押し潰していく

ゴリ♡ゴリ♡ゴリ♡

「すつごいのきたああああ♡♡♡」

子宮口をゴリゴリと刺激されたリゼさんのタガが飛ぶ。必死に俺の体にしがみつき、だいしゆきホールドでチンポをおまんこに啜え込んで離さない

「おちんぼおお♡もつとちようだい♡」

リゼさんが乱れながらも、俺のチンポをもつともつとと求めてくる

ぬぼ♡ぬぼ♡

言われなくても俺はリゼさんのおまんこの奥深くまでチンポを出し入れしていく。

メス肉をチンポを使ってエグリ擦るのは、最高に気持ちよかった

「イクよー！リゼさん！」

「うん♡いっぱい来てえええ♡」

ドブ♡ドブ♡ドブ♡

おまんこの奥深くに、精液をたっぷりと注ぎ込む。チンポをメス肉に包まれながらの射精は最高に気持ちいいことを知った。初めての中出した。メチャクチャに興奮する

男としての支配欲を満たしながらリゼさんの様子を確認すると、リゼさんはおまんこで味わう精液の快楽に満足して虚空を見つめ、よだれを垂らしながらポーズとしていた。彼女もメスとして快楽に夢中のようにだ

ぬぼり♡

精液を出し終わったチンポをおまんこから抜き取る。チンポを引き抜かれても、リゼさんは大股を広げたまま天井を見上げ動かない。彼女はまだ、俺のチンポの余韻に浸っているようだ

こぼ♡こぼ♡

大量に中で出された精液がリゼさんのおまんこからこぼれ落ちてくる。今夜、彼女が酒場で働くために着ている制服の内側が精液で染み、ベトベトに汚れてしまっていた

リゼさんのその情けない姿を見て我慢できなくなった俺は、中出しされたばかりのリゼさんのおまんこにもう一度、チンポをねじ込んでいく

「りやめええええええ!!!」

ズチユ♡ズチユ♡

リゼさんがよがり狂うように身をよじらせる。リゼさんのおまんこの中では俺の精

液がグチャグチャにかき混ぜられていた

「イクイクイクイク♡」

リゼさんのおまんこのお肉がヒクヒクと動き始め、俺のチンポを咥え込んで離さない。おまんこにチンポが吸い取られていく。そんな感じだ。ウネウネとしたリゼさんのおまんこのあまりの気持ちよさに、俺はすぐに果ててしまうことになる

ビュー♡ビュー♡ビュー♡

「イグうううううう♡」

2発目の中出しと同時に、リゼさんもイッた。その感触は、グネグネと動くリゼさんの膣壁にチンポから精液を搾り取られているようであった

……。

……。

……。

「ふう……」

一段落した俺は今、リゼさんに入れてもらったお茶を飲んでいる。リゼさんは化粧直しの中の最中だ、異世界に来てわずか数時間で、童貞を卒業してしまった

だ
住む場所も手に入れた。リゼさんに、酒場の住居スペースに住まないかと誘われたの

俺の異世界生活は、こうして進んでいく

リゼさんのお店で食事

リゼさんとセックスをしてから、のんびりとお茶を飲んでいる内に夜になってしまった。今日は冒険者ギルドに行くのを止めて、このままりゼさんの家にお世話になることにする

リゼさんの経営する酒場は元は小さな宿屋を改装したもので、一階が席数が十席ほどの小ぢんまりとした酒場で、二階にある五部屋のうち一部屋を賃貸として貸してくれることになった。二月ごとに金貨一枚を支払う契約だ

お金を払わずに居候させてもらうと色々と自由が効かなくなるので、ここはしっかりと線引をすることにする

開店したリゼさんのお店で食事を摂る。シチューとパンで銅貨五枚。メチャクチャ美味しかった

しかし、開店してしばらく経ってもリゼさんのお店にはお客が誰も来ない。店内はガラランとしたままである

(リゼさんは美人だし、料理も美味しいのに、何で誰も来ないんだろう?)

俺がそんなことを疑問に思っていると、お店のドアが開く。どうやらお客さんが来たようだ

ドアを開けて入ってきたのは、金髪碧眼に切れ長の目が特徴の美女であった。身長は高めで160センチ後半くらいはあるのだろうか。スレンダーな体に、軽鎧姿がセクシーである

「おいお前！リゼの店で食事を摂るのは殊勝だが、彼女に変なことしてないだろうな？」

金髪碧眼の美女が、俺を見るなり詰め寄ってくる。はて？

「どちら様でしょうか？」

こんな美女とは会った覚えのない俺がそう尋ねると、金髪の美女はプンプンしながら言葉を返す

「お前！街の門で会ったろうが！」

「え？門番をしていたのは男性では？」

「うふふ。ジャンヌは門番の仕事をしている時は男のふりをしてるんですもんね。名前も門番をしている時はジャンヌではなくて、ジョシユって呼んでくれて私にお願いするくらいだし」

リゼさんが楽しそうに答えを教えてくれる

「女だとバレると舐められることが多いからな。仕方ないんだ」

ジョシユもといジャンヌが憤慨しながら種明かしをする。門番として会った時は兜を深くかぶっていたから分からなかった。思い返してみると、男にしては声が高いなという違和感があつたな……

俺がそんなことを考えていると、料理と酒の注文をしながらジャンヌがリゼさんと会話を始めていた

「リゼ、こいつに変なことされなかったか？」

「大丈夫よ。ユーリくんは紳士なんだから。ね？」

「ええ。ジャンヌさんが怪しむようなことは何もしていませんよ」

俺は笑顔でリゼさんに会話に合わせる。それを聞いたジャンヌは納得できないような表情ではあるが居住まいをただし、自己紹介を始める

「私の名前はジャンヌ。冒険者をしているがたまに門番の仕事もしている。門番をして

いる時はジョシユと声をかけてくれ。それ以外の時は気軽に呼び捨てで構わない」

「俺はユーリって言います。よろしく、ジャンヌ」

「よろしく、ユーリ。でも、リゼに手を出したりするなよ！」

ジャンヌが釘を差してくるが、俺は曖昧に笑顔でごまかす。実はもうヤツちやいましてなんて言えない

酒を飲み交わしながらジャンヌと親交を深めていく。リゼさんのことになる。少し変だが、彼女は根は真面目でいい奴のようだ

俺がまだ冒険者ギルドに行っていないことを知ると、呆れながらもジャンヌと一緒に来てくれることになった。明日、俺の冒険者登録に付き合ってくれるらしい

夜も更けたし、俺は明日に備えて借りたばかりの部屋に戻り眠ることにする。そろそろ閉店時間だ

部屋に家具などはないが、元が宿屋だけあって、ベッドだけはすでに置いてある。冒険者登録が一段落したら、通販スキルを使って家具を一式揃えちゃうのもいいな

こうして、俺の異世界生活の一日目が暮れていく

ジャンヌと……♡

「あつ……♡んっ……♡」

深夜、薄暗い部屋の中で、ベッドの上に寝転がったジャンヌが熱い吐息を漏らす。俺とジャンヌはセックスをしていた

先程までは、俺とジャンヌは友人のように酒を飲みながら親交を深めていた。しかし、ジャンヌは俺との会話が楽しかったのか、飲みすぎてしまったのだ

ベロンベロンになったジャンヌが、俺がリゼさんのお店の二階に部屋を借りたことを知ると騒ぎ出す

ジャンヌは自分も部屋を借りると言い出し、今晚はリゼさんのために俺を見張ると、何故か俺の部屋に押しかけてきた

リゼさんはそんな俺達のやり取りを楽しそうに見ながら閉店作業を終え、自室に戻ってしまふ。ちなみにお客は結局、俺とジャンヌ以外は誰も来なかった

そして本当に、ジャンヌは俺の部屋までペロンペロンの状態で付いてきてしまふ。これには参った

俺はイタズラ心からつい、そんなにリゼさんが心配なら、ジャンヌが俺の性欲を満足させてくれれば間違いは起きないんじゃないか？と挑発をしてしまふ

すると、ジャンヌはぐぬぬと唸って黙り込んでしまったのだ。これをチャンスだと捉えた俺は、このままジャンヌを美味しく頂いてしまふことにした

俺はジャンヌを押し倒し、とにかく手マンでイカセまくった。ジャンヌも気持ちよさそうによがる。寝取りチンポスキルのおかげで、どうすればジャンヌをイカせられるかが、簡単に分かるのだ

そして、なし崩しのまま今に至る

ベッドの上に、全裸になったジャンヌが仰向けで無抵抗に寝転がっている。すでにイキまくって痴態を晒した彼女は、恥ずかしそうに左腕で顔を隠していた

ジャンヌの体は鍛えているため少し筋肉質で、美しかった。推定Bカップの胸がツンと上を向いている

「これは、リゼの為なんだからな！分かってているな？」

「分かってるよ」

正常位の状態で俺を見上げながら、強がっているジャンヌを軽くないなし、ジャンヌのおまんこにペニスを当てがう

「んっっ」

ジャンヌの口から小さな声が漏れた

クリ♡クリ♡

ペニスの先をおまんこの入り口に当てたまま、ジャンヌの乳首を摘み上げ、こねてみる。ジャンヌのツンとした乳首を転がしていると、彼女の口から、甘い吐息が漏れてくる

「んっ……ふうう……」

俺に弱みを見せないためか、ジャンヌは必死に声を押し殺していた。でも、気持ちいいのがバレバレだ。俺に乳房を揉まれるたびに、ジャンヌの体がふにゆりと脱力していき、セックスの準備が整っていく

さわ♡さわ♡

おまんこにペニスを当てたまま、ジャンヌの陰毛を指先でやさしくなぞっていく。

ジャンヌは怒りを堪えるような様子で、恥ずかしそうに耐えていた

「くうううう……」

ジャンヌの、小さいぽつちとしたクリトリスを刺激する。ジャンヌは、自分の体が反射的にピクリと動いてしまうのを隠そうとして、必死にベッドのシーツをギュツと握りしめていた

くにゆ……♡くにゆ……♡

ペニスを上下に動かし、ジャンヌの柔らかい割れ目こねていく。膣口からあふれ出てきた熱い愛液で、ジャンヌのおまんこはもう、とろとろに蕩けきっていた

「くうううう……♡ふふううう……♡」

ジャンヌの体が興奮しきり、耐えられなくなってきたのが分かる。そろそろ頃合いだろう

俺はジャンヌの膣の入り口に当てがったペニスを少しだけ、奥に進める。そして、輪のようになった彼女の膣の入り口を、少しだけ押し広げる場所にまでペニスを移動させた

「ねえ、やっぱり……」

ジャンヌから待ったが掛かる。どうやら躊躇をしているようだ

「その……、実は、初めてなんだ……。それに私は女性が好きで、男性には興味はない……。私はリゼが好きなんだ。すまない……」

ジャンヌがそう告白をする。もちろん、その言葉を聞いても俺の挿入する意思は変わらない。そのための寝取りチンポスキルだ。彼女に、おチンポの快楽を教えてあげなくては

にゆるっ♡

ジャンヌの意思を無視しておまんこの中にペニスを押し込むと、ヌルヌルとした柔肉をかき分けながら、亀頭の先がジャンヌの膣穴へと入り込んでいく。そしてすぐに、俺のペニスはジャンヌの処女膜へと辿り着いた

「たのむ……」

俺のペニスに処女膜を薄く引き伸ばされた状態で、キリツとした切れ長の目のジャンヌが、情けない顔で懇願する。彼女の潤んだ瞳を見た俺は、決心した

「いただきます♡」

——ブチツ

「くろう……」

ジャンヌが呻いた

ジャンヌの処女膜が破ける。しかしそのまま止まること無く、俺のペニスがヌルヌルに蕩けたジャンヌのおまんこをかき分けて、彼女の奥深くまでを侵食していく

初めてジャンヌの体内に、異性のペニスが埋まり込んだ瞬間だ。俺のチンポでジャンヌは女になった

「はやく……終わらせてくれ……」

苦しそうに呻くジャンヌの声を聞きながら、俺はゆっくりと慣らすようにピストン運動を開始していく

ぬぼ……♡ぬぼ……♡

「っ……♡あっ……♡」

30分ほどだろうか。彼女のおまんこに、ゆっくりとペニスを出し入れしていると、

苦しそうだつたジャンヌの目がトロンとし始め、快楽色に染まり始めたのだ。ジャンヌの口からは嬌声が漏れ出てきている。どうやら彼女の体から、力が抜けてきたようだ

「気持ちいい?」

「うるっさい!……んっ♡」

俺の質問に、息も絶え絶えなジャンヌが抵抗する。しかしすぐに、彼女はチンポに気持ちよさに夢中になってしまった

「あひっ♡ああっ♡あっ♡」

……ぬぶっ♡ぬぶっ♡ぬぶっ♡

俺におまんこを突かれるたびに、ジャンヌは我慢できなくなった大きな声を出し始め、無意識に腰を振っていた。彼女の目にはもう、周りの様子も映らなくなっている。破瓜のその日に、ジャンヌはセックスの虜になっていた

ピク♡ピク♡

彼女のおまんこが、ペニスを出し入れされながら何かに達しようとしてヒクヒクと動き始める。俺はその動きを確認すると、ピストン運動を止める

「あっ……」

ジャンヌがお預けされた犬のように嘆く。彼女は潤んだ瞳で俺を見上げていた

そして俺はまた、少ししてからピストン運動を開始する。ジャンヌは涙目で何かを訴えるように、俺を見つめていた

ジャンヌのおまんこがヒクヒクするたびに何度も、俺はその行為を繰り返していく。ピストン運動を止めるたびに、ジャンヌの苦しみが大きくなっているのが分かった

「おチンポ挿れられるの気持ちいい？」

「……………♡……………♡」

初めてのセックスを味わっているジャンヌにそう尋ねる。ジャンヌは恥ずかしそうに言葉を濁し、無視をした

「教えてくれないと、動くのやめちゃうよ?」

俺はピストン運動を止め、ジャンヌのおまんこからチンポが抜け落ちるギリギリまで、チンポを引き抜く。今、ジャンヌのおまんこに入っているのは、亀頭の先の1センチほどでしかない

ジャンヌのおまんこが早くチンポを突き込んで欲しくて、物欲しそうに収縮運動しているのが分かる

ジャンヌのおまんこは、引き抜かれてしまった俺のチンポをどうしても離したくないと、吸い付くようにして膣口を隆起させていた

「……気持ちいい♡」

ジャンヌが俺から顔をそらしながら、恥ずかしそうに答える。でも、それじゃだめだ
「俺の目を見て、ちゃんと答えて」

俺はピストン運動を始めない。挿れずに焦らしたまま、ジャンヌに再び注文する。
ジャンヌは恐る恐るでもいうようにゆっくりこちらを振り向くと、必死な形相で俺に
お願いをする

「イカせてくれ！たのむ！チンポが欲しくて、狂いそうなんだ！」

ジャンヌが堕ちた

その言葉を聞いた俺は一気に最奥まで、おまんこにチンポをねじ込んでいく。ジャン
ヌのおまんこからは、興奮とともに歓喜の愛液がドポドポと溢れ落ちてきた

「おチンポきたああああ♡」

ジャンヌが夢中になってチンポを味わい始める。もうジャンヌの頭の中は、おまんこに出入りする俺のチンポの気持ちよさだけでいっぱいになっていた

ズチュ♡ズチュ♡ズチュ♡ズチュ♡

「らめええええ♡」

ジャンヌのおまんこの奥までを隅々まで、チンポでえぐっていく。膣壁をゴリゴリと擦られるたびに、ジャンヌが体をよがり乱す。再びジャンヌのおまんこがヒクヒクと動き出す。今度は動くのを止めない。むしろピストン運動を早めていく

「気持ちいい♡気持ちいい♡気持ちいい♡気持ちいい♡気持ちいい♡」

ジャンヌはよだれを垂らしながら夢中になってベッドのシーツを握りしめ、うわ言の

ように同じ言葉を繰り返している。凜々しかった彼女の瞳は快楽で暗く濁りきり、今はもう、チンポしか見えていない

一度は拒絶し、不本意なはずだったセックスに、彼女はどつぷりと浸かっていた

ジャンヌが完全に堕ちきっていることを確認した俺は、彼女のおまんこの奥にまでチンポを突き込むと、どつぷりと中出しをした。トドメを刺すのだ

どぶ♡どぶ♡

「あゝっ……♡あゝっ……♡」

イッたままの状態でジャンヌの子宮に、俺の精液を注いでいく。子宮が満杯になっても止めない。洪水のように溢れるまで、精液を注ぎ込むのだ。ジャンヌの体を、メスの本能で満たしていく

寝取りチンポのスキルのおかげで、俺は自由に精液を出し続けることが出来るように

なっていた

ジャンヌのおまんこに収まりきれなかった精液が、すき間からゴポゴポと音を立ててこぼれ落ちてきても、俺はジャンヌに精液を注ぐのを止めない

俺に中出しをされながら、ジャンヌは気持ちよさそうに虚空を見つめ続けている。彼女の瞳は快樂で、暗く濁ったままになっていた

ジャンヌの初めての中イキは、これで強烈な体験になったはずだ。正直、俺以外の男とセックスをしても、もう彼女は満足できないだろう

俺はジャンヌを、チンポで墮とすことに成功した

俺に中出しをされ続けながら、気持ちよさそうに体を痙攣させていたジャンヌが、プツリと意識を失う。どうやら彼女は初めてのセックスに疲れ、体力の限界を迎えてしまったようだ。ジャンヌはベッドの上で、気持ちよさそうに寝息を立てている

俺も射精を止め、ジャンヌのおまんこからチンポを抜き取ると、そのまま一緒のベツドで眠りにつくことにした

異世界生活二日目の朝♡

「おはようございますー！」

「おはよう」

朝になり、部屋から出た俺はお店の準備をしているリゼさんに挨拶をする

「リゼ、おはよう」

俺に続いて、いそいそとジャンヌも挨拶をする。リゼさんに挨拶をしているジャンヌのおまんこには、俺の精液が満パンに入っている。昨日のことを忘れないよう、朝一でジャンヌのおまんこにチンポをぶち込んだのだ

「あらあら、ジャンヌもおはよう」

リゼさんが、何かを察しながらニコニコと笑っている

「今日は、冒険者ギルドに行つてきます」

「はい。いつてらつしゃい。でもその前に、ユーリくんに少しだけ手伝つてほしいことがあるのだけれども、いいかしら？」

リゼさんに何かの手伝いを頼まれる。少しくらいなら大丈夫かな。俺は了承の意を彼女に伝えた

「私も手伝おうか？」

「ちよつとだけだから大丈夫。ジャンヌはお茶でも飲んで待つてて」

ジャンヌも手伝いに立候補するが、どうやら俺だけで十分らしい。ジャンヌをお店で待たせたまま、リゼさんの後に付いて、頼みたいことがあるという倉庫へと向かう

「手伝ってほしいことって何ですか？」

室内に入ると、周りを見渡しながらいぜさんに尋ねる。荷運びの手伝いだろうか。倉庫の中は、少しだけ薄暗かった

「うふふ♡」

薄暗い倉庫の中でりぜさんがこちらを振り向くと、スカートをたくし上げるようにして下着を両手で掴み、スルスルと脱ぎだした。下着を脱ぎながら前かがみになっているりぜさんの着ている制服の襟の部分から、彼女のおっぱいが少しだけ見える

膝のあたりにまで下着を引き下ろした彼女は、右足を引き抜くようにしてパンツを脱ぎ去ると、左足首に捻れた下着をぶら下げたまま両手でスカートを持ち上げて、おまんこを見せつけてくる。りぜさんの髪色と同じ金色の陰毛が丸見えになった

「あなた、ジャンヌとエッチしたでしょ？ダメよ♡私ともしてくれなきゃ……」

いやらしくスカートをたくし上げたまま、妖艶な笑みを浮かべてリゼさんが俺を誘ってくる

「はいー！」

ズチユ♡ズチユ♡

俺はすぐさまリゼさんのおまんこにチンポを突き込んで、存分に出し入れをしていく。立ったままのリゼさんを倉庫の壁に押し付け、彼女の右脚を持ち上げた対面立位の状態でおまんこをチンポで突き刺し、キスをしながら彼女の意識をとろつとろに溶かしていく

体を鍛えているため締まりのいいジャンヌのおまんこと違って、リゼさんのおまんこは柔らかくて吸い付きがいいおまんこだ。どちらも名器である

「女の子を連れ込むのはいいけど、私とも……してくれなきゃいやよ♡」

濃密なディープキスをしながら、グチヨグチヨになったリゼさんのおまんこにたつぷりと中出しをする

「あなたの精液、すっごく気持ちいいの♡」

トロンとした目で、リゼさんが体を震わせている

お腹が一杯になったであろう彼女のおまんこからチンポを引き抜くと、愛液と精液が混じり合った淫液が、ポタポタと床にこぼれ落ちた

「……またお願いね♡」

おまんこに俺の精液を蓄えたりゼさんと一緒に、二人して倉庫から出ていく。仲睦まじそうに歩く俺達を見たジャンヌが訝しみ、倉庫で何をしていたのかを俺に聞いてくるが、重い荷物を運んでいただけと笑顔で答える

「さて、行くか」

「いってらっしゃい」

笑顔のリゼさんに見送られながら、俺とジャンヌは冒険者ギルドへ向かう。日はすでに、高く昇りきっていた

腹ごしらえ

「なあジャンヌ。ギルドに行く前に、腹ごしらえをしないか？」

冒険者ギルドへの道中で、俺はジャンヌにそう提案をする。朝から二発ほどセックスをして、正直腹が減った

「ああ。少し早いけど、私の行きつけの食堂に行こう。今なら空いてるから逆にいいかもしれない」

了承の意を示したジャンヌに案内され、俺たちは食堂へと向かう。しばらく大通りを進むと、カーン食堂という看板のある建物に着いた

「いらっしやいませー！」

食堂の中に入ると、肩までの茶髪に青い瞳のメチャクチャに可愛い女の子が出迎えてくれる。愛嬌のある顔立ちと頬にそばかすが残る純朴そうな雰囲気、彼女の魅力を大きくしていた

「やあアンナ！君はいつもカワイイな！」

少女の名前はアンナというらしい。アンナと会話をしているジャンヌの顔はデレデレだ。どうやらジャンヌは色んな女の子に粉をかけているらしいな

「紹介しよう。友人のユーリだ。」

「俺はユーリって言います。よろしく！」

「えっと、よろしくおねがいます！」

そばかすと愛嬌のある顔立ちで、アンナちゃんがニツコリと笑う。これはヤバイ。俺までデレデレになってしまいそうな破壊力だ

「ご注文は何にしますか？」

アンナちゃんに注文を聞かれる

「私は今日のランチセットにしよう。ユーリはどうする？」

「俺も今日のランチセットで」

何かあるか分からないから、とりあえずジャンヌと同じ物を頼む。日替わりランチというやつだ

今日のメニューは鶏肉のステーキとパンだった。めちやくちやに美味しい。これで銅貨5枚は安いな。頻繁に通おう

昼食を取りながらジャンヌに、アンナちゃんについて教えてもらう。というかジャンヌが勝手に喋りだした。アンナちゃんは俺と同じ15歳で、今年成人になったばかりら

しい。ファーストの街のあるイストリア王国では、子供は15歳で成人になるようだ

アンナちゃんは幼馴染のトム君と最近、いい感じなんだそう。周りから見てもお似合いで、付き合うまでそう時間は掛からないだろうと、ジャンヌは悔しそうに教えてくれた

「そういえば、ユーリは武器は何を使うんだ？ 剣か？ それとも魔術師なのか？」

会話の中でジャンヌに尋ねられる。冒険者になるにあたって、何で戦うかを決めていなかったな。とりあえず無難な剣にしておくか

「俺は剣を使う。でも剣を持っていない」

「ならば冒険者ギルドに行く前に、私の行きつけの工房に案内しようか？ 何ならお金も用立てるが？」

ジャンヌがニヤリとしながら俺に尋ねる。ここで彼女にお金を借りると攻守が逆転

してしまうな。M男ルートを目指すならそれもありがたいが、今回はやめておこう

それに俺は絶対に女からお金を借りたくない。セックスをする時に困るからな

「手持ちならあるから大丈夫だ。案内してくれるか？」

「分かった。昼食を食べ終わったら行こうか」

料理を食べ終わると、アンナちゃんに挨拶をした俺たちは工房へと向かうことにした

工房に行こう♡

ジャンヌが行きつけにしている工房は街の外れにあるらしい

ジャンヌに案内されながら、大通りから外れた細い路地を進んでいく。ジャンヌ曰く、近道なんだそうだと

人の気配がなく、薄暗い路地に差し掛かった辺りで俺は立ち止まりジャンヌに頼み事をする。ジャンヌの後を付いて、彼女の小柄で形の良いお尻を見ていたら、ムラムラとしてしまったのだ

「なあジャンヌ。口でしてくれないか？」

「なっ！ユーリ！ここは外だぞ！」

俺の言葉を聞いたジャンヌが驚いた顔で拒絶するが、それを無視して俺は言葉が続ける

「頼むよ、ジャンヌ」

ポロン

俺はジャンヌが押しに弱いと見てズボンをズリおろし、彼女の前で局部を露出させた。ジャンヌに見せびらかすようにして、ブラブラとペニスを揺らして遊んでみる

「なあジャンヌ。早くしないと人が来ちゃうよ」

「くっ。仕方ないな……」

俺のペニスを直視して、顔を真赤にしていたジャンヌが俺の足元で膝立ちになり、右手でペニスを握る

「口でなんてしたことないから、文句は言うなよ」

そう言うとジャンヌは俺の股間に顔をうずめるようにして、ペニスを啜え込んだ

じゅるるるるるっ♡

まだ柔らかい俺のペニスの根本まで啜えるとジャンヌは、口の中で飴玉のように転がしていく。唾液のヌメリが俺のチンポをグチュグチュにかき乱してくれるのが最高に気持ちいい

グボグボと喉を鳴らすようにして吸い取られながら、彼女にしゃぶり回された俺のチンポが一気に固くなる。それを確認したジャンヌは唇を輪の形にすぼめ、前後に動き始めた

じゅぼ♡じゅぼ♡じゅぼ♡

動きやすいようにと俺の太ももを両手で掴みながら、ジャンヌはチンポを啜えてい

る。フェラチオをしている彼女の髪が太ももに触れ、少しこそばゆかった

俺のペニスを吸い上げながら顔を動かしているジャンヌの唇が、ペニスを引つ掛けるようにして、いやらしく隆起している。美しい女性がひよとこ顔でフェラをしている姿を上から見下ろすのは、最高に格別だ

「ジャンヌ。出すよ」

俺はあつという間に、ジャンヌの口技に精液を搾り取られてしまうことになる。ジャンヌはフェラの才能があるようだ

どふ♡どふ♡

ジャンヌの口の中に精液を注ぎ込んでいく。口に啜えたペニスの先から突然あふれ出てきた精液に驚いたジャンヌが俺のチンポから口を離そうとするが、こんな気持ちいいことを止めるわけにはいかない。俺はジャンヌの顔を無理やり押さえ込むと、強引に口内射精を続けていく

とぼ♡とぼ♡

ジャンヌの口の中が俺の精液で満たされていく。そして少しずつ、ペニスを必死に啜えている彼女の唇のすき間から口内に収まりきれなかった白い液体がこぼれ始め、彼女の首筋を伝い襟元に染みを作ってしまう

チンポを啜えた姿勢のまま、ジャンヌが少し怒った涙目で俺を見上げている。どうやら早く、口の中の精液を吐き出したいようだ

「ジャンヌ、飲み込んでよ」

「むぁみいー！」

拒絶の意を示すジャンヌの叫び声で、出したばかりで敏感なペニスが振動しこそばゆい。俺はジャンヌの髪を撫でながら、猫なで声でさらに頼み込んだ

「飲んでくれたら、沢山イカせてあげるからさ。頼むよ」

「……………」

しばらく考えた後、顔を真っ赤にしたジャンヌがコクリと頷くと、尿道に残っている精液を口で吸い上げながら顔を離していく

ちゅぽっ♡

彼女の口の中から、俺のチンポが抜け落ちた

ツリ長のキリリとした瞳を持つ美しい顔のジャンヌが唇をすぼめながら、口内に入っている俺の精液がこぼれ出ないようにと口内を吸い上げている。正直、メチャクチャにエロい

口の中に満杯になった精液がこぼれ落ちないように少しだけ上を向きながら、彼女は懸命に、コクリと精液を飲み込んだ

「これで、いいんだらう?」

ジャンヌが挑発するように大口を開け、舌を晒す。精液を飲み干したばかりのジャンヌの口内には、ムワリとした妖しい雰囲気漂っていた。

俺に口の中が空になったことを確認させると、ジャンヌはいそいそと軽鎧の下半身部分を脱ぎだし、野外でおまんこを露出し始める。

「おい!ジャンヌ!外だぞ!」

俺は慌てて止めようとするが、すかさずジャンヌに言い返されてしまう。

「それはこっちのセリフだ!それに私が一つ言うことを聞いたんだから、今度はユーリの番だ!さつき言った約束を守れよ!イカせてくれるんだらう?」

ジャンヌが壁に手を当て、ぷりんとした小さなお尻をこちらに向けながら挑発をして

俺のチンポでイキまくったジャンヌの子宮に、たつぷりと精液を注ぎ込んでいく。俺に中出しをされながら、息も絶え絶えになったジャンヌが立ちバツクの姿勢のまま呆けている

ちゅぽん♡

もっと欲しいと吸い付いて離さないジャンヌのおまんこからチンポを引き抜くと、肉栓のなくなった彼女の膣穴から、精液があふれ出てくる

彼女のおまんこは、自らの気持ちいいメス穴からこぼれ出る精液を引き止めようとしてヒクヒクと、少しだけ開いたり閉じたりを繰り返していた

ジャンヌのおまんこから溢れてくる白い液体が陰唇を伝い、クリトリスの先から地面にポタポタと垂れ落ちていく。立ちバツクの姿勢のまま動かないジャンヌのいやらしい割れ目は、ネバネバとした俺の精液で白く染まりきっていた

……。

「さて、行くこうか」

セックスを終え、服を着終わると、ジャンヌはいつものキリツとした感じになって路地を進んでいく。俺はジャンヌに付いて、工房に向かい路地を進むことにした

剣をしよう

細い路地を抜けると、多くの鍛冶屋がひしめき合う工業地区へとたどり着いた。そのままジャンヌに案内され、ミュー工房という小さな建物へと入る。狭い店内には武器や防具が丁寧に並べられており、カウンターの奥に鍛冶場が見えた

「おお。ジャンヌじゃないか」

店内に入ると、銀髪ショートカットに青い瞳をした小柄なロリ少女が出迎えてくれる。ただし、胸はロリではなく巨乳であった。一見、彼女は店番をしている子供のように見えるが、店名から予想するに彼女がジャンヌが懇意にしている鍛冶師なのだろう

「こんにちは。ミューさん。あなたは今日も美しい」

ジャンヌが挨拶を始める。ミューさんと呼ばれたロリ少女は黒いツナギをほだけ、タ

ンクトップ姿で店番をしていた。この世界ではノーブラが普通なのか、ツンと張ったグレーのタンクトップ先に2つのポッチが見える

俺がバレないようにポッチを凝視していると、ミューさんとの会話の中でジャンヌが俺を紹介し始めた

「彼の名前はユーリといいます。冒険者登録をする前に剣を買いに来ました」

「こんにちはミューさん。よろしくお願ひします」

俺は極めて紳士な対応を心がける。直感でそう思ったからだ

「あはは。僕はミューっていうんだ。僕の姿を見て子供扱いしない人は珍しいね。ユーリ君はドワーフ族に会ったことがあるのかい？」

「いえ。店名がミュー工房だったもので、あなたがミューさんだと予想しただけです」

彼女はきつと、幼い見た目で苦勞しているのだろう。難儀である

「なるほど。僕はドワーフ族で人間から見たら外見は幼いけど、きちんと成人しているからよろしくね」

「どうやら、ミューさんは僕つ娘のようだ。異世界で出会う巨乳の僕つ娘に、チンポが熱い

「ミューさんは私よりもずっと年上だから、粗相の無いようにな」

ジャンヌが小さな声で俺に耳打ちをする。でもジャンヌ、お前の声はミューさんにもしつかりと聞こえてるぞ

「ジャンヌ。ずっとじゃなくて、僕は少しお姉さんだけだよね？」

ジャンヌに語りかけるミューさんの笑顔が怖い。彼女の黒い笑顔を見たジャンヌが直立不動に姿勢を正すと、慌てて発言を撤回していた

ミューさんと楽しそうに会話をしているジャンヌの唇が、先程まで俺のチンポを咥えていたことを思い出す。たぶん今も彼女の口内には、俺の出した精液の味が残っているだろう

たつぷりと中に出した俺の精液が少しずつ膣穴から垂れ落ちてきて、今頃、彼女の股間に開いた割れ目をネバネバに浸している。そんな状態でジャンヌがミューさんと会話をしていることを想像すると、ムスコが硬くなってきた。いかんいかん

「ユーリ君。駆け出しなら、あそこに安売りの剣があるから、好きなものを選ぶといい」

ジャンヌとの会話を一段落させたミューさんに駆け出し用の剣を紹介してもらおう。俺は樽に入った安売り用の剣の中から鑑定スキルを使って、一番品質が良さそうなものを手に取った

鉄の剣＋3 高耐久。折れにくい

丈夫そうだし、これでいいだろう。剣スキルも、この剣が使いやすいということを感じて教えてくれる

「ユーリ君は目利きの才能があるみたいだね」

俺が選んだ剣を見たミューさんの目つきが笑顔ではあるが、少しだけ鋭くなる。何やら彼女に認められたようだ

「ユーリは有望な男ですよ」

ミューさんの語りかけに同意し、ジャンヌも俺をヨイショしてくれる。やったぜ

俺はミューさんにお金を支払い、鉄の剣を購入する。値段は銀貨五枚だ。腰に剣を掛けるベルトは、俺が冒険者駆け出しということでサービスをしてもらえた。お代は出世払いだそうだ

「そういえばミューさん。今度、結婚をするらしいじゃないですか。おめでとうござい

ます」

店を出る前に、ジャンヌがミューさんにお祝いの言葉を伝える。ほう。ミューさんには婚約をした恋人がいるのか

ジャンヌからのお祝いの言葉を受け取ったミューさんが、照れ笑いをしながら言葉を返していた

「この前プロポーズをされちゃってね。こんな見た目の僕なんかでいいのかと思ったんだけど、受けることにしたんだ」

恥ずかしそうにはにかむミューさんの顔は、とても幸せそうだ

笑顔の彼女に見送られながら、ミュー工房を後にする。さあ、今度こそ冒険者登録だ

ちなみに、冒険者ギルドへの道中

「ミューさんと一発やりたかった……」

と、ジャンヌが悔しそうにつぶやいていたが、それは聞かなかつたことする

冒険者登録

冒険者ギルドに着くと早速、冒険者登録を済ませる。渡された冒険者カードは名前と冒険者ランクが記載されただけの簡素なものだった

冒険者ランクはGランクからSランクまであり、実績によってランクアップしていく。自分と同じランクかひとつ上のランクまでの依頼しか受けられない。もちろん、駆け出しの俺はGランクからスタートだ

登録の受付は、ジャンヌのオススメでリンダさんという可愛い受付嬢にもらった。肩まで伸ばした濃い茶髪に、おっとりとしたタレ目が素敵な女性だ

彼女には最近、彼氏が出来たのだとジャンヌが悔しそうに教えてくれる

「いい加減にしなさいよ!!」

冒険者登録が終わって帰ろうとした時、冒険者ギルド内に女の子の怒鳴り声が聞こえた。どうやら喧嘩らしい

声のした方を見ると、腰まで伸ばしたピンク色の髪に綺麗な紫色の瞳をした気の強そうなおんなの子が、三人の男に対していきり立っている

三人組の男に絡まれている女の子は、彼女が着ているゆったりとした黒いローブの上からでも爆乳の持ち主であることが分かる。正直、メチャクチャにエロい体つきをしていた

「げへへ。いいじゃねえか。そんなガキとパーティを組むより俺たちと組んだほうがお得だぜ。それに、お前のことも俺たちが気持ちよくしてあげるからさ」

まあ、テンプレだな。いかにもな冒険者に絡まれている女の子は、相手に対して軽蔑の眼差しを向けている

「む！いかんな……」

喧嘩を目撃したジャンヌが、すぐさま仲裁に割り込んでいく

「おい、ドン！いいかげんにしろ！」

ジャンヌに割り込まれ、ドンと呼ばれたむさくるしい男が嫌な顔をする

「ちっ！ジャンヌ！最近Aランクになったからって、いい気になってんじゃねえぞ！」

そう捨てゼリフを残し、冒険者たちは去っていた

「ジャンヌさん。ありがとう！」

ピンク色の髪をした少女が嬉しそうな顔で、ジャンヌにお礼を伝える。どうやら簡単に解決したようだ

「大したことないよ、マリィ。私は美しい君が傷つくことが怖いだけさ」

どうやら二人は知り合いらしい。マリィと呼ばれた少女と話すジャンヌの顔はデレデレだ

「ジャンヌつてすごい冒険者だったのか。尊敬するよ」

俺は二人の会話に割り込んでいく。会話の流れで、ジャンヌがAランクの冒険者だということを知る

「何よーあんた！」

しかし俺がジャンヌに話しかけた途端に、すっごく嫌そうな顔をしたマリィに会話を牽制されてしまう

「彼はユーリ。私は今日、彼の冒険者登録に付き添いでギルドに来たんだよ」

取り付く島もないマリーに、ジャンヌがやさしく説明をしてくれる。なんだかんだ、ジャンヌはいい奴だ

「ふーん。そうなの。あんた、いくつ？」

「15歳だけど……」

「ふん！私より年下なのね！」

俺の年齢を聞いたマリーが嬉しそうに鼻を鳴らす。年下だと何がダメなんだ？

「あはは。マリーは17歳だから、ユーリよりお姉さんだね」

ジャンヌが苦笑いをしながら俺たちの会話を補完してくれている。ジャンヌ、本当にありがとう

「私の方が年上なんだから、きちんと敬いなさいよ！」

俺に対して、マリーが偉そうにツンとする。彼女がふんぞり返った時に、彼女の胸にぶら下がっている爆乳がぷるんと揺れた。これはエロい。しかし、どうやら俺は、すっごく生意気な女の子と出会ってしまったようだ

「僕がもつとしつかりしてれば……」

俺がマリーの態度に驚いていると、金髪に長い前髪で目元を隠した気弱そうな青年が話しかけてくる。どうやらマリーの知り合いのようだ

「アル。あんたはいいの！私が守ってあげるんだから！」

青年の名前はアルというらしい。俺に対してはツンとしてふんぞり返っていたマリーが、彼に対しては偉そうではあるが、世話焼きをしている

「お互いに駆け出しなんだし、仲良くしたらどうだ？」

ジャンヌが俺たちの仲を取り持とうと声を掛けてくれる。俺に対して先輩風を吹かせていたが、マリーもどうやら駆け出しらしいな

「ジャンヌさんがそう言うなら従うけど、あんたは私の足を引っ張らないでよね！」

マリーはプンスカしながらも、俺と仲良くしてくれるようだ。よかった

「ごめんよ。僕もマリーの足を引っ張らないように頑張るから」

「だから、アル！あんたはそういうの気にしないでいいって言ってるでしょ！」

どうやらアルという青年は、マリーの尻に敷かれているらしいな。そしてマリーはアルにぞつこんであると

ジャンヌがマリーとアルの二人に稽古をつけるといっているので、俺は先に家に帰ることにする。俺も稽古に参加しないことをマリーが咎めてきたが、別にいいや

夕方になった街を歩いて家に帰る途中、トボトボと街中を歩くアンナちゃんとお会った

俺が心配して彼女に話を聞くと、どうやらアンナちゃんはトムさんとデートをした帰りらしい。しかし彼女は、トムさんとの関係が中々進展しないことに悩んでいるようだった

同じ年代の男である俺が今度、彼女の悩みを聞くと約束をしてアンナちゃんと別れる。こうして家のある酒場に帰ると、ジャンヌを置いて一人で俺が帰ってきたことを知ったりゼさんに、お店が開店する時間まで、精液を搾り取られてしまう

ツヤツヤの肌になったりゼさんを見て、夜になり帰ってきたジャンヌが訝しむが、俺は知らんぷりをした

こうして俺の異世界生活の二日目が暮れていった

マリーと……♡

にゅうううん♡

「あん♡あつ♡……あつ♡」

異世界に来て一週間が経つ。俺は今、ベッドの上で四つん這いになっているマリーのトロトロになったおまんこを掻き分け、ゆっくりとチンポを挿入していた

ぬるゆ……♡ぬるゆ……♡

いやらしく吸い付いてくる彼女の肉ヒダにチンポを擦り付け、焦らすように、慣らすように、マリーのおまんこの中でチンポを動かしていく。俺のチンポで膣壁をコネられるたびに、彼女のおまんこが柔らかく、ヌルヌルに溶けていった

マリーのおまんこは、挿入したチンポを引き抜くたびに、ヒダヒダになった膣壁がねっとり吸い付いてきて、突き込むたびに気持ちよく絡みついてくる、極上のおまんこである

「年下のチンポだけど、どう？気持ちいいかな？」

俺にチンポを抜き差しされながら、気持ちよくなっていることを必死に隠そうとして、肩に力を入れているマリーに問いかける。彼女の白くて美しい体はすでに、むっちり汗ばんでいた

「うるっ……っさい！」

息も絶え絶えなマリーが反論をする。しかし、強気な言葉を吐きながら彼女は、俺から表情を隠すように顔をうつむけたままだった。四つん這いになってベッドのシーツを見つめている彼女のうなじが、快楽で真っ赤に火照っている

マリーのツンとした言葉を聞いた俺は、やさしく引き抜いていたペニスを彼女のおま

んこの奥にまで一気に挿し込むと、激しく抽送を開始した

「お、っ♡ほっ♡奥う♡いぎ、なり、っ♡あ、っ♡あ、っ♡あ、っ♡……あ、っ♡」

ヌルヌルとしてなめらかだったマリーのおまんこから、強い快楽による原始反射によつて大量の愛液がドパドパと溢れてくる。俺のチンポで膣中をかき回されるたびに、ネチヨネチヨとしたマリーの愛液がグチュグチュと大きな音を立てていた

「こんなに音を立てたら、隣の部屋にいるアルに聞こえちゃうかもね」

「言わないで……」

熱い吐息を吐きながら、マリーがアルを思い出し、罪悪感に苛まれる。しかし彼女の思考はすぐに、俺のペニスを突きこまれているおまんこから昇ってくる強烈な快楽色に染められ、目の前のセックスの気持ちよさに夢中になっていく

俺のペニスによつて彼女のおまんこから掻き出された大量の愛液がトロトロと陰唇

を伝い落ち、彼女のクリトリスの先からだらだらとぶら下がっている

ズチユ♡ズチユ♡

おまんこの奥にまでチンポを突きこむたびに、俺の恥骨が柔らかくて弾力のあるマリーの大きなお尻にぶつかると。その感触がたまらなく気持ちがいい

「あつという間に、俺のチンポが好きになっちゃったね」

ヌルヌルとして気持ちがいいマリーのおまんこをチンポで楽しみながら、俺はマリーを挑発するように声をかける

「あんだなんか、チンポだけよ……」

気持ちよさそうに体を伏せ、ベッドのシーツを見つめたまま、マリーが唇を尖らせ小さくつぶやく

ぬぼ♡ぬぼ♡

チンポを突きこみながら見下ろす後ろ姿からではマリリーの今の顔は見えないが、彼女の両耳から頬にかけてが、気持ちよさで真っ赤に火照っているのが簡単に分かる

俺は、恥ずかしそうに俺のチンポをおまんこに受け入れているマリリーを見下ろしながら、彼女とセックスをするようになった経緯を思い出していく

冒険者登録をした翌日、俺はマリリーとアルのパーティーと臨時の冒険者パーティーを組んだ。そして駆け出しの行う簡単な依頼をこなした後に、酒場で懇親会を行う。場所は二人が泊まっている宿屋に併設されている酒場だ

速攻でアルを酔い潰した後にマリリーもベロンベロンにさせ、彼女を挑発しまくった。潰れてしまったアルを部屋まで送った後にマリリーの部屋に押し入り、さらに飲み会を続ける。その会話の中でマリリーを処女だと煽ってみる

「じゃあ、あんたはどうなのよー」

挑発に乗った彼女に、俺は実際にセックスをして試してみればいいんじゃないかと提案をする

「処女じゃないんだし、経験豊富なマリーなら俺と一回くらいセックスすることくらい、どうってことないでしょ？」

俺に煽られた彼女は強がって、アルとセックスをしまくっていると宣言をしていた

「ふん！出来るものならやってみなさいよ！童貞！——ツ!!!」

俺はワインを飲みながら椅子に座っていたマリーを抱き起こすと、ツンとしていたマリーの柔らかい唇を塞ぎ、強引に舌をねじ込んだ

「——ツ!!!」

先程まで飲んでいたお酒の匂いがする彼女の口内を無理やり舌で掻き回し、グチュグ

チュに犯していく。次第に俺と彼女の舌が絡み合い、ねちよねちよと口内を貪り合った

まさか俺に、本当に襲われてしまうと思っていなかった彼女は驚きながらも、慣れないキスの快楽に瞳をとろんと濁し始めていく

「大きな声を出すと、隣の部屋で寝ているアルにバレちゃうよ」

マリーの耳元でそうささやくと、俺を押しつけようとする彼女の抵抗が弱まった

「ふうう……♡、ふううう……♡」

立ったままでお互いの体を弄り合いながら、鼻息を荒くしたマリーの着ている黒いローブをまくりあげ、下着の中に手を入れる。すると、すでに彼女のおまんこはとろとろに濡れていた。俺は彼女の陰唇をゆつくりとなぞりあげ、ヌルヌルとした温かい愛液を彼女の割れ目に広げていく

「……あっ♡」

ゆっくりと彼女の割れ目をなぞっていた俺の指が、割れ目の上側にあるポツチに触れると、マリーが小さな嬌声を上げる。俺はそのまま中指を使って、マリーの勃起したクリトリスを無遠慮にクニクニとこねくり回していく

「んっ……♡んっ……♡」

敏感な肉をこねられるたびに力が入らなくなるのか、マリーは俺の肩に両手でギュッとしがみつき、内股に力を込めていた

——ビクン♡ビクン♡

しばらくクリトリスを弄っていると、マリーが声を押し殺しながら小さく体を震わせる。それを確認した俺はマリーのおまんこに中指と薬指をねじ込むと、次は強引にかき回してあげる。すでに愛液でトロトロになっている彼女のおまんこには、俺の二本の指が簡単に入ってしまった

彼女の下着がグチャグチャに濡れてしまうまでおまんこをかき回すと、マリーは床にへたり込んでいく

「イツちやつた？」

「……イツてないわよ」

マリーが俺から目を逸らし、唇を尖らせて小さくつぶやく。彼女の頬は熱を持ち、赤く火照っていた

マリーの服を脱がせた後に、彼女をやさしくベッドに寝かせてあげる。彼女の下着を引き下ろした際、彼女の愛液がドロドロになって、糸を引いていた

正常位の状態で無言のまま、俺たちはベッドの上で向かい合う。仰向けに寝転がる彼女の上半身には、もっちりとした爆乳がぷるんと横たわっていた。メチャクチャにエロい

しかし、マリーは俺におっぱいを見つめられるのが嫌なのか、恥ずかしそうに目をそらしていた

「あんたも、私を牛女つて馬鹿にするわけ？」

マリーが観念したかのように話しかけてくる。どうやら彼女の周りには、今までアホな男しかいなかったらしい。こんなにエロい爆乳を美味しくいただけかないとは

「マリーのおっぱい、俺は好きだよ」

俺がやさしく彼女に語りかけると、その言葉が予想外だったのか、マリーが体を起こすようにして、俺に語りかけてくる

「ねえ、本当に……」

にゅううううん♡

マリーの言葉を遮るようにして、有無を言わずに俺は、彼女のおまんこにチンポを挿入していく

「くろう……」

俺に語りかけるために少しだけ上半身を起こした姿勢のまま、マリーが小さく呻いた。初心なままで閉じた彼女のおまんこの肉をかき分けながら、ペニスが少しだけマリーの膣穴に埋まった辺りで、俺は動くのを止める。彼女の処女膜に、亀頭の先がぶつかったのだ。やはりマリーは処女だった

「入っちゃたあ……」

大変なことをしてしまったと後悔をするように両手で口元を抑え、自分のおまんこに埋まり込んでいるペニスを覗き込んだままのマリーを見下ろしながら、俺は彼女の処女を頂くことにする

「アル、すまん。いただきます♡」

——ブチツ

「んんっ……」

俺とマリーは一つにつながった。みちみちという感触とともに、初めて異物を受け入れるマリーのおまんこをかき分け、彼女の膣道の奥深くまで続くチンポの通り道を、俺のチンポが作っていく。これで彼女は大人の女性だ

「どうしよう……。ユーリとエッチしちやったよお……」

正常位の体勢で股を開きながら、マリーが俺に聞こえないよう小さな声で呟いていた。彼女は両手で口元を抑えたまま涙目になり、自らの体内に完全に埋まり込んでしまった俺のペニスを覗き込んでいる

さて、後悔ではなく、最高のセックスにしてあげなきやな

「マリー、綺麗だよ」

俺は安心させるような声でマリーに語りかける。すると、俺のその言葉を聞いたマリーは観念したかのようにため息をつくど、こてりとベッドに寝転がり、俺に顔をそらしながら、恥ずかしそうにつぶやいた

「……やさしくして」

俺とマリーが初めてセックスをしてから一週間、俺たちはパーティーとして依頼をこなした後に、アルに隠れてセックスをする関係になっていた。最初は嫌々であったが、徐々にマリーは俺とのセックスに慣れ始めている

そして今日も依頼を終えた後に、隣の部屋で休んでいるアルに隠れて、俺とマリーは、マリーの部屋でセックスをしているのだ

「マリーは後ろから突かれるのが好きだもんね」

俺はマリーがお気に入りなバックの体位で、彼女のおまんこをヌチュヌチュと突いていく。俺のチンポに伝わる、マリーのおまんこのトロトロとした感触が心地よい

「ユーリ、らめえ♡何かきちやうううう♡」

今日の俺は念入りに、彼女のGスポットを刺激していた。彼女の何か来そうという言葉や葉を聞いた俺は更に集中して、彼女のぶつくりと膨らんだGスポットをグニユグニユとこねていく

「何かでりゆううううう!!!」

ぴゅっ♡ぴゅっ♡

刺激に耐えきれなくなったマリーが初めて潮を吹いた。宿屋のベッドのシーツには、マリーの吹いた潮で大きなシミが出来てしまっている。順調に、マリーの体は俺に開発をされているようだ

潮吹きなど知らないマリイは、まるで自分がおもらしをしてしまったかのように恥ずかしがり、屈辱に耐えていた

「マリイ、こっち向いてよ」

バックでマリイのおまんこをグチャグチャにこねくり回した後に、正常位に体勢を移す。うつ伏せから仰向けになったマリイの瞳は快楽で濡れ、うるうると潤んでいた

正常位の体勢でマリイのおまんこにチンポを突きこみながら、二人がつながっている場所を覗き込むと、彼女のおまんこからあふれ出てきた本気汁で、俺のチンポがグチュグチュに白く濁っている

宿屋のベッドのシーツには、マリイの愛液でさらに大きなシミが出来ていた

そのまま、マリイの気持ちいい部分を探り当てながら丁寧なチンポを使って彼女の膣肉をこねていると、イキそうになった彼女のおまんこが、ヒクヒクと動き始める

「はっ……♡はっ……♡」

マリーは満身創痍になり、浅くて早い呼吸を繰り返しながら、気持ちよさそうに虚空を見つめていた。彼女はすでにいっぱいっぱいなのか、いつもの元気な瞳がとろりとしてしまっている

「アルう♡ごめんね……♡ごめんね……♡」

マリーが興奮し鼻息を荒くさせながら、アルに向かって謝罪の言葉をつぶやいている。実は先程、彼女は初めて俺に中出しを求めたのだ

最初は、絶対に嫌と拒絶をされて精液を外に出していたが、俺が避妊の魔法を使えること、中出しがすっごく気持ちいいことを伝え続け、マリーをそそのかすことに成功した

「ねえ、今日は中に出してもいいわよ……」

正常位の状態で俺にチンポを突きこまれながら、潤んだ瞳で顔をそらし、ポツリと彼女はそう言った

「そろそろ、中に出すよ」

俺は深いピストン運動を続けながら、気持ちよさそうにおまんこでチンポを味わっているマリーに語りかける。彼女の意味を確認するためだ

「あっ♡あっ♡あっ♡あっ♡あっ♡」

すると肯定の意を込めて、マリーのあえぎ声が激しくなる。彼女の両脚が俺の腰をがっしりと囲むようにして絡みつき、俺のチンポをおまんこから離さない。これは彼女の意思表示だ

だいしゆきホールドをしたまま、俺たちの性器はグチュグチュに混ざり合った

きゅううううん♡

早く俺の精液が飲みたいと急かすように、彼女のおまんこがヒクヒクと俺のチンポに吸い付いてくる。俺の言葉を聞き、中出しを期待したマリーの興奮が最高潮に達していた

「マリー！出すぞ！」

ズチュ♡ズチュ♡

ペニスを彼女のおまんこの一番奥深くにまで突きこみ、俺はマリーに最後の通告をする

「……きつてえ♡」

俺の言葉を聞いたマリーが股を強く閉じながら歓喜の表情で両手を広げ、俺の精液を求めてくる。彼女はアルよりも、今、目の前にある、自分が気持ちよくなる出来事を

選んだ

どぶ♡どぶ♡どぶ♡

マリーが俺の精液を求める声を聞きながら、彼女の子宮にたつぷりと射精をしていく彼女の膈内に俺の精液が注がれるたびに、マリーの視界の先が快楽でボーッと白く染まっていくのが分かる。初めておまんこに中出しをされる気持ちよさに息を荒げているマリーの瞳は徐々に、薄く、暗く濁っていった

「アルう。これ、すつごく……気持ちいいよお♡」

うつろな瞳で、マリーがアルに向かって今の気持ちをつぶやいている。しかし、マリーのおまんこに初めて精液を注いだのはアルではなく、俺だった

どぶ♡どぶ♡どぶ♡

さらに俺のペニスから出続ける大量の精液が、マリーのおまんこを満たしていく。マリーの心の器を水で満たしていくように、彼女の子宮が俺の精液で満杯になっていく

体内に注がれたオスの精液に初めて女としての本能を刺激されたマリーが熱い息を吐きながら、心地よさそうに体を震わせている。彼女の全身には今頃、万感とごちゃ混ぜになったおまんこに精液を注がれる快感が、甘い痺れとして駆け回っているのだから

マリーはそのまましばらく虚空を見つめたまま、深く呼吸をし続けていた

精液を出したばかりのチンポをマリーのおまんこに埋め込んだまま、意識が戻った彼女にやさしいキスをする

俺に中出しをされた後のマリーは頬を火照らせ、乙女の顔になっていた。彼女は股を開いた正常位の姿勢のまま、瞳を潤ませ俺を見つめている。俺はそんなマリーを見下ろしながら、今の彼女の気持ちを聞いた

「もう一回するっ？」

「……。」

「……。」

「……。」

「……うん♡」

マリーの心が、快楽に流れていく

「♡っ♡っ♡っ♡っ♡」

その日、俺たちの中出しセックスは朝まで続いた

薬草採集♡

「よし！じゃあ別れて採集をするか！」

俺はマリーとアルと臨時の冒険者パーティーを組み、森へ薬草採集に来ていた。採集がしやすそうな場所を見つけた俺たちは早速、それぞれに分かれて採集をすることにする。

俺は鑑定スキルを使い、ちやつちやと辺りにある役に立ちそうな素材を回収すると、薬草を探しているマリーのもとへ向かう

「あんだ、採集はどうしたのよ？」

「マリー、口でしてよ」

ゴロン

俺は薬草を採集しようとしやがんでいたマリーの目の前に、イチモツを露出した

「ちよつと！あんた！」

いきなりチンポを見せつけてくる俺に対して、付近で採集をしているであろうアルに
ばれないよう小声で、マリーが俺を咎めてくる

「なあ、いいじゃんか」

俺は軽口を叩きながら、マリーの口元にペニスを押し付けた

クン♡クン♡

鼻先に押し付けられた俺のペニスの臭いにアテられたのか、マリーの瞳がとろんと変
化する

「…………この前は雰囲気の流れされちゃっただけなんだから、いい気にならないでよね」

恥ずかしそうに顔を伏せながら唇を尖らせ、マリーが小声でつぶやいた

俺たちはアルに見つからないようにと、近くの茂みに移動することにする。茂みの中に隠れると、マリーは慣れた様子で俺の足元にしゃがみ込みこんだ

スン♡スン♡

右手にチンポを握りながら、マリーが俺にばれないようにこっそりと、ペニスの臭いを嗅いでいる

「あんたのチンポなんか……」

スン♡スン♡

ポと前後に動かしながら、チンポに舌をネロネロと絡めてくる合わせ技付きだ

「ねえユーリ、マリーを見なかった？」

その時、茂みに隠れていやらしいことをしている俺たちに、アルが近づいてくる。どうやらマリーを探しているようだ。茂みに隠れて俺にフェラをしているマリーは、外からは隠れて見えなくなっている

アルの声に驚いて、俺のペニスから口を離そうとするマリーの頭を両手でがっしりと掴み、彼女にフェラを続けてもらう。アルに今の自分の姿を見られたくないマリーは、チンポを咥えながら涙目で俺を見上げていた

「ん〜、見てないよ。どうかしたの？」

俺は足元にいるマリーにチンポをフェラしてもらっていることが彼にバレないよう、アルの相手をする

「マリーにちよつと話したいことがあつてさ。しばらく探しても姿が見えないから、心配になつちやつて」

「アルは心配し過ぎだよ。この辺にはあまりモンスターもないし、何かあつたら俺の探知スキルですぐに分かるからさ。きつとマリーは薬草探しに夢中になつてるだけだよ」

「そうだね。でも、僕はもう少しマリーを探してみるよ。君も彼女を見かけたら教えて」

「うっ……。ああ、了解！」

♡♡♡♡♡

アルと会話をしながら、マリーの口内に精液を注いでいく

アルが遠くまで離れたのを確認してからマリーの様子を伺うと、彼女は顔を真赤にし

て怒っていた。俺を睨んでいる彼女の瞳には涙が溜まっている。しかも彼女の口内には、俺の精液がたつぷりと注ぎ込まれていた

ズゾゾゾゾゾつ♡

マリーは俺が精液を出し切ったことを確認すると、怒りながらも尿道に残っている精液を丁寧^ニに吸い上げ、ゆつくりと口からチンポを離していく

ちゅぽん♡

俺のペニスを咥え終わった彼女は、口の中いっぱいになっている精液をこぼさないようにと口元に右手を添えながら、唇をすぼめている

そのままマリーは口内に溜まったヌルヌルで生温かい液体が飲みやすいようにとモニユモニユと口を動かすと、唾液と混ぜ込んだ後に一気に飲み干した

くくく♡

俺たちの間には、いつもこのようにしてフェエラの後にはマリーに精液を飲んでもらうという暗黙のルールが出来ていた。俺たちがもうすでに、何度もこういった行為を繰り返しているという証でもある。アルに目撃されそうになってもマリーは、健気にこのルールを守ってくれていた

「あんた…アルにバレたらどうするのよ！」

マリーが小声で怒り、詰め寄ってくる。俺に言葉をぶつけてくる彼女の口内からは、いやらしい匂いが漂ってきていた。俺はそんなマリーを軽くあしらいながらも、彼女に次の提案をしていく

「まあまあ、バレなかったからいいじゃない。それより、次は俺がマリーにしてあげる番だね」

「……別に、私はいいわよ」

顔を伏せ、ぶつくさ言っているマリリーを近くの木に寄りかからせる。口では文句を言っているが、抵抗はしない。俺の指示にすんなり従うあたり、彼女は期待をしているようだ

俺はマリリーの足元にしゃがみ込むと、木に寄りかかって立っているマリリーの着ているローブをめくり、スカートの下に履いている下着を脱がす。彼女のパンツは興奮したのか愛液で濡れきっており、とろりとして透明な液体が糸を引いていた

「マリリー、すっごい濡れてるよ」

「っ、言わないでよ……」

恥ずかしそうにつぶやくマリリーを気にすることなく、俺は彼女の履いているスカートの中に顔を突っ込んでいく。彼女のスカートの中は、こもった湿気と熱を持っていた

ちゅう♡ちゅう♡

「……あっ♡」

マリーのおまんこに吸い付くようにしてクンニを開始する。汗をかいていた彼女の性器は、少しだけしよっぱい。レロレロとクリトリスを舐め回し、陰唇を舌でこねていくと、マリーのおまんこが愛液で更にヌルヌルになっていく。俺におまんこを舐められている彼女は、気持ちよさそうに浅い呼吸を繰り返していた

「あ、いたー！おーいー！マリーー！」

マリーを探していたアルが、彼女を見つけて近付いてくる。アルは今、マリーがおまんこを舐められていることなど知らない。茂みに隠れていてうまいこと、俺の姿はアルには見えなくなっていた

「ど、どうしたの？アル？」

マリーが平静を装い、アルに問いかける。俺たちの関係がアルにバレるのが怖いのか、マリーの体が小さく震えている

「あれ？さつきまでここにユーリがいたのに。別の場所に行ったのかな？」

「さあ、あんな奴う、知らないわよ」

ちゅぶ♡ちゅぶ♡

おまんこを俺に舐められながら、マリーが悪態をつく。マリーの股間の割れ目に素早く、俺は舌を前後に滑り込ませていく

「でも、ちょうどいいや。実はマリーと二人つきりで話したいことがあったんだ」

クニ♡クニ♡

「——ッ♡……は、話して、何？」

「うん、実は……」

「——ち、近寄らないで！」

マリーと話をするために近付こうとするアルを、マリーが牽制する

「えっ？マリー、どうしたの？」

「あ、汗をかいちやってえ、恥ずかしいから、今は近づいちゃダメらのお♡」

ちゅぶ♡ちゅぶ♡ちゅぶ♡ちゅぶ♡

俺にクリトリスを吸われながら、マリーが会話を続けていく

「そうなんだ。じゃあここで話すね。単刀直入に言う。マリー君のことが好きだ！」

はむ♡

「……んっ♡……くっ♡」

「それでマリー、僕と付き合ってくれないか？」

ちゅば♡ちゅば♡

「……んんっ♡」

「いつでもいいから、君の返事を聞かせてほしい」

二人の間に甘い空気が流れていく。しかし俺はそんなこと気にすることなく無遠慮にマリーの膣穴に舌をねじ込むと、クチュクチュと膣肉を掻き回していく。アルに告白をされたことが嬉しいのか、俺のクンニが気持ちいいのか、マリーのおまんこからは愛液がドポドポと溢れ出てきていた

アルに返事を伝える直前の緊張のためか、マリーのおまんこがキュンと締まる。それでも俺はマリーの膣肉をこねるのを止めない

「アルう、私も好きだよお♡おっ♡ほっ♡」

「そっか。ありがとう!」

マリーがアルの告白を受け入れている。俺は彼女をお祝いするように、マリーの膣にねじ込んだ舌を上下に激しく動かすと、彼女のおまんこをさらにこねていく。彼女の膣穴からはグツポグツポと卑猥な音が鳴り響いていた

「……っい♡……っく♡……い♡く♡」

「どうしたの? マリー? いくつて何?」

「何れも♡らいのお♡そろそろお♡薬草を♡あつ♡探しにい♡ん♡つ♡イクつて♡おっ♡」
「♡と♡お♡お♡」

「そっか。あ、そういえば今は近づかれたくなかったんだね。じゃあマリー、僕も薬草集

めに行ってくるよ！マリーも頑張ってるね！」

そう言うとアルは、嬉しそうにマリーから離れていく

「うん♡アルう。私もお♡おっ♡ほっ♡ほっ♡イグうううう♡」

ビクン♡ビクン♡ビクン♡

「…………ふううっ♡…………ふううっ♡」

アルの気配が遠くに離れた瞬間に、マリーがイッた。深く呼吸をしながら彼女は両手で俺の頭にしがみつき、内股で体を震わせている

スカートから顔を出し、マリーの様子を確認すると、彼女は真っ赤な顔で俺を睨みつけていた

「あんた！アルにバレちゃったらどうするのよ！」

「まあ、バレなかったんだからいいじゃない。それよりアルに告白されたんだね。おめでとう」

「……うん。」

マリーがしおらしく、乙女の顔で俯いている

「アルと付き合うの？」

「うん。私、アルが好きだから」

「そっか。おめでとう」

「あんた、引き止めないのね。てつきり邪魔をされるのかと思った……」

「俺は束縛は嫌いなんだ。それよりどうする？アルと付き合うなら、もうエッチするの

は止めようか？」

「……………」

その言葉を聞いた彼女は、ものすごく残念そうな顔で俺を見つめていた

彼女のその顔を見た俺は再びズボンを引き下ろすと、勃起したペニスをマリーに見せつけ指を差す

ゴクリ……………♡

いきり立った俺のペニスを見つめたマリーが物欲しそうに唾を飲み込んでいる。おまんこを舐められて、彼女は我慢ができなくなってしまったようだ

「しちやう？」

……………。

……。

……コクリ♡

マリーは俺の言葉に小さくうなずくと、鼻息を荒くしながら近くの木に手をかけ、立ちバツクの姿勢で早くチンポを挿れて欲しいと誘ってくる。俺のチンポを求めてふりふりと揺れている彼女のおまんこは、とろとろのベチヨベチヨだ

くちゅ♡

瞳を暗く濁らせて俺のチンポを待っているマリーのおまんこにペニスの先をあてがうと、彼女の息が熱くなるのが後ろからでも分かった

にゅるん♡

強く腰を突きこむと、入り口から奥までの膣肉を一気に掻き分け、俺のペニスがマ

リーのおまんこにズルリと入り込んでいく。あつという間にペニスの先が彼女の子宮にまで到達すると、俺のチンポに体を満たされたマリーが、気持ちよさそうに深い息を吐き始める

俺のペニスの大きさに慣れ始めたマリーのおまんこにはもう、スムーズに俺のチンポが入るようになっていた

クチュ♡クチュ♡

マリーのおまんこにチンポを出し入れするたびに、いやらしい音が静かな森に響いていく。彼女の体内に埋まっている俺のチンポにヌルヌルとして温かい彼女の膣肉がねっとり絡みついてきて、その感触がたまらなく気持ちいい

「あつ♡あつ♡あつ♡あつ♡あつ♡」

俺にチンポを挿れられているマリーも気持ちよさそうに、我慢できなくなった声を出しながら近くの木にしがみついている。幸いにも、近くにアルはいなかった

「んん……♡くううう……♡」

「どうする？今日は外に出そうか？」

「気持ちよさそうにへこへこと腰を動かしておまんこにチンポを挿れられる感触を楽しんでいるマリーに、俺は最後の確認をする

……。

……。

「……中に出してえ♡」

少しだけ悩んだ後に、マリーは答えを出した。彼女は暗く濁ってしまった瞳で虚空を見つめながら、おまんこに俺の精液を出してもらうのを待っている。彼女の頭の中は再び、目の前の気持ちいいことだけでいっぱいになった

マリリーの答えを受け取った俺は遠慮なく、彼女のおまんこに精液を注いでいく

「マリリー、出すよ」

♡♡♡♡♡

「おほおほおほ♡おっ♡おっ♡おっ♡おっ♡」

おまんこの中に精液を出された彼女は、射精のリズムに合わせるようにして、獣のよ
うな嬌声を上げていく。アルに対する強い背徳感が、彼女の興奮を強めていた

とぽ♡とぽぽぽ♡

マリリーの子宮が精液で一杯になっても俺は出すのを止めない。彼女のおまんこに入
り切らなくなった精液がドロドロになって溢れ出てきても、そのまま射精を続けていく

「しゅいひいひいしゅいのおおお」

マリーが絶頂し、体をビクビクと痙攣させながら、おまんこで俺の精液をゴクゴクと美味しそうに飲み込んでいく。膣穴に入りきれなかった俺の精液が彼女の股間から足元までベツチョリと、白い滝を作っていた

「おっ♡おっ♡おっ♡おっ♡おっ♡おっ♡おっ♡」

子宮に俺の精液を注がれながらマリーが目の前を白く染め、意識をふわふわと飛ばしていく。彼女のおまんこがヒクヒクと動き出し、マリーは今までで一番、深くイツた。

「アルう。ごめんね。ユリーのチンポお……すっごいのお♡」

深い中出しアクメをキメながら、濁った瞳でマリーが小さくつぶやく。彼女のおまんこからはポタポタとだらしなく、俺に出された大量の精液が垂れ落ちていた

マリーと中出しセックスをした後に、アルに俺たちが採集をサボってセックスをして

いたことがバレないように、マリーにいくつかの薬草を渡してその場を後にする

その後、何気ない顔で集合場所に合流した俺たちは、街へと帰っていく

森からの帰り道、アルとマリーが俺に隠れて、手をつないでいるのが分かった

つまみ食い♡

「またね！ユーリ君！」

俺は最近、アンナちゃんの恋愛相談に乗っていた。今日も彼女の話聞き、その後にする。少しずつではあるが段々と、アンナちゃんは俺に心を開いてきていた。彼女は今日も俺にリラックスした笑顔を見せてくれている。さて、そろそろ次の段階に進んでみるか……

マリーとアルが付き合いだしてからは、俺は二人と臨時パーティーを組むのを止め、ソロで気ままな活動をしている。今日も日の高いうちに依頼を終わらせた俺は、夕方になり仕事が終わったアンナちゃんに会いに来たのだ

アンナちゃんと会った帰り道、夕焼けの街中を歩くりンダさんを見かけた。彼女は俺の冒険者登録をしてくれたギルドの受付嬢だ。どうやら仕事の帰り道らしい。彼女は俺

冒険者ギルドの制服を着ていた

寝取りチンポスキルの直感で彼女が今、欲求不満を抱えていることが分かる。せつかくだ。少しつまみ食いをしてしまおう

俺は街中をゆったりと歩くリンダさんに声をかけた

「こんにちは！リンダさん！」

「あら、こんにちはユーリ君」

リンダさんが、年下に対する大人のお姉さんの笑顔で受け答えてくれる。夕日に照らされた彼女のたれ目がとても可愛い。おっとりとした性格の彼女は、愛嬌のある仕草で俺と会話をしてくれた

「今から、俺とお茶しませんか？」

少しだけ弾んだ会話をした後、彼女をお茶に誘ってみる。いわゆるナンパだ

「あら。ユーリ君、お姉さんをナンパしてるのかしら？でも、ごめんね。お姉さんには彼氏がいるから、そういうのは受けられないの……」

眉間にシワを寄せた困った顔で右手を頬に当てながら、リンダさんが俺の提案を断る。でも俺はここからもう少しだけ、彼女を押ししてみる

「そうなんですか。リンダさんが選ぶ彼氏だから、きっといい人なんでしょうね。実はリンダさんが少し寂しそうな顔してたんで声をかけてみたんですけど、幸せそうでしたので」

彼女の心を溶かし、隙を作っていくのだ

「うふふ。ありがとう」

「リンダさんみたいな綺麗なお姉さんと一回、お茶をしてみたかったです、彼氏が

るなら仕方ありません。リンダさんのような心がきれいな人お姉さんは、彼氏を大切にしますもんね」

「うふふ。そう、私は彼氏を大切にしているの。ごめんね」

「それなのに、俺とお話してくれてありがとうございます！最高の思い出になりました」

「あら、そうなの。……うーんやつぱり、ユーリ君と少しだけ、お茶しちやおっかな。ユーリ君はやさしいから、少しだけお姉さんがお礼をしてあげるわ」

少しだけ俺に心を溶かされた彼女は、俺の誘いに付いてくる選択をした。さて、ここからさらに彼女の心を溶かしていくか

「やった！リンダさんとお茶できるなんて、今日は最高の日だ！最近、おしゃれな店を見つけたんで、是非そこに行きましよう！夢が叶ってよかった！」

俺は大きさに喜ぶと、彼女と一緒に居られることが俺の幸せであるとアピールをす

る。こうして、リンダさんの承認欲求を刺激していくのだ

「うふふ。ユーリくんも男の子なのね。でもお茶だけよ。そこから先は、ユーリくんがもつと男らしくなってるからね♡」

俺の言葉に気を良くしたリンダさんが、俺を挑発してくる。彼女の心が俺に親近感を覚えてきていたようだ。さて、もうひと押しだな

「あはは。少しお茶を飲むだけですから。何もありませんよ。リンダさんのことが大切ですから。さあ、こっちです！行きましょう！」

「そう。ユーリ君は紳士なのね」

……

……

……。

パン♡パン♡

「ユーリ君のチンポお、すっごいのお♡」

俺はリンダさんの住んでいる部屋にお邪魔し、彼女とセックスをしていた。何人の冒険者が、彼女のこの姿を夢見ているのだろう

正常位の状態で彼女は俺を見上げながら股を開き、おまんこに出し入れさせる俺のチンポを美味しそうに味わっている。その証拠に、彼女の膣穴からは涎のようにダラダラと、生温かい愛液がこぼれ続けていた

「紳士なユーリくんに、お姉さんがご飯を作ってあげる♡」

ウブな少年のように彼女と喜んでお茶をするだけの俺に、年上であるリンダさんの優越感がくすぐられたのか、彼女はお茶をした後に俺を部屋に招待してくれたのだ。俺は

リンダさんの手作りごはんを頂いた後に、彼女も美味しく頂くことにした

「ユーリ君に食べられちゃった♡」

リンダさんは愛嬌のある大人の笑みで、楽しそうに俺とセックスをしている。彼女の推定Fカップの大きなおっぱいが、俺のピストン運動に合わせてふにゆふにゆと柔らかく揺れていた

「彼氏はいいんですか？」

「いいの♡あいつ、私と付き合いだしてから急に態度が大きくなって、あれこれ命令してくるんだもん♡」

「そうだったんですか。大変でしたね」

リンダさんから彼氏の愚痴を聞きながら彼女のおまんこにチンポをぶち込み、膣肉をグチュグチュにかき回していく。快樂を使っておまんこをトロトロに溶かしていくよ

うに、俺はリンダさんの心を気持ちいい言葉でドロドロに汚していった

ぬぼっ♡ぬぼっ♡ぬぼっ♡

「奥っ♡いいのお♡これえ、好きいいいい♡いっ♡いっ♡いっ♡いっ♡いっ♡」

明日は仕事が休みであることを彼女に聞き出した俺は抽送を強め、リンダさんの視界を真っ白に染めていく

「俺がセックスで、リンダさんの嫌なことなんて忘れさせてあげますよ」

「おっ♡おっ♡おっ♡おっ♡おっ♡おっ♡」

おまんこに俺のチンポを突きこまれるたびに、彼女の心が溶けていく。亀頭で丹念に擦り上げられた彼女の膣壁がうねり、膣穴からはねつとりと白く泡立った本気汁がドロドロになつて溢れ出てくる

ずぶ♡ずぶ♡ずぶ♡ずぶ♡

「ユーリ君のチンポお♡しゅきい♡頭の中、真っ白になる♡」

気が付けば俺たちは正常位のまま、手を恋人繋ぎにしてセックスをしていた。心地よさそうに股を開いたリンダさんが、俺のチンポに夢中になっている

彼女の潤んでいて綺麗だった茶色の瞳はすでに、セックスの快楽で薄暗く濁っていた

とぶ♡とぶ♡とぶ♡

俺はそのままキスをしながら、リンダさんの子宮に精液を注いでいく。おまんこに無許可で出された俺の精液に困惑しながらも、彼女は気持ちよさそうに虚空を見つめていた

「赤ちゃん出来ちゃたら、ユーリ君はパパだよ?」

セックスが終わり、おまんこからチンポを引き抜かれて我に返ったリンダさんが、お姉さんの顔で俺を咎めてくれる。ベッドに座っている彼女の割れ目から垂れた精液が、シートに染みを作っていた

「俺、避妊の魔法が使えるんです」

そう言いながら俺は、彼女に避妊の魔法をかけてあげる。これでリンダさんは今日、絶対に妊娠をしない。俺はそのまま、彼女を快樂へと誘惑していく

「俺とセフレになれば、さつきみたいに気持ちいい思いがいつばい出来ますよ?」

俺の言葉を聞いたリンダさんがゴクリとツバを飲み込む。彼女は、先程おまんこに出された精液の感触を思い出してしまったようだ。俺はリンダさんの綺麗な瞳を見つめながら、静かに彼女の答えを待った

「……うふふ♡みんなには♡内緒にしてね♡」

少しだけ逡巡した後、今まで俺に見せていた大人のお姉さんの顔ではなく性欲に溺れたメスの顔に変わったリンダさんが、愛液と精液でベチヨベチヨになった俺のペニスを舐め啜え、勃たせてくれる。俺のチンポに夢中になった彼女の瞳が、再び濁っていく

ちゅば♡ちゅば♡ちゅば♡

俺のチンポが勃つたのを確認したリンダさんは、再び正常位の体勢に寝転がると鼻息を荒くしながら俺のチンポを誘ってくる。先程のセックスで精液と愛液まみれになつたおまんこを両手で広げて俺のチンポを待っている彼女の瞳が徐々に、いやしく汚れていった

「ちゃんと気持ちよくしてくれなきやイヤよ♡」

「もちろん」

にゅうううん♡

……。

……。

……。

「あっ」

とっふっ♡とっふっ♡とっふっ♡

こうして、俺とリンダさんはセフレになった

この日から、リンダさんの部屋のベッドのシーツには、俺と彼女によって新しい染みが作られていく。その染みは徐々に広がり続け、リンダさんの部屋から過去の思い出を消していった

マリー寝取り♡

「ユーリ君、またね♡」

今日もアンナちゃんの恋愛相談を聞いた俺は家路に着く。最近の俺は早めに家に帰り、生産活動をするのにハマっていた

夜になったあたりで寝取りチンポスキルの直感が働き、今日がチャンスだと教えてくれる。俺はしばらく会うことなく焦らしていた、マリーの元へと向かうことにする

賑わっている一階の酒場を抜け、宿屋の二階にあるマリーの部屋をノックする

「どうしたの？アル？」

部屋の扉をノックした人物をアルだと勘違いしたマリーがドアを開けてくれる。久しぶりに会った彼女の顔は、少し気落ちをしていた

マリーは俺の顔を見ると驚いた後に、ゴクリと唾を飲み込む。そして無言のまま、俺を部屋に招き入れてくれる

じゅるるるるるる♡

ドアを閉めるやいなや、俺はマリーの柔らかくて大きなお尻を鷲掴みにしながら唇を奪う。俺に無理やりキスをされながらマリーは、まるでもつと早くこうされたかっつと言わんばかりに、俺の体を強く抱きしめ返してくる

お互い獣のように体を弄りあった後、ベッドに移動し彼女の服を脱がす。マリーの履いている水色の下着を引き下ろした時、彼女の愛液がトロトロと、今までに見たことがないくらいに糸を引いてしまっていた

「マリー、すっごい濡れてるよっ。」

「……バカ♡」

にゆうううん♡

正常位になって股を開きながら恥ずかしそうに顔をそらしたマリリーにキスをして、ゆつくりと焦らすように、少しずつ彼女のおまんこにペニスを挿れていく。しばらく俺とエッチをしていなかったマリリーのおまんこは、少しキツくなっていた

「……………これえ♡やっぱり、すっごい♡」

少しだけ性経験の増えた彼女が、美味しそうに俺のチンポをおまんこで味わっている。久しぶりにお腹の中をいっぱい満たしてくれる俺のチンポに満足するように、彼女はよだれを垂らして心地よさそうに天井を見上げていた。俺は彼女がずっと触ってほしかった所を、丹念にこねてあげる

セックスをしながらマリリーと話をすると、どうやら彼女はアルと喧嘩をしたようだ。しばらく二人は別々の部屋に泊まっていると言っていた

トン、トン

バツクの体位で後ろからマリーのおまんこを楽しんでいると、深夜に差し掛かった部屋のドアがノックされる。探知スキルにはアルと表示されていた

「マリー、起きているかい？」

「ど、どうしたのお♡」

突然部屋を訪れてきたアルにドギマギしながら、マリーが応答をする。部屋のドアには鍵がかかっているから大丈夫だ。彼女はおまんこに俺のチンポを抜き差しされながら、アルとの会話を続けていく

「この前はごめん」

「う、うん。それでえ♡」

「実は実家から手紙が来てき、母さんが倒れたらしいんだ」

「そ、そうだったのお♡おっ♡おっ♡」

「そのことで悩んでむしゃくしゃしちやつてき。それで僕は、冒険者を辞めて村に帰ろうと思うんだ。それを伝えたくて」

「そんなあ。アルう、離れたくないよお♡んっ♡……っくうう♡」

ぱちゅ♡ぱちゅ♡

「それでさマリー、君がよかつたら僕と一緒に村に帰らないか？結婚をしてほしい」

「ほんとお♡おっ♡おっ♡おっ♡おっ♡……いっく♡」

アルにプロポーズをされたことで、マリーが軽くイッたようだ。結婚の言葉を聞いた瞬間に、彼女のおまんこがきゅん♡と締まった

「でも、マリーには冒険者を続けたいという気持ちもあると思う。もしそうなら、僕は君の気持ちを尊重するよ。明日の朝、僕は馬車でこの街を出るから、もし返事がOKなら君にも来てほしい。馬車乗り場で待ち合わせをしよう」

「うん♡アルう♡イクっ♡イクっ♡イクっ♡」

「君を待っているよ」

そう言うと、アルはそのまま宿を出ていく。そうか、さみしくなるな

ぬぼ♡ぬぼ♡

アルとの会話を終えた後も、俺とマリーはセックスを続けていく。そして一つにつながったまま、俺たちは朝を迎えた

「ユーリイ♡すっごい♡……すっごいのがくるよお♡」

朝日が登る頃、マリーは薄暗い部屋の中でベッドに両手をつきながら尻を上げ、立ちバツクの体勢で俺のペニスをおまんこで味わっている。久しぶりに俺とのセックスを長時間楽しんだ彼女の体は昂りきり、昇り詰めた彼女の体が、最高のオーガズムを迎えようとしていた

「もうすぐ待ち合わせの時間だけどいいの？」

「ユーリとのセックスを終わらせたなら、すぐに行くからあ♡」

立ちバツクでのセックスに夢中になりながら、俺の言葉に彼女が答える。マリーの倫理観は順調に壊れてきていた

「マリー、俺の女になりなよ」

「らめえ♡わらしあ、アルと結婚すりゆのおお♡」

俺のチンポによりがり狂いながら、マリーが抵抗をする

「これからもっと、気持ちいいことが出来るのになく。マリーのおまんこをこうして本気汁でグチャグチャになるまでほじくってあげることも、もう出来なくなるのか」

マリーの大好きな場所をチンポでこねながら、俺は会話を続けていく

「……………んっ♡……………あっ♡」

俺の言葉に、マリーが少し考えるような素振りを見せた

「マリーがイキまくったあのクンニを覚えてる？あれももう、してあげられないね」

「……………っ♡……………くうう♡」

俺にいつもされているクンニの感触を思い出したのか、彼女の膣壁がキュン♡と締まる。それと同時にマリーのおまんこの奥から、愛液がドバツと溢れ出した

「俺とセックスを続けていけばマリーの体が開発されてきて、これからもっともっと、気持ちよくなつていくんだよ？ いいの？」

「……………んっ♡……………あっ♡」

マリーの心は揺れていた。俺はさらに畳み掛けるようにして、彼女に向かって言葉を重ねていく

「そもそもマリーはアルにどれくらいイカせてもらってる？ アルと一緒に村に帰れば幸せなのかもしれないけど、それじゃマリーは、今日みたいに気持ちいいセックスが一生できないよね。それが嫌だったからマリーは今、俺とこうしてセックスをしてるんじゃないの？」

「れもお……………♡」

「俺の女になれば、今からすっごく気持ちよくイカせてあげるからさ。アルなんて、忘れ

「ちやいなよ」

俺はピストン運動を止め、マリーに語りかける

「そもそもアルは君との冒険者生活よりも、母親を取ったんだ。つまり、アルは君より母親を大切にしたこと。だからマリー、君もアルじゃなくて、俺を選んでもいいんだよ?」

「……」

マリーが無言のまま、俯いている

……ちゅぽん

俺はもうすぐイキそうだったマリーのおまんこからチンポを抜き取ると、最後の誘惑をする。俺はベッドの上に仰向けに寝転がり、いきり立ったペニスを彼女に見せつけながら会話を続けていく

「俺と一緒にいれば、マリイはすつごく気持ちいい一生を送ることが出来るんだよ。本当の幸せはどっち？アルのチンポで満足できる？出来てた？」

不完全燃焼のマリイが、物欲しそうな瞳で俺のペニスを見つめていた

「……」

俺たちの間に、しばらく無言の時間が流れていく。俺は最後の選択をマリイに迫った。「このチンポが萎えちゃったら、俺はもうマリイと一生セックスをしない。もし村からまたマリイがこの街に戻ってきてきても絶対にしない。でも、マリイはアルと村に帰るんだから関係ないよね？」

俺の言葉とともに少しずつ、俺のチンポが硬さをなくし、元の形に戻っていく。もうすぐタイムリミットだ

「あ、これでマリーはもう、このチンポで一生、気持ちよくなれないね」

俺は萎えかけた自分のチンポを観察しながら、マリーに最後の挑発をする。そして俺の言葉を聞いたマリーの理性が、ついに飛んだ

堰が切れた様子のマリーは急いでベッドに飛び乗ると、必死な顔で俺のチンポに跨る。すまんなアル。俺の勝ちだ

「責任、……取ってよね！」

マリーが紫色の瞳を暗く濁らせ、鼻の下を伸ばしながら俺に詰め寄ってくる。彼女の鼻息が荒い。マリーは右手で俺のチンポを掴むと自らの手でおまんこの入り口に誘導し、まだ硬い俺のチンポに向かって素早く腰を落とした

にゆるん♡

「おチンポお♡入ってきたあああ♡」

あの生意気だったマリイが、がに股になって俺の上で腰を振り、必死に爆乳をブルンブルンと震わせている。彼女の頭の中からアルへの気持ちは今、消えた

「アルのじゃ、届かないところお、……すつぽい擦ってくるう♡」

とろとろのアへ顔になったマリイが腰を上下に振りながらよだれを垂らし、心地よさそうに天井を見上げている。彼女はやはり、俺のチンポがお気に召したようだ

「いっぱいイカせてあげるからね」

「うん♡気持ちよくしてえ♡」

俺のチンポに跨って、ト口顔になった頬を真赤に火照らせている彼女を押し倒すと、俺は正常位の状態で、彼女のおまんこにとどめを刺していく

「ごめんねアルう。ユーリのチンポに……負けちゃったあ♡」

俺にしか見せられない情けない顔で、マリーが完堕ち宣言をしている。俺はチンポのことしか考えていない彼女にこれからたつぷりと、気持ちいい中出しをしてあげることにした

とぶ♡とぶ♡とぶ♡

「お、っ♡お、っ♡お、っ♡お、っ♡お、っ♡お、っ♡」

ずっと求めていた俺の精液を飲み込んだ彼女のおまんこが強く収縮すると、マリーは体内で何かが爆発してしまったかのような激しいオーガズムを迎えていく。とてつもない深イキをした彼女は俺たちががしてきた今までのセックスの中で一番長い時間、体をガクガクと痙攣させ続けていた

きゆううううううん♡

天井を見上げながら腰をへこへこと動かしイキ続けているマリーのおへその下に、黒

い淫紋が浮かんでいく。セックスをした女性の数が増えたことで新しく増えた寝取りチンポスキルの効果だ。俺が墮としたいと思う女に、俺は淫紋を刻むことが出来るようになった。これで彼女はもう、俺のチンポなしでは生きられない

「何、これえ♡しゅっごひ……気持ちいいよおおお♡」

淫紋の効果で感度が上がったマリーが、歡喜に体を震わせている。彼女の頭の中では大量の脳内麻薬が分泌され、強烈な多幸福感が彼女の全身を支配していく。そしてこれから俺のチンポがさらに、マリーを天国へと導いていくのだ

「俺の女になってよかったろ？」

「うん♡ユーリい♡これ、しゅきいいい♡しゅきいいい♡」

呂律の回らなくなった彼女が必死に力強く、俺の体にしがみついてくる。だいしゅきホールドでがっしりと俺を掴んで離さない彼女のおまんこに、俺はそのまま二発目の精液を注いでいく

俺の精液を注がれるたびに、彼女に浮かんだ黒い淫紋が少しずつピンク色に染まっていくな。俺の精液を注がれるたびに、彼女に浮かんだ黒い淫紋が少しずつピンク色に染まっていくな。俺の精液を注がれるたびに、彼女に浮かんだ黒い淫紋が少しずつピンク色に染まっていくな。

「何これええ♡何これええええええええ♡気持いいいいいいいい♡」

淫紋を刻まれたマリーの体は俺の体液に反応し、大量に脳内麻薬を分泌する体質に変わっている。これも淫紋の効果だ。もう彼女は、俺のチンポに勝てない

とぶ♡とぶ♡とぶ♡

マリーの体に刻まれた黒い淫紋は俺の精液を体内に吸収するたびに徐々にピンク色に変わっていく、淫紋が完全にピンク色に染まると絶対に消えなくなる。それがスキルの使い方だった

「おっ♡ほおおおおおおおおおおお♡♡♡♡♡」

さらに俺の精液を彼女のおまんこに注いでいくと、淫紋が浮かぶ前とは比べ物にならない快感が、マリーの体を駆け巡っていく。今までのマリーはもういない。これからは俺の精液が、彼女の心をドロドロに壊していく

「ユーリい♡もつとおおお♡もつとちようらあああ♡」

あまりの気持ちよさに舌がはみ出てしまった口で、マリーがおねだりをしてくる。彼女の要求に応えるように、俺はさらにマリーのおまんこに大量の精液を注いでいった

「なんでこんなに気持ちいいのおおお♡ユーリのチンポでえ♡あたまバカになりゆうううう♡おまんこおお——ツ気っ持ちひいいいいいいいい♡」

彼女に刻まれた淫紋が、さらに強いピンク色に染まっていく。どうやらマリーが、俺が異世界に来てから墮とす女の第一号になるようだ

「何これええええ♡ユーリい、わらひのおまんこが……すっごい♡しあわせになってりゆうううう♡」

マリーの淫紋が、完全なピンク色に染まった。これで彼女は一生、俺のおちんぼケースだ

「おほおほおほおほ♡おほっ♡おっほおほおほおほ♡」

おまんこの奥にまでたつぷりと俺の精液を出されながらアクメ顔で体を弓なりに反らし、がに股になったマリーが腰をへこへこと動かしながら脳イキをキメていく。そしてそのまま、彼女は意識を失った

この瞬間から、アルと両思いだった純朴で生意気な田舎娘のマリーが消える。俺に淫紋を刻まれたマリーは、メスのフェロモンを周りにダダ漏れさせる性に溺れた女に変わった

アル。彼女とケンカをしてくれてありがとう。マリーは俺の女になったよ

アンナの日記♡

アンナ視点

……。

……。

……。

○○日

今日はトム君と初めてデートをした。トム君はやさしくて、一緒にいるとドキドキして幸せだなあ

……。

……。

……。

〇〇日

トム君とのデートの帰り道、ユーリくんに話しかけられる。どうやら気落ちしている私を心配してくれたようだ。トム君とデートをするようになったけど、そこから先の関係に進めなくて悩んでいたんだ

同い年のユーリ君が今度、悩み相談に乗ってくれろという約束をしてくれる。これで男の子の気持ちを理解して、トム君ともっと仲良くなれたらいいなあ

……。

…。

…。

〇〇日

ユーリ君のアドバイスのおかげで勇気を出したら、
トム君と手をつなぐことができ
た。やった！

…。

…。

…。

〇〇日

ユーリ君の提案で、ハグの練習をすることにした。デートの時にもしトム君にハグされた時に、怖くなって突き飛ばしてしまったら、シヨックを受けたトム君との関係が終わってしまうかもしれないって

ハグくらいならいいかなあ。トム君にもハグをしてもらいたいなあ

……。

……。

……。

○○日

ユーリ君とハグの練習を続けている。男の人に体をぎゅってされるとドキドキしちゃって恥ずかしい。トム君はいつ、私を抱きしめてくれるんだろう？不安だなあ

……。

……。

……。

○○日

ユーリ君とハグの練習をしていた時に、男の人のアレが太ももに当たってびっくりしちゃった。もしユーリ君とハグの練習をしていなかったら、トム君にハグしてもらった時に同じことがあった時、驚いて突き飛ばしてしまっていたかもしれない。そしたらトム君に嫌われちゃうところだった……

こういうアクシデントもあるから、ハグの練習しておいてよかったねって、ユーリ君は言ってた。私もそう思う

……。

……。

……。

〇〇日

今日もユーリ君とハグの練習をしていると、ユーリ君のアレがすごく硬くなって、それが太ももに当たってとつても恥ずかしくなっちゃった……

男の子は女の子とハグをしていると、どうしてもこうなっちゃうんだってユーリ君が教えてくれる。女の子はこういうのにも慣れていたほうがいいって

トム君といつかそういう関係になるわけだし、少し頑張ってみようと思う

……。

……。

……。

○○日

男の人の硬くなったアレがどうやって元に戻るのか、ユーリ君に教えてもらった。トム君のために少しこういうことも勉強した方がいいって

ユーリ君が手でしてる所を見せてもらった。ユーリ君が手で自分のアレを触っているのを見ていた時は、すつごく恥ずかしくて、ドキドキしちゃって、初めての感覚だった

しばらくドキドキしながら見ていると、ユーリ君のアレの先から白いのが出てきてすつごくびつくりした。初めて精液を見ちゃった。今日、少しだけ大人になったと思う

……。

……。

……。

〇〇日

ユーリ君のアレを、自分の手で触らせてもらった。すっごく固くて、熱くて、触つてるとドキドキしちゃって、女の子は男の子でそういう風に興奮するものなんだって、ユーリ君が教えてくれた

ユーリ君が、トム君のためにアンナちゃんも練習したほうがいいよって言うてくれる。ユーリ君に教えてもらいながら彼のアソコを手でシコシコしていると、突然、ユーリ君のアソコの先から精液がびゅびゅと出てきた。それを見て、自分の手が出てあげたんだなあって思うと、少し楽しかった

……。

……。

……。

〇〇日

最近はよく、ユーリ君のアソコを手でしてあげている。トム君とそういう関係になった時、トム君を喜ばしてあげるための特訓だってユーリ君がやさしく言ってくれる

本当はダメなんだけど、みんなに内緒で男の人とエッチなことをしているのは、すごく楽しかった

初めてでうまくいかないよりも、今のうちに練習しておいて、いつかトム君を喜ばせてあげられたほうがいいもんね

……。

……。

……。

○○日

今日は、いつも自分が触らせる立場ばかりでずるいとユーリ君が言い出し、お返しに、ユーリ君に私のアソコを触らせてあげることになった

初めて男の人に自分のアソコを触らせてしまった……

でも、ユーリ君にアソコをクニクニつて触られるのはすごく気持ちよくて、私の体ってこんなに気持ちよくなれるんだって初めて知った

どうやって我慢しても、勝手にエッチな声が出てきちゃって恥ずかしかったなあ

ユーリ君にしばらくアソコを触られていると、お股がキユンってした後には体がビクンってなって、すごかった。これがイクって言うんだって。ユーリ君が教えてくれた

イクのはすつごく気持ちよくて、頭がぼーっと真っ白になっちゃって、こんな経験があるんだって初めて知った。こういう遊びをするのが大人だって、ユーリ君が私にやさしく教えてくれる

アソコを触られて気持ちよくイカされた後に、ユーリ君に体をぎゅって抱きしめられたのはとても心地がよかった

その時のドキドキが忘れられなくて、家に帰ってから自分の指でもしちやっただ♡

……。

……。

……。

〇〇日

最近はユーリ君と会うたびに、お互いのアソコを手で触り合っている。だって気持ちいいんだもん

一応、頭では悪いことだと分かってはいるんだけど、つい体が流されてしまう

男の人とアソコを触り合うことに罪悪感を持っている私を見てユーリ君は、まだアンナちゃんとはトム君と付き合っているわけじゃないんだから別に悪いことじゃないって言いながら、やさしく頭をなでてくれた

たしかにそうかもしれないなあ

最近は家に一人にいるときも、早くユーリ君に会ってアソコを触ってもらいたいなあと思うようになった

……。

……。

……。

〇〇日

今日は初めて、アソコの穴の中にユーリ君の指を入れてもらった。今まで怖くて断っていたけど勇気を出して指を入れてもらったなら、すっごく気持ちよくて、もっと早くしてもらっていればよかったと思う

指でアソコの中を触られてイクのは、クリトリスでイク時とは違って、お腹の中がグワングワンって揺れてすごかった

ユーリ君は今日、それをいっぱいしてくれました。今のうちにイキ癖をつけると、いっぱ

いイケるようになるんだって

これはダメなことって頭では分かっているんだけど、やっぱりもつと気持ちよくなりたくて、ユーリ君に誘われるとどうしても断れなくて、体を触らせてしまう。ユーリ君とのこの関係から、抜け出せなくなってしまいかもしれないのが、ちよつと怖い

……。

……。

……。

○○日

ユーリ君とお互いの体を触り合うのが楽しくて、最近はずトム君とのデートは断つて。だってデートの時に、私がトム君の体を触ろうとしても、彼は逃げちゃうんだもん。私、彼に嫌われてるのかなあ？

……。

……。

……。

〇〇日

今日、ユーリ君のアソコを口で舐めてあげた。どうやって男の人をイカせてあげればいいのか、ユーリ君がやさしく教えてくれる。ユーリ君のアソコはおつきくて、啜えるために大口を開けなくちゃいけないのが恥ずかしかった

男の人のアソコを口に啜えていると、自分がすごくエッチなことをしているんだってことを実感して、とても興奮してきちやう

初めて精液を口に出されたけど、苦くて、少ししょっぱくて、でも頭がポーツとする

味でドキドキしてしまった

……。

……。

……。

○○日

今日はアンナちゃんがいつも口でしてくれるお礼だつて言つて、ユーリ君が私のアソコを舐めてくれた

すごかった♡

ユーリ君の生温かい舌が、私のアソコをグネグネと動く感触がすごく気持ちよくて、指でされるのよりも、もつとアソコが敏感にヌメヌメと刺激されて、体がふにやふ

にやになって力が入らなくなるまで、いっぱいイカされちゃった♡

……。

……。

……。

○○日

最近は、毎日のようにユーリ君にアソコを舐めてもらうことが日課になってる。この前は人通りの多い路地から少し離れた場所でこっそりと、隠れた場所でクンニをしてもらった

それがすごく興奮しちゃって、いつもよりアソコがトロトロになってるってユーリ君にも言われちゃった

ユーリ君にアソコを気持ちよくしてもらえない日は寂しくて、一人で自分を慰めるようにもなった。こんなに気持ちいいことを知らないで今まで生きてきたのが、損だったなあって思う

今日はトム君とデートをしたけど、早くトム君とのデートを終わらせて、ユーリ君にアソコを気持ちよくしてもらいに行きたいという気持ちがずっと、頭から離れなかった
トム君は奥手で、ユーリ君みたいに私を気持ちよくしてくれない。私って、トム君のことが本当に好きなのかな？

……。

……。

……。

○○日

「俺の女にならない？」

今日、ユーリ君にそう言われた。彼の言葉を聞いた瞬間にすっごく体が興奮して、今すぐ私の体をメチャクチャに気持ちよくしてもらいたいって気持ちになった

私が彼にトム君のことはどうしようって相談したら、俺が忘れさせてあげるよって言うって、ユーリ君がやさしくキスをしてくれる。私のファーストキスだ

そのままユーリ君と頭がトロトロになるまでキスをしながら舌を絡めていたら、自分でも分かるくらいに下着がベチョベチョに濡れてしまって、私はユーリ君が好きなんだって分かった

でも今日は、ユーリ君は私のアソコを触ってくれなかった。私に彼のアソコを触らせてもくれない。明日のデートまで取っておくんだって

家に帰ってから自分でしちゃいたくなかったけど、明日のデートのためにずっと我慢し

てる。もうアソコがずっとウズウズし続けていて、興奮して眠れない

最近一人暮らしを始めたばかりの部屋に、初めて男の人を招待する。明日の私、どうなっちゃうんだろう♡

アンナちゃん……♡

「本当に俺が初めてでいいの？」

「ユーリくんがいいのお♡」

今、俺とアンナちゃんは、アンナちゃんの家のベッドの上に座り抱き合いながらキスをしている。アンナちゃんは頭をトロトロにして、早く俺のチンポをおまんこに挿れてほしいとおねだりをしていた

火照った彼女の頬に浮かぶそばかすが可愛い。汗をかいたアンナちゃんは肩まで伸びた茶色の髪を乱しながら、魅力的な青色の瞳をキラキラと輝かせている。まだ性に疎く未開発だった彼女の体は、早くセックスを経験したくて仕方ないようだ

「自分で挿れてごらん」

「うん♡」

俺の言葉を聞いたアンナちゃんは少しだけ腰を浮かすと慣れない様子で、自分のおまんこの穴にチンポを挿れようと試行錯誤をしていく

ポタっ♡ポタっ♡

早く俺のチンポを味わってみたいアンナちゃんのおまんこから、生温かくてヌメった愛液がダラダラと涎みたいに垂れ落ちてくる。彼女のおまんこはこれから自分が体験する気持ちいいことへの期待と興奮で、ベチヨベチヨに濡れきっていた

くにゅ♡

「……んっ♡」

ついにその時が来た。柔らかい肉のリングになったアンナちゃんの膣口をクニユリと開き、俺のペニスの先っぽが彼女のおまんこにピッタリと嵌まる。アンナちゃんのお

まんこにほんの少しだけ入った亀頭の先つちよの感触が、ヌルヌルと生温かくて気持ちがいい

俺は中腰になっているアンナちゃんの腰を掴むと両腕で体を支えて、彼女の初体験をサポートしていく

くにゆうう♡

少しだけアンナちゃんが腰を落とす。すると、俺のチンポが彼女のおまんこに少しだけ埋まり、温かくて気持ちがいい肉の感触に包まれた

「くううう……。ユーリ君のお、……。おっきい♡」

アンナちゃんのおまんこに入った俺のペニスの先が彼女の処女膜に到達したあたりで、アンナちゃんの動きが止まる。処女膜を破る痛みを予想した彼女は、少し動きを躊躇ったようだ。彼女は俺の両肩に両手をのせながら、初めての苦しみに耐えている

「手伝ってあげるね」

アンナちゃんにその声をかけながら、俺は彼女の体を支えるために両腕で掴んでいた。アンナちゃん腰を下向きに引つ張りながら、俺の腰の上に突きあげる。その瞬間、アンナちゃんの処女膜が簡単に破れた。

「いただきます♡」

——ツブチ

にゅううううん♡

無事、アンナちゃんのおまんこに俺のチンポがすべて埋まる。

まだ俺のペニスしか味わったことのないアンナちゃんのおまんこは未開発ゆえにキツく、俺のチンポをきゆうきゆうと締め付けてくる。

「入ったあ♡……ユーリ君のチンポお、全部入っちゃた♡」

「どんな感じ？」

「ユーリ君なので、お腹の中、いっぱいになってる♡」

初めて男のペニスを体内に受け入れたアンナちゃんは、瞳を潤ませて満足そうにうっとりとしていた。彼女のメスとしての本能が、俺とのセックスを通して初めて満たされた瞬間である。彼女は座位の状態で俺の肩に両腕を回し、楽しそうに自分のおまんこに男のチンポが入っている光景を見下ろしている

「——ッ痛い」

しかし処女膜が破れたばかりのアンナちゃんはおまんこが痛くて、俺が腰を動かすのに耐えられないようだった。俺が少し動こうとしただけで、彼女は痛がりだしてしまう

「ちよっと待ってね」

俺は処女膜が破れて傷ついたアンナちゃんのおまんこに回復魔法をかけ、彼女の膣壁にできた傷を癒やしてあげる。これなら大丈夫だ。俺はそのまま腰を前後に動かすと、今日、初めてセックスをするアンナちゃんのおまんこに、ゆつくりとペニスを出し入れしていく

「……あ、これえ♡気持ちいい♡」

無事、アンナちゃんも気持ちよくなれたようだ。俺は安心して彼女とのセックスを続けていく

ぬぼ♡ぬぼ♡

俺がチンポを出し入れするたびに、アンナちゃんのおまんこは少しずつ俺のチンポに馴染んでいった

「俺とセックスしてよかった？」

「うん♡セックスって……すつこい、気持ちいい♡」

ぬふ♡ぬふ♡

アンナちゃんのおまんこが少しずつ、俺のチンポの形に変わっていく

「あんっ♡あんっ♡そこ……好きいい♡」

座位で向かい合う俺にギュツと抱きつきながら、アンナちゃんが夢中で腰を振っている。彼女は初めてのセックスが楽しくて仕方がないようだ

「アンナちゃん、中に出すよ」

「うん♡いいよお♡」

事前にアンナちゃんには避妊の魔法をかけてある。彼女が安心して俺とのセックス

に臨めるようにだ

とぷ♡とぷ♡

アンナちゃんの体をギュツと抱きしめながら、彼女のおまんこに俺の精液をたっぷりと注いでいく。これでアンナちゃんは今日、初体験に加え、初中出しも俺で味わったことになる

「ユーリ君。これえ、……すっごく、気持ちいい♡」

俺に中出しをされているアンナちゃんは俺の体にピッタリと両腕で抱きつきながら、気持ちよさそうに体を震わせていた

「お腹の中あ、熱くなってる♡」

初めて精液をおまんこで味わったアンナちゃんは、気持ちよさそうに瞳をとろんと湿らせている。これで彼女は性を知らない純朴な少女から、大人の女性になった

俺の精液を体内に受け入れたアンナちゃんの下に、黒い淫紋が浮かんでいく。俺は今日、このまま彼女を墮とすつもりだ

「おーい！アンナちゃんー！」

アンナちゃんが俺に中出しをされていると、窓の外からトム君の声がした。どうやらトム君が、休日のアンナちゃんに会いに来たようだ

「会ってあげたら？」

「でも……」

「大丈夫、こうしてればバレないよ」

俺はベッドに寝転がり騎乗位の状態でペニスをアンナちゃんのおまんこに抜き挿ししながら、彼女に指示を出す。ベッドが窓際にあるアンナちゃんの部屋からは、セック

スをしながら外を覗けるのだ

アンナちゃんは恐る恐る俺とセックスをするために閉じていた窓を開けると、顔だけ外に出す。アンナちゃんが借りているアパートの二階の部屋の窓から、トム君を見下ろすような形だ。そしてアンナちゃんはおまんこに俺のチンポを啜えたまま、道端にいるトム君と話し始めた

「と、トム君。ど、どうしたのお？おっ♡ほっ♡」

ぬぼ♡ぬぼ♡

おまんこに俺のチンポを突き刺されながら、アンナちゃんがトム君と会話をする

「ちよつと近くを通ったからさ。アンナちゃん、今日は仕事が休みだったよね。よかつたら、今からデートに行かない？」

アンナちゃんをデートの誘いに来たトム君は、彼女が先程、俺によって処女を奪われ、

今もその初セックスの最中であること気付かないまま、楽しそうにアンナちゃんと会話をしている

「ごめんねえ♡おっ♡トム君。今日は、あっ♡体調があ♡あっ♡悪くつてえ♡おっ♡ほおお♡デートにはああ♡あんっ♡イケないのお♡……んっ♡……くっ♡」

俺が下側からアンナちゃんのおまんこにペニスをヌチュヌチュと挿し込んでいると、彼女のおまんこの奥から、大量の愛液がドバツと溢れ出てきた。そしてあっという間に、彼女の膣内がグチュグチュに潤ってしまふ。どうやらアンナちゃんには、露出の才能があるようだ

俺がそんな事を考えていると、アンナちゃんは必死によりがり声を我慢しながら、トム君とのデートを何とか断っていた

「そういえばアンナちゃん、何だか顔が赤いね？大丈夫？今から部屋に行こうか？」

「ら、らめええ♡あっ♡風邪を移すとお♡おっ♡ほっ♡悪いからあ♡」

とっふ♡とっふ♡

トム君と会話をしているアンナちゃんのおまんこに、俺は容赦なく中出しをしている。俺の体液を体の中に注がれた彼女の淫紋が、少しだけピンク色に染まった

「おっほおおおおおおお♡……トム君、あつ、ありがとうね♡」

「そっか。でも頼りたくなったらいつでも僕を頼ってね。それじゃまたね！お大事に！」

会話を終えたトム君が去っていくと、窓を締めたアンナちゃんを俺はベッドに押し倒し、正常位の体位に移りながら彼女に感想を聞く

「どうだった？」

「すっごく興奮したあ♡」

俺と興奮しながら楽しそうに話すアンナちゃんの花の輝いていた青色の瞳が、今は暗く濁っていた。彼女の心が少しずつ、俺に染まっていく。イケない遊びを覚えてしまったアンナちゃんとセックスを続けながら、俺は発達途中の彼女のCカップ程のおっぱいを、無遠慮に揉みしだく

「乳首い、気持ちいいよお♡」

アンナちゃんのおっぱいを両手で鷲掴みにしながら、俺は三発目の中出しをした

「お腹の中あ、あつたかくて♡気持ちいい……♡」

アンナちゃんのお腹に刻まれた淫紋が、さらにピンク色に染まっていく。おまんこに精液を注ぎ込まれながら心地よさそうにしているアンナちゃんの顔を見た俺は、俺のチンポでどっぷりと、彼女を快楽の世界に墮としていくことにした

「すっぴい♡これえ……すっぴいよおおお♡」

中出しをしながらピストン運動を止めずに、俺はズポズポとアンナちゃんのおまんこにチンポを出し入れする。彼女の愛液と俺の精液が混ざりあつてグチャグチャになつてしまったアンナちゃんのおまんこが、さらにヌルヌルになつて俺のペニスを受け入れていた

今日まで処女だつたアンナちゃんのおまんこが、俺のチンポで淫乱に開発をされていく。まったくのゼロだつたアンナちゃんの性経験が、俺とのセックスによつて今、急速に増えていた

「イクううううう♡イクっ♡イクっ♡イクっ♡イクっ♡……っ♡……っ♡」

俺のチンポで、アンナちゃんが初めての中イキを経験する。俺は彼女のその思い出を最高のものにするべく、アンナちゃんがイクと同時に、大量の精液を彼女のおまんこに注いでいくことにする

「——ッしゅっごひいい♡頭の中、シユワシユワしてりゅううううううう♡」

イキながら子宮に精液を注ぎ込まれる快楽に、アンナちゃんがトロロンとして暗くなつた瞳をさらに濁して絶叫をした。気持ちよさそうに体を痙攣させているアンナちゃんの淫紋が、さらにピンク色に変わっていく

「まだまだ終わらないよ」

「らめえええ♡もう、アンナがあああ♡アンナが壊れちゃうからああああ♡もう、おまんこらめえええええええ♡」

懇願してももう遅い。俺はこれからアンナちゃんの心を壊すのだ

「お♡お♡お♡お♡お♡お♡お♡お♡お♡お♡お♡お♡お♡」

愛嬌があつて恥ずかしがり屋のアンナちゃんが、獣のような声を上げていった。腰のけぞらせながらピクンピクンと大きく痙攣している彼女のおまんこに、俺はさらたつぷりと精液を注いでいく

「お、まんこお♡お、っ♡お、まんこ、壊れりゆううううう♡」

まだまだ俺はピストン運動を止めない。俺のチンポでグチャグチャになったアンナちゃんのおまんこを、これからもつとこねくり回していくのだ

「——ッあ、あ、っ♡」

俺にさらに精液を中出しされた瞬間に、ベッドの上で腰をのけ反らせながら痙攣をしていたアンナちゃんが意識を失う。それでも俺は、ピストン運動を止めない

俺たちがセックスをしているアンナちゃんのベッドのシーツには、彼女のおまんこから掻き出された愛液と俺の精液が大量にこぼれ落ち、おもらしをしたかのような大きな水たまりができていた

「——っ、あっ♡あっ♡あっ♡あっ♡あっ♡あっ♡」

おおおおおおおおお♡おっ♡おっ♡おっ♡おっ♡おっ♡おっ♡おっ♡おっ♡おっ♡おっ♡

快楽によつて瞳から溢れ出てきた涙と鼻水で顔中をグチュグチュに濡らしながら、アンナちゃんがよがり狂っている。俺はアンナちゃんに最後のトドメを刺すべく、彼女のおまんこの一番奥深くにまでチンポを強く挿し込むと、種付けピストンプレスをしながら、噴水のような大量の精液をアンナちゃんの子宮の中にどつぷりと注いだ

♡ぶっ♡ぶっ♡ぶっ♡ぶっ♡

「んっ♡ほおおおおおおお♡おっ♡おっ♡おっ♡おっ♡」

精液に濡れながらトコ顔で本気イキをしているアンナちゃんの淫紋が、完全なるピンク色に染まる。淫紋の完成だ。これで今日から彼女は、俺専用のおちんぼケースになった

とぼ♡とぼ♡とぼ♡

「おっ、♡おっ、♡おっ、♡おっ、♡おっ、♡おっ、♡おっ、♡おっ、♡」

さらに大量の精液を彼女のおまんこに注いでいると、アンナちゃんがまた気を失う。今日初めてセックスをした彼女には、負担が大きかったようだ

さて、これからどういう風にアンナちゃんの体を開発していこうか。俺はそんなことを妄想しながら、精液と愛液まみれになってしまったベッドの上で、スースーと安らかに寝息を立てているアンナちゃんの髪をやさしく撫でた

雑用を済ませよう

今日の俺は、色々な雑用を済ませようと思う。まずは買い物だ

今使っている初心者用の剣をもう少し良いものに買い換えることにしたのだ。俺はミューさんの工房へと武器を買いに向かう

俺の来店に快く対応してくれた巨乳でタンクトップ姿のミューさんの胸元には、今日も元気なポツチが二つある

ミューさんの二つのポツチをガン見しながら、金貨十枚で鋼の剣を買った。しかし、俺と会話をしているミューさんの表情が心なしか暗い

俺の寝取りチンポスキルにより、ミューさんに聞かずに近いうちにチャンスが来るといふ直感が浮かぶ。しかし今は、まだ時期ではないようだ

俺はスキルの直感に従い彼女の変化に気づかないふりをしながら工房を後にする。そしてそのまま工業地区を回り、今度は生産をするための材料を買い物した

材料を買い込むと街の外に出て開いた場所で錬金術スキルを使い、買い込んだ材料のうちの一つである砂に、魔術的加工を施していく。それによりとある素材ができた

俺が作ったのは馬車を作るための材料だ。ファーストの街にいつまでも滞在し続ける訳には行かない。ある程度地力をつけたら旅に出て、俺はダンジョンを作るための場所を探しに行くのだ

その旅を快適に過ごすために、俺は理想の馬車を自分で作ることにした。幸いにも俺はチートにより生産スキルを揃えて持っているため、馬のいらぬゴーレム馬車を自力で作ることが出来る。燃料は俺の魔力だ

一日をかけて、馬車の本体と馬車を引くための馬ゴーレムを作ることが出来た。内装は後にしよう

俺は完成した馬車の性能を確認することにする。……よし！上手くいった！

今回馬車を作るための素材として制作したのが、魔術的な加工をした特殊な魔法ガラスである。この魔法ガラスは、見た目はただの黒色をした薄い板のようだが、強度は金属以上というすぐれものだ。つまり見た目で言えば俺が作った馬車は、ちよつとした金持ちが乗るような黒くて四角い形をした普通の馬車に見える

そして俺が作った魔法ガラスの性質だが、俺の魔力を通すと内側からは外が透けて見えるようになり、しかも外側からは中を見ることが出来ない。つまり魔法ガラスは、黒色であるがマジックミラーのような性質を持ったガラスなのである

俺はその魔法ガラスで馬車を作った。つまり、俺の馬車は外側から見たらただの黒い馬車だが、内側からは、俺の魔力を通すことで外が丸見えのマジックミラー馬車になる。俺はこのマジックミラー号でいつか旅に出るのだ

俺は自分が作ったマジックミラー馬車の出来栄えに満足すると、日が暮れる前に街に戻ることにする

さて、明日はジャンヌでも誘って、馬車の試運転へと行きますか！

マジミラ馬車でジャンヌと♡

はむ♡くちゅ♡くちゅ♡

ガランとして何も無い馬車の中で、俺とジャンヌは抱き合いキスをしていた。マジミラ馬車の試運転の途中、人通りの多い広い道の脇に馬車を止めた俺はジャンヌを誘い、そのままエッチに突入した

「まったく、ユーリは変態だな……」

まさか馬車の中でエッチをするとは思っていなかったジャンヌが、悪態をつきながら服を脱いでいる。ちなみにマジミラ馬車にはまだ魔力を通しておらずに、中はマジックミラーになっていない

「そんなこと言って、ジャンヌもすっごく濡れてるけど」

服を脱ぎ終わったジャンヌに後ろから抱きつき右手でおまんこを弄ると、彼女のふにゆりとした割れ目には、すでに水たまりのようなヌルヌルが出来上がっていた。俺はそのヌルヌルを彼女の割れ目全体に塗り拡げるようにして、ジャンヌの発情したおまんこをこねていく

クチユ♡クチユ♡クチユ♡

「そ、それはだなあ♡」

おまんこの穴を二本の指でホジホジとされながら、ジャンヌが取り繕っている。人差し指と中指を使ってジャンヌの膣壁をグニユグニユと変形させていると、次第に中身がとろとろになってきて、膣肉が柔らかくほぐれていく

「さて、そろそろ挿れちゃおっか?」

おまんこの中をグチユグチユにされて少しへトつとしているジャンヌに声をかけると、ジャンヌは壁に手をかけ、立ちバックの体勢で小さなお尻をふりふりとしながら、俺

のチンポを誘ってくる。鍛え上げられ引き締まったジャンヌのお尻がぷりんとしてエロい

くにゆうううん♡

ジャンヌの膣口にペニスをあてがった俺は、腰に体重をかけるようにして前に突き出し、彼女のおまんこの中にチンポを挿入する。鍛え上げられたジャンヌのおまんこが、きゆう♡きゆう♡と俺のチンポに力強く吸い付いてきた

ぬぼ♡ぬぼ♡

「あっ♡あっ♡あっ♡あっ♡」

ジャンヌが気持ちよさそうにあえぎ声を出し始める。彼女はセックスに没頭をし始めたようだ。頃合いを見計らった俺は魔力を通し、馬車内の壁をマジックミラーにしてしまう

「ひゃあああああああ!!!」

馬車内の壁が透明になり、中から辺り一面が丸見えになった。馬車がガラス張りになってしまったと勘違いをしたジャンヌが、大通りを歩く沢山の人々を見て驚いた声を上げる。彼女のおまんこが緊張でギョツと引き締まった

「ユ、ユーリい♡や、やめろおおおおおお♡」

しかし俺は気にすることなく、ジャンヌのおまんこにチンポをぬぼぬぼと抜き差しし続けていく。自分たちがセックスをしている姿を街中に大公開してしまっていると勘違いをしているジャンヌが、俺を止めようと懇願するが、マジックミラーであることを知っている俺はピストン運動をやめない

「おっ♡おほっ♡おほおおおおお♡」

ジャンヌの気持ちいい場所をグニヤグニヤと歪ませていると、彼女が嬌声を上げた。立ちバックで俺とセックスをしながら恥ずかしそうにもじもじとしているジャンヌは

まだ、街を歩く人々が俺たちに視線など送っていないことに気付かない

「ユ、ユーリい♡お、おまえええええええ♡」

「ジャンヌがイッてる所、みんなに見てもらいなよ」

そう彼女に声をかけると俺はジャンヌの腰を両腕で持ち上げ、駅弁立ちバックの体位で彼女の股をおつぴろげにしながら、太いチンポをズポズポといやらしくメス穴に入れられているジャンヌの姿を外の人々に見せつけるようにして、ピストン運動を続けていく。異世界に来てからステータスが上がった俺は、こういった行為もらくらく出来るようになっていた

「ユーリ!!!らめっ♡らめええええええ♡」

珍しく、ジャンヌが羞恥に満ちた声を上げている。しかし、俺のチンポを継続して抜き挿しされているジャンヌのおまんこからは愛液がトロトロになってこぼれ出てきており、俺がペニスを突きこむたびに、彼女の膣肉からはグチャグチャという淫音が響い

ていた

ズツポ♡ズツポ♡

「おほおほおほ♡い、い、イグうううう♡」

びゅ♡びゅ♡

ジャンヌの好きな部分を重点的にこねてあげると、彼女が潮を吹きながらイク。俺と幾度もセックスを重ねたジャンヌの体は、順調に開発をされてきていた

イキ終わってヘトツとしているジャンヌに俺は種明かしをする。するとジャンヌは恐る恐る周りの景色を確認すると、誰も自分たちに視線を送っていないことに気付いた。全裸になって繋がっている俺たちに誰も気付いていないということは、外からは見えていないということである

「ユーリの、ばかあ♡」

立ちバックのままヌポヌポと俺におまんこを突かれながら、ジャンヌが恥ずかしそうに声を上げる。ジャンヌの羞恥に満ちた姿を見られたのは成功だな

自分たちが行為をしている姿が外に丸見えのような気分でするセックスに興奮したのか、ジャンヌのおまんこからはとろとろの愛液がどつぷりと溢れ出てくる。俺は彼女の愛液をグチャグチャとかき混ぜるように腰を突き込み、さらにピストン運動を続けていった

「じゃあ、みんなに見られながら、中出しされちゃおっか」

「……………」

まんざらでもなさそうな様子でジャンヌが俺を咎めてくる。俺は彼女の言葉を聞きながら、まだ羞恥の感情を残したまま俺と立ちバックでセックスをしているジャンヌのおまんこに、たっぷりと精液を注いだ

とっぴ♡とっぴ♡

「……はあ♡あっ♡」

ジャンヌも美味しそうにおまんこで精液を味わっている。ぞくぞくと震えるように、彼女が身をすくませて深い息を吐いた。快楽による反射で、俺に中出しをされたジャンヌの鍛え上げられた背中の筋肉が引き攣るように隆起していく

「興奮した？」

俺はセックスを終えて、脱いだ服を着込んでいるジャンヌに尋ねてみる

「そんなわけあるか！」

ジャンヌが怒りながら、俺に反論をする

「じゃあ、ジャンヌとはもう、この馬車ではセックスをしないよ。ごめんね」

彼女の言葉を聞いた俺は、わざとしおらしい感じでジャンヌに謝罪をした

「い、いや。まあ、その、だな。外から見えないのであれば、別にいいと言うか……」

なんだかんだ、ジャンヌもマジミラ馬車をお気に召したようだ。恥ずかしそうに俯きながら、彼女はそう答えていた

工房での一幕

「おい！居るか？」

俺は今日、ミューさんの工房を訪れて武器の手入れをしてもらってた。その後、ミューさんと会話をしながら奥の住居スペースでお茶をご馳走になっていると、店の方から横柄な男の声が聞こえてくる

「やばい！ユーリ君、隠れて！」

すごく慌てながら申し訳無さそうに頼み事をしてくるミューさんに従い、俺は奥の方に隠れてこっそりと様子を伺うことにする

「お前みたいな混ざりものを貰ってやるのは俺くらいなんだから、もっと早く来い！」

ヤバい言葉が店の方から聞こえてくる。しばらくすると、トボトボと気落ちした様子のミューさんが住居スペースに戻ってきて、無理して明るく振る舞いながら俺に謝ってくる。

「ユーリ君にはみつともない所を見せちゃったなあ。ごめんね」

銀髪ショートカットに青い瞳をした彼女が悲しそうに微笑んでいた。それにしても典型的なモラハラ男なのだが、この時代では普通なのかな？

ミューさんに話を聞いてみると、婚約をする前はやさしかったらしい。結婚まで秒読みとなり、ミューさんが彼から逃げられないと判断した途端に婚約者は横暴な態度を取りだして、ミューさんを否定し始めたようだ

挙句の果てには、この店の名義を旦那の名義に変え、売上は全て旦那の商業ギルド口座で管理するとまで言い出したらしい。ミューさんは婚約者の変化にどう対応いいか分からずに、困り果てていたようだ

「まあ、俺に任せてよ」

俺は彼女にそう言うと、本当は別の用途で使うために作っておいた映像記録球をミューさんに渡し、それでこっそりと旦那の態度を録画するようにアドバイスをする

映像記録球は、魔力を通すとしばらくの間、付近の映像を記録することができる水晶で、録画した映像を後で確認することが出来るすぐれものだ

俺はさらに、異世界辞典のスキルでミューさんの婚約者である男が経営しているデイン商会を検索してみる。するとデイン商会は、裏では違法な商品を取引していることが判明した。そんなことまで分かるとは、異世界辞典はとんでもないスキルなのかもしれない

ミューさんを罵倒している姿を街中に公開し、デイン商会から違法取引の証拠を盗み出して各所にばらまいた所、モラハラ男ことミューさんの婚約者であるデインは無事、ファーストの街から消えていった

「ありがとう！」

自分の店を守ることが出来て笑顔になったミューさんと、リゼさんのお店で祝勝会を兼ねた失恋会をする。ちなみにデイーン商会は、デイーン商会が出店していた酒場の近くにあるリゼさんの店にも、ライバル店であるという理由で嫌がらせをしていたらしい。しかし会長であるデイーンがこの街から消え去ったことにより妨害行為が消え、リゼさんの店にも活気が戻ってきていた

「これはお礼だよ！」

俺はミューさんから今回のお礼として、流麗な細工をされた剣を受け取る。これはひと目でいい品だと分かる剣だ。しかも美しい。俺はさつそく、彼女からもらった剣に鑑定スキルをかけてみる

白銀の剣＋5

「その剣はね、今の僕が打てる一番の剣なんだ。もっと僕の腕が上がったら、そのときは

また、ユーリ君にお礼をするからね！」

ミューさんが俺に笑顔向けていた

……。

……。

……。

「それじゃ、今日はありがとう……」

祝勝会が終わり、俺はミューさんを家まで送る。もう日が落ちて、辺りはすっかり暗くなっていた

ちゆ
♡

自宅である工房の前までミューさんを送ると、彼女が背伸びをして俺にキスをしてくれる。俺の唇に触れた彼女の残り香には、少しだけお酒の匂いが混じっていた

「えへへ♡これもお礼ね♡……ユーリ君には、ちよつと刺激的すぎるかな？」

ミューさんがいたずらつ子のようなお姉さんの顔をして、ハニカミながら俺に微笑んでいる。どうやらミューさんはこの世界ではまだ15歳である俺を、ウブな少年だと思っただけからかっているようだ

「……またね♡」

ミューさんがドアを開け、自宅へと入っていく。しかし、このチャンスを逃す手はない。俺はミューさんの体を抱き寄せると、お礼のキスを返す

ちゅば……♡ちゅば……♡くちゅ……♡

「ユ、ユーリ君、らめらよお……」

俺からのキスに戸惑っていたミューさんだが、俺との唇を重ねることに、彼女は困惑をした顔のままとろんと瞳を濡らしていく

じゅるるるるる♡……じゅるっ♡じゅるるるるるるっ♡

俺はそんな彼女の混乱を気にすることなく、ミューさんの口内をねっとりと楽しんだ。彼女の細い腰と背中に両腕を回しながら柔らかい舌を吸い上げ、彼女の唾液を貪り、ミューさんの頭が何も考えられなくなるまで容赦なく、俺は彼女の口内をネチヨネチヨに舌で犯していく

「ふっ……んっ……くっ……あっ……」

ミューさんの呼吸に、甘い音が混じり始めた。彼女の吐息には湿った熱がこもり、まるで彼女が俺の舌をもつと口に欲しいと望んでいるかのような体勢で、ギュツと目をつぶったままのミューさんが、可愛い顔を上に向けている

「誰かに、見られちゃうから……もう、らめえ……♡」

ミューさんの脳内がとろとろになった頃合いをみて、俺は彼女から唇を離す。緊張で身をすくませていたミューさんの体からは力が抜け切っており、彼女は俺の胸元に身を委ねるように抱きつきながら、震える両手で俺の体にしがみついていた

キスを終えたばかりのミューさんの唇は濡れたようにぷつくりと膨らんでいて、艶やかな色気を帯びている。それがたまらなくエロい。まだ俺とのキスが名残惜しいのか、彼女の唇には、透明な唾液の糸が垂れ下がったままだった

「寝室に行きましようか？」

突然キスをされて、呆けながら青い瞳をとろん濡らしているミューさんに、俺はやさしい声を掛ける

……コク♡

俺の言葉を聞いたミューさんが無言のまま、真っ赤な顔でうなずいた。彼女は小さな右手でちよこんと俺の服を握りながら、恥ずかしそうにうつむいている。俺はミューさんの140センチくらいしかない小さな体をやさしくお姫様抱っこすると、彼女を寝室まで運んでいく

俺はミューさんが見せた隙に乗じて、彼女の体を美味しく頂くことに成功した

ミューさんと……♡

「あはは♡ユーリ君と、こういう関係になっちゃうなんてねえ……♡」

ベッドの上にてりと仰向けに寝転びながら、銀髪ショートカットに青い瞳をしたミューさんが困ったような顔で自嘲気味に笑っている

彼女の胸には、小さな体に似合わない大きなおっぱいがぷるんと美味しそうに広がっていた。俺はロリ巨乳なミューさんのもちもちとして張りのある綺麗なおっぱいを左手で鷲掴みにすると、やさしく、ふにゆふにゆと揉みしだしていく

「あんっ♡」

ミューさんが甘い吐息を吐く。彼女は俺に胸を揉まれながら、潤んだ瞳でベッドから俺を見上げている。俺は彼女の湿った瞳をやさしく見つめながら、右手でミューさんの

すべすべとして柔らかい脇腹を触ると、おへその周りをさわさわとくすぐるように指先でなぞりながら、少しずつ、ミューさんの秘部へと手のひらを移動させていく

「ドワーフ族の女の子には、アソコの毛が生えないんだ♡僕からしたら、下の毛が生えてる人族の方がおかしい感じかな？」

俺がツルツルとした彼女のロリまんこの土手を指でぶにぶにと押して遊んでいると、ミューさんが笑いながら困ったように、自分の体の特徴を俺に教えてくれる。ミューさんのアソコには、陰毛がまったく生えていなかった

俺は彼女の説明を聞きながら、ミューさんのパイパンまんこの恥丘の部分や、陰唇の周りにまで一切の毛が生えていないツルツルとした彼女のぶにまんの感触を楽しんでいく

「ふきゅ♡」

俺の指がミューさんの綺麗な一本筋をくばあと開き、その割れ目に指を滑り込ませる

と、彼女が可愛い声を出す。ミューさんのおまんこはとろりとした愛液で潤っており、俺はその液体をヌルヌルと指で陰唇に塗り拡げながら、彼女のおまんこを少しずつほぐしていく

「——っうにゅっ♡」

俺の中指がミューさんの小さなクリトリスに触れると、彼女は身をすくませるようにして甘い息を吐いた。俺は熱くなったミューさんの吐息を聞きながら、彼女がとても気持ちよくなれるポッチをクニクニと、やさしく回すようにマッサージュをしてあげる

「あっ♡んくう♡ううっ♡」

ミューさんのクリトリスは敏感なのか、俺の指で弄くられている間中、彼女は体をよじらせながら気持ちよさそうに喘いでいた。ミューさんは右手でベッドのシーツを強く握りしめながら、左手では恥ずかしそうに口元を隠している

「ひゃああああああ♡」

ミューさんの股間に顔をうずめた俺の唇が彼女のクリトリスを啜え込むと、ミューさんが驚いた声を上げながら体をビクンと震せる。俺は彼女の甘くなつた声を聞きながらミューさんの割れ目に顔を強く押し付け、彼女のツルツルまんこをレロレロとクンニした

「ふきゅううううううう」

俺が舌先でミューさんのクリトリスをコネコネと弄びながら、彼女の膣口に指を突っ込んで中の肉をグニャグニャとほじくっていると、ミューさんは大腿を開いたまま両足をピンと伸ばし始める。そして彼女はその体勢のまま両手でベッドのシーツをギュツと握りしめると、体をのけぞらせながら気持ちよさそうに痙攣をしてイッた。ミューさんの膣に埋まっていた俺の二本の指が、きゅうきゅうと彼女の膣肉に締め付けられていく

「挿れるよ」

「……うん♡」

イツたばかりで体をふにやりと脱力させているミューさんを見下ろしながら、俺は彼女のツルツルとしたパイパンまんこの入り口にペニスをあてがった。俺が少しだけペニスを前に押し込むと、肉の輪を広げるような感触で、ミューさんのおまんこの入り口が広がる。小さな体に巨乳をぶら下げたミューさんが、可愛い顔で俺を見上げていた

くにゅ♡

「本当に、僕なんかでいいのかい？」

俺のペニスをおまんこに咥え込む直前に、ミューさんが自信のなさそうな顔で笑っている

「ミューさん、綺麗ですよ」

俺は腰を少しだけ前に突き出すと、ゆっくりと彼女のおまんこにペニスを押し込みな

がら、ミューさんの質問に答えていく

にゆうん♡

ミューさんのおまんこの中に、俺のペニスの先が少しだけ埋まる。俺はその状態で止まったまま、彼女の体に避妊の魔法をかけてあげた

「俺、避妊の魔法が使えるんです。だからミューさんも、俺と好きなだけ遊べますよ」

「そっかあ……」

ミューさんは少し泣きそうな、寂しそうな顔で、俺に言葉を返していた

ふにゆん♡

ミューさんのおまんこに徐々に埋まっていく亀頭の先が、彼女のおまんこの中にある何かの膜に触れる。ミューさんは処女だった。俺よりずっと年上と聞いていたし、彼女

の態度から経験はあるものだと思っていた

「意外だったかい？僕だって生娘だよ。結婚までこういうことはしないようにって、大切に取っておいたんだ……♡」

ミューさんがイタズラが成功したような顔で笑っている。俺は自分の幸運に感謝した。俺は遠慮なく、彼女の処女を頂くことにする

（いただきます♡）

——ツぷち♡

ぐにゅううううう♡

「くうううう……」

ミチミチという感触とともに、俺のチンポがミューさんのおまんこへと埋まってい

く。小柄な彼女のおまんこの中は狭くてキツキツだった。しかし成熟した女性であるミューさんの膣肉は、俺のペニスにウネウネといやらしく絡みついてきている

「ユーリ君と、エッチ……しちやったね♡」

俺のペニスがミューさんのおまんこに半分ほど埋まったあたりで、彼女が満足そうに声をかけてくる。俺はそんな彼女を見下ろしながらミューさんの体内に、さらにペニスを押し込んでいった

にゆるううん♡

「……全部う、はいっちやったあ♡」

小柄な体で股を開いたミューさんが、天井を見上げながらうつつとりとして瞳を潤ませている。ミューさんのおまんこが、俺のチンポで女になった

「……大丈夫だから、動いてもいいよ♡」

ミューさんが俺にやさしい声をかけてくれるが、彼女は破瓜の痛みで涙目になり、苦痛に耐えていた。俺はミューさんのおまんこに回復魔法をかけ、これからの抽送に耐えられるようにしてあげる

ぬほ♡ぬほ♡

「あは♡あつはあ♡……すつ♡い♡これ、……すつ♡いよお♡」

小さな体に巨根をズボズボを抜き挿しされ始めたミューさんが、体をのけぞらせながら気持ちよさそうな声を上げ始めた。彼女は破瓜の痛みにも悩むことなく、きちんと俺とのセックスで気持ちよくなれているようだ。俺は安心して、ミューさんとのセックスを続けていく

「おっ♡ほっ♡……おほお♡」

ミューさんのロリロリとした小柄な体に俺の巨根はきついのか、彼女はいきむような

よがり声をあげている。しかし、ミューさんのおまんこからは愛液がトロトロと溢れ出てきており、俺のチンポを突き込まれるたびに、彼女の膈壁がきゆうきゆうと俺の肉竿に吸い付いてきていた

「ん、ほっ♡お、っ♡ほっ♡」

俺とのセックスに慣れてきたであろうミューさんのおまんこへのピストン運動を、徐々に強くしていく。おまんこに俺のチンポをズポズポと出し入れされるのがままのミューさんは股を開いたまま、おまんこをいきむようにして腕を広げていた。彼女の両腕に挟まれた巨乳が、ぶるんぶるんと上下に動いている

「ぶぐううううううううううう」

俺はミューさんに全体重を掛けると、種付けピストンプレスの状態で彼女の子宮を押し潰していく。すると、俺とセックスをしながらずっとお姉さんぶって余裕を見せていたミューさんが突然、必死によがり始めた

「奥う♡届いてるう♡届いてるう!!!♡♡♡♡」

イヤイヤと激しく首を左右に振りながら、ミューさんがベッドのシーツをギュツと握りしめ、おまんこから昇ってくる快感を少しでも逃がそうとはしたなく股を開くが、俺は快感を逃さない

「んぐう……♡いゝ、イグうううううう♡」

白目をむきそうなくらい目を上ずらせたミューさんが、初めての中イキを経験する。しかも深いイキだ。気持ちよさそうに体をビクンビクンさせていたミューさんが体を起こし、意識を朦朧とさせながら俺の体にだいしゆきホールドで縋り付いてくる。俺はそのまま、ミューさんのおまんこに精液を注いだ

どぶ♡どぶ♡♡

「で、でてりゆううううう♡い、イキながらりやああ♡僕のおまんこにいい♡せーし♡……だされちやつらあ♡」

腰を気持ちよさそうにヘコヘコと動かしながらミューさんが頬を真っ赤に火照らせ、初めておまんこに注がれる男の精液を気持ちよさそうに味わっている。これでミューさんは心だけでなく、体も大人の女になった

にゅぽん♡

ミューさんのおまんこの中に精液を出し終えた俺のチンポをズルリという感触とともにミューさんのおまんこから引き抜くと、栓が抜けたように、彼女の膣口から、ドロツとした白い液体が垂れ落ちてくる

呆けたまま股を開いて動かないミューさんのツルツルとしたパイパンロリまんこが、俺の精液と彼女の愛液で、ベチヨベチヨに汚れた大人のおまんこになっていた

「僕のおまんこ、気持ちよかった？」

セックスを終え、大人のお姉さんの顔に戻ったミューさんが、またイタズラっ子のよ

うな顔をして俺に尋ねてくる

「んん♡んん♡」

「あん……♡らめらよおお♡」

俺はそんな彼女を再びベッドの上に押し倒すと、再び正常位の体位でミューさんのおまんこにチンポをねじ込み、二回戦を開始した

ズチュ♡ズチュ♡

「おほおおおおおお♡」

俺の精液を彼女の愛液が混ざりあってグチャグチャになったミューさんのおまんこに、俺はズポズポと乱暴にチンポを出し入れしていく。狭くてきついミューさんの膣穴が、ポツコリと俺のチンポで広がっていた

「めくれりゆうううううう　♡僕のお、お、ま、んこおおお　♡め、めくれちやうよおおおおお　♡」

再び、俺に種付けピストンプレスで体を押しつぶされながら、ミューさんが半狂乱になって叫んでいる。彼女の言葉を聞いた俺は寝取りチンポの新しい能力を試してみることにした

俺がチンポに力を込めると亀頭がぶつくりと膨らみ、肉の反しが深くなる。効果は地味だがこれにより、俺のチンポは引き抜く時に、おまんこを抉るようにして膣肉に引っかかるようになった。こうすることによって、俺にピストン運動をされている女の子の快感が何倍にも増すのだ。ちなみにさらに亀頭を膨らませれば、おまんこからチンポを絶対に抜けなくすることも出来る

「あはっ　♡あつはああああ　♡ユーリ君、これええ　♡……すっごいよおおお　♡」

俺がミューさんの膣壁を抉るようにチンポで引っ掛けていると、彼女が狂ったようによがり始めた。ミューさんは俺にこうされるのがめちゃくちゃに気持ちいいようだ。

「ユーリ君のひんぽで、僕う、らめにされちゃつてうよお♡」

ミューさんが情けないアへ顔で呆けながら、アクメ声で何かをつぶやいている。俺はここで彼女を墮とすことにした。俺はミューさんをさらに快樂の世界へと導くべく、彼女のおまんこに、さらに精液を注ぎ込んでいく

♡♡♡♡♡

「もう、おなかいっぱいからああああ♡」

ミューさんが懇願するが、俺は止めない

♡♡♡♡♡

「らめええええ♡僕の子宮はあ♡もうパンパンらよおおお♡」

俺の膨らんだ亀頭に栓をされたことによつて外に出ることの出来ない精液が、ミューさんのおまんこの中にたまり続け、少しずつ彼女のお腹が膨らんでいく

「おい（お）お（お）お（お）あ、がつ♡」

彼女がまるで俺の精液で溺れているかのように苦しみですが、俺はまだまだ彼女のお腹に精液を注ぎ込むのを止めない

「んぎぎぎぎ（い）い（い）い（い）い（い）♡」

ミューさんのお腹が妊娠をしたかのように膨らんでいく。俺は彼女のお腹のへその下あたりに、淫紋を刻んだ

「んほ（お）お（お）お（お）お（お）お（お）♡」

俺に淫紋を刻まれた瞬間に、お腹の中に貯まり続ける俺の精液が強烈な快感に変わったミューさんが、体をのけぞらせながら、情けないアへ顔をキメてビクビクと痙攣をす

る。それでも俺は、精液を出すのを止めなかった

「あつはあああああ♡僕う、これ♡らしいしゆきいいいい♡」

ミューさんが今日まで光り輝いていた彼女の青い瞳を暗く濁らせ、楽しそうに笑っている。お腹の中に俺の精液を大量に溜め込んだ彼女の淫紋が、急速にピンク色に変わっていく。彼女のお腹はすでに、臨月のように膨らんでいた

「い、い、い、グ、うううううううううう♡」

淫紋が完成した瞬間に、ミューさんが体をガクンガクンと仰け反らせながら気持ちよさそうに絶頂を迎える。彼女の体に淫紋が完成したのを見届けた俺がミューさんのおまんこからペニスを抜き取ると、肉栓の無くなった彼女のお腹の中から、大量の精液が溢れ出てきた

びゆる♡びゆるっ♡びゆるるる♡

と♡♡♡♡♡

「これえ……すつこく♡気持ちいい♡」

こうしてミューさんの体にも、俺の淫紋が刻まれたのだった

スキル獲得

「ユーリ君って変態だよね♡こういうのが好きなんだ？」

淫紋を刻んでからのミューさんと俺は、こうして定期的に肉体関係を持っている。今日の彼女は工房を早くに閉め、お店の中で俺にパイズリをしてくれていた。俺とセックスを重ねるたびに、ミューさんの性知識は着々と増えていく

「えい♡えい♡えい♡」

ミューさんはタンクトップを着たまま俺のペニスにおっぱいを覆いかぶせるようにして柔肉で包み、グーパーパイズリでたぶんだぶんと上下にチンポをしごいてくれた。ミューさんが椅子に座った俺をいたずらっ子の笑みで見上げながら、膝立ちになつて楽しそうにパイズリをしている

ふにゆん♡ふにゆん♡

ニコニコとしながら俺のチンポで遊んでいるミューさんの着ているグレーのタンクトップの谷間に、彼女のおっぱいを出入りしている俺のペニスで山が膨らんでいるのがとてつもなくエロい

びゆるる♡びゆるるるる♡

「あはは♡出ちゃったね♡」

ミューさんのロリ着衣巨乳にチンポを挟まれたまま、俺は果てた。彼女のロリ巨乳の谷間に、俺の精液で泉が出来る。ミューさんはグーパーパンチのままおっぱいを俺のペニスに強く押し付けるとギュツとチンポを巨乳で挟んで、俺の射精の感触を胸元で楽しそうに味わっている

俺のチンポで山のように膨らんでいるミューさんの着ているグレーのタンクトップの繊維の隙間からは、俺の出したザーメンがべつとりとはみ出てきており、彼女の上着

を白くドロドロに濡らしていた。ミューさんの着ている服の内側には行き場のない大量の精液が重力によって彼女の谷間を伝い落ち、ミューさんのスベスベとしたお腹までをどろりと汚している

「もう♡僕の服がベトベトだよ♡」

彼女の言葉とは裏腹に、ミューさんは精液でべつとりと濡れてしまった自分の体に興奮をしていた。彼女は淫紋を刻まれたことにより、俺の精液が大好きになっている

「ねえ♡♡っちにも頂戴♡♡」

俺におねだりをするミューさんは精液まみれになった服を脱ぎ捨て、お店のカウンターに手をかけ立ちバツクの体勢でお尻をフリフリと左右に揺らしながら俺のチンポを待っている。ロリだけどふつくらとして大きいミューさんのお尻が半端なくエロい

彼女の後ろ姿を覗き込むようにしてミューさんのツルツルな一本筋おまんこを確認してみると、彼女のぷにぷにとしたドワーフおまんこの入り口からはベチヨベチヨに

なった愛液が溢れ出てきており、ミューさんの陰唇全部をトロトロになるまで濡らしてしまっていた

にゆううううん♡

俺は遠慮なくミューさんのおまんこにペニスをねじ込むと、ポツコリと穴が空いたように広がっている彼女のおまんこの中に向かって、ズポズポと気持ちよくペニスを出し入れしていった

「あんっ♡」

ミューさんが気持ちよさそうな声を上げ、カウンターにギューツとしがみついている。俺はそんな彼女を快感から逃さぬように両手で腰をがっしりと掴むと、ミューさんのお尻を無理やり引き寄せながらピストン運動を続けていく。俺のペニスを彼女のおまんこに突きこむたびに、股間に当たるミューさんの柔らかいお尻が気持ち良かった

ぬぼ♡ぬぼ♡

ミューさんのおまんこにチンポを突きこんでいると突然、彼女のお腹の中がうねうねと動き出し、膈壁がきゆうきゆうと収縮をし始める。俺はミューさんがイクのに合わせて、彼女のおまんこの中にたつぷりと精液を注ぐことにした

「あはあ……♡」

♡♡♡♡♡

「おほおほおほおほおほ♡」

♡♡♡♡♡

そして俺はそのまま止まることなく、ミューさんのお腹がパンパンになるまで彼女の子宮に精液を注いであげる。俺に精液を注がれ続けるミューさんは満足そうなアへ声を出し、体をビクンビクンと痙攣させていた

「これえ、やっぱり……気持ちいい♡」

……。

……。

……。

ミューさんとの一戦を終えた俺は自宅に戻り、新しいスキルを獲得するためにステータスボードを確認する

ユーリ レベル23

使用可能スキルポイント 3023

スキルポイントがかなり増えていた。どうやらレベルが上がることでスキルポイントが1。誰かに淫紋を刻むことでスキルポイントが1000上がるらしい。ミューさんに淫紋を刻む前に確認した時はスキルポイントが2023だったから、多分間違いな

いだらう。俺は早速ステータスボードの管理者用ページに不正ログインすると、目ぼしいスキルを探し出す

「よし！今回は、これだな！」

俺が獲得したスキルはまず、薬液創造。このスキルは自分の魔力を直接変換することで、材料がなくてもポーション類が作れるという素晴らしいスキルだ。俺はこのスキルを使ってダンジョンを作る旅に出るための資金を貯めることにした。俺の魔力で作ったポーションをこの街で売るので

そしてもう一つ、手に入れたスキルがスライム創造。このスキルは魔力から自分好みのスライムを作り出すことが出来る便利なスキルだ。このスキルで作りに出したスライムは何でも俺の言うことを聞く。モンスターをテイムしていると出来るが増えるからな。さて、どんなスライムを作ろうか

この二つのスキルを獲得するにはそれぞれ、1500ポイントが必要だった。つまり俺は合計3000ポイントのスキルポイントを消費したことになる。残りのスキル

ポイントは23しかない

端数をどうしようか考えていると、いい感じのスキルを見つけた。ビン作成というスキルだ。このスキルは、何の変哲もないビンを魔力から作ることが出来るという今の俺が最高に欲しいスキルだった。獲得するために必要なポイントは20。俺はビン作成スキルも獲得する

スキルを獲得した俺が薬液創造スキルを試しに使ってみると、指先からポタポタと液体がにじみ出るようにして俺の魔力から作ったポーションが出てくる。どうやらこれが、俺の魔力を変換したポーションのようだ

俺はその液体を、スキルで作ったビンに入れてから鑑定スキルにかけてみる。すると品質は普通と表示された。どうやら薬液創造スキルで作られるポーションの品質は普通で統一されているらしい。良い品質のポーションを作るためには錬金や調査を使って自分で作る必要がある

ちなみに魔力から変換された液体が出てくる場所やスピードは、意識をすると変更が

できた。やりようによつては、両目からポーションを高圧で射出することも出来るが、別にそんな事をする必要もないだろう

さて、ポーション類を売るためには錬金術ギルドの会員証が必要である。まあ、薬剤師免許みたいなもんだ。正規のポーションを作れる実力を持つてますよという証のない奴が作ったポーションだと、飲むのは怖いもんね

さて、明日になったら錬金術ギルドにギルドカードを作りに行きますか

錬金術ギルドへ行こう

「もう・あんたって、本当に変態なんだから！」

翌日の朝、俺はマリーが泊まっている宿屋に訪れると彼女にパイズリをお願いした。錬金術ギルドに行く前に一発抜きたくなったのだ。ベッドに腰掛ける俺の足元で、上半身裸になったマリーが赤いスカート一枚だけの姿で膝立ちになっている

「ねえ、ユーリー！こういうこと、私以外の女の子に頼んだらすつごく失礼なんだからね！
気をつけなさいよ！」

マリーはツンツンと怒りながらも自分の爆乳を鷲掴みにすると、たゆんたゆんになったおっぱいで俺のペニスを柔らかく包み込んでくれる。そして彼女はゆっさゆっさと爆乳を両手で小刻みに揺らすようにして、俺のチンポを上下にしごき始めた

「ふんっ♡ふんっ♡まったたく……♡このチンポは♡」

マリーがスカート一枚の姿でパイズリをしながら鼻息を荒くしている。ベッドの上から見下ろすマリーのおっぱいは最高だった。彼女の爆乳がふにゆんふにゆんと柔らかそうに揺れている光景を見るだけで、正直抜ける

ちゅぷ♡ちゅぷ♡

マリーが爆乳パイズリをしながら前かがみになって俺の亀頭を口に咥え、舐めしやぶり始めた。俺のチンポを舐める彼女の唾液にまみれた口内の感触が生温かくて、メチャクチャに気持ちいい。もう何度もおっぱいを使って俺のチンポを抜いてくれたマリーはこの行為に慣れており、パイズリのスキルが向上していた

「ほら♡ほら♡早く出しちゃいなさいよ♡」

マリーがドSな笑みで俺を見上げながら、おっぱいで挟んだペニスを激しくしごいてくる。いつも俺にイカされまくっている彼女だが、責める立場も好きなようだ

♡♡♡♡♡

「あらあ♡ユーリのチンポ……♡ぴゅっぴゅしちやったわね♡」

マリーの爆乳にいじめられてしまった俺のチンポから精液が溢れ出すと、俺の肉竿をギョツと挟み込んだマリーのデカいおっぱいの谷間に、たっぷりと白い水たまりが出来ていく。マリーは俺のペニスの先からトプトプと精液が溢れ出てくるいやらしい光景を、嗜虐心が満たされた顔で満足そうに眺めていた

ずぞぞぞぞぞ♡

マリーは胸元の爆乳に溜まった俺の精液に口をすぼめながら顔を近づけると、下品な音を立てながら飲み干していく。あつという間に、彼女の谷間に溜まっていた俺の精液が、マリーの口内に吸い込まれていった

「お♡♡♡」

俺の精液を飲み終えた彼女が興奮した顔で舌なめずりをしている。淫紋の効果により、マリーは俺の精液が大好きになっていた

「ねえ♡私にも、してくれるのよね？」

マリーが物欲しそうな顔をしながらベッドの上に寝転がると、正常位の体位で股を開く。そして彼女は赤いスカートを両手でひらひらとまくりあげながら、ノーパンおまんこを俺に見せつけるようにしてセックスをおねだりした。ベッドの上に寝転がっているマリーの上半身にふにやりと垂れている彼女の爆乳が、俺の精液でベチヨベチヨなっているのが素晴らしくエロい

くにゆううううう♡

「あんっ♡」

俺はマリーのおまんこに、朝一の精液をたっぷり注いであげることにした

……。

……。

……。

さて、錬金術ギルドに行くとするか。賢者になってスッキリとした頭で、俺は錬金術ギルドへと向かう。少しだけ日が高くなっていた

錬金術ギルドに着くと受付に向かいギルドに登録したい旨を伝える。すると師事が目的なのかという質問をされた。どうやらギルドに入会することで、誰か師匠を紹介してもらえるシステムがあるらしい。まだ若い俺を見て、受付の人はそつちが目的だと思っただようだ

ポーションの販売が可能になる本登録が目的であることを彼女に伝えると、簡単なポーション作成のテストを受けた後に合格を告げられる。これで登録は完了だ。俺は

錬金術ギルドのギルドカードを受け取った

後は作成可能な薬品の種類によってギルドカードのランクが上がっていくらしいのだが、今回はテストを受けずに帰ることにする

ギルドにくる前に作っておいたいくつかのポーションを売ることで、俺はある程度のお金を手に入れた。これから定期的に目立たない量のポーションを売っていけば、簡単にお金が溜まっていくな

家に帰った俺はスライム創造のスキルを試してみることにする。俺はありつただけの魔力と妄想をこめてスライム創造を発動すると、突然外部から魔力に干渉されたような感覚とともにバチバチツツという雷が室内に鳴り響く

そして寝取りチンポスキルが発動した感触の後、気がつくとも室内には一匹のスライムが佇んでいた。そのスライムは何やら手紙を持っている。俺がスライムから受け取った手紙を読んでみる、手紙には以下のようなことが書いてあった

『無事、世界に混沌をもたらし始めている貴様へのボーナスだ。以後、より良い混沌を世界にもたらすように』

どうやら邪神からの手紙のようだ。どうやら俺の行動は邪神に筒抜けらしい。ステータスボードの事を言っただけでこないってことは、管理者ページへのログインは特に問題ないということなのか？

「まあ、世界に混沌をもたらした覚えなどないが、評価してくれるならもらっておくことにするか」

俺はそうつぶやくと、先程スキルで作りに出したスライムを見る。部屋の床に佇んでいるスライムは、実態を持ちながらまるでそこに存在をしていないかのように少しだけ透けており、何やら不思議な見た目をしていた

「今日からお前の名前はプルだな！よろしく、プル！」

ふる♡ふる♡

俺は不思議な見た目をしたスライムに名前をつけると早速、鑑定スキルをかけてみる

プル

種族：クトウルスライム

スキル

邪術：混沌を生む術

分裂：体を複数に分けることが出来て、並列思考が可能

消化：体内に取り込んだ物質を消化、吸収することができる

体液変質：体液を毒物に変換できる。薬にも可

まあ、何だかスゴいやつが仲間になったようだ

ジャンヌでお試し♡

ジャンヌ視点

ひとり……ひとり……

夜中、自室で睡眠を取っていると何やら違和感を覚えて目を覚ます。室内に何かが入っている。冒険者として培った私の勘がそうささやいていた

「なんだ、プルか……」

しかし、私の部屋にいたのは昼間ユーリにタイムをしたと紹介されたスライムのプルだった。彼はわざわざ最弱なスライムをタイムしたらしい。変わった男だ

そういえばプルを紹介された時に今日の夜、プルの実力を試してみたいから協力して

くれないかとユーリに頼まれたな。これがそうなのか？確かに、こつそりと夜中に忍び込ませるといふ方法は、体の形を自在に変えられるスライムの利用方法としては理にかなっているだろう

「お前も大変だな……」

健気に主人の命令を聞いているプルに声をかけると、プルは少し透明でぶるぶるとした体を揺らしながら私に近づいてくる。プルの体の色は他のスライムとは違っており、もしかしたら特異個体なのかもしれない

ベッドに腰掛ける私に向かってプルがぽよんと飛び込んでくる。そしてプルは愛らしく、私の膝の上でぶよぶよと体を揺らしていた

「かわいいな……」

ほんわかとした空気が流れる。スライムも悪くないもんだ。しかし、癒やしの時間はそう長くは続かなかった。私のふとももに乗ってぶるぶるとしていたプルが突然、私の

股間に張り付いてしまったからだ

「あらープル！そんなところまで、飼い主に似なくていい！」

私は驚きながらも股間にぴったりと張り付いてしまったプルを引き剥がそうとするが、プルの柔らかい体に自分の両手が埋まってしまうだけで、どうしても股間からプルを引き剥がせない

「——ッひゃあっ♡」

そんなことをしているうちに何と、プルは私が着ている寝間着の繊維の隙間を通り抜け、下着の内側にまでぬるりと侵入してきしまう

「あらあ♡プル、ユーリになんてことを教わっているんだあ♡」

おまんこに直接もぞもぞと張り付いてしまったプルの粘液質な体が生温かくてこそばゆい。プルの温かくてぬちやぬちやとした体が陰唇の割れ目を開いて中に入ってく

るのが分かる

下着の中に入ったプルの体がヌルヌルと動くたびに、刺激をされた私のアソコから、心地のよい快感が昇ってきてしまう

「や、やめろお♡」

おまんこを気持ちよくされてしまい、少し脱力をした体で何とか抵抗をするが、プルは私のおまんこにぴったりとくっついたまま離れてくれない。そのままプルは私の濡れ始めた割れ目をさらに開くようにして、クチュクチュとアソコの表面をうごめいていく

「おっ♡おほっ♡」

プルはおまんこを弄るのがメチャクチャにうまかった。なんてスライムだ。ユーリはスライムにとんでもないことを教え込んでいる

スライムの生温かい粘液質な体も相まって、あつという間に腰を砕かれてしまった私は、まるで生娘のように内股になって股間を両手で押さえつけながら、うつ伏せのまま動かずにおまんこから昇ってくるグニユグニユとした気持ちいい刺激に耐えていた

「——つそつちは、違う穴だあ」

おまんこにくつつついていたプルが私の体を後ろ向きに這い登り、なんと今度は私のお尻の穴を這い回っている。私は驚愕と恥ずかしさを感じながらも、アナルに拡がる心地よさからプルに身を任せたままになっていた。プルが蠢いている私のお尻の穴から徐々に、甘くて気持ちがいい感覚が広がっていく

にゆるん♡

「おほおほおほ」

なんとプルが私のお尻の穴を開くように体をねじ込み、おまんことは違う方のお腹の中に入り込んでしまった。プルの温かくて柔らかい体の感触が、私の体内に広がって

るのが分かった

いぼ♡いぼ♡

「んほお♡おっ♡おっ♡」

プルはそのままこぼこぼと音を立てながら、私のアナルを出たり入ったりを繰り返していく。プルの体にお尻の穴を出入りされるたびに、私のアナル周辺からは甘い痺れが背中を伝って頭まで昇っていき、私は知らない快樂の世界へと引きずり込まれていった

私の体が少しずつ、スライムに調教をされていく。私は知ってはいけない、心がダメになってしまう快感を、こうしてプルに教え込まれていた

ぐぼ♡ぐぼ♡

「くはあっ♡あっ……♡んぐうううう♡」

いつの間にかアナルと一緒におまんこを続けて刺激していたプルの体は離れていて、今の私はお尻の穴から生まれる快感だけで気持ちよくなっている。私は自分の体がお尻をほじくられるだけで気持ちよくなってしまふことが信じられなかった

しかし今のプルは、私のアナルしか弄っていない。プルにお尻の穴をほじくられるたびに、気持ちがいい痺れが全身に向かって広がり続けている。もう、言い訳は出来なかった

プルの体がコポコポと私のお尻の穴を出たり入ったりするのが気持ちよすぎで、アナルと一緒ににはしたなく、私のおまんこがヒクヒクと開いたり閉じたりを繰り返している。悔しいけど、気持ち良かった

ずりゆりゆりゆりゆりゆり♡

突然プルが下品な音を立てて、私のアナルからどぽっという感覚とともに飛び出してくる。プルの全身が私のお尻の穴を通過する際のアナルがめくられるような衝撃と一緒に、甘くてとろける強烈な快感が私の全身を駆け巡っていった。そのあまりの気

持ちよさに、私の目の前がチカチカと点滅をしている

「ら、らめえ」♡

私はあまりの爽快感と心地よさに腰砕けになるが、これは知ってはいけない快樂だ。心が私に告げていた。しかし私のそんな思いを踏みにじるようにしてプルが再び、私のアナルに侵入しようと体をよじ登ってくる

もぞ♡もぞ♡……ぐにゅううん♡

「んほおおお」♡

抵抗する私のお尻の穴を簡単にこじ開けると、プルは再びぬるりとお尻の中に入り込んでしまう。私のお腹の中に全部入り込んでしまったプルの体はすぐに引き返すようにして、私のアナルを内側から、焦らすように押し広げていた

止めてくれという私の気持ちとは裏腹に、次に来るであろう先程と同じ快樂に期待を

出してくるたびに、強烈な排泄感とともに果てしない爽快感と羞恥心が混ざりあった快感が、私の脳を殴りつけてくる

めくれるようにして開かれる私のお尻の穴からは、まるで天国に導かれているような甘い痺れがジンジンと広がり続け、お尻の穴周辺だけではなく私の腰や太ももにまで、その甘い痺れは広がっている。それくらい、強烈な快感だった

ぐぼお♡ぐぼお♡ぐぼお♡

淑女のアナルから出してはいけけない音を立てて、プルが私のお尻の穴を出たり入ったりしていく。私のお尻の穴周辺から昇ってくる甘い痺れは強烈に広がり続け、私の下半身から気持ちいいという痺れ以外の感覚を消してしまっていた

ずりゆりゆりゆりゆりゆり♡

もぞ♡もぞ♡

……ぐっぽ♡……ぐっぽ♡

プルの体が私のアナルに出たり入ったりを繰り返す。正直、私は限界を迎えていた。イキそうなのだ。しかし私にも淑女としての意地がある。お尻の穴ではイキたくない。お尻の穴でイツたらもう戻れなくなる。そんな予感がしていた

……ずりゆりゆりゆりゆりゆりゆり♡

「ら、らめえええええええ♡」

私は絶頂をこらえようと必死に体をいきませるが、プルのアナル責めは止むことがない。プルにズポズポとされている私のお尻の穴に広がる甘美な痺れがシュワシュワと、私の全身を蝕んでいく。快楽に身を任せる心地よさに、少しずつ私の意識が流されていった

ぐっぽ♡ぐっぽ♡♡

「おほっ♡おっ♡ほっ♡おほおほ♡」

ついに心のダムが決壊するかのように、強烈な快楽がアナルから溢れ出てくる。我慢した分だけ溜まってしまった快楽が、洪水のように私の心の貞操を押し流していった

ダメだ。もう何も考えられなくなって……

ほほほほほほ♡

「んっほおおおおおおおおおおおお♡」

ビクン♡ビクン♡

最後のトドメと言わんばかりにプルが私のアナルを激しくかき混ぜ始めた瞬間に、私はいとも簡単にイッた。不意打ちのようにプルに弄くられた私のお尻の穴は、それくらいとんでもなく気持ちよかった

私は情けなくベッドの上でお尻を天井に向かって高く突き上げながら、うつ伏せのまま動けずに体をビクンビクンと痙攣させ続ける。しかし、オーガズムに至った私の体は解放感に満ちていて、悔しいけど心地よかった

依然としてプルに弄くられたお尻の穴からは甘くて心地よい痺れが広がり続けており、私は知ってはいけない快楽をプルに教えられてしまったことに対する屈辱と快感に、ぼーっと痺れる頭で耐えている

……………(そ)そ(そ)

「……………え？」

私がイッたことを確認すると、プルはまるでこれで自分の仕事はもう終わりだと言わんばかりに、あつけなく主人のもとに帰っていった

「そ、そんな……………」

オーガズムを迎えた私は真つ暗な部屋の中でそのまま放置されてしまい、そのあまりのあつけなさに、私は静まり返った真つ暗な部屋の中で呆けてしまう。先程までプルに弄くられていたアナルが何だかもどかしい。もっとしてほしい。私のアナルがそう言ってるかのように、ムズムズとしてこそばゆかった

「い、いかん……流されるな！」

しかし私はそんな自分の考えを振り払う。あれは知ってはいけない快樂だ。もう金輪際しない。明日ユーリに抗議しよう。私はそう心に誓った

私は寝る前に、自分の部屋を掃除することにする。あれだけ激しくお尻の穴を弄くられたのだ。どれだけ寝間着や部屋を汚されてしまったのやら……

「あれ？何も汚れてない？」

しかし私の心配を他所に、下着やベッドのシーツに至るまで、汚れなど何一つ見つからなかった。逆にアナルを弄くられる前よりも、生地が綺麗になってさえいる。さすが

スライムといったところか

……ごくり♡

体を汚されることなど気にしなくていいなら、あの気持ちよさをまた味わってもいい。そんな考えが私の頭をよぎってしまう。しかし私はそんな邪な考えを振り払うと、ブルにイカされてから気持ちよく脱力したままの体をベッドに横たえ、再び眠りにつく

もう私は絶対にアナルでなんて気持ちよくなならない。そう深く心に刻みながら……

ジャンヌ完墮ち♡

「おほお♡おっ♡おっ♡おっ♡おっ♡おっ♡」

俺は深夜にベッドの上で、バックの体位からジャンヌのアナルにチンポをぶち込んでいた。ここ最近の俺はジャンヌのアナル開発に勤しんでいる。俺に開発されたジャンヌの尻の穴はとろとろなメス穴に変わり、すんなりと俺のペニスをズポズポと受け入れることができるようになっていた

「お尻の穴あ♡き、きもひいいいい♡」

俺に性感帯として開発をされてしまった彼女のアナルがいやらしく、俺のチンポにねっとり絡みついてくる。彼女の尻の穴は俺のペニスが出たり入ったりするたびに快樂で収縮をして、きゆうきゆうと搾り取るように吸い付いてくる

俺にアナルを開発され尻の穴だけでとろとろに気持ちよくなる事が出来るようになったジャンヌは、アナルを突かれているだけなのに、触られてもいない膣口から快楽への反応で大量の愛液がドロドロにこぼれてしまっていた

ぐほ♡ぐほ
♡

ジャンヌの尻の穴に俺のチンポが入りするたびに、彼女のお尻からはいやらしい音が鳴り響いてくる。その恥ずかしい音にも慣れてしまったジャンヌは気にするそぶりを止め、今は俺とのアナルセックスを夢中になつて楽しんでる

「おほっ♡おっほおおおお♡」

ジャンヌの尻の穴はプルに綺麗にしてもらったから安全だ。さらには一定時間回復効果が持続するリジエネ効果を付与したりリジエネローションを、薬液創造のスキルを使つて俺のペニスから滲み出すことで潤滑液を作り出しているので、彼女のアナルが傷つくこともない。ジャンヌのアナルには激しく俺のチンポをズポズポ出し入れしても平気なのだ

ぬぼお♡ぬぼお♡

「お、お尻があ♡……めくれりゅううう♡」

今もジャンヌは気持ちよさそうに体をよじっているが、俺は彼女の腰を後ろから両手でギュツと掴んで逃さぬように体を引き寄せながらアナルへのピストン運動を続けていく。体を鍛えているジャンヌの尻の穴は締りが良くて最高だな

「もうアナルはやらあ……♡」

ここ一ヶ月の間、俺はジャンヌのアナルしか触っていない。おっぱいすらも触っていない。もちろんおまんこもだ。俺に尻の穴を弄くられまくった彼女は、俺に姿を見かけただけでアナルがいやらしくヒクヒクと動いてしまう淫乱な尻の穴の持ち主になった

そして今日、俺はジャンヌを墮とそうと思っている。今日の俺はじっくりとジャンヌを快楽に導き、彼女の体を高ぶらせ続けていた

バチンツ！

「や、やめろお♡」

鍛え上げられて弾力のあるジャンヌの小さなお尻を平手で叩くと、彼女のアナルがきゅんと引き締まり、俺のチンポが肉感のあるジャンヌの尻の穴にごっそりと搾り取られそうになる

バチンツ！バチンツ！

「うひゃあ♡」

俺が尻を叩くたびにジャンヌは嬌声を上げ、彼女の膣口からはおまんこがヒクついた反動で飛び出した愛液が勢いよくベッドのシーツこぼれ落ちていった。彼女のアナルがひくひくと動き始め、彼女の声が弱々しくよがりアへったものに変わっていく

バチンツッ！バチンツッ！バチンツッ！

「おっ♡……おほおほおほおほ♡」

尻を真つ赤に腫らしながら、ジャンヌがイッた。彼女のアナルがイキながらきゆうきゆうと俺のチンポにすがりつくようにして、開いたり閉じたりを繰り返している

「もうお尻はイヤあ♡おまんこお、おまんこに入れてえ♡」

一ヶ月もの間、お尻の穴しか弄くられていないジャンヌが切なそうにおねだりをしてくるが、俺はアナル責めを止めない

ぬぼり♡ぬぼり♡

「おほっ♡おっ♡おっ♡おっ♡おっ♡おっ♡」

イッたばかりでヒクついているジャンヌの尻の穴にすぐさま、俺はチンポをねつとり

と出し入れしていく。再びアナルに俺のペニスを抽送され始めた彼女はうつ伏せにうつむいたままベッドのシーツをギュツと両手で握りしめて、気持ちよさそうに身をすくませていた

「今はらめえ……♡お尻でえ、イッたばかりからあ……♡」

ジャンヌがアへ声で何かをつぶやいているが、俺は彼女のアナルに続けているピストン運動を止めない

「お♡お♡お♡お♡お♡」

俺はさらにジャンヌの体の奥深くにまでペニスを突きこむために彼女の体を後ろから抱き起こすと、背面座位の体位になり、下の角度から決るようにしてジャンヌの尻の穴にチンポをねじ込んでいった

「お、奥う♡お尻の奥う、深しゆぎいいいい♡」

俺に後ろから腕ごと体をがっしりと抱えられて快感を逃せなくなったジャンヌのアナルの奥深くにまで、俺の巨根が入り込んでいく。ジャンヌのお尻の穴は俺のピストン運動でめくれてしまいボツコリと、俺のチンポの形に開いてしまっていた

「なあ、ジャンヌ、俺の女にならないか？」

「いいけろお♡……ひとつだけ、おねがいがあるんらあ♡」

ぬぼ♡ぬぼ♡

俺は柔らかくほぐれたジャンヌのアナルにチンポを出し入れしながら、彼女の願いを聞くことにする。俺は自分の女になった女性の頼みごととは可能な限り聞きたいタイプだ。他の女と別れてくれという願いと、相手が不幸になってしまいう願い以外なら俺は本当に何でも聞くつもりである

俺はジャンヌとアナルセックスを続けながら、彼女の願いを聞き出すことにした

「ジャンヌ。俺は俺の女になった女性の頼みなら文字通り何でも聞くよ。ジャンヌは何がしてほしいの？」

「そ、それはあ……♡」

ぬぼ♡ぬぼ♡

俺はジャンヌの心をほぐすようにして、彼女のアナルをやさしくほぐしてあげる。彼女が話すのをためらってしまう頼みとはなんだろうか。しかし俺は、彼女のどんな願いでも叶える覚悟を決めた

しばらく恥ずかしそうに躊躇をしていたジャンヌだが、俺とアナルセックスを続けているうちに意を決したのか、彼女はポツリポツリと俺に対する願いを話し始める

「わらひがあ♡たまに門番の臨時募集の依頼を受けているのは知っているらろう？」

「うん」

「その時に身体検査と偽って、いつも女の子にセクハラをしているらけどお♡」

「ああ」

「それがいきがいだかりやあ、おつ♡絶対についい、おほつ♡やめたくなによほおおおつおお♡」

「なんだ。そんなことか」

ぐっぽ♡ぐっぽ♡

俺はジャンヌのあまりにもくだらない頼み事について、アナルへのピストン運動を強めてしまっていた。しかし今から俺のおちんぽケースになる女性の頼みだ。もちろん、俺は彼女の願いを聞くことにする

「別に続けてもいいよ。俺は束縛が嫌いだからね」

「ほ、ほんとお？おっ♡おっ♡おっ♡」

「本当だ」

「じゃあなりゆうう♡ユーリのおんなに、にやりゆうううう♡」

きゆうううううん♡

あつという間に心が堕ちたジャンヌの体に俺の淫紋が刻まれる。ジャンヌは普段すましてはいるが、何かとポンコツなところがあるよな……

「おほおほ♡にゃんらああああ♡ユーリ♡お前、わらひに淫紋をきざんだなあああ♡」

へその下に淫紋を刻まれた影響で体の感度が上がったジャンヌが、今までよりも大きなあえぎ声を出しながら俺に尋ねてくる。さすがAランク冒険者だけあって、こうい

う知識には詳しいようだ

「嫌なら消そうか？」

「い、嫌なわけじゃないいいいい♡らつて、きもひいんらおおおお♡」

ぬちゅ♡ぬちゅ♡

より、柔らかくなったジャンヌのお尻の穴にチンポを出し入れしながら俺は彼女の様子を伺うが、どうやら特に嫌なわけではないらしい。俺は安心して、ジャンヌのアナルでセックスを続けていくことにする

「おほっ♡おほっ♡ユーリい、……おまんこお♡……おまんこにしてえ♡……もうアナルはいやらあ♡」

「だめだ。ジャンヌはアナルで堕とす」

「そんなにやあ♡わらひ、アナルで墮とされちやうによおおお♡」

ぬぼ♡ぬぼ♡

「あはあ♡あな、あなりゆうう♡…すつ♡い気持ちいいいい♡」

淫紋を刻まれて感度が何倍にもなったジャンヌのアナルをめぐりあげながら、俺は彼女を墮とすためにピストン運動を続けていく。さて、そろそろジャンヌの尻の中にアナル中出しをキメるか

「ジャンヌ、出すよ」

「んひいいいい♡ユーリのせーし、ちようらあい♡」

俺から気持ちいい射精を期待してヒクヒクと動き出したジャンヌの尻の穴に、俺はたっぷりと精液を注いだ。背面座位の状態で彼女の体を腕ごとギユツと抱きしめながら、ジャンヌの体を絶対に俺から逃さないように固定して、俺は彼女のアナルに次々と

精液を注ぎ込んでいく

「あっ♡あっ♡あっ♡」

お尻の中に大量の俺の精液を注がれ始めたジャンヌの淫紋が少しだけピンク色に染まった。ジャンヌは俺の腕の中で心地よさそうに体を震わせながら、淫紋の影響で強烈な快感を覚えるようになった俺の精液を体内に注がれ続ける、アナル中出しを気持ちよく味わっている

そして俺は調教に一ヶ月もの時間をかけたジャンヌを、このままどっぶりとした中出しの世界へと引きずり込んでいくことにした。彼女には葛藤の暇も与えない

俺はさらに続けて、彼女の直腸内に大量の精液を注いでいく

「あはあ♡これえ、だめになるやつらあ……♡」

アナルで味わう気持ちいい射精にうっとりとし始めたジャンヌが、ついに心を墮落さ

せた。俺はそんな彼女の様子を伺いながらも、さらに彼女のお尻の中へと精液を注ぎ込む

「らされてるう♡いっぱいひいいい、お腹の中に、らされちゃってるのお♡これ、……きもひいいひいいひいい♡」

ホースから水があふれるようにまで勢いを増した俺の精液を注がれ続けたジャンヌのお腹が、たぶんたぶんになり始めた。文字通り俺の精液でお腹いっぱいになったジャンヌは、満足そうに俺とのアナルセックスを楽しんでいる

「……ら、らめえ♡」

しかし満足そうな彼女を見ても、ジャンヌのお尻の中に注がれる俺の精液は止まらなかつた。俺のチンポから溢れ出る精液が、さらに量を増していく

「ユーリい、お、お腹があ、破裂しちゃうのらあ♡」

大量の精液を注がれてしまったジャンヌのお腹が、水風船のようにぷつくらと膨らんでいった。しかし俺はそれでも止まらずに、そのぷつくらと膨らんでしまったジャンヌのお腹の中にさらに精液を注ぎ込んでいく。大量の精液を体内に注がれた彼女の淫紋は、急速にピンク色に変わり始めていた

「おほお♡おハイハイハイ♡」

多量に注がれすぎてジャンヌの直腸内にとどまりきれなかった俺の精液が、彼女の大腸を上り小腸へと逆流をしていく。ジャンヌのお腹は、俺の精液でさらにいやらしく膨らんでいった

事前にプルに頼んで、彼女の消化器官を綺麗に掃除してもらっているから衛生面でも大丈夫だ。俺はジャンヌの体にさらに精液を注ぎ、お尻から大量の精液を逆流させていく

「あへえ♡」

ついに俺の精液はアナルから彼女の胃にまで到達し、ジャンヌがえづき出した。しかし淫紋の影響により俺の精液に快楽を覚える体に変えられてしまった彼女は、体中を駆け回る強烈な快感に耐えることに必死になっている

体の中を大量に俺の精液で満たされたジャンヌの淫紋が、もうすぐ完成しそうだ

「ユ、ユーリい♡もう、れちやうからああ♡」

ジャンヌが俺に懇願するがもう遅い。俺はアナルから彼女のダムを決壊させようと、さらに大量の精液を彼女のお尻の穴に注ぎ込む

「のぼって、くりゆう♡」

ジャンヌはお腹の中から昇ってくる気持ちよくて甘美な液体を必死に外に吐き出さないよう、懸命に堪えている

「おほっ♡おほほほお♡」

ジャンヌが顔を上にそむけ最後の抵抗を試みるが、両腕ごと後ろから俺に体を抱きかかえられてしまっている彼女はもう何もできない。そして彼女の口から俺の精液が溢れ出したと同時に、淫紋が完成した

♡ぽぽぽぽぽぽぽ♡

口から湧き水のように俺の精液を垂れ流しながら、ジャンヌがイッた。彼女は体を気持ちよさそうにビクンビクンと痙攣させながら、恍惚として天井を見上げている。彼女の口の中から溢れ出した俺の精液がそこらじゅうに撒き散らされ、ベッドのシーツに大きなシミを作っていく

♡ぽ♡♡ぽ♡

「せ、精液で、溺れりゅ……♡」

ジャンヌが喉に俺の精液を張り付かせながら、溺れたように声を出す。しかし体内が

俺の精液まみれになったジャンヌの体には、淫紋の影響により強烈な快楽の渦が巻き起こっていた。彼女は長い時間、オーガズムに達し続けている

にゅぽん♡

「おほおほおほおほおほ♡」

どぼ♡どぼ♡どぼ♡どぼ♡どぼ♡どぼ♡

淫紋の完成を見届けた俺がジャンヌのアナルからペニスを抜き取ると、崩れ落ちるようにベッドにうつ伏せになったジャンヌのポツカリと空いたままのアナルから、俺の精液が湯水のように溢れ出してきた。その刺激によってジャンヌはまたイッてしまったようだ

しばらくの間ジャンヌは、口とアナルから俺の精液を垂れ流し続けた。ジャンヌの体中から撒き散らされた俺の精液で、辺り一面がドロドロに汚れてしまっている

「あはあ……♡」

ベッドの上うつ伏せになったジャンヌは、精も根も尽き果てたかのように倒れたまま動かなかった。俺は体中の穴という穴が精液まみれになったジャンヌの尻を持ち上げると、唯一まだ俺の精液が注がれていない彼女の穴を満たすべく、おまんこにペニスをあてがう。そして後ろから一気に、ジャンヌの膣内に俺のチンポを挿入した

にゆるううううん♡

「んほおおおおおおお♡」

一ヶ月ぶりのおまんこセックスだったにも関わらず、前戯もしていないジャンヌのおまんこには俺のチンポがいとも簡単に入ってしまう。幾度も俺とセックスを重ねたジャンヌのおまんこは俺のチンポの形に変わりきっており、しっかりと俺のチンポを記憶し続けていたようだ。ジャンヌは立派に、俺のおちんぽケースとしての役目を果たしている

「おっ♡おっ♡まんこらめえええ♡」

ジャンヌはうつ伏せの体勢で脱力して動けぬまま、精液まみれの体で必死によがり狂っていた。しかし俺はそんな彼女を気にせず、久しぶりに挿入をするジャンヌの鍛え上げられた締めりのいいおまんこの感触を、チンポで楽しむことにする。ヌチュヌチュとおまんこに太いペニスを出し入れする気持ちいい音が、ジャンヌの嬌声とともに部屋中に響き渡っていた

「おっ♡おっ♡ほっ♡おっ♡ほおっ♡」

ジャンヌが獣のような叫び声を上げながら、久しぶりのおまんこで味わうオーガズムを楽しんでいる。俺はそんな彼女にとびっきりの快楽をプレゼントするべく、一ヶ月ぶりの精液を彼女のおまんこに注いであげた

♡♡♡♡♡

「あっへえええええええええ♡」

大好きになった精液を久しぶりに子宮に注がれたジャンヌが、情けないアへ声を上げながらイッた。余程気持ち良かったのだろう。ジャンヌはとてつもなく長い時間、激しいオーガズムに達し続けていた

「わらひはもう、らめらあ……♡」

ベッドにうつ伏せのまま尻だけを突き上げた状態でジャンヌがつぶやく。しかし彼女のその言葉を聞いても、俺はまだまだピストン運動を止めなかった

ぬちゅ♡ぬちゅ♡

「ち、ちんぽでえ、ちんぽでころしやれりゆううう♡」

あえぎ始めたジャンヌのおまんこが再びオーガズムに達しようとヒクヒクと蠢き始めたところで、俺は寝取りチンポのスキルを使うと龟头を大きく膨らませ、彼女の膣肉を人間のチンポでは到底不可能なくらい強くゴリゴリと抉り取っていく

彼女の膣壁を寝取りチンポで擦り上げる度に、ジャンヌのおまんこからは信じられないくらいに大量の愛液が分泌されてきた

「んっほおおおおおおおおおっ♡」

ジャンヌがおまんこから大量の潮を撒き散らしながらイッた。もう部屋中が俺たちの淫液まみれだ。俺は今日の彼女に最後のトドメを刺すべく、膣内へのピストン運動をもっと深くにまで早めていく

「ジャンヌ、今日からお前は俺専用のチンポケースだ！いいな！」

「はひーなりまひゅうう！ユーリのおちんぽけーひゅに、なりまひゅうう♡」

口からアナルからおまんこから俺の精液を大量に撒き散らしたジャンヌが、俺のチンポにあえぎながら肯定をする。彼女のその言葉を聞いた俺は安心して彼女の体内にトドメの精液を注いだ。彼女の膣内が今日最大のオーガズムで収縮し始めると、中出しを

続ける俺のチンポを愛おしそうに包み込んできゆうきゆうと吸い付いてくる

「あはあ♡あつはあ♡あはああああ♡ユーリい♡これ、…：すつ♡い♡」

ジャンヌが快楽に心までどっぷりと浸かりこんだ暗い声で嬌声を上げ始めた。うつ伏せのままベッドにヘコヘコと腰を押し付けるようにして気持ちよくイッているジャンヌのおまんこに俺はチンポを深く挿し込むと、彼女の子宮を俺の精液で満たしている。これでジャンヌも堕ちた。彼女は一生、俺のおちんぽケースとして過ごすことになる。

気持ちよさそうに体を小刻みに震わしているジャンヌのおまんこに、俺は精液を出したばかりのチンポをさらにねっとりとし出し入れしていく。彼女のおまんこから俺のチンポを抜き取る度に、俺の精液とジャンヌの愛液が混じり合ったみだらな液体がヌチャヌチャと糸を引いていた

限界を迎えたジャンヌのおまんこはヒクついたまま蠢き続け、彼女はイクのを止められなくなっていた

とっふ♡とっふ♡

「——ッあ、はああ♡」

そしてさらに追い打ちの中出しをキメた瞬間に、ジャンヌは力尽きたように気を失ってしまふ。これで調教は完了だ。俺はグチャグチャになった彼女のおまんこからチンポを抜き取ると、精液まみれになつてしまつた彼女の体にクリーンの魔法をかけ、綺麗にしてあげた後に布団をかける

そろそろこの街を出て旅に出よう。俺はすやすやと眠っているジャンヌの髪をやさしく撫でながら、それまでにすることを考えていた

旅立ち

ジャンヌに淫紋を刻んでから数日が経ち、無事、リゼさんとリンダさんにも淫紋を刻み終えた俺はファーストの街を出て旅立とうと思う

淫紋を刻んだ彼女たちとは一旦お別れだ。彼女たちには街に残ってもらい、ダンジョンを作った後に呼び寄せることにする

護衛としてプルの分身を彼女たちに渡した。あとは魔力を使うことで離れた人とも会話ができる水晶も渡しておく。これで意思疎通は大丈夫だ

彼女たちに渡したプルの分体は人差し指くらいの大きさで、普段は彼女たちのおまんこに身を潜めてこっそりと、彼女たちを守っている

たまに振動をしたり、俺の精液と同じ成分を体から分泌しておまんこを俺の精液漬け

にするから、彼女たちの性欲もある程度満たすことが出来る

まあファーストの街には転移の魔法ですぐに戻ってこられるからそれほど心配することもないが

さて、これからの俺にはどんな異世界生活が待っているのか

旅立って一週間ほどして、俺はとある村にたどり着くことになる

ガオー族という狼人達の集落だ。なんとこの村ではもうすぐお祭りがあるらしい

お祭りといっても小さな集落での話なので、何かしらの儀式をした後に宴会をする程度だが

ちなみにこの世界の獣人は耳と尻尾がついているだけで、他は人間と同じである

そしてこの村では新たな出会いがあった

「ユーリ、この村の居心地はどうかかな？」

ルルルウという少女だ。真つ白な髪の毛と狼の耳にきれいな緑色の瞳をしていて、推定Gカップ程の巨乳を持ち合わせている

彼女はいわゆる先祖返りというやつで、白い髪色の狼人族は稀であるらしい。うん。彼女も俺の仲間に加えたい

俺は彼女を仲間勧誘するために、ガオー族の村にしばらく滞在してみることにした。とりあえず、村を困らせているというモンスターを退治するか。こういう所の信頼が大切だからな

俺はルルルウを誘うと近くの森にモンスター退治に出かける。ドギャンボアという大型のイノシシのようなモンスターが畑を荒らし回っているらしい

無事にモンスターを退治し終えた俺達は村人たちから大歓迎をされた。そして村長から俺は村への滞在の許可をもらう

「やったな！ユーリ！」

モンスター退治の中でルルルウとも絆が芽生えた。後はどうやって彼女と肉体関係を持ち、心を墮としていくかだ

ルルルウを観察していると、どうやら彼女には意中の相手がいるようだ。乙女のような態度で簡単に分かる

俺はルルルウを墮とすべく、ことの成り行きを伺うことにした

狼人族の村

村人視点

「えいつ！えいつ！」

僕の名前はポッコ。狼人族だ。僕は立派な戦士になるために、今日もこうしてトレーニングをしている

「うん。いい太刀筋だ」

そして彼女の名前はルルウ。族長の娘で先祖返りをした白い毛並みと強い体を持つ。僕の1歳年上のやさしい彼女は、こうして毎日のように僕に訓練をつけてくれた

僕は密かにルルルウに恋心をいだいており、彼女との訓練の時間をいつも楽しみにしている。いつか僕は最強の戦士になりルルルウに告白したい。そんなことを妄想していた

「ポッコはこれから強くなれるよ」

「ありがとうございます！」

そしてこの村には一人、旅人が滞在している。彼の名前はユーリさん。彼も僕の1つ年上で、すつごく強い

村の大人たちでも手を焼いていたドギャンボアをなんと、ルルルウとパーティーを組みたつた二人で倒してしまったのだ

これには村人みんなが大歓迎だった。近頃、ドギャンボアには作物を荒らされており、みんな困っていたからだ

いつか僕もユーリさんやルルルウみたいに強くなりたい。そしてルルルウと結ばれるんだ。僕はそれを目標にして、今日も訓練を頑張る

……。

……。

……。

「えいっ！えいっ！」

今日も僕はこうしてトレーニングをしている。いつものように、ルルルウも僕の訓練を見てくれていた

でもいつもと違うのは、今日のルルルウは何だか熱っぽい感じだ。彼女は瞳を少しだけトロンとさせていて、頬も心なしか火照っている

そして、彼女の体からは発情したメスの臭いがしていた。僕は他の狼人族より鼻が強く、匂いに敏感なのだ

でも僕はそんなことを彼女に指摘しない。さすがにデリカシーがなさすぎる。でも、発情しちゃったルルルウとエッチな関係になっちゃうつても男の夢かもしれないな。いや。だめだ、僕！しつかりしろ！

「ルルルウ。体調が悪そうだけど大丈夫？」

「ああ、すまない。なんだか今日は熱っぽくてな。ユーリが回復魔法を使えるらしいから、彼に頼んでみるよ」

そう言うのとルルルウはポーつとした顔のまま、村の外れにあるユーリが滞在している空き家へと向かっていく

僕は一瞬不安に襲われたが、さすがにルルルウがほぼ見えず知らずの旅の人に肌を許すなんてあり得ない。彼女は多くの狼人族のアタックを断ってきた鉄壁の女性なのだ

そういえばもうすぐ村の祭りがある。祭りの日に結ばれた恋人は幸せになれる。そんな言い伝えが古くからあり、祭りの日には数多くのカップルが誕生していた

「今年は思い切って、ルルルウをデートに誘ってみようかな。なんてね」

　　僕は淡い恋心を抱きながら、今日も訓練を続けていく

……。

……。

……。

「えいつ！えいつ！」

　　今日はルルルウが訓練に来なかった。まあ彼女にも用事があるのだろう。今日の僕

は一人で寂しく訓練をすることにする

「ふー」

一通り訓練を終えて家に帰る途中、ポーっとした顔で歩くルルルウを見かける。彼女に出会って嬉しくなった僕がルルルウに話しかけると、今日も彼女は発情した体臭をまとわせながら、頬を赤く火照らせていた

「ルルルウ、大丈夫？」

「あ、ああ……。昨日はユーリに回復魔法を掛けてもらったらだいぶ体調が良くなったから、今からまた彼にお願いをしに行くところなんだ」

発情期というものは獣人の女性にとつては大変なものらしい。そう聞いたことがある。僕は男だから分らないけど、そういうものなんだと自分を納得させる

「ルルルウにはいつもお世話になってるから、何かあったらいつでも僕に頼ってよ」

「ありがとう。ポツコは頼もしいな」

ルルルウに頼もしいとお世辞を言われた僕は舞い上がりながら家に帰る。やっぱり、今年の祭りはルルルウをデートに誘おう。勇気を出すんだ。僕に一つ目標が出来た

「こうしちゃいられないな！トレーニングを増やそう！」

さらに強くなるために僕は走り込みをすることにする。家に帰った僕はまたすぐに部屋を飛び出すと、トレーニングを再開した

長い時間村の中の走り回りへとへとになった頃、僕は村の外れにあるユーリさんが滞在している空き家の近くへとたどり着く

「ユーリさんいるかな？」

僕は彼に挨拶をしようと家の扉をノックする。するとユーリさんが家の中から出て

きた

「やあポツコ。どうしたの？」

「いや、ちよつと近くを通つたから挨拶でもと……」

「そうなんだ。ありがとう！」

ユーリさんと話をしてしていると、彼が滞在している家の中からルルルウの強い体臭が風
にのつて流れてくる。先程までルルルウがこの家に滞在をしていた証だ

僕の部屋にも、いつかルルルウの臭いが染み付く関係になればいいなあ。そんなこ
とを考えながら、僕はユーリさんとの会話を終え、家路についた

……。

……。

……。

もう三日も連続でルルルウが訓練に来ていない。彼女の体調は思わしくないようだ。心配になった僕はルルルウの家にお見舞いに行くことにする

訓練を終えた僕がルルルウの家を尋ねると、彼女は出かけた後のようだった。体調が悪いわけではないらしい

三日後には村の祭りが控えているから、ルルルウは色々と準備で忙しいのかもしれない。そういえば、僕も親に今日は早く帰ってこいと言われてたっけ

急いで家に帰る途中、ルルルウとすれ違う。今日も彼女は頬を火照らせていた。最近の彼女はいつもポツツとしていて。ルルルウに話を聞くと、やはり彼女は祭りの準備で忙しいらしい

最近ルルルウとはすれ違いが増えていることを寂しく思いながらも、僕も祭りの準備

を手伝うために家に帰る。早く祭りの日が来ないかな。そしてルルルウをデートに誘うんだ。僕は決意を新たにしたら

……。

……。

……。

「えいつ！えいつ！」

村の祭りを翌日に控えた日に、今日も僕は剣のトレーニングをしていた。今日もルルルウは訓練に来ていない。でもいいんだ。明日僕はルルルウをデートに誘う。彼女に会えない日々が、僕に勇気を出させてくれた

「明日、絶対にルルルウをデートに誘うぞ！」

僕の剣を握る力が強くなる。僕は彼女に似合う男になるために、今日も剣を振るつた

……。

……。

……。

そして祭りの日が来た。僕は浮足立つ村の中でキョロキョロとしながらルルルウを探した。祭りの日に乗じて彼女をデートに誘おうとしている何人もの村の男達が、ルルルウを探しているのが分かる

しかし僕がどれだけ村の中を探しても、ルルルウは見つからなかった。彼女を探しているうちに日が暮れて、ついには夜になる。それでもルルルウは見つからない

もしかしてルルルウは他の男と……。そんな不安に押しつぶされながらも、彼女を探すことを諦めた僕はトボトボと家に帰ることにした。もうすぐ深夜になってしまう。

流石にタイムリミットだ

明日になったらまた、いつものように彼女は僕の訓練を見に来てくれる。そうしたらまた元通りの関係だ。そう信じて

……。

……。

……。

「さようなら。ポツ」

翌日、ルルルウはユーリとともに村から旅立っていった。昨夜、彼女に何があったのか。僕には分からない

いつものように訓練をしている僕に旅立ちの挨拶をしにきてくれたルルルウの股間

からは、ユーリさんの体臭が漂っていた

ルルルウ墮とし♡

「ふーん。ルルルウはポッコが好きなんだ？」

俺は今、この村に滞在をしている家でルルルウの恋愛相談を受けていた。どうも彼女は自分の女としての魅力に自信を持ってないでいるようだ。幼少期から女性らしいことを避けて戦いのトレーニングばかりに明け暮れていたことが、彼女の心にコンプレックスを作ってしまった

でもそんな自分をやさしく扱ってくれ、さらには強くなるために毎日ひたむきに剣の訓練を重ねる姿を見ているうちに、ルルルウはポッコに惚れてしまったらしい

でも自分にできることは戦いのことだけだからと、いつもポッコの訓練を見てあげることしか出来ずにいるルルルウは、これからどうやって二人の関係を進めていいのかが分からないようだった

一緒にモンスターを討伐したことで打ち解け、旅人ということで秘密を打ち明けても後腐れのない俺をルルルウは相談相手として選んだ

「ルルルウが女の子として魅力的になれる方法を知ってるけど、試してみる?」

「本当か!？」

俺はルルルウにとある提案をする。俺の言葉に彼女は変異種特有の真っ白なショートカットに緑色の瞳を輝かせて、嬉しそうに身を乗り出した

「俺の故郷に伝わる技術で、少し恥ずかしい方法なだけどいいかな?」

「恥ずかしいとは何だ?」

「体にあるツボというエネルギーのたまり場を刺激することで体内のマナの流れを変えて、その結果、体質を変えろという考えなんだ。だからそのためには、俺にルルルウの

体を触らせてもらう必要がある。ルルルウがそれでも大丈夫なら、俺がルルルウを女の子らしくしてあげられるよ」

「うーん……」

すこし悩んでいたルルルウだが、これがポッコのためになること、少しくらい恥ずかしいことを経験したほうが女の子らしくなれるという俺の説得に応じ、彼女は俺のマッサージを受けることになった

「よろしく頼む……」

裸になって恥ずかしそうにベッドの上でうつ伏せに寝ているルルルウに、俺は薬液創造スキルで作り出した獣人が発情する成分をたっぷり入れたオイルを使って、やさしく彼女の背中をマッサージしていく。始めは心地よさそうに俺のマッサージを受けていたルルルウの吐息には徐々に艶が混じり始め、媚薬により発情をしまった彼女の頬が赤く火照っていった

「これでルルルウは女の子らしくなったよ」

「そ、そうか……」

背中に俺のマツサージを受けたルルルウがベッドの上うつ伏せになったまま、恥ずかしそうに体をモジモジさせている。そりや当然だ。獣人が発情するオイルをたっぷり使ったのだから、彼女の体は今、ムラムラして仕方がなくなっているはずだ

「もしかしてルルルウは、体がムズムズしてつらいのかな？」

「……う、うん」

俺の質問に恥ずかしそうに俯きながら体の状態を教えてくださいるルルルウに、俺は追い打ちをかけるためにさらなる提案をする

「そのムズムズはルルルウの体が今、女の子らしく変わっている証拠だよ。トレーニングの後に体が重くなるのと同じなんだ」

「そうなのか……」

「よかつたら、そのムズムズをすつきりすることが出来るマッサージもあるけどしてあげようか？もう少しルルルの体の恥ずかしい部分を触らなくちやいけないけど」

「は、恥ずかしい部分とは何だ？」

「今のマッサージはルルルの背中にマッサージをしたけど、今度のマッサージは体の前の方を触るんだ。そうすると俺がルルルの裸を見ることになってしまうけど、それでもいいのなら今からルルルに気持ちが悪くなるマッサージをしてあげられるよ」

「そ、それは……」

俺に裸を見せることに抵抗を見せていたルルルであるが、このマッサージと先程のマッサージを合わせることでよりルルルの体を女の子らしくすることが出来るとい

う俺の言葉に釣られ、彼女は俺のマッサージをさらに受けることになった

「その、恥ずかしいからあまり見ないでくれ……」

俺の目の前には、裸になったルルルウが恥ずかしそうに顔を背けながらベッドの上で仰向けになって寝ている。鍛え上げられたルルルウの体は程よく引き締まっており腹筋が割れていた。仰向けになっても、推定Gカップ程の彼女の胸は垂れずにぷるんと張りのある形を保っている

「じゃあ、マッサージをしていくね」

「……………うん」

恥ずかしそうに俺から顔をそらしたままのルルルウに、俺は媚薬入りオイルをたっぷり使ってさらに彼女の体にマッサージを重ねていく。始めは鎖骨や脇腹など当たり障りのない所を責め、少しずつ脇の下やおっぱいの下側ギリギリに両手を移しながら、ルルルウの体に媚薬入りオイルを塗り込んでいく。俺に体をマッサージをされる度に、

ルルルウの吐息が切なく濡れていった

「……………あつ♡」

ついに俺の手がルルルウのおっぱいにまで伸びる。体が発情しきってしまった彼女は心の抵抗を失い、俺におっぱいを触られることをそのまま受け入れていた。これはマッサージだ。彼女は今、自分にそう言い聞かせている

俺はそんなルルルウの心を安心させる言葉で、これからがマッサージの大切な所、女性にとって大切な部分を触ることルルルウの体がもつと女らしくなるといふ説明をして彼女に言い訳を与え、少しずつルルルウの意識から俺に秘部を触らせることへの忌避感を溶かしていった

むにゆ♡むにゆ♡

「んふう……………♡あつ……………♡」

今もルルルウは恥ずかしそうに両腕で顔を覆いながら目を閉じ、ギュツと口をつぐんで俺に胸を揉まれて続けている。彼女のおっぱいはもっちりとしていて柔らかく、俺がルルルウの乳房に両手を埋めると、彼女の巨乳がふにゆふにゆと包み込むようにして俺の指に吸い付いてきた。最高の手触りだ

さて、これでルルルウの胸を初めて揉んだ男の座は手に入れた。次は彼女のアソコを責めることにしよう

「そ、そこはあ?！」

俺の手がルルルウの股間に伸びた瞬間に彼女は強い抵抗を示すが、俺はさらに彼女の心を押しのけていく

「ここにツボが一番効くんだよ。それに、ルルルウのムズムズをスッキリさせるためにはここを触る必要があるんだ。一緒にモンスターを討伐した仲間じゃないか。俺を信じてよ? ルルルウ」

「……分かった」

意を決した様子のルルルウが、恥ずかしさで真つ赤に火照った顔を両腕で隠しながら、俺に自分の股間を触らせる許可を出した。俺は彼女に許可をもらうと早速、無遠慮にルルルウの割れ目を弄くっていく

「んふう♡あんっ♡はああ♡……っ♡」

ルルルウが初めての快感に驚くようにして体をくねくねとよじらせながら、気持ちよさそうに声を出し始めた。俺は彼女の陰唇をくばあと広げるようにして媚薬入りオイルをたっぷりとルルルウのおまんこに塗り込んでいく。彼女の割れ目には、媚薬オイルではないヌルヌルも広がっていた

「ルルルウは自分でアソコを触ったりはしないの？」

「そんなことお♡は、はしたないじゃないかあ♡あっ♡」

どうやら今日が、ルルルウが初めてクリトリスを触られる気持ちよさを知った日のようだ。俺は媚薬入りオイルを彼女の股間にたっぷり塗りと塗り込みながら、体が発情して固く勃起したルルルウのクリトリスをクニクニとやさしく指でこねていく

「ユ、ユーリい。らめえ♡……なにかきちやう♡」

ルルルウのクリトリスを繊細にこねくり回していると、とろとろの愛液がこぼれ始めた彼女の膣口がヒクヒクと収縮運動を繰り返すのが分かった。どうやらルルルウはもうすぐイクようだ。多分、彼女にとって生まれて初めてのオーガズムだろう。これで俺はルルルウの初イキもゲットできたことになる

「それはイクって言うんだよ。イクとルルルウの体はムズムズが取れてスツキリ出来るから、俺に身を任せてごらん。イクときはちゃんとイクって言うと、ルルルウはもつと気持ちよくなれるよ」

俺が彼女にそう教えると、素直な彼女はベッドのシーツを両手でギュツと握りしめ、初イキに向かって両脚をピンと伸ばして気持ちよさそうに体をいきみだした。俺はそ

んなルルルウをやさしいオーガズムに導くべく、ゆっくり心地よく、彼女のクリトリスを指で安らかにこね回していく

「…………うん。ユーリい♡…………イ、イクう♡あつ♡あつ♡…………イクう♡…………イクつ♡……イクつ♡イクつ♡イクつ♡イクつ♡」

ビクン♡ビクン♡

ルルルウが鍛え上げられた体を少女のようにか弱くすくませながら、心地よさそうにイッた。彼女は初めて味わうオーガズムの気持ちよさに瞳をトロンと濁らせ、呆けたように天井を見上げている。俺がルルルウの体に媚薬をたっぷり塗り込んだから、彼女の快感はなおさらだろう

これでルルルウは、俺に体を気持ちよくされたことを一生忘れられなくなった。なにせ初めての経験が、彼女にとってこれからの基準になるからだ

「どうルルルウ？気持ちよかったですでしょう？このマッサージを続けていけば、ルルルウ

の体はとっても女の子らしくなれるからね。またマッサージを受けたくなったら、いつでもこの家においでよ」

「……うん♡」

俺の言葉に、いつもの戦士の顔ではなく、乙女の顔になったルルルウが瞳を潤ませながら肯定を示す

「それにこのマッサージを受けると頭も心もスッキリして、いいストレス発散になるからさ。このことは俺とルルルウだけの秘密にすれば、何も恥ずかしいことは無いから大丈夫だよ。俺が旅に出ちゃえば誰にもバレない。村のみんなにバレなければ、ルルルウも傷つくことはないし」

「そうかな……」

ルルルウの心が、自分がはしたくないことをしてしまったという後悔と罪悪感、こんなにも体が興奮して気持ちよくなれること、秘密のマッサージを受ければ誰にもバレるこ

となく女らしくなって、長年の悩みであったコンプレックスを解消できること、女らしくなれば自分に自信を持つてポッコに恋のアタックが出来ること、それらの理性と誘惑の間で激しく揺れていた

「ルルルウが気が向いたときでいいからさ。でもルルルウにとつて一番いいのは、俺よりもポッコと一緒にいることだよ。それは忘れちゃダメだからね。それじゃまた！」

そう言う俺はそそくさと彼女を家から送り出す。今日はルルルウをこのまま家に帰すことにした。彼女の心を墮とすにもう少し時間が必要だ。さて、ルルルウの心はこれからどう傾いていくのか……

ルルルウの調教♡

「あつ♡あつ♡あつ……♡」

俺がルルルウの体に媚薬オイルでマッサージをした次の日、彼女は熱に浮かされたように赤く火照った頬で再び、俺の滞在している家でマッサージを受けていた。ルルルウは日常生活を送っていても発情した体がムズムズし続けてしまい、我慢が出来なかったようだ

「今日はポッコと会った時どうだった？」

「あつ……♡いつもと違ってえ♡ポッコは照れたみたいにな、……んっ♡モジモジしてたあ……♡おっ♡」

「マッサージの効果が出てるってことだね。じゃあ今日も、ルルルウはいっぱい気持ち

よくなつてもっと女らしくなろうね」

「……うん♡……あつ♡」

ルルルウと会話をしながら俺は今日も媚薬オイルをたつぷりと使い、彼女に性感マッサージを施していく。本日は二回目のマッサージということもあり、彼女の心からは緊張が少し解けていた

さらに次の日になると、ルルルウは先日のように夕方ではなく昼過ぎになつてから俺の家を訪れる。彼女の発情した体はさらにムズムズが我慢できなくなつてきており、ルルルウはもっと早くに俺のマッサージを受けたくなつたようだった

「今日は早く来てくれたから、いつもよりマッサージの種類を増やすね。もっと早い時間に来てくれれば、それだけ沢山マッサージをしてあげられるよ」

俺は昨日より早い時間に来たルルルウを快く室内に迎え入れると、彼女にするマッサージの種類を増やしてあげることにする。ルルルウがいつもより早い時間に来たこ

とに対して報酬を与えることで、彼女の心に俺への依存心を植え付けていくのだ

♡♡♡♡♡

「くふう……♡あつ……♡」

今日はルルルウに新しくクンニをされる快感を覚えてもらう。発情しきつた彼女のおまんこからはムワリとした男を夢中にさせる香りが漂っており、俺はそんなルルルウの愛液とおまんこを舌で美味しく味わっていった

「クンニ、気持ちいい？」

「……うん♡」

ルルルウも敏感な部分を俺の生温かい舌で舐められるという新しい快感に興奮し、気持ちよくなってから家路につく

次の日になり、なんとルルルウは朝から俺のマッサージを受けに来た。彼女は朝一番で俺のマッサージを受けに来たことが恥ずかしいのか、ドアの前で恥ずかしそうに内股でモジモジとしながら目を伏せている。彼女が歴戦の戦士であるということが嘘のようだ

俺は家の前で居心地を悪くしているルルルウを快く室内に迎え入れると、歓迎の言葉を掛けることで彼女の羞恥心と罪悪感をどんどん壊していく。俺が思っていたよりも早く、ルルルウは俺との行為にハマり始めていた

「じゃあ今日は、ルルルウのアソコの中に指を挿れるよ」

「そ、それは……」

未来の旦那様のためにとアソコの中に指を入れられることを拒否していたルルルウだが、アソコの中にはGスポットという押すことで女性が美しくなれるツボがあると、それによりルルルウの体もつと美しくなれるという俺の弁を信じ、ついに彼女は俺に膣内を指で触らせる許可を出してしまう

……にゅん♡

クニユ♡クニユ♡

「……あつ♡……んっ♡……っ♡……っ♡」

俺はルルルウのおまんこの人差し指と中指を伸ばしながら入れ、二本の指を折り曲げて彼女の膣壁をグニユグニユと揺らしながら、ルルルウの気持ち良い部分を探し責めていく。獣人族は人族より体温が高いのか、彼女のおまんこの中は熱いくらいに熱を持っていて、発情してとろとろになったルルルウの膣壁が俺の指にきゅうきゅうと吸い付いてきた

「どう？気持ちいい？」

「あつ♡はあ……♡う、うん♡あはあ♡」

俺の指でおまんこをほじくられながらルルルウはベッドの上で股を開き、恥ずかしそうに右手で口元を抑えながら身をくねくねとよじらせている。俺はそんな彼女の意地悪な質問をすることで、ルルルウの心から罪悪感を麻痺させていくことにした

「ルルルウ。ポッコに何か言いたいことはある?」

「い、言わないでえ………」

クニユ♡クニユ♡

俺はルルルウのおまんこに手マンを続けながら、彼女の心を墮落させていく。恥よりも快楽を選ばせることで、ルルルウの心をこれからドロドロに汚してしまうのだ

「教えてくれないと、このマッサージやめちゃうよ?」

「いやあ………♡あつ………♡んっ………」

……。

……。

……。

しばらくの間、心の葛藤に悩んでいた様子のルルルウだが、ついに彼女の心は快楽を選んてしまう。これでルルルウの心にはくさびが打ち込まれた。ここから彼女の心は急速に堕ちていく

「……ポ、ポツコお♡あつ……♡これえ……♡き、気持ちいいよお♡」

恥ずかしそうにか細く、口元を隠したルルルウが小さな声でつぶやいた。でも俺は彼女の心を責めるのを止めない。ルルルウの心が、これからどんどん壊れていくからだ

「これじゃ分からないから、ちゃんと教えて？」

「くう……あつ……んっ……っ♡」

再びルルウの心に葛藤が生まれていく。快樂か、はずかしさか。俺は彼女のおまんこにやさしい手マンを続けながら、ルルウの心が答えを出すのを静かに待つことした。彼女が堕ちるまでもう少しだ

……。

……。

……。

「ユ、ユーリの指にアソコを触られるの、気持ちいい……♡」

意を決した様子のルルウが頬を羞恥で真っ赤に染めながら、快樂のためにいやらしい言葉を口にすることを選んだ。彼女の瞳は強すぎる恥の感情でうるうると涙目になってしまっている

ルルルウの心には無事に、俺に体を気持ちよくしてもらうために他のことを犠牲にするという行動パターンが刻まれた。これは彼女の無意識の癖になり、これからルルルウの思考を変えていくことになる

「もつとはつきり、それをポッコに伝えてみて。そうしてくれたらルルルウのこと、すつごく気持ちよくしてあげるから」

「そ、そんなあ……♡んくう……♡あつ♡……つ♡」

俺に体を気持ちよくしてもらうためには何でもしてしまうように、こうしてルルルウの心を調教していく。少しずつ彼女の心のタガが外れていくのが分かった。そしてついに、ルルルウは大きな声でポッコへのメッセージを伝えだす。彼女はもつと、俺に手マンをしてもらいたいからだ

「ポッコお♡ユーリの指でおまんこほじくられるのお♡……すつごく気持ちいいのお♡……ごめんねえ♡ポッコお……♡ごめんねえ……♡♡」

快樂のために恥ずかしい言葉を言い切ったルルルウの心にいやしさが生まれる。天井を見上げながらうつとりと俺の手マンを楽しんでいる彼女の緑色のきれいな瞳が、仄暗い快感で薄く濁った。俺はそんなルルルウにご褒美をあげることにする

「ちゃんと云えたご褒美に、ルルルウのこといっぱいイカせてあげるね」

「うん♡いっぱいイカせてえ♡……あつ♡あつ♡あつ♡……そこお♡好き♡♡」

グチュ♡グチュ♡グチュ♡グチュ♡グチュ♡

「あつ♡あつ♡あつ♡ユーリい、これえ♡……すっごい♡すっごいのお♡」

俺がルルルウにおまんこにねじ込んだ二本の指をぐねぐねと折り曲げ彼女のGスポットを刺激してあげると、ルルルウの膣壁が快樂できゅつと強く締まり、彼女のおまんこの奥からはとろとろに濁った愛液がどばつと溢れ出てくる。ルルルウは気持ちよさそうに体を震わせながら声を上げ、Gスポットを俺の指で押される度に体に昇ってく

ルルルウは今日、体の関係の気持ちよさを知る。彼女に後ろめたい快楽を味合わせることで、ルルルウの心には罪悪感よりも快感を選んだという実績が作られた。これで彼女の行動パターンが変化する。順調にルルルウは、心も体も俺に開発をされていた

「どうする？ 今日から毎日、このマッサージを続ける？」

「……」

俺の提案にルルルウは考える素振りを見せる。彼女の心には、まだ理性と抵抗があるようだ。俺はルルルウの心に都合のいい希望を用意することで、さらに彼女の倫理観を崩していくことにする

「しばらくルルルウはポッコに会わないで、俺のマッサージを受けてみてはどうかかな？」

「……………どうしようもない？」

「毎日ポッコに会うよりもさ、今日から祭りの日まで秘密で体をトレーニングして、女らしくなったルルルウの姿を見せてあげたほうがポッコの驚きも大きくなると思うんだよ。祭りの日にすつごく綺麗になったルルルウが目の前に現れれば、きつとポッコはルルルウをデートに誘ってくれるよ。それに、ルルルウからポッコをデートに誘ったとしても、そうした方が成功率が高くなるんじゃないかな？」

「本当？」

「戦いだって押してばかりじゃダメだろ？たまには引いてみることも試してみようよ」

「うーん……」

「とりあえず、もう少しだけマッサージを続けようか？それから考えようよ。いっぱいイカせてあげるからさ」

「……うん♡」

俺の言葉にそう返すと、ルルルウは再びベッドの上で股を開き、俺にマッサージを催促し始める。順調に彼女の心は壊れてきていた。こうしてなし崩しのまま、ルルルウは俺のマッサージを毎日、朝から受けることになる

そしてついに、祭りの前日にまで時は過ぎた

ルルルウと初エツチ♡

「あんっ♡あはあ♡おっ♡んぐう……♡ユーリとお♡エツチしちやつたあ♡」

「初エツチ、気持ちいい？」

「うん♡……すっごい気持ちいい♡」

村祭を翌日に控えた深夜、俺はルルルウとセックスをしていた。俺が滞在している空き家のベッドで彼女は仰向けに寝て正常位になり、心から望んだように股を開いて俺のチンポを体内に受け入れている

ここまでの流れを振り返るとこうだ。村の祭りの前日になり、俺はルルルウに最後のマッサージをすることを伝える。そして、もつと気持ちいいマッサージがあることもだ

そしてラストスパートをしようと思夜まで俺のマッサージを受けるために、彼女は俺の滞在先に泊まることを選ぶ。俺はお泊りセットを持ってきた彼女の体を朝からいつもよりねっとりとしたマッサージを使って、より高ぶらせていった。甘い言葉を使ってルルルウの心も高ぶらせることを忘れない

たくさん時間を掛けて心までをトロトロに溶かした彼女は、今も股を開いてトロロンとした顔で気持ちよさそうに仰向けでベッドに寝転がっている。俺はルルルウの体にまたがると、正常位のまま彼女のおまんこにペニスをあてがった

「それは……だめだよお……」

ルルルウは弱々しく抵抗の言葉を俺に向かって発するが、体では一切抵抗をしない。彼女は股を大きく開いたまま誘惑で動けずに、おまんこに俺のペニスを受け入れやすい体勢を維持している

むしろ彼女の体はセックスを望んでいた。セックスを望む体に、ルルルウは必死に心で抵抗をしているのだ

「でも、すつごく気持ちいいよ?」

……ゴクリ♡

心を揺らす俺の言葉にルルルウの気持ちがダメな方向に流れ、彼女は期待で息を飲む。さあ、もうひと押しだ

「ポッコと結ばれたときは初めてのフリをすればいいんだよ」

「えっ?初めてのフリ?」

俺の意外な提案に彼女はキョトンとした顔で質問を返す

「うん。それに、こうして今からエッチの練習をしておいたほうが絶対にいいよ。初めて同士だと本番が上手いかわなくて、そのまま気まづくなって別れちゃうことも珍しくないし。ポッコとルルルウだと、ルルルウがポッコをリードをしてあげることになるで

しよ？ルルルウは初エツチが大失敗に終わってもいいの？」

「……それはやだ」

「そうだよね。それにさ、ほら。こういうふうになると、すっごく楽しいよ」

ぬぼ♡ぬぼ♡

彼女にそう言う俺はルルルウの膣口にあてたペニスを前後に少しだけ動かし、彼女のおまんこの入りローセンチほどに出し入れしていく。すでにとろとろになっている彼女の膣口が切なそうにきゆうきゆうと俺の亀頭に吸い付いてきて、彼女の膣道からは中に溜まっていた愛液がどろりとこぼれ落ちてきた

ぬぼ♡ぬぼ♡

「あつ♡あつ♡あつ♡ユーリい♡それ、らめえええ♡」

ルルルウが切なそうにあえぎ声をあげ、俺との疑似セックスで否が応でも彼女の心が本番行為への期待を高める。おまんこに男のペニスが入ってくるといふ気持ちいい行為を彼女の脳が覚えてしまう。するとルルルウはもう一度これが欲しくなる。あともう一息だ

「ねえルルルウ。エッチ、ちよつとだけしちやおつか？」

俺は小刻みに動かしていたピストン運動をピタツと止め、焦らすことでさらにルルルウを誘惑する。少しずつ、彼女の理性が崩壊していった。ルルルウは潤んだ瞳のままベッドの上で股を開いて俺を見上げている

「ルルルウのこと、いっぱい気持ちよくしてあげるからさ」

俺の言葉を聞いた瞬間に彼女の瞳がさらなる快楽に期待をし、薄暗く濁った

くにゅ♡

最後のトドメと言わんばかりに、俺は膣口にあてたペニスをひと押しする。ルルルウのおまんこが俺のチンポを早く挿れてほしくてきゆうんと締まった。ベッドのシーツにとろりとした愛液が滴り落ちる。ルルルウのおまんこはすでに我慢の限界を迎えていた

ルルルウは恥ずかしそうに右手で口元を抑え、熱くなってしまった呼吸を俺に隠そうと必死に耐えている。鼻息を荒くした彼女は、おまんこにペニスを添えられるという行為の時間の経過とともに、快楽に流されるようにして瞳の色をさらに暗く濁らせていった

折を見た俺がルルルウに最後の選択を迫る。ここで彼女を墮とすのだ

「初めてが、俺じゃダメ？」

暗く静まった室内に、暫しの時間沈黙が流れた。悩む彼女の荒い息遣いだけが夜の室内に響いていく

……。

……。

……。

ふる♡ふる♡

肯定の意味をこめて、潤んだ瞳の彼女が首を左右にふる。ついにルルルウが落ちた

「じゃあ、挿れるね?」

……コクリ♡

俺の言葉にルルルウが首を縦にふる。彼女の心が清廉な戦士からメスに変わった。ごめんなポッコ。彼女の処女を手に入れたのは俺だった

「いただきます♡」

ぐにゆうん♡

俺は遠慮なく、ルルルウの濡れたおまんこにチンポを押し込んでいく。彼女の膣内は熱くて、ぐにゆうんにゆの膣壁がとろとろになって体内に埋まりこむ俺のペニスに絡みついてきた。その挿入の感触が最高に気持ちいい。そしてゆつくりとルルルウの体内に埋まっていった俺の肉棒の先が、彼女の処女膜に当たった

「ほら、俺のアソコがルルルウの処女膜に当たってるの分かる？」

「……うん♡」

「これでルルルウも大人の女性だよ。これからルルルウはいっぱい綺麗になれるからね」

「うん♡」

「これから俺と初めてのセックスをしちゃうけど、ポッコに何か一言ある？」

「……言わないでえ♡」

「だめ。ちゃんと教えて」

……。

……。

……。

「……ポッコ。ごめんね……♡今から私、ユーリとセックスしちゃいます♡」

俺によって心を調教されてきたルルルウが、当たり前のように淫語を口にする。彼女の言葉を聞いた俺はルルルウの体に避妊の魔法をかけた

「俺、避妊の魔法を使えるからさ。こうすればルルルウも安心してセックスが出来るね」

「うん♡」

これからするセックスに妊娠の心配がないと知った瞬間に、ルルルウの顔が初めての交わりに不安になっている少女の顔から、肉欲に溺れたメスの顔に変わった。素晴らしい変化である

「それじゃ、今からエッチしちやおつか。いっぱい気持ちよくなってね」

「うふふ♡……いっぱい気持ちよくして♡」

ちゅぷ♡ちゅぷ♡

ポッコのことなど忘れ、ベッドの上で女になったルルルウに俺はキスをする。ただ体をマッサージをするだけの関係からお互いに体を交える関係に変わった今、彼女は当た

り前のように俺のキスを受け入れ、貪るようにして俺の舌に口全体で絡みついてくる。これで俺はルルルウのファーストキスもゲットした

——ツプチ♡

そしてあつげなく、ルルルウの処女膜が俺のチンポで破られる。初めは痛がつていた彼女だが、俺がペニスから薬液創造のスキルを使ってポーシオンを彼女の膣内に滲み出すと傷が癒え、無事に抽送を受け入れられる状態になる

ぬぼ♡ぬぼ♡

「初エッチ、気持ちいい?」

「うん♡……すっごい気持ちいい♡」

こうして俺達の初セックスが開始された

その日は結局朝まで俺とルルルウのセックスは続き、少しかだけ仮眠をとった後に、俺たちは遠くから聞こえてくる祭りの喧騒で目を覚ました

「いけない！急がなきゃ！」

それを聞いたルルルウは慌てて出かける準備をし始める。ポッコに会いに行くためだ。彼女はいいそいそ俺とセックスをしていた時の服からポッコをデートに誘うために持ってきたおしやれな服に着替えていく。俺の精液をおまんこに溜めたまま

「ねえルルルウ。口でしてくれない？」

俺はベッドに仰向けに寝転がると、そんな彼女に頼み事をする

「ええっ?!口でって、そんなこともするの?」

ウブなルルルウは男女の営みにはそういう行為があることを知らずに、びっくりしていた。俺はさらに彼女に向かって説明を重ねていく

「うん。昨日ルルルウがおまんこを使つて俺をイカせたみたいに、今度はルルルウが口を使つて俺のイチモツを舐めながら啜えて気持ちよく刺激するんだ。頼むよルルルウ」

「もう！私、急いでるんだからね！仕方ないなあ……」

なんだかんだ従順なルルルウは俺のチンポを舐めてくれる。昨日から、俺と肉体関係を持つことが彼女の心の中では当たり前のことになつていた。いい兆しである

俺は薬液創造のスキルを使い、チンポから蒸気として放出した発情成分をたっぷりとルルルウの鼻と口から吸引させていく。俺のチンポを舐めながら発情をしまつたルルルウは目にハートマークを作り、夢中で俺のチンポにしゃぶりつき始めた

……はむ♡……れろ♡……はむ♡……くぷ♡

「ルルルウ。気持ちいいよ」

「ほんろう？……はむ♡……あむ♡……れろ♡」

鼻息を荒くしながら美味しそうに俺のチンポをしゃぶり啜えるルルルウのお口の中に、俺は朝一番の精液を注いでいくことにする

と♡と♡と♡

「ルルルウ。全部口で受け止めてね」

「——ッ！」

舐め啜っていたペニスの先から突然、生温かい精液が口の中に飛び出してきたことにびっくりした様子のルルルウだったが、俺が言葉をかけると、彼女は興味深そうにして初めて男にされる口内射精を味わいだした

——ッにゅぽん♡

「ユーリい♡……いっぱいいらしたあ♡」

「ルルルウ。飲んでよ」

「あ、むむ……。コクリ♡」

初めて精液を口に注がれたルルルウが涙目になってペニスから口を離すが、健気な彼女は俺の頼みを受け入れてくれる。発情した状態で精液を舐め啜えてしまった今のルルルウは、体がうずいて仕方がないはずだ。さて、彼女を堕としていくか

「ユ、ユーリい♡」

発情し、目にハートマークを浮かべたルルルウが切なそうな瞳を潤ませて俺を見つめてくる。俺はそんな彼女を無視するようにしてそそくさとイチモツをしまうと、外に送り出そうと声をかけた

「ありがとうルルルウ。さあ、行っておいでよ！」

「そ、そんなあ……」

俺に何かをしてもらうことを期待していたルルルウの狼耳がシユンと悲しそうになだれる。さて、もう一息だな

俺はルルルウを壁ドンすると、彼女の驚いてピンと張った狼耳に息を吹きかけながら、最後のとどめを刺していく

「どうしたのルルルウ。俺に何かしてほしいことがあるの?」

壁際に追い詰められたルルルウは少女のようにか弱く身をすくませながら、俺から顔をそらして瞳をギユツと閉じていた

「もしかして、こゝろ、触ってほしいの?」

俺はポツコと会うためにお洒落をした彼女のスカートを捲りあげ、ルルルウが選んだ

勝負下着の中に手を入れる。発情してしまったルルルウのおまんこは熱く火照っていて、すでに愛液でとろとろに濡れてしまっていた

「ら、らめえ……♡」

俺の指に割れ目を弄くられながら力なくルルルウがつぶやくが、それは空言葉であり、彼女の本心はもつとアソコを触ってほしいことが簡単に分かる。もうチエックメイ
トだ

「ダメならおしまいね」

ルルルウを墮とすために俺が意地悪をすると、彼女はお預けを食らった子供のように目を伏せる。ルルルウの狼耳が再びシユンと閉じた

「意地悪してごめんね」

俺はルルルウの体を抱き寄せると、心を墮とすことにする

「ルルルウ。俺の女にならない？」

「でもお……」

彼女が躊躇している。もう少しだ

「俺の女になれば、ルルルウはいつでも、昨日みたいに気持ちよくなれるよ」

ゴクリ♡

発情した体で昨日のセックスを思い出したルルルウの心が揺れ、彼女は生唾を飲み込んだ

「ほら、触って」

俺はルルルウの震える右手を取ると、俺のイチモツへと誘導する。俺の股間に手が触

れた瞬間に、ルルルウはずっと欲しかったものを愛でるようにして、俺のチンポをまさぐりだした。彼女の鼻息が期待と興奮で荒くなる

「じゃあ、セックスしながら考える？俺とエッチしてからポッコのところに向かっても、まだ間に合う時間だもんね」

「……うん♡」

ちゅば♡ちゅば♡

俺がルルルウにキスをする、彼女は貪るようにキスを返してくる。体が発情しきつたルルルウは昨日よりも積極的になっていて、うずくおまんこに早く俺のチンポを入れて欲しいようだ

こうしてルルルウは、俺とのセックスに溺れていくことになる

……。

……。

……。

ぬほお♡ぬほお♡

「ごめんねポッコお♡ユーリのチンポお、すっごく気持ちいいのお♡……あっ♡ユーリとのエッチが終わったなら、すぐに行くから♡……待っててねポッコお♡……あっ♡あっ♡あっ♡イクっ♡」

ベッドの上で股を開いて正常位になり俺とのセックスに夢中になっているルルルウは、快樂でとろんと濁った瞳で天井を見上げながらずっと、うわごとのように何かをつぶやいていた

ルルルウに淫紋を♡

「……あつ♡あつ♡あつ♡あつ♡……そこお♡……気持ちいいのお♡」

「ルルルウ。もう夜になっちゃったよ」

村の祭りが行われる当日、結局ルルルウは夢中になって一日中俺とセックスをし続けた。時刻はすでに夜である。俺が滞在している村の空き家のベッドは、セックスの最中にルルルウの体から分泌された愛液と俺が出した精液が混ざり合い、ドロドロのベチヨベチヨに汚れてしまっていた

「ルルルウ。ポッコに会いに行かなくていいの？」

「……もういいのお♡……あつ♡あつ♡……ユーリのチンポが気持ちいいからあ♡……あつ♡あつ♡……ぜんぶユーリのせいなんだからねえ♡……あつ♡」

ぬぼ♡つぬぼ♡

「……………お♡……………もつと突いてえ♡」

清廉な戦士から淫乱なメスに変わってしまったルルルウがベッドに手をかけ、俯きながら立ちバックでズポズポとおまんこに出し入れされる俺のチンポを楽しんでいる。今日のセックスで彼女は様々な体位を味わい、性の経験値を増やしていた

処女を失ったばかりの頃はまだ硬さの残っていたルルルウの膣肉は今日のセックスでほぐれきり、淫乱なメスのおまんこになってネチャネチャといやらしく、俺のペニスに吸い付いてくる

「ポッコお。ごめんねえ♡……………あつ♡……………わたしい、……………んっ♡処女じゃなくなっちゃったあ♡……………あつ♡でもお♡……………くうう♡ユーリのチンポお♡……………あつ♡……………すっごく♡……………気持ちいいんだよお♡……………おっ♡おっ♡」

ルルルウが夢中になつて俺と腰を振りながら、初恋の相手であるポッコに向かつて懺悔の言葉をつぶやいている。そろそろ頃合いだろう。彼女にとってポッコは過去になつた

そのことを確認した俺はルルルウとの濃密なセックスを続けながら、彼女のお腹に淫紋を刻むことにする

きゅううううん♡

ルルルウの体のおへその下に黒い淫紋が刻まれていく。後は彼女の体内に俺の精液を注げば淫紋が完成だ

「——あつ♡あつ♡あつ♡何これえ♡……すつ♡い♡——あはあ♡……わたしのおまんこ♡……すつ♡い♡気持ちよくなつちやつたああ♡あつ♡あつ♡あつ♡あつ♡」

俺に淫紋を刻まれたことで体の感度が上がったルルルウが、体の中にチンポを突きこまれながら心地よさそうな声を出す。彼女の膣壁は快感できゅんと引き締まり、とろと

ろの愛液がおまんこ全体からどぼどぼと大量に分泌され始めた

い
それらが俺のチンポでかき混ぜられたことでグチャグチャになってしまったルルウの膣内が、俺のペニスを舐め回すようにして吸い付いてくる。その感触がたまらない

「ルルルウに俺の女になった証を刻んだからだよ。これでルルルウは、俺とのセックスでもっと気持ちよくなれるようになったよ」

「ほんとお♡あつ♡あつ♡あつ♡わたしい♡ユーリのおんなになれたあ♡……すつごく嬉しい♡……あつ♡あつ♡」

群れとして縦社会を形成する狼人族の本能から、ルルルウは俺に従属することに喜びを覚えたようだ。俺の言葉を聞いた瞬間に彼女の膣肉はきゅんきゅんと嬉しそうにごめいて、ルルルウのしつぽがフリフリと感情を表に出す

「ルルルウ。中に出すよ」

「うん♡ユーリのせーし、わたしのなかにイッパイちようだい♡」

と♡♡と♡♡

初めて性の気持ちよさを知ってからどつぶりとセックスにハマリ始めているルルウのおまんこに、俺は今日、何度目かわからない中出しをキメる。俺の精液を注がれた瞬間に、彼女の膣全体がまるで美味なるものを味わうかのようにぐわんぐわんと揺らめきだし、俺のチンポから精液を飲み干そうと必死に絡みついてきた

「おっほおおお♡これえ♡すごっつひのおおおおお♡おっ♡おっ♡おっ♡おっ♡——んほおおおおお♡」

俺の精液を注がれると快感を覚える体に変わったルルルウは、淫紋を刻まれてから初めて俺からされる中出しの気持ちよさに体を震わせている。彼女をこうしてどつぶりと、俺の快楽に依存させていくのだ

「……おっ♡……おっ♡……おっ♡……おっ♡……おっ♡」

ルルルウは気持ちよさそうにイキながら、しばらくの間、呆けたように俺の精液の味を子宮で堪能し続けていた

にゆるん♡

「——あっ♡」

立ちバツクの体勢で肩をすくませながら中出しを味わっているルルルウのおまんこから、俺はペニスを引き抜く。すると彼女は立ちバツクの姿勢のまま、お尻をフリフリと振って俺にもう一度おまんこがしたいとおねだりをしてきた。昨日までの清廉な戦士であったルルルウを知っている人が今の彼女を見たら、とても信じられない光景だろう

「抜いちやだあ♡」

昨日までのルルルウが出していた戦士の声からは想像がでないような甘えたメスの声で、彼女がさらにおねだりをしてくる。俺ルルルウにお掃除のフェラチオをお願いすることにした

「ルルルウ。舐めてよ」

「……しようがないなあ♡」

——はむ♡……じゅぶ♡……じゅぶ♡

ルルルウは立ったままの俺の足元で膝立ちになると、昨日までのウブな彼女とは違って躊躇なく俺のチンポを咥えてくれる。俺にある程度フェラを仕込まれた彼女は生まれて初めてフェラをした時のようなたどたどしい様子などではなく、今や大口を開けていやらしく俺のチンポを舌でねつとりと味わっている

……ズゾゾゾ♡……ズゾゾゾ♡

ルルルウは清廉な戦士の女の子から、俺によつてここまで変わった

「ルルルウ。口に出すよ」

「ひいよお♡……はむ♡ひっぱいらしてえ♡……じゅぽほ♡」

俺はあつという間にルルルウの口淫にチンポを搾り取られると、彼女の口内に精液を放出する。そんな俺を見上げながらルルルウは、楽しそうにフェラチオを続けていた

とぷ♡とぷ♡

「——ッ♡……っ♡……っ♡」

美味しそうに俺のチンポを味わっているルルルウの口内に、俺はたっぷりと精液を注ぎ込んでいく。俺の出した精液で口の中がいっぱいになると射精の終わりを予感したルルルウが膝立ちのまま笑顔で俺を見上げてくるが、俺は彼女の口内に精液を注ぐのを止めなかった

俺はルルルウの頭を両手でガツシリと掴むと、彼女の顔を引き込むようにして喉の奥までチンポをねじ込み、さらにルルルウの口内に精液を注いでいく。そしてそのまま、俺はルルルウのお口を使ってイラマチオを開始した

ぐっぽ♡ぐっぽ♡ぐっぽ♡

「……♡お♡お♡お♡お♡お♡……♡♡……♡♡」

急に喉の奥にまで俺のチンポを突きこまれたことで一瞬だけ慌ててしまったルルルウだが、淫紋を刻まれたことで彼女の喉も性感帯に変わったこと、俺の精液を口内に注がれることに強烈な快楽を覚える体質に変わったことから、すぐにルルルウは気持ちよさそうに瞳をとろんと濁して、俺のチンポでイラマチオをされる快感を貪り始めた

「……♡♡……♡♡」

俺に喉の奥までチンポを突きこまれる衝撃で、ルルルウの唇からは涎と精液が混ざり

合った液体がどろどろになって垂れ下がっている。しかし俺はそんな彼女を気にすることなく、性感帯に変わってしまったルルルウの喉の奥にチンポで突きこみながら、彼女の口内にたっぷりと精液を注いでいった

とっふ♡とっふ♡

「——ッ♡——ッ♡——ッ♡……っ♡っ♡」

俺の精液を体内に注がれる度に、ルルルウに刻まれた淫紋が少しずつピンク色に染まってく。ルルルウは声にならない声を上げながら、静かにイラマチオを受け入れ続けた

ぼたぼた♡ぼた♡

彼女の口や鼻から乱暴なピストン運動をされたことよって逆流した精液がこぼれだすと、俺はルルルウが苦しくならないように回復魔法を使い彼女の体内に酸素を送り込みながら、さらにルルルウの口でイラマチオを続けていく

「ぼお♡ぼお♡
♡

ルルルウの口から、彼女の唾液と混じり合った大量の精液がさらに地面にこぼれ落ちる。そのベチヨベチヨの淫液が、ルルルウの巨乳をネトネトに白く染めてしまっていた。「……もう、はいらなひいい♡……はいらなからああああ♡」

ぐったりと体から力が抜け始めたルルルウが歯を立てないようにして俺の懇願をす
るが、俺は彼女へのイラマチオを止めない。力が抜けてしまったルルルウの頭を両手で
支えながら、俺は彼女の喉へとチンポを突き込み、気持ちいいピストン運動を続けてい
く

「……ふいっおおお♡——おいっおおお♡」

体内に大量の俺の精液を注がれたルルルウの淫紋が、もう少しで完成しそうなのだ。
俺はラストパートをするべく、後頭部を掴んだ彼女の顔を俺の股間に強く押し付ける

ようにして、ルルルウのヌルヌルして温かい口の中が一番奥深くにまでチンポをねじ込むと、彼女の頭をそこに固定したまま大量の精液をルルルウの喉の奥深くにまで滑り込ませていった

根本まですつぽりと俺のチンポを咥えたルルルウの唇が、俺の恥骨にきゆうきゆうとキスをしてくる。彼女の目にはハートマークが浮かんでいた

「——ツ♡——っ♡んぐうう♡……っ♡……っ♡」

喉の奥深くにまでチンポをねじ込まれた状態で俺の股間に顔をうずめたままのルルルウが、目を上ずらせながら気持ちよさそうにイッた。それと同時に彼女の淫紋が完成する

♡どぽ♡どぽ♡

俺は淫紋が完成したルルルウの頭を固定したまま、さらに大量の精液を彼女の喉に向かって注いでいった。ルルルウは根本まで俺のチンポを咥えたままくぶくぶと唇を動

かし、さらに俺の精液が欲しいとペニスに吸い付いてくる。彼女はイキながら、俺の口内射精を受け入れていた

「——♡——♡——♡——♡——♡——♡——♡」

スウ♡スウ♡

俺の股間に顔をうずめたままのルルルウがイキ続ける。狼人族の先祖返りで鼻の強いルルルウは、白目をむくようなアへ顔で口内射精を受けながら、俺のチンポの臭いを心地よさそうに嗅いでいた

ぼろん♡

「ふは——♡はあ……♡はあ……♡」

イラマチオから開放されたルルルウは力なく地面に四つん這いになると、口元から俺が出した精液をポタポタと垂らしながら苦しそうに呼吸を始める。俺はそんな彼女に

ご褒美をあげるべく、四つん這いになったルルルウの背後に回ると、イラマチオの興奮でベトベトに濡れてしまった彼女のおまんこにチンポをねじ込んだ

にゆるん♡

「おっほおおおおおお」♡

淫紋が完成し、さらに敏感になったルルルウのおまんこにズボズボとチンポを出し入れすると、耐えきれなくなった彼女は気持ちよさそうな声を上げる。俺はルルルウのおまんこをポツコリと押し広げるようにしてさらに巨根を前後に動かし、彼女の膣穴がボコボコになるまで連続で激しく、ルルルウのおまんこにチンポを出入りさせていった

「おほお♡おほお♡おほおおおおおお」♡

ビクン♡ビクン♡

地面に四つん這いになったバツクの体勢で、情けないトロ声を出しながらルルルウが

いとも簡単にイッた。昨日セックスを初めて体験したばかりの彼女には、俺との淫紋セックスはまだ刺激が強すぎるようだ。しかし俺はオーガズムに達したばかりでウネと蠢いているルルルウの獣人おまんこに、止まらずにピストン運動を続けていくことにする。ここで彼女を墮としきるのだ

ぬっぽ♡ぬっぽ♡

「——お♡お♡——まってえ♡ユーリい♡……おほお♡——イッてりゅうう♡——いまあ♡——イッてりゅからああああ♡……おっ♡おっ♡おほおおお♡」

ルルルウが強すぎるセックスの快楽から逃れようと俺にピストン運動をされながら四つん這いで地面を這い回るが、俺の両手は彼女の腰をガツシリと掴んで離さない。そのままルルルウの体を無理やり引き寄せるようにして、俺はズポズポと彼女のおまんこに容赦なくピストン運動を続けていく

「ん♡お♡お♡お♡い♡……♡イ♡ク♡う♡う♡う♡う♡」

とっ♡とっ♡

ルルルウが深くイクのと同時に、俺は彼女の子宮に精液を注いであげた。淫紋が完成した状態でイキながらおまんこの奥に精液を注がれるのは、さぞかし気持ちがいいだろう

「——あっ♡——あっ♡——あっ♡——あっ♡——あっ♡——あっ♡」

ルルルウは遠吠えをする狼のように背筋をピンと伸ばしながらアクメ声を出し、おまんこに注がれ続ける俺の精液を心地よさそうに味わっている

きゅう♡きゅう♡

発情したルルルウのおまんこが、彼女の膣の中に精液を注ぎ込んでいる俺のチンポにもつと子種を出して欲しいと吸い付いてくる。俺に精液を注ぎ込まれたルルルウは、四つん這いになって体を強くのけぞらせたままイキ続けていた

「……………れてるう♡お腹の中にいい♡……………ユーリのお♡……………あついのお♡……………いっばひれ
てるううう♡」

俺に中出しをされながら、依然としてルルルウは呆けたまま天井を見上げて動かない。それくらい、淫紋を刻まれた彼女にとって俺の精液は最高の快感なのだろう。彼女は淫紋の効果で子宮から昇ってくる強烈な多幸福感に幸せな声を上げながら情けなく、四つん這いのまま腰をへこへこと上下に動かし続けていた

ズチユ♡ズチユ♡

「おほおおおお♡……………これえ♡しあわせえええ♡……………すつごひい♡しあわせええええ♡」

中出しを終えた俺がピストン運動を再開すると、ルルルウがあまりの快楽に歓喜の声を上げる。膣の奥からチンポを使って俺の精液をドロドロと掻き出されながら、彼女は大きな声でよがり続けた

ズチュ♡ズチュ♡

「ルルルウ。もう一回出すよ」

「うん♡いつぱいらしてえ♡ルルルウのおまんこにい♡ユーリのせーしい♡……いつぱいちようらい♡」

俺はセックスの快楽に心までどっぷりと浸かってしまったルルルウにとどめを刺すべく、さらに彼女の体内に精液を注ぎ込むことにする。俺は四つん這いになって尻を持ち上げた状態で俺のチンポを受け入れているルルルウのおまんこに強烈な種付けプレスをすると、チンポを子宮に押し込むようにしながらたっぷりの精液を彼女の膣内に注ぎ込んでいった

ぎゅうううううううう♡

……ぎゅううう♡

「——♡——♡——♡……♡……♡……♡」

生まれてはじめて味わうであろう深くて甘い中出しアクメをキメながら、ルルルウは地面に顔をこすりつけるようにしてとろ顔のまま気絶をしよう。目を上ずらせたまま舌を出して気を失った彼女の顔は、とても幸せそうだった

ずりゅん♡

「……♡……♡……♡」

俺は中出しを終え地面に倒れたまま尻を突き上げて動かないルルルウのおまんこからペニスを抜き取ると、セックスの後片付けをすることにする。先程まで俺のチンポが出入りしていたルルルウの女になったおまんこは、ポッコリと大きな穴が開いたまま精液を垂れ流し続けていた

俺はルルルウの体にクリーンの魔法を掛け彼女の体を綺麗にしてあげると、そつとベッドに寝かせて毛布をかける。これでルルルウも堕とし終えた

さて、次はどんな出会いが待っているのやら。俺はそんなことを考えながら、俺の横でスウスウと幸せそうに寝息を立てているルルルウの狼耳をやさしく撫でていた

新たなる旅の仲間♡

……ちゅぷ♡……ちゅぷ♡

俺はマジミラ馬車の中で、旅の途中に新たに出会った竜人族のユズハさんを後ろから立った状態で抱きしめ、ねっとりとしたキスをしあっていた

竜人族の彼女は160センチほどの高身長に長い青い髪と青い瞳を持ち合わせており、和服のような民族衣装を着ている。ユズハさんは諸国漫遊の旅をしているらしく、この異世界に来てから俺が出会った人物の中でぶっちぎりに強かった。スキルレベルが高いいだけで実践知識のない俺は、彼女の旅に同行をしながらユズハさんに師事をお願いしたのだ

俺はユズハさんの体に後ろから手を回すと、竜人族の民族衣装である和服のような着物の襟元に手をつ込み、彼女の大きなFカップ程のおっぱいを右手で揉みしだいていく。ユズハさんの乳房に指を埋める度に、ふにゅんふにゅんという柔らかい感触が俺の

手に吸い付いてきた

「んっ……♡んふ……♡……あっ♡」

ユズハさんのコリコリとした乳首をやさしくつねると、彼女の口から甘い吐息が漏れる。俺がユズハさんの全身をまさぐる度に、彼女の着ている青色と紫色が混じった花柄の和服が着崩れ、ユズハさんの淫らな肉体が馬車内に露出されていく

「まさか、ユーリとの関係にここまでハマってしまうとはなあ♡」

俺もユズハさんとういう関係になれるとは思っていなかった。なにかの気まぐれか、戯れか、ある日彼女が俺を誘惑してきたのだ。この世界では15歳でまだ若い俺をドギマギさせて、少しイタズラをする程度のもりだったのであろう。しかし俺はユズハさんを返り討ちにし、そのままセックスにまで持ち込んだ

多分寝取りチンポスキルの効果だと思う。そのままなし崩しに、俺はユズハさんは肉体関係を続けていた

……ちゅぽ♡……ちゅぽ♡

俺はユズハさんと舌を絡め合いながらマジミラ馬車内に魔力を通し、中から外の景色が丸見え状態にしてしまう。すると馬車の外には夜の見張り番をしているルルウと、俺の姉弟子に当たるエルフ族のエミリアが焚き火に当たっていた

エミリアは身長が150センチくらいに緑色のエルフ服を着ていて、長い金髪に澄んだ青い瞳をしたHカップほどのおっぱいを持つ爆乳エルフである。エミリアは俺よりも先にユズハさんの諸国漫遊に同行して、彼女に師事をしていた

「いらあ♡ユーリは本当に悪趣味だな♡」

俺に後ろからおっぱいを揉みしだかれながら、馬車の壁が透明になったことに気付いたユズハさんが悪態をつく。すでに何回も、俺たちはマジミラ馬車内で外が丸見えになった状態のセックスを楽しんでいた

「師匠のこころ、すっぴい濡れてますよ」

左手で彼女の巨乳をもみながら、右手を使って着物がはだけてしまったユズハさんの下半身をまさぐると、彼女のおまんこはすでに興奮でとろとろに熱く濡れている。俺はユズハさんの股間に人差し指と中指を伸ばして滑り込ませると、クニユクニユとして柔らかいユズハさんの陰唇の割れ目に、彼女の愛液を伸ばしながら二本の指を這い回らせていく

クチユ♡クチユ♡

「……………あつ♡……………ん♡……………くう♡」

俺の指でユズハさんの割れ目をヌルヌルと刺激して遊んでいると、性感帯を刺激された彼女は身をすくませながら気持ちよさそうに体を震わせていた

グツチャ♡グツチャ♡グツチャ♡

「——あつ♡んくう♡……あんっ♡……あつ♡」

ユズハさん膣の中に二本の指をねじ込み、そのまま彼女のヌルヌルに湿った膣穴がグニヤグニヤになるまでほじくっていくと、ユズハさんのおまんこから溢れ出た愛液がいやらしい音を立てながらネトネトと俺の指に絡みついてくる

立つたまま後ろから俺に手マンをされ始めたユズハさんが、気持ちよさそうなよがり声を上げだした

「師匠。そろそろ入れちゃいましょうか」

「ぱふ♡」

俺の提案にユズハさんが妖しく微笑むと、彼女は着物をはだけながらぷるんとした大きなお尻を丸出しにしてマジミラ馬車の壁に手をかけ、大腿になつて立ちバツクの体勢で俺とセックスをする準備を整える。馬車内に露出され、俺に見せびらかされたユズハさんのおまんこからは、とろりとした透明で粘液質な液体がいやらしく糸を引いて伸び

落ちていた

ユズハさんが手をかけている透明になったマジミラ馬車の壁の先には、夜の見張り番をしているルルルウとエミリアが見える。なんだかんだ彼女も乗り気なようだ。外で焚き火にあたっている狼人族のルルルウが、馬車内から漂ってくる臭いで俺たちがセツクスをしていることに気付いたのか、少しソワソワとしていた

「故郷の旦那さんはいいんですか？」

俺は壁際に立って俺のチンポを待っているユズハさんのおまんこにペニスをあてがうと、彼女に意地悪な質問をする。壁に手をかけているユズハさんの左手の薬指には、プラチナ色の結婚指輪が光っていた。こちらの世界に来た異世界人に多大な影響を受けたのであろう竜人族には、ニホンと似たような文化が根づいているようだ

「おまえとは体だけの関係だからあ♡……あつ♡……入ってきたあ♡」

にゅうううううん♡

俺のチンポを受け入れることに慣れてきたユズハさんの人妻おまんこに、俺はゆつくりとイチモツを挿入していく。少しずつ俺のチンポが人妻であるユズハさんの体内に埋まり込んでいく度に、本来ならば愛を誓いあつた男の専用物であつた彼女の熟れたおまんこが俺のペニスにいやらしくネトネトと絡みついてきて、もっと早くに俺のチンポを入れてほしいと求めてくる。ユズハさんのおまんこの中には、熱い愛液で潤いきつてしまつていた

「ユーリのちんぽお♡……相変わらず……すっごいなあ♡」

「旦那さんのよりもですか？」

「い、言うなあ♡……あつ♡あつ♡」

ズチュ♡ズチュ♡

俺のチンポを体内にミツチリとはめ込んだユズハさんがうつとりとした声を上げる。

俺はそんな彼女の言葉を聞きながら、ユズハさんとの浮気セックスを開始する。故郷から遠く離れた旅の途中であり、こうして旦那以外の男と肌を重ねていても絶対にバレないという環境が、ユズハさんから罪悪感と忌避感を薄れさせていた

ぬぶ♡ぬぶ♡

「……あつ♡……あつ♡……あつ♡……あつ♡……あつ♡」

俺のチンポを引き抜く度に、ユズハさんのおまんこからはいやらしい愛液がねとねとになって糸を引いている。彼女の旦那には悪いが、俺はゆっくりと時間を掛けてユズハさんのおまんこを俺のチンポ専用の形に変えてしまうつもりだ

「師匠。外にいるエミリアに師匠のイキ顔を見てもらいましょよ」

ユズハさんのおまんこがきゆうきゆうとヒクつき始めたことに気付いた俺は、彼女の羞恥心を少しだけ、言葉を使って削ることにする

「……そんなことお♡できないらろお♡おっ♡おっ♡だめらあ……い……イクう♡
……っ♡……っ♡」

ビクン♡ビクン♡

ユズハさんが俺のチンポでおまんこをズポズポとされながら壁に手をかけ、ぎゅうんと背中を丸めるようにしてイツた。彼女の人妻おまんこは、オーガズムに達しながらヒクヒクと美味しそうに旦那以外のチンポである俺のチンポを堪能している

「弟子のチンポでイツちやいましたね。 師匠」

「……いらあ♡」

「そろそろ動きますよ」

「……うん♡」

ユズハさんが回復した頃合いを見計らってから俺は再びおまんこへのピストン運動を再開すると、彼女の腰を両手でがっしりと掴んで、ユズハさんの立ちバツクでの浮気セックスを堪能していった

ぬほ♡ぬほ♡

「師匠。そろそろ出しますよ」

「ふいふい♡いつものようにだな♡」

達しそうになった俺がユズハさんのネットネットになったおまんこからペニスを抜き取ると、すぐさま彼女は慣れた様子で俺の足元に膝立ちになり、射精しそうになった俺のチンポを口に咥えてくれる。旦那への貞操を守るため、ユズハさんは俺に対して中出しだけは絶対に拒否をしていた。その代わりに彼女はいつもこうして、口を使って俺の精液を受け止めてくれるのだ

精液を飲むのが大好きという、ユズハさんの個人的な趣味もあるようだが

ると、舌の上に溜まった俺の精液を見せつけてくる。彼女はそうすることで師匠としての矜持を俺に見せつけたいようだ

はむ♡はむ♡……ごくん♡

「……馳走になったな♡」

ユズハさんが口の中で受け止めた俺の精液を美味しそうに飲み干すと、今日のセックスは終わる。そろそろユズハさんが見張りを交代する時間だ。気崩れた着物を直している彼女に俺はクリーンの魔法と8時間寝たのと同じ効果を得られる回復魔法を掛け、馬車から外に送り出す

「ユーリ。師匠とセックスしてた。私にもして♡」

ユズハさんと交代で馬車に戻ってきたルルルウが物欲しそうな顔で俺のズボンを引き下ろすと、膝立ちになってすぐに俺のチンポを舐め啜える。どうやら彼女は、俺とユズハさんとのセックスの臭いを嗅いでアテられてしまったようだ

じゅぷぷ♡じゅぷぷ♡

ルルルウが瞳にハートマークを浮かべながら、ひよつとこフレラ顔で夢中になって俺のイチモツに吸い付く。強い鼻を使って俺のチンポの臭いを堪能することも忘れていない。狼人族の村では清廉だった彼女は、旅の途中で俺にここまで開発をされていた

「勃った♡……ユーリ♡エッチしよう♡」

ルルルウの口淫によってあつという間に俺のチンポが勃起させられると、それを確認した彼女は馬車に備え付けのベッドの上に寝転び、正常位の体位で股を開きながら両手でおまんこをくぱあと広げて俺をセックスに誘ってくる。すでに彼女のおまんこはとろとろに潤っているようだ

にゅううん♡

「ユーリのチンポお♡……入ってきたあ♡」

——ぬぼ♡ぬぼ♡

どうやら俺は今日も寝れないらしい。誘惑に負けた俺はルルルウの熱く滾ったおまんこにチンポをぶち込むと、次に俺が見張りを交代する時間までルルルウとのセックスを楽しむことにする。しかし異世界に来て便利なところは、回復魔法を使えばある程度は眠らなくても済んでしまうところだな

「——あつ♡——あつ♡ユーリい♡……すつ♡い♡……すつ♡いのお♡」

依然として壁が透明なままの馬車内からは外の様子が丸見えだ。俺とルルルウがエッチをしていることに気配で気付いたユズハさんが、焚き火に当たりながらニマニマとこちらの様子を伺っている。何も知らないのは姉弟子のエミリアだけのようにだ

こうして、俺の旅路がにぎやかになっていく

ユズハさんに中出し♡

「あつ……♡くふう……♡んあつ……♡」

俺とユズハさんは旅の途中で立ち寄った宿屋の一室で正常位になり、いつものように一つにつながっている。ユズハさんにとって少しの火遊びのつもりであった俺たちの関係は、いつの間にかどっぷりとしたものに変わっていた

今日の相部屋は俺とユズハさん、ルルルウとエミリアがセットだ。くじ引きで今日の相部屋が決まった瞬間にルルルウが切なそうな顔をしていたので、後で慰めてあげよう

ぬほ♡ぬほ♡

「師匠のおまんこ、すっごくぬるぬるになってますよ」

「ふふふ♡ユーリのチンポも硬いぞ♡」

人妻であるユズハさんは楽しそうに俺と浮気セックスをしながら、慣れた様子でベッドに寝転び股を開いて俺を見上げていた。旅の道中で幾度も俺と体を重ねたユズハさんの心から、順調に俺とのセックスへの罪悪感が麻痺してきている

「師匠、出しますよ」

「んっ♡口にちようだい♡」

ユズハさんが俺とセックスを続けながら大口を開けて俺の精液を口の中へと誘う。人妻のおまんこで達しそうになった俺はユズハさんのヌルヌルにほぐれた腭肉からペニス抜き取ると、今日もユズハさんのお口に精液を注いでいく

「……………んぐ♡……………んぐ♡……………おいしい♡」

パタパタ。ガチャ！

「——ユーリ！私にもして♡」

ユズハさんがいつものように俺のチンポを啜えて口内射精をされる俺の精液を堪能しているところに、おまんこを我慢できなくなってしまうたルルルウが乱入をしてくる。せつかくだ。このままルルルウともセックスをしてしまおう

「ルルルウ。イッている所、師匠に見てもらいなよ」

クチユ♡クチユ♡

「やあ……♡ら、らめえ♡……あっ♡……あっ♡」

俺はルルルウにそう言葉をかけるとユズハさんに見せつけるようにして立ったままのルルルウの下着の中に手を入れ、興奮ですでに愛液が染み渡ったルルルウの陰唇をほぐしながら手マンをしていく

ルルルウの割れ目に人差し指と中指を這わせてくばあと開いた後に彼女の膣穴を広げて二本の指をねじ込み、ルルルウがとつても気持ちよくなれるお肉をクチュクチュと刺激してあげる。俺の指がグニグニと彼女の膣壁をへこませて戻す度に、ルルルウのおまんこからはとろとろになった熱い愛液がこぼれ出てきた

「……い、イクう……♡」

俺に後ろから抱きしめられるようにして手マンをされながら、あつという間にルルルウがイツた。彼女はその後、へたり込むようにして地面にアヒル座りになったまま動かない。ルルルウをイカせた俺がユズハさんの様子を確認すると、彼女は顔を真っ赤にして唾然としていた

俺たちがセックスをしているところを見て年上の余裕を見せようとしたユズハさんが、ルルルウのイツている姿を茶化してくるかと思っていたが、どうやらユズハさんは複数人プレイに関してはおまじらしく、恥ずかしそうにモジモジとしたまま動かなくなってしまった。やっと、ユズハさんの付け入る隙を見つけた

「ルルルウ。もつと師匠にイキ顔を見てもらおうね」

「……うん♡……師匠。ルルルウがエッチしてる所見てて♡」

俺はルルルウにそう提案すると、地面に座り込んだままのルルルウを抱き起こしてベッドに手をかけてもらい、服を着たまま立ちバックの姿で俺を待っているルルルウのスカートを捲つて下着をズリ落とす。そのまま俺達は、ユズハさんの正面を向くようにして立ったままセックスを始めた。俺とルルルウがセックスをしてる光景をユズハさんは両手に口を当てて、啞然としたまま見続けている

——ぬふ♡ぬふ♡

「ルルルウ。出すよ」

「うん。いっぱい出して♡」

ふふ♡ふふ♡

「——あつ♡——あつ♡……あつ♡……あつ♡——あつ♡」

俺は顔を真っ赤にしたままのユズハさんにルルルウの中出しアクメ顔を見せつけながら、ルルルウの子宮の中に精液を注いでいく。俺の精液をおまんこに注がれている時に見せるルルルウの気持ちよさそうな顔に共鳴をしたのか、ユズハさんが俺達を見ながら生唾を飲み込んでいた

「師匠もしますか?」

俺は立ちバック姿でベッドに強く顔をこすりつけながら肩をすくませ中出しアクメを味わっているルルルウの膣内に精液を注ぎ込みながら、ユズハさんに質問をする。ユズハさんは珍しくあたふたと慌てながら、俺の質問に言葉を返していた

「で、でもお。避妊の問題があるだろ!お前とルルルウは恋人同士だからいいかもしれないが、……私とお前はダメだ!」

「俺、避妊の魔法が使えらんですよ。それに俺とルルルウはセフレです」

俺はそう言い切るとユズハさんの体にも避妊の魔法をかけてあげる。俺に避妊の魔法をかけられたユズハさんは困ったように、俯きながら必死に断る言い訳を探していた

「で、でもお……」

「師匠。失礼します」

俺は気持ちよさそうにきゅうきゅうと俺のペニスを吸い付いて離さないルルルウのおまんこからチンポをニユルリと抜き取ると、生娘のように顔を真っ赤にして固まってしまったユズハさんをお姫様抱っこで優しくベッドに寝かせてあげる。そして俺はベッドの上から見下ろすようにして彼女の体に自分の体を覆いかぶせると、やさしいキスをしてからユズハさんへの言葉を続けた

「師匠。ダメですか？」

「だ、ダメだ！」

「でも、妊娠しませんよ？」

「私には旦那がいると言っただろう！」

「師匠が旦那さんを大切にしていることはわかりました。でも、バレなければ大丈夫ですよ」

「……」

「ルルルウ。俺のを舐めて綺麗にしてよ」

「うん♡」

俺はユズハさんを堕とすべく一旦ベッドから離れ、膝立ちになったルルルウのお口でチンポにお掃除のフェエラをしてもらいながらユズハさんとの会話を続ける。ユズハさ

んは戸惑いながらも、ベッドに寝転んだままで俺との会話を続けていた。これはユズハさんの心が揺れている証だ

「どうしてもダメですか？」

「どうしてもダメだ！」

瞳をぐるぐると慌てさせながらユズハさんが抗っている。でももう少し押せばいいそうさ。その事に気づいた俺はやり方を変えることで、ユズハさんの心を陥落させることにした

「中出しはダメでも、いつものセックスはいいんですよね？せつかくですし、今度は師匠のイキ顔をルルルウに見てもらいましょうよ」

「そ、それはあ……」

「師匠の気持ちよくなってる顔、ルルルウにも見せて♡」

俺は戸惑いを隠せないユズハさんに有無を言わせぬまま、ルルルウの口でお掃除フェラをしてもらったことで再び勃起したベニスをベッドに寝たまま股を開いて動かないユズハさんの濡れたおまんこにあてがうと、そのまま正常位で師匠とのセックスを開始した

ズチユ♡ズチユ♡

「ハ、ハハらあ♡……あつ♡……あつ♡」

「ふふ♡師匠の顔、すつごく気持ちよさそう♡」

ルルルウがおまんこから俺の精液を垂らしたままベッドの横で膝立ちになり、俺とエッチをしているユズハさんの顔を楽しそうに覗き込んでいる

弟子に痴態を見られながらも、ユズハさんは俺の巨根をおまんこに突きこまれる度に、どうしても気持ちよさで体をよがらせてしまう。ダメだという彼女の言葉とは裏腹に、

俺のチンポが感じるユズハさんのおまんこの中はいつもよりもととろで、熱く潤っていた

「あつ♡あつ♡あつ♡あつ♡あつ♡」

「師匠のエッチな顔つて、こういう風なんだ♡」

俺のペニスでおまんこをほじくられて余裕のなくなったユズハさんが、正常位で股を開いたまま瞳をとろんと濁してあえいでいる。ユズハさんのその姿を、ルルルウは嬉しそうに見守っていた

「ルルルウ。師匠にキスをしてあげたら？」

「うん♡」

俺の言葉に従うとルルルウは、おまんこから昇ってくる甘い快樂でト口顔になり始めたユズハさんと唇を重ね、ねつとりと舌を絡めた濃密なキスを始める。こうして弟子と

師匠による3Pセックスが開始された

……。

……。

……。

「い、……い、……イグうううう……♡」

ビクン♡ビクン♡

くちゅ♡くちゅ♡

弟子に見守られながらユズハさんが恥ずかしそうに、控えめな声を上げていった。生まれて初めて他人に見られながらのセックスをしているのである。ユズハさんはいつものように余裕のある態度ではなく、処女の生娘のように俺のなすがままになっていた。

今のユズハさんはオーガズムに達してトロンと濁した瞳のまま気持ちよさそうに、ルルウとキスを重ねている。俺は頃合いを見てピストン運動を再開すると、ユズハさんのおまんこにぬぼぬぼとペニスを出し入れしながら彼女に最後の誘惑をすることにした

……ぬぶ♡……ぬぶ♡

「師匠。このまま中に出しちゃいませんか？」

「ら、らめらあ……♡」

「師匠。ユーリのせーし♡すつごく気持ちいいよ♡」

「らめらつたらあ……♡」

「師匠。避妊の魔法を掛けたから、絶対に妊娠しませんよ？」

「らめなものは……らめらあ♡」

セックスの快感で頭がトロトロに溶けてしまったユズハさんが最後の抵抗を見せる。でも後少しだ。寝取りチンポのスキルで分かる。彼女の気持ちは快楽に流され始めている

俺はユズハさんの心を壊すために、彼女の旦那には悪いが、人妻であるユズハさんの体にさらなるセックスの快楽を教え込んでしまうことにする

とん♡とん♡

「ほらここ。師匠の子宮に俺のチンポが当たってるの分かります？ここに精液を注ぐと、すっごく気持ちよくなれるんですよ？どうします師匠？やっぱり中に出しちゃいますか？」

「——あつ♡——あつ♡……で、でもお……♡あつ♡あつ♡あつ♡あつ♡子宮トントンしちゃ

「らめええええ♡」

ビクン♡ビクン♡

「師匠♡素直になっちゃえ♡」

「旦那さんには絶対に秘密にしますから。中に出しちゃいませうよ」

「師匠♡おまんこにせーしを注がれるのって、すっごく気持ちいいんだよ♡さっきのルルうとユーリのエッチ、見てたでしょう？」

「……でもお……—あっ♡—あっ♡どうしよお……♡どうしよお……♡」

「師匠♡ユーリは師匠のことすごく大切にしてくれるから、安心して大丈夫だよ♡」

「らめえ……♡頭とろとろでえ♡何も考えられないよお♡……あっ♡あっ♡」

イキながら俺とルルルウに二人ががりで心を責められたユズハさんが、ついに流され始めた。絶対に俺の中出しを断っていた彼女がようやく悩みの言葉を使い始めたのだ。後少しで彼女は堕ちる

ズチユ♡ズチユ♡

「師匠。お試しで一回だけ、中に出してみませんか？」

「あつ♡あつ♡……一回だけえ……？」

「そうです。師匠が悩むのも、おまんこに中出しをされるのがどんな感じか分からないからですよ。一回体験してみても嫌だったら、俺からはもう何も言いません」

「師匠♡ユーリは絶対に約束を守るから♡ルルルウがそれを保証する♡」

「……あつ♡……あつ♡……本当……？」

「本当です」

「師匠♡本当だよ♡」

……。

……。

……。

ぬぼ♡ぬぼ♡

「旦那さんの名前は何て言うんですか？」

「……あつ♡……あつ♡……タツロー……。……あひつ♡」

「旦那さんの中に出してもらったことは？」

「……一回もなひいい……♡おっ♡おっ♡」

ユズハさんが正常位でセックスをしながら俺を見ないように顔を背けるが、ベッドの隣りで俺達がまぐわっている所を見ているルルウに頭を両手で押さえられ、視線を俺に戻されてしまう。もうユズハさんには、逃げ場など何処にもなかった

ズチユ♡ズチユ♡

「じゃあ、今日は師匠の初めての体験ですね。これで師匠は、すつごく気持ちいい思いができますよ」

「——あっ♡——あっ♡……そんなあ……♡あっ♡あっ♡」

俺の言葉にさらなる快感を期待したユズハさんのおまんこがキュンと引き締まり、とろとろと愛液が彼女の膣の奥からこぼれ出てくる。さあ、ユズハさんの心が堕ちだした

ぬっぽ♡ぬっぽ♡

「師匠。大丈夫です。俺に全部任せてください」

「でもお……♡」

「もうこんな風にセックスをした関係じゃないですか。いまさら中に出したって、そんなに変わりませんよ」

「……あつ♡……あつ♡」

「師匠♡ユーリはすごくエッチが上手だから、ユーリに体を任せたほうがすごく気持ちよくなれるんだよ♡」

「で、でもおおお……♡でもおおお……♡」

ユズハさんがあえぎながら考えるような素振りを見せ始める。でもすぐに分かった。

彼女の心は現在進行系で堕ちている。時間が経てば経つほどに、ユズハさんの綺麗な水色の瞳が暗く濁っていくからだ

「師匠のこと、もつと気持ちよくしてあげたいんです。俺に身を任せてくれれば、師匠を天国に連れて行ってあげますよ」

「れ、れもお……♡わらひには、だんながあ……♡」

「師匠。俺が責任を取ります。師匠のこと、絶対に守ります」

「師匠♡もう堕ちちやいなよ♡絶対に気持ちいいから♡ルルルウが保証する♡」

「……」

「……」

「……」

……。

……。

……。

「……いいよ♡」

「本当ですか？」

「うん♡……一回だけ……いいよ♡」

ユズハさんが堕ちた。何かを諦めたような、そして彼女が何かに照れながら、とても恥ずかしそうな顔をしたユズハさんが俺に肯定の言葉をかける

「じゃあ、これからユズハさんの中に、いっぱい俺の精液を出しますね」

ズチユ♡ズチユ♡

「うんユーリのせーし♡いっぱい中に出してえ♡——あつ♡——あつ♡——あつ♡——あつ♡——あつ♡」

俺は張り切ってユズハさんのおまんこにピストン運動を続けていく。今までの外出しセックスではなく、中に精液を出されるという本番セックスを意識した途端に、ユズハさんのおまんこが俺の精液を搾り取るようにきゆうきゆうと出し入れをされるペニスに吸い付き始めた。それと同時にこれから自分の体内に男の子種を注がれるという興奮からか、より体が敏感になった彼女が大ききなよがり声をあげる

俺のチンポを突きこむ度にユズハさんのおまんこの中の感触が、本気汁でグチャグチャのドロドロ口が変わっていった

「あつ♡あつ♡ユーリい♡……すつ♡い♡……せつくしゅ♡……いままでよりい♡ずつと気持ちいいのおお♡……何でえええええ♡」

「それは遊びのセックスじゃなくて、俺たちのセックスが中出しの本気セックスになっ

たからですよ」

「——そうなのとおお♡なかだひの本気せつくしゅ♡しゅつごいのおおお♡……こ
れえ♡……だめになるやつらああああ♡」

「師匠♡ダメになっていいんだよ♡そうすればユーリがもつと体を気持ちよくしてくれ
るんだから♡」

今まで恥ずかしそうに俺とセックスをしていた彼女がなりふりを構わずよがり、いき
み始める。おまんこに初めて精液を注がれることへの期待で頭の中がいつぱいになっ
たユズハさんは興奮しきり、もう俺達のセックスが隣りにいるルルルウに見られている
ことなど気にならなくなったようだ

「師匠。旦那さんはいいんですか？」

「……♡あ♡」

罪悪感を薄れさせてしまったユズハさんが俺の言葉を聞き、イタズラっ子のような顔で俺を咎める。旦那への背徳感がよりいっそうに、俺たちの浮気の中出しセックスに快感をもたらしていた

彼女の心は堕ちきっている。俺はもう戻ってこられなくなるまでさらにどっぷりとユズハさんの心を堕としきってしまうために、彼女の心にさらなる背徳感を積み重ねていくことにした

「師匠。旦那さんに一言ありますか？」

「あつ♡あつ♡タツロー……♡ごめんねえ……♡……でもお♡弟子のチンポがあ♡気持ちよすぎるからあ……♡あつ♡あつ♡……♡ごめんねえ♡」

俺の言葉を聞いたユズハさんのおまんこが後ろめたいという快感によってさらにきゅつと潤い締まる。そのことを確認した俺は安心して彼女の心に、最後のとどめを刺すことにした

「師匠。中に出しますよ」

「——あはあ♡いっぱい出してえ♡」

先程までの、俺の中出しを絶対に断っていたユズハさんはもう何処にもいない。彼女はもう、心から俺の精液を体内に注いでもらいたくて仕方のない淫乱なメスに変わったからだ

俺は期待に満ちた顔でおまんこの中に旦那以外の男の精液を注がれるのを待っているユズハさんの膣の一番奥にまでペニスを押し込むと、人妻である彼女の子宮にたっぷりと俺の精液を注いでいった

と♡と♡と♡と♡♡

「——あ♡……出てるう♡……あ♡……あ♡……あ♡……なにこれえ……す♡ご♡い♡……気持
ち♡い♡♡……♡つ♡あ♡は♡あ♡……な♡に♡こ♡れ♡え♡……♡つ♡……す♡つ♡ご♡ひ♡……♡つ♡♡
……♡つ♡タ♡ツ♡口♡お♡……。ご♡め♡ん……。あ♡つ♡……な♡に……。こ♡れ♡え♡……あ♡つ♡……

すっごい……あっ♡……すっごい♡……っ♡」

寝取りチンポスキルの効果で麻薬物質や快楽物質が大量に含まれるようになった俺の精液を夢中になってユズハさんが味わっている。ユズハさんの意識には強烈な多幸感がうずまき、チカチカと視界が白く染まっているのがこちらからでも簡単に分かるくらいに彼女は薄暗く濁った瞳のまま、とろりと虚空を見つめ続けていた

この快感を知ってしまうとユズハさんは普通の男の精液では物足りなくなる。もう彼女は元に戻れないのだ

依然として、初めて俺の中出しを味わったユズハさんがうっとりとしたまま心地よさそうに天井を見上げている。彼女の綺麗な水色の瞳が快楽への依存で、さらに暗く濁っていた

……。

……。

……。

「初めての中出し、どうでしたか？」

「……ばか♡」

無事ユズハさんのおまんこに精液を出し終えた俺が彼女にそう尋ねると、ユズハさんは満たされたように笑いながら俺に言葉を返してきた

「一回だけの約束ですけど、もう一回しちやいますか？」

「うん♡……いいよ♡」

「師匠だけずるい。ユーリ♡ルルルウにもして♡」

「師匠ともう一回したら、ルルルウにもしてあげるから、もう少し待っててね」

種付けピストンプレスをされながら心地よさそうに体を震わせて、だいしゆきほーどで美味しそうに俺の精液を味わっているユズハさんの感情が突然、俺の頭の中に流れ込んでくる

どうやらスキルレベルの上があった寝取りチンポの効果によって、相手の心が少しだけ読めるようになったようだ。これで、俺はより女を墮としやすくなった

この日は朝まで俺たちの3Pセックスは続いた

次の日になって、朝まで同じ部屋で何かをしていた俺たちを訝しむエミリアをごまかすのが一苦労であったことを追記しておく

エミリアにセクハラ♡

……ずぞぞぞぞ♡……ずぞぞぞぞ♡

俺は今日も旅の途中に立ち寄った宿屋の一室でユズハさんとルルルウとの3Pセツクスを終え、二人に仲良くお掃除フェラをしてもらっている

もちろん、二人のおまんこにはたっぷりと中出しを終えており、ポタポタと彼女たちは陰唇から俺の精液を垂らしながらのお掃除フェラだ

「師匠。中に出すようになってよかったですか？」

「うん♡……もつと、早く出してもらえばよかつら♡……はむ♡じゅるるる♡……っ♡……っ♡」

「師匠♡ルルルウもユーリのチンポ♡啜えたい♡独り占めはダメ♡」

ユズハさんは旅の道中で旦那に内緒でする俺との中出しセックスにどっぷりとハマってくれたようだ。しかし今日の相部屋は俺とエミリアである。もつとエッチしたいとおねだりをする二人を置いたまま、俺は頃合いを見て自分の部屋に戻った

「おかえりー。師匠との話は終わったの？」

「うん。いやー長話をしちゃったよ」

俺は室内に入ると、ベッドに腰掛け伸びをしているエミリアを見る。あくびをしながら両腕を上げている彼女の爆乳が強調されていてとてもエロい。せつかく相部屋になったことだし、この際だから俺はエミリアに質問をすることにした

「エミリアのペンダントってすごく綺麗だね。それって彼氏からのプレゼント？」

「うん！これは相思相愛の証のペンダントなのよ」

エミリアが着ている緑色のエルフ服の胸元には、エルフ文字のようなものが刻まれた青く光るペンダントが淡い光を放っている。彼女は大切なものを愛でるように胸元のペンダントを右手の指で触りながら、俺との会話を続けた

「このペンダントは私が旅に出る時に恋人のジルがプレゼントをしてくれたものなの。ジルはね、私の幼馴染で小さいときからずっと一緒に居るんだ。だからね、こうして旅をするようになってから初めて離れ離れになったのよ」

「どうやらエミリアは故郷に恋人を待たせているようだ。俺は彼女との会話を掘り下げていくことにする」

「ふーん。エミリアは彼氏が大好きなんだね」

「うん。ジルは私のことをずっと信じて言って師匠との旅に送り出してくれたから。ジルってすっごく頼りになって、すっごくやさしいんだよ」

エミリアがハニカミながらも俺に故郷の恋人のことを教えてくれた。その会話の中で分かったのは、竜人族やエルフ族などの長命種は夫婦や恋人同士が数十年程離れることになっても、そこまで気にはしないということだ。人間にとつての短期出張みたいな感覚らしい

「それでね。このペンダントにはお互いの魔力を登録してあるから、思い人同士が相思相愛の間はこうして淡く光ってくれるの。だからどれだけ距離が離れていても、お互いの気持ちを確かめ合うことが出来るんだ」

エミリアと故郷の恋人は現在も愛し合っている。だからペンダントが淡く光っていると。異世界には便利なものがあるものだ

俺がそんなことを考えていると、エミリアが思いつめたような顔をした後に、意を決したように俺に言葉を続ける。どうやら何か真剣な話があるらしい

「……ねえ、ユーリ。……あなた、師匠と変な関係になつてない？」

どうやらエミリアに俺とユズハさんの関係がバレてしまったようだ。そりや所構わずいつもやりまくっていたしな。いつかこうなる日が来るのは分かりきっていた

「師匠には故郷に旦那さんがいるのよ。そういうのは良くないよ……」

誠実なタイプのエミリアは浮気や不倫といった俺とユズハさんとの関係を元の健全な関係に戻したいようだった。ものすごく悲しそうな顔をして俺を諭してくる。俺はこれを期に、エミリアの体にも手を出すことにした

「でも、お互いに合意の関係だしな〜」

「余計にダメだよ!」

俺の言葉にエミリアが怒りを表す。さて、どうやって彼女を墮とそうか

「うーん。じゃあ、エミリアが俺の相手をしてくれるなら考えるよ」

「何よそれ！」

エミリアが誠実であることを利用して、俺は彼女にユズハさんの身代わりになることを提案する。これにエミリアが乗ってくれば、彼女のことは体からじわじわと墮としていくことにしよう

「いや、エミリアが俺の性欲を満足させてくれるならユズハさんとの関係を考え直すってこと。俺とユズハさんの関係はお互いに合意の関係なんだから、エミリアが口をだすことじゃないよ。その関係にエミリアが横から口だけを出して、何もしないのは無責任だからね」

「……」

俺の言葉にエミリアが黙り込んでしまう。これはいけそうだ。俺は彼女を無視したまま会話を続けた

「だから、エミリアが俺を満足させてくれるならユズハさんとは何もしない。俺が譲つ

てあげられるのはここまでだよ。後はエミリア次第ってとこかな」

俺は強い口調でエミリアを突き放す。彼女は俺の言葉を聞きながら思いつめたようにして何かを考え込んでいた。責任感の強い女はこの方法で体を好き勝手に出来たりするから、案外チョロい

「……分かったわよ」

「ん？」

エミリアがポツリと、何かをつぶやいた。俺が彼女に言葉の続きを促すと、エミリアはしゅしゅといった様子で話を続けていく

「私が相手をしてあげればいいんでしょう？だからユーリもちやんと約束を守ってよね……」

エミリアが悔しそうな顔をしながら、俺の提案に乗ってきた。よし。彼女も俺の毒牙

にかかった

「うん。約束は絶対に守るよ」

俺は先程までの強い態度を一変させ、柔らかい態度と笑顔でエミリアに対応をする。こうして自分に都合がいい時にだけやさしく接することが、相手を言いなりにさせるコツだ

「じゃあこれから俺はエミリアの体を触るけど、いいつてことだね」

「……………いよ」

もにゆ♡もにゆ♡

エミリアからの合意をもらった俺は早速、彼女の爆乳を揉みしだくことにする。俺は立って会話をしていたエミリアの胸に向かって正面から無遠慮に右手を伸ばすと、彼女の着ているエルフ服の上から思う存分に、エミリアの胸にぶら下がっている彼女の柔ら

かい爆乳をふにゆふにゆと鷲掴みにしていく。俺の右手に収まりきれないくらいに、エミリアの爆乳はデカかった

「……………んっ♡」

俺は服の上からエミリアのノーブラのおっぱいのもつちりとした感触を存分に楽しんでいく。俺に胸を揉まれながらエミリアは、ときおり甘い声をあげていた

「……………っ♡……………っ♡」

依然として俺に正面から胸をモミモミとされているエミリアは、恥ずかしそうに俺から顔をそらして肩をすくませている。でも誠実な彼女は俺が体を触りやすいようにと、胸を張るようになっておっぱいを体の前に突き出し続けていた

「……………んっ♡……………でも、本番はダメだよ……………♡……………あっ♡……………っ♡……………っ♡……………それに、ユーリはルルルウちゃんとも関係を持つているんだから、少しは我慢しなさいよ……………あっ♡……………っ♡……………」

俺に胸を揉まれながらもエミリアが釘を刺してくる。どうやら彼女には俺とルルウとの関係もバレているようだ

「エミリアって恋人とエッチしたりしてた？」

「……教えない……あつ♡……んっ♡」

もにゅ♡もにゅ♡

おっぱいを鷲掴みにしながら、俺はエミリアに質問をしていく。彼女は俺の言葉に恥ずかしそうに顔を背けたまま、ツンとして教えてくれなかった

「そっか。じゃあエミリア。口で抜いてよ」

——ボロン

抜きたくなった俺はズボンを引き下ろすと局部を露出させ、エミリアに口でしてもら

うように提案をする。突然、室内にあらわになった俺のイチモツを見たエミリアが、驚愕の顔を浮かべて俺の提案を拒絶した

「——え?!口でって。そんな事出来るわけないじゃない!不潔よ!変態!」

どうやらエミリアは口ですするという行為自体を知らないようだ。他人の性器を口でくわえるなんて不潔以外の何物でもなく、そもそも目的自体が分からないらしい。俺はさっそく、エミリアの無知な心を調教していくことにする

「え〜。じゃあ何なら出来るの?本番もダメだしフェラもダメ。流石にそれはないよ」

「……男の人って、女の子の体を触っていれば満足するんじゃないの?」

俺のその言葉に、エミリアはキョトンとして質問を返してきた。どうやら俺が思っているよりも彼女は無知らしい。俺は彼女に質問をすることで、エミリアの無知度合いを測ることにする

「エミリアは恋人とは。故郷でどんなエッチなことをしてたの？」

「ハグをして、キスをして、……それだけで満足だつてジルは言ってくれてた……。ユーリは違うの？」

「どうやらエルフ族というのは性欲が薄いらしく、エミリアは相当なウブらしい。これは教育のしがいがある」

「ぜんぜん違うよ。もしかしてエミリアは、俺と師匠もそういう関係だと思ってた？」

「……うん。部屋で楽しくおしゃべりして、キスをして、お互いに愛し合うことにそれ以外の何かがあるの？」

「どうやらエミリアはエルフ族以外の性事情に関して大きな思い違いをしているらしい。これは楽しくなってきた。俺は彼女を俺色に染めてしまうために、エミリアへのセクハラを続けていく。ごめん。エミリアの彼氏くん」

「まあ、それはこれから知っていけばいいからさ。とりあえず今日はおっぱいでしてもらおうか。エミリア、ベッドに寝転んでよ」

「——本番はダメだって！」

「本番はしないから大丈夫だよ」

俺は警戒心を丸出しなエミリアをベッドに寝転かせると彼女の上半身に馬乗りになって、エミリアの着ている緑色のエルフ服をまくりあげる。そして胸の辺りにまで持ち上げた彼女の服の裾の部分から、エミリアの爆乳の谷間に勃起した俺のペニスを埋め込んだ。温かくてもっちりとしたエミリアのおっぱいで俺のチンポをふにゆふにゆと挟んでもらう。いわゆる着衣馬乗りパイズリってやつだ

俺はエミリアにグーパンチ状態で彼女の腕にぶるんぶるんの爆乳を寄せてもらいながら、気持ちよくおっぱいの中で腰を振っていく。そうして俺は、エミリアのおっぱいマンコを堪能していった

「な、何よこれ〜!!!」

俺と肉体関係を持つようになり、初めて味わう強烈な性体験にエミリアが瞳をぐるぐると回してパニックになっている。自分の爆乳の谷間に他人のチンポが出たり入ったりするという行為は、ウブなエミリアにとつては今まで生きてきて想像もしたことがない経験なのだろう

「まったく……ユーリは変態なんだから……」

エミリアの顔が羞恥で真っ赤に染まっている。しかし、彼女はパイズリを続けながらベッドに寝転んだ状態で、自分の襟元から見えるおっぱいに他人のチンポが入りしているいやらしい光景を興味津々な顔で見つめていた

「エミリア。飲んでね」

「——へ?……んぐう……っ……う」

達しそうになった俺はエミリアの爆乳からペニスを抜き取ると、呆けている彼女の口の中に亀頭を突っ込み口内射精を始める。突然のことに驚きながらも、エミリアは従順に俺の命令を聞こうとして口を開けたまま、我慢をしていた

「んんんん……っ……っ……っ」

「ちゃんと飲んでくれなかったら約束は無しだからね」

自分の舌の上に出された俺の精液をすつごく嫌そうな顔をしたエミリアが口から吐き出そうとするが、俺は彼女に釘を刺す。俺の言葉を聞いたエミリアは驚愕の顔をした後に、訳が分からないといった顔で懸命に、口の中に出された俺の精液を飲み干そうと試行錯誤をしていた

「んぐ……んぐ……コクン……あんたあ……出しすぎ！」

「彼氏のと比べてるのかな？」

「ジルはこんなことしないもん！」

俺の言葉に怒りをあらわにしたエミリアが食って掛かってくるが、俺はそのまま彼女にセクハラを続けていく

「でも、彼氏の精液自体は見たことがあるんだ？」

「……発情期の時に少し手でしてあげたことがあるだけよ……。エルフ族は人間みたいに年中盛ってなんかいないんだからね……」

観念をしたかのようにエミリアが彼氏との性事情を告白してくれる。これで彼女の心から俺との境界線が一つ消えた。俺はさらに言葉を続けることで、彼女のプライベートルな意識へと、俺たちの関係を深く侵入させてしまう

「ふーん。じゃあ、エミリアは彼氏とエッチはしてたの？」

「……してない。あんたみたいに変態じゃないから胸でこんなこともしたこともない

し、口でしてくれって言われたこともない。私とジルは抱き合ってキスをしていればそれで十分なの。それが純愛。本番だって結婚をして、子供を作る時にすればそれでいいんだから……」

エミリアがうつむきながら唇を尖らせるようにして告白を続ける。先程、肌を重ねたことで意識の上では警戒を続けていても、無意識の中では俺に親近感を持つようになってきた証だ。少しずつ、彼女の心への侵入が成功している

「そうなんだ。でも、俺の精液を飲んじゃったね」

「あんたは！変態すぎなの！」

茶化すような俺の言葉にエミリアが反応し怒りを見せるが、俺はそのままエミリアとの会話を続けてしまう。こうして、彼女が俺との関係から抜け出せなくなるまで肉体関係を続けていくのだ

「でも人間の間では女の子が男の精液を飲むのが普通なんだよ。師匠もいつも俺の精液

を飲んでくれるし。エミリアが俺の精液を飲んでくれないんだったら、今日の約束は無しだからね。エミリアが断るなら、俺はエミリアの代わりに師匠との関係が続けていくよ」

「……分かったわよ」

仕方なしといった様子でエミリアが俺の言葉に同意をした。これで言質は取れた。これから少しずつ、エミリアの体を変えていこう

「エミリアは初めて俺の精液を飲んだわけだけど、どんな味だった？」

「……変な味。少し苦くてしょっぱい」

俺に性的な質問をされ、精液を飲んだときの味を思い出したエミリアの顔が少しポロポロと赤くなっている。初めて味わう性の体験に、本人に自覚なく彼女の体が興奮をし始めていた。俺はこうして無意識の部分から、エミリアの心を侵食していく

「でも今日のエミリア、すっごく可愛かったよ。俺、エミリアのことが好きになりそう」
「——ば、ばか！変なこと言っていないで、さっさと寝なさいよ！」

俺がエミリアのことを褒めると、突然のことに面を食らった彼女が恥ずかしいことを隠すようにしてベッドに潜り込んでしまう。もう夜も遅い。今日のセクハラはこれくらいにしておくか

これから少しずつ、エミリアの体を調教していくことにしよう

エミリアを性的に開発♡

「……ユーリ。こんなこと本当に意味があるの？」

俺は宿屋の一室で今日も相部屋になったエミリアを裸にし、ベッドの上に仰向けに寝かせている。彼女の胸の上には柔らかかそうな爆乳がふにゆりと垂れてぶら下がっており、それが素晴らしい

「この前エミリアが、人族が何で体を弄り合うのか意味が分からないって言ってたじゃないか。今日はその意味をエミリアに教えてあげるよ」

「そんなの知りたくないよ」

困った顔をしながら恥ずかしそうにエミリアが俺に声をかける。この前、人妻であるユズハさんに手を出さないと約束した代わりに、エミリアは俺の言いなりになっている

ため彼女は何も出来ない

「まあまあ、リラックスしてさ」

「恥ずかしくて出来ない！」

俺はふてくされるエミリアのお腹をなでるようにして両手でマッサージを始める。魔術師であるエミリアのお腹周りは少し垂れてはいるが、若さゆえに引き締まっていた

「ダイエット効果もあるからさ。安心してよ」

「……………もう！」

俺から顔をツンと反らしたエミリアがそう返答をする。しかしダイエットという言葉葉を聞いた途端に、エミリアから少しだけ警戒心が薄れた

俺はエミリアのお腹周りを中心に、薬液創造スキルを使いながら彼女の体にたつぷり

と媚薬オイルを塗り拡げていく。このオイルはエルフ族が発情する成分をたっぷりも含んだ特別製だ

「……………んっ♡……………くっ♡」

お腹の周りから脇腹、脇の下、腕、太ももと媚薬オイルをねつとりと塗り拡げていく度に、エミリアの口から漏れる甘い吐息が強くなっていく。自分の体の状態が変化していくことに疑問を持ったエミリアが、俺に疑問をぶつけてきた

「ねえユーリ……………。ちよつとこれえ……………おかしくない？……………んっ……………あっ♡」

「エミリアの体がポカポカするのはダイエット効果がある証拠だよ。体はどんな感じ？」

「……………んくう……………♡……………知らないいい……………あっ♡……………っ♡……………っ♡」

エミリアは初めて体験するであろう未知の快感に戸惑い、気持ちよさに耐えるように

して体をすくませていた。当然、恋人でもない人間に自分の痴態なんて誰も見せたくはないだろう。しかしまだマッサージュは始まったばかりだ。俺はさらにエミリアのふくらはぎや足全体、肩や首周りにまで媚薬オイルをたっぷり塗ってしまおうことにする

「んふう……♡……あつ♡……はあああ……♡」

さらにエミリアの吐息が熱くなっていく。警戒心を持ち続けていた彼女の顔がポツポツとしたものに変わり始め、次第にエミリアの澄んだ青い瞳も濡れたようにとろんと濁っていく。媚薬オイルの効果が現れてきたようだ。俺は彼女を快感の世界に導くべく、今度はエミリアの大きな乳房を両手で揉みしだくようにして、彼女のプライベートな部分にまで俺特製の媚薬オイルを塗り拡げていった

くにゅん♡くにゅん♡

「くふう……♡ユーリい♡いま、そこらめえ……♡」

エミリアの爆乳が俺の手のひらによって押し潰されながらぷよんぷよんと変形していく。俺におっぱいをマッサージされ始めたエミリアが、切なそうな声を上げ始めた。彼女は我慢しようとしても、どうしても声が出てしまうことが恥ずかしいらしく、両手で必死に口を押さえながら目をギョツとつぶっている。それでもエミリアは、俺におっぱいを揉まれながらあえぎ声を出し続けた

「ふくううううううう　♡——あつ　♡——あつ　♡」

コリ♡コリ♡

俺がエミリアの固く勃起した乳首を指でつまんだ瞬間に、彼女が大きくよがり出す。エミリアはとても恥ずかしそうに体をビクンビクンと震わせながらも、ベッドの上では俺のなすがままだ。これは調教がしやすくて助かる

そして少しずつではあるが、羞恥心ではなく快感によって、エミリアの顔が赤く火照り始めていった

「エミリアはどうしたの？ 気持ちいい？」

俺は顔を真つ赤に火照らせてベッドの上で弓なりに体を反らせているエミリアに質問をぶつける。彼女は両手で必死に口元を押さえながら、目をギュツとつむつたままの状態で気持ちよさそうな声を出しながら、俺の質問に答えてくれた

「分かんないいい♡分かんないよおお♡……あつ♡……んっ♡」

初めて味わう快感で頭がいつぱいになってしまっているエミリアをここからさらに言葉で責めることで、俺は彼女の心を調教していく

「乳首、彼氏に触られたことはないの？」

「そのときはああ……♡こんな風じゃなかったあ……♡こんなの知らないよお……♡……らめえ……♡」

エミリアが切なそうにギュツと瞳を閉じながら、ウブな彼女には強すぎる快感に身悶

えている。でも、ここからが本当の始まりだ

俺はさらにエミリアへの敏感な部分へと手を伸ばす。彼女は徐々に自分のデリケートゾーンに向かって進んでいく俺の右手に一瞬だけ体をビクつかせたが、好奇心に負けてしまったのか観念をしたかのようにため息をつくとき、エミリアが自然と股を開いた

もうこれでエミリアは俺から逃れられない。彼女自ら、泥沼へとハマった

「人族が体を触り合う理由が分かった？」

「分かったあ♡分かったからあ♡もうやめてええ♡……んんっ♡……っ♡……っ♡……っ♡」

表面では忌避感を見せているエミリアに言葉を使って彼女の心をさらに汚しながら、俺は指先で焦らすようにしてエミリアの陰毛をくすぐる

俺に股間を触られることに嫌がる態度を見せながらも、羞恥心で真っ赤に火照っているエミリアの表情はこれから自分が味わうであろうとてつもない快感への期待で、少し

だけニヤけてしまっていた

「ダメだよ。エミリアにはこれからもっと気持ちよくなってもらうからね」

「いやあ……♡」

言葉では抵抗を見せるが、エミリアはベッドの上では無抵抗のまま、股を開いて俺に体を触らせ続けていた。彼女の体は俺に陰部を触られることを心から望んでいる。俺は身悶えたままのエミリアの体を安心して、俺専用のおちんぼケースに開発していくことにする

ふにゅん♡

「ひゃあああああああ♡あつ♡あつ♡そこは……らめらよお……♡」

俺の右手がエミリアのおまんこに触れた瞬間に、彼女はたまらずに声を上げた。すでにエミリアのおまんこは潤いきっている。彼女の股間にある割れ目には、零れ落ちそう

なくらいのヌルヌルとした愛液が溜まりきっていた

俺はエミリアの取り繕った嫌悪感を示す言葉を無視したまま、人差し指と中指を彼女の陰唇に這わせ、エミリアの股間の割れ目をぬるぬると開いて弄くつていく。いやらしく円を描くようにして彼女のデリケートゾーンをクニクニとやさしく変形させながら、俺はエミリアのおまんこ全体に媚薬オイルと愛液を潤沢にベトベトになるまでいやらしく塗り拡げていった

「エミリア。気持ちいい?」

「……………知らない!……………っ♡……………っ♡」

すっごく嫌だけど体が求めるから仕方なくといった様子で、エミリアがベッドの上で大股を開き、無抵抗のまま俺に股間を弄らせ続けている。彼女の心がまたひとつ、汚れた

媚薬オイルでの発情と俺の言葉責めによってエミリアの心から、少しずつ理性のタガ

が外れていく。しかしエミリアは、まだそのことに気付いていない。俺に股間を好き勝手に触らせている時点で、すでに異常なのだ

俺はそんなエミリアの様子を確認すると、彼女への調教を次の段階に移すことにした
「今度はエミリアに、異性の性器を口で啜える意味を教えてあげるね」

かぶう♡

「……へ？ だつ——だめっ！ そこは汚いからあああああ!!!——あつ♡
ああああああああ♡……あつ♡あつ♡あつ♡」

くふ♡くふ♡♡

俺の言葉に忌避感を見せたエミリアが股を閉じるより先に俺の頭が彼女の股間にはまり込むと、エミリアのおまんこへの人生初クンニが開始された。自分のおまんこに他人の顔をうずめられるという、はしたない行為に耐えきれないエミリアが必死に俺の顔

敏感な部分を舌で舐められるという初めての体験に、エミリアが心地よさそうに体をすくませながらビクビクと体を痙攣させ始める。エミリアの気持ちよさそうな様子に安心した俺は彼女のポチっとして固くなったクリトリスを舌先でいじめるようにしてクニクニとやさしく舐め潰しながら、エミリアがもつと気持ちよくなれるようにと口内でやらしくこねくり回していく

コリ♡コリ♡コリ♡

「——あつ♡……はああああ♡——んくううううう♡」

俺に舌でクリトリスを弄ばれ始めた瞬間に、エミリアの体がゾクゾクと大きく震えだす。彼女は今、人生で一番気持ちよくなっていた

「気持ちいい?」

「気持ちいい♡これえ♡気持ちいいけどおおおお♡おっ♡ほっ♡」

俺の頭を押しつけようとするエミリアの力が徐々に弱くなっていく。彼女の体から、強すぎる快樂によって力が抜け始めた。後はエミリアの心から抵抗が消えるまで、彼女をよがらせればいい

「じゃあ、もつといっぱい気持ちよくしてあげるね」

「んふう♡あつ♡あつ♡ダメだつてええええ♡——あつ♡——あつ♡」

俺の顔を押しさえつけようとするエミリアの両手から力が完全に抜け切ると、今度は必死に俺の頭に両手でしがみついてくる。まるで彼女が自分の股間に俺の頭を望んで押し付けているような形だ

エミリアはおまんこをクンニされるといふ強烈な快感から逃れようと体を後退させ、上半身を起こして壁にもたれかかるようにしながらベッドの上で大股を開いて俺からクンニを気持ちよさそうに受け続けていた

くんぶん♡くぶん♡

「これえ♡……すつごい♡……わたし♡……気持ちいいのお♡……止められなくなっ
ちやつたあ♡……でもお♡……あつ♡ユーリとはあ……体だけの関係♡……だからあ
……♡……あはあ♡……大丈夫なんだあ♡……ジルう……ごめんね……」

発情成分が体に回りきり、理性的な判断ができなくなってしまったエミリアが俺のク
ンニを夢中で味わいながら何かをつぶやいている。瞳をドロリと快楽で濁してしまっ
た彼女はときおり嬉しそうな声を上げながら、生まれて初めて他人におまんこを舐めら
れ続けるという性の快感を貪っていた

「——あつ♡——あつ♡——あつ♡……ユーリい♡何これえ♡……何か……くるう……
♡」

ベッドの上に起き上がるようにして壁に上半身を寄りかからせたままのエミリアが、
股を開いてクンニをされたまま切なそうな声をあげる。クンニを続けている俺にも彼
女のお腹の当たりがヒクヒクと収縮運動をしているのがすぐに分かった

「エミリア。それはイクっていうんだよ。人族はイクのが気持ちいいからこうやって体を弄り合うんだよ。イクときは、思いっきりイクって言ってごらん」

俺はエミリアに都合の良い知識を教え込んで彼女を俺好みの女に変えていく。性に無知で素直なエミリアは、俺の言葉を受け取るとたまらずに気持ちよさそうな声を出し始めた

「うん♡イクう……♡あつ♡……すっごい……♡イクう……♡」

気持ちよさそうに天井をとろんと見上げているエミリアに俺はとどめを刺すように、舌先でクリトリスを激しくいじめ回していく。彼女のおまんこが俺にクリトリスをネトネトと転がされる度に、ヒクヒクと収縮をしていた

「ジルう……わたし……♡あつ♡今からあ……♡イツちやう♡……♡よお……♡ごめんね……♡これ♡……♡すっごく♡……♡気持ちいいんだあ……♡……♡もう……♡だめえ……♡イクう……♡……♡……♡……♡……♡——♡あつ♡——♡あつ♡——♡あつ♡」

何かをつぶやいていたエミリアが激しくなったクンニに嬉しそうな声をあげだす。俺はエミリアのエッチなよがり声を聞きながら彼女のクリトリスを執拗に責め、ぐにぐにゆと押しつぶすように舌先でこねくり遊んで、彼女をオーガズムにまで導いた

「♡——あつ♡——あつ♡——あつ♡……イクっ♡イクっ♡イクっ♡イクっ♡イクっ♡イクっ♡……イクううう……♡」

ビクン♡ビクン♡

両手でギュッと胸元のペンダントを握りしめながら、エミリアが俺のクンニでイッた。多分、人生で初イキだろう。いざれ彼氏とステップアップしていくはずだったエミリアの性経験が、俺によって段飛ばしで増えてしまった

エミリアはイキ終わった後に寄りかかっていた壁から上半身をズリ下ろすようにしてベッドに寝転ぶと、彼氏からのプレゼントである相思相愛のペンダントを両手で力強く握りしめたまま、呆けたように天井を見上げていた

「どうだったエミリア？どうして人族が体を触り合うか分かった？」

「……うん♡……すごかった……♡」

マツサージが終わって服を着た後もブーツとしたまま、火照った顔でベッドに腰掛けているエミリアに俺は尋ねる。すると彼女は感慨深いといった様子で今の正直な気持ち俺に教えてくれた。どうやら彼女は俺との肉体関係をお気に召したらしい。俺は生まれて初めての体験を終えたばかりのエミリアに畳み掛けるようにして、悪魔の誘惑を重ねることにした。ここで彼女をどっぴりと快樂の世界に墮としてしまおう

「もう一回する？彼氏には内緒にするからさ」

「……」

俺の言葉を聞いた瞬間にエミリアの心に葛藤が生まれたのが分かった。俺は黙って彼女が出す結論を待つことにする。しかし一回俺と行為に及んでしまったという事実と、故郷で待っている恋人から遠く離れた旅先にいるという環境が、彼女の心をすで

墮落させていた。後は正直、エミリアの心の整理が終わるのを待つだけである

……。

……。

……。

「……お願い♡」

こうしてエミリアは俺との関係に溺れていった。後はどうやって、彼女の心を墮としいこうか

……。

……。

……。

「……………イクう……………♡」

もつと気持ちよくしてとおねだりをするエミリアへの性的なマッサージは深夜まで続く。彼女は生まれて初めて体が性的に高ぶるといふ体験にどっぷりとハマり込んだようで、俺からのクンニ、手マンを思う存分に楽しんでいた

全裸になっても絶対に外すことを拒否していた彼氏からのプレゼントである青色のペンダントは、今は汗をかいて邪魔だからという簡単な理由でエミリアの胸元から外され、俺に体を弄くられるために脱いだ彼女の下着と一緒に床に放置されている

少しだけそのペンダントが放つ淡い光が弱くなっていることに、エミリアはまだ気付いていない

堕ちていくエミリア♡

エミリア視点

やってしまった……

昨日はユーリに乗せられてとんでもないことをしてしまった。絶対にもうあんなことはしない……。ごめんね……。ジル……。昨日のことを思い出し、罪悪感に苛まれた私は心の中で故郷の恋人に謝る

「まあまあエミリア」

今は夜だ。野宿をしている私達はルルルウちゃんやんと師匠に見張りを頼み、私とユーリは馬車内で休憩をしていた。ユーリは私の罪悪感なんて気にしていないかのように、今日も私に命令をしてくる

「今日はエミリアが口してよ」

——ボロン

無遠慮にユーリが馬車の中で局部を露出し始めた。最低だ。この前、胸で行為をされたときも思ったけど、何であんなに大きいのか？ ジルに見せてもらったときはちっちゃくて可愛いつて思ったのに……。男の人のモノって本当はあんな風なの？

「エミリアがしてくれないんだつたら師匠にしてもらうからいいよ。それに昨日は俺がエミリアの口でしてあげたんだから、お返しをしてくれないと」

これを言われると弱い。私がユーリを満足させる代わりに、ユーリは師匠と不倫はしないという約束だ。私が少し我慢をしていけば、そのうち彼も飽きてこの関係も終わるだろう

ムワリ♡

馬車内のベッドに腰掛けるユーリの足元に座って彼の股間に顔を近づけると、すつごく雄臭い匂いが漂ってくる。でも、嫌なはずなのに何故かこの臭いを嗅いでいると頭がポーツとしてきて、何も考えられなくなってしまふ。何でだろう……

はむ♡

どうしても嫌なのに我慢できなくなり、私はユーリのアソコを口に啜えてしまった。心には嫌悪感がいっぱいなのに、口の中はすつごく美味しい。私はその心地よさに耐えきれなくなつて、夢中で彼のペニスを舐めてしまった

……じゅるるる♡……じゅるるるるる♡

どうしよう……。美味しくて止められないよお……

ずっとユーリのチンポをこうして口に含んでいたい。私の頭の中には、何でかこういう思考が生まれてしまふ。私が自分の意識に抵抗をするように恋人であるジルの顔を

思い浮かべようとしても、どうしても目の前にあるユーリの陰部に夢中になってしまう
……

彼のペニスを舐め啜えながら鼻腔に漂ってくるユーリの体臭が、私をたまらなく興奮させてしまう。何で……？

ズゾゾゾゾ……♡ズゾゾゾゾ……♡

私はユーリに上手なフェラのやり方を教えてもらいながら、彼のアソコにフェラチオをしていった。この行為をそう呼ぶのだそうだ。ユーリに教えてもらった

「上手だよ。エミリア。これなら彼氏も喜んでくれるね」

ユーリがふざけたことを言いながら私のフェラチオを褒めてくれる。でも、ジルが喜んでくれるっていうのは確かに嬉しいかな

「エミリア。出すよ」

「んっ……っ……っ」

ユーリが私にそう宣言すると、口に咥えていた彼のペニスの先からネットネットとした液体がピュツピュツと飛び出してくる。口の中に出されたユーリの精液は生温かくて、ヌルヌルと口の中にくっついてくるけど何でかすっごく美味しかった。私が女であり、メスであるという本能が刺激されて、意識が高ぶる

苦くてしょっぱいだけに、ムワリとしてこもったユーリの精液の青臭い匂いが口から鼻にかけてを抜けていくと、私の体がかれをもつと欲しいと求めて、嫌なのに全身がムズムズとしてしまった

コクン♡

口から吐き出したけれど仕方なく、ユーリに命令をされるから彼の精液を飲み干してあげる。本当は飲みたくなかってないんだからね……本当よ……

「それじゃエミリア。ありがとう！」

私は睡眠を8時間取ったのと同じ効果のある回復魔法を彼に掛けてもらい、馬車の外に出る。正直ユーリのこの魔法には助かっている。これがなければ睡眠不足で大変だからだ

師匠と交代で外の見張りにつくと、焚き火に当たりながら見張りをしているルルルウちゃんが鼻をひくつかせた後に、私に指摘をしてきた

「エミリア。口からユーリの精液の臭いがすっごいしているよ♡さつきまで舐めてたでしょっ!」

「——えっ?!——えっ?!——えっ?!——えっ?!——えっ?!」

突然、ルルルウちゃんにユーリのアソコをフェラしてあげたことを指摘をされた私はパニックになってしまう。そう言えばルルルウちゃんは鼻が強いんだ……

どうしよう……。確かルルルウちゃんとユーリは恋人同士じゃなかったけど……？いつもイチヤイチヤしているし、詳しく詮索するのはマナー違反だから聞かないけど、きっとそうだろう。まずい……。ルルルウちゃんに怒られる……

「エミリアも早くユーリの女になつちやえばいいのに……。すつごく気持ちよくしてもらえるよ？」

私の心配を他所に、ルルルウちゃんは私をそそのかす方向に話を進めた。そういえばエルフの国以外では一夫多妻制の国もたくさんあるし、ルルルウちゃんにとっては普通のことなのかな？

私は心の罪悪感が一つ取れたことに、ホッと胸をなでおろす

「そろそろ交代の時間」

私がルルルウちゃんと他愛のない話をしていると、ルルルウちゃんが休憩をする時間になる。ということは、私がまた、ユーリと二人きりになるということだ

「エミリア。アソコからすつごいメスの臭いがしてるよ♡ユーリに気持ちよくしてもらっちゃえ♡」

見張りを終えたルルルウちゃんが私の耳元で楽しそうにささやくと、テクテクと歩いて馬車に戻っていく。もう！私には恋人がいるんだからね！

でもユーリの精液を飲んでから、私の体がポーっとして仕方がない。昨日みたいにユーリにイカせてもらえれば体がスツキリする。ルルルウちゃんと見張りをしている間、そんなモヤモヤが私の中にくすぶり続けていた。

「エミリア。さっきの続きをしようよ」

そんな私の気持ちを見透かしてか、ユーリが軽やかな口調で私を肉体関係に誘ってくる。でもこの誘惑に乗ってはいけない。恋人のジルが私を故郷で待っているんだから

「……………」

私がユーリの提案を断ると、彼は気にすることなく、それが何でもないことのように会話を続けていく

「そつかく。残念。エミリアのアソコをクニクニユってすると、エミリアの体が甘くて幸せな気分になれるのになく。昨日みたいにおまんこをゾクゾクくって気持ちよく、エミリアはしたくないの？」

……ゴクリ♡

昨日、ユーリにマツサージをしてもらったときの感触を思い出して、私の股間がムズムズし始めてしまった。すっごくくつらい。でもダメだ。この誘惑に乗ってしまったら本当にジルを裏切ることになる。それだけはしちやいけない！

「……大丈夫」

「そつかが分かったよ。俺はエミリアの意思を尊重するから。でも気が変わったら言っ

ね」

私が断ると、ユーリは簡単にそれを受け入れてくれる。しつこくしないのが、彼のいいところであつた

「昨日は気持ちよかつた？それだけ教えてよ？」

夜の見張りを続けながらユーリが私に尋ねてくる。彼のその言葉に、再び私の体がマッサージをされたときの、あの気持ちいい感覚を思い出してしてしまい切なくなる。私のアソコがキユンと締まつた

「……デリカシーがないわよ……。ユーリ……」

「そっか。ごめんね」

ユーリはしつこく聞き出そうとすることもなく、すぐに質問を引つ込める。もう！お腹の中心がジンジンしてたまらないよお……。どうしよう……。すつこくはしたない

のに、一人で隠れてアソコを弄くりたくて仕方がない。こんなこと、初めてだ……。私の体、どうなっちゃたの……？

「エミリア。顔が赤いよ？」

「知らないわよ……」

ユーリにとつても恥ずかしい指摘をされる。彼のアソコを口に咥えて精液を飲んでから、私の体が快楽を求めて仕方がない。でも我慢しなきゃ。これはジルのためだ。私は胸元に光る相思相愛のペンダントを握りしめて、この誘惑に耐えることにする

「大丈夫？見てあげようか？」

そう言うとユーリは私の正面から隣に移動し、私が座っている丸太の隣りに座ってくる。彼の体臭が風にのって私の鼻に届いた瞬間に、私の体はさらに熱く火照った

（何で……私の体はユーリに興奮しちゃうのよお……？）

さらに熱く火照り始める自分の体にわけが分からないまま、私はどうしても動けなくなってしまう。混乱している私のアソコに向かって、彼の手が伸びてくるのが分かった。やった！触ってもらえる！私の意識に最初に出てきたのはその感想だった。私は、はしたない自分が嫌になる

「だ、ダメだよお………」

言葉では抵抗をするが、今すぐにユーリの手で私のおまんこを触ってほしくて仕方がない。彼なら無理やり触ってくれる。私はそのことを望んでいた。しかし私のその思いとは裏腹に、彼はあっけなく私の言葉を受け入れてしまう

「そっか！ごめんね！」

触ってもらうことを期待した私の体が、興奮の最高潮に達してしまった。どうしよう……。もうどうしても我慢ができない。体がうずいてつらすぎる

「でも、ユズハさんのためだからさ。……ね？」

その時、ユーリがユズハさんのことを持ち出す。そうだ！私はユズハさんのために我慢をしなきゃいけないんだ！

ユーリの言葉を聞いた瞬間に、私の心に薄汚れた悪巧みの心が生まれた。そうだ。ユーリを手玉に取ればいいのだ。彼の言いなりになる演技をして体を慰めてもらえばいい。私の心は責任を取らずにどうユーリと浮気をするか。そのことでいっばいになつていった

「そ、そうね。ユズハさんとユーリの間係を終わらせるために、私の体を好き勝手していいって話だったわね……」

私は平静を装いながら彼の提案に乗るふりをする。脅されて仕方なく。そう言い訳すれば私は何も悪くない。ジル……。ごめんね……。彼に脅されて仕方のないことなの。これは人助けなのよ……

「じゃあエミリア。その木に寄りかかって立ってよ」

「し、仕方ないわね……ユーリは変態なんだから」

私はニヤけそうになる顔を隠しながら、ユーリの命令どおりに立ち上がると近くの木に寄り掛かる。するとユーリは私の下着をズリおろし、スカートの中に顔を入れ始めた。彼の生温かい息が私の敏感な部分に触れ始める。これから私の股間に訪れるであろうずつと欲しかった快楽のことを考えると、平静を装っていても、どうしても鼻息が荒くなってしまう

私の仄暗い期待は、最高潮に達していた

はむ♡

「はうううう♡」

ついにユーリの唇が私のおまんこに触れる。その瞬間に最高に気持ちがいいゾクゾク

クとした感覚が私の体を駆け巡った。ずっとこれが欲しかった。私の心は男を手玉に取って自分のおまんこを舐めさせているという万能感によって、かつてないほど興奮をしている

くぷ♡くぷ♡くぷ♡

(あっはあ♡これえ♡…：気っ持ちいいいいいい♡)

生温かいユーリの口内に私のおまんこ全体が包まれると、温かくてむず痒くて、心地が良い快感が私の全身を駆け巡っていく。背中がゾクゾクとして、その寒気がたまらなく気持ちがいい。最高の気分だ。我慢をしていた分だけ、私の心に解放感と爽快感が解き放たれていく

「んっ♡—あっ♡」

私のアソコの割れ目の間を生温かいユーリの舌が這い回っていく。私の陰唇が割れ目ごとクニクニと柔らかく変形をさせられるたびにものすごい快感が私を襲い、目

の前がチカチカと光った

敏感な部分をユーリの舌に舐め回される度に心地よいゾクゾクが私の体に積み重なっていく。私の頭の中は、あつという間に体が気持ちいいという快楽のことだけで真っ白になった。そのことに私は安堵をする。だって、ユーリにおまんこを舐められていると、故郷で私を待っているジルへの罪悪感を全部忘れられるからだ

「ひゃあああああ」

私のアソコの上側にある敏感なクリトリスにユーリの舌が這い回り始める。昨日はじめてユーリにアソコを舐められて分かった。これって、すっごく気持ちいい♡

(気持ちいい……♡気持ちいい……♡気持ちいい……♡気持ちいい……♡)

私の目の前が全部、快楽色に染まった。敏感な股間を舌でグニグニと押しつぶされ続けるのは、それだけ最高に気持ちよかった

「静音の魔法を周囲に掛けたから、思いつきり声を出しても大丈夫だよ」

「……………えっ♡……………本当？」

ユーリの補助魔法はかなりの高レベルである。そのことに信頼をおいていた私は馬車で仮眠をとっている師匠とルルウちゃんにこのことがバレないと分かると、思う存分クンニを楽しんでしまうことにした。もう、ジルのことなんてどうでもいい

「あはあ♡……………あっ♡あああああ♡そこお♡……………すっごい♡おほおおおおおお
「♡」

異性にアソコを舐め回されるといふ快感を知った私は、夢中でクンニを貪ってしまった。もう純粹だったときの私には戻れない。それだけは簡単に分かった

「——あっ♡——あっ♡——あっ♡——あっ♡——あっ♡——あっ♡」

私のクリトリスを舐め回すユーリの舌使いが激しくなっていく。……………私のおまん

こお……グチャグチャになつてる……

「——あつ♡——あつ♡——あつ♡——あつ♡——あつ♡——あつ♡」

どうしよう……エツチな声が止まらないよ……。ユーリが両の親指で私の恥骨を強く押し込みながら剥き出しにしたクリトリスをグニユグニユとこねくり回すようにしていじり始めると、私のクリトリスが濁流のように潰され、舐め回されていく

その度に私の脳には直接殴られているかのような強烈な快感が襲い、腰が砕けるような感覚とともに私の腰がヘコヘコと勝手に後ろに逃げようとする。でも、木に寄りかかっている私の腰にはどこにも逃げ場がない

(……だめだ……これ……イカされる……♡)

私は内股になりながら両手を後ろに回すと、アソコをゾクゾクと舐め回されながらも必死に後ろの木にしがみついた。もう今の私には、それしか出来ない

——ボロン

地面にアヒル座りになってふにやけた体の余韻に浸っていると、私の目の前にユーリの局部が露出される。でも、今回は嫌じゃなかった。『今度は』彼はそう言ったからだ。彼のアソコを気持ちよくしてあげれば、もう一度私のアソコを気持ちよくしてもらえ。その報酬が、私の心を簡単に突き動かした

——はむ♡じゅぽお♡じゅぽお♡

私は自分でも驚くくらいに何の躊躇もなくユーリのチンポを啜えようと、彼に教わったとおりにフェラチオをしてあげる。早くもう一度ユーリに私のおまんこをゾクゾクと舐めて欲しい。私の体をもつと気持ちよくしてもらいたい。私の心は、そのことだけでいっぱいになった

気がつく朝になっている。結局、師匠とルルルウちゃんが馬車から起きてくるまで、私達は交代でお互いの性器を舐め合っていた

私の体臭に気付いたルルルウちゃん、ニマニマと私を見つめている

体の火照りが収まり、冷静になった私の心には、ジルへの罪悪感がチクリと渦巻いて
いた

エミリア墮とし♡

「ねえ……」

「何？」

俺とエミリアは現在、雪山で遭難をしていた。旅の途中に見かけたピューイ霊峰という山に突然、師匠が登ろうと言い出したのだ。修行のためである

そして俺たちは登山の途中に雪崩に巻き込まれ、俺とエミリアはユズハさん達とパーティーを分断された。その後には俺たちは猛吹雪にあり、今は俺が魔法で作出したコテージの中で暖を取っている

ユズハさんとルルウとは遠話の水晶で連絡を取ることができており、彼女たちは無事に下山を終えていた。後は俺たちが下山をするだけだ

「さつきはありがとう……」

暖炉の火に当たりながらエミリアが俺に感謝の意を伝えてくる。彼女の声はしんみりとしていて、少し濡れていた

「雪崩から助けたこと？スノーウルフから逃げたときのこと？」

「どつちもよ……」

「どういたしまして」

この山にはピューイスノーウルフというモンスターが生息している。吹雪の中で俺たちは奴らに襲われたのだ。ピューイスノーウルフは雪山なのにウオーターボールを使って攻撃してくるといふ、いやらしいモンスターだった

スノーウルフの被害にあってしまった俺たちは、一枚しか毛布がないことを理由に

(俺の嘘)服を乾かしながらお互いに裸の状態一枚の毛布に包まり、暖炉の前で体を温めていた

俺が作った家の中は魔法的な処理により外の冷たい風は遮断をされている。後はウォーターボールによって冷えてしまった俺たちの体温が回復するのを待つだけだ

「ねえ……当たってる……」

「何が？」

「(ハ)ら……♡」

暖炉の前でエミリアの体を後ろから抱きしめるようにして包まれている毛布の中で、俺はエミリアのスベスベとした背中に勃起したペニスをこすりつけていた。もちろん、彼女を誘惑するためだ

「……だめ？」

「…………ダメじゃないけど…………」

今日は命の危機を二度救われたとあって、エミリアの言葉が弱い。むしろ、こちらになびいてすらいる。彼女の爆乳の間で輝く相思相愛のペンダントが、いつもより弱く光っていた

「しちやう?」

「…………それはだめ…………」

「どうして?」

「だって…………いやん♡」

洩るエミリアの言葉を待つ前に俺が彼女のおっぱいを後ろから両手で揉みしだくと、エミリアが楽しそうな声を上げる。どうやらこのままの流れで、彼女を墮とせてしま

そうだ

ふにゅん♡ふにゅん♡

「ユーリ♡ダメだよお……♡」

言葉では抵抗を見せるが、エミリアの体はまったく抵抗をしていない。彼女の心が俺と恋人の間で葛藤を始めていた。俺はこのままなし崩しで、彼女の体を墮とってしまうことにする

「エミリアのこころ、濡れているよ?」

「……あつ♡…………待って!……だめだつて!……っ♡……っ♡」

クチュ♡クチュ♡

俺が指を使ってエミリアのおまんこを弄くりだすと、彼女は気持ちよさそうに体をく

ねらせ始めた。俺から逃げようとエミリアが毛布の中で少しだけでもがくが、俺は後ろからエミリアをギュツと抱きしめて逃さない。そのまま彼女に手マンを続けていく

性的な興奮によってたつぷりと分泌をされ始めたエミリアの愛液をかき回すようにして、俺は右手で彼女の陰唇とおまんこを柔らかくほぐしていく。トロトロに潤った熱いエミリアの愛液が、彼女の膣口の周りをヌルヌルに湿らせていった

「——あつ♡——あつ♡……あつ♡……つ♡……つ♡」

俺の愛撫によってエミリアの体からふにやりと力が抜け始めた頃合いを見て、俺は一つの毛布で俺に背中を向けているエミリアの体を俺の方に反転させると、彼女と濃密なキスを交わす。俺はエミリアの意識を舌を絡め合いながら甘くトロトロに溶かしていった

「ユーリ……お願い……だめ……」

恋人同士のようにお互いを求め貪り合うキスをした後に、切なそうに瞳を濡らしたエ

ミリアが俺を見つめてつぶやいた。これはいける。そう直感をした俺は言葉を使い少
しずつ、彼女の忌避感を解きほぐしていく

「どうして?」

「だって……私には恋人が……」

やはりエミリアは恋人のことが気がかりなようだ。でも彼女は悩んでいる。我慢を
している。恋人が居なかつたら俺と今すぐにもまぐわいたい。エミリアの態度はそ
ういうメッセージを発していた。俺は彼女の心から罪悪感を消し去ることで、エミリア
と肉体関係を結ぶ計画を練る

「彼氏に悪いから?」

「……うん」

俺がやさしく言葉を掛けると、エミリアの心の中で彼氏に対する罪悪感がさらに大き

くなる。彼女はともつらそうだ。ここからエミリアの心をかき回すことで、彼女の心をグチャグチャに壊していけばいい

「その彼氏、エミリアにとって本当に必要？」

「……………え？」

想像もしていなかった俺の言葉にエミリアの目が点となる。そりやそうだ。いきなり自分の恋人との関係を否定されたんだから。でも俺はそのまま、彼女の心を傷つけながらも否定の言葉を続けていく

「だってその彼氏のせいで、エミリアは我慢ばかりしてるじゃん」

「……………ユーリ……………ひどいよ……………」

悲しい顔をして俺に反論をするエミリアではあるが、彼女の胸元に輝くペンダントの光がさらに少しだけ暗くなった。エミリアは常に絶対だと思っていた自分と彼氏との

関係を、ついに疑問視した。俺の誘導が上手くいつている

ここから彼女に都合のいい甘い言葉をささやくことで、俺はエミリアの心を完全に押し潰す

「エミリア。俺じゃダメ？」

「でも……私にはジルが……——っ♡——っ♡」

彼女に言い訳を探す間を与えないように俺はエミリアの震える唇をやさしく塞ぐと、暖炉から注ぐ赤い光の中で彼女とロマンティックなキスをする。俺の求めに応じるようにして、エミリアは貪るようなキスを返してきた

「——っ♡——っ♡……っ♡……っ♡」

俺はこうして既成事実を作ること、エミリアから逃げ道を塞いでいくのだ

「……ユーリ♡」

エミリアの瞳にハートマークが浮かぶ。彼女にはキスをしながら薬液創造スキルで作ったエルフ族が発情するガスを大量に吸わせたりもした。長い間お互いの体を強く弄り合っていたため、毛布の中に包まった俺達の体はそれだけで汗びっしりである

エミリアの瞳が裏切りの快楽によって無事、トロンと妖しく濁っていた。彼女の綺麗だった心がまた、汚れていく

「エミリア。おいで」

「♡……♡」

俺はアイテムボックスを使って室内にベッドを設置すると、エミリアの体をお姫様抱っこでやさしく仰向けに寝かせてあげる。発情とロマンティックなキスによって乙女の顔をしたままちよこんとベッドの上から動けなくなってしまったエミリアの体を逃さないようにして彼女の体に俺の体を覆いかぶせると、俺はそのまま彼女への誘惑を

続けた

「大切にすからさ……エミリア」

「……本当？」

ベッドの上で俺に追い詰められているエミリアの心は今、ぐるぐると揺れていた。彼女の胸元では彼氏との相思相愛のペンダントが弱い点滅を繰り返している。あともう少してエミリアを墮とせる。俺は甘いささやきを使ってさらに彼女の心を壊していった

「猛吹雪の中だし、誰にもバレないよ？それに今だけ。それじゃだめかな？」

「今だけ……？」

「そう。今だけ」

今だけ。誰にもバレないという俺の甘い言葉を聞いた途端に、エミリアの瞳が欲望で少し濁る。彼女の心が堕ちた。簡単に分かった。俺はさらに都合のいいだけの言葉を重ねて、エミリアの心をさらに駄目な方向へと進ませていくことにする

「ねえ、しちやおう？」

くにゆん♡

「——あっ♡」

俺はベッドの上で仰向けに寝ているエミリアのまだ未開通な膣口にペニスをの先をあてがいがい、さらに強い誘惑の言葉をささやく。彼女はベッドの上で股を開いたまま閉じないでいた。もう、エミリアの心は弱りきっている

俺の亀頭の先が彼女の生温かい膣口をくにゆりと開いた瞬間に、エミリアのおまんこがきゆうきゆうと、これが欲しいのと言わんばかりに吸い付いてきた。俺は自分の体からエルフ族が発情する成分をミストのようにたつぷりと分泌しながら、エミリアへの言

葉を続けていく

「エミリア。いつも俺がしてあげてるクンニより、セックスはもつと気持ちいいよ？し
たくないの？」

「でも……だめだよ……」

俺はペニスの先でエミリアの膣口をツンツンと突きながら彼女をさらに墮落させていく。その度に彼女のおまんこが俺のチンポを求めてヒクヒクとうごめいていた。エミリアは今、我慢の限界を迎えている。後はダムが崩壊していくように、彼女の心が流されるのを待っただけだ

「ユーリい……♡ずるいよお……♡」

俺の体臭をかいでさらに発情をしたエミリアの顔が赤く火照ると、あつという間に快楽に流された彼女の表情は快楽を求めるメスの顔に変わり、暗く濁っていく瞳のまま鼻息を荒くし始める

「責任は全部、俺が取るからさ。エミリアが俺に体を預けてくれるなら、俺がエミリアのこと、すつごく気持ちよくしてあげるよ」

「……♡」

なんとか自分の心の欲望に抗おうとするエミリアではあるが、俺の都合のいい言葉と強烈なセックスへの誘惑にはついに勝てずに、彼女はしばらく沈黙をした後で観念をしたかのように深いため息をつくとき、俺を受け入れるという選択をした

「……初めてだから……やさしくして♡」

潤んだ瞳で俺を見上げながら、ベッドの上で恥ずかしそうにエミリアがつぶやく。彼女がついに堕ちた。そのことに安心をした俺は遠慮なく、エミリアの処女をいただくことにする

「もちろん。ごめんね。エミリアの彼氏さん」

「いら♡言わないの……♡」

(いただきます♡)

俺はエミリアの膣口に当てていたペニスを強く押し込むようにして腰を前に動かすと、彼女の未開通で新品のおまんこにねっとり俺のチンポを挿入し、俺専用の道を作っていく。俺のペニスがエミリアのヌルヌルになった生温かいおまんこの中に埋まりこむ度に、彼女の膣道からは収まりきれなかった大量の愛液がよだれのようにこぼれ落ちてきていた。エミリアの体が、俺のチンポで立派な淑女になった

(ごめんなエミリアの彼氏くん。エミリアは俺とエッチしちやったよ)

——プツツ

「——あっ♡」

エミリアの処女膜が簡単に破れた。その瞬間に彼女の胸元で相思相愛のペンダントが淡く点滅を繰り返していく。エミリアの心が、俺の体を体内に受け入れたことでさらに揺れていた

「えへへ♡ユズハさんとの関係をダメって言ったのに、結局、私もユーリとエッチしちゃったね♡」

エミリアはおまんこの中に俺のチンポをみつちりと埋め込んだ状態で照れたように笑っている。初めて異性とのセックスを体験した彼女の心は、性に開放的に変わっていた

俺は処女を失ったばかりのエミリアの膣内に回復魔法を掛けると、彼女に痛みがないことを確認した後にピストン運動を始めていく。すぐにエミリアは彼氏への罪悪感など忘れて、気持ちよさそうに俺とのセックスであえぎ始めた

「あつ♡あつ♡……お腹の中あ♡熱いのが、出たり入ったりしてるう♡」

心地よさそうに瞳をとろんと濁して天井を見上げながら、エミリアが初めて自分の体内に異性の硬くなったペニスを出し入れされるといふ快感を堪能している。俺は興味深そうに初めてのセックスを味わっている彼女の心を汚すために、さらなる質問をした

「気持ちいい?」

「うん♡本当はね、ずっとユーリとエッチしたくて、我慢してたの♡」

エミリアが恥ずかしそうにそう告白をしてくれる。でもそれは知っていた。だって俺が毎日のように、エミリアにはエルフ族が発情してしまう強い媚薬を嗅がせ続けていたからだ。しかし俺は彼女にそんな素振りを見せることなく、そのまま肉欲の関係を続けながらエミリアと会話をした

「知ってた」

「……ばかあ♡——あっ♡——あっ♡」

ズチュ♡ズチュ♡

体が一つにつながったことにより、俺とエミリアは心の距離が一気に縮まっていた。猛吹雪の中で他に誰も居ない密室に閉じ込められているという環境もあるのかもしれない。体だけではない。セックスをしている俺達の心には、強い一体感のようなものが広がっていた

「エッチって、こんなに気持ちいいの♡……知らなかった♡」

「師匠が夢中になるのも分かる？」

「うん♡」

俺と恋人繋ぎで手を握って正常位で俺のチンポを股に咥え込みながら、エミリアがはにかんだように笑っている。順調に、エミリアの心は堕ちていた

「じゃあ、街に帰ったら俺とエミリアと師匠とルルウの四人でエッチしよっか。みんな

なで気持ちよくなろうね」

「ふふふ♡」

俺の提案にエミリアが楽しそうに同意をする。彼女の心がまた一つ汚れた。あれほど俺に止めさせようとしていたユズハさんとの肉体関係に関して、むしろエミリアは協力的になった

俺たちは猛吹雪の雪山の中で、仲睦まじいセックスを続けていく

（ごめんね……ジル。……ユーリとのエッチ……すつごく……気持ちいいの……♡）

寝取りチンポスキルの効果でエミリアの感情が俺の中に流れ込んでくる。彼女の心から少しずつ、裏切りへの罪悪感が薄れてきているのが分かった。俺はこのままエミリアの心を墮とす計画の次の段階へと進むことにする

「エミリア中に出しちゃおうか？」

「……それだけはダメ」

俺の中に出すという言葉に、エミリアは強い忌避感を示す。俺と肉体関係を結んではいても、彼女の心は故郷の彼氏のことを思っていた。でも俺は慌てない。ここからエミリアの心をドロドロに溶かしていくのが楽しいのだ

「彼氏のため？」

「……うん」

俺はエミリアへのピストン運動を続けながら、彼女に質問をしていく。どんな言葉でもエミリアのことは絶対に否定しない。全部肯定をし続けるのが、相手の心を溶かすコツだ

「エミリアはやさしいね。でも、エミリアのおまんこは中に出してほしくてヒクヒク動いてるよ？また、我慢してない？」

「……」

俺の言葉にエミリアは再び無言になる。彼女は悩んでいた。気持ちよくなりたいけど、やはり子種を体内に出すのは恋人ではなくては許せない。そんな葛藤を見せるエミリアの心に俺は都合のいい言い訳を用意してあげることにする。ここまで堕ちてきた彼女の心からそうやって責任を取り除いてあげれば、後は自然と意識が快楽に流れていくのを待てばいい

「命の危機を感じた時にエミリアの体が男の子種を欲しくなるのは仕方のないことなんだ。生き物の体はそういう風になってくるから、我慢しても毒なだけだよ」

「仕方のないこと？」

俺セックスを続けながら、エミリアがキョトンとした顔で聞いてくる。俺は彼女に都合の良い知識を教え込むことで、エミリアの心をさらに俺好みに墮落をさせてしまうのだ

「そう。それが生き物の本能なんだよ。エミリアが俺とこうしてエッチをして、中に出して欲しいって思うことは自然なことなの。何も悪くない。だから我慢する方が体にも、心にも悪いんだ」

「……あつ♡……あつ♡」

エミリアが切なそうにあえぎながら、俺の言葉に耳を傾けていた。少しでも心から罪悪感を消して楽になりたい。そういった彼女の心の隙間に俺は言葉の毒を注いでいき、エミリアをどっぷりと俺色に染めてしまうのだ

「それにほら。俺は避妊の魔法を使えるから、どれだけ中に出しても妊娠しないよ？これなら大丈夫だよ」

俺はエミリアの体に避妊の魔法をかけてあげる。するとすぐに、彼女の瞳が肉欲色に染まっていた。これはチエックメイトだ。妊娠の心配がないこと、周りには誰も居ない密室であるという状況が、エミリアの心を欲望に弱くしていた

「し、仕方のないこと……えへへ♡……仕方のないこと……♡」

俺の言葉を小さな声でエミリアが反芻をし、自分の心に都合のいい言い訳を始めていた。彼女の綺麗だった青色の瞳が性欲に溺れたメスの色に変わっていく。俺はそんなエミリアの心を押し流すために、さらに都合のいい言葉の濁流を彼女の意識に埋め込んでいった

「それに、絶対にばれないよ。だって周りには誰も居ないからさ。絶対に妊娠もしないし。エミリア。ダメ？」

「ダメ……でも……どうしよう……」

俺とのセックスを続けながら、暗く濁った瞳でエミリアが誘惑に耐えている。しかしもう時間の問題だ。俺は彼女の心に最後のとどめを刺すために、畳み掛けるようにしてエミリアへの誘惑の言葉を続けた

「それに、中に出すとすつごく気持ちいいよ?」

ゴクリ♡

俺の言葉を聞いたエミリアの顔が、おまんこの中に精液を出されるときに気持ちよさを妄想したのか、少しだけニヤける。すぐに分かった。彼女は堕ちたと

「みんなには秘密で、しちやお?ね?」

……。

……。

……。

「……うん♡」

この瞬間、エミリアはエルフからエロフになった

「じゃあ、中に出すよ」

「……うん♡いっぱい出して♡」

俺はエミリアのねっとり絡みついてくるおまんこにやさしい抽送を続けながら、彼女とセックスに関する会話を続けていく。俺に与えられる快樂によって、彼女の心はどっぴりと汚れ始めていた

「エミリアの彼氏に何か一言ある？」

「だめ……♡言わないで……♡」

「教えてよ。エミリア。お願い」

俺はエミリアにやさしくて濃密なキスをした後に、再び彼氏のことを尋ねる。セック

スの快樂と裏切りの気持ちよさと、俺との会話で心が汚れてしまったエミリアは、今までの彼女では絶対にしなかったであろう彼氏への穢れた告白をしてくれた。順調にエミリアの心は変わってきている

「ジル……ごめんね……今からユーリに……中出しされちゃいます♡」

「彼氏じゃない男に？」

俺は彼女のおまんこにやさしいピストン運動を続けながら、エミリアへの言葉責めを強めていく。俺の言葉を聞いた瞬間に、彼女の膣肉が仄暗い興奮できゅんと締まった。こうして俺はエミリアの心の中の彼氏との思い出を汚し、彼女の心からそれを追い出してしまふのだ

「——あつ♡——あつ♡……うん♡……彼氏じゃない男の人に……あつ♡……今からあ……♡あつ♡精液をお……♡……んっ♡中にい……あつ♡……出されちゃいます♡……ジルう……ごめんね……っ♡……っ♡」

(ジルごめんね……これ……最高に気持ちいい♡)

おまんこの奥に俺の精液を注がれているエミリアは、心地よさそうにニヤけて股を開いたまま体を震わせている。彼女は初めて味わう中出しの気持ちよさに、大いに満足をしたようだ

……。

……。

……。

「ジルと恋人をやめればエミリアは好きただけ俺とセックスをして気持ちよくなれるのに、何で我慢しているの？旅の仲間みんな俺の女になれば、すっごく楽しいよ？」

エミリアが初体験を終えた後になり、裸のままベッドの中で彼女に腕枕をしながら俺はエミリアに無神経な質問をぶつける。彼女は俺の腕の中で俺の体に愛おしそうにし

がみついたまま、無言で考え事をしていた

「……」

エミリアの瞳が暗く濁っていく。彼女の胸元で淡い光を放ち続けていたペンダントが再び弱く点滅をし始めると、か弱くなった光が消えそうになる。エミリアは今、流されていた

「でも……」

寸前でエミリアは踏みとどまる。彼女のペンダントが光を取り戻した。でも俺はそれ以上は踏み込まない。ここで押ししても反発をされるだけだ。まだまだ時間はたっぷりある。俺はじわじわとエミリアを墮としていけばいい

「そっか。じゃあ俺からはこれ以上何もしないよ。ありがとう。エミリア」

俺はやさしくエミリアに言葉をかけると、腕枕をしながら彼女の髪を撫でてあげる。

俺たちはそのまま一眠りをすることにした。こうして遭難一日目は終わる

さて、これからどうやってエミリアの心を攻略していこうか

ユズハさんに淫紋を♡

「ふー。やつとたどり着いた」

吹雪が止み、無事に下山することが出来た俺とエミリアは近くの街でユズハさんとルルルウと合流をする。今日は疲れているだろうからという理由で俺たちはそのまま宿屋で一泊することになった

今日の相部屋はユズハさんだ。彼女は部屋にたどり着くと、俺の体にすがるようにしておねだりを始める。今のユズハさんは師匠の顔ではなく、仄暗い欲望を持ったメスの顔をしていた

「ねえ……♡約束を守ったのだから……いいでしょ♡」

ユズハさんが言う約束とはピュイー霊峰で俺とエミリアが遭難をしたことだ。俺は律儀に、エミリアと最初にしたユズハさんと肉体関係を持たないという約束を守って、

ユズハさんとの肉体関係を止めていた。でも、ユズハさんはそれに耐えられなかったよ
うだ

雪崩とスノーウルフに襲われるという予想外のアクシデントはあったが、雪山で俺と
エミリアがユズハさんとルルルウと分断をされるといのは、エミリアを墮とすための
自作自演だったのだ

そしてユズハさんがその自作自演に協力をするこことへの報酬というのが、俺がユズハ
さんとの肉体関係を再開するというものである。つまりユズハさんは、俺とセックスを
したくて弟子を売ったのだ

ユズハさんの心が順調に汚れてきている事に安心をした俺は、彼女の体に淫紋を刻む
ことにする

「師匠。旦那さんを捨てて俺の女になるなら、いつでもセックスをしてあげますよ?」

「……………なるう♡……………ユーリの女にして……………♡」

ものの数秒でユズハさんが堕ちた。俺は彼女のお腹に淫紋を刻むと、すでに興奮でドロドロに濡れているユズハさんのおまんこを指で弄ってあげる

グチユ♡グチユ♡グチユ♡

「——あつ♡——あつ♡——あつ♡」

ユズハさんは久しぶりの愛撫に歓喜をするように天井を見上げながら俺の手マンを堪能する。淫紋を刻まれたことで感度の上がった彼女は、俺の指使いに狂喜乱舞をしていた

「ユーリに♡……あつ♡淫紋刻まれちゃったあ♡……すっごい♡」

「嫌ですか？」

「………これ♡………気持ちよくて♡………最高♡」

「ベッドに行きましよう」

「うん♡」

もう耐えきれないといった様子で服をそこら中に脱ぎちらしながら、俺たちはベッドに向かう。久しぶりに拝むユズハさんの裸体は艶があり、美しかった

「ねえ♡……きて♡」

待ちきれなくなってしまったユズハさんがベッドの上で股を開いて正常位になり、おまんこをくぱあと両手で広げて俺をセックスへと誘ってくる。久しぶりのチンポを期待した彼女の膣から大量に分泌された愛液で、ユズハの陰唇周りには水色の陰毛までもがネチヨネチヨに濡れていた

にゆううううううん♡

俺は早速、無遠慮にユズハさんの元人妻のおまんこにペニスを挿入していく。熱く潤っていてトロトロに絡んでくる彼女の膣肉の感触が懐かしい

ぬぼ♡ぬぼ♡

「……あつ♡……あつ♡ユーリのチンポお♡久しぶり♡」

「気持ちいいですか？」

「うん♡すっごい♡……好き♡」

師匠の顔から淫乱なメス顔に変わったユズハさんが、肉欲に溺れながら俺とのセックスを開始する。俺はすぐさま、俺専用のおまんこに変わったユズハさんの膣内に俺の精液を注いであげることにした

「元旦那さんに、謝らなきゃいけませんね」

「……あつ♡……あつ♡……タツ口お……ごめんね……私♡……ユーリの女になっ
ちやつた♡……おっ♡ほっ♡」

とっふ♡とっふ♡

ユズハさんが元旦那への懺悔をしながら、俺から受ける中出しを楽しんでいる。淫紋
によつて感度が上がり、俺の精液に触れると強烈な快感を覚えるようになったユズハさ
んの体が、心地よさそうに俺の精液を貪っていた

「あはあ♡ああ♡……これ……最高お……♡」

ユズハさんがうつとりとした顔で天井を見上げながら、おまんこから昇ってくる俺の
精液の感触を堪能している。彼女の頼もしくて慈しみを持っていた水色の瞳が、今はも
う、性欲によつて暗く濁りきってしまった

「まだまだ止めませんよ」

「うん♡もつとしてえ♡」

しかしセックスは始まったばかりだ。俺は中出しをされながら気持ちよく体を震わせているユズハさんに声をかけると、射精によって中断していたおまんこへの抽送を再開する

ズチユ♡ズチユ♡

「あつ♡あつ♡あつ♡……あつ♡」

俺は寝取りチンポスキルを使い自分のペニスにイボイボとした突起を作り出すと、真珠入りチンポのようになった俺のペニスでユズハさんのおまんこを丹念にこすり上げていく。膣肉をこする力が増えた瞬間に、快感の増した彼女のおまんこからは愛液がとろとろと溢れ出してきて、あつという間にユズハさんの膣肉が本気汁でグチャグチャになった

「タツロお……ごめんなさい♡……あつ♡……ユーリのチンポお……すつごいのお……」

「……待ってえ♡いまあ……イツたからあ♡」

ズチユ♡ズチユ♡

「んほおおおおお♡」

イツたばかりでさらに敏感になっているユズハさんのおまんこに、俺はピストン運動を続けていく。このまま彼女を、快樂の世界にどっぷりと墮とす

ぬっぽ♡ぬっぽ♡

「おっ♡おっ♡おっ♡おっ♡おっ♡おっ♡」

俺に敏感な場所をいじめられたユズハさんが獣のようなよがり声をあげ始める。でも俺はまだまだ彼女のおまんこに巨根を突きこむのを止めない。これからもっと、ユズハさんを俺とのセックスで快樂漬けにしていくのだ

しかしユズハさんはおまんこの中に俺の精液を注がれるのが相当に気持ちいいのか、俺とセックスをしている彼女はずっと顔がニヤけている。ユズハさんのその姿を見た俺は安心をしながら、さらに彼女の体を気持ちよくイカせていく。少しずつ、彼女の淫紋が完成に近づいていた

びゅるるるる♡びゅるるる♡

「んおっ♡おっ♡おっ♡おっ♡おっ♡おっ♡おっ♡おっ♡おっ♡おっ♡」

チンポを突きこんでユズハさんの中に出す精液の勢いを強めてみると、子宮を精液で噴水のように刺激された彼女がものすごいアクメ顔でいった。でもまだまだこのイキ地獄は続く。ユズハさんの心の全てを、快楽で俺一色に染めてしまうのだ

ずりゅう♡ずりゅう♡

「おっ♡おっ♡おっ♡おっ♡おっ♡おっ♡おっ♡おっ♡おっ♡おっ♡」

「あはあ♡……すつ♡……すつ♡……すつ♡のおお♡」

大きく膨らんだ寝取りチンポによってせき止められてしまった俺の精液が、体の外に出ることが出来ずにそのままユズ八さんの膣道に溜まっていく

ユズ八さんのおまんこが、俺の精液によって水風船のように膨らんでいった

「——あはあ♡ああああ♡あつはああああ♡」

淫紋によって俺の精液に触れると強烈な快楽を覚える体が変わってしまったユズ八さんが、おまんこで味わう俺の精液の快感を思う存分に堪能していく。その極限の快楽に、彼女は痙攣しすぎた体をコントロールできなくなっていた

「お♡っ♡お♡ほお♡お♡お♡」

きゅ♡う♡う♡ん♡

せき止められた俺の精液によってまるで臨月のようにお腹が膨らんでしまった状態で、ユズハさんの淫紋が完成する。彼女の体に淫紋が完成したことにより、さらに肉体の感度が上がってしまったユズハさんは夢中になって、快樂の世界で溺れていた

ぬりゆん♡

「——あっ♡——あっ♡——あっ♡」

ユズハさんの体に刻んだ俺の淫紋が完成したのを見届けた俺は、彼女の熱く潤ったおまんこに埋まり込んでいたチンポを勢いよく抜き取る。すると気持ちよさそうに痙攣を続けていたユズハさんのおまんこの中から、ダムが決壊したかのように俺の精液が大量に溢れ出てきた。その衝撃で、ユズハさんがまたイッた

ずりゆりゆりゆりゆりゆりゆ♡

「何これえ♡しゅっ♡ひいひい………」♡

ビクン♡ビクン♡

はしたなくがに股になってベッドの上で仰向けに寝転びながら、ユズハさんが俺とのセックスによって濁りきってしまった瞳でうっとり天井を見上げている。彼女のおまんこはぼっこりと俺のチンポの形に穴が開いたまま、大量の精液をベッドにこぼし続けていた

「……………あんっ♡……………らめえ……………♡」

にゅうううん♡

トン♡トン♡

俺は頃合いを見て再びユズハさんのおまんこにチンポをねじ込むと、今度はやさしく子宮口を突いてあげることで、彼女の心を甘くてふわふわとした快樂でトロトロに溶かしてしまう。これでユズハさんは、快樂の世界に身も心も侵食をされた

「おくっ♡しゅっ♡ひいひい♡……しゅっ♡ひのおおお♡……これ♡……もう♡……もど
れなくなりゅうう♡……っ♡……っ♡……っ♡」

「師匠は俺専用のおちんぼケースなんですから、もう戻れませんか」

「わらひい♡ユーリの……おちんぼけーすになっちやらああ♡」

正常位の体位でユズハさんの腰を持ち上げながらやさしく子宮をトントンと刺激してあげると、生まれて初めて味わうであろう強烈に甘くて幸せな快感によって彼女は白目をむき始め、ついには口から泡を吹き始める。もう彼女も限界だろう。俺はユズハさんの体内に向かって、トドメの中出しをキメた

「かひゅー♡かひゅー♡もう……らめえ……♡」

♡♡♡♡♡

おまんこの奥深くにまで俺の精液を出され続けたユズさんが弱々しくそうつぶやくと、彼女はベッドの上でばたりと気を失う。そしてそのままスヤスヤと寝息を立て始めた。これでユズさんの体に淫紋を刻む作業は完了だ

俺はユズさんの体にクリーンの魔法をかけて綺麗にしてあげると、幸せそうに寝ている彼女の体にそっと布団を掛けてあげる。それから、ドアの外で俺たちの部屋の様子をうかがっている二人組に声をかけた

「ルルルウ。エミリア。おいで」

……ガチャリ

すると、俺に声をかけられたルルルウとエミリアが切なそうな顔をしながらおずおずと部屋に入ってくる。どうやら彼女たちは、俺とユズさんとのセックスを覗いて我慢ができなくなってしまうようだ

「…………ユーリ♡…………私達にもして♡」

※このあと滅茶苦茶セツクスした

エミリアの故郷

「あー…この村も久しぶりだな〜」

俺達は今、エミリアの故郷の村に立ち寄っている。旅の途中に近くを通ったため、エミリアの一時帰省をすることになったのだ

森の中を奥深くにまで進んだ先にあるエミリアが生まれ育った村は、木でできた外壁に囲まれたのどかな村だった

「基本的には穏やかな村だけど、一部の人はエルフ至上主義を掲げていて外から来た人間をよく思わないエルフもいるから、それには注意して」

村への入り口でエミリアにそう頼まれる。まあどこにでもそういう奴はいるよな。俺たちはエミリアの顔見知りであろう門番に挨拶をすると、すんなりと村の中に通される。エミリアが生まれ育った村の見た目は、典型的なファンタジー世界のエルフの村

だった

「ふん！人間風情がエルフの村に何しに来た！」

エミリアの実家に向かう際に、俺達はさっそくエルフ至上主義者に絡まれてしまう。俺たちに絡んできたのは、金髪の長い髪をツインテールにした褐色肌で身長140センチくらいの見事なツルペタっ子だ。彼女の瞳は右が青色、左側が金色というオッドアイである

「こら！ターニヤちゃん！そういうことは言っちゃダメだよ」

俺たちに絡んできたのは、どうやらエミリアの知り合いらしい。お姉さんの顔になったエミリアが、その女の子に注意をしている。エミリアに注意をされたターニヤという女の子は、ニヤけた勝ち気なツリ目で俺たちをバカにしていた

「エミリアお姉ちゃんも劣った存在の人間なんかと付き合っていると、エルフ族としてのランクが落ちちゃうよ」

見事なマウンティングだ。ニヤニヤと見下した態度で、ターニヤが俺たちをバカにしてくる

「ターニヤちゃん！」

「あれ〜？ちよつと冗談を言っただけなのにエミリアお姉ちゃんは本気にしちゃった？でもまあ、弱い人族のことを思つてアドバイスをしてあげたんだから、感謝してよね〜」

俺たちのことをバカにされたエミリアが怒ると、ターニヤはヘラヘラと笑つて受け流してしまふ。なんか、すつごいメスガキだな。こいつ

「ターニヤちゃん。私が村を出る前はそんなじゃなかったのに……。どうしちゃったの……？」

「お！ターニヤ！何、雑魚人間なんかと話してるんだよ？」

俺たちが会話をしていると、そこに男のエルフが割り込んでくる。三人組の金髪エルフだ。その男達がニヤニヤしながら俺たちに近づいてくるのを見ると、ターニヤは嬉しそうな顔になってその男たちに駆け寄って行った

「ダーリン♡」

「おいおいターニヤ。よせよ」

男たちの中でリーダー格であろう男にターニヤが駆け寄ると、ターニヤはその男に抱きついた。そしてそのまま、二人はイチヤイチャとし始める。何だこれ？

「アラン。あなたね！ターニヤにおかしなことを吹き込んだのは！」

「は？俺はターニヤにこの世の真実を教えたただけだけど。お前、バカだな」

「そうよ！アランはすっごい物知りなんだから！」

いるよね。こういう奴。どうでもいいや。俺たちは何だかよく分からない口喧嘩を終えた後に気を取り直すと、再びエミリアの実家を目指す

その道中でエミリアに聞いたのは、ターニヤは千年に一度の魔術の天才らしい。褐色の肌におツドアイという見た目が、エルフ族にとつて高い魔術への素養を示す身体的特徴になるとエミリアが教えてくれた

そしてそのターニヤとイチャイチャしていたアランという男はこの村の副村長の息子で、エルフ至上主義を掲げているこの村を排他的にしようとするエルフのうちの一人なのだそうだ

多分、ターニヤの高い魔術的素養を目当てにしたアランが彼女にあることないことを吹き込んだのだろうとエミリアは語っていた。まだ140歳と年齢が若いターニヤは、そのままアランの言葉を鵜呑みにしてしまったのだろうとのことだ

「着いたー！ー」が私の実家よー！

そんな会話をしているうちに、俺達はエミリアの実家へとたどり着く

ターニヤ分からせ♡

ズチユ♡ズチユ♡

「つゝゝ♡——つゝゝゝ♡ゝゝゝ♡……♡」

俺は今、ターニヤとセックスをしている。エミリアの実家に挨拶に行った後に俺が一人でエルフの村を散策していると、それを見つけたターニヤがまた突つかかってきたのだ

そこで俺は彼女に魔法の技能での勝負を提案する。負けた方が勝った方の言うことを何でも一つ聞くとというルールでだ。魔法の天才と村で持て囃されたターニヤは俺との勝負に飛びついてくるが、チートを持って異世界に転移してきた俺の敵ではなく、彼女は簡単に敗北した

そして俺はターニヤの家にお邪魔して、彼女の部屋のベッドでターニヤの体を美味しく頂いている。ターニヤは自分が負けたことにシヨックを受けながらも、何とか自分の優位性を保とうと強がり、俺の要求を余裕な態度で受けようと演技をしていた

「人間のチンポなんてどうせ大したことないでしょ！いいわ！抜いてあげる！」

俺とセックスをする前の、ターニヤの言葉である

とぷ。とぷ。♡♡

「つゝゝ♡ゝゝ♡——っ♡ゝゝ♡ゝゝっ♡♡♡——っ♡…っ♡」

俺はターニヤのおまんこに容赦なく中出しをキメる。俺の精液を中に出された瞬間に、寝バックの体位で抱いた枕に顔をうずめていたターニヤがふるふる心地よさそうに体を振るわせ始めた

「人間のチンポはどう？」

もう何度も俺のチンポで絶頂をさせられまくっているターニヤに俺は尋ねる。俺の質問に彼女は息も絶え絶えになりながらも、虚勢を張り続けていた

「気持ち♡……よく♡……なんて♡……ない♡……っ♡」

ズチュ♡ズチュ♡

「——っ♡——っ♡——っ♡——っ♡——っ♡……っ♡……っ♡」

満身創痍で強がっているターニヤのヌルヌルになったおまんこに俺のチンポを一突きすると、彼女はヘコヘコと腰を振るわせながら簡単にイク。でも俺はメスガキには容赦しない。これは調教のしがいがあるクソ雑魚おまんこだ

ぬっぽ♡ぬっぽ♡

「あ——♡——つらめえ♡♡♡おくう……♡ゴリゴリしにやいれえええ♡♡♡っっっ

きゆううううん♡

「ら、らめー♡淫紋♡♡きざんらああ♡♡♡♡らめええ♡——♡—
—♡—」

抵抗をするがもう遅い。ターニヤは俺の女になったのだ

「イッ♡グう♡♡お♡っ♡お♡ま♡ん♡こ♡お♡……♡っ♡♡??♡……♡っ♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡
♡ん♡こ♡イ♡グう♡ー♡ー♡ー♡♡??♡……♡お♡っ♡♡……♡お♡っ♡♡……♡お♡っ♡♡」

メスガキのターニヤが正常位でおまんこに俺のチンポを突かれながら、とろとろのア
クメ顔で深イキをする。連続絶頂により、彼女の意識はすでに混濁気味だ。あのクソ生
意気だったターニヤのツリ目が、今はアへ顔と涙でグチャグチャに汚れている。うん。
彼女も分かってきたようだ

「プル。頼む」

俺が従魔スライムであるプルにお願いと、プルはターニヤのお尻の穴の中に体をねじ込む。彼女のアナルのお掃除を始めるためだ。プルの体が直腸内で暴れ始めた瞬間に、ターニヤの体がガクンガクンと揺れ始めた

「ら♡♡♡らめ♡しよこは♡——っ♡——っ♡違う♡——っ♡あにやああ♡♡♡」

ビクン♡ビクン♡

(ターニヤはアナルもクソ雑魚つと……)

俺はプルに掃除をしてもらったターニヤのお尻の穴に巨根をねじ込むと、長い時間回復効果が続くりジエネ効果を持つりジエネローションを薬液創造スキルで俺のチンポから分泌しながら、彼女のアナルを乱暴にめくるようにしてピストン運動を開始する

ぬっぽ♡ぬっぽ♡

「な♡なんれえ♡——っ♡そこ♡♡♡違う穴なのにい♡気持ひいいのお♡くっ♡くっ♡

くくつ♡——つ♡???:…:…つ♡——つ♡くくくくつ♡」

ガク♡ガク♡

早速ターニヤがクソ雑魚アナルでオーガズムをキメる。うん、順調に彼女の体が俺のチンポで開発をされている。俺はさつきとターニヤの体内に精液を注いで、彼女のお腹に刻んだ淫紋を完成させてしまうことにした

とぶ♡とぶ♡

俺の精液を体内に注がれると、あつという間に淫紋がピンク色に染まる。ターニヤは魔術的抵抗もクソ雑魚だった。俺は淫紋が完成したことを見届けるとターニヤの尻の穴からペニスを抜き取り、俺のチンポの形に開いたまま戻らずに俺の精液を垂らし続ける彼女のアナルを無視して、そのまま正常位でターニヤのおまんこにペニスをねじ込み、ピストン運動を開始する

「おーい！ターニヤ！」

俺たちがセックスをしていると、窓の外からアランの声が聞こえてくる。俺はターニヤにそのまま応答をさせた。彼女は俺のチンポをおまんこに咥え込みながら部屋の中から声を出し、窓を締めたままで外にいるアランと会話を始める

「ア、アラン……っ——っ♡何かしら……っ♡——っ♡——っ♡」

「久しぶりに、エッチしようぜ」

どうやら彼はターニヤとエッチがしたいようだ。ごめんアラン君。君の彼女、今、俺とセックスしてるよ

「ご、ごめんね♡今、手が離せなくて♡……あっ♡……今日はだめなのほお♡——っ……あっ♡……イクう……っ♡……っ♡」

ビクン♡ビクン♡

の彼女は俺に淫紋を刻まれたから、もう俺の所有物になっちゃったよ。しかし、会話の中で嫌がらせに行くという単語が聞こえたのはいかん。降りかかる火の粉は払わなければ

「アランはいいの?」

とりあえず俺はターニヤとの性行為を続けながら彼女に話を聞くことにする。まずは目の前のセックスの方が大切だ

「アランに私のこんな姿……見せられないわよ……あつ♡あつ♡そこお♡」

「別に今からアランのところに向かってもいいよ。何なら淫紋を消してあげてもいいし」

俺は正常位で股を開いて心地よさそうに俺とセックスをしているターニヤのおまんこにペニスを抜き挿ししながら、ターニヤに自由意志を尊重することを伝える。俺は束縛が嫌いなのだ

「ユーリのチンポのほうがいい♡——っ♡あっ♡……っ♡……あっ♡」

しかしターニヤはそう即答した。あとはアランの心をバキバキに折ってしまえばいいか。俺はターニヤと仲睦まじいエッチをしながら、アランの心を潰す計画を練つていく

「ターニヤ。アランにお別れのメッセージを撮ろうか。映像記録球を起動するから、ターニヤはアランにさよならの挨拶をしてあげて」

ああいう自己愛の強い人間は自分が他人から拒絶されると脆いからな。俺はターニヤとセックスをしながら映像記録球を起動する。俺たちに嫌がらせをする計画を立てているようだし、アランが傷ついても別にいいや

……。

……。

……。

映像記録球の映像

「……♡つ♡アラン……♡つ♡ごめんね♡わたし♡ユーリの女になっちゃいました♡……
あつ♡ユーリのチンポ♡す♡つ♡ごく♡気持ちいいの♡——♡つ♡あつ♡それに……♡わたし
……♡不感症だと思ってたけどお♡」

——♡ズチュ♡ズチュ♡

「おっ♡おっ♡……♡わらひ♡いまあ……♡ユーリにイカされまくってます♡——♡あつ♡
あ——♡」

ガク♡ガク♡

「……♡つ♡……♡つ♡せつくしゆ♡……♡す♡つ♡ごく♡気持ちいいの♡……♡アランが……♡セツ

クスがへたくそで……♡——あつ♡……チンポも小さい♡……つ♡クソ雑魚だっただ
け♡——つ♡みたい♡……ねっ♡——つ♡あはあ♡」

ビクン♡ビクン♡

「アランとはあ……生でしたことなかったけどお♡……つ♡ユーリとは………
あつ♡……生でしまくってます♡——あつ♡——あつ♡アランには——あつ♡絶対に
許さなかった♡……つ♡中出しだけどお♡……あつ♡……つ♡ユーリには♡………
許してます♡——あつ♡でてるう♡——つ♡………つ♡………これ♡………すっごい♡……
気持ちいいよ♡」

と♡と♡と♡

「じゃあ……♡わたしは………つ♡………あつ♡ユーリとのエッチに忙しいからあ♡………
♡もう声をかけないでね♡……アラン………バイバイ………♡——あつ♡………つ♡イクう
………つ♡——つ♡♡♡——つ♡♡♡♡」

エミリアのお母さんとエッチ♡

「おはようございます」

「おはよう」

エルフの村で俺たちは朝を迎える。俺たちのパーティーはエミリアの好意により彼女の実家に宿泊をさせてもらっていた。朝になって客間から起きてきた俺たちはリビングルームに集まる

「みなさん。よく眠れたかしら？」

起床した俺たちを快く迎え入れてくれるのは、エミリアのお母さんのシルビアさん。エルフ族の彼女は子持ちながら見た目がとても若く、二十代後半のお姉さんの見た目をしていて。シルビアさんはエミリアと同じ金髪に青い瞳をしていて、熟れた爆乳の持ち主である

「それでは私達は出かけてきます」

リビングルームに集まるやいなや、エミリアたちはそそくさと出かけてしまう。エミリアは恋人に会いに、師匠とルルウは近くの森に狩りに出かけるそうだ。エミリアの恋人は遠くにまで狩りに出かけていて、今日まで不在だったのだ

「ユーリ君はどうするのかしら？」

「俺はもう少ししたら生産をしようと思えます」

「あらあら。頑張つてね。そうだ。お茶でも飲む？」

俺にそう尋ねるとシルビアさんはお茶を用意してくれている。エルフ服にエプロンを付けてキッチンで俺のためお茶を用意してくれているシルビアさんの後ろ姿の、少し垂れたお尻が半端なくエロい

(だめだ……我慢できない……)

シルビアさんの熟れたお尻に欲情をしてしまった俺は、キツチンでお茶を入れており隙だらけの彼女の体を後ろからギュツと抱きしめる。すると突然俺に体を抱きしめられてしまったシルビアさんは、驚きながらも俺に声をかける

「(っ)ら♡ユーリ君♡イタズラはダメよ♡」

シルビアさんは平静を装い何でもないことのように注意をしてくれるが、寝取りチンポスキルで俺には分かる。彼女は今、強い欲求不満を抱えていると

「シルビアさんの後ろ姿が綺麗すぎて、我慢できませんでした」

「(っ)ら♡おばさんをからかわないで♡」

シルビアさんが俺の両腕の中でイヤイヤと体を揺らすのが、俺は彼女の体を強く抱きしめて離さない。そしてシルビアさんの華奢な腰を後ろから抱きかかえたまま、俺は彼女

の耳元でそつと囁いた

「昨日、シルビアさんは一人で体を慰めていませんか？」

「……いやあ♡」

欲求不満を抱えていることへのカマかけであったが、俺に痴態を見られてしまったと勘違いをしたシルビアさんの体がこわばる。そこに付け入る隙を見つけた俺はなし崩すようにして、エルフ服の上から彼女の爆乳を揉みしだいていく

もにゅ♡もにゅ♡

「だ、だめ……っ♡」

俺の手におっぱいを揉まれ始めたシルビアさんが、体をくねくねとして悶える。彼女の熟れた柔らかい爆乳を揉んでいると、エルフ服の上からでもシルビアさんのピンと勃った乳首が丸わかりだった。俺は彼女の固くなった乳首を指先でやさしく摘んでコ

ネコネとしながら、シルビアさんの耳元で言葉を続ける

「シルビアさん。俺とエッチしませんか？」

「そ、そんな……♡あなたはエミリアのお友達でしょ？自分の娘のお友達となんて……。
——あっ♡」

クチュ♡クチュ♡

「でも、シルビアさんのここ。すっごい濡れてますよ？」

「ら、らめえ……♡」

俺はシルビアさんのスカートを捲りあげると右手を彼女の下着の中に手をねじ込み、
性を指で弄る。欲求不満が募っていたシルビアさんの割れ目はすでに、愛液でべつと
りと濡れていた

「だめ……♡私には、旦那も子供もいるのよ♡」

グチュ♡グチュ♡グチュ♡

「——あつ♡——あつ♡——あつ♡——あつ♡」

俺は無を言わさぬまま、熱くてとろとろに潤っているシルビアさんの膣の中に右手の人差し指と中指の二本の指をねじ込むと、彼女の膣肉をグネグネとかき回し、やわらかくほぐしてしまう

「~~~~♡~~~~♡~~~~♡~~~~♡~~~~♡~~~~♡~~~~♡~~~~♡~~~~♡」

俺に後ろから手マンをされ始めたシルビアさんは体から快感を逃そうと腰を前かがみにして内股になって耐えていたが、すぐに彼女のおまんこからは、どろどろの本気汁が垂れ落ちてきた

スル♡スル♡スル♡

体から力が抜けきってしまい、キツチンに手をつけて自分の体を支えているシルビアさんの後ろから彼女の着ているエルフ服のスカートの中に手を入れると、俺はシルビアさんの履いている水色の下着をずりおろしていく。ネットネットになった彼女の愛液が、俺によつて脱がされている下着と一緒にあって糸を引いていた

「……♡」

シルビアさんは何も言わずに右足を上げると、俺が彼女の股間から下着を脱がすのに協力をしてくれる。そして俺は左足首に脱いだ下着をぶら下げたままキツチンに両手を掛けて動かないシルビアさんの膣口に、勃起したペニスをあてがった

ぴと♡

「——♡——♡」

彼女は右手で口元を抑えて恥ずかしそうにしながらも、立つたまま動かずに俺のチン

ポが体内に入ってくるのを待ち構えている。シルビアさんの膣口が物欲しそうに、俺の亀頭の先にきゆうきゆうと吸い付いてきていた

「しちやいますか?」

「うふふ♡……私も♡……我慢できなくなっちゃった♡……挿れて♡」

にゅううん♡

「……あつ♡~~~~つ~~~~♡~~~~♡~~~~♡~~~~♡」

膣肉を掻き分けながら体内に埋まり込んでくる久しぶりの固くなった異性のペニスの感触に、シルビアさんが腰をすくませて声にならないうめき声を上げる。彼女のおまんこの奥にまで俺のチンポがズツポリと入り込むと、彼女はとても気持ちよさそうに俯きながら体を震わせていた

「娘のお友達と……エッチしちやったあ……♡」

シルビアさんが立ちバックでキツチンに腕を突きながら、恥ずかしそうに今日の出来事を懺悔している。彼女の左手の薬指には、キラリと光る結婚指輪が見えた。俺はとろとろに温かくてねっとり絡みついてくるシルビアさんの膺の感触を楽しみながら、彼女とのセックスを開始する

ぬちゅ♡ぬちゅ♡

「……………あつ♡……………あつ♡ユーリ君のチンポお♡……………すっごい♡」

スカートを捲りあげたシルビアさんの下半身から見える、彼女の大きくて柔らかいお尻がとにかくエロい。俺が後ろからシルビアさんのおまんこにペニスを突きこむ度に、彼女の熟れたお尻が俺の股間にぶると当たってすごく気持ちよかった

「旦那さんとは、エッチしてないんですか？」

「うん♡もうずっとしてないわ♡……………あつ♡……………あつ♡」

朝からキッチンで人妻のエルフとの浮気セックスを楽しみながら俺は彼女に質問をする。俺の両手に腰をがっしりと掴まれながらシルビアさんは、久しぶりに味わうセックスの味を思う存分に堪能していた

「こんなにも綺麗な奥さんを放っておくなんてもつたいない」

「うふふ♡ありがとう♡——あんっ♡……あっ♡……そこお♡……っすきい♡」

ズチュ♡ズチュ♡

バックからシルビアさんのおまんこの気持ちいい所をゴリゴリと擦ってあげると、シルビアさんが簡単にイッた。彼女の熟れた柔らかいおまんこが、とろりと俺のチンポに絡みついてくる

「~~~~っ♡~~~~っ♡——あっ♡あああああ♡♡……っ♡……っ♡~~~~っ♡」

ガク♡ガク♡

キッチンに上半身を預けるようにして、イキながらシルビアさんが気持ちよさそうに腰をヘコヘコと動かしている。彼女はとろんとしたあえぎ声を上げながらきゆうきゆうと膣肉を痙攣させ、気持ちよすぎる体に堪えきれずに内股になつてしばらくのあいだ動けずにいた

「シルビアさん。中に出しませんか？」

「…………だ、ダメよ…………♡…………あつ♡さすがにそれは…………つ♡あんつ♡…………つ♡」

ぬぼ♡ぬぼ♡

セックスを再開しながら俺はシルビアさんに尋ねる。しかし人妻である彼女はさすがに中出しは拒否していた。でも俺は避妊の魔法を掛けることで、シルビアさんの心を墮落させてしまうことにする

「でも俺、避妊の魔法を使えるんですよ」

「ほ、本当？……あつ♡……あつ♡……あつ♡……あつ♡」

俺はシルビアさんの柔らかいおまんこにチンポを突きこみながら、彼女の体に避妊の魔法を掛けてあげる。すると妊娠の心配がなくなった途端に、シルビアさんは態度を一変させてしまった

「うふふ♡……なかにだして♡……あつ♡……あつ♡……あつ♡……あつ♡……いっばい出してね♡」

うっとりとした声で俺のチンポの感触を楽しみながら、シルビアさんが俺に中出しをおねだりしてくる。俺は彼女の注文通りに、たつぷりとシルビアさんの子宮に精液を注いであげることにした

うふふ♡♡♡♡♡

……。

……。

……。

「もう。だめよユーリ君。今日の話はみんなには秘密にしておくから。こういうことはしちゃダメ」

「分かりました。でも、シルビアさんの体、すっごく気持ちよかったです」

「♡(´▽`)/♡……」

俺とのエッチが終わって友達の母親の顔に戻ったシルビアさんが、俺にやさしく注意をしてくれる。でも、こうして俺を怒っているシルビアさんの下着は今も、中出しをされた後におまんこから垂れてきた俺の精液で汚れていること想像すると、どうしても興

奮をしてしまうな

「もう一回しませんか？シルビアさんの体、満足させますよ？」

「だーめ♡ユーリくんとは、一回だけです♡」

俺は再びエッチをすることをシルビアさんに誘ってみるが、いたずらっ子のような顔をした彼女にさらりと断られてしまう。残念だ。じゃあ、今日は別のことをして遊ぶか

こうしてエミリアの故郷での一日が進んでいった

エミリアアの葛藤

エミリアア視点

私とユーリとの関係はセフレの関係に落ち着いた。今は、旅の途中で師匠やルルルウちやんと一緒にセックスを楽しむ仲間になっている。恋人であるジルには少しだけ罪悪感があるが、旅の間だけ、この村に帰ってくるまでの間だけの割り切った関係として、現在の私は捉えていた

この村に帰ってきて、今日は久しぶりにジルに会える。それがすつごく楽しみだ。間の悪いことにジルは遠くにまで狩りに出かけていて不在だったのだ。でも今日に帰還する予定だ。私は朝から村の入口でジルの帰りを待つことにした

「ジル〜！」

「エミリアー！」

お昼過ぎになり、私はジルと久しぶりに再会をした。やっぱり私はジルが好き。彼のやさしい笑顔に癒やされる。そして私は当初から予定していた計画を実行することにした。これから彼にアプローチをして肉体関係を結ぶのだ。ユーリとのエッチがあんなに気持ちいいんだから、恋人であるジルとのあまあまエッチはものすごく気持ちいいに違いない。私は積極的にジルの体にくっついて、彼を誘惑していった

そしてジルの家にお邪魔をした私は、彼の部屋の中でいちやいやちやと楽しい時間を過ごす。そして夜になり、薄暗くなった部屋の中で私達は一つに結ばれた

……。

……。

……。

(……あれ?もうおしまい?)

私はあつけにとられていた。全然、気持ちよくなかった。おまんこの中にジルのチンポが入っている感触も全然ない。どうしよう……。体に不満が溜まって仕方がない……

避妊が必要だから中出しも味わえなかった。そのことを残念に思っていると、私の心が急速に冷めてしまう

「エミリア。気持ちよかった?」

「え、ええ。……すつごく気持ちよかったわ♡」

何だかあれほどかっこよく見えていたジルの姿が、今はただの頼りないだけの男に見える

(ああ♡いますぐにユーリの太いチンポで私のおまんこをかき回して欲しい♡)

ジルと結ばれたばかりなのに私は、そんなことを考えていた

私の葛藤のせいか、彼と結ばれたばかりなのに相思相愛のペンダントの光が弱まってい
く。そのことに気付いたジルが、私を責め始めた

「エミリア。この前もそうだったけど、相思相愛のペンダントの光が弱くなっているよ。
僕はずっとエミリアを信じてるのに、エミリアの努力が足りないんじゃない?」

「ひどいよ……ジル」

ジルが私をなじり始める。たしかに私にも悪いところはあるが、こうして面と向かっ
て責められるとすごく悲しい。彼のことがまったく信じられなくなっていく

「そんなんじゃない僕、エミリアのこと信じられないな。別れよつか?」

「そ、そんな……」

ジルはそつけない態度で、私への別れを告げた。あつけなく、私と彼との関係は終わってしまったようだ

「しばらく距離を取ろう。さよなら。エミリア」

私は暗くなった夜道をジルの家から無理やり帰らされる。でも私は全然悲しくなかった。ジルと別れを告げられた瞬間から、ワクワクと興奮が私の心に溢れ出てきたからだ。これでユーリと思う存分エッチが出来る。私の心はそのことではいっぱいになった。ジルに別れを告げられて、私は逆に嬉しかったのだ

（早く家に帰ってユーリに責任とってもらおう♡いつでも責任を取るって、ユーリは言ってくれてたから♡うふふ♡）

ジルとの関係は、ユーリとのセックスの邪魔でしかなかったのか。私はそのことに気付いてしまう。すると夜の道を歩く私の胸元のペンダントから急速に光が消え、ただの石ころに変わる。するとそのことに驚いたのか、ジルが私のことを慌てて追いかけてき

た

「エ、エミリアア！さっきのは冗談だよ！ああやって冷たくすれば、もつと僕のことを好きになつてもらえるつて思つただけなんだ！考え直してよ！」

「あつそ……さよなら……」

私の心がこのチャンスにジルに責任をすべて押し付けて、ユーリと何の気兼ねもなくセックスが出来る関係を獲得する計画で埋まつた。なんだかジルのことなんて、どうでも良くなつた。今の私には早く家に戻つてユーリとエッチをすることしか考えていない

(……だめだ♡ユーリとエッチをすることを考えると、おまんこが濡れてきちやう♡)

ジルのことなんてすぐに忘れた私は、ユーリのチンポのことだけを考えながら家へと帰っていく

(~~~~♡♡♡~~~~)

実家にたどり着き家関を開けた瞬間に、ムワリとした空気が私の鼻に触れる。するとその瞬間から私の体の芯がドロドロと熱くなり始めて、おまんこがベチヨベチヨに濡れてしまった

(だめだ……♡もう……我慢出来ない……♡)

ユーリはたしか部屋の大きさの都合上、師匠とルルウとは別の客間に一人で寝ているはずだ。早くユーリの部屋に行つて、彼のチンポを私の中に挿れてもらおう

寝ているみんなを起こさないように、私はそつと足音を消しながらユーリが泊まっている部屋を訪れる。私が扉に近づくと、部屋の中からかすかにあえぎ声が聞こえてきた。どうやらユーリが誰かとエッチをしているようだ

(誰の声だろうか？私の知らない声だ……。でも、聞いたことがある声のような気も……)

この声を聞いていると、私の平穏な日常がユーリに壊されちゃったみたいで不安になる。でも、今はそんなことどうでもいい。私もそのエッチに混ぜてもらいたい。早くユーリのチンポをおまんこに挿れてほしくて、もう我慢できない

私は愛液で下着をべつとりと濡らしながら、彼の泊まっている部屋の扉をそつと開いた

エルフ母娘寝取り♡

……。

……。

……。

「……あつ♡……あつ♡……あつ♡……あつ♡……そこお♡」

ぬほ♡ぬほ♡

俺は今、薄暗い部屋の中でシルビアさんと熱く絡み合うようなセックスをしている。日中から彼女に薬液創造のスキルで作り出したミスト状のエルフ族が発情する媚薬を嗅がせ続けた結果、深夜になり、シルビアさんは俺に堕ちた

みんなが寝静まる時間になってから、シルビアさんがこっそりと俺に夜這いをしに来たのだ。エミリアの実家には客間が二つあり、片方にはユズハさんとルルウが、もう片方には俺が宿泊させてもらっていた

「ユーリ君。……して♡」

夜中にスケスケのセクシーなネグリジエを着て俺の部屋を訪れたときのシルビアさんの言葉である。俺とのセックスを求めて、瞳を切なく潤ませた人妻は最高だ

「はっ……♡はっ……♡ユーリ君のチンポお♡……好き♡」

今のシルビアさんは騎乗位で俺の上に跨り、人妻の熟練した腰使いで俺のチンポを楽しんでいる。俺は彼女と深夜の浮気セックスを楽しみながら、シルビアさんの会話を始めた

「エミリアはエルフは発情期以外ではエッチしないって言っていましたけど、シルビアさ

んは違うんですか？」

「……あつ♡……はつ♡あの子くらいの年齢だと……んつ♡純血と言うか……あつ♡理想にこだわってしまふ年頃なのよ……つ♡……つ♡ああく♡」

シルビアさんが俺の上で気持ちよさそうに腰を振りながらそう教えてくれる。人間で言う。十代の女の子が「エッチが嫌い。エッチしてなくてももうちら愛し合ってるから！」とか言い始める感じか……。エミリアは厨二病だったと

「エミリアも同じように俺のチンポでよがりまくってますよ」

「あ、あなた♡娘ともエッチしてるの？……あつ♡……あつ♡どうしよう♡娘と竿姉妹になつちやつたあ♡」

「嫌なら止めますか？」

「——いや♡やめないで♡……あつ♡……あつ♡……あつ♡……あつ♡」

俺の言葉責めにシルビアさんのおまんこがきゅつと締まると、彼女の膣の奥から愛液がとろとろになって溢れ出てくる。俺のチンポが埋まり込んでいるシルビアさんのおまんこの中は温かくてとろとろに柔らかくて、極上の突きごたえがあるメス肉だった

「(そ)そ……ガチャ……」

「ユーリ♡私も混ぜて♡」

俺たちが浮気セックスを楽しんでいると不意に部屋の扉が開く。ドアを開けて入ってきたのはエミリアだった。気配察知スキルにより、俺たちがこっそりとまぐわっている部屋にエミリアが訪れてきていることは分かっていたが、寝取りチンポのスキルでエミリアが体に強い欲求不満を抱えていることを知っていた俺は、気にせずそのままにしていた

「ママ……」

「い、いいの！ユーリとはセフレだから、いつでもしていい関係になったじゃない！」

エミリアは体がうずきすぎて、道徳観よりも目先の快楽を選ぶくらいに余裕がないようだった。これはチャンスだ。これを期にエミリアを俺の女にしてしまおう。俺がそんなことを考えていると、イキ終わって意識が回復し始めたシルビアさんが俺たちの会話に入り込んでくる

「エミリアは恋人がいるんだからいいじゃない♡ユーリ君は私とエッチするの♡——はむ♡——じゅるるる♡♡じゅるる♡♡」

どうやらシルビアさんは娘に女として対抗心を燃やしてしまったらしい。俺のチンポを舐めながら娘に牽制を入れている。それにはエミリアも女としての対抗心を燃やし返してしまったようで、なんと二人は俺のチンポの取り合いを始めてしまった

「ママ♡そパパがいるでしょ！ユーリは私とエッチするの！どいて！——はむ♡れろ♡
れろ♡」

きゆうううん♡

俺は二人のお腹に淫紋を刻む。すると淫紋を刻まれた効果で性的な感度が上がり、肌に触れる空気の感触にすら快感を覚える体に変わったエミリアとシルビアさんが、心地よさそうに体を震わせ始めた

こうして俺とエミリアとシルビアさんによる、エルフ母娘3Pセックスが開始された

……ペろ♡……ペろ♡

……はむ♡……はむ♡

エミリアとシルビアさんが二人がかりで、ベッドの上に寝転がる俺のチンポを丁寧にフェラしてくれる。俺のチンポが彼女たちに舐められると、ぬるぬるとこそばゆくて、生温かくて、最高に気持ちがいい。亀頭や竿、玉袋にいたるまで、彼女たちは丹念に俺の性器を舐め尽くしてくれた

「ユーリはこういうのが好きなの？変態ね♡」

——むにゆ♡

「うふふ♡ユーリ君ってエッチなのね♡」

——むにゆ♡

母娘の二人ががりでベッドに寝転ぶ俺のチンポを左右から爆乳で挟み込み、4つのおっぱいをつかってダブルパイズリをしてくれる。爆乳で美人のエルフ親子によるこの協力技は、まじで最高だった

ふにゆん♡ふにゆん♡

「ほらほら♡ユーリ♡はやく出しちやいなさいよ♡」

ふにゆん♡ふにゆん♡

「ユーリ君♡ぴゅっぴゅっつて♡おちんちんのさきから♡エッチなお汁を出しましょうね♡」

——ふにゆん♡ふにゆん♡♡♡ふにゆん♡ふにゆん♡——

左右から俺のチンポを爆乳で挟み込みながら、彼女たちが俺を言葉で責めてくる

むにゆん♡むにゆん♡

「あれ♡ユーリ♡おちんぼがびくびくしてるけど♡せーし♡出ちゃうのかな♡」

むにゆん♡むにゆん♡

「うふふ♡ユーリ君♡もうイツちゃうの？まだダメよ♡我慢なさい♡」

——むにゅん♡むにゅん♡♡♡むにゅん♡むにゅん♡——

エルフ母娘の柔らかくてくっそエロい爆乳で挟まれ続れた俺のチンポが、快感と興奮で爆発しそうなくらいに勃起した

もにゅ♡もにゅ♡

「えい♡えい♡あは♡ユーリのチンポ♡亀頭が膨らんできた♡おっぱいでイツちゃうのかな？変態さん♡」

もにゅ♡もにゅ♡

「うふふ♡ユーリ君♡いっぱい♡ぴゅっぴゅしちやおうね♡変態さん♡」

——もにゅ♡もにゅ♡♡♡もにゅ♡もにゅ♡——

俺はいつまでも爆乳エルフ母娘によるダブルパイズリの天国を味わっていたかった

……。

「………イツていいよ♡♡♡」

とぶ♡とぶ♡

俺は母娘エルフの爆乳の中で、気持ちよく果てた

「いただきまふ♡」

——かぶ♡……っ♡……っ♡……っ♡

「いら♡エミリア………抜け駆けはダメ♡」

俺の亀頭の中からザーメンが放出されたことをいち早く察知したエミリアが、俺のチンポを口に咥えて口内射精をされる俺の精液の味を楽しみ始める。俺に淫紋を刻まれ

た影響で俺の精液の味をものすごく美味しく感じる体が変わってしまったエミリアは、口の中いっぱい広がる俺のザーメンの匂いを満足そうに味わっていた

そしてシルビアさんはそのとなりで、俺の肉棒を美味しそうに啜えているエミリアの姿を悔しそうに見つめていた

「……………♡ひっぱいれたね♡」

エミリアが口の中いっばいに溜まった精液を俺に見せるけるようにして大口を開けてくる。俺が出した白い精液でドロドロに汚れたエミリアの口内からは、ムワリとした妖艶な空気が漂っていた

——はむ♡……………じゅるるる♡……………じゅるるるる♡

しかしその光景に我慢ができなくなったシルビアさんがエミリアにディープキスをする、娘の口内から俺の精液を奪い取ってしまう。するとそのことにエミリアも対抗をして、母親であるシルビアさんにディープキスをしながら、奪われてしまった俺の精

——はむ♡じゅるるる♡

ちゅぽ♡ちゅぽ♡

俺が彼女たちに声をかけると、俺の精液が欲しくてたまらない二人はさらに無言のまま夢中になって俺のチンポにしゃぶりついてくる。あつという間に俺は、エルフ母娘の淫技によって気持ちよくなつぷりと、精液を搾り取られてしまった

……。

……。

……。

「♡ちゅぽ♡」

淫紋を刻まれてから初めて味わう俺の精液による強烈な中出しの快楽に、意識を甘くふわふわと溶かしたシルビアさんが瞳をとろりと暗く汚して、ゆっくりと気持ちよさそうに意識を失う。これでエルフの母娘は身も心も俺に堕ちきった。調教は完了だ

スースーとベッドの上で寝息を立てているエミリアとシルビアさんに俺はやさしく腕枕をしてあげると、両脇に母娘を抱えるようにしてそのまま眠りにつく

……。

……。

……。

……ちゅば♡……ちゅば♡

「おはよう♡ユーリ君♡」

次の日の朝、シルビアさんがおはようフェアで俺を起こしてくれる。エミリアは寝坊をしていた

ダンジョン作成

突然だが俺はついにダンジョンを作成した

俺がダンジョンを作った場所はドラゴンズピークという巨大な山のふもとである。この山の頂上はものすごく強いドラゴンの縄張りとなっていて付近には強いモンスターもおらず、周りには俺と同業者によるダンジョンもない

この山の付近は比較的のどかで治安もいい。数千単位の人部隊をここに派遣するとこの山を縄張りしているドラゴンに攻撃をされるため、物量による押し潰しもされない

俺はダンジョンを大きくするよりはのんびりと暮らしたいので、自衛が出来る範囲でいい

俺が作ったダンジョンは入り口から階層を地下に潜っていくタイプのダンジョンだ。

ダンジョンに出てくるモンスターはダンジョンポイントで作ったゴーレムスポナーから生まれたゴーレムと、スキルポイントを使って新しく俺が手に入れたゴーレム創造のスキルで作ったボスゴーレムとで構成している

地下五階層まではDランク冒険者、いわゆる一人前の冒険者ならクリアできる簡単なダンジョンだ。五階層をクリアすると日本のスーパーのような建物に行くことができ、そこで五千円分の商品を選んで持ち帰ることが出来る。持ち帰りには時間停止機能付き使い捨て指輪型アイテムボックスを利用できるという便利仕様だ。この指輪型アイテムボックスは一回アイテムを取り出すと消滅する

そして十階層までクリアすると今度はCランクのような場所で一万円分の商品を持ち帰ることが出来るクリア特典が報酬として用意されている。Cランクのような場所でも持ち帰りは同じく使い捨ての指輪型アイテムボックスだ。十階層まではCランク冒険者、いわゆるベテランの冒険者ならクリアできる

この報酬は管理者権限を利用することで用意することが出来るチートである。これだけ便利な報酬が手に入れられるのならば、俺のダンジョンを破壊しようとする不届き

な奴は現れまい

ダンジョン運営にはダンジョンポイントが必要で、そのポイントを手に入れる方法は二つある。一つはダンジョンに侵入した冒険者が死亡した時、もう一つはダンジョン内に侵入者が一日滞在したときである。俺はダンジョンに滞在する人数を増やす方向でダンジョンポイントを集めることにしたのだ

そしてさらに二十階層までの突破報酬として性転換薬を用意した。二十階層には怪しげな店があり、性転換薬、巨乳化薬、貧乳化薬などたくさん薬の中から三つを持ち帰ることが出来る。これは俺が錬金術チートを使って用意したものだ。二十階層まではAランクの冒険者ならクリアできるような難易度にした

そして二十階層より先に進む人には警告文が用意される。ここから先には何もありません。これ以上先に進むものはこのダンジョンを破壊する意図がある者として扱います。というものだ

そして二十一階層には本当に何も用意していない。ガランとした場所で本当にこれ

以上先に進むかという最終意思の確認をされる。一応、好奇心を押しさえきれなかった人のための気遣いだ

そして二十二階層から奥が、俺のダンジョンが破壊されないように防衛をするためのダンジョンだ。二十二階から先は苗床ダンジョンとなっていて、侵入者はスライム、触手モンスター、ゴブリン、オーク等のダンジョンを守るモンスターの苗床として利用される

男も女も関係ない。女はそのまま苗床に、男は女体化トラップで女体化した後には苗床として利用する。俺のダンジョンを破壊しようとした人間は、苗床としてモンスターを増やす道具かつ、ダンジョン内に強制的に滞在をさせダンジョンポイントを生み出す人形として利用する

ダンジョンポイントを入手し次第、階層をさらに深くしていく計画だ

そして俺がダンジョンを作成したことにより、俺は種族が人間からダンジョンマスターに変わった。その影響で俺が淫紋を刻んだ女の子達も種族がダンジョンマスター

の眷属となり、年を取らずに俺と生き死にをともにする存在となった

俺が淫紋を刻んだ彼女達にはダンジョン最下層のコントロールルームでダンジョン運営を委託することにする。ファーストの街に残した女性や旅先で俺が墮とした女性たちは今、ダンジョン内のダンジョンマスタールームで俺のハーレムを形成している

俺は鍊金チートでスマホのようなものを作ってそれを全員に配り、いつでも彼女たちと連絡を取れるようにした。そして俺は転移の魔法を使えるので、いつでもダンジョンに帰ることが出来る

こうして俺は淫紋を刻んだ女性たちにダンジョン運営を任せながら一人でのんびりと、新たな仲間を求めて異世界旅行を満喫することにしたのだ

旅の途中の出会い♡

「この度はありがとうございます！」

「ありがとうございます！」

俺は新たな旅の道中で人助けをしていた。俺が街道を馬車でのんびりと旅をしていると、盗賊に襲われている女性二人組を見つけたのだ

俺にお礼を言っている女性の一人目はナターシャさん。黒いメイド服を着たGカット程のおっぱいを持つ三十代前半であろう爆乳の美女で身長は150cm後半、肩まで伸ばした黒い髪に青くすました厳しそうな瞳、そして教養のあるクールなメガネ姿のお局メイドさんといった感じだ

もうひとり女性はアリス・レーベンシュタットちゃん。彼女は貴族で14歳だそうだ。アリスちゃんの身長は140cm後半で肩まで伸ばした金髪にグレーの瞳、まだ発

達途中だけど大きいDカップ程のツンとしたおっぱいがエロい女の子だ。彼女は白いセーラー服と紺色のスカート姿に大きなうさみみのような黒いリボンを付けている。そして赤と白のしましま模様のニーソックス姿だ。今、貴族の間でこういう格好が流行しているらしい。なんでも異世界から来た勇者が広めた格好だそうだ

彼女たちに詳しく事情を聞くと近々戦争が起きそうで、安全のために隣国にいるアリスちゃんの許嫁の家に避難しようとしていた所を盗賊に襲われたらしい。雇った護衛も盗賊とグルで裏切られ、もうだめだと思っていた所を俺に救われたようだ

「よかったら俺が隣国まで送りますよ」

「ありがとうございます！」

「ありがとうございます！」

俺は二人を馬車でアリスちゃんの許嫁の家があるという街まで乗せていくことを提案する。ここから二週間ほどの旅路だ。彼女たちは俺の言葉にすごく喜んでいた。こ

うして、俺の異世界旅行に新たな仲間が出来たのだった

……。

……。

……。

夜になり、馬車でサヤサヤと寝ているアリスちゃんに隠れてこっそりと、俺とナターシャさんは外で会話をしていた。馬車には魔物よけの結界を張っているし、俺の気配察知スキルも起動しているのでモンスターの心配はない

「それではお願いします」

「ええ……。約束ですから……」

俺はナターシャさんに盗賊から助けたお礼として彼女に肉体関係を要求していた。

命を助けられたということ、ナターシャさんは俺の要求を断ることが出来ずに、安全な場所につくまでという約束で俺たちはこうしてこつそりと密会をする関係になった。今日はその初日である。まず最初に俺は彼女にはフェラチオをお願いした

スル♡スル♡

馬車の影に隠れるように立っている俺の足元で地面にひざまずき、メイド服姿のナターシャさんがお局のクールな顔のまま俺のズボンをずり下ろす。シンと静まる夜の冷たい空気の中に、俺の局部が露出された

「……………大きい♡」

ナターシャさんが俺のペニスを見て息を呑みながらそうつぶやく。誰と比べているんだろう。そして彼女は少しだけ逡巡をした後に、意を決したように深呼吸をしてから俺のチンポを口に咥えた

……………ちゅば♡……………ちゅば♡

メイド服姿のナターシャさんが俺のイチモツを口に咥え込み、ツンとした冷静な表情のまま熟れた舌使いでフェラチオをしてくれる。彼女はホカホカと温かいお口で俺の亀頭を包み込みながら、ネロネロと舌先を使いねつとりと俺の弱い箇所をなぶり回してくる。ヌルヌルと湿っていて生温かい唾液を俺のペニス全体に絡めるようにしてちゅばちゅばといやらしく音を立てながら肉棒を舐め回しつつ、ナターシャさんは顔を前後に動かしてこそばゆくて気持ちいい往復運動をしながら、柔らかい右手で俺の肉竿をシコシコと握ることも忘れていない。素晴らしい技術だ

「ずいぶんとお上手ですね。誰に仕込まれたんですか？」

「……きかないれ♡……れろ♡……れろ♡」

ナターシャさんは今でも独身なんだそうだ。旅の途中で彼女から聞いた。しかしこれだけフェラのテクがすごいってことは多分、雇用主に仕込まれているんだろうな。ナターシャさんはすごく美味しそうに瞳をとろんと濡らしながら、俺のペニスを舌でねぶり続けている。お局独身メイドによる丹念は謝礼のフェラチオは、しばらくの間続いた

……とぷとぷ♡

彼女の素晴らしいテクニクに耐えきれなくなった俺はナターシャさんの口内に気持ちよく射精をする。すると彼女は口の中の射精が終わるまでいやらしく微笑みながら、生温かいお口でやさしく俺のチンポを包み込んでいてくれた。そして精液を出し終わったのを確認したナターシャさんは尿道に残る俺の精液を一滴も余すことなく搾り取るようにして唇を吸い上げながら、ツンとしてクールな表情のまま慣れた様子でフェラをしていたお口を俺のペニスから離していく

——ちゅぼん♡

淫猥な音が、闇夜の中に響き渡った

……コクリ♡

「……ちそうさまでした♡」

静寂の中で、淑女の顔をしたナターシャさんが口元を隠しながら俺に微笑む。これはダメだ。エロすぎて我慢ができない。そのまま俺はナターシャさんに飛びつくようにして、セックスの前戯を開始した

……。

……。

……。

……(イ)そ♡……(イ)そ♡

俺とナターシャさんは引き続き馬車の外で彼女を助けた謝礼としてのセックスを続けている。今の俺は馬車に寄りかかるように立っているナターシャさんのスカートの中に手を入れ、彼女のトロトロに濡れたおまんこの割れ目を指で弄っていた。性器を弄るのに邪魔だからという理由で脱ぎ捨てた黒色のセクシーな下着が、ナターシャさんの

右脚にクシャクシャになってぶら下がっている

「ナターシャさん。すつごい濡れてますよ？あんまりエッチはしないんですか？」

「……っ♡もうずいぶんと……誰ともしていません♡……あん♡……っ♡……あっ♡」

右手の中指でプニプニと彼女のクリトリスを押し潰している俺に応えるようにして、俺のペニスを右手でシコシコと擦りながらナターシャさんがそう教えてくれる。寝取りチンポのスキルの効果で彼女は今、数年ぶりのセックスに大興奮をしていることが分かった。どうやらナターシャさんは普段、熟れた体を持って余しているようだ

さらにナターシャさんと会話を続けていくと、彼女は若いときは雇用主であるアリスちゃんのお父さんと肉体関係を持っていたが、アリスちゃんが生まれてからはずっとセックスはご無沙汰なんだそうだ

クチユ♡クチユ♡

「ユーリさん……お嬢様が起きてしまいます……だからっ♡……らめ♡……そんな
に♡……っ♡強くないで……♡お願いですから……♡許して……♡……っ♡んくう
♡……っ♡……っ♡」

今度はナターシャさんの温かく潤った膣の中に人差し指と中指をねじ込み手マンを
始めると、すぐに彼女の膣口からは熱くてとろとろの愛液がこぼれ出てくる。ナター
シャさんは自分のあえぎ声で寝ているアリスちゃんが起きてしまうことが心配なのか
俺にやさしくするように懇願をしてくるが、俺は彼女への手マンを緩めない

「少しでも声を我慢してくださいね。ナターシャさん」

「そ、そんなあ……っ♡らめ♡……っ♡声がっ♡……れちやう♡……からあ♡……あっ
♡……あっ♡」

両手で口を押さえながら馬車に寄りかかって気持ちよさそうに体をすくませている
ナターシャさんの柔らかい膣の中に埋まった俺の人差し指と中指をグニグニと折
り曲げながら、俺は彼女に手マンを続けていく。夜の静まり返った暗い森の中には、甘

なくなったナターシャさんの吐息と、彼女の膣肉が俺の指によってかき混ぜられるクチュクチュとした淫猥な音だけが響き渡っていた

「……………つユーリさんお願いです……………っ♡……………もう♡……………声が我慢できないの♡……………止めて……………♡……………あっ♡……………あっ♡……………あっ♡……………あっ♡」

「ナターシャさん。頑張ってください。アリスちゃんが起きちゃいますよ」

「いじわるしないれえ……………♡……………っ♡……………っ♡……………っ♡……………っ♡」

グツチュ♡グツチュ♡グツチュ♡

ナターシャさんの膣の中で折り曲げる二本の指のリズムを強くしていくと、涙目になって両手で口を隠し息を潜めているナターシャさんのおまんこが少しずつ、心地よさそうにヒクヒクと痙攣をし始める。どうやら彼女はイキそうなようだ。俺は声を出すことでアリスちゃんにバレるのが怖いのか絶頂を我慢し続けているナターシャさんの膣穴をほじくる二本の指を速めると、彼女の体を無理やりオーガズムに導いてあげるこ

とにした

「もう♡……だめ♡……イグう♡……っ♡……あ、っ♡……あ、っ♡……あ、っ♡……あ、っ♡」

ゾク♡ゾク♡ゾク♡

ナターシャさんが腰を上げさせながら切なそうに小さな声を上げる。そして彼女は静かにイッた。絶頂をしてヒクつく彼女の膺から抜き取った俺の二本の指に染み込んだ、ナターシャさんのおまんこのツンとした残り香が素晴らしくエロい

俺は瞳をとろんとさせて体を脱力させているナターシャさんに促しメイド服を着たままの彼女を馬車に手をかけさせ立ちバックの体勢を取らせるとスカートを捲りあげ、俺の指でかき混ぜられたことによりグチュグチュに濡れてしまった彼女のおまんこに、硬く勃起した俺のチンポをあてがう

「ナターシャさん。しちゃいましょうか」

「——あつ♡——あつ♡……でもお♡」

ネットに濡れたおまんこに俺のチンポをあてがわれながら、ナターシャさんが悩み事を打ち明け始める。どうやら彼女には最近、恋仲になった異性がいるようだった。詳しく話を聞くと、ナターシャさんと恋仲になったのはアレン君という年下の庭師の男の子で、最初は彼からのアプローチに年上で生き遅れの私よりもっと若い女の子のほうがいいと断っていたが、彼は諦めずにナターシャさんがいいのだと熱心に伝えてくれたそう。

最初は困っていたナターシャさんだが次第に彼の熱意に惹かれ、戦争が起きそうということもあり、アリスちゃんと隣国へ避難をする際に彼にOKの返事を伝えたのだそう。戦争が終わったら再会しましょう。そう約束をして

誠実なナターシャさんはそのために、俺と肉体関係を持つことに罪悪感を持っているようだった。でも、寝取りチンポのスキルで分かる。彼女は今、肉体に大きな欲求不満を抱えていて俺とのセックスを思う存分に楽しみたいと思っていることを。俺はナターシャさんに都合のいい情報を与えることで彼女の心から罪悪感を取りのぞき、俺と

のセックスにとっぴりとハマらせてしまうことにする

「そんな大切なことを話してくれてありがとうございます。でも、これは謝礼のためですから。ナターシャさんは何も悪くありませんよ」

「謝礼の……ため……」

熟れた体を持って余しておりみんなには内緒にしているが性的な欲求不満を募らせている彼女は、周りに知り合いがアリスちゃん以外誰も居ない場所であることと、一度命の危険にさらされ肉体の本能が刺激されたことで心のタガが外れやすくなっているはずだ。俺はナターシャさんの心の隙きを突くように、彼女に向かって甘い言葉を重ねてしまう

「そうです。これはアリスちゃんを守るために仕方のないことなんです。だって俺に謝礼として肉体関係を要求されたんですから。むしろ逆にナターシャさんは俺とセックスをしたことを褒められるべきなんですよ。お嬢様のために自分の身を捧げているんですから。旅の途中で目撃者は誰もいません。みんなには内緒にしておけば、誰にも、

その彼にも、このことがバレることはありません。ナターシャさんはもつと楽に生きてらどうですか？」

「……」

俺の言葉に流されるようにして、ナターシャさんの息遣いが淫乱なメスのものに変わるのが分かった。会話をしている途中、ずつと勃起したペニスをあてがわれ続けた彼女のおまんこも我慢の限界が近づいているのかヒクヒクと切なそうに俺の亀頭に吸い付いている。俺は彼女の心に誘惑の言葉を続けることで、ナターシャさんの理性をさらに壊してしまうことにする

「我慢は体に毒ですよ。自分の命が消えそうだった時、ナターシャさんはもつとセックスをしておけばよかったと考えませんでしたか？ナターシャさんは今、俺とセックスがしたい。そうでしょう？ナターシャさんはこれからもずつと、同じ間違いを繰り返して生きたいですか？いつ死ぬかも分からないのに。ナターシャさんはもつと自分をさらけ出してもいいんです。この際だから人生を変えませんか？今がチャンスなんです。だからナターシャさん。謝礼の続き、しちやいましょう」

俺はナターシャさんの膣口を勃起したチンポでやさしく突きながら、彼女を駄目な方向へと誘導するように墮落をさせ、唆していく。夜の静寂の中で、ナターシャさんの息を呑む音が聞こえた。後は彼女が決断をするのを待つだけだ

……。

……。

……。

「……分かりました♡」

しばらくの間沈黙をした後に、ナターシャさんの心が快樂に流れた。これで思う存分に彼女とのセックスを楽しむことが出来る。俺は早速、メイド服を乱しながら俺のチンポを早く挿れてほしくて待ちわびているナターシャさんのトロトロに熱くなつたおまんこに、腰を押し込むようにして俺のペニスを挿入していくことにする

にゆううらん♡

「——おつきい♡——あつ♡——あつ♡——あつ♡——あつ♡」

「久しぶりのセックスはどうですか?」

「気持ちいい♡……です……っ♡すっごい♡……ユーリさんのチンポ♡……すっごく♡……いい♡」

ぬぼ♡ぬぼ♡

心地よさそうに肩をすくませながら馬車に寄りかかっているナターシャさんと会話を重ねながら、俺はグチグチに絡みついてくる彼女のおまんこにピストン運動を開始する。ナターシャさんのおまんこは熱くどろどろになった膣肉がネロネロと舐め回すように俺のチンポに吸い付いてきて、セックスをするのに最高に気持ちいいおまんこだった。これは雇用主が彼女を開発するのも分かる

「あはあ♡……はっ♡……はっ♡……はっ♡……はっ♡……はっ♡……はっ♡」

言い訳によつて心の棘を取り除かれたナターシャさんの緊張が取れたのか、彼女は俺とのセックスを楽しみ始めたようだ。メイド服のスカートを捲りあげた立ちバック姿のナターシャのおまんこからはドロドロの本気汗が溢れ出てきており、彼女のクリトリスの先からねつとりと濁った愛液がとろりと垂れ下がっている

ナターシャさんは俺とのセックスによつて火照り始めた体で甘い息を吐きながら、自らの行いを恥ずかしそうに懺悔をした

「ようやく恋人が出来たばかりなのに……他の男の人とエッチしちゃいました♡」

「報酬のためですから、仕方ないですよ」

「うふふ♡……ユーリさんに食べられてしまいましたね♡」

クールなメイドから妖艶なメスに変わったナターシャさんが照れたようにつぶやく。メチャクチャに可愛い。俺はそんな彼女を快楽漬けにするべく、少しずつ分かってきたナターシャさんの弱い部分をチンポを使ってねつとりと責めることにした

又チユ♡又チユ♡

「……あつ♡……あつ♡……あつ♡……あつ♡声……出ちやうからあ♡……つ♡……つ♡……あつ♡」

弱いところばかりを突かれ始めたナターシャさんが体をよじらせ乱れ始める。やはり彼女は自分の声のアリスちゃんに聞こえてしまうことが気がかりなようだ。俺はナターシャさんを安心させてあげるために、彼女のネットネットになったおまんこにピストン運動を続けながらやさしく声をかけた

「静音の魔法をかけましたから、声を出しても大丈夫ですよ」

「本当？——あつ♡——あつ♡——あつ♡——あつ♡ユーリさんのチンポ♡——すつごい♡気持ち

……。

……。

……。

「取り乱してしまいました……♡」

セックスが終わりいつものクールな顔に戻ったナターシャさんが、シワになったメイド服を正しながら恥ずかしそうにつぶやいている。俺はそんな彼女にやさしくキスをする。ナターシャさんの心を溶かす声をかけた

「可愛かったですよ」

「もう……♡でも……♡旅の間だけですよ♡」

……ちゅ♡

暗闇の中でナターシャさんが照れたような顔で俺にキスを返してくれる。彼女はクルルで近寄りが見たい目をしているため男性経験が少なく、こうして押されるとすぐにデレてしまうところがあるようだ。これはこのままナターシャさんが俺との関係にどっぷりとハマってくれるのを待てばいいな

「それと、アリスお嬢様の純潔には絶対に手を出さないでくださいね。ユーリさんは手が早そうですから。そのかわり、私がユーリさんのお相手をさせていただきます♡」

ナターシャさんは乙女の顔になった上目遣いでそう言いながら、俺を見つめていた

うん。純潔に手を出さなければいいんだな。さて。次はアリスちゃんをどうやって墮とそうか。新たなターゲットを見つけた俺は、俺のハーレムに二人の新しい仲間を加えるための計画を練ることにする

アリスちゃんと内緒の♡

ナターシャさんと馬車の外でこつそりとエッチをした後、今の俺はひっそりと静まる馬車の中で毛布に包まっている。馬車の中には久しぶりのセックスに疲れたナターシャさんの満足したような寝息が聞こえていた。それに期を見た俺は、ターゲットを次に移すことにする

「アリスちゃん。起きてるんでしょ？」

「——っ!!! ユーリさん……」

そう。アリスちゃんは起きていた。彼女は馬車の外で何やら話をしている俺たちを不審がり、こつそりとのぞきをしていたのだ。そしてアリスちゃんは俺とナターシャさんの性行為をフェラの場面から最後までしっかりと目撃をしてしまった。そのことを俺は気配察知スキルで知っていたのだ

先程のセックスの中でナターシャさんに伝えた静音の魔法をかけたという言葉も嘘だ。つまり、俺の言葉を信じたナターシャさんが発したみだらにあえぎ狂う大きな声は、アリスちゃんに丸聞こえだった

「眠れないのかな？」

「そ、それは……」

生まれたときから自分の側に来てくれる、ナターシャさんという信頼する従者の裏側を目撃してしまったことのショックで眠れないのか、ベッドの上で恥ずかしそうに縮こまっているアリスちゃんに俺は声を掛ける。俺の質問に、アリスちゃんは困ったように言葉を詰まらせていた

俺はそんなアリスちゃんの様子を確認すると、彼女が寝ているベッドの中に勝手に潜り込んでしまう。アリスちゃんが包まる毛布の中は、彼女がお気に入りだという柑橘系の香水の匂いと少女の匂いが混じり合った、とてもいい香りがした

「異性の方と同衾をしてはいけないとお父様に言われています……」

毛布の中に入り込んできた異性である俺にアリスちゃんは体をこわばらせるが、俺は彼女を気にすることもなく、ベッドの中で向かい合って寝転びながらアリスちゃんと会話を続けていく

「そうなんだ。でもアリスちゃんのお父さんは、今のアリスちゃんの年くらいだったナターシャさんと一緒にこうやって寝てたんだって。アリスちゃん。こっそり隠れて聞いてたよね？」

「……」

俺たちの性行為をのぞいていたアリスちゃんには俺とナターシャさんの会話も聞こえていたはずだ。俺の言葉にアリスちゃんは俯きながら泣きそうな顔をして黙ってしまふ。しかし俺は彼女をさらに言葉で責めることで、アリスちゃんの心に調教を開始する

「ナターシャさんはアリスちゃんのお父さんに、いつもこういうことをされてたんだって。アリスちゃん。聞こえてる？」

クニユ♡クニユ♡

俺は毛布の中で俯いたまま喋らないアリスちゃんの股間に右手をやると、彼女の履いている下着の中に無理やり手をねじ込んで、触ってはいけけないアリスちゃんの大切な部分を弄ってしまう。毛布の中で身をすくませていたアリスちゃんは股間に伸びた俺の腕を押さえつけようと頑張るが、少女の力が男の腕力に勝てるはずもなく、彼女は俺に股間をされるがままに弄られてしまう

「——はうう♡そこはあ♡……触ってはいけけない♡……はしたない場所ですう♡……っ♡……っ♡」

俺が中指を使ってアリスちゃんの柔らかい割れ目をいじくり回していると、毛布の中の彼女が切なそうに声を震わせながら俺に抗議をしてくる。アリスちゃんの履いてい

る薄い下着を引き伸ばしながら中に入り込んだ俺の手のひらに、彼女の股間に生えてい
る陰毛がチクチクと当たってこそばゆい

泣きそうになり始めたアリスちゃん懇願を無視すると、俺は彼女の陰唇の間に中指を
這い回すようにして、アリスちゃんの敏感な性器を無配慮にこね回す

「——っ♡——っ♡……あっ♡……あっ♡……あっ♡……あっ♡——あっ♡」

「アリスちゃん。エッチな声が出るよ。気持ちいいのかな？」

「——そんなあ♡……声が♡……あっ♡……勝手にい♡……あっ♡——出ちゃう♡……
なんで？……あっ♡……はっ♡」

中指を使つてやさしくアリスちゃんの割れ目をこねこねとマッサージしていると、彼
女の口から少しずつ甘い吐息が漏れ出てくる。アリスちゃんは自分のお口から自らの
意志を無視したはしたない声が勝手に出てしまうことが信じられないのか、驚いた顔を
しながら両手で口元を隠し、羞恥心で顔を真っ赤に火照らせながらあえぎ続けていた

「アリスちゃんのここ、すつごくエッチなお汁が出てきたね」

「ら、らめえ……っ♡」

……クニ♡……クニ♡

「——っ♡——っ♡——っ♡」

俺はビシャビシャに濡れてしまったアリスちゃんのおまんこから中指を使って愛液をたっぷりとすくい上げると、そのヌルヌルとした潤滑液を緩衝材に使いながら彼女の割れ目の上側にポチツとはみ出ている小さなクリトリスを丹念に弄っていく

するとアリスちゃんは自分の体にこんなに敏感な場所があることが信じられないのか、ギユツと目をつむると体を縮こまらせて、初めて味わうのであろう強すぎる快感に耐えるようにして背中を丸めてしまった

俺はアリスちゃんのクリトリスはマッサージュするが彼女の膣の中には手を触れないように気をつける。純潔は守るようにと、ナターシャさんとの約束だからな

「——あああああ♡ユーリさん……らめです♡……っ♡ナターシャにもおお……♡——あっ♡……ここはみだりに触らせてはいけないって♡……っ♡言われていますのお……♡もう……許して♡……くださいまし♡——あっ♡——あっ♡——あっ♡——あっ♡」

アリスちゃんが体をビクンビクンとこわばらせながら俺にお願いをしてくるが、彼女の体を開発する絶好の機会だ。もちろん絶対をやめたりしない。俺はそのままアリスちゃんの固く勃起を始めた敏感なクリトリスを、中指の腹でこねこねといやらしいリズムで弄くり続けていく

そして俺は、言葉を使ってアリスちゃんの心を汚していくのも忘れない。会話の中で分かってきた。アリスちゃんはナターシャさんの名前を出されると弱いということ

俺はアリスちゃんが信頼をしているナターシャさんをダシにすることで、アリスちゃんの心をどつぷりと快楽色に染めてしまうことにした

「でも、ナターシャさんはアリスちゃんくらいの年で、アリスちゃんのお父さんにこうしてお股を毎日弄くらわれてたんだってさ。アリスちゃんはさつき、こつそりと隠れて聞いてたよね？」

グニユ♡グニユ♡

「……………いけませんわ♡……………いけませんわ♡」

教育係であるナターシャさんの名前を出されると、ナターシャさんの名前を聞いたアリスちゃんは俺への抵抗を弱めてくれる。これは便利な言葉だ。俺は少しずつ彼女のクリトリスを弄るスピードを速めながら、アリスちゃんへの言葉責めを同時に強くしていくことにした

「はうう……………♡らめえ……………♡こえが……………♡とまらにやいのお……………♡」

純真なアリスちゃんにとって、こういう風に他人から言葉で責められ続ける経験は初

めてだろう。それも同時に、俺に性器を気持ちよくマッサージされながらである。まっすぐだったアリスちゃんの心が、どんどん歪んでいくのが分かった

俺の指でクリトリスを弄られ続けているアリスちゃんのきれいな灰色の瞳が、性的な快感を与えられ続けたことによつて薄くとろりと濁つてきている。彼女の心が少しずつ、性の色に染まつてきていた

「アリスちゃんは、ナターシャさんが俺にここを触れられてるのを見てどう思った」

「……………気持ち……………よさそう……………でしたあ……………っ……………っ……………っ……………」

クニユ♡クニユ♡クニユ♡

依然として俺にクリトリスをいじくられ続けているアリスちゃんが、羞恥心で顔を真っ赤に火照らせながら真摯に俺の質問に答えてくれる。俺はさらに純真な心を持つアリスちゃんを言葉で責めながら、この少女の心をどっぷりと性的に開発してしまうことにした

「じゃあ、アリスちゃんは今、ここを触られてどんな感じかな？」

「分かり……♡ません……♡」

性の快感に瞳を潤ませ始めたアリスちゃんが右手で口元を隠しながらおしとやかに、初めて自分の体におとずれた心地のよい感覚を一生懸命に観察している。彼女は今、初めての経験に混乱して自分の体の感覚が分からなくなっているようだ。俺はそんなアリスちゃんに分かりやすいようにと、彼女のポチツと固くなったクリトリスを弄る力をさらに強めてあげることにした

グニユ♡グニユ♡グニユ♡

「——はうう♡」

ビクン♡ビクン♡

「……………あはあ♡——あっ♡……………あっ♡……………あああああ♡……………っ♡……………っ♡」

アリスちゃんの口から漏れるあえぎ声が、先程までの毛布の中に縮こまっていた初めての性に戸惑う少女のものではなく、性の喜びを味わい始めた女のよがり声に変化した。俺はアリスちゃんの体にもっと気持ちいい体験を教えるために彼女のクリトリスへのやさしい愛撫を続けながら、さらに質問を続けることでアリスちゃんの心をどっぴりと快楽に向かって開発をしていく

「アリスちゃん。気持ちいい？」

「……………気持ち♡……………いいですう……………♡——っ♡——っ♡——っ♡」

アリスちゃんの吐息に熱くて甘いものが混じり始めると、純真な少女だったアリスちゃんの顔がレディのものへと生まれ変わっていく。俺はアリスちゃんにおとずれたその変化に心から満足をしながら、彼女のクリトリスへの気持ちいい愛撫をそのままに続けていった

クニユ♡クニユ♡クニユ♡

「アリスちゃんはここを触られてると、どんな感じになるの？」

「……っ♡お股が……♡ジンジンして……♡体が……♡ポーツとなつてしまいます♡」

アリスちゃんの体が、生まれて初めての性的な興奮を覚え始める。快楽にとろけた彼女の体からは力が抜けきつてしまい、純粹な心によつて澄みきつていたアリスちゃんの綺麗なグレーの瞳が快楽でどろりと汚れていく。俺はそんな彼女の心をさらに墮落させるために、言葉での調教を続けていった

「アリスちゃんはここを自分で弄つたりはしないの？」

「そんなことお♡はしたなくて考えたこともありません♡……っ♡……っ♡……っ♡」

下着の中に俺の手を入れられて身悶えているアリスちゃんが、俺に秘部をクチュク

チュと弄くられながら恥ずかしそうに教えてくれる。彼女は今、初めて自分の体が気持ちよくなるという体験をしているのだ。これは俺が責任を持って彼女の体を天国に導いてあげなくてはな

クニ♡クニ♡クニ♡

「……ユーリさん♡……っ♡なにかきちやうのお♡……もう♡……らめえ♡……っ♡……っ♡」

俺が中指を使ってさらにアリスちゃんのカリトリスをいやらしくこねくり回していると、彼女は俺の着ている服を右手でギュツと握りしめながら切なそうにそう報告してくる。アリスちゃんのお腹の当たりが苦しそうにへこへこと膨らんだり縮んだりを繰り返しており、俺が弄くり続けているアリスちゃんの股間もヒクヒクと細かい痙攣を始めていた

アリスちゃんの体に、初めてのオーガズムが迫っていた

俺は彼女の体をやさしいオーガズムに導いてあげるために慌てずにゆっくりと、アリスちゃんのクリトリスを柔らかく執拗に押し潰してあげながらも、コネコネと中指でリズムよく彼女の股間にある固くて敏感なポッチを回し続けていく。そして俺はそのまま愛撫を続けながらアリスちゃんに、俺にとつて都合のいい淑女としての知識を教え込んでいった

「それはね。イクって言うんだよ。ナターシャさんも俺とまぐわいながら言ってたよね」

「はいいい♡……これが♡……イクっていうんですのお♡……おっ♡……おっ♡」

清廉で無垢であつたアリスちゃんの顔がアへ顔に変わり始め、彼女の声も少しずつ情けないアへ声を出し始める。多分、これもアリスちゃんにとっては初めての経験だろう。これはしっかりと俺好みの女に仕立て上げなくてはな

「……くう♡声が……♡——あつ♡勝手に……♡出てしまいます……♡——あつ……らめえ♡——あつ♡——あつ♡——あつ♡——あつ♡——あつ♡……っ♡……っ♡……っ♡」

アリスちゃんがもう限界といった様子で顔を赤く火照らせ、苦しそうな表情で縋り付くようにして俺に懇願をする。これはそろそろとどめを刺すことで、彼女の体を快樂の世界にどっぷりと浸らせてしまおう

「アリスちゃん。イクときはちゃんとイクって言うのが、大人の淑女だからね。ナターシャさんもイクときはイクって言ってたでしょ？」

「……………はいいい♡……………そうなんですのおおお♡……………おっ♡……………ほっ♡」

俺はアリスちゃんに俺好みの情報を与えることで、彼女の心を俺色に染めてしまうことにする。素直なアリスちゃんは俺の言葉を信じると、クリトリスを俺にこねこねと弄くられながらも一生懸命にイクという言葉をつぶやいていた

「……………いくう♡——あっ♡……………イク♡……………イク♡——あっ♡イク♡——あっ♡——あっ♡——イクう♡」

アリスちゃんはもう限界なのか顔を真っ赤に火照らせて、いきむようにして体をすくませ続けている。俺はそんな彼女を可愛く思いながら、アリスちゃんの心と体に生まれ初めてのおーガズムを体験させてあげる。これで彼女はひとつ、大人のレディになった

……。

……。

……。

「……………い……………イクううう……………♡」

ガク♡ガク♡ガク♡

アリスちゃんが毛布の中で背中をのけぞらせながらも腰をへこへこ小刻みに動かすようにして、おしとやかに絶頂をする。イッている彼女の姿が小動物みたいで可愛

い。これでアリスちゃんは初めてのオーガズムを経験した。今後、彼女が味わう全ての性体験は俺が基準となるだろう

「気持ちよかった？」

「……はい♡」

生まれて初めての絶頂を味わったばかりで、気持ちよさそうにボーツとしたままベッドの中で呆けているアリスちゃんに俺が質問をすると、彼女はとろんと濁した瞳で照れたように答えてくれる。俺はアリスちゃんとの会話を続けながら、さらに無垢な貴族の少女の心を少しずつ汚していく

「ナターシャさんと俺が何で馬車の外でああいうことをしていたか、分かったでしょ？」

「……ええ♡……これ♡……すっごく♡気持ちよかったです♡」

アリスちゃんがいたずらっ子のような笑みを浮かべて嬉しそうに俺と会話をする。

今日の経験によって、彼女の顔は少しだけ大人になっていた

「ナターシャさんにバレたら怒られちゃうけど、アリスちゃんがしたくなったらいつでもしてあげるからね」

「でも、貴族は純潔が……」

貴族として純潔を心配するアリスちゃんが、本当はもつとしたいけど我慢をするようなそぶりで俺の言葉に忌避感を示す。しかし俺は彼女に都合のいい情報を与えることで、アリスちゃんの心から罪悪感を取り除いてしまえばと、彼女を快樂の世界へと誘惑してしまう

「アリスちゃんの純潔は絶対に守るから大丈夫だよ。こうやって股間を指で触るだけだし、それなら問題ないよね？アリスちゃんは従者に体を拭かせるようなものだと思うばいいからさ。それに、すっごく気持ちいいよ？」

「……」

俺の言葉を聞いたアリスちゃんが考え始める。彼女の心の中では今、理性と快樂が戦っていた。でも、簡単に分かる。アリスちゃんの心が徐々に快樂の方へ流されていると

先程、自分が経験した気持ちいいことを思い返したのかアリスちゃんの瞳がさらに濁り始めると、彼女の表情がさらなる快感を求めて暗い笑みを浮かべていく。時間の問題だった

……。

……。

……。

「……………分かりました♡」

少しぐらいなら他人に大切な場所を触らせても大丈夫だろうと、心を墮落させてしまったアリスちゃんが瞳にハートマークを浮かべながらそう判断をする

「旅の間だけです……いっぱいしてください♡……ナターシャには絶対に内緒ですよ♡……はしたないと怒られてしまいますから♡」

女の顔をしたアリスちゃんが、暗い瞳で嬉しそうに微笑みながら俺に依頼をした

しかしまあ、とりあえず今日はこれくらいにしておこうか。これからじわじわと少しずつ、アリスちゃんの心を変えていけばいい

初めての絶頂に疲れてしまったのか眠そうに瞳をとろんとさせ始めたアリスちゃんをベッドに残し、俺は自分が寝るためのベッドに帰っていく。俺の馬車内には空間拡張の魔法がかかっている、ベッドを三つ置くことなど簡単なくらいに広い。スイートルームを搭載したキャンピングカーみたいなのを想像してもらおうと分かりやすいだろう

さて、俺も寝るとするか。スーと寝息を立てるアリスちゃんとナターシャさんの

様子をうかがいながら、性的な遊びを楽しんでスッキリとした俺も明日に備えて眠ることにする

アリスちゃんといけない遊び♡

「——あつ♡——あつ♡それでですね……♡ステフ君とは……文通をしてみました——
あつ♡——イクつ♡」

俺は今、ベッドの上でアリスちゃんの体を後ろから抱きしめ、彼女のクリトリスをやさしく愛撫をしながら許嫁であるステフ君についての話を聞いていた

アリスちゃんの許嫁の名前はステファン・ベツケンバウム君といい、ステフ君はアリスちゃんと定期的に文通をしていて、押し花なんかをプレゼントしてくれるマメな男子なのだそう。俺の膝の上でイキながら、アリスちゃんがそれを教えてくれた

ナターシャさんは今、外で御者をしているので馬車の中にはいない。ナターシャさんと俺が御者を交代する時間まで、俺はいつものようにアリスちゃんのクリトリスを弄ってあげている

「アリスちゃん。実は純潔を守りながらもつと気持ちよくなれる方法があるんだけど、試してみる？このやり方を覚えると、アリスちゃんは純潔を守りながらもナターシャさんみたいに俺とセックスが出来るようになるよ」

「……それはどんな方法なんですか？」

エッチなことに興味が湧いてきたアリスちゃんが、俺の膝の上にちよこんと座りながら俺を見上げるようにして尋ねてくる。やはり彼女はクリトリスを弄くられるだけでは飽き足らずに、セックスも実際に試してみたいようであった

ナターシャさんには内緒にしているが、ナターシャさんと俺が毎夜しているセックスをアリスちゃんにはこっそりとのぞかせてあげている。ナターシャさんと俺の性行為を目の当たりにし続けたアリスちゃんは、好奇心を隠しきれなくなってしまうていた

「百聞は一見にしかずと言うからね。プル。お願い」

うつとりと虚空を見つめ続けていた。今の彼女は、すつごく気持ちいいんだろうな

「——あつ♡——ああああ♡——プルちゃん♡——すつこい♡——気持ちいい♡♡♡
♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡」

アリスちゃんは今日、お尻の穴で気持ちよくなれることを知ってしまった。これはいけないな

ずるるるるる♡——にゅぽん♡

アナルの掃除をし終わったプルがアリスちゃんのお尻の穴から下品な音を立てて出てくる。俺はベッドの上でアヒル座りのままとろんとしているアリスちゃんを促し、四つん這いにさせるとバックの体位をとらせ、白いセーラー服姿のアリスちゃんの紺色のスカートを捲りあげる

俺にクリトリスを弄くらせるために青と白色のボーター柄の下着を脱いでいたアリスちゃんはノーパンのままだ。俺は赤と白色のニーソックスを履いてむっちりとしたア

リスちゃんの健康な脚を目で堪能しつつ、紺色のスカートにノーパン姿で四つん這いになっている彼女のお尻の穴に俺の勃起したペニスをあてがっていく。俺の亀頭の先がピタリとアリスちゃんのお尻の穴にくっつくと、アリスちゃんのアナルがヒクヒクと収縮を繰り返した

「ほ、本当にここにするんですの？」

お尻の穴にペニスをあてがわれたアリスちゃんが不安そうな声で俺に尋ねてくる。俺はそんな彼女を安心

させることで、アリスちゃんの心を立派な淑女に育て上げていくことにする

「でも、さつきプルに弄くられたときは気持ちよかったですでしょう？」

「それはそうですけど……」

俺の言葉で先程プルにお尻を弄くられたときの感触を思い出したのか、アリスちゃんの腰がヘコヘコと情けなく動いた。俺はさらに彼女に誘惑の言葉を続けて、アリスちゃ

んにアナルセックスを開始する心の準備をしてもらう

「やさしくするから大丈夫だよ。ここを開発すればアリスちゃんはナターシャさんみたいに俺とセックスが出来るようになるからね。一回だけ試してみようか。痛かったらすぐに止めるからさ。でも、さつきプルに弄くられたときよりも、ずっと気持ちいいよ」

……。

……。

……。

「分かりました♡……よろしくお願ひします♡」

快樂という好奇心に勝てなかったのか、アリスちゃんが了承の意を俺に伝えてくる。さて、アリスちゃんの了解も得たことだし、俺は早速彼女のお尻の穴の感触を堪能することにした。アリスちゃんが痛くないようにと薬液創造スキルでペニスから回復効果

の持続するリジエネローションと体の感度を上げるための媚薬を分泌しながら、俺は腰を押し込むようにして彼女アナルをチンポで押し広げていった

……ぬぷ♡……ぬぷぷぷ♡

にゆるりという感触とともにアリスちゃんのアナルが少しずつ俺のペニスの形に広がっていき、彼女の温かいお尻の穴の中に俺のチンポが埋まり込んでいく。プルの体液で潤滑剤を作りそれをアナルの中に広げてもらっていたためスムーズに、アリスちゃんのアナル処女の開通式は進んでいった

にゅぷぷぷ♡

「アリスちゃんのお尻の中に全部入ったよ。分かる？」

「~~~~♡~~~~♡~~~~♡~~~~♡」

アリスちゃんのアナルに俺のチンポが埋まりきると、彼女は四つん這いのまま身をす

くませるようにして身悶えている。アリスちゃんは俺の質問に答える余裕がないくらいに、お尻の穴に快感を感じていた。彼女のその様子に安心をした俺はアリスちゃんのお尻の穴へのピストン運動を開始すると、彼女の初アナルセックスを最高のものにするために、アリスちゃんのお尻の穴をねつとりと気持ちよく責めていった

ぬぶ……♡ぬぶ……♡ぬぶ……♡ぬぶ……♡

ベッドに四つん這いになって心地よさそうに虚空を見つめ続けるアリスちゃんのアナルにゆつくりとした抽送を続けていくと、少しずつ彼女の口から甘くて熱い吐息が漏れ出してくる。アリスちゃんは初めてのアナルセックスを貪るようにして、うつとりと体を震わせ続けていた

「アリスちゃん。どうかかな？」

「……はっ♡……はっ♡……はっ♡……はっ♡」

徐々にアリスちゃんのアナルへのピストン運動を速めながら彼女に尋ねると、俺のチ

ンポでお尻の穴をめぐられ続けているアリスちゃんが、返事もできないくらいにアナルから生まれる快感を貪っていた。これが順調に、彼女の心も体も開発が進んでいる

——ズポツ♡——ズポツ♡

「あはあ♡これ♡……すっごいですわ♡」

さらに抽送の速度を上げ、俺がいつも女性にしているピストン運動にまで速度が達すると、アリスちゃんが歓喜の声を上げる。これはアナルセックスが相当に気持ちいいんだろうな。彼女は興奮するように息を荒くしながら、夢中になって腰を振り始めていた

「これ♡すっごい♡……すっごいのお♡——お、っ♡——お、っ♡——お、っ♡——お、っ♡」

俺のチンポに突かれ続けているお尻の穴を気持ちよさそうにヒクヒクと収縮させながら、淑女になったアリスちゃんが背中を強くのけぞらせ、四つん這いの姿でお尻の穴に出入りする異性の肉棒の味を丹念に楽しんでいる。俺はそんな彼女の心をさらに快樂で汚してしまうべく、アリスちゃんのアナルをめぐりあげる力を徐々に強めていっ

ない。アリスちゃんには思う存分に、このままあえぎ声を出し続けてもらおう

「あ、あ、っ♡——お尻があ♡——っ♡めくれてりゅう♡♡♡♡♡——お、っ♡お
 * おおおおおお♡♡♡♡♡——っ♡???——お、っ♡?——お、っ♡?——お、っ♡?
 ♡♡」

アナルで気持ちよくなりすぎたアリスちゃんが意識を混濁させ始めると、脱力した寝バツクの体勢でお尻の穴にピストン運動をされながら腰をガクガクと痙攣させていく。枕をギュツと抱きしめて顔をうずめたままアナルに俺のチンポをねじ込まれている純真な少女は今、すっごく気持ちよさそうにアへ声を出し続けていた

さて、ここからが本番だ。このままどつぶりと彼女の体に快楽を叩き込むことで、アリスちゃんのきれいな心をどんどん壊してしまうのだ

ぬっほ♡ぬっほ♡

「~~~~っ♡~~~~っ♡!!!~~~~っ♡♡——っ♡?——っ♡?……っ♡???……っ♡~~~~

くっ♡くっ♡くっ♡♡くっ♡くっ♡くっ♡くっ♡?♡くっ♡くっ♡

綺麗な金色の髪を振り乱しながらアリスちゃんが、お尻の穴でよがり狂っていく。彼女の体が立派なレディに変わり始めていた。俺はその光景に満足をしながらも、さらにアリスちゃんのお尻の穴への抽送を続けていくことにする

アナルセックスを始めたばかりの頃は固くて慣れていなかった彼女のお尻の穴が、今はねっとりとして舐めるようにして俺のチンポに絡みついてくる、極上のアナルにほぐれてきていた

「おっ♡おっ♡おっ♡おっ♡——おほおおおおおおおおおお♡♡♡」

ビクン♡ビクン♡

おしとやかだったアリスちゃんが、今や獣みたいなアへ声をあげながら絶頂を楽しんでいる。彼女の心は俺とのアナルセックスによって、着実に変わってきていた

「っ♡?っっ♡っっ♡…っ♡♡♡…っ♡っっ♡っっ♡っ♡」

大量に麻薬物質が含まれる俺の精液を直腸内の注がれたアリスちゃんが、さらに快楽で意識を混濁させながら身悶えをする。彼女はとても幸せそうに、俺のチンポをお尻の穴に啜えたままベッドの上でトロ声を出し続けていた

まあ、今日はこれくらいにしておこう。あまりアリスちゃんを開発しすぎると、ナターシャさんに不審に思われてしまうからな

「あは♡あはあ♡…ああ♡…あああああ♡…あっ♡…あっ♡…あはああああ♡」

あまりにも俺とのアナルセックスが気持ちよすぎて前後不覚になってしまったアリスちゃんが、トロトロ口になったニヤけ顔のまま、瞳を濁してベッドに寝そべり続けている

白いセーラー服と紺色のスカートに赤と白のシマシマのニーソックス姿と、格好だけ

を見れば年相応にかわいい女の子であるが、今のアリスちゃんが普通の少女と違うのは、ベッドの上の彼女のスカートの下がノーパンであることと、アリスちゃんのアナルが俺のチンポの形にぼっこりと開き続けており、彼女のお尻の穴からは大量の精液がいやらしく垂れ落ちてきていることであろう

脱力をしたままベッドにうつ伏せに寝ているアリスちゃんのアナルからは、ムワリとした妖艶な空気がこぼれ出てきていた

……。

……。

……。

「気持ちよかった？」

「……はい♡」

しばらくの時間が経ち、元のおしとやかな少女の顔に戻ったアリスちゃんが俺の言葉に肯定をする。どうやらアリスちゃんは、アナルセックスが大変お気に召したようだ

でも今みたいに気持ちよくアナルセックスが出来るのは俺が潤滑剤を使っていることと、プルがきちんとお掃除をしてくれているからだということをアリスちゃんにきちんと説明をする

するとしたたかなことに、アリスちゃんにはプルを貸し出すことを約束させられてしまった。ナターシャさんに隠れてアナルセックスが出来ないときも、プルにこつそりとアナルをほじくってほしいのだそう。照れたように彼女は語っていた

これは思ったよりも早く、ドスケベな淑女にアリスちゃんは育ってきている。これは今後の展開が楽しみだ

「ユーリさん。そろそろ交代をお願いします」

「はい」

外にいるナターシャさんから俺に声がかかる。交代のために外にいるナターシャさんと会話を続ける俺に向かって馬車の中では、瞳にハートマークを作ったアリスちゃんが人差し指を口元に立てて、今日のことは秘密だよというメッセージを俺に伝えてきていた

「ナターシャさん。今日の夜はいっぱいイカセますからね」

「……………もうっ♡」

御者を交代する際に、俺がナターシャさんの耳元で彼女にささやくと、ナターシャさんは瞳をとろんと濁して俺に期待の眼差しを向けてくる。ナターシャさんの体も、俺専門に開発をしていかなくてはな。今から夜が楽しみだ

こうして、俺たちの旅時の一日が過ぎていく

アリスちゃんのおナニー♡

アリスちゃん視点

……じゅるるる♡……じゅるるる♡

馬車の外には今、ユーリさんのアソコを地面に膝立ちになって美味しそうに舐め啜えているナターシャが見える。私は壁が透明になって中から外の景色が丸見えになった馬車の中で、二人がこっそりと私に隠れてまぐわう姿をのぞいていた。ユーリさんにもんなには内緒だよと教えてもらった、この馬車に付いている秘密の機能だ

いつも冷静で表情を変えないナターシャが、あんなにも心地よさそうな顔をして男性の秘部を舐めているなんて、にわかには信じがたい。でも、彼女は今、すっごく幸せそうな顔をしている

私の名前はアリス・レーベンシュタット。レーベンシュタット家に生まれた三女だ。レーベンシュタット家は代々軍の重責を務める貴族である。レーベンシュタット家は私兵も優秀で、この度戦争と相まって私は隣国にある私の許嫁であるステファン・ベッケンバウム君の好意でベッケンバウム家に避難をさせてもらうことになった

ベッケンバウム家は豪商からの成り上がった貴族であり、頭の固い軍人ばかりの家系に商人の柔らかい知恵をとお父様が考えて、私とステフ君の婚約が決まったそうさ

ステフ君はとても優しく、定期的に文通をしているお手紙ではいつも私を褒めてくれる。君に早く会いたい。君のことを思うと夜も眠れない。手紙でいつもそう言ってくれるステフ君に対し、私は結婚をしても私を大切にしてくれそうな人でよかったです、ホツとしていた

「あはあ♡——すっ♡い♡——お、っ♡——お、っ♡——お、っ♡——お、っ♡」

(すごい♡ナターシャってあんな顔もするんだ……♡)

ちよくなれるのだ

ユーリさんに教えてもらうまで、世の中にこういう行為があるなんて知らなかった。それにもし知ったとしても、自分で試してみようとは思わなかっただろう。だってはしたないもの。でも今は思う。これ……すっごく気持ちいい♡

「——お♡っ♡——お♡っ♡——お♡ほおおおおおおっ♡」

「……っ♡……あっ♡……んっ♡……んっ♡……っ♡」

外でユーリさんとセックスをしながら獣のように乱れているナターシャの痴態をオカズにしながら、いつもこうしてオナニーをするのが私の日課になってしまった。ちなみにオカズにするという言葉もユーリさんに教えてもらった言葉だ

馬車の外でおまんこを突かれながら気持ちよさそうによだれを垂らし続けるナターシャを見て私は思う。アソコの中に男性のイチモツを入れるのって、どれくらい気持ちいいのかな？

ナターシャがあんなにも夢中になり続けることを私も試してみたい。私の心にそういった破廉恥な衝動が生まれるが、貴族として純潔を守らなくてはいけないという義務にその気持ちちをなんとか踏みとどまる

(いけません♡……お尻の穴がムズムズしてしまいましたわ♡)

「……プルちゃん♡……今日もお願いしますね♡」

……。

……。

……。

——ずりゆりゆりゆりゆりゆり♡

「——あはあ♡——あっ♡——あっ♡——あっ♡——っ♡——っ♡」

自分の股間に空いている穴をズボズボとほじくりたくなくなってしまった私は、はしたなくおまんこを弄る代わりに今日もプルちゃんにお尻の穴で体を慰めてもらう。ユーリさんに教わってしまった、誰にも知られてはいけない私の気持ちいい秘密だ♡

「ほお♡ほお♡」

生温かくて柔らかいプルちゃんの体が私のお尻の穴を押し広げながら出たり入ったりしていく。そうするとね……すっごく……お尻が気持ちよくなれるの♡

「プルちゃん♡……私のお尻の穴♡……すっごい気持ちいいよ♡」

ユーリさんとセックスをしているナターシャと向かい合うようにして、私はベッドの上でお股をはしたなく開いてプルちゃんにお尻の穴を弄ってもらおう。プルちゃんにほじくられる私のお尻の穴から広がる甘くて切ない痺れを心地よく味わいながら、馬車の外でユーリさんとのセックスで乱れ狂うナターシャの姿を眺めるのが、私にとっての大

私の体ももつと気持ちよくなりたいたとさらに快感を貪りだし、飢餓感に似た焦りが私の全身を蝕む。すると私の心が完全に、快楽を求めること以外に何も考えられなくなってしまうのだった

「——あはあ♡プルちゃん♡——もつと♡気持ちよくしてえ♡——あゝあゝ♡♡♡♡」

私をお願いを聞いたプルちゃんの体が単調なピストン運動からうねうねとうごめく複雑な動きへと変わっていく。すると動きを予想することが出来ないプルちゃんの体私が私のアナルを複雑に押し広げながら出入りするという感触が、私のお尻の穴に慣れることのない常に新鮮な強い快楽をもたらしてくれたのだ

(ナターシャごめんね♡……私のお尻の穴♡……エッチな場所に変えられちゃった♡……でも♡これ♡……すつごく気持ちいいんだよ♡)

ぶるるるるるる♡

「——あゝあゝ♡——それえ♡……すつ♡いい♡」

あまりにも気持ちよすぎるアナルオナニーに、私の顔が自然とニヤけてしまう。でも今は馬車の中には私以外誰もいない。だからこうして、私のはしたない声を大きく出してしまっても大丈夫だ。でも、いつかはナターシャと一緒に三人でユーリさんとのセックスを思う存分に楽しみたい。それが今の私の密かな願いになっていた

この透明な馬車の壁も本当に向こう側からは中が見えないらしく、壁の向こうでこちらを向いて立ったままユーリさんとセックスを続けているナターシャに私のお尻の穴を見せつけるようにオナニーをしても、彼女は一切、私に気づくことなくセックスに没頭をしている

「ーーイ、グうううううう ♡ ーーイ、グ、うううううう ♡ ーーイ、グうううううううううう ♡」

ガク ♡ ガク ♡ ガク ♡ ガク ♡

「今夜はイカセまくるって、言いましたよね？ ナターシャさん」

あの冷静で慌てた姿など見なことの無いナターシャが信じられないくらいに、情けない顔をして腰を強くそらしながら壁の向こうで絶頂を迎えている。彼女の今の顔は本当に、誰にも見せられないくらいに快楽に溺れきってしまった

ナターシャのおまんこからどれ程の愛液が分泌されているのかは分からないが、私が正面から彼女の立ち姿を見てもベチヨベチヨに濡れているのが分かるくらいに、メイド服のスカートを捲りあげたナターシャの股間から細い足首にかけてが彼女の膺から垂れ落ちてきた透明な液体でベドベドに汚れてしまっている

(だめだ♡……ナターシャの気持ちよさそうな姿を見ていたら♡……私もイキたくなってきた♡)♡

「プルちゃん♡私もイカせてください♡——おほおおおおおおおお♡」

ずずずずずずずずずず♡

「い、これらめえ♡——あ、っ♡——あ、ああああああああああああ♡♡♡♡♡♡」

プルちゃんにお願いした途端に、信じられないくらいに気持ちいい快感が私のアナルから生まれ始めた。私の頭がお尻の穴で馬鹿になっちゃうくらいの甘い痺れと快樂が、プルちゃんにもてあそばれ続けた私のお尻の穴から全身に向かって広がっている。本当に、プルちゃんはアナルいじりが上手なんだから♡

アナルで気持ちよくなって意識をポーっとし始めた私の耳に、馬車の外でユーリさんとの激しいセックスを続けているナターシャのものすごいよがり声が聞こえてきた。どうやらあちらも、これからクライマックスを迎えるようだ

「イグうううううう♡♡♡イグうううううう♡…:…もうらめえええええ♡——っ♡——っ♡——っ♡イゝゝクゝっ♡♡♡♡♡——っ♡?——っ♡??——っ♡♡♡——っ♡——っ♡」

ビクン♡ビクン♡

ナターシャが絶頂を迎えるときの、私が今まで知らなかった彼女の裏側の声を聞きな

がら、私の体もアナルでの絶頂を迎えていく。その予兆として私の腰からお腹に爆発してしまいそうなくらいに大きな甘いモヤモヤが溜まり始めると、苦しくらいに高密度になつた快樂の塊がぎゅうぎゅうと私のお腹の中心で円を作っていく

そしてプルちゃんに弄くられているお尻の穴から広がる気持ちよさも止まらない。その快樂に私の脳と意識がどんどんと世界の端に追いやられるようにして少しずつ追い詰められてしまう。私の体は今、プルちゃんに狩りをされているのだ。動物のメスとしての本能でそれを感じる

「プルちゃん♡わたしも♡イツちゃうよお……♡イクっ♡イクっ♡イクっ♡イクっ♡イクっ♡イクっ♡イクっ♡わたしも♡」

そして私の意識が強い快樂に限界を迎えたとある瞬間に、それまで私のお腹の中心に留まり続けていたものすごい快感が濁流のように広がって一気に爆発をすると、波のようなりズムで甘くて白くて白くしてしゅわしゅわなフワフワに全身をグワングワンと揺すられながら、私の体があつという間にポワポワとした温かい多幸福感で満たされてしまう。

……これが絶頂♡

外でユーリさんとセックスをしながら絶頂を続けているナターシャと一緒にあって、馬車の中でそれを見ながらオナニーをしている私も心地よく絶頂を堪能する

透明な馬車の壁を隔てた私の目の前で、ナターシャはイキながら体内にユーリさんの子種を注ぎ込まれていた。ユーリさんの精液を中に出された瞬間にナターシャはニヤけるように歓喜をすると、すっごく気持ちよさそうな顔のまま体を震わせながら、子宮で精液の感触を楽しみ続けている

(いいなあ♡私もユーリさんのおちんぼでアソコを思いつきり突いてもらいたい♡)

子種を出し終わった後もさらにズポズポとナターシャの股間に出入りしているユーリさんの大きなイチモツを見つめながら、オーガズムで霞む意識の中で私はそんなことを考えてしまっていた

(おっといけない♡ナターシャが帰ってくるわね♡)

私が絶頂の余韻に浸りながらポーっとしてベッドに寝転がっていると、外でセックスをしていた二人が後片付けを始めていることに気が付く。いけない。私も馬車の中を整頓しなくては

「プルちゃん♡ありがとう♡気持ちよかったよ♡」

ぶる♡ぶる♡

私がお礼の言葉を掛けると、私のお尻の中から出てきたプルちゃんが嬉しそうに体を震わせている。そろそろ寝たふりをしなくては。私達のこの関係をナターシャにバレてはいけない

ユーリさんが外から魔法をかけたのか、馬車の中の壁が普通の壁に戻った。ベッドの上に座っていた私は素早く毛布をかぶると目をつむり、帰ってきたナターシャにバレないように寝たふりを始める

「スースー」

「よく眠っているわね」

馬車の中に戻ってきたナターシャが私の額をやさしく撫でてくれる。ナターシャはこうしていつも、私の心配をしてくれるのだ。私達が盗賊に襲われたときも、自分の身を犠牲にしてまで私を逃してくれようともした。だから私は、ナターシャに幸せになつてほしい

ユーリさんとエツチをしているナターシャは本当に心地よさそうで、だから私はユーリさんを独占しようとは考えない。私とユーリさんが肉体関係を持つていることを知ったらナターシャは激怒するだろうけど、最終的には私に気を使って自分の身を引いてしまう。だからナターシャには、絶対にバレてはいけないのだ

クチユ♡クチユ♡

「……………もう♡……………寝ているお嬢様にバレたらどうするの♡……………だめ♡……………まって♡……………あつ♡……………あつ♡」

「寝ているアリスちゃんにイッてるどころ、見てもらったら？」

馬車の中でユーリさんとナターシャがキスを始め、寝たふりをし続けている私に見せるようにしながら外での続きを始める。これには少しムカついた。静かな馬車の中にクチュクチュと淫猥な、ナターシャのお股をかき混ぜるエッチな音が響き続ける。絶対に明日私もユーリさんにアソコを思いつきり弄ってもらおう。その音を聞きながらそう思った

「お嬢様♡……わたし♡……イツちやいます♡……っ♡見ててください♡——っ♡——っ♡イクっ♡——っ♡——っ♡……あはあ♡……っ♡……っ♡……っ♡——っ♡——っ♡」

ナターシャが気持ちよさそうにイッて、本当に今日のエッチは終わったらしい。二人が私にバレないようにと、別々のベッドで寝始めた

（はあ。早く明日にならないかなあ。そうすればユーリさんにいっばい、私のお股を弄ってもらえるのに……）

この馬車に乗り合わせてから変わってしまった私の生活に満足感と複雑な気持ち
両方を感じながらも、私はアナルで絶頂を迎えて少しだけ重くなった体で心地よい眠り
につく。早く明日になって、ユーリさんの大きなアソコで私のお尻の穴をズポズポと甘
く拡げてもらいたい。そんなことを考えながら

フーリエの街

俺たちは長い旅路を終えてベツケンバウム家が領主を務めるフーリエの街へとたどり着く。そしてそのまま俺はベツケンバウム家までナターシャさんとアリスちゃんを送り届けた

「うむ。ご苦労であった下民よ。帰ってよいぞ」

着いた途端に門前払いである。ゴテゴテの服を着たでつぷりと太ったおっさんにそう伝えられる。多分この人が現当主なのだろう

「ジェームス様！それはあまりにも……。彼は私達を野盗から助けてくださったんですよ！」

「アリスちゃん。下民が貴族のために命を犠牲にするのは当たり前のことなんだよ」

太ったおっさんことジエームス・ベッケンバウム氏がニコニコとしながら食い下がるアリスちゃんに向かって滅茶苦茶なことを言っている

「おや？まだいたのかね。タカリかな？これだから平民は嫌なんだ」

そしておっさんはさっさと俺に帰って欲しいようだ。侮蔑した眼で俺を見ている。うーむ。まあいつか

「ユーリさん。後で必ずお礼をしますから！」

そう伝えてくれるナターシャさんとアリスちゃんを後にして俺はベッケンバウム家の屋敷を後にする

フリーエの街で適当な宿屋に入ると俺はステータスボードを開いた。ステータスボードにはダンジョンマスターになったことで新しくダンジョンランキングという項目が追加されている。俺はそれをチェックすることにしたのだ

「うーん。やっぱりこれはやばいよね」

ダンジョンランキングでは月間に獲得したダンジョンポイントのランキングが確認できるのだが、ぶつちぎりで一を独走しているダンジョンがある。カマーランドと言うダンジョンだ

カマーランドはダンジョンの機能を利用した街という形でダンジョンポイントを得するシステムのダンジョンで、実際に国としても存在をする

まあ街の中心にダンジョンが存在するという形ではあるが、うまいことこの異世界に溶け込んでいるダンジョンの一つだ

カマーランドの特色は全ての性に悩む乙女紳士たちの街というもので、簡単に言うたボーイズラブ、ガールズラブが日夜繰り広げられている戦場のような街である

ノンケがこの街に入ると染められて帰ってくる。そう言い伝えられている恐怖の街であった

過去に数回ほど世界の秩序を乱すと創造の女神が神託を出し、創造の女神の加護を託した勇者にダンジョンの破壊を依頼したのだが、その全てが性癖を変えられ、勇者たちは今は逆にダンジョンの守護者となっている

そして今、俺に対してそのダンジョンマスターであるフリードニヒ8世さんという方からダンジョン通信でメッセージが届いていた

「ユーリちゃん♡今度、一緒に食事でもどうかしら♡フリードニヒ8世より♡」

ほのぼのとした日常を送りたい俺にとってやっかいな手紙である。まだこの世界に来て間もないルーキーである俺にいったい何の用事があるというのだろう。出来ることなら関わりたくない相手だ

「これはやばこ」

「何がやばいのかしらん♡」

気がつく俺が宿泊をしている宿屋の一室にはピンク色のフリフリのドレスを着た身長二メートル程で筋骨隆々の男が立っていた。気配察知スキルを使っていたのに全然分からなかった。この世界にはチートを持って来た俺だけど、チートを持っているのは俺だけではないようだ。はつきり言って今の俺では絶対になわかない。そういう相手だ

「あなたがユーリちゃんね♡初めまして♡フリードニヒ8世よ♡」

割れた立派なアゴと青ひげに黒髪为天パーな髪の毛姿で立派なお尻をフリフリと揺らしながら、フリードニヒ8世さんが挨拶をしてくれる。だめだ。今の俺にはレベルが高すぎてついていけない

「あの、これ。よかつたらどうぞ……」

「あら♡話が早いのね♡」

乙女走りで俺に近づいてくる筋骨隆々の大男に俺は性転換薬を手渡す。せめて相手が女の子になれば話しやすいとの配慮だ。フリードニヒ8世さんは俺から性転換薬を嬉しそうに受け取ると、そのままゴクゴクと一気に飲み干した。鑑定もしないし何の薬かも聞かない。豪胆な男である

しゅううううん!!!

性転換薬を飲み終えたフリードニヒ8世さんが俺の目の前で、まるで魔法少女の変身シーンようにピカリと光った。そして光をまとうフリードニヒ8世さんが何故か踊りだしたと思うと彼の体が徐々に縮まっていく

しばらくすると部屋の中には、身長140cm程のピンク色のフリフリのドレスを着たツルペタロリのかわいい少女が佇んでいた。彼女は髪の毛の色も何故か変わっており、今の彼女は腰まで伸ばした美しい金髪に金色の瞳で俺を見上げている

「……………悪夢が……………終わった……………」

クリンとした大きな瞳から一筋の涙が落ちる。その後、フリードニヒ8世ちゃんと食事しながら話を聞くと、彼女は元々は女性で、創造神によりこの世界に転移をさせられたそう。そのときに彼女は自分がやり込んでいるVRMMOのキャラにしてくれと創造神に頼み込んだみたいだが、創造神のミスによりメインキャラのツルペタロリ少女ではなく、おふぎけで作った筋骨隆々のサブキャラにされてしまったらしい。そして何故か所持している装備はメインキャラの最強装備という地雷付きだったと

創造神に抗議をしても性転換薬を探せば大丈夫だからと言われるだけで、その後は放置をされてしまったようだ

創造神のその対応があまりにもムカついたために彼女は邪神陣営に寝返り、女体化薬を求めて暴れまわっているうちに気が付いたらダンジョンマスターになっていたとのことだ

彼女はこの世界の性に悩む乙女紳士を救うことを目標として掲げており、そのために俺のダンジョンにある性転換薬を求めてやってきたようだった

ちなみにカマーランドでは毎月3日から5日の三日間、カマーフェスティバルというエロ同人の祭典が繰り広げられているらしい。その市場がカマーランド最大の産業になっているとのことだ。これは是非、薄い本を買い込まなくてはな

話を戻すと、彼女は俺の態度次第で力ずくか協和路線かを決めようと思っていたらしいのだが、俺の行動により無事に、協和路線に向かって舵が切られたようだ

そして話し合いの結果、カマーランドと俺の苗床ダンジョンとの間で同盟が結ばれることになる

俺のダンジョンから定期的に性転換薬をカマーランドに提供する代わりに、カマーランドは俺に対して貴族位を贈ってくれることになった

しかも公爵と同等の地位を持つ貴族の中で一番偉い地位だ。国家の存亡に直結する重大な功績をあげた者に送られる名誉な称号とのことだ

俺はこの異世界での権力を持つことができた。これでふりかかる火の粉も払いやす

くなるだろう

後はカマーランドが俺のダンジョンをカマーランドの聖地とすることを世界に宣言した。今後、俺のダンジョンを破壊しようとする行為はカマーランドへの宣戦布告とみなされ、カマーランドの全戦力を保って殲滅をされることになる

ただ、ダンジョン資源としても有効活用は可能なので、21階層以降のフロアへの立ち入りを全面的に禁止するというものに落ち着いた。そうしないと俺のダンジョンにポイントが入らないからな

フリードニヒ8世ちゃんと話し合いをしているうちに一日が終わる。さて、明日からはどうやってアリスちゃんとナターシャさんを俺のハーレムに加えるか、それを考えなくてはな

ベツケンバウム家の思惑

ステファン・ベツケンバウム視点

アリス嬢が我がベツケンバウム家に到着してからすでに三日が経っている。アリス嬢の所属する王国と戦争をしている帝国にそのことを伝える手紙を送っても、まだ何の返信も来ない

アリス嬢は、今回の王国と帝国との戦争の総司令官を務める名将ゲイル・レーベンシユタットが溺愛する孫娘である。帝国に身柄を引き渡せば我々ベツケンバウム家に多大な利益をもたらす。ベツケンバウム家は帝国にアリス嬢の身を売るという選択をしたのだ

だから帝国から何の音沙汰もないことに、僕も父上も少しずつイラ立ちを覚えていた。今回の作戦の失敗は僕たちの不利益を意味するからだ

「おい！どうなってる！帝国の奴らはいつ、あのガキを誘拐しに来るんだ！」

「僕だって知らないよ！どうせ帝国の奴らが何かをしくじったんでしょ？」

極秘裏に今回の作戦を実行している父上が執務室で激怒をしている。でも僕に八つ当たりをされたって困る。帝国の密偵が動かないことには何も出来ないんだから

「まったく！使えない奴らだ！うちと大口の取引をしてくれるって言うからわざわざ王国軍の重役のガキが家に避難してくるっていうルートや日程を教えてやったのに！この家まで来させやがって！本当に面倒くさい！まあいい。俺たちが帝国と繋がっていることをガキとメイドにバレるなよ！」

「分かっているって。家に保護してるって手紙を送ったからその内に帝国の密偵が拐いに来るよ。その後レーベンシュタット家に何か言われても、ベッケンバウム家にお宅のお嬢様はたどり着かなかったって誤魔化せば大丈夫だし。アリス嬢が外部に手紙を送ったり出来ないように厳重に管理をしているからね」

「アリスちゃん。僕たち許嫁だろう？だから君の純潔を僕に出来ないか？」

「わ、わたしの純潔？ま、まだ私達はそういう関係には早いんじゃないかしらあ？」

許嫁の僕に急に肉体関係を迫られて、アリス嬢は緊張で震え声になつてゐるぞ。ウブでかわいいな。帝国に誘拐されるまでの少しの間だけど、この子で楽しめそうだ

「早いに越したことはないよ。アリスちゃんが他の誰かに気を移してしまつたり、一時の気の迷いで純潔を他の誰かに捧げてしまつたりするかもしれないじゃないか。許嫁だつたら、僕の肉体関係の要求に答えるのも義務ではないのかい？」

「——ギクリッ！」

はは。僕にするどい指摘をされて体が固まつてしまつたぞ。アリス嬢は誰か思い人がいるのかもしれない。でも僕が許嫁なんだからそんなことは関係ない。彼女の体を好き勝手にできる権利が僕にはあるんだ。僕の勝ちなんだよ。アリス嬢の思い人くん

「わ、私の純潔は大切にしているから、だ、大丈夫よお〜」

アリス嬢がしどろもどろになつて僕にそれを教えてくれる。そうか。分かつた。初めての性行為が彼女は怖いんだな。これはOKのサインだろう。何だかいけそうな雰囲気だから、このままセックスまで無理やり押し切つてしまふか

「それに戦争のこともあるし。僕たちは許嫁同士なんだから、今のうちに愛の契りを交わそうよ」

「ご、ごめんなさい！今日は月のものなの！だから、恥ずかしいからこれ以上言わせないで！」

しかし後少しというところで、アリス嬢にそれを言われてしまう。うーん、なら仕方がない。今日は諦めるか。さすがに本当かどうかを僕が調べるわけにはいかないからなあ。後でメイドに言いつけて調べさせるか。もしアリス嬢の今の言葉が嘘だったら、メチャクチャに犯してやろう。それも楽しいかもな

はあ。それにしても今日は全てがタイミングの悪い日だ。ベツケンバウム商会を取り仕切る厳しい母上が不在の内に僕と父上とで協力をして、こっそり隠れて使える裏金を作ってしまうという計画なのに

まあ何とかなるだろう。失敗をしてもしらばつくればいい。ベツケンバウム家を
貶めようとする陰謀だと騒げば簡単にもみ消せるだろうし。だって僕は貴族なんだか
ら

アリス嬢の体を思う存分に味見をする日が楽しみだなあ。僕はそんなことを考えながら、今日の一日を終える

帝国の工員ソニア♡

「——はあっ！——はあっ！」

ガサガサガサ

アリスちゃんとナターシャさんを屋敷に送り届けた当日にまで時は遡る。フリードニヒ8世ちゃんとの話し合いを終えた俺は、深夜の森で鬼ごっこに勤しんでいた。ちなみに俺が悪役であり、鬼側である

「——くそ！——くそ！——くそ！」

俺から逃げているのはガスター帝国軍所属のソニアちゃん。ガスター帝国はアリスちゃんが所属するエルドス王国と戦争をしている国である。アリスちゃんとナターシャさんをベツケンバウム家に送り届けてからずっと、ソニアちゃんは俺を監視し続け

ていたのだ。彼女は何かの工作活動をするためにフリーエの街に潜伏をしているようだが、鑑定スキルを使える俺にはソニアちゃんの情報は筒抜けだった

「てめえ！ふざけんなあ！」

俺に追いつかれて地面に組み伏せられたソニアちゃんが仰向けの状態で威嚇をしてくる。彼女は腰まで伸ばした赤い髪に緑色の瞳、黒色のスカートに黒色の上着とラフな格好をしていた

彼女が着ている黒色の上着がパツンパツンになるくらいにデカいおっぱいが、仰向けのソニアちゃんが威嚇の言葉を俺に向かって叫ぶ度にぶるんぶるんと揺れている。推定Hカップ程の立派な爆乳である。素晴らしくエロい

簡単にここまでの出来事を説明をすると、まず路地裏で宿屋にいる俺のことを監視し続けているソニアちゃんに隠密スキルを使いこっそり近づいて声をかけると戦闘になった。彼女が突然ナイフで切りかかってきたのである。穏便に話を進めたいタイプの俺はソニアちゃんの体に服従の淫紋を刻み、俺への攻撃等を一切禁じる命令をする。

そうして彼女からの攻撃を防いで俺は会話を始めた

そのままソニアちゃん体を墮としてもよかったのだが、俺はソニアちゃんにゲームを提案することにした。彼女と少し遊ぶことにしたのだ

ゲームの内容はこうだ。俺に淫紋を刻まれた彼女が深夜の森の中を逃げ回り、中出しをされずに朝まで逃げ切ったらソニアちゃんの勝ち。淫紋を消すことができる。しかし俺に捕まり、中出しをされることで淫紋が完成してしまったら彼女の負けで、ソニアちゃんが俺のハーレムに入るというものだ

ソニアちゃんが無事に帝国に帰還するためには、俺とのゲームに勝つしかない

「私が！お前なんかには負けるわけない！」

俺はソニアちゃんを暗い森の中で地面に組み伏せた状態で彼女が履いている黒色のスカートを捲りあげると股間に手をやり、純白の下着を無理やり脱がしていく。口調はかなり男勝りな感じだけど、かわいい下着を履いているな

よさそうに体を悶えさせ始めた

ぬぷ♡ぬぷ♡
♡

「——っ♡——っ♡……っ♡くうううう♡——あっ♡——あっ♡」

屈辱と羞恥心で真っ赤に火照った自分の顔を両腕で隠しながらソニアちゃんが、俺のピストン運動に対して必死に声を押し殺す。しかし彼女はどうにも我慢ができないよう、シンと静まり返った暗くて無音の森に、ソニアちゃんの甘い声だけが微かに響き渡っていく

「ソニアちゃん。気持ちいい？」

「うる……♡さ……♡——っ♡——っ♡……っ♡……っ♡……っ♡」

ぬぷ♡ぬぷ♡ぬぷ♡
♡

俺がセックスを続けながら彼女に声をかけると、ソニアちゃんは股を開いておまんこに俺のチンポを出し入れされた状態で、強い言葉を俺にぶつけ返してきた。体の抵抗は出来ないけれど、心はまだ折れてはいないようだ。ソニアちゃんは俺にレイプをされて甘い息を吐きながらも、ギンとして俺を睨み続けていた

「…………ふざ…………けんなあ…………♡——あつ♡…………こんな♡…………クソチンポお…………♡——あつ♡——あつ♡ぜんぜん…………♡…………つ気持ちよく…………なんて♡——んくううう♡…………ない…………♡…………からつ♡…………なあ♡…………つ♡…………♡」

暗い森の中で俺にピストン運動をされ続けているソニアちゃんが必死な抵抗を見せるが、徐々に彼女の瞳が快楽によってとろりと薄く染まっていく。気がつくときソニアちゃんの視界は、おまんこに俺のチンポを突きこまれながらどこか虚空をさまよっていた

そのままグチュグチュに濡れてさらに俺のペニスを受け入れやすくなったソニアちゃんの膣口にズポズポと俺のチンポを出し入れていくと、彼女は腰をのけぞらせながらも心地よさそうに呼吸を繰り返し、体をゾクゾクと震わせてしまう

彼女は絶対に絶頂はしないと決意をした濁った瞳で虚空を見つめながら必死に耐えようとしていたが、その数秒後、簡単にイッた

「——あ、っ♡——あぁっ……♡……あっ♡……あっ♡……あっ♡……あっ♡……あっ♡——あっ♡……っ♡……っ♡——っ♡——っ♡」

ビクン♡ビクン♡

こんなこと信じられないといった表情のまま、快楽に瞳をとろりと濁したソニアちゃん甘い息を吐きながらイキ続けている。俺はうねうねと美味しそうに俺のチンポに絡みついてくる心地よい彼女のおまんこの感触をペニスに感じながら、彼女の膣の中に一発目の中出しをした

すると体内に俺の精液を注がれた彼女のお腹に刻まれた俺の淫紋が、少しだけピンク色に染まる

「……っ♡……っ♡……あっ♡……あっ♡……あっ♡——ッ!!」

精液を中に出し終わった俺がソニアちゃんのおまんこからチンポを引き抜き彼女を見下ろしていると、絶頂から意識を戻した彼女がすばやく体制を立て直して俺に警戒体勢を取る。まだソニアちゃんの心は折れてはいないようだ

「早く逃げないと、もう一回中に出しちゃうよ」

「——くっ！」

俺がそう声をかけると彼女は土だらけになった服のまま、内股に俺の精液を垂れ流しながら再び深い森の中を逃走し始める。俺は今回のゲームに自分なりのルールを作っていた。ソニアちゃんが一回イツたら一回中出しをする、一回彼女の体中に精液を出したらペニスを引き抜いてソニアちゃんを逃がしてあげるといふルールだ。そうしないとすぐにこのゲームが終わってしまうからな

「やめろおおおおお！」

まんこにピストン運動を続けていく

暗くて何も見えない静かな森の中で、ソニアちゃんの口から漏れ出る切ない吐息を聞きながら彼女の爆乳を後ろからを揉みしだきつつレイプをするのは、最高に興奮した

「——っ♡——あっ♡……あゝ あああああああ♡♡♡♡♡——っ♡♡♡♡——っ♡♡♡♡——っ♡♡♡♡」

ビクン♡ビクン♡

俺に無理やりピストン運動をされながら、ソニアちゃんがまたイッた。俺は自分のルールに基づき、彼女おまんこの中に容赦なく俺の精液をどぶどぶと注ぎ込むことにする。こうしてソニアちゃんの体に刻んだ俺の淫紋がまた、完成へと一歩近づいた

「どうした。逃げないの?」

「——うるさい!お前みたいな早漏チンポはイカせて、精液を出し切っちゃえばいいん

だ！」

俺からは逃げられないと悟ったのか、ソニアちゃんは俺のチンポをおまんこから引き抜かれると地面に膝立ちになり、俺の腰に縋り付くようにしてフェラチオを始める。どうやら彼女は俺の精液を枯渇させる作戦に出たようだ。ソニアちゃんは俺の腰にガツシリと両腕でしがみつきながら、必死に俺のチンポに顔をうずめていた

じゅるるるる♡じゅるるるる♡

しかし素晴らしいテクニクだ。ソニアちゃんは多分、こういうことも任務に含まれる作業員のだろう。彼女は慣れた様子で俺のチンポを舐め啜っていた。主導権を取り戻したソニアちゃんの表情に、自信と覇気が取り戻されていく

ソニアちゃんは温かくて潤ったお口で俺の肉棒を心地よく包み込みながら、舌先でネロネロとこそばゆく俺のチンポを射精に向かって導いてくれる。正直メチャクチャに気持ちいい。俺はあつというまに、彼女のフェラチオに精液を搾り取られてしまった

とぴん♡とぴん♡

俺に口内射精をされながらソニアちゃんが勝ち誇った顔で俺を見上げている。しかし、口内に俺の精液を出されたことでまた一步、彼女の淫紋が完成に近づいてしまう。俺の精液は、粘膜から吸収をされることで淫紋に効果を及ぼすからだ。でも、ソニアちゃんはおまんこの中に精液を注がれなければ大丈夫だと勘違いをしていたようだ

「ちくしょう！これならどうだ！」

ソニアちゃんが体当たりをするようにして俺を押し倒すと、今度は地面に寝転がった俺のチンポを右手でやさしく握りしめながら必死に手コキを始めた。うん。これも素晴らしいテクニクだ。彼女は右手で俺の竿をシコシコと心地よくしごき続けながら、左手ではいやらしく俺の金玉に気持ちいいマッサージをしてくれる。でも、ソニアちゃん俺への手コキに夢中になりすぎていて、防御が疎かになっているな

——ぐぼお♡ぐぼお♡

「あつ♡——まって♡——っ♡……らめえええ♡」

ソニアちゃんの隙きを突いて彼女のおまんこの中に俺の薬指と中指をねじ込むと、グチュグチュと音を立てるソニアちゃんの膣肉を彼女の意識がトロトロになるまで徹底的にかき回してあげる。するとソニアちゃんは俺のチンポを握りしめながら、背中をのけぞらせて簡単にイッた

「——あつ♡——あつ♡——あああああああ♡……っ♡♡♡♡♡……っ♡♡♡♡」

……とぷ♡……とぷ♡

絶頂をして体をビクンビクンと痙攣させているソニアちゃんを俺は再び地面に押し倒すと、正常位の体位でドロドロに潤った彼女のおまんこにまたチンポを挿入して、さらに中出しを行う

ソニアちゃんのお腹に刻まれた淫紋が、完成間近になっていた

……。

……びゆる♡……びゆるるる♡

「……あっ♡」

……。

……。

……。

……じゆるる♡……じゆるるる♡

朝日が登るまで野外でのセックスを楽しんだ俺達は俺が泊まっている宿屋に戻ってきていた。今のソニアちゃんは俺のチンポをうっとりとした瞳で舐め啜えながら、自分の任務についてを俺に教えてくれている

どうやら彼女はアリスちゃんを誘拐する任務についていたようだった。ベツケンバウム家もそれに一枚噛んでおり、アリスちゃんとナターシャさんが野盗に襲われていたのもその作戦の一部であつたようだ

俺はソニアちゃんから、ベツケンバウム家がアリスちゃんを帝国に売つたという証拠をたつぷりといただくことにする。帝国はこの証拠を使ってアリスちゃんを誘拐する作戦が成功をした後に、ベツケンバウム家から金をたつぷりと搾り取るつもりだったようだ。それを俺が利用させてもらうことにした

「ねえ♡もう一回して♡」

……くばあ♡

帝国についての情報を俺に話し終えたソニアちゃんが、ベッドの上で股を開いて俺のチンポをおまんこに挿れてとおねだりをしてくる。すっかり俺のチンポの虜になつてしまった彼女とのセックスを楽しみながら、俺はこれからどうするかを考えることにし

プルに頼んでいたものとは映像記録球を使って何やら怪しい会話をしている人がいたら盗撮をしてくれというものだ。その結果、ジエームズ氏とステフ君がアリスちゃんの誘拐について話している場面をバッチリと録画できたし、ジエームズ氏が帝国に宛てて書いたアリスちゃんの誘拐を催促する手紙も回収できた

そして、こっそりとベツケンバウム邸に忍び込んだついでにアリスちゃんに性欲を発散させようかと聞いた所、お願いをされて今に至る

「アリスちゃんのお豆、固くなっているね」

「……………言わないれえ♡……………んっ♡……………んっ♡……………っ♡」

クニ♡クニ♡

ピンク色の寝間着姿のアリスちゃんのスボンと下着を脱がし、下半身だけ裸になった彼女の体をベッドの上で後ろから抱きしめながらアリスちゃんの潤った股間の割れ目を二本の指でやさしく弄ってあげる。真っ暗でシンと静まり返った深夜のベツケンバ

ウム邸の客間に、アリスちゃんの甘い吐息が響き渡っていた

「アリスちゃん。今日はもつと気持ちいいことをしてあげるね」

「……もつと気持ちいいことですか？」

俺はそう言いながらアリスちゃんをやさしくベッドに寝かせてあげる。俺にクリトリスを弄くられ、ポーつと火照った顔で股を開いてベッドに仰向けに寝た、下半身だけ裸のアリスちゃんが不思議そうに尋ねてくる。まあ百聞は一見にしかずって言うし、実際に体験してもらった方が早いな

そう考えた俺はアリスちゃんに了承を得るよりも先に彼女の股間に顔をうずめると、彼女のおまんこを舌を這わせてクンニを始める。アリスちゃんの陰毛と割れ目のツンとした香りが、俺の鼻腔を通っていった

レロ♡レロ♡
♡

ゾク♡ゾク♡ゾク♡

おまんこの中に舌をねじ込んでくる俺を必死に股間から引き剥がそうとして、アリスちゃんの両手が俺の顔を押しつけようとしてくるが俺はクンニを止めない。さらに続けて、俺は彼女の膣の中を舌を使ってグニャグニャと気持ちよくしてあげる

「——んくうううう♡……らめ♡……らめ♡……あつ♡……あつ♡……
あああああああ♡……っ♡……っ♡……っ♡……っ♡」

アリスちゃんのおまんこの中をかき回している俺の舌がどんどんと彼女の愛液によってネットネットにヌメっていく。体がトロけてしまったアリスちゃんの膣の中から分泌される愛液の量に比例をして、俺を押しつけようとする彼女の力が弱まっていった

——ピト♡

「……あつ♡……まっ♡……それはあ♡……っ♡……っ♡……っ♡……っ♡」

初めて性器に俺にクンニされ、フニヤフニヤになった体とト口顔でポーつと股を開いたまま情けなくベッドに寝転び続けているアリスちゃんの股の間に腰をねじ込むと、彼女のおまんこに俺のペニスをあてがう。このままアリスちゃんの処女を奪うつもりだ

ベチヨベチヨになったアリスちゃんの陰唇に龟头を押し込み、湿って冷えた愛液の感触をペニスの先に感じながらクニユリと彼女のおまんこにほんの少しだけ俺のチンポを挿入すると、アリスちゃんが息を呑む音が静まり返った暗い室内に響いた

「しちやおつか?」

「……で、でもお♡」

瞳にハートマークを作ったアリスちゃんが、ベッドの上で股を開いたまま必死に我慢をしている。ここからは言葉と快楽を使って、アリスちゃんの心を溶かしていく作業だ
「ナターシャさんが俺とエッチしてるのを見て、アリスちゃんもしたいと思わなかった?」

「……」

静まり返った夜のベツケンバウム邸に、アリスちゃんの荒くなった呼吸だけが響く。俺は彼女を墮落させてしまうために、アリスちゃんの純潔を散らしてしまわないよう慎重に亀頭の根本までをヌルヌルとした彼女の膣肉をかき分けてアリスちゃんの膣口に押し込むと、きゆうきゆうと締め付けてくる彼女の膣口の部分に、ペニスの先っぽだけをピストン運動していった

ぬりゅ♡ぬりゅ♡

「——あつ♡——あつ♡……まっつ♡……らめえ♡」

突然、おまんこの入り口に俺のチンポをピストン運動されてしまったアリスちゃんが混乱をしたように体をよじらせ悶えていく。でも、彼女の声は気持ちよさそうだ

「……ユーリさん♡……お願い♡……止めてえ♡……あつ♡……んっ♡……くうううう

……。

……。

……。

「アリスちゃん。そろそろ奥まで挿れちゃおっか」

「……っ♡」

アリスちゃんの瞳が快楽で濁りきった頃合いを見て、ピストン運動を止めた俺が彼女に尋ねる。龟头だけをおまんこに埋め込まれた状態で、ベッドの上に仰向けに寝て正常位に股を開いたアリスちゃんが、物欲しそうな顔で俺を見上げてきた

上半身に着たままだったアリスちゃんのピンク色の寝間着を脱がしてあげると、火照って汗だくになった彼女の若い裸体が夜のベッケンバウム邸に露出される。今まで純潔が大切だからと脱いでくれなかった上着を脱ぎ、絶対に見せてくれなかったおっぱ

いをアリスちゃんが見せてくれた

Dカップ程のツンと張った若い大きな乳房が美しい。アリスちゃんのピンク色で色素の薄い乳首が性的興奮によって勃起しきり、カチカチに固くなってぷるりと上を向いている。彼女の心はずでに、性に対して墮落をしきっていた

「やっぱりやめる?」

……ふるふる♡

俺の言葉を聞いたアリスちゃんが、切なく瞳を潤わせ真つ赤に火照った顔を横にふる。彼女の意識はもう、今すぐに俺とセックスをすることしか考えていない。アリスちゃんは俺とエッチがしたくて、我慢ができなくなったからだ

「もう我慢できない?」

——コクリ♡

俺の言葉に、艶やかに微笑んだアリスちゃんがうなづく。ここからは彼女の心を調教し、さらに快楽の世界へと墮とすための時間だ。俺はアリスちゃんを言葉で責めることで、彼女の心をさらにどつぷりと汚してしまう

「どういふ風に我慢できないの？」

「……………言わせないで♡」

俺のチンポを求めて股を開いたままのアリスちゃんが恥ずかしそうに甘い吐息で俺に言葉を返すが、俺は亀頭の先を彼女の処女膜にピトピトと当てながら、アリスちゃんに向かってさらに意地悪な質問を重ねていく

「……………お願い♡……………挿れて♡」

焦らされたことでアリスちゃんはおまんこの奥がムズムズして仕方がないんだろう。彼女のお腹がヒクヒクと切なそうに上下運動を繰り返す。彼女のおまんこの入り口も

きゆううんと俺のチンポにネットネットと吸い付くと、切なそうに収縮運動を繰り返していった

「教えてくれなきゃずっとこうしちゃうよ？」

「……」

俺の言葉にモジモジとして無言を貫いていたアリスちゃんであったが、早くおまんこに俺のチンポを挿れてほしくて我慢ができなくなったのか、しばらくの葛藤を見せた後に、せきを切ったように自分の体の状況を正直に俺に教えてくれる

こうやって俺のチンポのために嫌なことでも進んで受け入れるように、アリスちゃん
の心を少しずつ改造していくのだ

……。

……。

……。

「……っ♡奥まで……っ♡挿れてほしくて♡——っ♡おまんこがあ……っ♡ムズムズするんですう……っ♡もう……っ♡我慢できないのお……っ♡ユーリさん……っ♡わたしのおまんこに♡……チンポを♡……全部挿れてください♡」

恥ずかしそうに両手で顔を隠したアリスちゃんが、ベッドの上で濡れた股を開いたまま俺にそう教えてくれる。さあ、あともう一息だ。アリスちゃんの心がどっぷりと汚れていく

「お尻の穴じゃだめ？」

「やだあ♡おまんこがいいの♡」

アリスちゃんの心を調教するため、さらに俺が焦らすような質問をすると、彼女は楽しそうに笑いながら早くおまんこに俺のチンポを挿れて欲しいとおねだりを始める。

ベッドの上のアリスちゃんは純真な少女の顔から、セックスに溺れたメスの顔に変わっていた

アリスちゃんの心が生まれ変わっていく

「じゃあ、奥まで挿れちゃおっか?」

——コクリ♡

ベッドの上に仰向けに寝転び正常位で股を開き、おまんこをネットネットに湿らせて俺のチンポを受け入れる準備を完全に整えたアリスちゃんが楽しそうにうなづく。まるで彼女は、これから嬉しい遊びをする無邪気な女の子みたいだ。アリスちゃんのその答えに満足をした俺はそのまま彼女の初モノのおまんこに向かって腰を強く前に押し込むと、アリスちゃんの処女を散らしていった

(ステフ君。アリスちゃんの初めて、俺がいただきます)

——ぷち♡

「……あっ♡」

こうしてアリスちゃんは、俺のチンポで女になった

にゆううん♡

そのまま俺がアリスちゃんのおまんこの奥深くにまでペニスを押し込んでいくと、生まれて初めて、貴族の少女の体内に異性の性器が根本まで埋まり込むことになる。アリスちゃんの初モノの膣肉をかき分ける感触が俺のチンポから昇ってくるのが、最高に心地よかった

「……ユーリさんと♡……結局エッチしちやった♡」

俺のチンポを根本まで体内に受け入れた状態で、アリスちゃんがいたずらっ子のような顔で楽しそうに笑っている。俺はペニス全体に彼女の温かい膣肉がクニユクニユと

絡みついてくるこそばゆい感触を楽しみながら、アリスちゃんの心を言葉でさらに汚していった

「ステフ君に悪いことしちゃったね」

「……もう♡……そんなこと思ってないくせに♡」

「アリスちゃんは？」

「分かんない♡」

俺はアリスちゃんと仲睦まじく浮気セックスの会話を続けながら、彼女の体に回復魔法と避妊の魔法を掛けてあげる。そしてアリスちゃんの体が痛くないことを確認してから腰を前後に動かすと、俺は貴族の少女との寝取りセックスを開始した

ズチユ♡ズチユ♡

「——あつ♡——あつ♡——あつ♡……すつ♡い♡……チンポお♡……きもちい♡」

俺と一緒にあって、アリスちゃんがベツケンバウム邸のベッドの上で楽しそうに腰をふる。彼女のヌトヌトに湿ったおまんこに俺のチンポを突きこむ度に、アリスちゃんの膣肉からはどろりとした本気汁が大量に分泌され、彼女の口からは桃色の吐息が際限なく溢れ出てくる

アリスちゃんの心からはすっかり、俺とのセックスに対する罪悪感が消え去っていた
「ステフ君には秘密にしようね。明日からは、ちゃんと処女のフリをするんだよ」

「——うん♡わかった♡——つ♡——つ♡——あつ♡♡♡……つ♡あ♡♡♡♡♡あ♡♡♡♡♡……つ♡♡♡♡♡……つ♡あ♡♡♡♡♡あ♡♡♡♡♡」

俺のチンポに夢中になって腰をふるアリスちゃんが、俺の言葉にトロ声で返事をしてくれる。こうして彼女には異性に嘘をつく気持ちよさと、こっそりと浮気をする汚れた気持ちよさを教えてあげるのだ

俺とセックスをしている今のアリスちゃんの頭の中には脳内麻薬がドバドバと分泌されていて、まるで自分が女として最高の存在であるかのような万能感に支配されているだろう。この気持ちよさを知ってしまったらもう、アリスちゃんは元の純真な少女には戻れない

「ナターシャさんが俺とセックスをしまくってる理由がわかった？」

「……うん♡……ユーリさんとのセックス♡……すっごい♡……気持ちいいの♡……あつ♡……そこ♡……好き♡……っ♡……っ♡……ああああああ♡——おっ♡——おっ♡——おっ♡——おっ♡」

純真な少女からセックスにただれたメスに生まれ変わったアリスちゃんの濁った瞳には、ピンク色のハートマークがくつきりと浮かんでおり、彼女の心はすでに俺の虜になっている

俺のチンポをズポズポと激しく出し入れされる彼女のおまんこからは愛液がとろけ

たジューズのようにドロドロとこぼれ落ちてきて、深夜のベッケンバウム邸のベッドのシーツに大きなシミを作ってしまった

俺はアリスちゃんの心を墮落させきるために、さらに言葉を使って彼女の心をどろどろに汚していく

「ステフ君に謝ろうね。そうしたらアリスちゃんの中に出してあげる」

「うふふ♡ステフ君ごめんね。許嫁のあなたじゃなくて♡……ユーリさんとエッチをしちゃいました♡」

おまんこに俺のチンポを受け入れながら、楽しそうな顔をしたアリスちゃんが俺を見つめながら許嫁であるステフ君に謝罪をしている。彼女には、淫乱な女としての素質があるようだ。このまま彼女の心を壊しきってしまったおう

「他にもあるでしよっ」

こうして、アリスちゃんは俺の仲間になった

ナターシャさんに淫紋♡

アリスちゃんに淫紋を刻んでから少しだけ時間が経った深夜、俺は今度はベツケンバウム邸内に用意されたナターシャさんの部屋を訪れていた

「ユーリさん……どうやってここに？」

俺の突然の来訪にナターシャさんは驚いていたが、そのことに構わずに彼女は俺に向かって言葉を続ける。どうやらナターシャさんもベツケンバウム家のきな臭さに気が付いているようだ

「ユーリさん。この屋敷からお嬢様を連れ出してはくれませんか？ どうにもベツケンバウム家の動向が怪しいのです。後のことは私が何とかしますから」

ナターシャさんからそうお願いをされる。しかし俺は彼女の言葉に返事をするより先にナターシャさんの震える体を抱きしめると、彼女のやわらかい唇に濃密なキスをし

てしまう。俺からの突然のキスにナターシャさんは体をこわばらせるが、お互いの口を舐め合い、舌を絡め合う内に彼女の体からは次第に力が抜け始めていく。シンと静まり返った夜のベツケンバウム邸内で、俺たちは貪り合うようなキスを続けた

……くちゅ♡……くちゅ♡

「……ユーリさん♡いまはあ♡……それどころじゃあ♡……っ♡……っ♡」

「それに関してはもう大丈夫ですよ。俺が色々と動いていますから。それよりも、ナターシャさんのここ、すっごく濡れてますよ」

瞳をとろりと薄く濁し始めたナターシャさんと抱き合い、お互いの体を弄り合いながら俺がナターシャさんの着ているメイド服のスカートを捲りあげる。俺の右手を彼女の下着の中に入れてナターシャさんのふにやりとした陰唇の間に中指を這わせると、ヌルリと温かい愛液の感触が俺の中指の腹に広がる

「……まって♡……っ♡……あっ♡……あっ♡……っ♡」

少し垂れたナターシャさんの美しい裸体が、深夜のベツケンバウム邸の客間にあらわになる

「ユーリさん……♡おねがいだから……♡まって……♡」

「でも、ナターシャさんの顔、すっごく気持ちよさそうですよ？」

俺は潤んだ瞳のままベッドの上に仰向けに寝転がるナターシャさんにそう語りかけながら、先程までの俺の前戯によってヌルヌルに濡れた彼女の熟れた膣口に人差し指と中指を伸ばしてヌプヌプとねじ込んでいく。にゆうんといういやらしい感触でナターシャさんの温かくてネトネトとした膣肉に俺の二本の指がまるごと包み込まれていくのが、とても心地よかった

「——あつ♡——あつ♡……らめえ……♡……そこお♡……クチュクチュしないれえ♡
……あん♡……ああああ♡……っ♡……あつ♡」

クニユ♡クニユ♡

ナターシャさんのトロトロで熱くなったおまんこの中に埋め込んだ俺の二本の指をリズムよくグネグネと折り曲げていくと、彼女の膣の奥からどぽとグチュグチュな愛液がドロドロになって溢れ出てくる

その愛液をゴポゴポと膣の中でかき回すようにしてぶつくりと膨らんだナターシャさんのGスポットを二本の指でグチュグチュにこね回してあげると、そのまま彼女は簡単にイッた

「ナターシャさん。俺の女になりませんか？」

「お願い…………♡アレンと…………♡また会おうって♡——あんっ♡…………約束をしているの♡…………だからあ♡…………あっ♡…………あっ♡…………あっ♡…………言わないでえ♡」

俺の指におまんこをほじくられながら、トロトロの顔のままベッドの上で股を開いて心地よさそうに俺からの手マンを味わうナターシャさんが俺にそう伝えてくる。アレ

「どうしますか？ やっぱり、止めときますか？」

「……っ♡」

ベッケンバウム邸のベッドの上に仰向けに寝て全裸で股を開き、俺の手マンを楽しんでいるナターシャさんの目の前に俺の局部を見せつけた途端に、息を呑んだナターシャさんのとろりと濁った青色のきれいな瞳にピンク色のハートマークが浮かんだ

旅の道中であれだけイカセまくった俺のチンポだ。あのときの気持ちいい感触を思い出してしまったのだろう。ナターシャさんの鼻の下が伸びている

ナターシャさんは荒くした鼻息で俺にバレないように、ベッドに寝転んでいる自分の顔の前に押し付けられた俺のチンポの匂いをスンスンと嗅いでしまっていた

「俺がこの部屋に来た時に、もう一度あのセックスがしたいと思いませんか？」

「……」

俺の誘惑の言葉を聞いたナターシャさんが無言のまま、ベッドに寝た姿勢で顔だけを横に向け俺のチンポをガン見し続けている。彼女の瞳が、欲望によつて徐々に暗く染まっていった

……じゅるるる♡……じゅるるるる♡

そしてナターシャさんは目の前にふにやりと垂れ下がっていた俺のチンポを美味しそうに口に咥えると、丹念なフェラチオをしてくれる。ナターシャさんの心が、俺に流れた

「……もう♡……きょうらけ♡……れすからね♡……じゅるるるる♡……じゅるるる♡……つ♡わらひには……♡こいびとが♡……いるんれすから♡……っ♡……っ♡……っ♡」

じゅぽ♡じゅぽ♡

ベッドの上に仰向けに寝たまま顔を横に向けたナターシャさんが、言い訳をしながら

自分の顔に押し付けられた俺のチンポに吸い付くようにフェラチオを続けていく。俺のペニスをヌチュヌチュと舐め啜える彼女の顔は、ずっと我慢していたものをやっとなに入れて人間がする満足顔だ

ナターシャさんのヌルヌルとして温かいお口にぱっくりと包まれヌトヌトとした舌でこそばゆく全部を舐め尽くされた俺のチンポが、あつという間に勃起をさせられる

フェラをしている口内で俺のチンポが硬く膨らんだことを確認したナターシャさんは艶やかなメスの瞳で俺を誘うように見つめながら、口内に舐め含んでいるペニスを自らの性器に挿れてもらうために、俺のチンポから妖艶な笑みを浮かべて口を離していった

これはこのまま、彼女の心を墮としてしまえそうだ

「じゃあ、挿れちゃいましょうか」

「——はっ」

ベッドの上でメスの顔に変わったナターシャさんが正常位で股を開いて俺のチンポを待っている。俺は彼女がはしたなく開いた両脚の間に体を割り込ませながら、ナターシャさんのトロトロ口に熱く潤いきったおまんこの入り口に、ペニスの先をあてがった

——ピト♡

にゆるんという感触でナターシャさんのヌルヌルに湿った陰唇が俺の亀頭によって押し開かれる。彼女の膣口に水たまりのように溜まっていたヌトヌトとした愛液が俺のチンポに触れ、こそばゆい。俺の亀頭の手がほんの少しだけねじ込まれた彼女の膣肉が、ヒクヒクとうごめいていた

にゆうううん♡

「——あつ♡……つ♡……つ♡入っちゃったあ♡……つ♡……つ♡」

俺が腰を押しこみながら一気にナターシャさんの女の入り口に俺のチンポを挿入し

やわらかい爆乳がぶるぶると揺れていた

「だめよ♡ナターシャ♡イクところをみせなさい♡」

綺麗だった灰色の瞳をどろりと欲望色に濁らせきってしまったアリスちゃんが、ナターシャさんに命令をする。明らかに旅の途中までと違うアリスちゃんの様子にナターシャさんは戸惑い、俺のチンポをおまんこに突きこまれたままベッドの上から動けなくなってしまう

「お嬢様——っ♡どうしてしまったのぉ♡——あゝっ♡——っ♡ゝゝっ♡♡…っ♡
…っ♡」

「うふふ♡私ね♡ユーリさんの女になったのよ♡」

ナターシャさんの疑問の言葉を聞いたアリスちゃんが妖しく微笑むと、アリスちゃんは自分の着ているピンク色の寝間着を両手でまくりあげて自分のへその下に光る俺の淫紋をナターシャさんに見せてあげる。ナターシャさんは俺のチンポで気持ちよく霞

む意識の中、驚愕の表情でアリスちゃんのお腹に刻まれた淫紋を確認していた

「——そ、そんなあ♡ユーリさん！いくら何でもお!!——あゝ♡あゝ
あああああああ♡——あっ♡——あっ♡——あああああああ♡」

アリスちゃんのお腹で淡くピンク色に光り続ける淫紋を見たナターシャさんが絶望した表情を見せるが、おまんこに俺のチンポを突きこまれ続けているため、強烈な快樂によつて彼女はうまく思考が回らない

俺のチンポを気持ちよさそうにおまんこで啜えるベッドの上のナターシャさんにアリスちゃんは近づくと、ト口顔になり始めたナターシャさんにキスをしながら次の言葉が続けていく

「ナターシャ♡一緒に堕ちるところまで堕ちましょう♡」

「お嬢様！気をしっかり持つてください！快樂に流されてはダメエ——
あああああああ♡——あっ♡——あっ♡——あっ♡——あっ♡……っ♡——あ

に俺は淫紋を刻む。俺に淫紋を刻まれたことで体の感度の上がったナターシャさんが、俺のチンポをおまんこにピストン運動される度に、さらに心地よさそうに体をゾクゾクと震わせ始めた

「ナターシャ♡わたしと運命を共にするって約束をしたわよね♡」

「はい♡お嬢様♡」

ナターシャさんのきれいで澄んでいた青色の瞳がどろりと快樂で濁りきる。彼女は全てをあきらめた。うっとりとしたピンク色のハートマークを浮かべた状態でおまんこに俺のチンポを咥え込みながら、ナターシャさんはアリスちゃんの言葉に答えていた

そんなナターシャさんの右手をアリスちゃんが両手でギュッと握ってあげている。仲睦まじくアリスちゃんと手を握りあつたナターシャさんが、正常位の体位で俺のチンポを楽しみながら、彼女が出した答えを俺に教えてくれた

「不束者ですが♡アリス様共々♡末永くよろしくおねがいします♡」

ナターシャさんが堕ちた瞬間だった

「もう♡ずっと我慢してたのに♡……結局♡堕とされちゃいました♡」

俺と楽しそうにセックスを続けながら、ベッドの上のナターシャさんが俺に心情を吐露し始める。俺は腰をふりながら彼女と会話を続けて、さらにナターシャさんの心を汚していく

「アレン君はいいの?」

「こんなすっごいチンポ♡逃すほうが嫌よ♡」

ヌポヌポと俺のチンポをおまんこに突きこまれながら、メスの顔になったナターシャさんが甘い息で答えを返す。そんな俺達の会話に、同じくメスの顔になったアリスちゃん嬉しそうに入ってくる。肉体を貪りあつた俺達の間には、強烈な親近感が芽生えていた

「私ね♡ユーリさんとナターシャと♡ずっと♡三人でエッチしたかったの♡」

「うふふ♡それじゃあお嬢様♡今から三人でいっぱい♡楽しませようね♡……♡つ♡……♡つ♡……♡つ♡……♡つ♡」

アリスちゃんとナターシャさんがお互いを慈しみ合いながら会話をする。彼女たちは、心から全てが幸福で満たされたような清々しい顔をしていた

……。

……。

……。

——きゅうううううん♡

「……あつ♡……すつごい♡……っ♡お嬢様♡……っ♡これで♡……っ♡おそろい♡……っ♡ですね♡……っ♡……っ♡」

……とぷ♡……とぷ♡

その後、ナターシャさんの体に刻んだ俺の淫紋も無事に完成し、彼女も俺の真の仲間となる。ナターシャさんは淫紋の完成によりさらに感度の上があった自分の体に、満足そうな顔をしていた

「うふふ♡じゃあナターシャ♡わたしと交代ね♡……ユーリさん♡わたしのおまんこにも♡……挿れて♡」

——くばあ♡

アリスちゃんも俺とナターシャさんのセックスにアテられてトロトロに濡らしてしまつたおまんこを両手で広げて、俺のチンポをおねだりする。彼女の心も、調教が成功したようだ

「ナターシャってエッチしてる時にクリトリスを弄ってあげると、すつごくエッチな顔になる♡気持ちいいの? えい♡えい♡」

……。

……。

……。

「——っ♡——っ♡? ~ ~ ~っ♡ ~ ~ ~っ♡……っ♡……っ♡? ~ ~ ~っ♡
♡……っ♡……っ♡……っ♡……っ♡……っ♡……っ♡……っ♡……っ♡
♡……っ♡……っ♡……っ♡……っ♡……っ♡……っ♡……っ♡……っ♡
「♡……っ♡……っ♡……っ♡……っ♡……っ♡……っ♡……っ♡……っ♡」

……。

……。

マーガレット・ベッケンバウム♡

ベッケンバウム家の本邸があるフリーエの街から少し離れた港町サントルード。昨日、アリスちゃんとなターシャさんと朝までセックスを楽しんだ俺は転移スキルを使い、朝一番にこの街をおとずれていた

俺の目的はベッケンバウム商船団を引き連れたマーガレット・ベッケンバウム女史。ベッケンバウム家は代々女傑の一族であり、ベッケンバウム商会の現当主であるマーガレット女史も商談のために世界中を飛び回っている。ジュームズ氏とステフ君は、無能故にフリーエの街に置いてけぼりということだ

「坊や？(´▽`)はおばさんの部屋だよ？」

マーガレットさんが宿泊しているサントルード一番の高級な宿屋のスイートルームを訪ねる。俺がドアを開けると、豪華絢爛な部屋の中で寛ぐ女性に声をかけられる

マーガレットさんは30歳後半ほどの見た目で身長は160cm、背中まで伸ばしたウエーブがかった紫色の髪に紫色の気の強い瞳、Fカップくらいのおぷるんと張った爆乳、そして赤い海賊服のような姿で部屋の中の椅子に座っていた。それにしても、素晴らしく貫禄のある女性である

「……まさか我がベッケンバウム家が私の代で潰れるとは。これは私の管理不足だな。すまなかつたね。坊や」

俺がジエームス氏とステフ君が帝国にアリスちゃんの身を売ったという証拠をマーガレットさんに提示すると、彼女はがっくりと肩を落としていた。俺を脅して証拠を奪い取ろうともしないし、感情をあらわにするでもなく、彼女は淡々と事実を受け入れている。マーガレット・ベッケンバウムは傑物という噂は本当のようだ

「ベッケンバウム家が存続できる道もありますよ。それは……」

……。

……。

……。

……くちゅ♡……くちゅ♡

まだ街が目覚めたばかりの朝の時間から、今日のスケジュールを全てキャンセルしたマーガレットさんと俺は朝日が差し込むスイートルームで裸になり、お互いの体を弄り合いながら抱き合っていた

「ふふふ♡……こんなおばさんでいいのかい？」

「きれいですよ。マーガレットさん」

「いら♡……おばさんをからかわないの♡」

今回の問題を秘密裏に処理する見返りとして俺が要求したのは、マーガレットさんが

俺の女になるということだ。最初は唐突な俺の要求に面食らっていた彼女だが、気を取り直すと狩りをする獐猛な生き物の顔に変わったマーガレットさんと体を弄り合い、今に至る

クチュ♡クチュ♡

「——はっ♡……ああ♡……んっ♡……っ♡……っ♡」

「マーガレットさんのおまんこ、グチヨグチヨに濡れてますよ。セックスをするのは久しぶりですか？」

「むかしはあ♡……あっ♡遊び回っていたけどお……♡子供を生んでからは♡……んっ♡ずっ♡……誰とも♡……あっ♡……してないわ♡……っ♡……っ♡」

マーガレットさんの生温かくてウネウネと絡みついてくるネットネットした膣の感触を人差し指と中指で楽しみながら、部屋の中で立ったまま俺と抱き合うマーガレットさんのおまんこの肉をグニグニとほぐしていく。俺に股間を弄くられながら甘い息を吐く

彼女の痴態が素晴らしくエロい

——じゅるるるるっ♡——じゅる♡……ズゾゾゾ♡……ゾゾっ♡

そして今度は、マーガレットさんが熟れたテクニックで仁王立ちになった俺のチンポを床に膝立ちになってフェラチオをしてくれる。猛禽類の瞳にひよつとこ顔でデーパースロートをしてくれる彼女のお口の味は、最高だった

——くにゆり♡

「ふふふ♡……まさか息子と同年くらいの男の子とエッチするなんてね♡」

「もう、マーガレットさんは俺の女ですよ」

「そうだったわね♡……あなた♡」

ベッドの上で正常位に股を開き、膣口に俺のペニスをあてがった状態で俺とマーガ

レットさんが仲睦まじい会話をする。彼女の心はすでに、夫であるジェームス氏から俺に鞍替えを完了していた

きゆううん♡

俺はマーガレットさんのへその下に俺の淫紋を刻むと、その淫紋を完成させるために腰を前に押し込み彼女の潤ったおまんこの膣肉をにゆるんという感触でかき分けながらチンポを挿れ、マーガレットさんへの寝取りセックスを開始する。淫紋を刻んだことによつてセックスの感度が上がったマーガレットさんは、興味深そうな顔で俺とのセックスを楽しんでいた

「——あはあ♡……これ♡……すつ♡……あつ♡……あつ♡……ああああ♡……っ♡……っ♡」

「ジェームスさんのチンポよりですか？」

「——あつ♡——あつ♡……比べ物にならないわ♡……っ♡……っ♡ユーリくんのチン

ポ♡……最高よ♡——あつ♡——あああああ♡……そこ♡……いい♡……っ♡
 ……っ♡」

過去に数回、出産を経験したマーガレットさんの膈肉はやわらかくて伸びるような感触を受ける。経産婦所以なのか、トロトロに熱くてほぐれた心地よい彼女の潤ったメス肉が俺のチンポを突きこむ度に、ふわりとグニユグニユに心地よくヒダヒダでこそばゆく俺のペニス全体を包み込んでくれる。マーガレットさんのおまんこは最高に気持ちいいメス肉だった

ズポ♡ズポ♡

「ジエームス。わたし♡……ユーリくんの女になりましたあ♡……子供を生んでから♡……ずっとエツチの誘いを断ってごめんね♡……うふふ♡……ユーリくんのセックス♡……すつごく♡……気持ちいいよ♡」

映像記録球を使い、夫であるジエームス氏に向かってマーガレットさんにメッセージを送ってもらうことにする。彼女はベッドの上で正常位に股を開いて楽しそうに俺と

てを快樂によつて俺に屈服させてしまう。もちろんこの映像もジエームス氏とステフ君に送るから、有効活用をしてもらいたい

ぬぼ♡ぬぼ♡

「——まつて♡……♡つ♡いまあ♡——あ♡♡♡敏感だからあ♡——あ♡あ♡……♡つ♡……♡つ♡動いちや♡——♡つ♡らめえええ♡……♡つ♡……♡つ♡……♡つ♡♡」

淫紋が完成し体をもつと敏感になつたところに、絶頂を迎えてさらに敏感になつたマーガレットさんのおまんこに俺の精液を塗りつけながらピストン運動をしていく。先程までのやさしいセックスではなく、心を墮とすための快樂漬けセックスが始まると、彼女は体を悶えさせながら意識を混乱させていた

「——嫌あ♡——まつて♡……♡つ♡……♡本当にい♡……♡らめなのほおおおおおお——お♡つ♡——お♡つ♡お♡おおおおおおおお♡♡♡♡♡——♡つ♡♡♡♡——♡♡♡♡♡」

——っ♡?——っ?♡~~~~っ♡♡……っ?♡……っ♡♡♡」

ガク♡ガク♡

ベッドの上で正常位にはしたなく大股を開いたマーガレットさんが、おまんこを俺のチンポでボツコリと突かれながら深くイク。突然、彼女のやわらくてとろとろに熟れた膣肉がきゆうきゆうと激しく細かく痙攣をすると、俺のチンポをぎゅると強く締め付けてきた。マーガレットさんの呼吸が甘くて荒い。でも、まだこの調教セックスは終わらない

「……おね♡……がい♡……っ♡……もう♡……らめ♡……っ♡……なのお♡……っ♡……らからあ♡……っ♡……とまってえ♡……っ♡……っ♡——あ♡っ♡——あ♡っ♡——あ♡……あああああああ♡……っ♡——っ♡——」

ガク♡ガク♡

類上はダンジョン探索中の事故となっている。どこのダンジョンかは秘密だ。まあ、彼らは女になり男の体では味わえなかったであろう極上の快楽を与えられ続けているのだから、ある意味幸せだろう

こうしてマーガレットさんが俺の仲間になり、ベッケンバウム商会が俺の傘下に加わった

宿屋経営

ダンジョン運営にも慣れて落ち着いてきた頃、俺は異世界に来てからしたかったことの一つである宿屋の経営をすることにした。自分が運営するダンジョンの前でダンジョンマスターである俺が素知らぬ顔で宿屋を経営するというのが、俺の憧れだったのだ

俺が経営する宿屋に宿泊をする冒険者からもダンジョンポイントを接収することが出来る。ダンジョンの入口一帯もダンジョンとしてカウントされるため、街を作ること
で人を呼び込み、さらにダンジョンポイントを増やしていく計画だ

宿屋の運営は、俺の女になった彼女たちをお願いをしている

「女冒険者の君、いいお尻をしているね」

ジャンヌは接客をしながら、いつものセクハラに余念がない。ジャンヌのその姿を宿屋のカウンターからリゼさんがニコニコと見つめている。あれは後でお説教をするときの顔だな

「何で私が人間相手に接客なんてしなくちゃいけないのよ！」

ターニヤはまだ接客の仕事に慣れていないらしい。みんなの様子を見に来た俺に対してプンプンと怒りながら話しかけてきた。仕方ない。ターニヤには少し指導をしてあげるか

「ターニヤ。こっちにおいで」

「ちよつと……。部屋に二人つきり呼び出して何よ？ ははーん。分かった！ 私の体に、ユーリの部屋にこっそりと隠してある、あの薄い本みたいなことをするつもりね！

——ツ!!」

……ぬふふ♡

「いらつしやいませー！」

宿屋の隣には食堂も併設した。食堂のフロアには、アンナちゃんを楽しそうに配膳をしている姿がある

「やあーユーリ君！」

食堂で食事休憩を取っていたミューさんに話しかけられる。この宿屋には武器防具屋もあるし、ミューさんが生産活動をする鍛冶場もある。RPGゲームにもたまにあるよね。辺びなダンジョンの目の前に何故かある、道具屋と武器防具屋が併設されたよく分からない宿屋。今の俺の宿屋はそんな感じだ

俺の宿屋はベツケンバウム商会が出資をしたという体裁を取っているので、いきなり規模の大きい宿屋が出来たばかりのダンジョンの目の前に建設されても訝しむ者はいない

このダンジョンから採掘できるダンジョン資源に可能性を見出したベツケンバウム

商會が、未来を見据えて大口投資をしたという形だ。いつかこのダンジョンが有名になった時に好立地条件であるダンジョンの入り口周辺という土地を占有したと、周りの人々は捉えていた

実際に俺のダンジョンから採掘できる二ホンの商品は、ベッケンバウム商會によつて少しずつ周辺の国に流通をし始めている。今は使い道などは知られていないが、そのうちに広まっていけよう。マーガレットさんはその計画のために奔走をしていた

さらには、今後に建設予定である冒険者ギルドダンジョン前支部ではリンダさんが働く予定だ。こうして、俺と癒着をしまくった街が作り上げられていく

——ちらつ
♡

——ちらつ
♡

俺がそんなことを考えている間にも和気あいあいと接客を続ける彼女たちであるが、さつきから俺のチンポをガン見し過ぎである。宿屋の営業時間が終わったら中出しを

しまくってあげるから、それまで我慢してね

ちなみにダンジョンの運営と宿屋の接客は、みんなで交代をしながら持ち回っている。エミリアとシルビアさんが今日は休憩の日で、この後俺とメチャクチャにセックスをする予定だ

先程まで俺とセックスをしていたルルルウは今、ベッドの上で全裸にアへ顔のまま、がに股で仰向けに天井を見上げ気絶をしている。彼女のおまんこは俺の精液まみれだ。体に染み付いた俺の精液の匂いをかぐのが大好きだから、クリーン魔法は掛けないでとルルルウからお願いをされた

アリスちゃんとナターシャさんは自衛能力の向上のためユズハさんの指導の元、俺のダンジョンでレベルをあげている

マリーとソニアちゃんは今日、ダンジョン運営の管理だ

「ユーリ♡今日はあの薄い本みたいなことしようよ♡」

「ユーリ君♡今日はおばさんのおっぱいで♡あの薄い本みたいなことしていいのよ♡」

エミリアとシルビアさんが準備万端の顔で俺に話しかけてくる。何でみんな、俺が部屋のベッドの下に隠している俺のお気に入りのお宝の薄本たちを知っているんだ？
まあいいけど

むにゅ♡むにゅ♡

「ほら♡ほら♡ユーリ♡……あつついせーえき♡……いっぱい♡ぴゅっぴゅ♡しちやいなさ♡」

にゅ♡にゅ♡

「ユーリ君♡おばさんのおっぱいまんこ♡いっぱい♡……せーし♡……だしちやおうね♡」

……。

……。

……。

……ふにゆ♡……ふにゆ♡

「ユーリ君のチンポ♡……すつごいピクピクしてきた♡……うふふ♡わたしのおっぱいまんこ♡……いっぱい♡しやせいしてね♡」

……ぬぷぷ♡……ぬぷぷ♡

「ユーリ君のおちんぼ♡すつごく♡かったくなってるよ♡……うふふ♡……おばさんのおっぱいまんこ♡しろいの♡いっぱい♡……かけちやおうね♡」

……。

……。

……。

「……あつ♡……出てきた♡」

さて、これからの俺たちにはどんな出会いが待っているやら

フリードニヒ8世ちゃんとのエッチ♡

……くふ♡……くふ♡

俺は宿屋が完成したお祝いをしにダンジョンをおとずれてくれたフリードニヒ8世ちゃんと、俺の部屋でセックスをしていた。彼女は新築のお祝いにとカマーランド産の薄い本を俺にたくさんプレゼントしてくれていて、そのお礼をしたいと伝えたところ彼女にセックスを要求されたからだ

なんでもフリードニヒ8世ちゃんは偉くなりすぎて、今の彼女とセックスをしたいという人間が存在しなくてムラムラが溜まりまくっているそうなのだ。周りに自分の威厳を見せつけるためにも、こつそりと身内に隠れてセックスが出来る俺がターゲットになった

今はベッドの上に座る俺の股の間で前かがみになったフリードニヒ8世ちゃんが

いさなお口で一生懸命に俺の巨根をフェラチオしてくれている。絵面だけを見ればつるべたのロリロリすぎて犯罪的なのだが、中身は成人なので大丈夫だろう

フリードニヒ8世ちゃんは異世界に来る前は二十代後半の女性同人作家だったことを俺に教えてくれた

ちゅば♡ちゅば♡

「……っ♡いやぁ♡女の体に戻ってからのちんぽ♡……久しぶりだわ♡……っ♡……っ♡」

少女の顔に淫乱な大人の笑みを浮かべながらロリフェイスのフリードニヒ8世ちゃんが、俺のチンポを楽しくそうに舐めしゃぶり啜えている。女に戻る前の彼女の性の履歴書は、正直聞きたくない

「ユーリちゃんは女の子を堕としまくっているから、すっごいものを持つてるかと思つてエッチに誘ったんだけど、当たり前だったみたい♡」

……くぬぬ♡……くぬぬ♡

ちいさなお口に見合わない極上のテクを使い、フリードニヒ8世ちゃんが俺のチンポをロリお口まんこでしごきあげ続ける。俺の股間にこそばゆくあたる、彼女の鼻息が熱くて荒い

ちなみにレベル差がありすぎてフリードニヒ8世ちゃんの体には俺の淫紋が刻めない。それにダンジョンの同盟の条件に対等な関係をとあるから、彼女とは普通のセフレという関係だ

「そろそろ挿れちゃおっか♡」

——くばあ♡

ベッドの上でツルペタでスベスベな体をしたフリードニヒ8世ちゃんがみごと一本筋のパイパンロリマンコを両手で拡げながら正常位の体位になり、俺のチンポを誘っ

てくる。彼女の狭い膣口からは透明で粘液質な愛液が、とろりと溢れてきていた

くにゆうううううん♡

お言葉に甘えて俺は早速、フリードニヒ8世ちゃんのロリマンコに俺のチンポをヌプヌプと彼女のロリ膣肉のやわらかい感触を裂きながらねつとりと挿入していく。彼女の言ではフリードニヒ8世ちゃんの体になってからの初物だそうだ。やったぜ

「でも、処女膜がないけど何で？」

「……っ♡そんなの♡オナニーで破っちゃったわよ♡……っ♡それより♡ユーリちゃんのチンポ♡……効くわあ♡……っ♡……すっごく♡……いい♡……っ♡……っ♡」

どうやらフリードニヒ8世ちゃんは豪の者だったようだ。深くは聞かないことにする。でも彼女のおまんこはもう痛くなくて大丈夫そうなので、俺はフリードニヒ8世ちゃんのツルペタでスベスベなお胸にポチッと出ばったちっちゃなロリ乳首をコリコリと指で摘みあげながら、彼女の股間に割れているロリ少女のちいさなおまんこのヌル

ヌルと絡みつくねっちよりと湿った腠肉の感触をペニスで楽しみつつピストン運動を開始した

……ぬぼ♡……ぬぼ♡

「……っ♡……っ♡向こうの世界にいたときはあ♡……即売会にコスプレで行って♡……っ♡……っ♡オフパコしまくってたんだけどね♡……っ♡懐かしいなあ♡……っ♡……っ♡あとはあ♡……ライブチャットで公開オナニーするの♡……大好きだったなあ♡……あっ♡……あっ♡……おまんこに♡……チンポが出たり入ったりするの♡……っ♡すっごい♡……ひさしぶりい♡……あっ♡……っ♡……っ♡やっぱり♡気持ちいいわあ♡……っ♡……っ♡」

金色のクリンとした少女の瞳に清廉な金髪を振り乱したツルペタでお人形みたいにかわいいフリードニヒ8世ちゃんが、ベッドの上で俺と一緒に全裸になって楽しそうに腰をふっている。ロリ少女が好きな人には狂喜乱舞な光景だろう

「あとはね♡……んっ♡創造神はあ♡……っ♡……っ♡女性だったわよ♡……あっ♡

てあげることにする。なんだかんだ彼女も好き者のようだし、友好的な関係を築けそう
だ

ズポ♡ズポ♡

「……すっごい♡気持ちいい♡……っ♡……っ♡ねえ♡やっぱりわたしにもお♡——
あっ♡——あっ♡……淫紋を刻んでえ♡もつと気持ちよくなれるんでしょ？——あっ
♡——あっ♡——ああああああ♡」

「うんっ。」

俺たちのセックスが盛り上がりを見せ始めた頃、フリードニヒ8世ちゃんが俺にとん
でもない要求をしてきた。彼女はそれでいいのだろうか。あえて肉体の防御力を下げ
るから、フリードニヒ8世ちゃんはそのまま俺の淫紋を刻んで欲しいと言いつ出したのだ
「私は精神的な汚染はレジストでできるからあ♡——あっ♡——あっ♡……体の感度が上
がるだけ♡……っ♡……っ♡ユーリちゃんとのセックス♡……っ♡これは楽しまない

ちゃんもクリンクリンのつぶらな瞳を快楽にどろつと濁し、俺のチンポをおまんこにヌツチユヌツチユと出し挿れされる感触をトリップしながら楽しんでた

「——あはあ♡これ♡……最高♡——あ♡——あ♡ ああああ♡……すっごひ♡——
 おっ♡——おっ♡——おっ♡……っ♡……っ♡——お♡ おおおおおおおお♡
 ……っ♡……ユーリちゃん♡……このまま♡……淫紋を♡完成させちやつてえ♡—
 —っ♡——っ♡——っ♡……らめ♡……イクうううううう♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡
 ♪♡♡♡♡……っ♡……っ♡……っ♡……あああああああ♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡
 ♪♡♡♡」

ガク♡ガク♡ガク♡

ちつちやな体でだいしゆきホールドをして俺の体に縋り付いてくるフリードニヒ8世ちゃんのおまんこの穴に俺の巨根で大穴を開けながら種付けピストンプレスで彼女のロリロリな肉体を潰し、ベッドの上で悶絶を始めたフリードニヒ8世ちゃんの体を俺は快楽漬けにしていくことにする

.....
°

.....
°

.....
°

[
 ① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱
 ① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭
 ① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱]

① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱]

.....
°

.....
°

……。

……。

……。

「——あつ♡——ああ♡……っ♡ユーリちゃんのチンポお♡……っ♡ずっと♡……おまんこに啜えてたい♡——っ♡——っ♡——っ♡——」

又チユ♡又チユ♡

淫紋が完成した後、意識を戻したフリードニヒ8世ちゃんとまつたりとしたセックスを楽しみつつ、俺達は仲睦まじい会話を続けていた。今のフリードニヒ8世ちゃんはいさな体をベッドの上に四つん這いにして、バックの体位でおまんこに出入りする俺のチンポを気持ちよさそうに肩をすくませながら楽しんでる

俺とフリードニヒ8世ちゃんがエッチをしている部屋の外の廊下では、俺の女になっ

た彼女たちがこっそりとのぞき見をしながらオナニーをしているので、後で彼女たちのおまんこも慰めてあげなきゃな

「ねえ♡……もつと♡……わたしのおまんこお♡……ぬぼぬぼして♡」

ベッドの上のフリードニヒ8世ちゃんがまたおねだりを始める。結局、この日の俺達のセックスは、彼女が帰らなくてはいけない朝まで続いた

……。

……。

……。

「……んっ♡……たまにいい♡……創造神のような女の子をお♡……あっ♡……私の国の♡……っ♡……薄い本のマーケットで見かけるのよお♡……太いフレームのメガネにいい♡……あっ♡……パーカーを着てえ♡……キャップを深く被ってね♡……んっ♡」

……いかにも正体を隠してますって格好で♡……あつ♡……キヨロキヨロしながらB
 L本を買いまくってるわ♡……つ♡……うふふ♡……あつ♡……あつ♡……そこお♡
 ……もつと♡……ぐりぐり♡……してえ♡……つ♡……つ♡……「♡

……。

……。

……。

「それでね♡私が好きなのはあ……つ♡……シヨタB Lなんだけどお♡……つ♡……つ♡……
 ♡……ユーリちゃんはシヨタつぽいからあ♡……あつ♡……んつ♡……オツケーなの
 よお♡——つ♡——つ♡……つ♡……ユーリちゃん♡……おまんこお♡……らんぼう
 にい♡♡♡……ぬほぬほしちやあ♡♡♡……つ♡……つ♡……らめえ♡♡♡——つ♡
 ——つ♡——つ♡♡♡
 ああああああ♡♡♡……つ♡……イクつ♡……つ♡……つ♡……つ♡……つ♡……つ♡……
 ♡♡♡「

……。

……。

……。

「パソコンのお♡……画面ならあ♡……画面をスクロールするためにい♡……つ♡
 ……♡マウスホイールを弄るのはあ♡……つ♡……つ♡……あなたの人差し指があ
 ♡……女性のクリトリスを弄っているの♡……同じってことね♡……うふふ♡……
 つまり人類はあ♡この世の全てに♡……手マンして♡……つ♡……つ♡……生きてい
 るってことなのよお♡……つ♡……つ♡……」

ズポ♡ズポ♡

「もしくはあなたがノートに文字を書くときもお♡……ペン先で女性器を弄ってるって
 ♡……あ♡……考えればいいわ♡……つ♡……つ♡……それがあ♡……カップリン

こうして俺とフリードニヒ8世ちゃんは、定期的に肉体関係を持つセフレになった

私、異世界転移にハーレムはいらないってお願いしたよ
ねっ!?

私の名前は渡辺瑞葉。ひよんなことから異世界に飛ばされてしまった元アラサーの
OLだ。今はミズハとして異世界で生活をしている

ダメ男ばかりが寄ってきて一度も彼氏を作ることもなく一度目の人生を終えてし
まった私は、もうダメ男に振り回されないと決意をする。創造神様に転移をする際に欲
しい能力を聞かれた私は、自立した女性としての能力と異性関係に苦勞をしない能力を
くださいとお願いをした

異世界に送り込まれる際に創造神様から私に与えられたのは、三十歳まで処女でいた
事の特典として魔力制御能力と魔女の能力、そして自立した女性として好きなものを作
れる生産スキルだった。これは本当にありがたい。自分の身を守ることが出来るし、手
に職を持ってお金を稼ぐことも出来るからだ

そしてたまたま街で仲良くなった旅行中の貴族の女の子に私がハマっていたネットゲームのコスプレをさせたところそれが大流行をしまい、私はミズハ衣服店を開くことになる。私は有名デザイナーになっていた

たしかその女の子はアリスちゃんって名前だったかな。彼女は元気になっているのかなあ？すつごくかわいくて純情な女の子だったし、きつと今頃、お庭で日向ぼっこをしながら紅茶を飲んでのんびりしてそう

ここまではいい。創造神様には本当に感謝をしている。しかしここからが問題だ。私のお願した異性関係に苦勞をしない能力というのを、創造神様は勘違いをされてしまったらしいのだ

どういふことかというと、異世界に転移をした私は15歳の頃に見た目が若返り、さらにはツルペタだったAカップの胸がIカップの爆乳に変わっているのだ。しかも垂れていない。下乳ももつちりとした張りのある大爆乳のおっぱいであった

さらには腰のクビレもお尻の形もセクシーに変わっており、私の体はよく分からないフェロモンを周りにふりまき続けている。どうやら私はお願いした意味とは逆の意味での異性関係に苦勞をしない女としての能力を手に入れてしまったようだ。創造の女神様っ！私がお願ひしたのはそういうことじゃないのよっ！

「ミズハは俺の嫁になるんだ！」

「いいえ！たとえ殿下だろうとそれは譲れません！」

今日も私の衣服店に遊びに来た二人の男の子がケンカをしている。私がデザイナーになってから、私のお店にちよくちよくとオーダーメイドの服を注文してくれる貴族の男の子二人と私は仲良くなっていた

「グレッグ！ロイ！他のお客様の迷惑になるからケンカしないの！」

「分かったよミズハ。すまなかつた」

「ミズハ。いめんよ」

私に叱られた男の子二人がシユンとしている。貴族ではあるが、二人からのお願いで私は彼らと普通に接することになっていた。なんでも、私とお友達になりたいとのことだ。見た目はセクシーだけど、中身はアラサーのおばさんと仲良くなりたくないなんて、変な人達ね

私が仲良くしている二人を紹介しよう。一人目の男の子はグレッグ。彼はこの世界での私の年齢と同じ15歳で、なんと私が住んでいる国の王族である。グレッグは金髪に青い瞳で王族の三男という身分を用いて悠々自適に遊び回っているイケメン男子である。彼はすっごくモテモテなのに、私みたいな元アラサーおばさんを嫁にするという冗談を言つては周りを驚かせている。まあ、すぐに飽きるでしょう

もう一人の男の子はロイ。この国の公爵家の次男で銀髪に青い瞳をしている。彼もこの世界での私の年齢と同じ15歳の男の子だ。グレッグが武闘派の活発系イケメン男子ならロイは知的インテリ系クール美形男子である。彼も甘いマスクを持っていてこの国ではアイドルのように女の子から持て囃されているが、何故かグレッグの冗談に

付き合つては、いつも私を誰の嫁にするかで彼とケンカをしている

二人にはそういう冗談を言い合つていたりとかわいいた女の子があなたたちから逃げちやうよと注意をしているが、どうにも聞いてくれない。異世界に来てからの私はこの二人とグループを組み、三人でいつも遊び回っていた

「久しぶりの市場ね！」

今日の私はグレッグとロイと一緒に、私がいま住んでいる王都の市場に来ていた。鑑定スキルが使える私はたまにこうして掘り出し物を探しに来るのだ

「あ！それ、醤油じゃない!?!何でこんなところにあるの!?!」

そして私は大発見をする。なんと市場で醤油を見つけたのだ。しかもパッケージがニホンのものと酷似をしている。私が必死に店主にどうやって手に入れたのかを聞き出すと、最近出現したダンジョンから採れたものだということを教えてくれた

「これはダンジョンに行かなくてはい！」

異世界に来てからの私はニホンの食事に飢えていた。この世界の料理自体は美味しいのだが、ニホン人ならやはり醤油や味噌が恋しくなる。そこにニホンの調味料が手に入られるダンジョンの情報である。これはもう、行くしかない

「ミズハ。ダンジョンはさすがに危険ではないか？」

「殿下の御身に何かあつてはいけませんから、殿下は王都のお残りください。僕がミズハを守りますから、大丈夫です」

「ロイ！ 抜け駆けは許さないからな！ 俺もダンジョンに行くぞ！ それにミズハは目を離すと、またすぐに何かやらかすからな」

「え？ 私、何かやつちやつた？」

「まったく。ミズハは無自覚だから困る」

なんだかよく分からないが、護衛の騎士達を引き連れたグレッグとロイも私のダンジョン探索に付いてくることになった。しかし、今は細かいことは気にしてられない！
だって、ニホン食が私を待っているのだから！

「待っててね！私の醤油にお味噌にみりんさん！私があなたたちを、美味しく食べちゃうんだからね！」

こうして私は、ニホンの食材を求めて最近できたばかりだというダンジョンへと旅立つことになった

ダンジョン前の宿屋さん

ミズハ視点

「……絶対！ニホン人が経営してるでしょう！」

私達一行は最近出現したというニホンの食材が入手できるというダンジョンにおとずれていた。ダンジョン前には便利なことに宿屋があり、私達がそこに宿泊をしながら食堂で食事を取ろうとした時、なんとメニューが全てニホン食だという驚愕の事実が判明する

これは、私と同じくニホンから転移してきた人が宿屋を運営している予感がバツチリだわ！でもその前に、目の前のニホン食よ。ミズハ！

「A定食がカレーにB定食が天ぷらとお蕎麦、C定食が生姜焼きと豚汁かあ……。これ

は悩むわね」

私はワクワクとしながら今日のランチメニューを確かめる。私達が宿屋にチェックインをしたのは昼間だった

「うーん。今日はカレーにしておこうかしら」

久しぶりのニホン食に何を食べようかものすごく悩んだか私だが、最初はカレーを頼むことにする。よく考えたら毎食この食堂で食べればいいんだし、順番に食べていこう
「これがミズハの故郷の料理か？うまいな！」

「うん！すつごく美味しい！」

私と一緒にダンジョンをおとずれたグレッグとロイヤ、護衛の騎士たちも思い思いに注文をしたニホンの料理に舌鼓をうっている。やはりニホン食は最強ね！グレッグは私と同じカレー。ロイヤは生姜焼きと豚汁を頼んだようだった

さて、お腹がいっぱいになったことだし私は店員さんに事情を話して、この店主さんに私がニホン人だということを伝えてもらうことにした。こつちの世界に来てから初めて合う同郷の人だし、どんな人か緊張するなあ

それにしてもこの宿屋の店員さんはみんな美人揃いだ。グレッグとロイの護衛についてきた騎士さん達も鼻の下を伸ばしながら接客をする彼女達を見ている。きっとこの宿屋を作ったニホン人はハーレム系男子だわね

「グレッグとロイは、どの子が好みなの？」

「俺はミズハ一択だ」

「僕もミズハにしか興味はないよ」

うーん。お世辞を言われながら、誰が好みかをグレッグとロイにはぐらかされてしまったわ。思春期の男の子だから恥ずかしいのかしら。でも私の見立てではあのター

ニヤちゃんというかわいいエルフの女の子だと思う。グレッグとロイは、活発な女の子がタイプと見た

私がそんなことを考えていると黒髪黒目の男の子が私達の元へやってくる。やった！絶対にニホン人だ！もう見た目でわかる。彼の名前はユーリ君というらしい。彼と少し話をする、ダンジョンから採れるニホンの食材を使ってユーリ君はこの宿屋を経営していることを教えてくれる

そしてわざわざダンジョンに潜らなくても、ユーリ君がダンジョンの食材を売ってくれることを提案してくれた。でもそれは悩ましいわね。毎回彼にお世話になってばかりはいられないし、自分で入手するほうが手っ取り早いこともある

「ユーリ君。実はちよつとだけ、二人で話したいことがあるんだけど。いいかな？」

「だめだ！ミズハ！男と二人つきりになるなんて、俺が許さないぞ！」

「そうだよミズハ。それには僕も賛同できない」

私がユーリ君と二人つきりで話をすることを提案すると、グレッグとロイに猛反対をされてしまう。結局、その場ではユーリ君と二人つきりで話をするという案は却下されてしまった

グレッグとロイには秘密だが、同じニホン人同士、積もる話もあるのだ。転移する前の話や創造神様の話をしたいもん。どうにか出来ないかなあ

創造神様からは同じニホン人でも邪神の使徒には気をつけなさいって言われてるけど、そんな人に会ったこともないし大丈夫でしょう。ユーリ君とはあとでまた話せばいいか

まあ、とりあえず今日はのんびりすることにしよう。昼前に宿屋へとチェックインをした私達は食堂で昼食を取り終えた後、夕食の時間まで各々の部屋で休むことになった。私は唯一の女性とのことで個室だ

しばらく私が部屋でのんびりしていると、私の部屋をノックする音がする。ユーリ君

だった

やっぱり異世界人同士、みんなの前では話せない内緒話があるもんね。私も彼と話したいと思っていたから、ちょうどいい

グレッグとロイの二人にはユーリ君と二人つきりにならないように釘を差されていくけど、少しくらいならいいよね

(それに、もしかしたら本当にグレッグかロイのどちらかに、いつかお嫁さんにされちゃったりして……なんてね！)

はあ。バカなことを考えていたら悲しくなってきた。いけない！ユーリ君を待たせてる！

(大丈夫よグレッグ。ロイ。私はあなた達の気持ちを裏切ったりしないわ！ちよつとだけ、ユーリ君と二人で会話をするだけじゃない。グレッグとロイはヤキモチ焼きなんだから……)

「ユーリ君。どうぞ」

——ガチャ

(……それにね。私は前世で三十年間、処女を貫いた鉄壁の女なのよ！私の防衛を突破できるのなら、突破してみなさいな！)

こうして、私はユーリ君を部屋に招き入れた

えっ!? 私、もしかしてヤツちやいましたあ!?
♡

……。

……。

……。

(……どうしよう♡……ユーリ君とお♡……エッチしちやったあ♡)

気がつくとは私は宿屋の部屋のベッドの上ではしたなくM字に股を開いて、正常位の体勢でユーリ君とセックスをしていた。自分が実際にAVみたいなことをしているなんて、まだ信じられない

人生で初めてってくらいにグチュグチュに濡れてしまった私のおまんこにはユーリ君の大きなアソコがヌツポリと完全に根本まで埋まりきっていて、今日この瞬間に、私

は三十年間守り続けた処女を失ったことになる

「……………あつ♡……………つ♡……………んっ♡……………つ♡……………つ♡」

(……………グレッグう♡……………つ♡……………ロイい♡……………つ♡……………ごめんね♡……………つ♡……………つ♡……………つ♡……………ユーリ君のチンポお♡……………つ♡……………つ♡……………すっごく♡……………気持ちいい♡……………つ♡……………つ♡)

私はあまりの気持ちよさにニヤけそうになる顔を我慢しながら、甘くとろける意識の中で必死にこれまでの経緯を思い出す。私はあれよあれよという間に、ユーリ君に処女を奪われてしまっていた

最初は些細なきっかけだった。女として自信が持てないんだって、ユーリ君に相談を試してみた。同じ異世界人だし、周りの人には話せない悩みも気軽に話せたからだ

ユーリ君は私のことを褒めてくれて、やさしくしてくれて、そのことに気を良くしている。ユーリ君が私の体を強く抱きしめてくれた。突然のことでびっくりしたけど、でも断れなかった。だってさつきまで、ユーリ君は私を大切に扱ってくれていたんだもん

私を興奮させる変な何が出ているみたい。どうしても私の体が興奮をしてしまうのだ。それだけ、ユーリ君の体が魅力的だったっていうことなのかなあ？

ユーリ君の男の子の肉体で私の女の体を抱きしめられて、キスをされ、胸を揉まれて、ユーリ君の指でアソコをモゾモゾと弄くられていると、私の体はあつという間に止まらなくなつた

(……グツレグ♡……ロイ♡……ごめんね♡……今日だけだからっ♡……っ♡)

私は頭の中でグレグとロイに裏切りをしてしまったことを謝罪する。さつきまで普通に会話をしていたはずなのに、自然な流れでいつの間にか私はすでにベッドの上で全裸になり、股を開き、ユーリ君のアソコをおまんこにあてがわれてしまっていた。私の処女が散るまで、秒読みだった

(……私♡……逃げられなくなつちやた♡……ユーリ君って♡……っ♡……やり手だったのかなあ♡……っ♡……グレグ♡……ロイ♡……私の鉄壁の防御♡……突破されちやつたみたい♡……えへへ♡)

三十年越しの初体験まで秒読みの状態で股を開いたままの私はユーリ君とのキスが続ける。私の体は簡単に、ユーリ君にハントをされてしまった。エッチってこんなに気持ちよくて、こんなに興奮しちゃうんだ。三十年間処女を貫いた私は、溜まりに溜まった性欲の分だけ、初めてのセックスに夢中になってしまっていた

別に処女じゃなくなっても、グレッグとロイとの付き合いは変わらない。私は頭の中でそういう訳をしながら、ユーリ君とのエッチを続けていく

——くにゆう♡

そしてついに、私の股間にユーリ君の熱くて硬い尖った肉の棒が押し付けられる。敏感な私の股間にくにゆりという感触で、すつごくこそばゆくて、すつごく気持ちいいペニスの先があたっている。私は今からユーリ君と本当にエッチをしちゃうんだ。その認識が現実味を帯びてきて、私の心をさらに興奮させる

「ミズハ。挿れるよ」

「……………うん♡」

ユーリ君の言葉にどきりと胸が高鳴る。おまんこにおちんちんを挿れるのってどんな感触なのかなあ。三十年間ずっと妄想をし続けていたことが、ようやく現実に味わえるのだ

——くにゆううううん♡

私の股間に空いた女の子の穴を熱い男の子の肉の棒が広げるようにして、私のおまんこの中の閉じていたお肉がぐにやりとかき分けられていく。私のお股の中に少しづつ、硬くて尖った肉の感触のペニスがぐうんと埋まり込んでいくのが分かった。これがセックスなんだ。私の心は大興奮だった

——ピト♡

私の股間の中にゆっくりと埋まり込んでいくユーリ君の肉の棒が、ある地点で止まっ

た。そしてユーリ君の硬いペニスの先が私のお腹にある膜のようなものを引き伸ばしているのが分かる。これ。私の処女膜だ

「……ユーリ君♡……して♡」

私はベッドの上で、人生で初めて異性に対して正常位に股を開いた体勢のまま、ユーリ君におねだりをする。私の言葉を聞いたユーリ君は私の唇にやさしいキスをしてくれると、そのまま腰を私に向かって押し込む。すると、ぐにゅんという内蔵を直接かき分けるような感触とともに私のお腹の奥にまで、ユーリ君の硬くて太い肉の棒が完全に埋まりこんでいった。私、処女じゃなくなっちゃった

……ふち♡

にゅんんんんんん♡

「——♡——♡——♡——♡」

う感触で閉じてはかき分けられていく。私のおまんこの中身が硬くて熱い肉の棒でヌポヌポとこすられると、とろけるような心地いい快樂が私の股間から全身に向かってどろりと広がっていった

(オナニーなんかとぜんぜん違う♡……セックス♡……すつごく気持ちいい♡)

敏感な粘膜に直接肉の棒を挿し込まれ、気持ちよくこすられ、膣肉をかき分けられると、次の瞬間にはあつという間に私の股間からペニスが引き抜かれていく。そして私の股間のおまんこのお肉が閉じたと思ったら今度はまたすぐに、ぐにゆりという強烈なヌルヌルとした快感によってゾクゾクと私の膣肉がえぐられる感触を味わいながら、再びユウリ君のチンポが私の体内に埋まるようにしてにゆるんという感覚で挿入をされる。するとポツコリと、私の股間に空いた女の穴が強烈な爽快感とともにペニスで大きく押し広げられるのだ。その一瞬一瞬から、私のおまんこにはとてつもない快樂が生まれてきた

そしてセックスはそれが連続した短いリズムでずつと続くことを、私は今日初めて知った。私の意識が初めて味わう異性と性器をこすり合うという行為が生み出す強烈

な快樂で、あつという間に溶けて濁っていく

(……グレッグう♡……ロイイ♡……わたしのおまんこお♡……とろけちゃったあ♡
……すっごい甘くて♡……気持ちいいのお♡)

「……あつ♡……あつ♡……ああああああ♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡」

私は初めてのセックスに、夢中になって腰をふった。前世ではずっと処女だったけど、エッチに興味がなかったわけじゃない。むしろ一度もセックスをしたことがない分、他の人よりも強いあこがれを持っていた

私の股間にあるおまんこにぬっぽぬっぽという感覚で硬い肉の棒が入り出して、私のお腹の中を直接こすられる。そして私は股を開いてそれを受け入れ続ける。たったそれだけなのに、私の体がポカポカと興奮をして、私の全身にはとろけるような甘い快樂が駆け巡っていく。不思議だった。でも、最高だった

「……ユーリ君♡……もつと♡……ぬっぽぬっぽして♡」

「おーい！ミズハ。いるか〜」

私達の秘密のセックスが開始されてしばらくした後、私はベッドの上に四つん這いになり今度はバックの体位でユーリ君とのエッチを楽しんでいた。すると私の部屋のドアをノックする音がする。気がつくともうすぐ夕食の時間だ。どうやらグレッグとロイが私を迎えに来たらしい

「……………つ♡……………あなたたちいい♡……………ど、どうしたのお♡……………つ♡……………あつ♡……………つん♡……………つ♡」

でもユーリ君は私のおまんこにペニスに出し入れするのを止めてくれない。ちゃんと応答をしないとグレッグとロイに不審に思われてしまう。私はすつごく気持ちよくなってる声を必死に我慢しながら、部屋の外にいる彼らと会話をすることにした

「君を夕食に呼びに来たんだよ。ミズハは目を離すとすぐに変なことをするからね。それとついでにミズハが僕達との約束を守っているかを確かめに来たんだ。まさかミズ

ユーリ君とのエッチが二人にバレてしまいうんじやないかってすごく怖いのに、私の体は何故か最高に興奮をしまつていた。私は今、いけない遊びをユーリ君に教えられているのが分かる。そしてそれが最低なことだとも。でも、もう止められなかった

「ミズハ。大丈夫かい？部屋に入るよ？」

「…………へ、部屋に入っちゃ♡…………あつ♡…………あつ♡…………らめえええ♡…………つ♡…………つ♡…………お、乙女のお♡…………つ♡…………プライベートよお…………♡…………おっ♡…………おっ♡…………♡…………♡…………」

私の様子を心配したグレッグとロイが私の部屋に入ろうとしてくるが、私はそれを食い止める言い訳を必死に考える。部屋の中で全裸になつて、ベッドの上でユーリ君と腰をふつっている私の姿を二人に見られてはいけない。それだけは分かっているから

「分かったよミズハ。体調は平気なのかい？」

「…………いまあ♡…………きもちよく♡…………♡…………ねてたところお♡…………らからあ♡…………つ

♡……そつとお♡……して♡……っ♡……おいてえ♡……っ♡……っ♡……あつ♡
……あつ♡……っ♡」

ドアのすぐ向こう側にいるグレッグとロイにバレないようにベッドの上でユーリ君のチンポをおまんこに出し入れされるのは、最高に爽快で気持ちよかった。いけないセックスを覚えてしまった私の心が、どろどろに汚れていくのが分かる

でも、私はとろとろの声を隠せないまま何とか部屋の外にいるグレッグとロイとの会話を続けていく。だって、私のおまんこにバックの体位で後ろからユーリ君のチンポをヌポヌポと出し入れされながらそれを隠して二人と会話をするのが、すっごく興奮したんだもん

「夕食には来れそうかい?」

「……あとお♡……ちよつとでえ♡……っ♡……イクからあ♡……っ♡……っ♡……
……二人はあ♡……っ♡……っ♡……そこで♡……待つててえ♡……っ♡……っ♡……っ♡」

したときみたいにぎゅうつと伸びて、グワングワンと揺れて、私の全身にとろけるような甘いふわふわとしたオーガズムの波動が駆け巡る。最高だった

(……私♡……二人の前で♡……イカされちゃった♡)

私の心に情けなさや恥ずかしさと、部屋の外にいる二人への裏切りの罪悪感がうずま。でも、そのことが私の心を最高に興奮させた。グレッグとロイの存在が、今の私にとってはユーリ君とのセックスを盛り上げてくれるただの引き立て役に変わっていたのだ。私、最低だ

(……私の心……ユーリ君にダメにされちゃったあ……ごめんねえ……グレッグ……ロイ……)

「ミズハは将来僕のお嫁さんになるんだから、ちゃんと貞操は守るんだよ」

「いいやロイ。ミズハは俺の嫁になるんだ」

とつても♡……きもちいいのお♡……っ♡」

私は自分の体がユーリ君に調教をされ、心も無理やりエッチに改造をされているのが分かってしまう。でもそれが分かっているのに、私はそのまま何も抵抗ができなかった。だって、すごく気持ちよかったから

事前にユーリ君には避妊の魔法をかけてもらっていて、安心して中出しを受け入れることが出来たのも大きい。私はただ、目の前にある安全だという罫を張り巡らされた肉の欲望を選択し、貪り、墮とされてしまったただけだ

正直、ここからのことはあまり覚えていない。私の意識がユーリ君の精液によって、気持ちよくどろどろに溶かされてしまったからだ

……。

……。

…。

…。

…。

…。

…。

…。

…。

(——えっ!?)

気がつくど私はポーツとした頭で、部屋のベッドに一人寝ていた。辺りはうつすらと

明るくなり始めており、もうすぐ朝になるところだった。なんだかとてもない夢を見ていたような気がするけど、きつと気のせいだろう

私の全身には甘くてとろりとした心地いい余韻が残り続けている。私の股間とおまんこにもムズムズとした感覚が残っていて、なんだかアソコの穴が広がり続けているみたい。そしてベッドの上に仰向けで寝ている私の体は、全裸のままだ。……あれ?……夢……じゃ……ない……?……

「夢、だよね……?」

ふと、私の頭に今まで夢だと思っていた自分の信じられないくらいにいやらしい痴態が思い浮かぶ。あまりの突拍子のない出来事に、私の頭が混乱をし始めた

(……あれえ?……夢だと思ってたけど……もしかして……)

私はひどく焦りながら、確認のためにはしたなくも自分の右手でアソコを触ってみる。すると私の右手には愛液ではない、ヌトリとした別の液体がくっついた

そのヌルリとした液体の正体をドキドキとしながら確認をすると、精液だった。私のおまんこは昨日あれだけよがり乱れ、悶絶をしながら楽しんで中出しによつて、ユーリ君の精液でどろどろに濡れていた。……あれは夢じゃなかった

私が寝ているベッドのシーツを見渡すと、私の破瓜の証であろう赤い跡と、大量の愛液と精液が混じり合った淫液がカピカピに乾いたいやらしいシミがところどころに点在をしている

その事実を目の当たりにした私の先程まで夢心地だった甘い意識が一瞬で消えると、私の心には大変なことをしてしまったという罪悪感がじわりじわりと生まれ出てくる。時間が経てば経つほどに私の心はより冷静になり、自分のした行為に対してさらに心が現実感を帯びてしまう

そして私のとろけた意識からモヤが消え去り私の頭にクリアな思考が戻りだすと、昨夜の記憶が鮮明に蘇ってくる。全裸のままベッドに座る私の意識の片隅に、あれほど私に釘を差してくれていたグレッグとロイの顔が浮かんでは消える

私の体に覆いかぶさるユーリ君の熱い肉体の重さと、昨夜の甘くとろけるような肉欲のセックスの感触を濃密に思い返した私は、今まで自分がこの部屋で何をしてきたのかを完全に理解した

「……………私っ♡……………もしかしてっ♡……………ヤッチやいましたあ!?!」

わらひい…………♡やつらいまひらあ…………♡

ミズハ視点

ユーリ君に処女を捧げた日から、私はユーリ君と毎日肉体関係を持つようになっていた。昼間はダンジョン探索をしながら、夜はグレッグとロイに隠れてユーリ君とこっそりとセックスをする。この宿屋に泊まるようになってから、そういう日々が続いていた

「ミズハ。なんだか顔が赤いけど体調の方は大丈夫なの？ミズハは将来僕のお嫁さんになるんだから、体を大切にしてくれね」

「そうだとミズハ。体調は平気なのか？それとロイ。ミズハは俺の嫁だからな」

「え、ええ…………二人とも。大丈夫よ」

(どうしよう♡……ユーリ君のせーし♡……中から垂れてきちゃってる♡)

今日の朝食は焼き鮭にネギのお味噌汁に海苔と卵焼きという最高の組み合わせのはずなのに、どうにも集中ができない。昨日のユーリ君とのセックスを思い出すと体がうずいて仕方がないからだ。私はいつの間にか、一日中ユーリ君とのセックスのことしか考えられなくなっていた。でも止められなかった。それほど、ユーリ君とのセックスは魔性だったのだ

(昨日のユーリ君とのエッチ♡……気持ちよかったなあ♡昨日は立ちバックでおまんこの奥の奥までを押しつぶされながら♡意識がグチャグチャになるまでチンポを体になじ込まれちゃった♡)

私がそんなことを考えながらボーっとしてみると、私の火照った顔を見て風邪と勘違いをしたグレッグとロイが私の体調に配慮をしてくれて、今日一日を宿屋でゆっくりと休憩をする日にしてくれる

(私、もう処女じゃなくなっちゃったんだ……)

宿屋の部屋で一人ベッドに寝転びながら、自分の日常の変化を思い返す。あつという間だった。私って一生エッチができないと思ってたけど、毎日、ユーリ君とエッチをすることが普通になっちゃった

「ミズハ。ちゃんと寝ているのか？」

私がそんなことを考えながら部屋でのんびりしていると、私の体調を心配してくれたグレッグとロイがお見舞いに来てくれる。そこでふと思う。このままユーリ君との関係を続けていたら、二人とのこの関係が無くなっちゃう。そのことを想像したら、すごく怖くなった

私は目の前の気持ちよさに囚われて大切なものが見えなくなっていた。私はそれに気づかされてしまう。グレッグとロイとの関係が無くなっちゃうのは絶対に嫌だ。真剣にそう考えた私は、ユーリ君との関係を一度見詰め直すことにした

(……私、間違ってた。ユーリ君との関係はきちんと終わりにしよう。私にとって本当

に大切なのは、グレッグとロイだ！)

変な回り道をしてしまったけど、私にとってグレッグとロイが大切だと心から理解した。私の軽率な行動を二人は許してくれないかもしれないけど、それでも私は二人を大切にしたい。二人と一緒にこの異世界生活を送りたい。そう強く実感をした

私にとって、本当に大切なものが見つかった瞬間だった

(私、もう！誘惑なんか絶対に負けないわ！グレッグ！ロイ！見ててね！私、頑張るか
ら！)

ユーリ君にきちんと話をして今までの関係を清算しよう。そう思い立った私は、彼の部屋をおとずれることにする

……。

……。

……。

……。

……。

……。

クチュ♡クチュ♡

「わらひい……♡……また♡……やつらつらあ……♡」

気がつくとは私は愛液でおまんこをベチヨベチヨに濡らすと、全裸になりユーリ君に手マンをされながら彼の部屋のベッドに仰向けで寝ていた。はしたなく股を開いたままであるが、体が気持ちよすぎてうまく力が入らない。ユーリ君って何でこんなにエッチが上手いの？

「……ユーリ君♡……らめらよお♡……っ♡……っ♡」

ダメだった。誘惑に勝てなかった。だつて気持ちよすぎる。ユーリ君にキスをされて、手マンをされると頭がトロトロになっちゃって、そのままユーリ君のペニスを体内にどうしても受け入れたくなってしまう

にゆうううん♡

「……っ♡……っ♡……けつきよくう♡……っ♡……ユーリ君とお♡……またエッチしちゃったあ♡……んっ♡……っ♡……あはあ♡……っ♡……ユーリ君のチンポお♡……やっぱり♡……すっごい♡……っ♡」

私はグレッグとロイのやさしい表情を思い返しながらベッドの上でM字に股を開き、いつものようにユーリ君と楽しく腰をふっていた。エッチを断ろうとしていたのに、ユーリ君にはいつも気がつけば我慢ができないくらいに私の体を気持ちよくさせてしまう

今日もユーリ君の大きなチンポにむしやぶりつくようにフェラをした後に、今日だけという言い訳をしながらまた、私はユーリ君とエッチをしてしまった

とっぴん♡とっぴん♡

(……グレッグう♡……ロイい♡……ごめん♡……やっぱり♡……これっ♡……っ♡……きもちいい♡)

今日もユーリ君の精液が私のお腹の奥に注がれる。私はこの瞬間がとても大好きで、私のおまんこの中に生温かくてネットネットと引っかかるユーリ君の気持ちいい精液が出されると、あまりの心地よさにどうしても私の顔がニヤけてしまう。今までの人生で最高の瞬間だった

私は甘くとろける意識で今日もユーリ君との中出しセックスを楽しんでいる。私の体がどんどんとユーリ君とのセックスに依存しているのが分かる。でも、抜け出せなかつた

私は必死に言い訳をする、ここでユーリ君の誘いに乗ってしまおうと、グレッグとロイとの関係が完全に終わってしまう。それだけは嫌だったから。でも必死に耐えようとする私のおまんこの奥を、ユーリ君のチンポが意地悪をしてトントンとやさしく叩く

すると私の子宮からは今まで味わったことのない、こんな気持ちよさ知らないくらいにとろとろでふわふわな快感がゾワゾワつと爆発をしたようにぐうううんと広がっていく。私の視界は一瞬で、甘く歪んで溶けて消えた

「どつちかと付き合ってるの?」

「……ううん♡……っ♡……付き合つてない♡……あああああ——あ、っ♡——あ、っ♡——あ、っ♡」

私のおまんこの奥をとんとんリズムよくチンポの先でいじめながら、ユーリ君が私への誘惑を続ける。意識と体が桃色にとろけて混ざり霞んでしまうような気持ちよさの中で、私は懸命に耐え続けていた

「……はは♡……わらひい♡……っ♡……すっ♡……しあわせそうな顔してるう♡
……っ♡……っ♡」

ユーリ君のペニスを股間に突きこまれながら正常位に寝転んで仰向けのままベッドから私が見上げていた彼の部屋の天井が突然、大きな鏡に変わる。その天井の鏡に映ったはしたなくも大股を開いてユーリ君のチンポをヌポヌポとおまんこに受け入れ続けている私の顔は、幸せそうにとろけきってしまった

私の幸せはここにあった。ユーリ君とセックスをしている私の姿を鏡で確認した瞬間に、そんな言葉が頭の中に浮かぶ。ユーリ君のチンポを股間に啜えている私の全身は、幸福の絶頂だった

(ミズハ！しっかりするのよ！誘惑に負けないで！)

でも私は、自分の心に懸命にそう言い聞かせる。グレッグとロイのために、私はユーリ君のチンポなんかには負けない！絶対に耐えきってみせる！……私はとろとろに白く

溶ける意識の中で、再び心に誓った

「……わらひがあ♡……ひんぼなんかにい♡……まけるわけにやあい♡……っ♡……っ♡……っ♡……っ♡」

私にとって一番大切なのはグレッグとロイとの関係。今日の朝、そう学んだ。だから私は耐えるんだ。私はグレッグとロイの顔を思い浮かべながら、ユーリ君からの甘い誘惑に耐え続ける

「……はっ♡……はっ♡……はっ♡……はっ♡……っ♡……っ♡……っ♡……っ♡」

そして長くて短いようなどっぷりとした快楽に体を浸され続ける時間が過ぎ去った後、そこには無事に、心の誘惑に耐えきった私の姿があった

……と♡……と♡……♡

「……おわったっ……のおっ？」

甘くとろけて霞む意識の中で、私は苦しみに耐えきつたことをグレッグとロイに報告をする。私は生まれてから今まで感じたことのないくらい、多幸感と達成感と充実感がごちやませになった涙が溢れ出てくるような気持ちを味わっていた。すごく、爽快な気分だった

(……グレッグ。……ロイ。……私♡……やったよ♡)

この日から、私の理想の異世界生活が始まる。私の心は、それを確信していた

……。

……。

……。

……。

私はグレッグとロイという誘惑に耐えきることに成功し、無事にユーリ君の女になることができた。私のお腹のへその下にピンク色に光輝くユーリ君の淫紋を刻まれた私は、激しすぎる快樂の濁流が渦巻く淫紋セックスに夢中になって腰をふる。最高に爽やかな瞬間だった

(……グレッグ。……ロイ。……ごめんね♡……わたしのおまんこ♡……ユーリ君専用の♡……おちんぼケースにされちやった♡……えへへ♡)

私のおまんこにユーリ君のチンポが出入りする度に、夢のような快樂に染まった時間が過ぎていく、私はユーリ君の女になってよかった。心の底からそう思う。私の全身からは、気持ちいいという感覚以外が消えてしまっていた。私は自分の体が女なんだという現実を、白い快感と強烈な多幸感によってユーリ君に教えてもらった

「らめ♡らめ♡らめえええええ♡……わたしのおまんこ♡ごりごり♡……らめえええええ♡——っ♡——っ♡」

に変わるまでにした全てのセックスが記録をされていた

その映像記録球に残された自分の痴態を見て興奮をってしまった私は、もう一度そのときの快感を味わいたくなっておまんこをベチヨベチヨに濡らしてしまうと、すぐにユーリ君の部屋に駆けつけて彼のハーレムメンバーと一緒にメチャクチャにセックスをしまくった。私の人生で最高の宴だった

私の理想の異世界性交が始まっていた

びゆるるるる♡びゆるる♡

(……グレッグう……ロイい……わらひい♡……やっらいまひらあ♡)

グレッグとロイをお見送り♡

「ミズハをよろしく頼む。将来、俺の嫁になる女だからな」

「違う。僕だね。ユーリ君。ミズハをよろしく頼む」

俺の淫紋を体に刻まれたミズハはそのまま俺の宿屋で働くことになった。彼女の意思を尊重することにしたグレッグ君とロイ君はダンジョンへの予定滞在期間を過ぎたとのことで、王都へと帰還することになった。今の俺は帰りの準備を整えた二人と、宿屋のカウンター越しに会話をしている

（だって。どうするの？）

ちゅば♡ちゅば♡

(わらひは♡ユーリ君の♡おちんぼけーすよ♡)

俺は小声で、俺の足元にしゃがみ込むミズハに話しかける。俺がグレッグ君とロイ君と会話をしている宿屋のカウンターの内側では、ミズハが二人に隠れてこっそりと俺のチンポを舐めてくれていた

ここ数日の間ですっかり俺に体を調教されきったミズハは、妖艶な笑みを浮かべたまま無言で俺のチンポをフェラし続けている。三十年間処女だったという彼女は、この宿屋に来てから性欲を爆発させてしまったようだ

「違う俺だー！」

「違う僕だねー！」

と
ぴんぴん♡

「……………♡……………♡」

誰がミズハを嫁にするかと口論をしている男たちの目の前で、俺はミズハに気持ちよく口内射精をする。俺とセックスをするようになってから大好きになった俺の精液を口の中に注がれたミズハは、グレッグ君とロイ君に隠れながら美味しそうにそれを飲み込んでいた

ふり♡ふり♡

さらにはカウンターの下に隠れているミズハが四つん這いになりお尻をふると、俺のチンポをベチョベチョに愛液を滴らせる彼女のおまんこに入れて欲しいとおねだりを始める。ミズハのおまんこは陰唇や陰毛周りまでが、俺のイチモツを求めて興奮しとろとろに濡れそぼっていた。ミズハの股間から、ムワリとした妖しい空気が漂っている

「これは王都に帰ってから、どちらがミズハの夫にふさわしいかを徹底的に話し合わなければいけないみたいだな」

「そのようですね。誰がミズハの夫にふさわしいのか、はつきりさせましょう」

にゆううううん♡

「——っ♡——っ♡——っ♡——っ♡——っ♡——っ♡——っ♡——っ♡——っ♡」

俺はミズハについて語り合う二人の目の前で彼女のヌルヌルになった膣肉に股間を押し付けながら、堂々とミズハのおまんこにペニスを挿入していく。ミズハはカウntaxの下で声を漏らさないように必死に我慢をしながら心地よさそうに体をよじらせると、俺のチンポをおまんこできゆうきゆうと楽しむように締め付けていた

そのまま俺とミズハは、グレッグ君とロイ君にバレないようにこっそりとしたセックスを続けていく

ぬぼ♡ぬぼ♡

「しかし、ミズハと離れ離れになるのは寂しいな」

よさそうに体を震わせつつ腰をはしたなくもへこへこと痙攣をさせて、そのままどろりとした快樂の世界へと意識を旅立たせていった

ミズハは身も心も、俺のチンポによって淫乱な女に生まれ変わったのだ

「ところでミズハはどうしてる？」

「あんたたち！ゼーんぶ！聞いてたわよ！私がないからって、ケンカしないでよね！」

「げっ！カウンターの裏に隠れてたのかよ！ミズハ。それはないよ！」

俺とのセックスを終えて満足をしたミズハがカウンターの下から登場をすると、グレッグ君とロイ君の二人に説教を始める。これがいつもの三人の光景なんだろうな

俺の目の前ではケンカをしていたことをミズハに咎められたグレッグ君とロイ君がシユンと落ち込んでいる。しかし二人は知らない。カウンターに身を乗り出すようにして話をしているミズハの下半身が実はすっ裸で、今もミズハはおまんこの奥から俺の

精液をポタポタと垂れ落としたまま君たちと会話をしているということ

「……あつ♡……あなたたちい♡……王都に戻ってもお♡……け、けんかしちゃ♡……
らめつ♡……らからねえ♡……っ♡……っ♡……」

カウンターの裏側でグレグ君とロイ君にバレないようにしつつ最近開発を始めた
ミズハのアナルを指でほじくってあげると、彼女は甘くどろけたような声を出す。う
ん。順調に開発が進んでいるようだ

「では、そろそろ出発するか」

「ミズハ。それじゃあ元気でね」

「二人とも。気をつけて帰るのよ！——ひゃあつ♡——っ♡——っ♡——」

びいびいびいびいびい♡

ビクン♡ビクン♡

「……あっ♡」

……じよわあああああああ♡

……。

……。

……。

こうして俺のハーレムパーティーに、ミズハが新しい仲間として加わったのである

……っ♡……っ♡……らめええええ♡……あゝっ♡……あゝっ♡……あゝっ♡……
 イ、グうううううう♡♡♡……っ♡……っ♡……っ♡……っ♡……っ♡……
 ……っ♡……っ♡……っ♡……んほおおおおおおおお♡——っ♡——っ♡——っ♡——っ♡——
 っ♡——っ♡——」

ガク♡ガク♡ガク♡

ついに映像記録球の中の女性が落ちてしまう。映像の中で俺とロイの名前が聞こえたような気がするが気のせいだろう。ミズハは絶対に俺たちを裏切らないからな。しかし、たつぷりとおまんこを調教されている黒髪の女性の見た目がミズハに似ているだけあって、素晴らしく抜ける映像記録球である。これはリピート確定だ

「……○○グう♡……△いい♡……っ♡……みてるう♡……っ♡……わらひのおまんこお♡……○○くんのせーしで♡……っ♡……ねとねとにされちやつらあ♡……っ♡……っ♡……○○くんチンポでおまんこお♡……ズポズポされるの♡……すっごく♡……きもひいいよおおおおお♡……っ♡……いまからあ♡……っ♡○○くんに♡イカされるところ♡……っ♡……よく♡……みててねえ♡……っ♡……あゝっ♡……」

しかし、この女性の痴態を見ていると何故かやたらとミズハのことを思い出す。ミズハは気が強そうだがセックスをするときはちよこんとベッドに寝転んで、恥ずかしそうに縮こまるんだろうな。そんなことを考える

「……いえーい♡……グレ○○う♡……口○い♡……っ♡……見てるう？……っ♡……
 わらひ♡……○○君に♡……っ♡……っ♡……淫紋をきざまれちやましたあ♡……も
 う一生消えません♡……これから○○君のせーえきで♡……わらひの淫紋をお♡
 ……っ♡……っ♡……完成させてもらいまあす♡……っ♡……映像記録球にそれを残
 すからあ♡……っ♡……ふたりともお♡……あとで見届けてねえ♡……っ♡……っ♡
 ♡♡……っ♡……っ♡……っ♡」

どうやらミズハに似た黒髪の女性には、彼女のことを思っている思い人がいるらしい。ちようどミズハと俺とロイとの関係と同じだな。ミズハだったら絶対にしない裏切りを映像記録球の女性はしていた。これは最高に興奮ものだ

ミズハだったら彼女のエッチをしている姿を映像記録球に残そうものなら「乙女に恥ずかしいことさせないの！」と言って怒るんだろうな。でもいつか、俺もミズハとこん

なふうにセックスをする関係になりたいものだ

「……んほおおおおおおお……いんもんせつくしゅ……すごしゅぎいいいい♡
 — あっ♡ — あっ♡ — あああああああ♡……っ♡……っ♡……なにこれっ♡
 なにこれっ♡なにこれえええええ♡……っ♡……っ♡……っ♡……っ♡……っ♡
 いいいいいいいいいい♡……っ♡……っ♡……っ♡……っ♡……っ♡……っ♡」

どうやら映像記録球の映像がクライマックスを迎えるようだ。ミズハに似た黒髪の女性には淫紋を刻まれ、淫らに堕ちきつていた。もう、あの淫紋は一生消えないんだろうな。つまりこれは本物の痴態を記録した危険な掘り出し物だということだ。ベッケンバウム商會に感謝しなければ

「らめ♡らめ♡らめえええええ♡……わたしのおまんこ♡ごりごり♡……らめえええええ♡——っ♡——っ♡」

映像記録球の中の女性がミズハに似た爆乳をぶるんぶるんと震わせて悶絶を繰り返す。心なしに彼女は声もミズハに似ていることが、俺の興奮をさらに高めてくれてい

びゆるる♡

俺が右手で果てたのと同時に、映像記録球の中の女性に俺とロイの名前が呼ばれたような気がした。でもきつと気のせいだろう。ミズハがこんなことをするはずがない。俺は念の為に映像記録球を見返したがしつかりとした魔法的な処理がされており、映像の中で黒髪の女性に呼びかけられている二人の名前は聞き取ることができなかった

やはり俺の気のせいだったらしい。俺とロイがどれだけアタックしてもミズハはなびかなかった。彼女はまだそういうことに興味がないとも言っていた。それなのに俺達と別れたばかりの彼女が、俺たち以外の男と簡単にセックスをするわけがなかった

このミズハに似た女性の痴態が素晴らしい映像記録球を気に入った俺はベツケンバウム商會に頼むと、この女性の痴態を記録した別の映像記録球を入手でき次第、定期的に入入してもらふことにする。後になって聞いたのだが、どうやらロイも俺と同じことをベツケンバウム商會に頼んだようだ

今頃ミズハは、ダンジョン前の宿屋でニホン食を食べているのかな。そんなことを考えながら俺はもう一度、ミズハに似た爆乳を持つ黒髪の女性の痴態を映像記録球で見返すことにした

宿屋への来訪者

「みかじめ料を受け取りに来たのじゃ！」

今日も誰もお客のいない宿屋でのんびりと受付をしていると、突然の訪問者が現れる。ちんまいとした女の子だ。腰まで伸ばした赤い髪に赤い瞳、身長140cmくらいの体にDカップの胸をプルンと揺らす、真っ赤なドレスを着たロリ娘がドヤ顔でふんぞり返りながら俺の宿屋を訪ねてきた

「お嬢ちゃん。おままごとは向こうでやろうね〜」

間が悪いことにエルフ族のターニヤが少女への応対を始めてしまう。しかもナチュナルな見下し付きだ。ターニヤは後でおしおき決定だな。俺のステータス鑑定には、のじゃロリ娘のステータスは以下のように映っていた

ステータス

パミラ・エンシエント（人化中）

ドラゴン族 レベル3854

ちなみに人間の一般的なレベルは15程であり、レベル100程で一流と言われるようになる。どうやら俺のダンジョンがある近辺を縄張りにするドラゴンが、みかじめ料を求めて俺の宿屋をおとずれてきたようだった

「わたしはお嬢ちゃんではないっ！無礼な小娘じゃな！」

「小娘とは何よ！メスガキ！」

「なんじゃとお！メスガキは貴様ではないか！ぐぬぬっ！」

あつという間にターニヤとロリ娘がケンカを始めてしまう。ここはさつさとターニヤを退場させてしまい、のじゃロリ娘との話を穏便に進めることにしよう。俺はニコニコと微笑みながらターニヤを別室に呼び出す。ついでだ。ターニヤにはきちんとお

との会話を始めた

「ようこそおいで下さいました。こちらへどうぞ」

「うむ！お主は礼儀をよく分かっておるようじゃな！くるしゅうないぞー！」

ところで、みかじめ料って何を渡せばいいんだ？異世界のマナーなんて知らん。とりあえずのじやロリ娘にはこういうときの定番品を渡してみるか

そう考えた俺は人化したドラゴンであるのじやロリ娘をスイートルームに案内すると、みかじめ料と称したお子様ランチを彼女にプレゼントすることにした

「んほおおおおお！うみゃいのじやあああああ！はむっ！はむっ！」

パミラちゃんはスイートルームにてみかじめ料として提供されたお子様ランチを大変お気に召したようで、赤い瞳をキラキラと輝かせながらエビフライにハンバーグとチキンライスに必死でパクついている

パミラちゃんにはお子様ランチのお供としてメロンソーダも一緒に出してみる。すると始めはしゅわしゅわと泡立つ謎の飲み物に躊躇していた彼女であるが、恐る恐ると一口飲んだ後はメロンソーダに夢中になっていた

「むっほおおおお！ちよこれーとばふえとやらも最高なのじゃあああ！ぱくっ！ぱくっ！」

食後のデザートとして提供したチョコレートパフェも大成功だったようで、パミラちゃんは大満足と言った様子であつという間にチョコレートパフェを平らげてしまう。彼女はとて満足顔だ

「うむ！これから定期的にかじめ料を受け取りに来るからよろしく頼むのじゃ！この宿屋を破壊しようとする者はわらわが塵と化し、この世から消滅させてやるからの！」

パミラちゃん懐柔作戦は成功したようで、どうやら彼女とは友好的な関係を築くことが出来たようだ。しかしお腹がいっぱいになってもパミラちゃんは自分の巣に帰ろう

とせずにスイートルームに居座り、舌なめずりをしながら俺に話しかけてくる。今度は何事だ？

「ふむ。お腹がいっぱいになったらちと暴れなくなつたのじゃ。お主、わらわと勝負をせい。どんな勝負をするかは、お主に選ばせてやるからの！」

どうやらパミラちゃんは腹ごなしに俺と何かしらの勝負をして暴れたいようだ。しかも、どうやら断れそうにない雰囲気である。さて、どんな勝負で彼女と戦えばいいのやら……

パミラちゃんと……♡

「ほ、ほんとうにつ♡……人族の間ではっ♡……こういう勝負があるのかのう？……つ♡……っ♡」

「ええ。本当ですよ。パミラ様がイツたら負けということでもよろしいですか？」

「イクというのがよくわからんのじゃがっ♡……っ♡……防御力と羞恥心を競い合う勝負だというのは分かったっ♡……っ♡……受けて立つのじゃあっ♡……っ♡……っ♡」

クチュ♡クチュ♡

今の俺はスイートルームのベッドに全裸で仰向けに寝転ぶ人化したドラゴン族のパミラちゃんのおまんこに人差し指と中指をねじ込み、彼女の膣肉をクチュクチュとこねくり回していた。パミラちゃんのおまんこはすでに熱くとろとろに潤い、俺の指をス

吹きをしながら絶頂アクメを迎えると、アへ顔で腰を強くのけぞらせてブリッジの体勢に達した状態で、口から舌を出したままオーガズムの余韻に腰を情けなくヘコヘコと動かし続けている。あっけなく絶頂に至った彼女のおまんこが、手マンを続ける俺の指にヒクヒクと収縮をしながらトロトロ口になって吸い付いてきていた

「……ひ、ひとぞくのからだがあ♡……こんなにもよわいにやんてっ♡」

俺の手マンに完全敗北をしてしまったパミラちゃんが、体をピクピクと痙攣をさせよだれをだらりと口から垂らした状態でベッドに呆けたまま大股を開いて寝転がっている。これはこのチャンスを逃がすわけにはいかないな。俺は初めての絶頂を体験して隙だらけのパミラちゃんの股の間に体を滑り込ませると、彼女の潤いきったおまんこに俺の勃起したペニスをあてがうことにした

——ピト♡

スイートルームのベッドのシーツは、パミラちゃんのおまんこから大量に潮吹きした淫液ですでにベチョベチョになっている。彼女の体もすでに準備万端だ。なし崩しに

このままセックスにまで持ち込んで、パミラちゃんの心も体もどろどろに墮としてしまおう

「ハ、ハ、ハ……あらあ……こうびまでをゆるしたおぼえはないのじゃあつ……」

さすがに本番行為に関しては知識があるらしく、パミラちゃんはベッドに寝転び股を開いたまま潤んだ瞳で俺を見上げて抗議をしてくるがもう関係ない。俺が勝負に勝ったからな。このまま押し切ってしまえばいい

「でもパミラちゃん。俺に負けたよね？」

「言葉遣いも変わっておるう……そうなのじゃがあ……わらわはさいきよーのどらごんじやったからのう……ドラゴン族のみんなから恐れられて……こういう経験はないのじゃ……」

俺のペニスをおまんこの入り口にピトリとあてがわれた状態で、パミラちゃんが洩っている。彼女の話の聞いてみると、パミラちゃんはポツチを極めすぎていて未だに処女

だということが分かった。これは彼女の処女もこのまま美味しく頂いてしまうことにしよう。無知系のじゃロリ娘の処女を散らせるとは、最高だぜ

「じゃあ俺と今日するのが、パミラちゃんにとっての初めての交尾ってわけだね」

「そうなのじゃがあ……」

「パミラちゃんは俺に負けたんだから拒否権はないよ。それじゃあ、挿れるね」

「ぐぬぬう……でも……わらわにもこころの準備というものが……」

くにゆうううううん♡

「——っ♡——っ♡……あつ♡……待つのだじゃっ♡……んっ♡……っ♡……あつ♡……
くうう♡……っ♡……っ♡……っ♡……」

無事、パミラちゃんの処女貫通式が俺のチンポによって行われる。これでパミラちゃ

セックスを続けながら、言葉でも彼女の心への調教を始めていくことにする

「でも、パミラちゃんは負けたら何でも言うこと聞くと言ったよね？」

「で、でもお………」

びゆるるるるる♡

さらに抵抗を見せるパミラちゃんの心を折るために問答無用で中出しをキメる。快楽成分と発情成分がたっぷりと含まれた俺の精液を子宮にたっぷりと注がれた彼女の瞳がとろりと暗く濁り、さらなる屈服を俺に見せる。もうパミラちゃんの心は風前の灯だった

「た、たねつけで♡……服従させられりゅうううう……♡……♡……♡……♡……あ
あああああ——♡——♡——♡——♡——」

ガク♡ガク♡ガク♡

パミラちゃんの体が、あつという間に中出しアクメをキメてしまう。人の姿になった彼女のおまんこは高レベルなドラゴンの体と違って敏感なようだ。しかし、きゆうきゆうと俺のチンポに吸い付くように痙攣を続ける彼女のクソ雑魚おまんこに構うことなくピストン運動を続けながら、俺はパミラちゃんの膣肉に俺の亀頭をこすりつけるようにして彼女の体内へのマーキングを行い、そのまま言葉でパミラちゃんを屈服させてしまう

ズチユ♡ズチユ♡

「パミラちゃんは俺に負けたんだから、今日から俺の女だよ。いいね?」

「——はひいいい♡——わらわはあ♡——今日からあ♡——だんなさまのお♡——つがいどらごんれす♡」

びゆるるるる♡

体から分泌された愛液でドロドロのグチュグチュにいやらしく潤ってしまい、俺のチンポを彼女の膣の穴に突き込む度にパミラちゃんの膣の中からは、本気セックス時特有の上品な音がずっと鳴り響いていた

びゆるるるる♡

「……ら、らめえ♡……っ♡……もう♡……おなかいっぱいらのじゃあ♡……っ♡……っ♡……おっ♡……っ♡……おっ♡……おっ♡……おっ♡……ほおおおおおおお♡」

ガク♡ガク♡ガク♡

——びゅっ♡——びゅっ♡

俺に中出しをされながら、パミラちゃんが潮吹きアクメをキメる。すると彼女はアヘ顔で口から舌をはみ出しながら気持ちよさそうにトク声をあげ、そのまままんこブリッジをキメるように腰を強くのけぞらせると股間をへこへこと情けなく上下に振り始めた。俺はそんな深いオーガズム特有の収縮運動を続ける彼女の膣の中に、さらに大

「どうも。娘がお世話になったようで」

張り付いた笑顔でその女性が俺に声をかけてくる。部屋の中に侵入してきた美女は腰まで伸ばした真っ赤な髪に真っ赤な瞳、そして真っ赤なドレス姿にHカップ程の爆乳と、パミラちゃんが大人になったらこう成長するのだろうと簡単に想像ができる見た目をしていた。どうやらパミラちゃんの母親が、みかじめ料を受け取りに向かつてから中々帰ってこない娘の様子を心配して確認しに来たようだ

(そういえばこの近辺を縄張りにしているドラゴンって二匹だけ)

パミラちゃんの母親はHカップ程の大爆乳が零れ落ちそうなドレス姿に笑顔のまま、俺からの返答をじっと待っている。彼女の張り付いた表情が妙に怖い。さて、全裸のままの俺はこの状況をどうやって切り抜けようか

パミラちゃんの母親

「娘がお世話になりましたようで。私はパミラの母親でリンゼイと申します」

スイートルーム内にて今、俺の目の前には貼り付いた笑顔のまま表情を崩さないパミラちゃんの母親であるリンゼイさんが隙のない姿勢で佇んでいる。先程までこの部屋でパミラちゃんとセックスをしていた俺は全裸のままだ。さすがにこの状況では彼女に対して言い訳やごまかしは何も出来ない。さて、どうしよう

とりあえず俺は股間に意識を集中させ、ペニスをフル勃起させてみることにする。寝取りチンポのスキルで、リンゼイさんが体に欲求不満をかなり溜め込んでいることが分かったからだ

「…………ゴクリ♡」

隙のない姿勢を維持したままではあるが、リンゼイさんが息を呑むのが分かった。そしてチラチラと俺の股間に対して視線を送ってくる。これはいけるか？

「まあ。人間はなんて下品な生き物なのでしょう」

リンゼイさんが余裕のある笑みを崩さずに、言葉を使って俺に対し牽制を仕掛けてくる。しかしここで引いてはいけない。これは目の前の誘惑に乗ってはいけないと、リンゼイさんが自分を戒めるために発している言葉だからだ

「私は夫を愛しております。私を好きにできるとは思わないほうがいいですよ」

そして何故か目の前で俺がチンポを勃起させているだけなのに、俺がリンゼイさんとセックスを望んでいる前提で話が進む。彼女の頭の中では順調に、妄想が進んでいるようだ

「そうですか。分かりました。それでは俺は服を着させてもらいます。下品な姿を高貴なあなた様にお見せするわけにはいきませんから」

俺がそう彼女に伝えながらチンポを萎えさせ服を着始めると、少し残念そうな空気が一瞬だけリンゼイさんから流れてきた。彼女の心を少しだけ墮落させることに成功をしたようだ。さて、ここからどうしよう

「パミラちゃんが寝ていますので、別室に移動しましょう」

「ずいぶん娘と親しくなれましたようで」

俺がちやん付けで娘の名前を呼んでいることを、皮肉を込めてリンゼイさんがチクリと指摘してくる。俺は彼女のその言葉を受け流すとそのままリンゼイさんに促し、別室に移動することにした

「うふふ。ドラゴンである私と二人つきりになってよろしいのですか？」

「ええ。俺は紳士なのでみだりに女性に手を出したりしませんから」

「私の娘とはみだらな行為に及んでいたようですが、どの口が言うのでしょうか？」

貴賓室のソファに俺と向かい合って座ったリンゼイさんがバチバチとしたプレッシャーを放ちながら、俺とパミラちゃんとの行為について問い詰めてくる。まあ、大切に育てていた娘が全裸に淫紋を刻まれて男とセックスをしていたら、そうなるだろう

「リンゼイさんも俺としますか？」

俺は薬液創造のスキルでドラゴンが発情するミストを体から発しながらリンゼイさんに問いかける。このまま堕とせてしまえな楽なのだが、そうはいかないだろうな

「私を誘惑しているのですか？高貴な私が、人間と性行為に及ぶとでも？」

俺の言葉を聞いたリンゼイさんから放たれるプレッシャーが更に大きくなる。やはり、いきなりでは彼女とのセックスに持ち込むことが出来ないようだ。しかし俺はそんなリンゼイさんから放たれるその圧に負けることなく再びイチモツを勃起させると、それを見せつけるようにして彼女を挑発していくことにする

「でも、ここなら誰も目もありませんよ？少し俺と遊んでいきませんか。パミラちゃんが気持ちよさそうに俺とセックスをしていたのを見ていましたよね？リンゼイさんのこともイカセまくりですよ」

「……」

リンゼイさんが俺の言葉に少しだけ無言になった。貼り付けた笑顔のまま俺に対しての怒りに耐えていることが伺えるが、徐々に彼女の体が発情をしてくているのも観察できる。リンゼイさんは平静を装っているが、寝取りチンポのスキルによつて彼女の心に欲求不満が募っているのが丸わかりだからだ

「リンゼイさん。実は俺とパミラちゃんとはある勝負をしていたんです。パミラちゃんは俺との勝負に負けた結果、俺とセックスをすることになりました。その勝負をリンゼイさんが引き継いで、俺との決着を付けるというのはどうですか？そうすれば娘さんの名誉も取り戻せますよ？」

「うふふ。ドラゴンである私に貧弱な人間が一对一で勝負を挑むとはいいいでしょう。その勝負、受けることにします。あなたを塵と化し娘に折檻をしなければいけませんからね。それで、勝負の内容とは？」

俺の挑発に対して怒りを溜め込んでいたリンゼイさんが俺との勝負に乗ってくる。やっただ。俺はさらに彼女のことを挑発するために、パミラちゃんと俺がしていた勝負の内容をリンゼイさんに伝えることにした。お互いの体を弄り合い、先にイッたほうが負けという内容だ

「それは私に対する宣戦布告と受け取ってよろしいのでしょうか？」

「おや？逃げるのですか？ドラゴン族は勝負から逃げるのが好きな種族のようですね」

俺から勝負の内容を聞いたリンゼイさんが人化を解きその場でドラゴン化をして暴れそうになるが、俺の言葉に貼り付いた笑顔のまま踏みとどまる。これはいけそうな雰囲気だ

「いいでしょう。あなたの矮小なイチモツをさっさと果てさせ、この宿ごとすべてを消滅させてあげましょう。私を娘と同じと思わないほうが良いですよ。ドラゴン族の淫技を黄泉の世界に旅立つあなたへの手向けとしてあげましょうか」

俺が薬液創造のスキルで作ったミストに体を発情させられ、さらには激しい怒りを溜め込んだことよって変な興奮状態になってしまったリンゼイさんは、普段の彼女なら絶対に受けないであろう俺との勝負に、ついに乗ってしまう。ルールはお互いの裸を弄り合い、先にイッた方が負け。敗者は勝者の命令を何でも聞くという、パミラちゃんと俺がした勝負と同じルールだ

「あつという間に勝負が終わってしまうのでしようけれども、この私の裸体を人間が触れられることを光栄に思いなさい」

リンゼイさんがソファから立ち上がると、貴賓室の中で服を脱ぎ捨て全裸になる。こうして、俺とリンゼイさんのイカセ合い勝負が貴賓室で始まることになった

リンゼイさんと……♡

負けた方が勝った方の言うことを何でも聞くというルールで、俺とリンゼイさんとのイカセ合い勝負が始まった。俺たちはお互いの体を抱き合い、お互いの性を弄り合いながら、相手の体を性的に絶頂させようという試行錯誤を繰り返していく

「んほおおおおおお♡……っ♡……っ♡」

びゅ♡びゅ♡びゅ♡

などということもなくあつという間に、クソ雑魚おまんこの持ち主であつたパミラちゃんのお母さんであるリンゼイさんも俺の手マンによつて潮吹きアクメをキメる。今は何かを割り切つたのか、リンゼイさんは俺の部屋のベッドの上で正常位に寝転び股を開いて、俺と一緒に腰をふつていた

びゆるるるるる♡

「そ、そんなにやあ♡……っ♡……ひとぞくにい♡……たねつけされちやつらあ♡」

リンゼイさんが心地よさそうに腰をへこへこと前後に振りながら、俺の中出しをおまんこで受け止める。パミラちゃんと同じく強い服従の効果を持つ淫紋を俺に刻まれたリンゼイさんは、ドラゴン化ができずに人の体のまま俺のチンポを膣の中に抽送され続けていた

トン♡トン♡

俺はリンゼイさんの子宮口を念入りにチンポの先で突きながら、彼女のポルチオ性感帯を刺激することでリンゼイさんの意識と体をとろとろに溶かしきつてしまうことにする。俺のペニスの先を押し付けるようにして彼女のおまんこの奥の奥を痺れさせるようにやさしく潰し始めた瞬間に、リンゼイさんの膣壁からはどろどろとした本気汁がどぼっという感触で大量に、ねとねとになって溢れ出てきていた

「そいお♡……とんとんらめええええ♡——っ♡——っ♡——っ♡……おっ♡……おっ♡……ほっ♡」

おまんこの奥にある性感帯に変わった子宮を俺のチンポで心地よく突かれ始めた瞬間から、ベッドの上で正常位に股を開いたリンゼイさんがよがり狂うようにして体をねじり乱す。彼女の胸にぶら下がった爆乳が、リンゼイさんが体を乱す度にぶるんぶるんといやらしく揺れていく

俺にチンポでとんとんとリンゼイさんの子宮をやさしくノックしてあげると、きゆうきゆうと彼女の膣壁が強い快楽によって収縮し、俺のペニスをヒクヒクとリズムよく締め付けてくるのが最高に気持ちいい

「らめっ♡らめっ♡らめっ♡らめええええええええ♡……こんにやせつくしゅ♡……しらにやいいいい♡……っ♡……っ♡……っ♡……っ♡」

俺と手を恋人繋ぎになって股を開いたリンゼイさんが、正常位の体勢でおまんこのチンポをネチャネチャとした音で出し入れされながら、体をトロトロにしてよじらせ

たまらずに、俺はリンゼイさんの気持ちよく動く膣肉によってチンポから精液を搾り取られてしまう。正直、前戯ありではなくいきなりセックスの勝負になつていたら危なかったかもしれない

「——あはあ♡——っ♡……っ♡……っ♡……またあ♡……おまんこにせーしきたああああああ♡……っ♡……っ♡……っ♡……」

ベッドの上で高貴な全裸に爆乳をふるふると揺らしながら、股を開いたままのリンゼイさんがうつとりとした表情で自分の体内に注がれた俺の精液を気持ちよさそうに堪能している。俺の薬液創造のスキルによって発情させられまくったところに、快樂物質を大量に含む俺の精液をおまんこに注がれるのは流石にキクのだろう。俺とセックスをしている彼女の表情は隙のなかった張り付いた笑顔から、瞳を快樂に濁したとろとろのアへ顔に変わってしまった

「旦那さんはいいんですか？」

「いいのお♡……あの子が生まれてからあ♡……っ♡……っ♡……っ♡……一回も帰ってきたこ

とがないんだものお♡……っ♡」

ベッドの上で俺と夢中になつて腰をふりながら、リンゼイさんが旦那への愚痴をつぶやく。順調に彼女の心が俺に馴染んできていた。このままどっぷりとした快樂を与えながらセックスでリンゼイさんの心を墮落させて、俺との快樂の世界に墮としてしまおう

「じゃあ、リンゼイさんは今日から俺の女ですね」

「……っ♡……じゃあじゃないわよお♡……んっ♡……くっ♡……っ♡……っ♡」

くちゅ♡くちゅ♡

俺の言葉に洩るリンゼイさんの口をふさぐようにして、俺は彼女の唇に濃密なキスをする。するとおまんこにピストン運動を続ける俺に向かつて股を開いたまま、彼女はむしゃぶりつくようなキスを返してきた。俺とリンゼイさんとお互いに舌をねつとりと絡め合いながら、秘密の浮気セックスを続けていく

「リンゼイさんがいいって言うまで、今日はずっとイカセ続けますね」

「……うふふ♡……勝負には負けてしまったけど♡……つ♡……私の心までは簡単に墮とせると思わないことね♡……つ♡……つ♡……私はある♡……つ♡……あの人を♡……♡……♡……愛しているんだから♡」

ぬほ♡ぬほ♡

俺とのセックスを楽しみながらリンゼイさんが夫への愛を宣言し、人妻の余裕を見せつけるように笑う。さて、ここから彼女の強固だという心をどうやって墮とそうか。俺はその計画を練っていく

……。

……。

な高貴な心から、淫乱なメスドラゴンへと変えていこう

「お尻を叩かれて気持ちよくなつちやういけない子には、もつとおしおきをしなければいけないね」

「やだっ♡やだっ♡やだあ♡——っ♡——もうおしおきはいやあ♡——っ♡——っ♡——
——っ♡」

パアン♡パアン♡

駄々っ子のようにイヤイヤとするリンゼイさんのお尻を容赦なく叩きながら、俺は彼女の膣肉をにゆるんにゆるんとかき分ける感覚をチンポで楽しみつつ、彼女のドロドロになったおまんこにネチャネチャという感触で俺のペニスを突き込み続ける

そして俺はそのままリンゼイさんのおまんこに、さらに精液を気持ちよくだつぷりとするところに注ぎ込んだ

り続けて、俺のチンポが完全に根本まで埋まり込んだ膣肉をきゅうきゅうと締め付けてくる

俺はそんな彼女とのセックスを気にせずに続けながら、俺のチンポを突き込まれるおまんこのヌトヌトになった感触をベッドの上に四つん這いのままで楽しんでるリンゼイさんに言葉をかけた

「このおしおきはどうか。気持ちいい？」

「——うんっ♡——きもちいい♡——っ♡——っ♡——っ♡——っ♡」

「じゃあリンゼイさんは悪い子になって、もつと俺におしおきをしてもらわなくちゃね」

「うん♡——わたしっ♡——わるいこになって♡——ゆーりくんにいっぱい♡——おしおきしてもらおうのお♡——あっ♡——あっ♡——あっ♡——あっ♡——あっ♡」

びゅるるるるるる♡

おへその下に刻まれた俺の淫紋が完成したリンゼイさんが気持ちよさそうにおまんこで俺の精液を飲み込みながら、感慨深そうに何かをつぶやいている。俺はそんな彼女の心を快楽にどっぷりと染めるために、ネットネットに濡れきったリンゼイさんのおまんこに再び、えぐるようなピストン運動を開始した

ぬぼ♡ぬぼ♡

「——あはあ♡——これえ♡——すっ♡いい♡……っ♡……っ♡——」

淫紋が完成したことによつて、体の感度が上がったリンゼイさんが興味深そうにベッドの上で仰向けに股を開いて俺とのセックスに腰をふり始める。彼女は気持ちよさそうに体を震わせながら、俺との淫紋セックスに夢中になっていた

——ドタドタ

しばらくの間、俺とリンゼイさんが濃密なセックスを楽しんだあとになって、さらに俺と彼女がセックスに勤しむ部屋に向かって何者かが駆け込んでくる足音が聞こえて

ベッドの上で正常位になり、俺に向かって股を開いてぬぼぬぼと俺のチンポをおまんこに入れされた状態でリンゼイさんが娘であるパミラちゃんに向かって言い訳を始めるが、流石に無理があるだろう。俺はリンゼイさんのグチュグチュに汚れきった股間へのピストン運動を続けながら、パミラちゃんに声をかけることにした

「パミラちゃん。ママが気持ちよくビクビクツツてイクところ、見てあげようね。そうしたら、次はパミラちゃんのことをまた、イカせてあげるから」

「わかったのじゃー！ママっ！イクところをわらわに見せてほしいのじゃー！」

すっかり俺に心を調教されてしまったパミラちゃんが素直に俺の言葉に従うと、ベッドの上で俺の下になり、服従をするように股を開きながらピストン運動をおまんこで受け入れている自分の母親を楽しそうに観察をする。俺からの教育により、すでにパミラちゃんは性に対しては母親よりも奔放になり、どっぷりと快樂に心が染まってしまっているようだ

「——あつ♡——あつ♡……つ♡……だめよつ♡……パミラちゃん♡……つ♡……つ♡……つ♡……」

のチンポにお掃除フェラをしてくれる。俺とリンゼイさんとパミラちゃんによる母娘3Pセックスは、そのまましばらく続くことになった

グレッグとロイの裏の顔

ロイ視点

「……………♡……………♡」

「あーあ。このオモチャにも飽きちゃったなあ」

僕とグレッグは貴族という身分を利用して、秘密裏に街で堕とした女の子を壊して遊ぶという行為を繰り返し返していた。一般市民が貴族である僕たちと対等なわけがないのに、少し優しくすると平民はこうして簡単に罠に引っかかる

平民に向かって秘密でこっそりと会いたいと伝えると、相手の方から誰にも見つからないよう僕たちに会いに来てくれるから僕たちのアリバイ工作が楽でいい。やはり平民とはバカな生き物だ

「しかし、ミズハに逃げられたのは屈辱だったな」

「そうですね。殿下」

どちらが先に墮とせるかで殿下と勝負をしていたミズハに逃げられたことを思い出す。平民のくせに貴族である僕たちをないがしろにして、場末の宿屋に残ったのはいただけない。最悪の屈辱だった。ミズハを先に墮とした方が、ミズハの処女を無理やり奪う権利を獲得するはずだったのになあ

しかし今回、面白い遊びを思いついたことで僕たちはその嫌な気分を切り替えることにする。ダンジョン内での事故に見せかけ、ミズハをハントして遊ぼうという計画だ。ミズハが残った宿屋の近くにあるダンジョンには立入禁止の場所がある。そこに物見遊山ということでミズハを誘い出し、グレッグと僕でどちらが先に彼女を犯せるかで勝負をするのだ

立入禁止の場所に入ったと注意を受けても、貴族である僕たちに命令できる者がダン

ジョンにいるわけがない。やりたい放題できる

ミズハのことも彼女が事故にあったということにすればいい。貴族である僕たちの言葉に反論ができる者など現地にいないのだから、僕たちは好き放題に偽証ができるのだ

そう考えた僕とグレッグは、このハント遊びを秘密にしている家族には別の場所で狩りをするという嘘を付き、ミズハが働いているダンジョン前の宿屋へと向かうことにする。今回、護衛に連れた騎士たちは、僕たちのおこぼれに預かる者だけだ。僕たちがミズハの肉体を犯し飽きたら、彼らにミズハの体をレイプする権利を譲るという約束をした。だから護衛の騎士たちは、僕とグレッグの家族への偽装工作やアリバイ工作に喜んで協力してくれている。みんなミズハの体を犯して遊びたいのだ。これは、あんなにもエロい肉体を持った彼女の責任だろう

ダンジョンの立ち入り禁止区域についても本当に危険なのは第二区域からで、最初の区域は何もない大広間があるだけらしい。そんなの他人を犯し放題、殺し放題じゃないか。ミズハは僕たちに素晴らしい遊び場所を提供してくれた。そのことには一応、感謝

をしようか

平民のくせにミズハが王都で人気者になっていたことにムカついていたからな。人気者というのは平民がなるものではない。僕たちのような高貴な身分の者だけがなれる特権なのである。そのことを体で彼女に教えてあげなくてはならない

幸いにもミズハは肉体だけは素晴らしいものを持っている。あの爆乳が歪むほどに強く僕の両手で彼女の乳房を揉みしだきながら、ミズハが苦痛に泣き叫ぶ姿を堪能しつつ彼女の体をレイプするのが今から楽しみだ。ミズハのその姿を想像するだけで、ダンジョンへの旅路が楽しいものになる

「ミズハ。久しぶりに会いに来たよ。ミズハは僕の嫁になるのだから、しっかりと体を大切にしなければいけないよ」

「ロイ。ミズハは俺の嫁になるんだからな」

そして僕とグレッグは、いつもの平民にやさしい貴族という虫唾の走るような嘘の仮

面をかぶりつつ、ミズハの心を懐柔する作戦を開始する。こうして二人で女を奪い合うふりをしていれば、大抵の平民は勝手に勝手に勘違いして僕たちになびくのに、ミズハがそうならないのには最高にムカついているが

僕とグレッグにこれだけの屈辱を味あわせてくれた彼女には、その豊満な体を使っつしつかりと謝礼を払ってもらわなくてはいけないな

「ミズハの好きなニホンの食材が恋しくなっちゃつてさ。よかつたらまた一緒に、ダンジョンに潜らないかい？」

「うむ。ミズハのことは俺達が絶対を守るから、また一緒にダンジョンに潜ろう」

こうして僕たちは、ミズハの体をダンジョン内で壊して遊ぶ計画を実行することにした

グレッグちゃんとロイちゃん♡

ロイ視点

……。

……。

……。

「…………あれ？…………ハハハ…」

気がつくと僕は、ダンジョン内に一人で寝ていた。たしかミズハを上手いことダンジョンの立入禁止の場所に誘い出して、僕とグレッグが刃物を見せつけて脅していたところまでは覚えてはいるんだけど、そこからの記憶がない

「…………え？…………僕の声が変だっ！」

独り言としてつぶやいた僕の声がおかしなことに気づく。やたらと声が高いのだ。そして体の感じもいつもと違う。股間のあたりがスースーとして軽いし、胸に何か丸くて重いものがぶら下がっているかのような感覚だ

「僕っ！女の子になってる！」

恐る恐る自分の体を確認してみると、なんと僕は女の子になっている。しかも全裸だ。僕の胸元には立派で大きいDカップくらい乳房がぶら下がっており、僕の下半身からは男の象徴であるペニスが消えてしまっていた

しかし自分の体の状態をちゃんと確かめようとしても、胸元にふくらむおっぱいが邪魔で見にくいな。僕が見下ろす胸元の谷間から見える股間にはペニスがなく、陰毛の生えた恥丘だけが見えている

「とにかくここから逃げ出さなくては！」

色々と思うところはあるが、ダンジョン内で一人なのはまずい。とにかく逃げ出さなければ。僕は助けを求めるために気だるい体を起こし、ダンジョンからの脱出を試みることにした

——ガシッ！

「うわっ！」

しかしダンジョンから抜け出そうと体を起こした瞬間に、僕は大きな衝撃とともに一瞬で何者かに組み伏せられてしまう。何かに僕が襲われていることが、すぐに分かった

反撃をするために僕は地面に押し倒され、仰向けに寝転がされた状態で何とか天井を見上げる。すると僕の体に、醜悪な豚のようなオークがよだれを垂らしながら覆いかぶさっているのが見えた

「おいつ！僕は男だぞっ！」

僕は寒気がするようないやらしい目つきで僕の体を見下ろすオークに向かって必死に叫ぶが、僕の喉から出てくる声は完全に女そのものだった。僕の目の前にいる豚みたいな怪物は、僕の体を性的に見ていることがひと目で分かってしまう

そして威嚇する僕の声なんて初めから存在していないかのように振る舞うオークが下卑た笑いを浮かべながら、地面に組み伏せた僕の左乳房を汚い右手で楽しそうに触ってくる。僕は今、体が女の子になっていることをここではつきりと理解した

ぐにゆううううう♡

「——い、痛いっ!!!」

オークの醜悪な肉体に僕の全身をすっぽりと覆いかぶせられた状態で、僕のやわらかくて少し大きなおっぱいが汚いオークの右手によって力強く握りつぶされていく。すごく痛くて怖かった。女の子の体ってこんなに敏感なのか。そのことを僕は初めて知

る

醜いオークの右手によつて僕の左乳房がモニュモニュと歪められる度に、僕の胸には膨らんだ丸い肉を潰されるという感覚と一緒になって鈍い痛みが伝つてきていた。これはまずい。とにかく、早くこの状況を何とかしなければ

——ピト♡

「……ひいつー……まさか……それって……」

僕が慣れない女の子の体にモタモタとしている間に何やら、醜悪なオークのアソコから飛び出している硬くて大きい尖った肉のかたまりが僕の股間にピタリと当たる感触がした。そして僕の頭に、とある不安がよぎる

僕がオークに地面に組み伏せられたままの体勢で恐る恐る自分の下半身の状況を確認かめてみると、全裸の僕がはしたなく開いた両脚の間にいつの間にかオークの腰が侵入をしていて、豚みたいにでつぷりと太ったお腹を主張した醜いオークの股間から伸びて

いる硬くて臭くて汚い肉の棒が、女の子になった僕の股間にピトリと押し付けられているのが分かった

オークのイチモツが僕の股間に空いたメスの穴にあてがわれている。僕は女の子になんてなっていない。だからこのオークは僕の体をどうにも出来ない。僕は一瞬だけそう現実逃避をするが、オークの股から伸びた熱くて尖った硬い肉の棒が当たる僕の股の先には今までの僕が知らない女の子の穴が空いていて、そこに向かって醜い豚オークの汚くて臭いペニスが今すぐにでも侵入しようとしていることが、女になった体で簡単に理解できる

僕はこれからいつに犯される。すぐに分かった

「やめろお!!!僕は男なんだぞお!!!」

僕は女になってしまった声で必死にオークを罵倒するが、モンスターに人間の言葉が分かるわけがない。こういう悲鳴は女の体を犯そうとする男のことを興奮させるだけだ。って経験で分かっているけど、僕は怖くて叫ぶことをどうしても止められなかった

「そ、そんなの入らないからあ!!!」

男であったときの僕のペニスは何だったんだっていうくらい大きな豚オークのペニスの先が僕の股間にあたっている。そして僕の股間に感じる熱くて硬い尖った肉の棒を押し付けられるというこそばゆい感触と圧力が、徐々に強くなっていく。これは本当にまずい

下品なオークが汚い笑顔を浮かべて勝ち誇ったように僕を見下ろしながら、僕のおまんこに向かってさらに腰とイチモツを強く押し付けてきていた。このままでは僕は、この醜悪なオークに体を犯されてしまう

僕は何とかこの状況から逃れようと必死に抵抗を試みるが、女の子になった僕の体は思ったよりも非力でどうにもならない。そしてついに、元男だった僕は女の体になってすぐに、汚いオークのチンポで処女を失った

にゅううううん♡

「——オークのチンポおっ!!!——僕の中に入っちゃたあ!!!——あああああああ
!!!」

前戯をすることもなく、女の体内に初めて硬くて熱いオスの肉の棒が埋まり込んでくる感触は、とても痛かった。でも僕のそんな苦しみなんて関係なく、醜いオークは僕にまたがり口からよだれを垂らしながら心地よさそうに腰をふっている。僕のお腹の中にある内臓みたいな感触の粘膜とお肉を直接、硬くて熱い肉の棒がグニユグニユとかき分けるよう感覚で、僕の体内をオークの汚いチンポが痛みとともに出たり入ったりを繰り返す

僕のお腹の中に、オークの硬くて熱いペニスがびつちりと埋まり込んでいるのが感覚で分かった。自分の体内に嫌悪するほど醜いモンスターの性器が埋まり込んでいることを想像すると寒気がする。僕の股間にオークの大きなイチモツを出し入れされているだけなのに、女の子になってしまった僕の体は弛緩し、脱力し、何も抵抗ができなくなっていた

地面に組み伏せられ、仰向けになつて股を開いたまま何とかコトが終わるのをじっと待っている僕の体に向かつて、オークが気持ちよさそうに腰をふり続ける。屈辱だった。僕の体が汚いモンスターの性処理の道具として使われているからだ

でも僕は床に仰向けで寝転びはしたなく股を開いた体勢のまま、何も出来ずに僕の股間で腰をふる豚オークの汚い姿をじっと見上げていた。女の子はセックスのときにこういう視界になるんだということを、僕はオークに学ばされる

「……………痛いいいい……………はっ……………はっ……………」

僕が女の子になつてしまった声で悲鳴を上げると、僕のうめき声を聞いたオークはさらに興奮を強めながら僕に向かつてチンポと腰を振る速度を速めてくる。僕が苦しんでいる声と姿でさらに僕を犯すモンスターが興奮をすることへの恐怖で、僕の頭がおかしくなりそうだった。僕が痛みで声を上げる度に、汚いオークのペニスが性的な興奮で反応をして僕のおまんこの中でピクリと大きくなるのが、豚オークのチンポをずっと受け入れて続けている僕の膣肉の感触で分かつてしまうのが恐ろしい

ピク♡ピク♡

僕が何とかオークの性行為に耐えていると、僕の体内に又チュ又チュという感覚で入りをしているオークの汚いイチモツが膨らみ、ピクピクと痙攣をし出すのが分かった。これはオスが射精をする前兆だ。元男である僕には分かる。これはまずい。このままではこの豚オークのチンポに種付けをされる。そう思った僕は身を捻って必死にオークから逃げようとするが、非力になった女の子の体では何もできなかった

そしてついに、オークのチンポが出たり入ったりを繰り返す僕の体内にその瞬間がおとずれる

——びゆるるるるる♡

「お、オークに、たねつけされちゃったあ……」

僕のお腹の奥に、熱くてネトネトとしたオークの体液が放出されたのが分かった。これ、絶対に精液だ。さつきまで僕を苦しめていた醜悪なオークのピストン運動がピタリ

と止むと、僕の股の間の体の奥にまで突き込まれたオークの醜悪なペニスが僕のお腹の内側をびっちり満たした状態でモゾモゾと小刻みに痙攣をしているのが感触でわかる。

そして一定のリズムで痙攣運動を続ける僕の体内に埋まったオークのイチモツの先からは、生温かくて気持ちがいいというおぞましい体液が、僕のおまんこの中に向かって大量に垂れ落ちてきていた

(いつまで出し続けるんだよおおお!!!
!!!!)

オークの射精は人間と違ってとても長く、とても多い。襲った獲物に自分の子供を確実に妊娠させるためだ。オークはそうやって繁殖を続けているモンスターである。知識としてだけ知っていたことを、僕は身を持って実際に経験をしてしまった

女の子になった僕のお腹の中に温かくて粘つく液体がどんどん溜まっていくのが分かる。僕のおへその下あたりのお腹の内側には、僕の体内に挿入されたオークの汚いチンポの先から出続けるねとつくような生温かい体液が、僕のお腹の内側のお肉にひっ

かかるような感覚でたまり続けていた

さらに恐ろしいことに、そのオークの精液を僕の体内に注がれる感触がとても心地よいのだ。醜いオークの汚い子種なのに、女の子になつた僕の体は喜んでそれを飲み干そうとしていることと僕の肉体が感じるオークの精液から広がる強い快感が、オークのチンポを体内に埋め込まれ股を開いたまま動けないでいる僕には信じられなかった

(……なにこれ♡……なにこれ♡……なにこれ♡……なにこれええええ♡——すつごく気持ちいいよおおおお♡——気持ちいい♡——気持ちいい♡——気持ちいい♡——気持ちいい♡——気持ちいい♡——)

しかしそんな僕の陰鬱な気分は一瞬でかき消されてしまう。僕の体内に注がれたオークの子種からカーツと熱くなるような感覚が僕のお腹の中から全身に向かって広がると、僕の体は今まで感じたことがないくらいに興奮し、とろけるような甘い快感に包まれてしまう。そのあまりにも心地がいい多幸感に、僕の意識が快楽に向かつてあつたという間に流されていった

僕はオークのチンポで女の快感を初めて知った。心はすごく嫌なのに、僕の体はすごく気持ちよくなっている。僕のお腹の奥からはまるで僕が心から喜んで気持ちよくなっているかのような声が勝手に出続けていて、醜い豚みたいなオークに僕は今、女の体の気持ちよさを教えられていた

そして汚い豚オークのチンポに股を開いてよがる僕の姿を、醜いオークが勝ち誇った顔で見下ろしている。俺のチンポでこのメスは喜んでいる。僕のおまんこに僕の許可無くチンポを出し入れしているオークに、今の僕はそう思われていた。僕の股間に向かって汚いチンポを気持ちよさそうに出し入れし続ける醜悪なオークの体の下で腰をふられながら僕の心を見下されるのは、最低の気分だ

にゆるんという感覚でオークの股から伸びる熱くて硬い肉の棒が僕の股間に根本までヌルリと埋まり込むと、うにゆりという感触で僕のヌルヌルになったお腹の内側をゾワリと擦り上げながら気持ちよくオークの醜いチンポが僕のおまんこの外に出ていく。オークの臭くて大きなチンポに僕のおまんこの内側を直接こすり上げられる度に、僕の肉体からはとろけるような甘い痺れとゾクゾクとした白くて気持ちいい感覚がずっと

幸せになつて、気持ちよくなつてゐるみたいな声が僕の体から勝手に出続けていた。僕の意思とは無関係に出るあえぎ声を聞いた豚オークが、よだれを垂らして興奮を強めながら僕に向かつて腰をふるスピードを速めるのがおぞましい

ぬぼ♡ぬぼ♡

「——あはあ♡——あつ♡——ああああ♡……つ♡……なんらこれえ♡……あつ♡……あつ♡……つ♡……なにかくりゆうううう♡……つ♡……つ♡……んくうううう♡……つ♡……あつ♡……あつ♡……あつ♡……つ♡……つ♡……つ♡……」

依然としてオークのチンポを出し入れされ続けている僕のお腹の中に、何だか気持ちよさの塊のようなエネルギーが溜まり続けている。そして僕のおへその下辺りでその甘い快樂の塊が圧縮をされると、密度を上げながらさらに強くなり始めていた。女の子の体の直感で僕の体にこれから何かが来るといふ感覚があるが、その正体が分からない。汚いオークの豚チンポを突きこまれ続けている僕の体のとろけるような気持ちよさがさらに大きくなると、僕の意識がドロドロになつて甘く溶けていく。僕の目の前は

そして僕の膣肉がヒクヒクと痙攣を繰り返すようにしてきゆうきゆうと、オークの豚チンポを美味しそうにおまんこで吸い付いているが分かる。僕の体と心は確実に、汚いオークの気色悪いチンポでメスに変えられていた。そのことを、とろける意識で理解する

(女の子の体でイクのって♡……気持ちよすぎるうううう♡)

「……………んっ♡……………っ♡……………ふう♡……………っ♡……………んっ♡……………っ♡……………っ♡……………
くううううう♡……………っ♡……………っ♡……………っ♡……………っ♡……………っ♡……………っ♡……………」

僕の体の中には、依然として女の子の体で絶頂をした気持ちよさが広がりに続けている。男のときの絶頂とはぜんぜん違う。男だったときはイクときの気持ちよさはすぐに終わった。しかし女の子の体になって初めて味わうメスのオーガズムは、いつ終わるんだってくらいに長く続いた

でも、僕のおまんこの中に続く豚オークのピストン運動は止まらない。醜いオークは

「これえ♡……ぜつたいに♡……にんしんしてりゆう♡……つ♡……つ♡……あはあ♡
……ミズハあ♡……つ♡……オークのせーし♡……つ♡……おまんこにだされるのお
♡……つ♡……すつごひつ♡……きもひいいよお♡……つ♡……つ♡……」

ガク♡ガク♡ガク♡

僕は地面に仰向けに組み伏せられ、股を開いたままオークに射精をされながらまた
イッた。何故か、男だったときに僕が犯そうとしていたミズハのことが頭に浮かぶ。
オークの汚くて気持ちいい精液を中出しされながら、腰をふって一緒にイクのは最高に
心地よかった。僕のメスの体が喜んでいる

そのあまりの気持ちよさに、僕はオークの太った臭い体に両脚を回してしがみつきな
がら気がつくど、だいしゆきほーるどでへこへこと腰を前後に振り続けていた。僕は
オークの汚くて気持ちいいドロドロとした精液をおまんこで必死に飲み込みながら、
オークのチンポの気持ちよさに夢中になる

僕のお腹の中にネットネットという感触で引つかかるオークの生温かい精液が最高に心地いい。僕の股間周辺は、性器で混じり合う僕とオークの肉体から分泌をされた体液でベトベトに汚れきっている。僕の陰唇周りの湿って潤った感触が、僕の体が女に変わり、メスとしての快楽をモンスターのチンポで無理やり教え込まれているという現実を僕の心に実感させる

股を開いたセックス中にイクときに、女の子の体は両足の親指が勝手にピンと伸びてしまうことを、僕は豚オークのチンポで知った

ズチュ♡ズチュ♡

「おまんこお♡……もうらめらからあ♡………そのでかいチンポでえ♡………つ♡………僕のおまんこお♡………もう♡………こすつちややらああああ♡——つ♡——つ♡——つ♡——」

「このダンジョンに生息するオークの性欲は底なしらしく、すでに何発も僕の体に子種を注いでいるのにまだピストン運動が止まらない。ここまで連続で性行為をされる

僕はオークの巢に飼われるようになってからずっと、オークの汚いチンポで腰をふっている。このダンジョンのオークの精液には栄養が豊富らしく、ここに飼われるようになってからの僕は口内射精された汚いオークの精液しか飲んでいないが、僕の体はふくらとしたもの生まれ変わり、今の僕は素晴らしく豊満な女体を手に入れてしまった

そして女の体になった僕は何も考えることなく、汚い豚オークとの気持ちいいセックスを楽しみ続けている

ズポ♡ズポ♡

「——っ♡——っ♡——あはあ♡……っ♡……っ♡……っ♡……女の子の体で♡……おまんこにい♡……っ♡……っ♡……オークのチンポお♡……っ♡……ぬぼぬぼしやれるのお♡……っ♡……っ♡……っ♡……っ♡……っ♡……っ♡……っ♡……さいこうに♡……っ♡……っ♡……きもちいいよお♡……っ♡……っ♡……すっ♡ご♡ひ♡……しあわせえ♡……っ♡……っ♡……っ♡……」

しをされているだけでお腹が満たされるし、僕の女体がオークの精液によつて、さらにふつくらとしたものになつていく

びゅるるるる♡

「……お♡っ♡……っ♡……っ♡……っ♡……お♡っ♡……っ♡……っ♡……っ♡……っ♡……
 ……っ♡——お♡っ♡——っ♡お♡っ♡……っ♡……っ♡……っ♡……っ♡……っ♡……
 ……お♡っ♡……お♡っ♡……っ♡……っ♡……っ♡……っ♡……っ♡……っ♡……っ♡……
 ……っ♡……っ♡……」

ガク♡ガク♡ガク♡

僕のお腹の中の内にある子宮にオークの精液を注がれると、僕の意識が甘く飛ぶ。最高の瞬間だ。僕は女の子の体になつて手に入れたこの目の前が白くチカチカとする快樂に夢中になり、家畜小屋の中でオークの汚いチンポに自ら股を開いて腰をふり続けていた

ガク♡ガク♡ガク♡ガク♡

こうして僕は心も体も女の子になり、オークのペットとして生まれ変わった

竜人族の里

村人視点

「えいつー！やあつー！」

ここは竜人族の国にあるシノビの里。竜人族の国では、モンスター討伐や国内外での活動のためにシノビと呼ばれる軍団を育成している。ここはその総本部があり、かつシノビの構成員であるニンジャを育成するための施設がある里だ

この国では国内外の魔を打ち払うニンジャを総称し、退魔のシノビと呼んでいた

僕の名前はタツキチ。ここ、シノビの里でニンジャになるための修行をしている。まだまだ半人前の僕はこうして一人、自分の家の庭で自主訓練を重ねていた

「タツキチ！あんた、また一人で訓練してるの？私に声をかけなさいよー！」

僕の名前を呼びながらこちらに駆け寄ってくる黒い退魔服を着た女の子は、僕の幼なじみのユキノ。彼女は腰まで伸ばした黒髪に赤い瞳、褐色の肌を持つ身長150cm程の女の子だ。ユキノと僕は小さい頃から一緒に育った。大人になった今、僕たちは自然とお互いを異性として意識している。二人つきりできるときに僕たちは男女のいい雰囲気になるときもあるのだが、僕たちは焦らずに少しづつ、お互いの距離を縮めていた

ユキノはおっぱいがAカップほどとツルペタ気味ではあるが、彼女に対してそれは禁句だ。気の短いユキノに男である僕がそんな事を言ったら、彼女の得意魔法である雷の魔法が僕に向かって放たれることになるだろう

「ユキノは僕と違ってすごく強いからさ。僕なんか声がかけるなんて恐れ多いよ」

「何言ってるのよタツキチ！あんたは遠慮なんてしなくていいの！」

まだまだ半人前の僕と違ってユキノは、僕と同じ年ながらすでにメンキョカイデンの腕前を持つ。メンキョカイデンとは退魔のシノビの最高実力者を示す総称で、その下に

はシハンダイやクロオビなどのランクがある

ユキノは退魔のシノビの天才と呼ばれており、特殊な杖と雷の魔術を駆使した戦闘法でメンキョカイデンの腕にまで上り詰めた。いつか僕もメンキョカイデンにまで実力を上げてユキノと同等な存在になりたい。それが今の僕の目標である

「あのね。タツキチ……」

いつもの強気な彼女と違って今日のユキノは妙にしおらしい。夕焼けに染まる庭に甘くて切ない空気が流れる。彼女が何を言いたいのか僕にはすぐに分かった。でも、まだまだ半人前の僕にはそれを口にする資格がない。今の半人前からゲニンを経て、せめてジョウニンにまで実力をあげなくては、僕はユキノの気持ちの応える資格はないのだ

「なんでもない！」

ユキノが強気な顔で恥ずかしそうに僕を上目遣いで見つめながら、平気なふりでもどりなしてくる。彼女の不安な顔は珍しい。いつも明るくて負けん気の強い彼女に何か

あったのだろうか？そう思った僕はユキノを安心させてあげようと、彼女に向かって僕の決意を宣言することにした

「僕がいつか一人前になったらさ、その言葉は僕から言うよ。だからユキノには、少しだけ待っていてほしい」

「……バカ♡」

ユキノが恥ずかしそうに顔を火照らせながら、僕の言葉に伝えてくれる。そうして約束のための印だとおねだりをされた僕は、そのまま彼女と初キスを済ませることになった

「早くしてよね♡」

ユキノと僕がキスをしたあとのシーンと静まり返った緊張と甘い空気が混じり合う夕焼けの中で、ユキノが僕につぶやいた

「二人共、そろそろ晩御飯の時間だぞ」

そして庭で一緒に修行をし始めた僕たちに、青い退魔服を着た僕の姉であるリンネ姉さんが声をかけてくれる。彼女も退魔のシノビ随一の天才と称されており、メンキョカイデンの腕前を持つ。半人前なのは僕だけであつた

リンネ姉さんは空間魔法とカタナを駆使して魔物と戦う。連続した短距離転移を使いながら敵を切り刻む彼女の姿は、まさに凄まじいの一言である

リンネ姉さんは腰まで伸ばした青い髪に紫色の瞳、身長160cmの体にGカップの豊満なバストを持つ女性で、弟の僕から見ても美しい。しかし姉さんは里の男たちからの求婚を幾度も断り続けていた。弟である僕の面倒を見るためだ。年頃を迎えた姉の足かせになつている自分が悔しい。早く僕も一人前のシノビになりたかつた

親の居ない僕たちは、こうして三人で助け合いながら暮らしている。いつまでもこんな日々が続けばいい。そう思っていた

「実は、私達に任務が下されてな」

「少しこの里を留守にするけど、タツキチは私達が居ないからって訓練をサボっちゃダメだからね！」

ユキノとリンネ姉さんに、里の首領からとある任務が依頼されたことを告げられる。依頼の内容はこの里随一の実力者であったユズハさんの捜索。ユズハさんは僕たちの師匠でもあり、僕たちが小さい頃は、彼女によく厳しい修行をさせられていたことが懐かしい

僕のことを置いてあつという間にリンネ姉さんとユキノが圧倒的な実力を身に付けていったのは、苦い思い出でもある

そんなユズハ師匠はある日突然、諸国漫遊の旅に出ると言い残して一人旅に出てしまう。昔からそういうところのある自由な女性であつた。しかし、夫であるタツローさんに離縁の手紙を送つたのを最後に彼女は行方不明となつた。ユズハさんの身に何があつたのか、誰にもわからない

メンキョカイデンの実力を持つユズハさんの流出は里の損失でもある。そして、その彼女が消息不明になった原因の調査も高い実力者ではなくては危険だ。そう判断をされたユズハさんの消息を探る任務が、彼女と同じくメンキョカイデンの実力を持つユキノとリンネ姉さんに託されたのだ

「すぐに帰ってくるからタツキチは待っててね！……それに……その……あの約束もあるし……」

「おやおや。二人はどんな約束をしたのかな？」

モジモジとしながら初キスのときの約束を持ち出すユキノを、リンネ姉さんがニマニマと笑いながらからかう。そうしていつもと同じような夕食をとった次の日、ユキノとリンネ姉さんはユズハ師匠の探索へと旅立っていった

僕は彼女たちがすぐに戻り、またいつもの日常がやってくるとこのときは信じていた。しかし数カ月後、彼女たちから離縁の手紙が届くことになる

そしてユキノとリンネ姉さんもユズハ師匠と同じく、
消息不明となった

ダンジョンへの潜入

ユキノ視点

私とリンネ先輩がユズハさんの消息を調査し始めてから数ヶ月が経つ。そして私たちはついに、とあるダンジョンにてユズハさんらしき人物を見たという情報を得ることになった。その情報を元にユズハさんが目撃されたというダンジョンをおとずれると、私たちはいかにも怪しい立入禁止の場所を発見する

立入禁止と言えばユズハさんの大好物だ。好奇心を抑えられずに彼女がこの場所に立ち入った結果、何かのトラブルに巻き込まれたのかもしれない。そう判断をした私たちはダンジョン内にある立入禁止の場所を攻略することで、ユズハさんの痕跡を探すことに決めた

ダンジョン内にある立入禁止の看板を抜けて一階層目は、何も無い広間だった。その

場所には私たちの意思を確認するように、ここから先は本当に何も無いという旨の警告がされている

「私たちをナメないでよね！ユズハさんの行方がわかるまで、絶対に諦めないんだから！」

「こんな注意書きがあるとは、ユズハ師匠ならひよいひよいと中に入ってしまうだろうな。これは、このダンジョンにユズハ師匠がいる可能性がより上がったようだ」

そう会話をしながら私たちは最終宣告を告げるドアを抜ける。するとダンジョンの様子が端正な石造りのきれいだった広間から、何かおぞましい肉を固めたような物体でできた廊下へと変わった

「ユキノ。注意しろ」

「はい。先輩！」

このダンジョンはヤバイ。すぐに分かった。この生命を冒瀆するような物体によって作られたダンジョンは幾多の侵入者の命を簡単に飲み込んでいる。私たちは警戒心を最大にし、ダンジョンを進むことにした

——キイイイイイイイン！

「まずい！転移トラップだ！ユキノ！脱出に専念しよう！ダンジョン前にあつた宿屋で合流だ！」

「はい！先輩！宿屋で先に待ってますから、遅れないでくださいよ！」

「ふっ。そっちこそ、私より遅かったら、この前ユキノが言っていた恥ずかしい寝言をタツキチに教えてしまうからな」

「先輩！洒落にならないですよ！」

ダンジョンの質が変わった。このダンジョンは簡単にクリアできるやさしいダン

ジョンから、罠の痕跡すらまともにわからない凶悪なダンジョンに変化している。そのことに対応ができなかった私とリンネ先輩は、転移トラップに引っかかり散り散りにされてしまった。こんな罠に引っかかるなんて、退魔のシノビとして恥ずかしい。正直、このダンジョンをナメていた。私は気を引き締め直すことにする

「……先輩。遅いなあ」

その日、私が宿屋に戻っても、リンネ先輩は戻らなかった。これはまずいかもしれない。私は心配で眠れぬ夜を過ごす。しかし次の日になり、私がリンネ先輩を探索するためにダンジョンに潜ろうとすると、疲労困憊になった状態のリンネ先輩をダンジョンの入口で見つける。すれ違いにならなくてよかった。私はリンネ先輩に駆け寄り、彼女に声をかけることにした

「リンネ先輩！遅いですよ！」

「すまない。心配をかけてしまったな」

疲れ果てたようによろめく先輩の体調に配慮して、今日は一日宿屋で休憩を取ることにする。ここの宿屋の料理は竜人族の国のものと似ているし、とても美味しい。パンではなく、久しぶりにお米も食べられた。私たちにとっては体だけではなく、心の休憩もできる宿屋なのだ

しかし夜中、私がふと目を覚ますとリンネ先輩が部屋にいないことに気づく。先輩は頑張り屋だから、今日一日宿屋で休憩をしたことを惜しみ、どこか周辺の調査に出ているのかもしれない。でも、休むときは休む。これはリンネ先輩との約束だ

朝になって私の目が覚めると、何食わぬ顔をしたリンネ先輩が室内でダンジョン探索の準備をしている。私はそんな彼女に、私が心配していることを伝えるために声を掛けることにした

「リンネ先輩！昨日の夜中、何してたんですか？」

「な、な、な、何を言っているんだあ！ユキノお！」

私先輩に向かって昨日の夜に何をしていたのかを問い詰めると、リンネ先輩はしどろもどろになって慌てふためく。リンネ先輩はいつもクールで冷静なところがあるが、こうして混乱をしている先輩の姿は初めて見た。リンネ先輩には、実は嘘が苦手というかわいいところがあるのかもしれない

「先輩がこの部屋からいなくなってるの、私、夜中に気付いたんですからね！ どうせリンネ先輩は、私に隠れて周辺の調査に行っていたんでしようけれども。休むとき休む。これ、先輩がした約束ですよ？」

「あ、ああー……少し森に気になることがあったから、調査をしていたんだー！」

リンネ先輩には、昔からすぐに無理をしようとするクセがある。でもこれはいけない。今回潜っているダンジョンは、疲労が溜まっている状態では本当に命を落としてしまうかもしれない危険なダンジョンだ。私は先輩の体を休ませるために、少し強めの態度を貫くことにした

「リンネ先輩！ 無理は禁物って、いつも私に言ってますよね！ 罰として先輩は、今日一日

何やら先輩の顔が火照っているが、私が聞いても体調の心配はないとのことだ。リンネ先輩が小さなうめき声をあげていた気もするが、きっと私の気のせいだろう。それにしても、リンネ先輩と並ぶ宿屋の主人の体がやたらと先輩に近いのが気になる

先輩と並んで廊下に立つ宿屋の主人の右腕が、こちらからは先輩の影になって見えないくらいの距離に彼は位置取っていた。宿屋の主人にはセクハラの気質でもあるのだろうか？それをクールな顔でスルーしているリンネ先輩は流石である。まあ、宿屋の主人がリンネ先輩のお尻を気軽に触ろうものなら、リンネ先輩による強烈なおしおきが待っているに違いないが

「じ、実はあ♡……………♡……………この宿屋の主人と交渉してえっ♡……………♡……………ここで働かせてもらうことになったのだが♡……………♡……………♡……………ユキノはどうだろうかあ♡……………♡……………♡……………」

リンネ先輩は宿屋の主人と交渉して、週に3日ここで働くことで一週間の宿賃を免除してもらったことになったと私に伝える。それには私も賛成だった。節約に越したこと

はないからだ。退魔のシノビと言っても、懐は寒いのだ

ユズハさんの痕跡が必ずここにはある。先輩はそう判断し、長期的な調査に乗り出すことにしたようだった。私の勘も、ユズハさんは必ずこのダンジョンにいたと言っている

邪神によって作られたダンジョンには、チェックポイントという機能がある。邪神が作ったダンジョンに、創造の女神が慈悲を与えたとも言われているものだ

階層ごとにあるチェックポイントを使えば転移魔法が発動してすぐにダンジョンから脱出することができるし、再びダンジョンをおとすれたときにはまた、そのチェックポイントからダンジョンの探索を再開することができる

つまり、いちいち一階からダンジョンの探索をやり直さなくても、途中の階層からダンジョン探索の続きができるということだ。だから少しずつ慎重にダンジョンを攻略していけばいつか最下層にたどり着けるし、私たちのようにダンジョンの近くで宿賃を稼ぎながらダンジョン攻略をする行為はよくあることなのだ

「ユーリさん。今日からよろしくお願いします!」

こうして私たちはダンジョン前の宿屋で働きながら、ユズハさんの調査を続けることになった

決戦！ダンジョンアリーナ

ユキノ視点

私たちがユーリさんに頼まれてすることになった仕事は、宿屋内の清掃業務だった。あまり客のいないダンジョン前の宿屋の掃除は、室内の整理も含めて午前中にはすべて終わってしまう。そこからは自由時間だ。ユーリさんのはからいで、私たちには個室も用意してもらえた。こんなに楽な仕事でお金をもらっているのか不安だけど、雇用主がいつて言うならまあいいか

「ユーリさん。お疲れさまです。あれ？リンネ先輩。そんなところで何をしているんですか？」

「ちよ、ちよつと♡……カウンターの内側で掃除をなあ♡……つ♡……つ♡……」

私が今日の仕事を終えて受付のカウンターに立つユーリさんに声をかけると、メイド服を着たリンネ先輩がカウンターの裏側からひよっこりと顔を出す。黒いロングスカートの白いメイド服が、ここの宿屋の制服だ。ちなみに私も業務中はきちんとこのメイド服を着用している

どうやら先輩はカウンターの内側の掃除をしていたようだ。先輩は凝り性などころがあるからなあ。リンネ先輩は今日も、顔が火照って赤くなるまで熱心に仕事をしている様子が伺えた

「先輩。私は先にも上がりますね！」

「くくくっ♡くくくっ♡……ああっ♡……っ♡……っ♡……っ♡……私もお♡……この仕事が終わったらっ♡……すぐにイクからあ♡……っ♡……っ♡……っ♡……っ♡……っ♡……」

カウンターの内側の掃除を続けるといふ先輩を残し、私は先に今日の仕事を終えることにする。宿屋内の清掃を一人で任された私と違って、リンネ先輩はユーリさんのサポート役というか、つきつきりで何かを手伝っている事が多かった。まあ、リンネ先輩

「リンネ先輩、遅いなあ」

翌日になり、黒い退魔服に着替えた私はダンジョン探索の前に先輩と食堂で待ち合わせをしていた。先輩と一緒に朝食を取るためだ。リンネ先輩がこういつた待ち合わせに遅刻してきたことなんて一度もないのに、今日は先輩の人生で初めての遅刻になった。慣れない土地にいて、リンネ先輩の体に疲れが溜まっているのだろうか

「すまない。待たせてしまった」

少し遅れて、青い退魔服に着替えたリンネ先輩が息を切らしながら私の座る食堂のテーブルにやってくる。私はそれを気にすることなく、リンネ先輩と食事を取り始めることにした

「リンネ先輩。口元に白い何かの跡が付いてますよ」

「な、な、な、なんだとお！」

私は食事を取るリンネ先輩の口元に、何か白い跡みたいなのが付いていることに気づく。きれいな好きの先輩にしては珍しい。私にそのことを指摘されると、先輩はハンカチを使って急ぎそれを拭き取っていた

「い、いつたい、何だったんだろうなあ。……ははっ」

それにしても驚き過ぎではあるが。何でも完璧にこなそうとする先輩は、初めて私に見せた自分の失態が恥ずかしかったのかもかもしれない。ダンジョンのトラップに引っかかってからの先輩は少し抜けているところがあるが、そのときのシヨックをまだ引きずっているのだろうか

……。

……。

……。

「先輩。ここ、ヤバイです」

「ああ」

そうした日常を送りながらダンジョン探索を続けたある日、私たちは最初のボスフロアへとたどり着いた。コロシアムのような無人の会場に、ぽつんとした決戦場がある階層だ。そしてアリーナには、ダンジョンのボスとして人影が一人佇んでいる。その人物の実力はかなりの高レベルだということが、震える空気で簡単に分かった

そして私たちがダンジョンのボスのもとにたどり着くと、その人物の正体がユズハさんだということに気づく。彼女は一人旅に出たときと変わらぬ竜人族の民族衣装姿のまま、そこに佇んでいた。私はそんなユズハさんに声をかける

「ユズハさん!ダンジョンに取り込まれちゃったの!?!」

「さあ。どうだろうね」

昔とあいも変わらずのらりくらしとしてゐるユズハさんが、笑いながら私と言葉を交わす。彼女の心は以前と変わっていない。それだけは分かった

「無理やりにもユズハさんを里に連れ戻します。先輩！やりましょう！」

——ヒュン

私がユズハさんに対して戦闘態勢に入ると突然、リンネ先輩からの斬撃がユズハさんにはなく、何故か私に向かって放たれる。私が何とか先輩から受けた一撃をかわして体勢を立て直すと、リンネ先輩はユズハさんと並んで立ち、私に向かって剣を構えていた

「先輩！どうしちゃったの!？」

「すまない。ユキノ……」

驚き声をかける私に、青い退魔服姿の先輩が申し訳無さそうにうつむきながら対面を

する。ユズハさんとリンネ先輩に何があったのだろうか。分からないけど、二人が今、私の敵になったということだけは分かる

「もういい!二人共、私が正気に戻してあげるんだからあ!」

バチバチバチツ!

黒い退魔服姿の私は雷の魔術を発動させて、雷槌を全身にまといながら退魔のシノビの戦闘態勢に入る。私の雷を増幅して打ち出す特殊な形状をした短杖も二本、両手に取り出した。もう本気だ。私がユズハさんもリンネ先輩もぶつとばして、無理やり里まで連れて帰ることに決めた。詳しい事情はそれから聞けばいい

「私があなたたちの身も心も、性根からぜんぶ叩き直す!覚悟してよね!私があなたたちの体を、退魔のシノビとしてふさわしいものに調教し直してあげるんだからあ!」

そうしてとあるダンジョンの無人アリーナにて私と、ユズハさんとリンネ先輩との戦闘が始まった

ダンジョンルームにて♡

「……………あつ♡……………つ♡……………んっ♡……………っ♡」

俺の目の前ではいま、意識を失った退魔のシノビことユキノちゃんが触手による人体改造を施されていた。全裸で四肢を拘束をされた状態で彼女は、ツルペタな肉体を触手によつていじくり回されている

細長い触手によつて弄くられているユキノちゃんのツルペタなおっぱいの先にくつついた彼女のポチツとしたピンク色のかわいい乳首が、今はガチガチにいきり立ち勃起をしている。ユキノちゃんの乳首の中には極細の糸のような触手が侵入しており、彼女の乳首の中に快樂神経を増やし続けていた

触手による肉体改造の目的はまず、体の感度の増加だ。これによりユキノちゃんは、セックスをするためにとても適した体を持つことができるようになる。理由はもちろ

ガク♡ガク♡ガク♡

ユキノちゃんのおまんこの改造も順調に進んでいる。高速で振動する触手を陰唇にあてることで彼女のおまんこにイキぐせをつけながら、同時に極細の触手を膣内に侵入させると、ユキノちゃんの膣肉の感度を何倍にも高めていく。こうして処女膜を残したままユキノちゃんの膣穴すらも、抜群の感度をもった淫肉へと変えてしまうのだ

基本的に俺のダンジョンに侵入をした人間はそのまま苗床に変えてしまうのだが、こうして有能な人間は俺のハーレムに加えることもある。何よりユズハさんに、自分の弟子である彼女たちを助けてくれとお願いもされたしな

…じゆるるるる♡…じゆるるるる♡

そして椅子に腰掛けてユキノちゃんの人体改造の様子を確認する俺の足元では、すでに人体改造を終えた青い退魔服姿のリンネちゃんが床に膝立ちになり、俺のチンポをフェラしながらパイプリの練習をしていた

——むにゅん♡

「こうするのが……気持ちよいのか……?」

下乳部分に丸い穴を開けて改造をした彼女の着ている退魔服の隙間に俺の勃起したチンポを恐る恐ると入れながら、リンネちゃんが服の中でむにゅりと俺のペニスをGカップの乳房を使って挟み込む。そして彼女は自分の爆乳を服の上から両手を使っていやらしく歪むくらいにしめつけると、そのまま俺のチンポを包み込んだおっぱいをゆさゆさと上下に揺らし始めた

ふにゅん♡ふにゅん♡

「ユーリ殿のチンポ♡……硬くなってきたな♡」

リンネちゃんのとろけるような爆乳によってしっぽりと生温かく挟み込まれた俺のチンポがムニユムニユといったおっぱいの感触でこすられ続けると、あつという間に俺のペニスが興奮によってビキビキに硬くなっていく。退魔のシノビとして優秀であつ

た彼女は、こういった淫技も飲み込みが早いようだ。リンネちゃんのパイズリの練達した気持ちよさに、すぐに俺のチンポはピクピクと痙攣して射精をうながされてしまった
 びゆるるるる♡びゆるるる♡

「——あんっ♡——っ♡——っ♡——っ♡」

リンネちゃんの青い退魔服の中で、やわらかい彼女のおっぱいに包まれた俺のチンポが果てる。俺のペニスが入りやりと挟み込まれた彼女の谷間の退魔服が、リンネちゃんの大きな乳房の隙間からはみ出した俺の肉竿によってぐにゅんと引き伸ばされている。

パイズリによつて俺のチンポの形に変形をしたリンネちゃんの退魔服の谷間には、服の繊維の隙間からはみ出てきた俺の精液がどろりとあふれ出してきており、彼女の胸元の服の上から内部までをべつとりと白く汚してしまっていた

「きかれいごつなやいご」

「……はい♡……それでは私のいやしいお口で、ユーリ様のおチンポをきれいに拭き取らせていただきますっ♡」

じゅるるるる♡じゅるるる

リンネちゃんの役割は退魔のシノビとして情報収集や俺の護衛、そしてメイドとして俺の身の回りの世話だ。俺の命令により退魔のシノビから淫乱な性処理メイドに心が切り替わったリンネちゃんが、瞳にピンク色のハートマークを浮かべながらおいしそうに俺のチンポを口で舐め取り始める

俺の宿屋で働くようになってから俺が彼女に教え込んだ口淫によって責められると、精液を出したばかりの俺のチンポがまた簡単に勃起をさせられてしまう

「ふぐううううううう♡——っ♡——っ♡——っ♡——っ♡」

ガク♡ガク♡ガク♡

そしてリンネちゃんの生温かいお口でネロネロとチンポを舐められている俺の目の前では、意識のないまま肉体の改造を続けていたユキノちゃんが盛大に潮を吹き散らかしながら絶頂に達していた

彼女は四肢を触手によって拘束された状態で情けなくイキながら腰をへこへこと前後に動かしており、連続したオーガズムによってガクガクと体を痙攣させた状態でゾクゾクと全身を気持ちよさそうに揺らし続けている

俺が触手を使ってユキノちゃんの頭に埋め込む思考誘導は、ユズハさんの搜索のためにユキノちゃんは俺の宿屋に娼婦として潜り込んでいる状況というものだ。その思考誘導が終わつたら一旦、ユキノちゃんを俺の宿屋の一室に解放する。すると明日からのユキノちゃんは、俺の宿屋に娼婦として潜入捜査をしているという勘違いをしながら過ごすことになる

つまり俺からの性的な命令に、ユキノちゃんは一切逆らえなくなるということだ。任務のためと言いつつながら俺の命令を断れない彼女の体を、性的に責めて調教をしていくのが今から楽しみである

一気にユキノちゃんを人格ごと改造してしまってもつまらないからな。彼女に施すのは俺の宿屋に娼婦として潜入しているという勘違いと、体の感度の増加、そしてセックスが好きだという気持ちだけである。あとの性格は基本的に元のユキノちゃんのままだ

「…………ユーリ殿♡…………あの♡…………♡…………そのお♡…………♡…………♡」

俺の足元では、俺のチンポをきれいに掃除し終えたリンネちゃんが物欲しそうな顔で俺を見つめている。俺がそんな彼女のおまんこを青い退魔服の上から指で触って具合を確かめてみると、俺のチンポに奉仕をしたことで興奮をしてしまったリンネちゃんのおまんこが、彼女が着ている退魔服ごとすでにとろとろになって熱く濡れそぼっていた

「たしかリンネちゃんは、故郷に残した弟のことが好きなんじゃなかったっけ？」

「…………もう♡…………いいんだあ♡…………いまはあ♡…………ユーリ殿のチンポのほうが好きになつたからあ♡…………♡…………♡」

俺の指に服の上からスリスリとおまんこをこすられながら、リンネちゃんが恥ずかしそうにうつむいて告白をする。リンネちゃんは身も心も無事に、俺の女に変わりきつていた

「じゃあ今から、調教の様子を映像記録球に撮りながら俺とセックスをしようね」

「——はい♡」

忠犬のように瞳を輝かせたリンネちゃんが、パイズリによって胸元を白く汚した退魔服を着たまま俺とセックスをするために後ろを付いてくる。彼女にしつぽがあつたなら、きっとフリフリと猛烈な勢いで左右に揺れているに違いない

無事に人体改造を終えたユキノちゃんは、宿屋の一室に寝かせておいた。これで彼女は明日から、俺の宿屋で俺専属の娼婦として働く任務に就いていると思いい込みながら過ごすことになる。ユキノちゃんの体をどうやって開発していこうか。今から楽しみだ

ズポ♡ズポ♡

「——ユーリ殿のおちんぽお♡——太つくて大好きなおお♡……♡……♡——
もつといっぱい♡——わらひのおまんこ♡——ずぼずぼしてええええ♡……♡——
♡♡♡♡♡」

俺の腰の下では、全裸になってベッドの上で仰向けに寝て正常位に大腿を開いたリンネちゃんthat気持ちよさそうに爆乳を揺らしながらおまんこに俺のチンポを咥え込んでいる。そして俺は性を知らなかった彼女の肉体を俺のチンポを使ってどろどろに調教をしていく様子を、しっかりと映像記録球に録画していた

「……タツキチい……許せ♡……♡……ユーリ殿のチンポお♡……おまんこにぬぼぬぼ出し入れされるのお♡……気持ちよすぎるんだああああ♡……♡……わらひ♡……処女を彼にあげちゃってえ♡……♡……♡……体も淫乱にい♡……作り変えられちゃいましたあ♡……♡……♡……♡」

おへその下辺りにピンク色に光る俺の淫紋を強調しながら、リンネちゃんが俺のチン

俺の腰の下で子宮を押しつぶされるようにしてガクガクと痙攣しているリンネちゃん
 の膣奥に、俺の精液をたっぷりとトロトロに注いでいく。こうして彼女の体内に俺の
 精液の味を快感とともにしっかりと覚え込ませることで、リンネちゃんの心を俺の女と
 して教育をしていくのだ

びゅるるるる
 ♡

「——っ♡——っ♡——っ♡……イキながらご主人さまのせーし♡……なかにだされる
 のお♡……っ♡……っ♡……あつたかくて♡……好きになっちゃっらあ♡……っ♡
 ……タツキチ……すまない♡……これ♡……きもちよすぎるうううう♡」

深い絶頂をしながらベッドの上で俺と腰をふり続けるリンネちゃんが、好きだったタ
 ツキチ君に向かっての懺悔を続けていく。基本的にこの映像は俺のコレクションとな
 り、俺しか目にするのではない。もしタツキチ君がダンジョンへの敵対行為を働くよう
 なら、彼が破滅する前にこの映像を見ることにはなるのだが

……っ?♡——っ♡——っ♡——っ♡……っ?♡?……っ♡♡♡……っ♡?♡?……っ♡
 ……っ♡♡♡♡……っ♡」

クールで表情を滅多に変えないと里では称されていたらしいリンネちゃんが、俺のチンポではアへ顔のままイキまくっている。さて、明日からはユキノちゃんのツルペタな体を調教していく番だな。何をして彼女の心を快楽色に染めていこうか

俺は豊富な肉体を持つリンネちゃんと気持ちよくベッドの上で腰をふりながら、ユキノちゃんを墮とすための計画を立てることにする

退魔のシノビ ユキノルート〜プロローグ〜

ユキノ視点

……。

……。

……。

朝、私はいつもと違うベッドで目を覚ます。私は退魔のシノビとしての任務に就くために、故郷から遠く離れたとある宿屋で働くことになった

私が就いた任務とは、消息不明になった私の師匠であるユズハさんの行方を探すというものだ。そのために、ここの宿屋で働きながら彼女の手がかりを見つける。それが私

の判断であった

しかし、現在宿屋で探している働き口というのが娼婦しかないということを宿屋の店主から私に伝えられる。私は退魔のシノビとしての任務を遂行するために、宿屋の店主専属の娼婦として働くことに決めた

「タツキチ。私、頑張るから……」

私は自分のおへその下に刻まれた、私が娼婦になった証であるピンク色に光る淫紋に目を見やりながら、故郷に残した恋人であるタツキチのことを思う。タツキチと私は、私がこの任務に赴く前日に恋人になった

私の片思いだと思っていたけど、タツキチも私のことを好きでいてくれた。正式な恋人になるのはタツキチが一人前のシノビになってからだって彼の方から言われてしまったけど、そんなのは些細なことだ

私は彼と夕日が沈む景色の中でした初キスの感触を思い出して、この任務に耐えるこ

とを誓う。彼との思い出があれば、これから私がされるどんな行為にも耐えられる。そう感じられた

「リンネ先輩。お疲れさまです」

「ユキノ。お疲れ様」

私は私とペアを組んでユズハさんの搜索任務にあたっているリンネ先輩と廊下で会い挨拶をする。先輩は私と違って娼婦ではなく、店主専属のメイドとしてこの宿屋に雇われている。メイドといっても性処理も含まれるメイドだ。身の回りの世話がある分、娼婦として雇われた私よりも負担が大きい。それをクールな表情でさらりとこなす、黒いメイド服姿のリンネ先輩は流石だった

「失礼します」

そうして私はいつもの黒い退魔服姿のまま、宿屋の店主がいる一室へとおとずれる。私の服装は店主からのリクエストだ。着々と、私の娼婦としての初仕事が近づいてきて

いた。恋人であるタツキチ以外に私の体を触らせるなんて絶対に嫌だけど、退魔のシノビとしての任務だから仕方がない。私は不安に震える体を押さえるために、深呼吸を繰り返す

「ユーリさん。今日からよろしくお願いします」

室内に入った私は雇い主であるユーリさんに挨拶をする。今日から私は彼に絶対服従である。これは私がユズハさんを発見し、この娼婦の仕事を終えるまで続く。私はこの仕事を早く終わらせて、タツキチが待つ故郷に帰るためにはどんなことでもしてみせると覚悟を決めていた

「じゃあユキノちゃん。服を脱いで全裸になってよ」

「はい。分かりました」

ユーリさんの命令で私は着ていた黒い退魔服を脱ぐと、退魔のシノビとして鍛え上げられた私の裸体を彼の前に披露する。恋人であるタツキチ以外の男の人になんて私の

裸を絶対に見せたくないのに、タツキチに見せるよりも早く娼婦として、宿屋の店主に私の裸を見せることになるとは思わなかったなあ

（待っててね。タツキチ。私、この任務を終わらせて、必ずあなたの元に帰るから！）

こうして私の娼婦としての初仕事が、ついに始まった

し続ける

(タツキチい♡……どうしよう♡……これっ♡……きもちいいよ♡)

私はこの望まぬ淫らな行為から心を守るために、過去に恋人と初めてキスをした場面を思い出そうとするが、全身を指でやさしくなぶられるという圧倒的な気持ちよさの前に私の意識が快樂へと流されていく。私の両胸にある乳首が信じられないくらいに固くなり、ジンジンと痺れるくらいに勃起をしている感触が心地よかった

ぎゅうううう♡

「——はあああん♡……っ♡……っ♡……っ♡……っ♡」

宿屋の店主の指にやさしく私の両乳首をつねられた途端に、私の口から突然、甘い吐息が漏れ出てくる。退魔のシノビとして心と体を鍛え上げてきた私の口から、こんなにもまぬけな声が出るなんて自分でも信じられない

コリ♡コリ♡

「——あつ♡——あつ♡——あつ♡——あつ♡——あつ♡——乳首いいいい♡——コリコリしちや
らめえええ♡——つ♡——つ♡——つ♡——」

退魔のシノビとしての厳しい修行にも弱音を吐かなかつた私が、乳首を触られているだけで簡単に弱音を口にした。宿屋の店主の両手の指でコリコリと乳首をこねられ続ける私の両胸の先からは、ゾクゾクと全身が強烈にすぐむような甘い快感がこぼれ出てくる。私の乳首が異性に触られるだけでこんなにも気持ちよくなるなんて、今まで全然知らなかった。私はタツキチ以外の異性の指で、自分の体の特性を知ってしまう

くばあ♡

「——つ♡——つ♡——つ♡——」

左手で私の右胸を弄くりながら宿屋の店主が私の股間に右手を伸ばすと、私のアソコ
の陰唇を二本の指を使っていやらしく、くばあとひっぱり広げてくる。すごく恥ずかし

かったけれど、宿屋の店主に全身を愛撫され続けている私の意識はとろけ始めており、羞恥心を心に感じる中何も抵抗ができなかつた。こんなこと、初めてだった

クニ♡クニ♡

「——あはああああ♡——あつ♡——あつ♡——あつ♡……つ♡……なにこれえ♡……
 こんなの知らないよおおおお♡……つ♡……タツキチい♡……つ♡……助け
 てえええ♡」

私のクリトリスが宿屋の店主の指で円を描くように弄くられ始めた瞬間に、私の股間からは痺れと快感が爆発したかような感覚と濁流が脳に向かつて上り詰めてくる。一人でタツキチを思いながら自慰をした時はこんなじやなかつた。好きでもない人に体を弄くられているのに、過去に自分ひとりで触ったときとは比べ物にならないくらいに、私の体は気持ちよくなっていた

ぐにゆうううう♡

「——かつはああああああ♡——あつ♡——あつ♡——ああああああ♡……つ♡……
 おつ♡……おつ♡……おつ♡……おつ♡……おつ♡……つ♡」

（——なにこれっ♡——なにこれっ♡——なにこれえええ♡……気持ちいい♡……気
 持ちいい♡……気持ちいい♡……気持ちいい♡……気持ちいい♡……）

そして私の股間に空いた膣穴の中に宿屋の店主の二本の指が侵入をしてグネグネと
 私のお腹の中を直接かき回し始めると、私のおまんこからは強烈な快感があふれ出てく
 る。まるで私のお腹の中にある気持ちよくなるためだけの内蔵を、敏感な粘膜ごと直に
 指で押しつぶされているようだった

宿屋の店主からされる愛撫は、私がタツキチのことを密かに思いながら指でオナニー
 をしたときの何百倍も気持ちよかった。そのことが私の心にタツキチへの罪悪感を植
 え付けていく

（タツキチい♡……どうしようっ♡……私のからだあ♡……気持ちよくなってるよお
 ♡）

タツキチのために彼以外とのセックスで絶対に気持ちよくなれないと決めていたのに、私の密かな誓いは宿屋の店主の二本の指によって簡単に破られてしまった

——ピトリ♡

「……あつ♡……んっ♡……っ♡……っ♡……っ♡」

そしてついに私のおまんこに、宿屋の店主のアソコがあてがわれる。私が里にいたときにこっそりとのぞいたことのあるタツキチのアソコよりも何倍も大きい宿屋の店主のペニスの先が、前戯を終えてトロトロに濡れてしまった私の秘部にあたっているのが感触でわかった

宿屋の店主のアソコの先があたっている私の敏感になった陰唇から、生温かくて気持ちいい、こそばゆい感触が生まれ続けている。そして私は股間に感じるその心地よい感触を、ベッドの上に仰向けに寝て情けなく股を開いた体勢で感じるままになっていた

「……おねがいつ♡……やさしくして♡」

こんなにも大きなものが私の中に入るのかと不安になってしまった私はベッドの上で股を開いたままの姿で、生まれて初めてするセックスの直前になり、宿屋の店主に對してか弱い乙女のようなお願いをしよう。退魔のシノビとしてあるまじき、恥ずべき行いであった

ぐにゆううううううん♡

「——あつ♡——あつ♡……おつきいおちんぽお♡……っ♡……中に入ってきたああああ♡」

（タツキチ。ごめんね。私の処女、この人に捧げちゃったあ……）

私の股間の割れ目にあるいやらしいお肉をかき分ける感触と一緒に、宿屋の店主の股から伸びている熱くて硬い肉の棒が私の体内にヌプヌプと埋まり込んでくる。そして私の内臓と彼の内臓が直接こすり合わせられるような強烈な体験のその途中で、

私のお腹の中にある処女膜が破けるプチリとした感触がするのが分かった

その瞬間に、私の体は恋人のタツキチではなく、今、現在進行系で、私の体に覆いのしかかっている宿屋の店主によって女にされていることを強く実感する

(私……タツキチ以外の男の人で……女になっちゃったあ……)

自分の体がこうしてタツキチではない異性の手によってすでに乙女ではなくなってしまうことを思うと、私はタツキチの恋人としてふさわしい女ではなくなってしまうのではないかと不安になる。でも今は必死にそのことを考えないようにしていた。これは任務だから仕方がない。私は自分の心にそう言い訳を重ねていく

破瓜を終えたばかりの私の膣内にはジンジンとした痛みが広がっている。しかしそれよりも、女の体は体内に男の性器を挿れられるとこんなにも気持ちがいいのかという驚きのほうが強かった。それも、故郷で私を信じて待つ恋人によって感じるはずだった初体験の痛みを別の男の人に捧げてしまったことによる心の傷が、快感によって塗りつぶされていくほどにだ

ぬぼ♡ぬぼ♡

「……あつ♡……あつ♡……あつ♡……あつ♡……おまんこのなかあ♡……つ♡……おちんぼが出たり入ったりしてうるうううう♡……つ♡……つ♡……すつごいつ♡……つ♡……なこれええええ♡」

そして回復魔法を掛けられた私の体から破瓜の痛みが完全に消え去ると、宿屋の店主の大きなイチモツが私の股間の中を出たり入ったりをし始める。その瞬間から、故郷で私を待つ私の恋人であるタツキチを裏切ってしまったことに対する私の嫌な感情はすべて、宿屋の店主とするセックスの強すぎる快感によって押し流されていった

タツキチ以外の異性の性器によって初めて体験する性行為の味は、実に最高だった

「……あつ♡……あつ♡……あつ♡……あつ♡……なんらこれえ♡……つ♡……つ♡……こえつ♡……勝手に出ちやうよおおおお♡……つ♡……あつ♡……あつ♡……あつ♡……あつ♡……ん♡」

私のか弱い声を他人に聞かせたくない。そう思つて必死に声を我慢しようとしても、私の体内にあるすっごく気持ちいいお肉を宿屋の店主のチンポによつてぐにゆりと粘液ごと強くこすられる度に、私のお腹からは甘い声が勝手に出続けてしまう

退魔のシノビとして、いかなる時も声をあげない訓練をしてきた私でもだ。この宿屋の店主は魔性のペニスを持っている。そのことに気づいてももう遅い。私たちの性行為はすでに始まつてしまつていた

にゆるんにゆるんといった滑らかな感触で私の股間の奥に感じる私の濡れた膣肉に宿屋の店主のペニスをずるりと突き挿れられる度に、私の全身には冷静な思考ができなくなつてしまうくらいにどろりとネバつく強い快楽が駆け巡つていく。私の目の前があつという間に、性器をこすり合わせる行為が生み出す快楽によつてぐにやりと溶けていった

びゆるるるるる♡

「……あつ♡……あつ♡……つ♡……つ♡……おまんこのなかあ♡……つ♡……あつた
かあい♡……つ♡……つ♡」

(タツキチ……どうしよう……これ♡……気持ちいいよお♡)

私の体内に無断で精液を注ぐ宿屋の店主と、私は正常位に股を開いたまま夢中になつてキスを重ねていた。それも恋人であるタツキチ以外とは絶対にしたくないと思つていたキスだ。それなのに、初めてのセックスに夢中になつてしまった私は、自ら求めるようにして宿屋の店主との唇にむしゃぶりついていた。異性の性器を自らの体に空いた女の性器に突きこまれながらするキスは、それほどに心地よかつた

セックスの途中で異性とするその濃密なキスの感触によって、過去にタツキチとした初めてのキスの感触が私の意識から消えていく。そして私がキスと言われて思い浮かべるのは、今日、宿屋の店主と故郷に残したタツキチという恋人を裏切りながら楽しんで、気持ちいいセックスの途中で夢中になつたキスへと変わった。宿屋の店主との強烈なセックスによって、私の思い出が塗り変えられていく

……くちゅ♡……くちゅ♡

(タツキチい……このキス♡……私がダメにされるやつだあ♡……っ♡……っ♡……っ♡……っ♡……っ♡……)
めんねえ♡)

いつの間にか私は、宿屋の店主とするこの気持ちいいセックスをもつとしていたいと感じていた。生まれて初めて味わう男女の性器をこすり合わせるといいういやらしい行為の気持ちよさに、私の心が流されていく

ぬぼ♡ぬぼ♡

「——あっ♡——あっ♡——あっ♡——あっ♡——おまんこお♡……ずぼずぼされりゅの♡……な
んれこんなにもひいのおおお♡……あっ♡……あっ♡……あっ♡……ああああああ♡
……っ♡……っ♡……っ♡」

男の子は精液を一回出したらそれで終わりって聞いたことがあるけど、今日、私が宿屋の店主としてセックスは全然違った。宿屋の店主は、初めて膣の奥に精液を出さ

私はたまらずに叫んだ。それほどに、宿屋の店主のイチモツが出し入れされ続けている私の性器は気持ちよかった。タツキチ以外の異性との性行為に感じないように我慢をして続けていた体が、宿屋の店主のチンポで無理やり気持ちよくなっていく。そしてその度に、私は勝手に動き出しそうになる私の腰を動かさないようにベッドの上で仰向けに股を開いたまま耐え続ける

しかし気がつくと私は、ムズムズとし続ける自分の腰の感覚におとずれた我慢の限界とともに、タツキチ以外の異性と一緒になってベッドの上で腰をふってしまっていた

「ごしゅじんさまのふつといチンポお♡……っ♡……わらひのなかにだしいれしやれりゆのお♡……らいすきなのおおおお♡……っ♡……もつといっぱい♡……っ♡……わらひのおまんこお♡……ずぼずぼしてええええ♡……っ♡……っ♡」

セックスの途中で宿屋の店主からご主人さまと呼ぶように命令をされる。タツキチ以外の男に心をなびかせるみたいで嫌なのに、私は心から望んで彼をご主人さまと呼んでいた。そして宿屋の店主をご主人さまと呼び始めた途端に、セックスを続ける私の体

ぱりと消えていた。それほどに、宿屋の店主とするセックスは気持ちよかったのだ

そして宿屋の店主は私のおねだりに応えてくれると、どろどろとしていて熱い、私の体がとろけて脱力をしてしまうほどに気持ちよくなれる彼の精液をたつぷりと私の子宮に注いでくれる。その度に私の視界は原始的な快楽によってチカチカと白く点滅をし、私の意識をぶつりと心地よく飛ばしていった

(うそっ♡うそっ♡うそおおおお♡……私っ♡……中出しされながらイツちやったあ♡……っ♡……これ♡……っ♡……すっごく♡……気持ちいい♡……っ♡……どうしよう♡……私っ♡……タツキチ以外の男の人の精液で♡……気持ちよくなってるう♡)

私は宿屋の店主の生温かくてネトネトとネバつく精液をおまんこの奥にとろとろに注がれる感触をお腹の中に感じながら、タツキチ以外の男の精液によって生まれて初めての中出しアクメに達する

私のおまんこの奥にぐううんと埋め込まれた宿屋の店主のペニスの先から私の体内にトロトロとこぼれ出てくる熱い精液の感触を感じながらイクという行為の凄まじい

宿屋の店主のペニスからあふれ出る彼の熱い精液が私のおまんこの中にどろどろと注がれる度に、私のお腹の内側にはネットネットとした液体がひつつくような感触と一緒に、強烈な快楽が泉のように染み出してくる

そして宿屋の店主の精液を私のおまんこの中に直接注がれる度に、まるで極上の蜜を全身に注入をされているかのように感じてしまうほどに心地よくなれる私の体が、もつと彼の精液を生で体内に注いでもらいたくてたまらなくなっていく

私の体が今、宿屋の店主のチンポによって作り変えられている。そのことが頭ではわかっているのに、彼とのセックスが気持ちよすぎて、私はベッドの上でご主人さまと一緒に腰をふるのを止められなかった

(タツキチい……私の体……この人のチンポで作り変えられちゃってるよお……でも……私……絶対に負けないからあ……)

ものすごく大きくて太くて気持ちいい宿屋の店主のチンポが私のおまんこの穴をポツコリと押し広げているという股間の圧迫感と、私のお腹の中に彼のペニスが全部

(タツキチい♡……ごめんね♡……ご主人さまチンポお♡……すっごく気持ちいいのお♡……っ♡……ぜんぶ♡……このチンポがわるいんだからあ♡……っ♡……あっ♡……だめだ♡……またっ♡……イカされるう♡)

気がつくとは私は、朝になるまで宿屋の店主とベッドの上で一つにつながり続けた。故郷に残してきた恋人への罪悪感など忘れて、体を気持ちよくするという目的のためだけに一心不乱なつて男と腰をふるセックスは、最高に心地よかつた

後でそのときの痴態を振り返つた私は罪悪感と羞恥心によつて深く落ち込むことになる。それは分かっているけど、ご主人さまとするセックスが気持ちよすぎて、もう自分を止められなかつた

びゆるるるる♡

「……タツキチ……ごめんね♡……わらひい♡……ご主人さまのせーえきでえ♡……また♡……イツちやうみたいい♡……っ♡……れも♡……孕まないから安心してえ♡……これっ♡……最高に♡……気持ちいいのお♡……っ♡……っ♡……らめ

は恋人であるタツキチを裏切ってしまったことを猛省すると、これからに向けて気持ちを切り替えることにする

まるで宿屋の店主のイチモツの形に変わってしまったかのようなジンジンとした先程までのセックスの余韻が、私のおまんこに残り続けている。そのことが、私の体がタツキチ以外の男の手によつて女にされたという今日の体験が現実だということを、より深く私の心実感させていた。宿屋の店主により避妊の魔法をかけてもらえたことだけが、幸いである

私は脱力しベッドの上で仰向けに股を開いたままおまんこから宿屋の店主に生で出された精液を垂れ流し動けなくなつたはしたない体で、いまだにセックスにとろけたままの意識の中、これからはこの快楽に流されないことを心に誓つた

ユキノの娼婦修行♡

ユキノ視点

……じゅぷ♡……じゅぷぷ♡

私はベッドに腰掛ける宿屋の店主の股間に顔をうずめるようにして、床に膝立ちになりながら彼のイチモツを口に舐め啜えて奉仕をしていた。宿屋の店主に、彼専属の娼婦として働くための練習だと指示をされたからだ

(……何なのよこれえ♡……大きすぎじゃないっ♡)

少し前までの私ならば、タツキチ以外の男に性器をこうしてに口に啜えろなんて命令をされたら、例え任務といえども激高して暴れまわっていたことだろう。しかしいつの間にか私にとって、宿屋の店主の命令を聞くことが当たり前になっていった

「…………はむ♡…………っ♡……………(っ)ひゅじんさまあ♡…………きもひいいれすかあ♡…………っ♡…………あむっ♡…………っ♡」

すでに私は宿屋の店主と何回も裸で同衾を重ねていて、その度に私の体の中にはこんなにも大きなイチモツが入り込んでいたのかということ、私の唇で再確認をさせられる

(なんでこんなチンポに♡……………いつも負けちゃうんだろう♡)

そしてその度に、宿屋の店主の股間から伸びているこのペニスが私の体をおんなにも気持ちよくしてくれていたということを実感すると、私の心には彼の性器に対しての愛着が生まれていた

(…………これえ♡…………すっごく♡…………オス臭くて♡…………最低の匂い♡…………だっぺ♡…………タツキチのチンポじゃないんだもん♡)

宿屋の店主のペニスを咥えて口淫を続ける私の口の中に突然、宿屋の店主のネットネットとした生温かい感触の精液が心地よい一定のリズムで飛び出してくる。私が口に咥えた宿屋の店主のイチモツの先からヌルヌルとして青臭い液体がとろりと垂れて私の舌に広がる度に、私の脳内には強烈な爽快感が染み出してきていた

私の口で奉仕をして意中のオスを喜ばせたという達成感と、強くて優秀な男の性器から出てくる精液をメスの体が求めているという本能的な興奮が、私の体から合わさりながらあふれ出す。私が今、口に舐め含んでいるのはタツキチではない男の精液なのに、私の肉体が女としてこんなにも幸せな気持ちになることがすごく嫌だった

♡(ご主人さまのせーえき♡……すつごくう♡……いい匂い♡……本当に♡……最悪っ♡)

私の口の中から鼻にかけて広がる宿屋の店主の精液の味と匂いが、私の視界と意識を甘くぐにやりととろけさせ、私の体をゆるやかに弛緩させていく。今すぐにも私が口に含んでいるこのオス臭い液体を飲み干したくてたまらないという感情が、私の心から

どんどんとあふれ出てくる

動物のメスとしての本能的で淫乱な欲求が、タツキチ以外の男に対して私の心の底から生まれ出てきてしまっていた

「……………コクンっ♡」

そして大好物を飲み干すようにして私が一気に宿屋の店主の精液を飲み干すと、私の喉に引っかかるような感触と一緒に私に彼の体内に彼のヌルヌルとした精液が降りていく

(♡これ♡……………美味しくて♡……………私にだめになりそう♡)

宿屋の店主の精液を飲み込んだ後に私の口の中に残る濃密なオスの臭いと余韻の中で、私の意識には強烈な多幸感がグルグルと甘く駆け巡っていた。私の体は確実に、宿屋の店主による何かのスキルで作り変えられている。それを直感で分かるのに、私はこのとろりとした極上の快楽からどうしても逃げられなかった

「…………あのっ♡…………そのっ♡…………っ♡…………っ♡…………っ♡」

私がお先程美味しく飲み干した精液を、今までは宿屋の店主とのセックスで私の体内に直接生で注いでもらっていたということを思い返す。すると私の頭の中には、私の子宮にこの宿屋の店主の精液を出されたときにおとずれるじゅわあとした甘くて痺れるような多幸福感が、私のお腹の中心から全身をふにやりと溶かしながらじんわりとにじみ出ていくあの気持ちいい感触が蘇ってくる

(…………だめっ♡…………タツキチを裏切ることになる♡…………絶対に今、この人にエッチをおねだりしちやいけなっ♡)

そうなるともうだめだった。再び私は宿屋の店主とセックスをして、自分の体内にとろけるようなあの気持ちいい精液をそのまま直接敏感な私の粘膜の中に注がれるときの甘い感触をおまんこで味わいたくなってしまう。私の心が、宿屋の店主の精液によって変えられていく

そしてついに我慢ができなくなった私は、宿屋の店主に対して上目遣いでおねだりを始めてしまっていた。誰かに対して乙女のようにか弱くおねだりするのは、生まれて初めての経験だった

「——はやくっ♡——はやくう♡——ご主人さまのおちんぽお♡——私の中に挿れてく
ださい♡♡♡」

私は仰向けに寝たベッドの上で全裸のままM字に股を開いて、宿屋の店主のチンポを私のおまんこの中に誘うためのおねだりをする。こうなってはもう言い訳はできない。私自らがタツキチ以外の男の性器を自分の性器にぬぶりという感触で挿れてほしくて誘っているからだ。恋人であるタツキチには絶対に見せたくない、私の秘密ができてしまった

しかし何度も恋人であるタツキチを裏切って宿屋の店主との気持ちいい性行為を重ねた私の心からは、いつの間にか故郷に残したタツキチに隠れて宿屋の店主との生中出しセックスを楽しむことへの罪悪感が薄れてきていた

ぬぼ♡ぬぼ♡

「……ああん♡……つつ♡……つつ♡……ご主人さまのふつといおちんぼでえ♡……わらひのおまんこ♡……ズポズポしやれるのお♡……気持ちよくて♡……大好きなおおおお♡……つつ♡……つつ♡……」

宿屋の店主の大きくて太い魔性のチンポが私のおまんこの全部を広くみっちり挿し伸ばしながら私の体内にポツコリと埋まり込んでくると、異性のチンポを体内に挿れられるという気持ちよさの前に私の意識があつという間にふにやけていく

ここの宿屋の店主に教え込まれてしまった、私のお腹の中にある気持ちいいお肉を男のペニスを使ってにゆるにゆるという感触でかき分けるといふ楽しい遊びに、故郷に残した恋人を裏切った私は心からどつぶりとほまり込んでしまっていた

びゆるるるるる♡

「——あはあ♡——つつ♡——ごしゅじんさまのお♡——せーし♡——あつたかくてえ♡

まるで宿屋の店主の従魔スライムに、私のお尻の穴が気持ちよく食べられているかのようだった

私の体にこんなにも心地よくなれる場所があることを私はまた、宿屋の店主に教えられてしまう

（タツキチ……ごめんねえ♡……私のお尻の穴あ♡……すつごくエツちな場所に変えられちゃったあ♡）

お尻の穴をスライムに調教されたあとになり、アナル調教の余韻で私のお尻の穴が勝手にヒクヒクと開いたり閉じたりを繰り返す中で、私はタツキチに向かって謝罪をする

故郷に残した恋人であるタツキチの知らないところで、私は知ってはいけない性の快楽を宿屋の店主にどつぷりと教えこまれながら、退魔のシノビとして今まで鍛え上げてきた私の肉体を、性的なメスとしてたつぷりと開発されてしまった

……。

……。

……。

ある日、私は夢を見る。故郷に残したタツキチと二人でデートをする夢だ。その夢の中で私はタツキチと結ばれた。私は夢の中でタツキチとキスをして、お互いに裸で抱き合う。そして私とタツキチは、その夢の中でセックスをした

「タツキチいいいいい♡——すき♡——すき♡——すき♡——すきいいいいい♡」

私とタツキチの体が夢の中で一つにつながる。私が心から待ち望んでいた瞬間だ。そしていつか見たことのあるタツキチのかわいいおちんちんが私の体の中に埋まり込むと、何故か私の体には落胆の感情が溢れ出してくる。全然気持ちよくないのだ。でもそんなこと関係ない。大切なのは彼と私の愛なのだから

……すこ……すこ

私はタツキチと夢の中で愛のあるセックスを続けていく。これは夢だけど、現実でも起こって欲しい最高の時間を私は心をトロトロに溶かしながら堪能していった

(……あれ?……全然、気持ちよくない。……夢だからかなあ?)

……。

……。

……。

「——ッ!!!」

しかし私は夢の途中で目を覚ます。時刻は真夜中だ。私の体には強い欲求不満が溜まっていた。タツキチと結ばれるという最高の夢のはずなのに、私の体には宿屋の店主に今すぐ抱いてほしいという感覚が泉のように湧き出てくる

私の意識の中には先ほどまで見ていたタツキチと結ばれた夢の余韻が残り続けているのに、私のアソコは宿屋の店主のペニスを受け入れたくてムズムズしている。今すぐにも、宿屋の店主のあの太いチンポに私のおまんこを満たして気持ちよくしてもらいたくて仕方がない。でも、タツキチと結ばれるという夢の余韻を意識から消したくなくてなかった

今すぐ宿屋の店主に私のおまんこをかき混ぜてもらいにおねだりに行くか、もう一度眠りにつきタツキチとの夢の続きを見るか、私は二択を迫られていた

でも、私が選ぶのはもちろんタツキチだ。理性でそう判断をした私は再びベッドに潜り込むと、欲求不満を抱えた体のまま眠りにつくことにする。私は退魔のシノビだ。絶対にチンポなんかには負けない。誘惑に負けないように、私は心の中でつぶやいた

……。

……。

……。

……。

……。

……。

びゅるるるるるる♡

「——あはあ♡——ごしゅじんさまあ♡——わらひのおまんこお♡——ごしゅじんさまのせーしで♡——もつとネットネットによごしてええええええ♡——っ♡——っ♡——っ♡——」

ガク♡ガク♡ガク♡

(ごめんねタツキチ♡……私い♡……チンポに負けちゃったあ♡)

しかしついに、私のおまんこのムズムズに我慢ができなくなってしまうた私は宿屋の店主におねだりをする、タツキチと結ばれた夢を見た直後なのに宿屋の店主の太いチンポを正常位で体内に受け入れながら心地よくベッドの上で腰をふっていた

これは私の娼婦としての仕事ではない。ご主人さまからいただくお情けである。セックスをする前に私は宿屋の店主からそう言われた。でもそれでいいと、私の方から彼を受け入れた。私の心がセックスの快楽によつて、順調に壊れてきている

とぷ♡とぷ♡

(タツキチ……ごめんねえ♡……今日だけだからあ♡……許して♡)

「……あつ♡……あつ♡……あつ♡……あつ♡……あつ♡……また♡……せーし♡……中に生まれながらあああ♡……っ♡……わらひのおまんこお♡……っ♡……っ♡……イッ♡」

ビクン♡ビクン♡

私はベッドの上で仰向けに寝た正常位の体位に股を開いた体勢になりだいしゆきホールドで宿屋の店主の腰に両脚を回して強くしがみつきながら、私のおまんこの奥にまでたつぷりと注がれる彼の温かくて気持ちいい精液を一生懸命に膣口でコクコクと飲み干していく

私のおまんこの中が、宿屋の店主のペニスの先から出てくる熱い精液を粘膜に直接生で注がれるという原始的な快樂への反射でヒクヒクとうごめいている。そして私の膣壁がきゆうきゆうと気持ちよくオーガズムの余韻で収縮をする度に、私の肉壺に埋まり込んだ宿屋の店主のペニスの形が私の潤い敏感になった膣肉の感触ではつきりと分かるのが私の体をより強く興奮させていた

私の心が宿屋の店主専用のメス奴隷として今、生まれ変わり始めている。そのことを認識した私は心の中で恋人のタツキチに謝りながら、ベッドの上でへこへこと気持ちよくなった下半身を止められずにふり続けていた

……♡……♡……♡

(どうしよう♡……私の体あ♡……この人の精液で改造されちゃつてるうううう♡
 ……でもお♡……ご主人さまとのちようきようせつくしゅ♡……気持ちよすぎてえ♡
 ……これ♡……やめられないのおおおお♡)

宿屋の店主の精液を私の体内に注がれる度に、私のおまんこからはふわふわとした私の全身の感覚を甘く溶かしきってしまうような白い気持ちよさが、さーっと広がる波のようにしてとろとろという感触で私の体全体に満ちていく

甘くて心地いいどろどろとした快楽による私を知つてはいけなかつた気持ちいい痺れが、透明なコップに満たした水に何かの液体を垂らしたときに濁りが広がるような感覚で、私の全身を侵食していた

(タツキチい……ごめんね♡……でもっ♡……今日のセックスは♡……絶対に孕まないから安心して♡……宿屋の店主とのエッチは♡……ただの遊びなんだからあ♡)

そしてタツキチへの裏切りと、その裏切りへの報酬として宿屋の店主から私に与えられる甘い蜜のような快樂に、私の心が簡単に流されていく

ヒク♡ヒク♡

「……………あはあ♡……………つ♡……………わらひのおまんこお♡……………またあ♡……………ごしゅじんさまに♡……………ネトネトによごされちやつらあ♡……………タツキチい……………ごめんねえ♡……………つ♡……………れもお♡……………これ♡……………すつごく♡……………きもひいいんらあ♡」

朝になると、私はベッドの上で全裸に仰向けに寝て股をはしたなく開いた体勢のまま動けないでいた。うつろな意識の中で私は、故郷で私を信じて待つ恋人に今の気持ちを報告する

(タツキチ……………好きだよお♡)

宿屋の店主のペニスが先程まで入り込んでいた私のおまんこの穴が、私の心をダメにするセックスの余韻によってヒクヒクと開いたり閉じたりを繰り返している感触が爽

快だった

私の股間に張り付いている宿屋の主人の精液の感触が素晴らしく心地よい。タツキチではない異性の精液で陰唇を潤わせるという感覚にも、私の体が慣れてきている

私は故郷に残した恋人への愛の言葉をつぶやくことで、何とかこの誘惑に耐えようとしていた。これも退魔のシノビとして、任務を遂行するための試練なのだ。私は自分の心にそう言い聞かせていく

……とろり♡

(おまんこから♡……せーし♡……垂れてくるこの感触♡……すっごく好き♡)

しかしすぐさま、私のタツキチへの思いは宿屋の店主と私が先程までしていた気持ちいいセックスの余韻によって簡単に流されていく。そのことに気づいた私はタツキチへの気持ちを再確認するとともに、絶対にチンポなんかには負けないという誓いを再び立てるのであった

チンポがにゆるりと心地よくめぐり上げる度に、私の腰からアナルにかけては極上の甘い痺れが快樂として広がり続けていた

「…………もうすぐイキそうだからあ♡…………早くイツてええええ♡…………つ♡…………つ♡…………先輩との待ち合わせの場所に向かわなきや♡…………つ♡」

(…………リンネ先輩♡…………ごめんなさい♡…………でも♡…………遅刻しないように♡…………すぐにイクからあ♡)

私はこの後、リンネ先輩とユズハさん搜索のためのダンジョン探索の約束をしているのに、いまだに宿屋の店主とのセックスを楽しみ続けている。宿屋の店主が私のお尻の穴にチンポを突きこむのをやめてくれないと言うよりも、もうすぐ私の体におとずれるであろう深くて心地よいオーガズムをアナルの快感で味わいたいという私の欲求が、宿屋の店主とのセックスをいつまでもやめさせてくれなかった

異性のペニスをおまんこではなく、ましてやお尻の穴に性感として啜えこんでいてリンネ先輩との待ち合わせの時間に遅刻するなんて、退魔のシノビとしてあるまじき失態

私は意識の隅に私のお尻の穴の中に埋まっている宿屋の店主の太いチンポの感触をズンと重く残しながらも、私の体が絶頂に至ったことによつて私のヒクヒクと痙攣する気持ちいいアナル周辺からにじみ出る甘美な快楽と、私のお腹の中から広がり続ける快感によつて私の全身を揺らすグワングワンとした心地いいオーガズムを心から堪能していった

私の体はすでにここの宿屋の店主によつて調教をされきつており、完全に淫乱な女としての肉体へと作り変えられてしまっている。私はそのことを頭で知りながら、こうして自らの性的な快楽を貪るようにして彼とのセックスに興じ続けている

お尻の穴でも絶頂をキメて気持ちよくなれてしまう私の体がすでに汚れてしまったことを、宿屋の店主のチンポで深くイカされながら私は恋人であるタツキチに心の中で謝罪していた

(…………めんねタツキチ。…………私っ♡…………もう♡…………戻れないかもしれない♡)

私はタツキチの恋人としてふさわしい女性ではなくなってしまったのかもしれない。

大好きになってしまった宿屋の店主のチンポへのお掃除フェラをねっとり口で行いながら、私はそんなことを考える

……じゅるるる♡……じゅるるるる♡

……。

……。

……。

「——ああ♡——ごしゅじんさまのおちんぽ♡——っ♡——っ♡——っ♡——っ♡——私のおまんこにポツコリはいってるうううううう♡——っ♡——っ♡——っ♡——」

リンネ先輩とのダンジョン探索を終えて宿屋に戻ると、私は再び宿屋の店主とのセックスに浸る。これは任務のためだと自分をごまかしてはいるが、ここの宿屋の店主とする気持ちいいセックスの時間が私にとっての、一日において最も楽しみな時間に変わっ

腰まで伸びた金髪に緑色の瞳、Gカップほどの巨乳を持つ赤い退魔服姿のシズネさんがタツキチにちよつかいを掛けるたびに、タツキチは興味なさそうなフリをしながらデレデレとしている。そして二人はどこかの建物に入った後に、裸でまぐわい始めてしまった

映像記録球の中では全裸になったタツキチが、同じく全裸になったシズネさんの上に覆いかぶさり拙い腰使いでへこへこと腰をふっている。そして私は宿屋の店主とベッドの上で腰をふった状態で、その映像記録球から目を離せないでいた

「——お、ほおおおおお——お、っ——お、っ——お、っ——いまはらめえええ——っ——こしい——ふらにやいれえええ——っ——っ——っ——」

ズポ♡ズポ♡

私以外の女と裸になって腰をふるタツキチの映像を見た私の中で何かが崩れていく。でも、依然として宿屋の店主は映像記録球を見続けている私のおまんこに向かって腰を

ふるのをやめてくれない

「——そこおとお♡——気持ちいい場所からああ♡——グニユグニユって潰しちゃう♡——らめなのおとお♡——っ♡——っ♡——っ♡——っ♡——」

私のおまんこの中にあるすごく気持ちいいお肉がセックスをしながら宿屋の店主のペニスの先でグニグニと押しつぶされると、私の全身には甘い蜜のような快感がとろりと濁って染み出してくる。タツキチの浮気を見て混乱し傷ついた心と感情を私は整理したいのに、宿屋の店主のチンポによって私のおまんこがグチュグチュとかき混ぜられていては何も考えられない

そして思考が混乱をし続ける私のドロドロに濡れたおまんこが宿屋の店主のチンポによってヌポヌポとこすりほじくられる度に、強烈な快楽と混ざり合うようにして私の意識がグチャグチャになって壊れていった

——びゆるるるる♡

あふれ出てくる

私の心を押さえつけていたすべてから解放をされたこの瞬間は、私の人生において最も爽快な時間だった

「……………主人さまあ♡……………もうっ♡……………全部どうでもいいからあ♡……………私のおまんこお♡……………いますぐう♡……………メチャクチャにい♡……………気持ちよくしてえ♡……………っ♡……………っ♡」

我慢する理由が何もなくなった私は、卑しく媚びたメスオークのようにご主人さまにおねだりをする。もう、私はタツキチのことを守らなくてもいいんだ。そう考えた瞬間に私の心から、退魔のシノビとして自分を鍛え上げてきた強い私がボロボロになって消えていった

——びゅるるるる♡

「——あっはあああああ♡——っ♡——っ♡——ごしゅじんさまのせーし♡——おまん

こにきたあああああああ♡——♡——♡——♡——きもひいひいひい♡——
 んほおほおほおほおほお♡——お♡——お♡——お♡——お♡——おほおほおほおほ
 ♡——♡——♡——♡——

ベッドの上で正常位になつて思いつきり股を開いて、タツキチのために我慢なんてせずに宿屋の店主と一緒に気持ちよく腰をふるセックスは最高だった。何で私は初めからこうしていかなかったのだろう。今は心からそう思う。強烈な快楽に収縮を繰り返す私のおまんこからは、後悔の感情が歓喜の涙のようにしてネットつきながらドポドポとあふれ出てきていた

そしてベッドの上で夢中になつて腰をふる私のおまんこの奥深くに宿屋の店主の温かい精液を注がれた瞬間から、私の脳の中では何かがぶつぶつと音を立てて切れ始める。爽快感な感触と一緒に私の頭の中で何かの線がプチプチと音を立てながら気持ちよく切れて弾ける度に、本当の私が解放されていった

頭の中でぶつぶつと何かが切れ続けている爽快感の中で私は、目の前にいる私とセックスをしているご主人さまの女になるために生まれてきたこと気づく。退魔のシノビ

として厳しい修行に耐えてきたのも、こうして私が身も心もご主人さま専属の女になるためだった。そのことを理解した私はベッドの上で卑しく腰をふりながら、身も心も私を征服しきつた彼に向かって服従を宣言することにした

「——わらひは♡——今日からあ♡——ご主人さまのおんなれすううう♡——からあ♡——わらひのからだあ♡——もつと気持ちよくしてええええ♡——つ♡——つ♡——」

いつも私を彼専属の女になるように誘つてくれていたご主人さまにシノビとして仕えることを誓った瞬間に、私のおへその下に刻まれた淫紋がピンク色に光り輝きだす。すると私の全身の感覚が、彼の淫紋からあふれ出てくる甘い多幸感によつてトロトロに溶ける快感と一緒になつてグチャグチャに混ざり合いながら満たされていった

そして、私の意識ごとすべてが白くてドロドロとしたご主人さまから与えられる快樂によつて犯され、溶かされ、支配され、許されていく

ズポ♡ズポ♡

退魔のシノビ リンネルート編♡

ユキノとリンネが初めてダンジョンに潜入をして、転移の罫によって離れ離れになった際に時間は遡る

リンネ視点

「……………」

気がつくと私は暗い部屋に閉じ込められており、全裸のまま四肢を触手によって拘束されてしまっていた。触手を何とか振りほどこうと試みるがビクともしない。ユキノは無事にダンジョンから脱出できたのだろうか。私はそのことを心配する。ユキノ、タツキチ。二人は結ばれて幸せになってくれ。どうやら私の命運はここで尽きるようだ

そして私が目を覚ましたことに気づいた触手たちが、うねうねとうごめきながら私の体に近づいてくる。その触手が私の全身を品定めするように這いずりだすと、何かの白い分泌液が私の全身に塗りたくられていった。きっとこれが触手の消化液なのだろう。それを体に塗りたくられたということは、私はこれから触手に食べられてしまうということだ

触手から分泌される白い液体を塗りたくられた私の体が徐々に熱くなってくる。これは私の皮膚を溶かされているからに違いない。私はそう判断をしたのだが、私の体には痛みが全然やってこない。むしろ私の肉体が、少しづつ脱力をしてきているようだった

「これは麻痺薬の類か。触手は私を保存食として扱うようだ。そうならば脱出のチャンスがあるかもしれないな……」

皮膚の表面が痺れるようなジンジンとした感覚を全身に感じながら、思考を切り替えた私は脱出のチャンスを伺うことにする。いつか触手からの拘束が緩む瞬間があるかもしれない。私はその可能性にかけることとした

秘部までも触手が弄くろうとするとは思わなかった。この触手を生み出したダンジョンマスターはきつといやらしい人間に違いない

——かぷう♡

「んふううううう♡……あつ♡……あつ♡……あつ♡……これはあ♡……つ♡……つ♡……らめらあ♡……つ♡……あつ♡……つ♡……か、かんたんにい♡……つ♡……つ♡……イカされるう♡……つ♡……つ♡……」

ビク♡ビク♡

万をも超えるおびただしい数のヌメリを持つイボイボが、私の股間の表面をネトネトといった感触で心地よくうごめいてくる。そして触手の口内に分泌された媚薬と相まって、ありえないくらいに強烈な快感に責められ始めた私の股間があつという間に絶頂をキメた

屈辱だった。退魔のシノビとして厳しい修行に耐えてきた私の肉体が、触手によつて

弄ばれている

しかし触手に弄くられている私の両乳首と股間は、おぞましいほどに気持ちがいい。その恐ろしいほどの快感によって、私のアソコからは何かの液体が吹き出すようにして分泌されているのが感覚でわかった

びゅ♡びゅ♡びゅ♡びゅ♡

私の股間をネットネットとしていて心地よい感触のまま覆い続けるその触手は、私が初めて股間から噴出した変な液体を美味しそうにごくごくと飲み干している。そして依然として私の股間を土手の部分からお尻の穴周辺までびっしりと縦に啜え込んだイボイボ付きのヌルヌルとした触手が、私の敏感なアソコの表面をうにゆるうにゆるうにゆるうといった気持ちいい感触で粘つくままにうごめき続けていた

ぐにゆう♡ぐにゆう♡

「——っ♡——っ♡——おごおおおお♡……おっ♡っ♡……おっ♡っ♡……お

「おおおおおおお——っ♡——っ♡——っ♡——っ♡」

突然、快楽に喘ぎ開いていた私の口の中に別の触手が無理やり侵入してくる。油断をしていた。呼吸をするために開けた口から触手が体内に侵入してくることなど想像もしていなかった。相手はモンスターなのだ。人間には考えつかない行為をしてくるときもある。私はその可能性を考慮していなかった自分を恥じる

しかしもう遅い。私は口内に触手の侵入を許してしまった。これから私の体がどうされてしまうのか。このまま成り行きに任せるしかない。私は絶対に、この責め苦に耐えきつてみせる。私は覚悟を決めた

とぷ♡とぷ♡とぷ♡

「——っ♡——っ♡——ぶぐうううう♡くくっ♡くくっ♡……っ♡……っ♡……っ♡♡♡……っ♡」

私の口内に侵入した触手の先から私の喉の奥に向かって、何かの液体が注入され始め

る。その液体の青臭い匂いが、私の鼻から抜けて外に逃げていった。私は気味の悪い液体を体内に注入されているという状況にえずいてしまうが、私の食道に入り込んだ触手が蓋になっていて私の胃に注がれ続ける液体の逆流を許さない。そのまま私は、触手によつて謎の液体を無理やり飲まされ続けてしまう

そして私の胃に触手から分泌された液体が満杯になると、私の体内には焼けるような熱が這い回り始めていた。触手に弄くられている私の全身の感度が一気に上昇をしていく。私の体内に流し込まれた謎の液体は、私の体をさらに無理やり発情させる物質だったのだろう

しかし今からではもう何も抵抗できない。私は気を確かに持ち、次に来る責め苦に対しての心を準備をするだけであつた

「——らめらああああ♡——イ、グっ♡——イ、グっ♡——イ、グっ♡——イ、グっ♡——っ♡——イ、グうううううううう♡——っ♡——っ♡——っ♡——っ♡——」

ガク♡ガク♡ガク♡

次第に私の全身が性器になつてしまつたと錯覚するくらいに敏感になり始めていき、気がつくと私の体は皮膚の表面を触手がうねうねと這いずるだけで絶頂を迎えてしまふほどに敏感になつていた。そしてそれが、私の体が自分の意志とは無関係に跳ねてしまふくらいに気持ちいいのだ。触手に四肢を拘束された状態で唯一自由に動ける私の腰だけが、情けなく前後にへこへこ心地よく動いているのが自分でも信じられない

「——なんなんらあ♡——これえ♡——あ♡ つ♡——あ♡ つ♡——あ♡
 ♪ あああああああ♡——つ♡——つ♡——んぐうううう♡……つ♡……つ♡……つ♡
 ……お♡…お♡…お♡…お♡ おおおおお♡……つ♡」

快樂によつて身をよじり続ける私の口から、自分でも出していることを認めたくない獣のようなあえぎ声が出続ける。気持ちいいというだけで、私の体はこんなにも乱れてしまふものなのか

しかし、こんなにも私の体が気持ちよくなつたことなんてない。私も乙女だ。一人で隠れ自慰をしたことはあるが、こんなふうになんてならなかった

「あつ♡——あはあ♡——なんらあ♡……つ♡……つ♡……わらひの頭のなかあ♡……つ♡……触手にい♡……いじくられてるううう♡——つ♡——つ♡——つ♡——つ♡——」

ビクン♡ビクン♡

私の耳の中に侵入した触手がうねうねとうごめく感触と一緒にあって、私の脳の中からプチプチと何かの線が切られるような音が聞こえ始めてくる。そして恐ろしいことに、私の頭の中に侵入した触手によってぷつりと私の脳の中にある何かの線が切られる度に、私の全身には強烈な多幸福感がどぼどぼと染み出してきていた

クチュ♡クチュ♡

「あたまのなかあ♡——くちゆくちゆされてるのお♡——くすぐったくてえ♡——なんれえ♡——これ♡——きもひいいのおおお♡——おほおおおおお♡——あ♡つ♡——あ♡つ♡——あ♡つ♡——つ♡——」

私の体にある穴という穴から涙や鼻水、よだれ、愛液がどろどろになつて垂れ落ちてくる。私の全身が幸せ過ぎる快樂によつて弛緩しきつてしまい、一切の力が入らない

私の耳の中に侵入をした触手によつて私は頭の中を弄くられているのに、何故か私の心は感動して涙があふれ出てくるという異常事態に、私の意識が混乱をさせられていく

そして私の脳の中から勝手にあふれ出てくる強烈な多幸福感に目の前を支配された意識の中で私は、頭の中でぶつりぶつりという衝撃が連続して生まれ出るという気持ちよくて甘い感触を何もできずにただじつとして味わい続けていた

「あはっ♡——あはははあ♡——あははははあああああああ♡——っ♡——っ♡——」

ガク♡ガク♡ガク♡

触手によつて脳にある何かの線を引きちぎられる度に、私の頭の中からは今まで私が守つてきた誓い、思い出、里への忠誠心、大切な感情、そういつたものが快樂と混ざつ

「——あはあ♡……なんらこれえ♡……っ♡……っ♡……っ♡……あっ♡……っ♡……
そとに……出られたあ……」

しかし突然、私の全身を飲み込んでいた触手が弛緩すると、触手から分泌された粘液でベッドに汚れきった私の体そのまま外に排出される。四肢を触手に拘束されているわけでもない。私の体は自由だ。一体、何が起きたのだろう

しかしここで理由を考えている暇はない。またいつ、私の体が触手に襲われるかわからないのだ。これが最後のチャンスだと考えた私は全身の力を振り絞ると、何故か床に脱ぎ散らかされていた私の青い退魔服を回収してから急いでその場を脱出する。そして運がいいことに、ダンジョンから脱出するためのチェックポイントを近くの場所で発見した

退魔服を着てダンジョンから脱出した先でユキノと出会い、私は窮地を逃れることが出来た。今の所、触手によって頭をいじくり回されていた私の思考にこれといった変化はない

しかし恐ろしいことに、触手に全身を弄くられたときの感触を思い出すと、私の股間が下着ごとトロトロに濡れてしまうように体が変わっていた。これが触手に襲われたときの後遺症なのだろうか？

これから私の体にはさらにどんな変化が襲ってくるのか想像をすると不安に押しつぶされそうになるが、ここで弱音を吐くわけにはいかない。せめてこの任務が終わるまでは、このことをユキノに気取られないようにしなくては

私は恐怖に押しつぶされてしまいそうな心を何とか冷静に保ちながら宿屋に戻ると、疲れた体を癒やすために休憩を取ることにした

閑話 リンネ処女喪失♡

リンネ視点

「…………ダメだ…………眠れない…………」

深夜、私は目を覚ます。ダンジョンで触手に捕まり体を弄くられてから、私の体がうずいて仕方がないのだ。こういう経験は始めてだった。私のお腹の中心がムズムズし続けていて、内側にある変な場所のお肉をかきむしりたいような感覚があふれ出てくる

しかしその場所は私の指では届かないくらいに奥の方だ。私は火照る体を冷ますために寝ているユキノを起こさないように、外の空気を吸いに部屋の外に出ることにした

「…………ふう」

私が宿屋のラウンジで休憩をしていると、気を利かせてくれた宿屋の店主が飲み物を

用意してくれる。彼いわく、よく眠れるようになるお茶だそうだ。私はそのお茶を飲みながら一息をつく

私は気を紛らわすために宿屋の店主と他愛もない会話をすることにした。しかし、ダンジョンで触手に襲われたときの影響か、今すぐに私の体を異性に抱いてほしいという欲求が心からドロドロとあふれ出てくる。こんな感覚、今まで感じたことがない

そして都合のいいことに、私の目の前には見知らぬ異性がいる。そのことを意識した私の呼吸に甘い熱がこもり始めた。だがここで誘惑に流されてはいけない。里に残したタツキチを裏切るわけにはいかないからだ。そのこと考えながら、私は何とか自分の心を冷静に保とうと努めていく

「私たちには実は、探し人がいるのですが……」

私は自分の気持を切り替えるために、任務について考えることにする。ついだ。ユズハ師匠について何か知っていることはないか、宿屋の店主に聞いてみることにした。すると宿屋の店主が私の質問に対し、ユズハ師匠を見たことがあると答えてくれる

しかし宿屋の店主からはそれ以上のことは教えてもらえなかった。他人のプライベートについて簡単に教えたくないとのことだ。もしかしたら宿屋の店主はユズハ師匠と知り合いで、私が思っているよりも近い関係なのかもしれない。そう予想した私は、ユズハ師匠の搜索任務に手がかりを見つけたことを嬉しく思う

ユズハ師匠を探すために故郷を離れて数ヶ月、早くタツキチの顔が見たかった

私はタツキチに片思いをしている。実の姉である私の恋心が実ることはないけれども、少しでも長くタツキチの顔を見ていたくて私はずっと家に居続けてしまった

タツキチと長く過ごしたいがために男性からの誘いを断り続けていたら、いつの間にか周りから鉄壁の女なんて言われたりもしたな

クールな表情でバサリと、異性からのアプローチを断り続けていると里のみんなから言われていた。しかし、私にアプローチを掛けてくる男性の多くは私の体目当てなことが多かったことも事実だ。私は自分の胸にぶら下がる豊満な乳房を疎ましく思う

どうやら男性には女性のおっぱいを触りたいという欲求があるようなのだが、私はタツキチ以外に私の乳房を触らせる気などなかった

そんなことを考えながらも、私は宿屋の店主との会話を続けていく。何とか彼の信頼を得て、ユズハ師匠に関する情報を教えてもらいたかった

しかし、あまり退魔のシノビについての情報を彼に教えるわけにもいかない。私はどうしたものかと思悩む。私のその様子に気を利かせてくれたのか、宿屋の店主が誰にも聞かれない場所で話をしないかと提案をしてくる

話したくないこともあるだろうけど、事情を話してくれば協力できることをもあると宿屋の店主は私に伝えてくれる。私は彼の提案に乗ることにした

宿屋の店主によこしまな考えがあっても大丈夫だ。私は退魔のシノビとして武術を修めてきた。だから普通の人間に遅れを取ることはない。もし彼が私の肉体を目当てにいやらしい行いをしてきても、返り討ちにすればいい

られると、彼はその乳首を執拗に責めてくる。そしてそれが最高に気持ちよかった。宿屋の店主に弄くられている私の乳首が、硬く勃起をしてジンジンと張っている感触が心地いい

「…………ち、ちくびい♡…………っ♡…………っ♡…………そんなにいじるなあ♡…………っ♡…………っ♡」

私が言っても宿屋の店主は聞き入れてくれない。彼は私の乳首をつねるようにしてこねくり回すと、今後は私の乳房をそのまま引つ張りながらいやらしく持ち上げてくる。私の胸にぶら下がった大きなおっぱいを道具のように振り回されているのに、私の乳首からはとろけるような快感がにじみ出てきていた

（…………なんだこれえ♡…………何でこんなに気持ちいいんだああ♡）

宿屋の店主に触られている私の体がやたらと気持ちいい。私が自分で自分の体を慰めていたときよりなんかとは段違いだ。これも触手に襲われた後遺症なのか。私は自分の体におとずれた変化に戸惑いながらも、店主からの執拗で心地いい愛撫に意識をとろけさせていく

「あつ♡——あつ♡——あつ♡——つ♡——つ♡」

グニ♡グニ♡グニ♡

宿屋の店主の右手が遠慮なく私の股間に伸びると、私の膣口に二本の指をねじ込んでくる。その瞬間に、おまんこからあふれ出る快樂に私の体がビクンと跳ねた

内臓を直接指でグチャグチャとほじくられているような感覚で、私のおまんこが宿屋の店主の指によってとろとろに甘くかき混ぜられていく。見ず知らずの他人に私の股間を弄くられているというのに、私の体は里でタツキチのことを思いながら自慰をしたときの何倍も気持ちよかった

——ピトリ♡

そして初めて味わう強烈な快感に戸惑っている私の股間に、宿屋の店主の股間から伸びた硬いきり立つイチモツがあてられてしまう。これ以上はいけない。私はベッド

の上で股を開いて仰向けに寝た体勢でそう思うが、何も抵抗ができなかった。むしろ早くそれを、私の体内に挿れてほしいとすら思ってしまう。私の思考が、明らかに変わっていた

ポーンと火照る熱を頬に感じながら、私はそのまま成り行きに身を任せてしまう。退魔のシノビとしてあるまじき醜態だった。そして私が何も抵抗をしないことを肯定のサインと受け取ったのか、宿屋の店主が私の股間に向かって腰を押し込むと、私のお腹の中に内臓をかき分けられるような感覚と一緒にあって彼の硬い異物が入り込んでくるのがわかった

それと同時に、私の全身にはおまんこから生まれ出た強い快感が広がり始める。私の人生におとずれた破瓜の瞬間は、そんな感じだった

——ぐにゅううううん♡

「——あつ♡——つ♡——つ♡……タツキチのじゃない……おちんぽお♡……つ♡……わたしのおまんこにい♡……はいっっちゃ♡……つたあ♡……つ♡……つ♡……」

いつかタツキチに捧げられたらいいなと乙女のような淡い期待を抱いていた私の処女が、別の男のペニスによつてあっけなく破られてしまう。しかし私のその恋心が破られたことよりも、自分のおまんこに異性のペニスを挿れるという行為によつて私の体が味わうすばらしい快樂のほうか、今の私にとつて重要だった

私が片思いをしているタツキチと体を重ねるのではなく、見知らぬ異国の地で見知らぬ宿屋の店主とするセックスなのに、私の肉体は気持ちよくなつてしまつたのだ

「——あつ♡——っ♡——んっ♡……っ♡……くううう♡……っ♡……っ♡——」

初めて味わいセックスの快樂にうめき声を上げる私の体に、全身がとろけて跳ねるような快樂が駆け巡つていく。破瓜の痛みがあるが、その何倍も快樂のほうか強かつた。そして宿屋の店主が私の体に回復魔法を掛けると、破瓜の痛みが消えた私に残つたのは快樂だけだった

私の肉体はこんなにも気持ちいいことを味わえる体だったのかという気づきと快感

が私の思考を満たしていく。そして初めて味わうセックスの快感に私は訳がわからな
いまま、宿屋の店主とベッドの上で一つにつながり腰をふった

「——んっ♡——っ♡——っ♡——あああああ♡……っ♡……っ♡」

宿屋の店主が私の体に腰を打ち付ける度に、私の胸に膨らんだ二つの乳房がぷるんと
揺れる感触が心地よかった。硬いペニスによつてグチユグチユと音を立てながらヌル
ヌルとした感触でかき混ぜられていく私の股間の内側からは、依然として素晴らしい快
楽があふれ出てくる

気がつくとは私は宿屋の店主の体に両腕と両脚でしがみつくと同時に必死に腰を
ふっていた。私が初めて体験したセックスはそれくらいに気持ちよかった。宿屋の店
主のチンポが私のおまんこを気持ちよくしてくれる度に、私の心が強制的に彼を好きに
させられていくようだった

びゆるるるる♡

「——そんなにやあ♡——タツキチじゃない男に♡——中に出されちゃったあ♡——つ♡」

私のお腹の中に、すぐに精液だと分かる生温かくてネトネトとした液体の感触が広がっていく。その瞬間に、私の興奮が最高潮になって心が弾けた。異性に種付けをされるという行為に私の女としての肉体が喜び始めると、私の全身がふにやりと甘く溶けてしまったかのように気持ちよくなっていく

（おまんこにせーし♡……直接だされるとお♡……こんなにも♡……すごいのかあ♡……何だこれは♡）

ゾク♡ゾク♡ゾク♡

私は恋心を抱いているタツキチ以外の男の精液をおまんこに出されているのに、私の体には満足感と充足感がどろどろになって泉のようにあふれていた。そのことに私の心は不服を感じながらも、私の視界が強すぎる快樂という現実の前にグニヤリと溶けて混ざって歪んでいく

「——あはあ♡……っ♡……せーし♡……気持ちいいっ♡……っ♡……っ♡……おっ♡……おっ♡……おっ♡……おっ♡……おほおおおおおお♡……っ♡……っ♡……」

ビクン♡ビクン♡

そして私はそのまま、宿屋の店主とのセックスを継続することを選んだ。彼との気持ちいいセックスの前に、私はいつの間にか里に残したタツキチへの恋心や罪悪感など忘れて一心不乱に腰をふっている

「……中につ♡……せーし♡……出してくれえ♡……っ♡……あれえ♡……すっごく♡……気持ちいいんだあ♡……っ♡……っ♡……」

今の私はベッドの上ではしたなく四つん這いになった体をバックの体位で後ろから宿屋の店主の硬いペニスに突かれながら、はしたなく彼におねだりをしてしまっただ

私の意識が、私が先程初めておまんこの中に異性の精液を出されるという経験をしたときに味わった、あのネットネットとした液体がお腹の奥にひっかかるような感触と一緒に なって私のお腹の奥から気持ちいい快感が全身にぶわりと広がっていく感覚をもう一度味わいたいという欲望に支配されていく

私の思考が、宿屋の店主とのセックスを経験したことで明らかに変わってしまった

私は初めてのセックスを経験してからすぐに異性と体を重ねるといふ快楽にどっぷりとはまり込んでしまっている自分を恥じるが、そんな余裕もないくらいに、宿屋の店主とするセックスは凄まじく気持ちよかった

「……おまんこの中でえ♡……おちんぼ♡……ピクピク動いてるううう♡……っ♡
 ……っ♡……そのままあ♡……私の中に出してくれえええ♡……あっ♡……あっ♡
 ……あっ♡……っ♡……っ♡……っ♡」

そして私のおねだりに応えるようにして宿屋の店主が私のおまんこの奥にまでペニ

スを突き込むと、そのまま私の膣の奥にたつぷりと彼の精液を注ぎ込んでくれる。私の体に、一度味わっただけで大好きになつてしまった精液を注ぎ込まれるという瞬間がまたおとずれた

とぷ♡とぷ♡

(——きた♡——きた♡——きた♡——きた♡——きたああああ♡……おまんこのなかにい♡
 ……せーし♡……とろとろに♡……だされるのお♡……生っ♡……あつたかくてえ♡
 ……すっごい♡……きもちいいいい♡)

ゾク♡ゾク♡ゾク♡

私は情けなく腰をへこへことふりながら、四つん這いになつた体勢で宿屋の店主からの種付け行為を楽しんでいく。彼によって避妊の魔法をかけられており、今の私に妊娠の心配はない。そのことが私の心から、宿屋の店主として生中出しセックスへの罪悪感を消してしまつていた

と♡♡♡♡♡

「……………これえ♡……………くせになるう♡……………つ♡……………つ♡……………なんれえ♡……………こんな
にいい♡……………せーえき♡……………きもひいいんらあ♡……………つ♡……………つ♡……………」

ゾク♡ゾク♡ゾク♡

宿屋の店主に直接、私の体内に生の精液を注ぎ込まれたときに私の体に広がるどろりとした強烈な快感にベッドの上で仰向けに寝て正常位に股を開いたままの体勢で私は酔いしれながら、今日のセックスを終える

すると帰り際に宿屋の店主が私の体に睡眠を八時間取ったのと同じ効果を得られるという回復魔法を掛けてくれた。次第に、私のとろけた意識がくつきりと戻りだす

(……………どうしよう♡……………おまんこからせーし♡……………垂れてきちゃったあ♡)

朝日が昇り明るくなり始めた宿屋の廊下を歩いていると、私のおまんこの奥から宿屋の店主の精液が垂れ落ちてくるのが、ヌルリとする自分の股間の感触でわかった

(……なんだこれえ♡……おまんこが精液でネトネトとしているとお♡……メスとしての万能感があふれ出てくる♡……私の体は♡……こんなふうに出ていたのか♡)

そして私はなんと、自分の股間が異性の精液によってネトネトと濡れているという感触が大好きになっていた。私の思考が、宿屋の店主によって変えられてしまったことを実感する

(でも、これ以上誘惑に負ける訳にはいかない。退魔のシノビとして、気をしっかりと保たねば……)

しかし私はいつもの平静な自分を思い出すと自分を戒め、ユキノが寝ているであろう自分の部屋に戻ることにした。宿屋の店主とのセックスは今回だけ。もう絶対にしない。心にそう誓う

※この後、感度を3000倍にされてメス堕ちした

エーデンリッツ学園編

「新人生の諸君、入学おめでとうございます」

俺は今、エーデンリッツ自由都市というところにあるエーデンリッツ学園への入学式に生徒として参加している。ひょんなことから俺はカマーランドの貴族となったわけだが、俺に貴族位を与えたフリードニヒ8世ちゃん曰く、貴族たるもの一応高等学園の卒業資格を持つていなくてはならないとのことなので、このたびエーデンリッツ学園への入学することになったのだ

学園生活のお供にはユキノとリンネを連れてきていて、彼女たちは俺と同じくエーデンリッツ学園の学生服を着て俺と一緒に入学式に出ている。二人は俺のメイド兼ボディーガードという役回りだ

エーデンリッツ学園で俺たちは魔術科への入学となった

俺がエーデンリッツ学園を選んだ理由だが、この学園は完全実力主義を称しており、授業に出なくても学期末テストに合格できれば単位をもらうことができるからだ。逆にどれだけ熱心に授業に出ようがこの学園では実力がなければ絶対に卒業できない

ということを謳っているが、実際は魔術を発動できれば合格できるレベルなので俺が安易に高等学園を卒業するためである

俺たちの実力を隠すことができるし、授業に出ることなくパリピのような学園生活を送って卒業していくという生活を俺が送りたいからだ

ちなみに誰でも卒業できるのはおこぼれをもらえろというだけの話であり、エーデンリッツ学園を成績上位で卒業した証である者に配られる金メダルはバチバチの実力者にしか与えられず、その金メダルを持っているだけで周りから一目置かれるレベルではある

また、学園のあるエーデンリッツ自由都市は商業ギルドによる自治が行われている独

立した都市であり、外交上は貴族を敬うが、内政では貴族も平民も関係ない

エーデンリッツ学園も同じような制度を採用していて、簡単に言うと、面倒くさい貴族付き合いをしなくても済むということだ。つまり、エーデンリッツ学園内では貴族も平民も同等という扱いなのだ

「新入生の皆様の学園生活に幸あらんことを」

新入生が一同に集められたでかいアリーナのような建物の舞台上では、金髪ロングヘアに碧眼のスレンダーな美女が俺たち新入生に向かって挨拶をしている

彼女の名前はソフィアといい、この学園の最上級生である四年生の生徒会長だ。ちなみにソフィアはラグーンという男子生徒とラブラブな恋人であるということが学園内では有名なようだ。美男美女の理想的なカップルだと噂されている

「おつかれさま。ハニー」

今も舞台脇では、新入生への挨拶を終えたソフィアに向かって金髪に青い瞳をしたイケメンが声をかけているのが見える。あれが学園内で噂のカップルということか

ソフィアに声をかけているラグーンの周りには彼女の他に複数人の男女が集まっていた。青い髪に赤茶色い瞳をした男子生徒の学園服を着たのがニコル、黒髪ショートカットに青い瞳で女子生徒の学園服を着ているのがヴィヴィ、茶髪のショートカットに茶色い瞳をした女子生徒の服を着ている人物がマリアーナという名前らしい。どうやら噂によると、彼らはこの学園内では有名な美男美女の仲良し集団なんだそうだ

俺と同じく入学した周りの生徒達が話すそんな噂話に耳を傾けながらも、俺はこれから四年間の学生生活をどのように過ごしていくかを考えていた

校内見学

エーデンリッツ学園に入学した俺たちだが、いきなり授業というわけではない。入学の後に簡単なガイダンスが行われて今日はお開きとなり、次の日から自分が受ける授業を選択しながら学園生活を送るよう説明をされる

ガイダンスが終わった後、せっかくだし俺は学園内の散策をすることにした。これから四年間もお世話になる場所だ。どこに何があるのかを知っておいたほうがいい。それに俺と同じ考えなのか、入学したばかりの新入生が学園内をうろついている姿がちらほら見える。これならば本来なら入ってはいけない場所に素知らぬふりをして入っても軽く注意されるだけで済むだろう。入学したばかりだという大義名分をここで存分に活用しなければな

……。

……。

……。

「……………これは、やばいものを見つけてしまった」

学園内をうろつきながらたまたま見つけた生徒会室を当たり前のように物色していると、俺は資料室で興味深いものを見つけることができた。なんと、生徒会予算の決算書に改ざんの跡が見られたのだ

これが露見すれば今年の生徒会は大変なことになるだろう。俺は生徒会に対する素晴らしいアドバンテージを手に入れることができようだ。なので俺が生徒会室に無断で侵入したことなど些事である

俺がルンルン気分でのこの資料をどう有効活用しようか考えていると、生徒会室に誰かが入ってくる気配がする。俺は資料室に息を潜めながらせつかくだしこのまま成り行きを伺ってみることにした

「ちよつと！あんまりベタベタしないでよね！」

「別にいいじゃないか。まったく。ソフィアはケチだな〜」

生徒会室に入ってきたのは相思相愛カップルとして有名なソフィアとラグーンだった。しかし、噂とは違い何やら二人の様子に違和感がある。俺はこのまま二人の会話を盗み聞きすることで、二人の関係を確認することにした

「恋人のふりをするのはみんなの前だけの約束でしょう？あんまり馴れ馴れしくしないでよね！」

「ふーん。僕に逆らうと、君の家族がどうなるか分かってるのかな？」

二人の会話を聞いてみると、どうやらラグーンは表向きは誠実な男を演じているが、実は最近エーデンリッツに新規参入してきた後ろ暗い組織のボスの息子であり、裏では色々と悪事を働いているようだ

ラグーンの参加している組織は「ガーゴイルの爪」という組織で、とてつもなく汚い手を使い色々な街で古くから裏社会を支える任侠マフィアを支配しながら、世界への影響力を強めている犯罪組織だそう。これは後になってリンネが調べてくれた

ソフィアの家族は表向きは商人だが、いわゆる古いタイプの任侠一家でエーデンリッツの街を裏から支えている団体の一つらしい。そして汚い手段により冤罪を着せられそうになっている家族を救うために、ソフィアはラグーンと恋人のふりをするようになったようだ

もともと二人が仲の良い恋人のふりをするのは学園生活を送っている間だけであり、卒業後にソフィアは奴隷のように扱われることになるだろう

ラグーンは好青年のふりをしながらお気に入りの容姿を持つ女の子を侍らせハーレムを築くつもりらしく、学園生活中はソフィアの体に出さないでいたらしい。未だにソフィアは処女のように。お前の処女は卒業後に俺が味見すると、ラグーンは生徒会室内で勝ち誇ったように豪語していた

四年もかけてソフィア以外の美女たちに清い信頼を作ったから、これからどうやって集めた彼女たちを嵌め落として無理やりな肉体関係を持つとかと、嬉しそうに舌なめずりをしながらラグーンはソフィアに向かって語っていた。それをソフィアは悔しそうな顔で聞いている

ちなみに生徒会の会計役がラグーンだ。これはいきなり変な人間関係に首を突っ込んでしまったようだな

「……………あんっ♡……………ごしゅじんさまのちんぽお♡……………ふつといのお♡……………っ♡……………あっ
っ♡」

ぬぼ♡ぬぼ♡

リンネがソフィアとラグーンの周辺と人間関係を調査するために出て行ってしまったために、俺の警護をするために残ったユキノと息を殺してセックスをしながら俺は資料室に残りソフィアとラグーンの会話を盗み聞きしていく

ユキノは制服を着たまま脱いだ下着を右足にぶら下げた状態で資料室の壁に手をかけ、立ちバツクの体位になり俺のチンポを美味しそうに膣内に受け止めている

学園内で制服を着た女子とこっそりセックスをすることに憧れていたんだ。さっそく夢が叶って良かった

びゅるるるる♡びゅるるる♡

「——ああ♡——っ♡——ごしゅじんさまのせーし♡……中にいっぱい出てきたあ♡」

険悪な会話を続けるソフィアとラグーンに音でばれないように注意をはらいながらユキノのおまんこに中出しをすると、ユキノは肩をすくませるようにして快樂に身を震わせながら俺の精液をヌルヌルとして温かいおまんこで受け止めてくれる

体内に俺の精液がじわりと広がってく度に快樂によってユキノの膣肉がきゆうきゆう

うと自動的に締まり始め、ゴクゴクとユキノは俺の精液を美味しそうに子宮で飲み干していった

……じゅるるるる♡……じゅるるるる♡

「ひゅじんひやまあ♡……ひもひいいれすかあ♡……っ♡……っ♡」

中出しが終わった後はお掃除フェラだ。ユキノはセックスが終わったばかりで火照った頬を赤く染めながら、美味しそうな顔で制服姿のまま資料室の床にひざまずいて俺のチンポを舐め取ってくれる。ユキノはフェラの技術も格段に上達した。最初の頃の拙い舌使いとは違い、今はまるで別の生き物のようにウネウネと俺のチンポを咥えるユキノの生暖かい口内がうごめき続けている。素晴らしい舌使いだ。彼女にフェラを仕込んだかいがあつたな

先程ユキノのおまんこに中出しをした俺の精液がポタポタと資料室の床に垂れ落ちてしまっているが、後で掃除をすればいいだろう

……びゆるるる♡……びゆるるる♡

「まあいいわ！あくまであんたとは恋人のフリなんだからね！それより授業に遅れちゃうからそろそろ行くわよ。ダーリン！」

俺がユキノの口内に気持ちよく射精をしたタイミングで、恋人の演技を再開したソフィアたちが生徒会室から出ていく。二人のその姿を資料室に隠れて見送る俺の足元では、ユキノが舌の上に広がり始めた俺のヌルヌルとして生暖かい精液を恍惚の表情のまま一気に飲み干していた

「ご主人さま。これからどうなさいますか？」

俺への奉仕を終えたユキノがまだ火照った頬のまま、ノーパンの状態で冷静な顔になり俺に尋ねてくる。さて、なかなか興味深い場面に出くわしてしまったようだ。この情報を有効活用して俺がどうやって楽しむかが、これからの課題だな

とある日の午後

「さて、今日は何をしようか」

俺がエーデンリッツ学園に入学してから一週間が経つ。始めのうちは俺も一応授業に出ていたのだが、やはり高等学園といっても新入生に対しては魔術全般の基礎中の基礎しか授業が行われていなかったため、暇を持て余した俺はサボタージュをすることになった。いわゆる自主休講というやつだ

「君たち、新入生だよね？」

ぶらぶらとのんびりユキノやリンネと並んで学園内を散歩しながら今日は何をしようか考えていると、俺達に声をかけてくる男がいる。キラキラとした胡散臭いイケメンスマイルで俺たちに声をかけてくるのはラグーンだ。ラグーンはまるで俺のことなど端から存在しないかのように振る舞いながら、俺と一緒に歩いていたらリンネとユキノに

困ったことがあつたら助けになるよとやさしく囁いている

「そんな冴えない男より、僕のほうがずっと君たちをずっと満足させることができると思っただけどな〜」

そして取り付く島もなくリンネとユキノにお誘いを断られてしまったラグーンが苦し紛れに暴言を吐いてきた。その言葉を聞いたリンネとユキノから一気にぶわりと殺気が漏れ始める。しかし学園内での殺生は基本的に禁止と俺が命令をしているため彼女たちが殺気を漏らしたのは一瞬だけで、二人は自重に努めることとなった

「ラグーン先輩は、どうやら噂で聞くのとは全然違う人みたいですね」

「お前みたいな冴えない奴にまともな態度を取る必要もないだろ？それに、このことを誰かに言っても誰もお前のことなんて信じないよ。お前がみんなの仲間はずれにされるのが落ちさ〜」

どうにも散歩をしていてたまたま俺たちが人目のない所にいたためか、ラグーンは本

来の横暴な態度で俺たちに対応することに決めたらしい。たしかこいつの所属する組織は「ガーゴイルの爪」という裏組織だっけか？よし。これからの暇つぶしの一つにガーゴイルの爪いじめを追加しておこう。俺は心の中にあるやることリストに一つ予定を付け加えることとした

ヘラヘラと笑っているラグーンを放っておいて俺たちはその場を後にする。俺は男と関わる時間を極力減らしたいんだ。男と喧嘩する時間があるなら俺は誰かとセックスをしていたい。これ以上は時間の無駄と判断した

「ご主人さまあ♡……なんで何も言い返さないんですかあ♡……っ♡……っ♡」

「——あっ♡——あっ♡——あっ♡……ご主人さま♡……そこお♡」

クチュ♡クチュ♡

ラグーンを滅したいと憤慨するリンネとユキノのおまんこに人目の無い場所で手マシをしながら、俺は彼女たちの怒りを沈めていく。ラグーンみたいな奴はもう少し泳が

せてから遊ぶほうが楽しいことが起きるのだ。俺の直感がそう言っている

一回戦を終えた俺達が再び校内を散策していると、今度はソフィアと出くわした。ちやうど都合のいいことに、彼女は一人のようだ

「ソフィア先輩……相談したいことがあるんです……」

俺はラグーンとの出来事をソフィアに伝えることで、一騒動を起こすことに決めた

……。

……。

……。

「……そう。ラグーンがごめんなさいね。彼には私からきちんと言っておくから。それと、お詫びってこんなことでいいの？」

俺の話聞いたソフィアが申し訳無さそうに謝罪をしてくる。俺から聞いたラグーンの態度を彼女が疑いもしないのは、ソフィアが過去に何度もこういったトラブルに遭遇しているからだろう。俺は何かお詫びをしよう彼女に生徒会室を見学したい旨を伝え、素知らぬ顔で生徒会室見学にしけこむこととした

「二度、憧れの生徒会を見学してみたかったです。ソフィア先輩。ありがとうございます。……へー！これが生徒会の資料ですか！」

生徒会室内を散策する俺をソフィアは何も止めない。どうやら生徒会予算の横領に彼女は関わってはいはないようだ。むしろ何も知らないのだろう。現にこうして俺が改ざんされた会計書を興味深そうにペラペラとめくっているのに、彼女は微笑ましいものを見るかのように笑顔でいるだけなのだから

「あれ？ソフィア先輩。会計書のここの部分、おかしくないですか？」

俺が会計書の改ざんを指摘すると最初は怪訝な顔をしていたソフィアだが、本当に会

計画が改ざんされていることを知った瞬間から彼女の顔色が一気に悪くなる。その事実にもものすごくショックを受けた様子の彼女は、俺に向かって真剣な顔をしながら罪を償うと伝えてきた

「ソフィア先輩。流石にこれは見逃せませんよ」

「……生徒会のトップとしてきちんと罪を償うわ」

どうやらソフィアはこのちんけな横領の罪を償うつもりのようなのだ。彼女自身は何もしていないが、生徒会のトップとしての責任があるのだろう。そして彼女には生徒会会計のラグーンに対しても思うところがあるようだ。ラグーンを道ずれにするつもりかな？

しかしそれでは俺にとって何も面白くない。だから俺は少し状況が俺に対して有利に動くよう、ソフィアの責任感を言葉で刺激してみることにした

「でも、このことが露見すると、生徒会の他のメンバーやソフィア先輩がいつも仲良くし

「いるメンバーも謂れない誹りを受けることになりますよ？」

「そんな！彼女たちは何も関係ないじゃない！」

このことには関係のない自分以外の人間にも不幸がおとずれることを示唆すると、案の定ソフィアは血相を変えて俺に話しかけてくる。どうやらこの方向で行けば彼女の心を墮とす切っ掛けが掴めそうだ

「でも、横領をしていた人たちと仲良くしていた。それだけで先輩と仲の良かった人たちを横領の協力者やおこぼれに預かっていた者だと邪推をする人はたくさんいますよ。ソフィア先輩はいつも一緒にいるヴィヴィさんやニコルさん、マリアーナさんの人生を壊したいですか？」

「そんなの嫌！」

うん。しっかりとソフィアは困ってくれたようだ。後はこの困った状況から抜け出すための甘い糸を垂らしてあげれば彼女は乗ってくるだろう。この手の人種は自分で

外の人間に不幸が及ぶことを説明すると、必死にそれを守ろうとするからこの方向で責めると都合がいい

「ソフィア先輩が俺の言うことを聞いてくれるなら、このことは内緒にしてあげますよ」

「………………。少し考えさせて…………」

そしてこれからの状況を、俺はこの不正を黙認するためにはソフィアが俺の言うことを聞かなければいけないという方向に持つていく。これで彼女と遊ぶことができるようになったな

「では、証拠としてこの資料は俺が一時的に預かっておきます。それでいいですね？」

「…………はい」

とりあえず今日のところはこんなもんでいいだろう。ソフィアには一日をかけて存分に考えていただきたい。それに実は俺たちの会話をこっそり覗き見している者もい

て、その人物がこれからどう動くかも楽しみだつたりする。退屈だった学園生活も中々面白くなってきたな

「では、今日のところはこれで失礼します」

「変なことに巻き込んでしまつてごめんなさいね……」

俺に対して生徒会会長として謝罪をするソフィアを背に、俺は生徒会室を後にするこ
とにする。さて、しばらくはこのまま成り行き待ちだな

深夜的一幕……♡

……ゴソゴソ

深夜、俺達が学園に通うために借りている一軒家に侵入者が現れることとなった。どうやら事態が動いたようだ

ユキノとリンネにより簡単に取り押さえられた侵入者の正体はニコルだった。ニコルは黒装束に身を包んだ状態で今はユキノによって床に取り押さえられている

ニコルはソフィアの執事として彼女に付き従っているという立場の人間で、ニコルはソフィアの身を守るために俺の家に侵入して俺が持ち帰った生徒会の不正の証拠を盗み出そうとしたようだ

ニコルはソフィアを護衛するためにソフィアが一人で見えても影から彼

女を見守っている事が多い。そういつた場面を何度か見かけた。そして俺とソフィアが生徒会室で会話をしているときも、ニコルは影からこっそりと俺たちの会話を盗み聞きしていたのだ

「お嬢様は関係ない。これは私が勝手にやったことだ……」

どうやらニコルは独断で俺の家に侵入することを選んだらしい。嘘を判別する魔法を使用して聞いたから間違いない。ニコルはソフィアを守るために今までこうした裏の仕事もこなしてきたようだった

俺はニコルを見逃す代わりにこれから俺の言うことを何でも聞くようにと要求をする。それを守れないとソフィアに対してもこの事件の責任を負わせるとニコルを脅すことにした。仮にも貴族である俺の邸宅に侵入をしたのだ。事件が公になった場合、ソフィアにも責任が及ぶのは承知のことだろう

「それで私は、何をすればいいんだ？」

キリリとした顔でニコルが俺に尋ねてくる。ニコルはまるで自分が男として何か汚れ仕事を頼まれるのを前提とした態度で俺に話しかけてきていた。俺はそんなニコルにベッドルームに来て服を脱ぐように命令する

「なっ！私は男だぞ！」

「いいから服を脱げ」

毅然として譲らない俺に観念したかのように、悔しそうな顔でニコルが着ている黒装束を脱いでいく。するとベッドルームには、首元まで伸びた青いシヨートヘヤーに赤茶色の瞳をした、身長160センチ後半のスレンダーな美女の艶やかな姿があらわになった

水色のかわいい下着を履いてサラシのようなもので胸を強く締め付けた姿のニコルが、白くて美しい肌を室内に露出したまま悔しそうな顔でその場に佇んでいる

「……………いつから気づいていた？」

屈辱に歪んだ顔でニコルが俺に尋ねてくる。もちろん、そんなもの最初からだ。ニコルをステータス鑑定したときに彼女の性別欄にはきちんと女と記載されていたからな

俺はニコルに下着も脱ぐように命令すると、全裸にサラシ一枚の姿になった彼女に向かつてそのままベッドに寝転ぶように指示を出す。ニコルは俺の命令に渋りながらも悔しそうな顔のままベッドに歩み寄ると、胸を隠すよう両腕を体の前に組みながら仰向けに寝転がった

すると、俺の手でベッドの上に仰向けに寝転がるニコルの胸に巻かれたサラシをほどこいていくと、彼女の胸の上にはぶるんとしたGカップほどの白くて柔らかそうな巨乳が露出される。こんなにも大きな胸を隠しながら、男として生活するのはさぞかし大変だったろう。俺はニコルの苦勞を労いながらも、彼女の胸にぶら下がった立派で美しい巨乳を両手で揉みしだくことでその柔らかい感触を楽しんでいく

むにゅ♡むにゅ♡

「……………このっ……………下衆があ……………っ♡……………っ♡」

「深夜の家に侵入してきた人間に言われたくないな」

無抵抗のままベッドの上に仰向けに寝た姿勢で、悔しそうな顔で両胸を揉まれ続けるニコルが俺に対して言葉をかけてくる。俺は彼女の言葉になど気をかけることなく、長い時間、ニコルの巨乳を指で堪能していった

クニ♡クニ♡

「——っ♡……………そこはあ♡……………っ♡……………っ♡」

ニコルの白くて透き通った巨乳を堪能し終わった俺は、次は彼女の柔らかくて敏感な陰唇をいじくり回すことにする。すでに彼女の割れ目は膣口から分泌された愛液でヌルヌルと濡れてしまっていた。ニコルの体の防衛反応が働いたのだろう

俺はニコルのおまんこから溢れ出てくる愛液を伸ばすようにして潤滑液にしなが

彼女の恥丘に生えた青い陰毛のチクチクとした感触を手のひらに感じつつもニコルの股間をやさしく丁寧にあ撫していく

「ニコルは男なのに、付いていないはずの穴が空いているんだな」

「……………♡……………♡……………♡」

ニコルは男を自称しているが、彼女の股間に開いている割れ目と穴からは俺があ撫をする度にとめどなく愛液が溢れ出してきた。彼女は俺の愛撫に感じてしまったようだ

そろそろニコルの体の準備が整ってきたと感じた俺は、勃起したペニスを彼女のおまんこにあてがうと挿入する準備を整えていくことにする

「そ、それだけは……………お願いだから……………」

「何で？ニコルは男なんだろ？だったら処女が無くなるわけじゃないし、別にいいじゃ

ん

「わ、私は実はあ——」

にゆううううん♡

ニコルのあからさまな言い訳になど耳を貸すこともなく、俺は正常位の体位でベッドの上に寝転がる彼女のおまんこに人生で初めての男性器を素早く挿入していく。そして無事にニコルの膣壁をずつと大切に守っていた彼女の処女膜にまで達した俺のペニスだが、ニコルを大人の女性へと変えた

——プチ♡

ニコルの処女膜を破る心地よい感触が俺のチンポの先から上ってくる。あっけなく処女を失ってしまったニコルは、ベッドの上で仰向けに寝たまま右腕で顔を覆うようにして泣いてしまっていた

「ぐすつ……ぐすつ……」

泣いているニコルにペニスを挿入したまま話を聞くと、どうやら彼女は誠実な演技をしたラグーンの表側しか知らないらしく、ニコルは今までラグーンに恋心をいだいていたらしい。でも自分が仕えるソフィア嬢と恋人関係にあるラグーンに対する思いを言い出せるわけもなく、彼女はその気持ちを胸のうちにずっとしまいつけていた

ニコルが女だということはソフィアの他にはラグーンしか知っておらずに、ラグーンはニコルが男のふりをする事に対して誠実に協力をしてくれていたそうだ

そんな中で何か奇跡が起きてこのラグーンに対する恋心が実ればいいなという淡い夢の元、ニコルは自分の処女を大切に守り通そうと決めていた

まあ、ラグーンはそのうちニコルを脅して処女を美味しく食べる計画を立てていたようだがな。資料室で盗み聞いたソフィアとラグーンの会話の中で、ラグーンがソフィアに向かって止められるものなら止めてみると煽っていたぞ

まあ、ラグーンがハーレムに加えようと計画していた美女の一人の処女は俺がここで美味しく頂いてしまったようだがな。すまん。ラグーン

「…………おまええ♡…………下衆だったんだなあ♡…………♡…………♡…………♡」

俺はニコルの切実な話を聞きつつも彼女の体に回復魔法をかけてあげると、避妊魔法をかけた後にニコルの膣肉を丹念に俺のチンポで柔らかくほぐしてあげていた。その行為がニコルの瞳には下衆に見えたようだ

…………ぬぼ…………ぬぼ♡

「…………ふっ♡…………っ♡…………っ♡…………んっ♡…………っ♡…………っ♡…………っ♡」

しかし、そのおかげでセックスの経験のない彼女でもスムーズに俺のチンポをおまんこで受け入れられるようになった。今はニコルが人生で初めて味わっているであろうセックスの快感に、彼女は体を弛緩させ始めている

「……………くそお♡……………何でお前え♡……………セックスがこんなに上手なんだよお♡……………♡
……………♡」

ベッドの上で俺に向かって全裸で股を開き喘ぎ声を上げながら、気を持ち直したニコルが俺とセックスをしながら会話をし始める。彼女は声を我慢しようとしてもどうしても我慢ができないようで、その原因が俺から与えられている初めて味わう強すぎる快樂にあると考えていた

ニコルの顔はセックスによつて生まれた快樂とよつて赤く火照りきつており、彼女の持つ女の肉体は始めて体験するセックスの快樂に弛緩して熱を帯び始めてきている

俺はセックスをして感じるという経験を現在進行系で初めて体験している彼女の初体験を素晴らしい思い出にするべく、彼女の膺の弱い場所をペニスの先でこすり上げることで彼女の体に強烈な性体験を増やしてあげることにした

「——あつ♡——あつ♡——あつ♡——あつ♡——あつ♡」

俺のチンポによってニコルの体と心は順調に大人の熟れた女性として成長をし始めている。このまま美しい彼女が一生男のふりをして生きていくなんて忍びないからな。俺のチンポで今日、ニコルを立派な女性へと生まれ変わらせてしまおう

……ぬぶ♡……ぬぶ♡

「……しよれえええ♡……っ♡……深すぎりゆうううう♡……あっ♡……あっ♡……あっ♡……あっ♡」

チンポによって味わう快樂に息も絶え絶えになった経験なんてないだろうニコルの体を氣遣うこともなく、俺は彼女のおまんこの奥深くにまでズポズポと巨根を差し込んでいく。ニコルのおまんこの内部は抜き挿しされ続ける俺のペニスによって愛液ごとぐちやぐちやにかき混ぜられていて、すでにヌルヌルのデロデロに汚れてしまっていた

今日初めて異性の性器を受け入れたばかりの彼女の膣肉は俺のチンポによって丹念にこねられて、さらにはニコルの子宮も俺のペニスによって柔らかく潰されほぐされ始めている。ニコルのおまんこは熟れた経験を持つ女性のように、今日一日だけでたくさ

んの経験を積み上げてしまっていた

ニコルのおまんこは依然として続く俺とのセックスの中でさらに柔らかく変形し始めており、彼女の体は俺のチンポの形を着実に記憶していく。このままニコルのおまんこを俺のチンポの形に変えきること、彼女の心ごと俺のおちんぼケースへと変化させていくのだ

今日はそのための下準備となる。ニコルにはしっかりと気持ちよくなってから、家に帰ってもらわなくてはな

——びゆるるるるるるる♡——びゆるるるるる♡

「——んほおおお♡——おっ♡——おっ♡——おっ♡——おっ♡——おっ♡——っ♡——っ♡——」

俺の精液を膣の奥深くに無断で注ぎ込まれたことに気づいたニコルは生まれて初めての中出しを受けた感触に驚いた様子であったが、麻薬成分がたっぷり含まれる俺の精液が彼女の体内に染み渡るところになると、ニコルはあつという間に理性を飛ばしきり

女としての体に湧き上がってくる高揚感と万能感の虜となっていく

こうなるともう簡単だ。気がつくくと極上の快楽に理性と自制心を飛ばしてしまったニコルは俺の体に両腕で強く抱きつきながら腰を振り、自ら股を開いて貪るようにして俺とのセックスを楽しみ始めていた

「ユーリ♡——ユーリ♡——ユーリいい♡——っ♡——っ♡」

俺の体に両腕で強くしがみつきながら、ニコルが俺の名前を愛おしそうに連呼している。男装をしているクールな普段と違い彼女はベッドの上では甘えん坊になっってしまうようだ

俺はニコルのその言葉に応えるようにして、再び彼女の膣の奥深くにまでたっぷり俺の精液を注ぎ込んでいく。ピクピクと動く俺のペニスの先から大量の精液がニコルの膣内に溢れ出すと、彼女のお腹の内側をネットネットに侵食し始める

膣内から体内へと俺の精液が染み渡っていくときの感触がよほど好きになってし

まったのか、俺の中出しをおまんこに受け入れているときのニコルは心底心地よさそうな顔でトロリと濁った瞳を細めながら、気持ちよさそうに虚空を見つめ続けていた。そしてそんなニコルの下半身は意識を飛ばしているのにしつかりと、膣肉がきゆうきゆうと痙攣しながら俺のチンポに吸い付いてきている。彼女は最高にセックスの才能があるようだ

ニコルはそんな自分の体と心の変化を、俺の体とベッドに挟まれながら心地よさそうに体験し味わっている。こんな知らない世界があつたのかと、彼女はむしろ感動すらしている

どうやらニコルは俺とのセックスにどっぷりと心からハマってしまったみたいだな。これならば彼女の心も体もこれからたつぷりと墮落をさせることができるだろう

……くちゅ♡……くちゅ♡

——びゅるるるるる♡——びゅるるるる♡

びゅるるるる♡びゅるるる♡

今のニコルは俺の体に覆いかぶさられた状態でベッドの上に仰向けに寝ながら股をはしたなく開いて、ドロリとした瞳のまま愛おしそうにおまんこに注がれる俺の精液の味を堪能している。今日この家に侵入してきた頃のニコルからは考えられないような痴態である

このまま少しずつニコルの心を壊していこう。退屈だった学園生活に楽しみが一つできたようだ

そして結局、俺達のどろりとしたセックスは朝まで続くこととなった

……。

……。

……。

「命令されたから、仕方なく体を貸しただけだからな！」

朝になり、セックスを終えた彼女の体に回復魔法とクリーンの魔法をかけてあげると、冷静になり始めたニコルは俺に対して不本意であったと体裁を取り繕い始める。どうやら彼女はまだ、俺に対する心の抵抗を残しているようだ

うん。こうして不本意だったと抵抗するニコルの体を調教していくのが楽しいんだ。これからの学園生活にハリが出てくるな

俺がニコルの身を解放すると、いつものクールな男のふりに戻った彼女は身支度を整えて家路についた。八時間寝たのと同じくらい回復する魔法をかけてあげたから、ニコルはこれから制服に着替えて学園に登校するはずだ。彼女はソフィアの警護をしなくてはならないからな

しかしまさかニコルも今日の一回だけで俺からの命令が終わるとは思っていないだろう。次はニコルとどんなプレイをして遊ぶか、そのことを考えながら俺も学園に行く

準備を整えることにする

麗しき学園生活

……じゅるるる♡……じゅるるる♡

俺は今、エーデンリッツ学園にあるトイレの個室内でニコルにフェラをしてもらっている。俺の足元にしゃがみ込んだニコルは懸命に、普段の男装姿のまま艶のある女の顔で俺のペニスをネロネロと舐め啣え続けていた

ニコルの処女を頂いてから、俺はこうして定期的に彼女に対し学園内での性行為を求めている。最初は渋っていたニコルであったが、次第に慣れ始めると今はこうして学園内でみんなに隠れて俺に性的な奉仕をするのが彼女にとって一種の習慣とさえなり始めていた

「……ほんとうに♡……ほまえはへんらいらなあ♡……っ♡……っ♡……っ♡」

ニコルはフェラをした後にたっぷりと口の中に出される俺の精液の味が大好きなようだ。彼女は今も、実は興奮をしていることが丸わかりの仏頂面のままで俺の精液をコクリと飲み込んでいた。ニコルはフェラチオや口内射精等の性行為にも慣れ、性に対する経験値をしっかりと増やしてきているようだ。順調にニコルへの調教が進んでいる

「今日はこれくらいにしておこうか」

「——えっ?……そ、そうなのか」

嫌々してますという表情を崩さないようにしているが実は次の行為を期待していることが丸わかりのニコルに今日はフェラだけで終わりにすることを伝えたと、彼女は物欲しいのがバレバレの様子でモジモジと内股になりつつも残念そうな顔を隠しながら俺にクールな風を装い対応をしてくる。なんだこいつ。一周回ってかわいいな

いつもならニコルの口の中に精液を出し終わった後に強制的にごっくんをさせてからご褒美だと言って彼女のおまんこに俺のチンポを無理やりにぶち込んでイカせまくっていたからな。きっと彼女は今日もそれを期待していたのだろう

「欲しくなった？」

「——うるさい！」

俺が挑発をするとニコルは取り繕うようにして居直つてしまう。まあ今日のところはそのままにしておこう。少し焦らして彼女の体をチンポに飢えた状態にしておいてから、後でたつぷりと俺のチンポを彼女の体に出し挿れしてあげなくてはな。これもニコルに対する調教の一環だ

「じゃあ今日はこれで終わりだな」

「わ、わかった……」

俺がにべもなくニコルのそう伝えると、彼女はがっかりした様子でそれに同意する。そして俺たちは男子トイレ内にひと気がないことを確認してから個室を後にした。さすがに俺とニコルが同じ男子トイレの個室から出てきたら変な噂が立つだろうしな。

それを喜ぶ腐の強者もいるかもしれないが、残念だがニコルは女だ

「リンネ。ニコルが欲求不満みたいだから相手をしてあげてくれ」

「かしこまりました」

俺はリンネを呼び出すと、彼女にニコルの相手をしてあげるように指示を出す。性感開発の一環として、ニコルの体に発情ローションを塗り込みながら彼女の全身をくまなく弛緩させていくのだ。決してニコルの体を絶頂はさせないように厳命をすると、俺はニコルの体をイク寸前まで何度も追い込むように伝えてからリンネを送り出した

最近のニコルは俺とセックスをするためにソフィアの護衛から抜け出すことが多くなった。ニコルがソフィアの護衛を抜け出しているときにはユキノに影から護衛を頼んでいるからという理由もあるが、順調にニコルの心は墮落してきており俺とのセックスが彼女の中で優先するべき事柄に変わってきていた

さて、ニコルがリンネに足止めされている間にやることをやってしまおう。俺はニコ

ルに秘密で呼び出したソフィアに会うために生徒会室へと足を運ぶことにする

「ソフィア先輩。お待たせしてすみません。それで、どうしますか?」

「……覚悟を決めたわ。私が何でもすれば、このことは黙っていてくれるのよね」

生徒会の不正をどうするのか、しばらく時間はかかったがソフィアの中でしつかりと答えが出たようだ。彼女は自分の身を犠牲にすることでみんなを守るということに決めた。これは素晴らしい。さっそくソフィアの体の味見を試みることにしよう

「先輩の覚悟、試させてもらいますね」

俺はソフィアにそう伝えると生徒会室の鍵を締めて誰も室内に入ってこれないようにしてから、窓のカーテンも完全に閉めてしまう。これで誰もこの部屋の中の様子を確認することができなくなった。気配察知の魔法で周囲を確認しても、生徒会室の周囲には誰もいない。つまり今、この部屋は完全な密室ということだ

「…………っ！」

人払いをし始めた俺の行動を見て、これから俺に自分の体がどうされてしまうのかを思い浮かべたソフィアが悔しそうな顔を始める。でもそれだけで彼女は何の抵抗もしない。どうやらソフィアはきちんところこういう覚悟もしてきたようだ。これはやりやすくていいな

「さて、ソフィア先輩。先輩の体、好きにさせてもらいますよ」

俺はソフィアにそう伝えると、緊張した面持ちでジリジリと後退をし始めた彼女の体を壁際まで追い詰めていく

「……………っ」

そしてついに壁際まで追い詰められてしまったソフィアが観念をしたように両目をぎゅつとつむると、体をこわばらせ始めた。これでチエックメイトだ。それでは、ソフィア先輩の味見といきましょうか

ソフィア先輩の味見♡

ふにゆ♡ふにゆ♡

俺は壁際に追い詰めたソフィア先輩のおっぱいを右手で揉んでいく。体を硬直させた彼女の学生服の上から下着ごと揉み込むソフィアの胸に膨らむCカップの胸は程よい弾力があり、俺の指によく馴染んできていた

ソフィアは背中まで伸びた綺麗な金髪に澄んだ青色の瞳をギュツと閉じたまま体を固くして生徒会室の中で俺にされるがままになっている。彼女のその健気な姿がともかわいかった。俺はそんなソフィアの両足の間に俺は自分の右足を膝から差し込むと、彼女の体を生徒会室の壁に押さえつけるようにしながら唇にキスをしていく

……くちゆ♡……くちゆ♡

無言の生徒会室には俺達が唇を吸いあい唾液が混ざり合う音だけが響いている。ソ

フィア先輩は唾然としながらも抵抗することなく、俺が求めるように体を差し出し続けた。なんと健気なことだろう

「初めてだったのに……」

「ラグーン先輩とはしてないんですか？」

俺は彼女たちの会話を盗み聞いた事でラグーンとソフィアが付き合っていないことを知っているが、それを知らないふりして俺は彼女に意地悪を試みる。すると俺の言葉にソフィアは無言のままうつむいてしまった。そのことは彼女にとって話したくないことなのだろう

しかし俺は落ち込んだ様子の子のソフィアを気にかけることのないまま彼女の体の味見を続けていくことにする。次に俺は無遠慮にソフィアの履いているスカートの上部分に右手を滑り込ませると、そのままソフィアのお腹のやわらかいすべすべとした感触を指先で楽しみながらも彼女の下着の中へと俺の手を侵入させていく

ソフィアの体から分泌された愛液を彼女の割れ目に伸ばしきると、今度はそれを潤滑液にしてソフィアのコリコリとして小さなクリトリスを俺は中指の腹で転がし始める。すると敏感な性器を俺に刺激され始めてしまったソフィアは、何かを我慢するかのよう な気恥ずかしい表情で俺から顔を反らしている

「——っ♡——っ♡——っ♡」

しかし俺はそんなソフィアの顔を無理やり前に向かせると、熱いキスをしながら彼女のクリトリスを右手の中指でおもちやのように転がしていく。円を描きながらこねこねと丹念にソフィアのクリトリスをいじくり回していくと、初めて異性にクリトリスを触られる快感に意識がいつぱいいつぱいになってしまったのか彼女は俺がするキスにされるがままになってしまっていた

「——んくう♡——っ♡——っ♡」

そして今度はソフィアの膣口に俺の中指をねじ込んでいく。すると体内に異物が侵

入してくるような感触に彼女が驚いたように身をすくませる。そのままソフィアは羞恥に顔を赤く染めながら、生徒会室の壁にもたれかかるような体勢で俺の手マンを受けることとなった。恥ずかしそうに右手で口元を隠すソフィアの火照り始めた白い肌が素晴らしくエロい

クチュ♡クチュ♡

ソフィアの膣の中に埋め込んだ俺の中指をやさしくグチュグチュと動かしていく。ヌルヌルとした感触で熱く潤ったソフィアの膣奥からは、俺が指を前後させる度にトロトロと愛液がこぼれ続けていた。初めて受ける手マンにしっかり彼女は感じる事が出来ているようだ

異性に体を触られていやらしい声が口の奥から勝手に出てしまうという初めての経験がソフィアは恥ずかしいのか、彼女は必死にあえぎ声を我慢しているのが見て取れる。ソフィアのその姿に彼女をイカセまくりたいという欲が出るが、まずはやさしくする。ソフィアの性感を開発していくのはもう少し後の計画だ

のだろう。イッた余韻に浸り続ける彼女は俺に無理やり手マンを受けていたことなど今は忘れてしまっているようだった。手マンをしていた俺の中指を彼女の膺壁がヒクヒクと啜えこんできている感触が素晴らしく心地よい

「ソフィア先輩。どうでしたか？」

「うるさい！」

俺がぼーっと意識を飛ばし続けるソフィアを挑発するように声をかけると、我に返った彼女は唇を尖らせてパイと俺から顔をそらしてしまう。まあ最初はこれくらいにしておこう。女の子の体がこんなにも気持ちよくなれること知ったソフィアの心が、これからどう変化していくのかが楽しみだな

「それでは先輩。また今度、お願いしますね」

「……………うん」

普段はラグーンに恋人の演技をさせられて、さらには今日から俺に脅されて体を好き勝手にされることになってしまふ。今のソフィアにとっての学園生活は最悪の部類だろう

でも少しだけの辛抱だ。これからソフィアの心も体もとろとろに甘く溶かしてから、俺の女にしてしまうのだから

俺はソフィアを墮とす算段をしつつ、生徒会室を後にすることにした

動き始めた思惑

マリアーナ視点

ある日、衝撃の事件がエーデンリッツ自由都市を震撼させることになる。エーデンリッツ都市守備隊の大將による巨額の横領事件が発覚したのである。

容疑者であるソドム・バツツポーン大將は容疑を否認しているが、次々と見つかる都市警備費の不審な流れと改ざんの証拠がソドム・バツツポーンによる横領を着実に裏付けていく。

そしてソドム・バツツポーンに横領を指示されたと名乗りを上げた会計係が出現したことにより、都市警備隊大將による巨額の横領事件が世間に明るみになることになった。

エーデンリッツ学園にもその事件の余波を受ける者がいる。そう。ソフィアたち仲良しメンバーといつも過ごしている、マリアーナ・バツツポーンである。

マリアーナの身は父親であるソドム・バツツボーンによる巨額の横領により失われた都市警備費を補填するために、奴隷として売られることになったのだ

「マリアーナ！絶対に僕が助けに行くから！」

奴隷商に連れて行かれるマリアーナに、騒ぎを聞いて駆けつけてくれたのであろうラグーンが道路で叫んでいる。マリアーナはラグーンに片思いをしていた。すこし乱暴なところもあるけど、ラグーンはいつも周りのことを心配してくれる。そんなラグーンを好きになってしまったマリアーナは、いつしか彼と結ばれたいと思っていた

しかしラグーンには恋人のソフィアがいる。それに同じく学園生活を一緒に過ごすことよって彼のことを好きになってしまった恋のライバルであるヴィヴィの存在もある

仲間として一緒に過ごしたみんななどの楽しかった思い出を思い返しながらも自分だけがその学園生活から抜けてしまうことを寂しく思うマリアーナは、奴隷になるために

馬車に乗せられていく

ユーリ視点

マリアーナの父親が横領の罪で起訴をされたようだ。その借金のカタとしてマリアーナが奴隷の身に落ちることとなった

ちなみに、これはラグーンの所属する裏組織であるガーゴイルの爪による捏造事件だ。奴隷に落ちてしまったマリアーナの身を表向きは商人であるラグーンの一家が買い取ることで、彼女の身を救いラグーンがマリアーナの身を奴隷として所有しつつも彼女には感謝されようという計画のようだ

そしてマリアーナの身が奴隷としてラグーンの父親が経営するベント商会に見受けられることとなるが、その計画が完了する直前に横槍を入れたやつがいる

そう。俺だ

俺はソドム・バツツポーンによる横領事件に異議を唱えると、自費を使い今回の横領事件によって流出した都市警備費の全額に対して補填を行うことにする。さらには独自によるこの横領事件への再捜査を宣言した

この都市では俺が裏で実権を握っているベッケンバウム商会も強い権力を持っているのだ。俺は強権を使い、ベント商会に先駆けマリアーナの身を確保することに成功した

バツツポーン家にとってもただの奴隷としてマリアーナの身を引き受けるだけだったベント商会よりも、ソドム・バツツポーンの潔白を信じ再調査に名乗りを上げてくれているベッケンバウム商会の方が頼りになるだろう

そしてベッケンバウム商会を通じた俺とバツツポーン家の契約が無事に完了すると、彼らの潔白を証明する対価としてマリアーナの身を俺が引き取ることとなった

……。

……。

……。

「マリアーナ！俺と一緒に帰ろう！」

エーデンリッツで俺が今住んでいる家にマリアーナが引き取られる当日になると、善人の顔をしたラグーンが俺の家に乗り込んでくる。彼は俺の家の玄関を許可もなく開け放つと、邸内にいるマリアーナに向かってそう叫んだ

「ラグーン。ごめんね……」

沈痛な面持ちでマリアーナがラグーンに言葉を返す。彼女の見える、本心では一緒に帰りたいけどといった様子を見て強気になったラグーンはさらに得意な顔をしてペラペラと言葉をまくし立て始めてきた

「マリアーナは思い人と添いとげるべきだ。それをこんなお金のために無理やり身受け

なんて。恥を知れ！俺がマリアーナを助けるんだ！こんな親同士が強制的に決めた人間関係なんて俺達には関係ない！マリアーナ！さあ、俺と一緒に帰ろう！」

正義のヒーローのような顔になったラグーンがマリアーナに向かって手をのばしている。得意げに正義を語り終わった彼は自分の計画がすでにうまくいったと思い込んでいるようだ。彼は勝ち誇った顔でその場にたたずんでいた。俺はそんなラグーンに向かって、淡々とした言葉をかけることにする

「責任はどうするんだい？誰がマリアーナの身を引き受けるの？今回、補填のために使ったお金は金貨何枚になったと思う？それに、君がマリアーナの父親の容疑を晴らすことができるのかい？」

ラグーンはきれいな事を言えば周りの人間が自分にとって都合良く動くと思っている幼稚な人間だ。だからただ一方的に喋り終わっただけなのに、彼はすでにマリアーナを自分の物にできたという顔をしている。俺はそんなラグーンの妄想を壊すために、そのまま言葉を続けていった

「ところで、マリアーナの思い人って誰？ラグーン。君のこと？君にはソフィアという恋人がいるよね？マリアーナをここから連れ去ったとして、それからラグーンはどうするの？何か計画があるの？」

自分の言葉を完璧だと思っていたラグーンに向かって俺がツラツラと意見を指摘していくと、ラグーンは口をパクパクさせながらも驚いた顔をした後に大激怒をしてみうことになる。まあ、0歳児並の脳みそのまま生きている奴なんてこんなもんか

「ラグーンは口だけで実際には何もしていないよな？俺のほうがマリアーナのことを大切に考えているよ。だからラグーン。潔く身を引け」

最後にラグーンの対抗心と虚栄心に向かって上から煽りを加えることで、俺はラグーンの問題を削っていくことにする。こうやって怒らせれば後は勝手に自滅してくれるから、この手の類は扱いやすい

「ふざけんな！マリアーナは俺たち、仲良しグループと一緒にいるべきなんだ！」

自らの負けを認められないラグーンが地団駄を踏むようにして、さらに幼稚なことを口に出し始める。しかしそこで展開が動いた。ラグーンの様子に沈痛な面持ちのまま黙っていたマリアーナが、やさしい声でラグーンに語りかけ始めたのだ

「……ラグーン。今回の出来事の根幹にあるのは私の父親に着せられた冤罪です。ラグーンはそのことについて、きちんと考えてきたのよね？」

どうやらマリアーナはラグーンに助け舟を出したようだ。しかしこれはまずいな。ここでラグーンからマリアーナの父親への冤罪を晴らす何か有効的な計画を提示されると、現在の俺が持っている優位性が失われてしまう。すると、先程のラグーンの戯言にも一定の説得力が生まれてしまうのだ

今回の冤罪はラグーンが計画したものだ。だから事件がでつち上げであることを証明するのは容易いことだろう。さて、ラグーンはどう動く

「そんなの、きっと誰かが何とかしてくれるさ！それに俺たちは友達だ。友達だから、俺はマリアーナが身受けをされる不幸をぶち壊しに来たんだ！それだけじゃ、ダメかい？

「マリアーナ。さあ、帰ろう」

これは決まった。といった表情で自信満々になったラグーンが爽やかに自説を語り始めた。一瞬だけ冷や汗をかいたが、ラグーンがバカで良かった。彼は盛大に自爆をしたようだ

その証拠に先程までは自分の窮地に駆けつけてくれたヒーローを見るような目でラグーンを見つめていたマリアーナであつたが、今の彼女はラグーンのことを道端に落ちたゴミを見るような目で見ている

「どうやらマリアーナの中で、今回の顛末に対する心の整理がついたようだ。そして彼女は冷めた目で、ラグーンにサヨナラを告げていた」

自分の言葉が完璧に決まり、後は英雄のようにチャホヤされるのだという未来を予想していたラグーンはあつけにとられた表情のまま俺の家から叩き出されることになる

「マリアーナ。いいのかい？」

「はい。ようやく決心が付きました。ユーリ様。わたくしマリアーナ・バツツポーンは不束者ではありませんが、これからよろしくお願いします」

心の整理が終わりスッキリとした顔でマリアーナが俺の言葉に返事を返す。ラグーンありがとう。君のおかげで、マリアーナを堕とす準備が整ったよ

「じゃあマリアーナ。こちらにおいで」

「……はこ」

俺は内心でラグーンに感謝しつつも、さっそくマリアーナをベッドルームに案内することにする

マリアーナの味見♡

「——っ」

ベッドルームへと移動したマリアーナは茶髪のショートヘアに茶色のクリンとしたかわいい瞳を俺の目の前でギュツとつむると、自分の体がこれから俺にどうされてしまうのかを完全に理解した状態で緊張したように体をこわばらせていた

薄い水色のドレス姿に身長150センチでDカップほどのぷるんしたおっぱいを主張しながら立ち尽くすマリアーナに、俺は遠慮のかけらもなくキスをしていく

……じゅるる♡……じゅるるるる♡

しばらくの間俺がマリアーナの口内を舌でなぶり責め立てるようにキスをしていると、緊張をした面持ちだった彼女の顔がトロンとゆるみ弛緩していく。口の中を俺に犯

——ピトリ♡

俺のクンニによって心とおまんこをやわらかくほぐされてしまったマリアーナの初物のおまんこに、俺は勃起したチンポを添えていく。もちろん、彼女の処女を俺が奪うためだ。マリアーナのおまんこの入り口の穴に触れた俺の亀頭の先が、肉で輪っかの形に締め付けられているピタリとした感触が心地よい

俺の前戯によって体がふにやふにとろけて力が入らなくなってしまうマリアーナだが、これから自分の身に起こる出来事に納得をした強い瞳で俺を見つめている

にゅうううん♡

マリアーナの覚悟と気持ちを受け取った俺はさっそく彼女のおまんこの中へとペニスを挿入していく。生温かくてねっとり潤った若いマリアーナの膣肉を縦に裂いていく心地よい感触をペニスの先に感じながら、俺はマリアーナの処女を奪っていった

——ぶっん♡

そしてついに、俺のチンポによってマリアーナの青春時代が終わる。破瓜の瞬間だ。初恋を失うとともに俺のペニスによって大人の階段を昇ったマリアーナは俺に配慮をしてか、初体験での痛みを俺に悟らせないよう健気に微笑んでいた

俺はそんなやさしいマリアーナの体に回復魔法をかけ彼女の体から痛みを取り除くと避妊の魔法をかけ、マリアーナの初恋の相手だったラグーンに感謝をしながら俺が寝取ったマリアーナとのセックスを開始する。ラグーンありがとう。君が欲しがっていたマリアーナの処女は、すっごくネットネトしてて美味しいよ

「——あん♡——っ♡——っ♡……っ♡……あっ♡」

慣れないセックスに最初は戸惑っていたマリアーナであったが、強い快樂により彼女の体は勝手に反応を始めてしまう。俺の体の下で身悶えながら汗ばんでいる彼女は、ベッドの上に仰向けに寝てはしたなくも股を開いた正常位の体勢で、初めて体験する性の強い快樂に茶色くてきれいなショートヘアを振り乱していた

「——んくううううっ♡——んっ♡——んっ♡——んっ♡……っ♡……あっ♡……あっ♡」

小さく息を潜めながら右手で口元を隠し、ベッドの上で仰向けに寝てセックスをしているマリアーナが上半身をグーツとのけぞらせていく。マリアーナが初めてイッた瞬間だった。自分の体に起きた今までの人生で体験したことのない身が勝手に浮くという変化にとまどったマリアーナは、自らが理想としていたしとやかな淑女にあるまじき反応を見せたと羞恥を感じ顔を真っ赤に火照らせてしまっていた

そんなマリアーナに俺はキスをしながら彼女の体内にペニスの抽送を続けていく。まだまだ今日のセックスは始まったばかりだ。今までオナニーもしたことがなくて、マリアーナは性的な体験は今日が本当に初めてだと恥ずかしそうに教えてくれていた。そんなマリアーナの初体験を、これからとろけるような素晴らしい思い出にしてあげなくてはならないからな

……。

……。

……。

「——はあああああああ♡——あっ♡——あっ♡——っ♡」

そして深く息を吐きながら、今日何度目か分からない絶頂をマリアーナが迎えていく。今の彼女はベッドの上に四つん這いになって、かわいい体を猫のように伸ばしながらオーガズムを体験していた。イキ慣れてきた彼女の膣肉が、きゆうきゆうと俺のチンポを味わうようにして吸い付いてきている

俺とのセックスの中で、マリアーナの心もイクことに慣れ始めてきていた。初めてのオーガズムを体験したばかりの頃の彼女は、俺にイカされる度にこんな恥ずかしいことは何としてでも我慢しようという姿勢を見せていたが、何度もイカされる内にイクことの快感を覚えてしまったマリアーナは次第に自ら望んで腰を振るようになった

マリアーナも年頃の女の子だ。もちろん性に興味はあるだろう。羞恥によって抑え込まれていた好奇心に引きずられるようにして、彼女は覚えてしまったセックスの楽しさにのめり込んでいく

「——あはあ♡——っ♡——これっ♡……すっ♡いっ♡……っ♡」

マリアーナは現在、座位の状態で俺と体を抱き合うようにして腰を振っている。ペニスの挿入を受けるだけだった今までの体位と違い自らの腰の振りで性器への刺激を調整できることに気づいた彼女は、初めて見つけたおもちやを楽しむようにして俺の股間におまんこをこすりつけながらも興味深そうに腰を振り続けている

聡明なマリアーナはセックスについても学習を始めたようだ。これからのマリアーナは俺のチンポで上手な腰の振り方を覚えていくことになる。そして俺のチンポによつて彼女は女に変わるのだ

「……ああんっ♡……だめっ♡……まって♡——っ♡——あっ♡——あっ♡——あっ♡」

ゾク♡ゾク♡ゾク♡

今度はセックスに慣れ余裕を見せ始めていたマリアーナのおまんこの中にある弱いところをペニスの先で俺が思いつきりえぐってあげると、今までマリアーナが味わっていた快感の何十倍にも強烈になったとろけるような快楽が彼女の全身を心地よく一気に駆け巡っていく

セックスを少し舐めていたマリアーナはまた余裕を失い出すと、今度は顔を振り乱しながら意識をいっばいいっばいにして身悶え始める。俺は少しだけ、彼女の体を開発することにしたのだ

「……ユーリ様あ♡……だめえ♡……おかしくなっちゃうううう♡——っ♡——っ♡」

ベッドのシーツをギュッと握りしめていやいやとでも言うように首を振るマリアーナの膣壁をグチャグチャに俺がチンポの先でこすり続けていくと、彼女の体を今日一番

もうマリアーナの瞳の中に、ラグーンはどこにもいない。現在の彼女の目の前は、俺としてセックスの気持ちよさで完全に染まってしまっている

びゆるるるるる♡びゆるるるるる♡

「——っ♡……あつたかあいっ♡……っ♡……っ♡」

(ラグーン。中出しされてるときのマリアーナのおまんこ。すっごいうねって気持ちいいよ)

初めて味わう甘くて幸せに全身がとろける深イキを堪能しているマリアーナの体内に、俺は無遠慮にドロドロと精液を注いでいく。その感覚でおまんこの中に俺の精液が広がる生温かい感触が理解できたのかマリアーナは、愛おしいものを見るような瞳で初めて異性に精液を体内に出されるという中出しをト口顔のまま思う存分に味わっていた

……くちゅ♡……くちゅ♡

マリアーナの子宮に俺の精液を出し終わったあとは、正常位の状態でベッドの上に寝転ぶマリアーナの体にのしかかるようにして彼女の唇にやさしいキスをしていく。それを彼女は股を開いたままの恥ずかしい格好で気持ちよさそうに受け入れていた

「……セックスって♡……すごいんですね♡」

今日のセックスが終わり俺がマリアーナの体からペニスを引き抜いていくと、気持ちいいことをやりきったという達成感のある顔で、疲れからベッドの上で動けないでいるマリアーナが俺に語りかけてくる

そのマリアーナのかわいい姿を見てそんなことを言っていられないくらいにもっと彼女の体をメチャクチャにとろけさせたいという欲望に駆られるが、とりあえず今日はこれくらいにしておこう

少しずつ、マリアーナの体も心も溶かしていくという計画だ。まだマリアーナの心の

さて、次はヴィヴィ先輩をどう堕とすかだな。俺はさらなるターゲットへの攻略方法を考えつつも、ユキノの体を堪能していくことにする

新入生歓迎の野外演習

「ヴィヴィ先輩！すごいです！」

「君たちも頑張れば、これくらいできるようになる」

俺の目の前では今、身長150cmくらいの小柄な体に黒いローブを着て黒いトンガリの魔女帽子をかぶったヴィヴィ先輩が魔法の杖を右手に掲げて佇んでいる。俺の言葉にふんすと息を吐くようにして、ヴィヴィ先輩は自慢気に俺への励ましの言葉を送ってくれていた

ヴィヴィ先輩は黒色のショートカットに青い瞳、クールなジト目をしたおっぱいがBカップくらいの小柄な女の子だ。現在の俺は希望者のみが参加できる、近隣の森に一泊二日で行う新入生歓迎の野外演習に参加をしていた

この学園ではメンターのような制度を採用しており、こうして野外演習に参加した一年生には四年生の補佐がつくことになる。この野外演習でお互いに親睦を深めることによつて、新生は学園生活での悩みをこれからその四年生の先輩に聞いてもらうことができるようになるのだ

俺とユキノ、リンネの三人グループにはヴィヴィ先輩が補佐につくこととなつた。つまり俺はこれからの学園生活において、困つたことがあつたらメンターであるヴィヴィ先輩に何でも相談ができるというわけだ

俺はヴィヴィ先輩に魔法を見てみたいとお願いし、彼女の魔法を見せてもらうことで現在に至る

「さて、薪を拾いに行きましようか」

時刻は夕方になり、炊事をするための薪を探しに行くことになる。材料の仕込みをリンネとユキノがすることになり、俺とヴィヴィ先輩が薪を探しに森の中に入った

俺たちが今いる場所は街の近くにある湖の広場だ。ここには野営をする用の開けた広場があり、ここを学園は野外演習の実地場所としていた。広場の周辺は学園に雇われた冒険者が警備をしており、生徒への安全性にも配慮されている。

そしてこの湖の広場には宿泊用のコテージがいくつか存在し、少し高いお金を払えばテントではなくコテージに泊まることができる。当然、俺はコテージに泊まるつもりだ。「へへー！お前ら、おとなしくしな！」

俺がそんなことを考えながらヴィヴィ先輩と湖の近くにある森を散策していると、汚らしいカツコをした野盗が刃物をちら近せながら俺たちの目の前に飛び出してくる。

こいつらはラグーンに雇われた悪人だ。俺にマリアーナを奪われてしまったラグーンは功を焦り、ヴィヴィ先輩を野外演習中に誘拐して無理やり奴隷にしてみようという計画を立てていた。

ラグーンはついでに俺のことも始末しようとも考えたようだ。都合のいいことに

ターゲットが人気のない森の中で二人つきりになったことで、ラグーンに雇われた悪人が動き始めることになった

「ユーリ。君は逃げて先生を呼んできて……」

先輩であるヴィヴィが、俺を逃がすために野盗に向かって一步前が出る。彼女の肩は恐怖に震えていた。無理もない。後輩を逃がすために、下劣な悪党にただ一人立ち向かわなくてはならないのだ

「ヴィヴィ先輩！危ない！」

そんな彼女に躊躇なく、野盗は刃物を振り下ろしてくる。傷つけるなどラグーンに命令をされているためただの威嚇行為なのだが、俺はこの隙に乗じてヴィヴィ先輩に対する自分の好感度アップをさせてもらうことにした

「先輩……。大丈夫ですか？」

「ユーリ。肩から血が……」

俺がヴィヴィ先輩をかばって彼女の体を押しのと、代わりに剣を受けることになった俺の肩から血がポタポタと垂れ落ちてくる。まあ、これは薬液創造のスキルで作った血糊であって、本当はケガなんてしていないのだがな。俺は肩が痛むようなふりをして、血が垂れ落ち続けているように見える左肩を右手で抑え込む

「おい！何をしている！」

「ちっ！失敗か！」

そしてちょうどタイミングがいいことに、警備のために周辺を巡回していた冒険者が野盗に襲われている俺たちを見つけにくれることになった

剣を抜き、怒りの形相で駆けつけてくる冒険者を見た野盗は悔しそうにつぶやくとその場を後にしていく。ここは一旦引いて、またチャンスを伺うつもりなのだろう。まあ、ユキノとリンネに後を付けさせているから、彼らに次のチャンスなどないがな

「君たち、大丈夫かい？」

こうして、俺たちは冒険者に連れられて湖畔へと戻ることになる。湖の広場へと戻る道中の俺の隣には、心配そうな顔をしたヴィヴィ先輩がぴつたりと離れずに寄り添ってくれるのであった

ヴィヴィ先輩の味見♡

ヴィヴィ先輩をかばって怪我をしたふりをした俺は自分の体に回復魔法をかけると、肩を治療したふりをして森から湖畔へと戻ることになる。そしてそんな俺にピツタリとくつつくようにして、心配そうな顔をしたヴィヴィ先輩が並んで歩いてくれたのだった

「ありがとう」

大事を取ってコテージのベッドで休むことになった俺のそばには、やさしい顔をしたヴィヴィ先輩が付き添ってくれている。コテージ内には俺とヴィヴィ先輩の二人きりだ。室内に入ってくる用事のある人間は誰もいない。これはチャンスだ。俺は密かに、ヴィヴィ先輩とセックスをする機会を待つことにする

「これはお礼……」

先輩の威厳を見せたいのか、お姉さんぶったヴィヴィ先輩が俺の頬にキスをしてくれる。彼女のなりの俺への気づかいと感謝のつもりなのだろう。しかし、その隙を見逃す俺ではない。おれはそのまま小柄なヴィヴィ先輩の体を両腕で抱きしめると、彼女の体を俺に密着させてしまう

「ユーリ……。それ以上はいけない……」

「先輩が無事で良かったです」

クールで平坦な声に少し焦りを混ぜた雰囲気であれに話しかけてくるヴィヴィ先輩に、俺は彼女の身を案じる話をするのでヴィヴィ先輩の負い目を利用して彼女の心から逃げ道を塞いでいく。せつかくこうして隙を見せてくれたんだ。このままヴィヴィ先輩を墮落させてしまおう

「私には、好きな人がいるの……。だから……」

寝ていた俺にひよいとベッドに寝かされてしまい、ベッドの上で俺の体に覆いかぶさられるようにして見下ろされる立場になったヴィヴィ先輩が真剣な話を俺にし始める。俺は彼女の心を揺さぶるために、そのまま会話を続けることにした

「知ってますよ。ラグーン先輩ですよね？」

「だったら……。——ッ!!!——っ♡——っ♡……っ♡」

……くちゅ♡……くちゅ♡

言い訳の言葉を発しようとしたヴィヴィ先輩の口を塞ぐようにして、俺は無理やり彼女にキスをしていく。このままヴィヴィ先輩を墮とすためだ

最初は拒絶するように俺の体を押しつけようとしていたヴィヴィ先輩だったが、自分がかばうために怪我をした俺に向かって今は強く言えない立場の彼女は抵抗する力を弱めると、次第に俺にされるがままになっていく

「……………はあ♡……………はあ♡……………はあ♡……………はあ♡」

「今日だけじゃ、だめですか?」

数分間のねっとりとしたディープキスをした後に、クールな青色のジト目をとろんと潤わせて動けなくなってしまうヴィヴィ先輩に俺は言葉を重ねていく。さて、このままなし崩しで彼女とセックスといきますか

「——だ、だめっ!——っ♡……………あっ♡……………ユ—リっ♡……………おねがいつ♡……………んっ♡……………っ♡」

「ヴィヴィ先輩。かわいいですよ」

味わったことのない、意識がとろけるようなキスに体からふにやりと力が抜けてしまったヴィヴィ先輩のおまんこに向かって俺はそつと手を伸ばしていく。そして俺はそのまま彼女が着ている黒い魔女姿のローブの裾からヴィヴィ先輩の両脚の間に右手をすするりとねじ込むと、勝手に彼女の股間へと俺の右手を侵入させてしまう

「…………ユーリ♡…………だめだよ♡…………ねえ♡…………っ♡…………っ♡…………っ♡」

小さくて甘い声が変わってしまったヴィヴィ先輩の言葉を無視すると、俺は彼女の穿いている体温でしつとりと生温かくなった下着の中に右手を潜り込ませていく

そしてチクリとするヴィヴィ先輩の陰毛をなぞる俺の指先がさらにその先に進むと、ついに俺の手が彼女の股間にある女の子の割れ目に触れた

俺がヴィヴィ先輩のピラピラのやわらかい感触を味わうようにして俺の人差し指と中指で彼女の股間をスリスリとこすっていくと、彼女のおまんこがすでに濡れてベトベトな状態になってしまっているのが俺の指に感じるねっとりとした液体と温かいヌルヌルとした感覚で簡単に分かった

「ヴィヴィ先輩。濡れてますよ?」

「そ、それは…………っ♡」

クチクチと股間の割れ目をなぞり続ける俺の指が生み出すゾワゾワとした感覚に困惑をしながら、ヴィヴィ先輩が自分の体に起きた変化を否定しようとする。しかし、彼女にはそのための材料が見つからないようだった

俺は突然の出来事に混乱をしてしまったヴィヴィ先輩に乗じて、このまま彼女の体をいただくことにする

「恋人がいるラグーン先輩よりも、俺じゃダメですか？」

「……………そんなこと♡……………急に言われても♡……………っ♡……………っ♡」

「先輩。少し考えてみてください」

「……………この状況じゃあ♡……………考えられないからあ♡」

平坦でクールな声に甘い吐息が混じり始めてしまったヴィヴィ先輩が、息を切らしな

がらも俺の質問に答えてくれる。俺はこのまま彼女と肉体関係に持つために、ヴィヴィ先輩がの下着を脱がせてしまうことにする

そして俺は彼女が穿いていたかわいらしい紺色の下着を脱がせると俺はそのままヴィヴィ先輩が着ている黒いローブの裾をまくりあげて、彼女の裸になった下半身をベッドの上に完全に露出してしまう

俺は黒い魔女のローブ姿のまま甘い顔になり始めたヴィヴィ先輩の両脚の間に素早く腰をねじ込むと、そのまま無許可で彼女のおまんこに正常位の体位で俺の勃起したチンポをあてがうことにした

「ユーリ。それ以上は本当にいけない……」

「俺、ヴィヴィ先輩のことが好きです」

黒いローブ姿に下半身を完全に露出し、股をM字に開いたヴィヴィ先輩が俺を見つめながらやんわりと拒絶の言葉を口にする。俺はその状態のヴィヴィ先輩を、陥落させる

ために言葉を紡いでいく

「恋人のいるラグーン先輩に片思いをしても、ヴィヴィ先輩がっらいだけですよ。だったらこのまま次に進んでみませんか？」

「そ、それはあ……」

俺に痛いところを突かれてしまったヴィヴィ先輩が、困ったような顔で困惑をし始めた。これは押しきれぬだろう。さて、このまま彼女の処女をいただいてしまおうとしますか

……にゆうう♡

「——あつ♡……ユーリ♡……おねがいつ♡……っ♡……っ♡……っ♡」

俺が少しでもヴィヴィ先輩の股間に向かって腰を押し込むと、彼女のおまんこの中に俺のチンポがねとりとした愛液の感触にすべりながらズプリと簡単に埋まり込んでし

まう。ついにヴィヴィ先輩のおまんこには、俺のチンポが数センチだけだが挿入をされてしまった

「先輩のこと、大切にしますよ」

……。

……。

……。

「……本当？」

まさに正常位でセックスを始める直前という状況で俺が甘い言葉をかけると、少しの沈黙の後にヴィヴィ先輩が俺の真意を測るようにして質問を返してくる。順調に彼女の心は揺れ始めているようだ。だってさっきまでのヴィヴィ先輩は、俺との行為自体を拒絶していたんだから

俺はそのまま彼女の心を押し切るようにして、言葉が続けていく

「本当です」

……。

……。

……。

「……どうしよう……分かんない」

先程まではラグーンが好きだからと俺との行為を断っていたヴィヴィ先輩が、ついには俺の提案を受けるかどうかで迷い始めていた。ヴィヴィ先輩の心が順調に堕ちている。俺はそのことにほくそ笑みながらも、彼女の心をさらに墮落させるための行動に出ることにした

……くちゅ♡……くちゅ♡

そして俺が考える素振りを見せているヴィヴィ先輩にキスをする、迷いを見せていたはずの彼女が俺に応えるようにして吸い付くようなキスを返してくる。確実に、彼女の心からは抵抗が消え始めていた

このままイケると判断した俺は、そのままヴィヴィ先輩とのセックスを無許可で始めることにする

にゅううううん♡

「——ッ！——っ♡——ユーリ！——っ♡——っ♡」

自分のおまんこの中に俺のチンポが入り込んでくるのが感触で分かってしまったヴィヴィ先輩が、慌てて俺に言葉をかけてくるがもう遅い。俺は彼女の言葉を無視すると、ゆつくりと俺のチンポをヴィヴィ先輩のおまんこ内へと挿入していく

初物のヴィヴィ先輩の膣肉を縦に裂くメリメリとした湿っていて生温かい素晴らしい感触と愛液のヌメリを俺はチンポに心地よく感じながらも、無遠慮に彼女の体内を蹂躪していくことになった

さて、ヴィヴィ先輩の処女をいただきますか

——ぷつり♡

そして俺のチンポによって、ヴィヴィ先輩の処女が失われることになる。予想もしていなかった展開に、ヴィヴィ先輩は呆気にとられてしまっていた

「……………どうしよう……………ユーリとエッチしちゃった……………」

平坦でクールな声で、ベッドに仰向けに寝て股を開いたまま動けないヴィヴィ先輩がポツリと困惑の言葉を口に出している。俺は彼女が見せたその隙の間にヴィヴィ先輩の体に回復魔法をかけると体の痛みを取り除き、避妊魔法をかけて彼女が俺とセックスを

するための準備を着々と整えていく

「ヴィヴィ先輩のことが好きすぎて、我慢できませんでした」

「……そ、それはあ——っ!!!——まってっ♡——ユ—リっ♡——まだ動いちやだめっ♡
——っ♡——あっ♡」

……ぬぼ♡……ぬぼ♡

困惑を続けるヴィヴィ先輩を無視して正常位のまま俺が腰を振り始めると、ヴィヴィ先輩がおまんこから上ってきた彼女の人生で初めて味わうであろうセックスの快樂に甘い声をあげ始める

まずはヴィヴィ先輩に、セックスが気持ちいいってことを教えてあげなくてはな。そして少しずつ、彼女の体をズブズブに快樂で墮としていくのだ

「……はあ♡……はあ♡……っ♡……あっ♡……っ♡……あああ♡」

俺がヴィヴィ先輩のおまんこに心地よくペニスをスポスポと出し入れしていると、次第に余裕のなくなってきたヴィヴィ先輩が俺のチンポの前になすがままになっていく。彼女が着ていた黒いローブをセックスをしながら俺が脱がすと、俺達がセックスをしている室内にはヴィヴィ先輩の小柄でかわいいBカップのおっぱいがぶるりと露出されてしまう

「ヴィヴィ先輩。気持ちいいですか？」

「…………ユーリ♡…………こんな知らない♡…………っ♡…………あっ♡…………あっ♡」

快楽によってクールなジト目を濁らせてしまったヴィヴィ先輩が、ゾクゾクと体を震わせながら俺の質問に答えてくれる。彼女の体はしつかりと感じてくれているようで、遠慮がちだった両脚を今はぱっくりと開いてヴィヴィ先輩は俺のチンポをおまんこで美味しそうに受け止め続けていた

「ヴィヴィ先輩と俺の体の相性。いいみたいですね」

「……そんなの♡……私に分かるわけなんてない♡……んっ♡……っ♡……あっ♡」

俺のチンポを体内に入れられながら心地よさそうに体を悶えさせるヴィヴィ先輩に、俺は調子のいいことを吹き込んでいく。このまま彼女を、俺にとつて都合のいい女に作り変えてしまうのだ

「でも先輩。気持ちよくないですか？」

「……気持ちいい♡……っ♡……けどっ♡……っ♡……んっ♡」

俺の言葉に観念をしたような空気になったヴィヴィ先輩が、自らの負けを認めるような表情で俺のチンポをおまんこに出し入れされるのが気持ちいいと小声で教えてくれる。どうやら彼女は俺とのセックスを楽しみ始めたようだ。俺はヴィヴィ先輩のその変化に便乗すると、そのまま彼女の心を陥落させていくことにした

「もつと先輩のこと気持ちよくしますから。このまま楽しんでいきましょうよ」

れてしまった彼女の思考を陥落させることで、ヴィヴィ先輩を俺とのセックスに漬け込んでいくことに決めた

「今日だけです。今だけ全部を忘れて楽しみませんか？ヴィヴィ先輩の片思いのつらい気持ちとか今までの悔しさとか。全部、ここで発散させちゃいましょうよ」

「……あんっ♡……あんっ♡……でもお♡」

ベッドの上で正常位に股を開いて俺とセックスをしていたヴィヴィ先輩が何かを考えた。これはもうおしまいだ。彼女の気持ちがセックスに向かって傾いたからな。後は坂道から転げ落ちるように、ヴィヴィ先輩の心が快樂に逃げ込むのを眺めていればいい

「俺の気持ちも今日、ヴィヴィ先輩が俺とセックスをしてくれたら全部封印します。これからはヴィヴィ先輩の片思いも応援します。だから今日だけ、全てを忘れて楽しみなせんか？」

「……………」

俺の言葉にヴィヴィ先輩が無言になる。俺はピストン運動を止めて、彼女が答えを出すのを静かに待つことにした。ここはヴィヴィ先輩に、自分がしっかりと考えて答えを出したと思ってもらわなくてはならないからだ

……………」

……………」

……………」

「……………うん♡……………いいよ♡」

ヴィヴィ先輩が堕ちた。彼女はジト目をやさしく潤ませながら、セックスの快楽にトロリとゆるんだ顔で俺に肯定の言葉を返す。ヴィヴィ先輩は今から俺と望んでセックスをする。これからが、お楽しみというわけだ

「ヴィヴィ先輩。好きです」

「…………ふふ♡…………でも今日だけ♡」

クーデレになったヴィヴィ先輩が慈しむような甘い声に変わると、快楽に濁った瞳で俺を見つめながらもメスの吐息で彼女は俺と先程までしていた気持ちいいセックスの再開を求めました。俺とのセックスに乗り気になったヴィヴィ先輩のおまんこが、興奮からかじゆわりとひどく濡れだした後には俺のペニスをヒクヒクとヌメった腔壁で味わうようにして締め付けてくる

さて、きつかけは作った。後はヴィヴィ先輩の体をズブズブに墮としていくだけだ

俺は正常位の体位のまま彼女の唇にやさしいキスをする、中断していたヴィヴィ先輩とのセックスをやり直すために、彼女の心ごと濡れてぱつくりと開いてしまったおまんこに向かって腰を振り始めることにする

ヴィヴィ先輩と学校で♡

「……………あん♡……………あん♡……………ユーリ♡……………そこお♡」

結局俺とヴィヴィ先輩が初めてセックスをしたあの日から、俺と彼女は定期的に体を重ねる関係になってしまっていた。最初は俺の誘いを何とか断ろうとしていたヴィヴィ先輩であったが、セックスの快楽という誘惑に勝てなかった彼女はズルズルと俺との肉体関係にハマり込んでいくことになる

今の俺たちはひと目がない校舎の裏でこっそりと、周りに隠れてお互いの体を貪り合っていた

黒いローブの裾をまくりあげたヴィヴィ先輩が魔女服姿に下半身を丸出しにした格好で、彼女が四年間通った校舎の壁に手をかけて俺にお尻を突き出す。彼女は右足に脱いだばかりのぬくぬくとしたまだ温かいピンク色のかわいいパンツをぶら下げた状態

で、俺と立ちバックでセックスをしていた

セックスに慣れ始めたヴィヴィ先輩は恥ずかしがることもなく、心地よさそうな甘い声で自らの体内に出たり入ったりする俺のチンポを堪能している

そんなズポズポと美味しそうにおまんこで俺のチンポを啜えているヴィヴィ先輩に、俺は腰をふりながら声をかけることにした

「ヴィヴィ先輩。結局、俺とのセックスにハマっちゃいましたね」

「……………それはあ♡……………ユーリが♡……………変態だから♡……………っ♡……………あっ♡」

セックスに夢中になっているヴィヴィ先輩が、甘い吐息が混じった平坦な声で言い訳をしている。今日だけ、今日までと言い訳をしながらも彼女は、なんだかんだ俺と初体験を済ませた野外学習のあの日からずっと俺の誘いに乗るようにはしてずると俺に肉体関係を許してしまっている

一回だけだと俺と関係を持ったことが仇となったのだろう。ヴィヴィ先輩の心からタガが外れてしまったのだ。あとは二回でも三回でもそんなに変わらないという気持ちになり、濡れたおまんこに硬くなつたチンポを出し挿れするという行為の気持ちよさに負けた彼女の心が勝手に転げ落ちていった

最初は本当にあの後、俺は肉体関係を求めずに誠実にヴィヴィ先輩と関わっていた。しかしある日、俺と彼女が二人つきりでいい雰囲気になつたときにイケると思つた俺が小声で再びヴィヴィ先輩をセックスに誘惑すると、あの日の気持ちよさをもう一回味わつてみたいという欲望に流されてしまつた彼女が悩んだ末にもう一度俺とセックスをすることになる

その後は簡単だ。ズルズルと堕ちていくように、ヴィヴィ先輩は俺の求めに応じて何度もセックスをするようになった。本人はいけないことをしていると悩む素振りを見せていたが、何度も俺と肌を重ねる内に彼女の心からは次第に心の抵抗も消えていったようだ。そうして俺とヴィヴィ先輩は、今の関係に至るといふわけだ

「ちよつと、話つて何？」

俺がヴィヴィ先輩とこつそりセックスをしている校舎裏に、誰かがやってくる気配がある。しかも物陰に隠れてセックスをしている俺たちのことが見えない位置だ

校舎裏にやってきた人物の正体はソフィアとラグーンだった。面白そうなきら起きると思った俺は二人がセックスをしている俺たちに気づいていないのをいいことに、物陰に隠れて二人の様子をうかがうことにする。もちろん、俺はヴィヴィ先輩のおまんこへのピストン運動を止めない

ズポ♡ズポ♡

「…………ユーリ♡…………おねがい♡…………ラグーンに聞こえちやう♡…………っ♡…………っ♡」

「ヴィヴィ先輩。声、頑張つて我慢してくださいね」

ヴィヴィ先輩が甘い吐息で俺の行動に抗議をするが、俺は取り合わない。俺と肉体関係を持っていることをラグーンにバレたくないヴィヴィ先輩はおまんこの穴を俺のペ

ニスの形にぼつこりと丸く押し広げられながらそれをヌルヌルと出し挿れされつつも、右手で口を抑えるようにして必死に声を我慢し始めた

そして俺たちは物陰に隠れて立ちバックでセックスをしながら、ソフィアとラグーンの秘密の会話を聞くこととなる

「ハニーのことが好きすぎて、もう我慢ができないんだ」

「やめてよこんな場所で！ふざけないで！」

どうやらラグーンは俺にマリアーナを奪われ、さらに最近はヴィヴィ先輩も彼に対してそつけないということまで何やら焦り始めているようだ。それでラグーンは何でも言うことを聞くと思っているソフィアに対して直接的に肉体関係を求めたと

でも家を守るために脅されてラグーンの恋人の演技をしているだけのソフィアは、卒業までは清纯な恋人同士のふりをするために肉体関係を持たないという約束を盾にしてラグーンの提案を無下に断る。もちろん、ソフィアはそういう約束があるなどは口

にしない。二人の暗黙の了解を武器にソフィアはラグーンをやり込めると、その場から立ち去っていったのだった。一応、ソフィアは誰かに話を聞かれないように警戒をしているようだ

ラグーンも誠実な人間のふりをするために学園内ではソフィアに対してあまり強く言えないようで、あつけなく彼の提案は却下されることとなった

「やっぱり恋人同士のソフィア先輩とラグーン先輩は、もうそういう関係を持っているみたいですね。でも、今日はソフィア先輩が気分じゃなかったと」

でも、俺とセックスをしながら二人の会話の一部始終を見ただけのヴィヴィ先輩にはそんな事情は分からない。ラグーンとソフィアが去った後にセックスを続ける俺は曲解した事実をヴィヴィ先輩に伝えることで、彼女の心にダメージを与えていく

ぬぼ♡ぬぼ♡

「……………♡……………♡……………♡……………♡……………」

ヴィヴィ先輩にとっては、まだ自分にもチャンスがあると思っていたラグーンへの片思い。でも実際は、二人は隠れてすでに肉体関係まで結んでいた。そう勘違いをしたヴィヴィ先輩は、俺とセックスをしながら自分が完全に失恋したと思いこんでしまったようだ

自分の片思いは実ることがないという現場を目の当たりにしたヴィヴィ先輩は、どうやってその傷ついた心を慰めようとするだろう。そしてその手の類の人間は快樂に逃げ込むことが多い。そしてヴィヴィ先輩は今、誰とセックスをしているのか？

そう。俺だ

俺はヴィヴィ先輩の心に渦巻く失恋の傷の痛みと複雑な感情が整理されるのを待つあいだ、無言のまま彼女の濡れたおまんこに向かって腰をふり続けるのであった

……。

……。

……。

「……ユーリ♡……今日は中に出して♡」

突然、ヴィヴィ先輩がポツリとつぶやき俺に甘えてくる。一応、彼女の体に避妊魔法は掛けているのだが、ヴィヴィ先輩はいつもそれだけはダメと懇願し俺からの中出しは避けていた。その彼女が今、気持ちよくなるために俺の精液を求めている

ついに、ヴィヴィ先輩の心境に変化が起きたようだ

俺との肉体関係で、ヴィヴィ先輩なりに引けない一線があつたのだろう。俺に体だけは差し出しても心までは渡してはいないと。彼女はそう思うことで、自分の心を守っていたのだ

そして今日、失恋を目の当たりにしたと勘違いをしたヴィヴィ先輩は自暴自棄になる

とついに、もつと大きな快楽を味わうために俺に対して自分の心までをも差し出してしまふことになる。ヴィヴィ先輩の心が、陥落した瞬間だった

「ヴィヴィ先輩。いいんですか？」

「……………うん♡……………ユーリ♡……………私のこと♡……………もつと気持ちよくして♡」

俺にとって大変都合のいい展開の前にももちろん俺がヴィヴィ先輩の誤解など解くわけもなく、俺は彼女が絶望の内に抱いたその薄暗い肉欲を叶えるためにピストン運動を早めていくことにする

俺のチンポをおまんこにズポズポと出し入れされる速度が早くなると、ヴィヴィ先輩はつらいことから逃げ込むようにして俺とのセックスにのめり込んでいった

「……………ユーリ♡……………すっ♡いい♡……………すっ♡いいの♡」

ズポ♡ズポ♡

セックスの快楽にふーふーと鼻息が荒くなってしまうた魔女姿のヴィヴィ先輩が、快感の熱に体を火照らせながらも俺の言葉に肯定の意を返してくれる。さて、ヴィヴィ先輩の初物の中出しをいただきますか。そのあとは彼女の傷心に乗じて性感開発もしてしまおう。自暴自棄になったヴィヴィ先輩は快楽に逃げるために、きつと俺の提案に乗ってくるはずだ

ヴィヴィ先輩を墮とすのにはもう少し時間がかかるかと思っていたが、幸運なことにチャンスが舞い込んできたようだ。ありがとう。ラグーン

「——あつ♡——あつ♡——あつ♡——っ♡——おくう♡——すっごいのお♡」

駅弁の体位で俺にだいしゆきホールドでしがみつくヴィヴィ先輩に向かって、俺は彼女の膣肉をえぐるような変則ピストン運動を繰り返していく。これから自分が男の精液を生で直接体内に注がれるという実感に興奮をしたのか、俺のチンポを受け止め続けるヴィヴィ先輩のおまんこの中はうねうねとうごめいて、そのままビチャビチャに濡れてしまっていた

彼女の体は俺の精液を求めて興奮しきっている。そんな状態のヴィヴィ先輩のおまんこに今、快樂物質がたくさん詰まった俺の精液を注ぎ込んでしまったら彼女はもう元に戻る事が出来ないだろう。最高だな。ヴィヴィ先輩は俺の精液でこれから淫乱な女に生まれ変わるのだ。そして彼女は俺の女になる

そんなことを考えながら俺はヴィヴィ先輩のおまんこの奥にまでペニスを突きこむと、そのまま俺のネットネットとした生温かい精液を彼女の子宮に注ぐことにする

そして俺はヴィヴィ先輩のおまんこに初めて、精液を注いだ男になった

——びゅるるるる♡——びゅるるるる♡

「——っ♡——っ♡——っ♡——っ♡——ああああっ♡——っ♡」

ゾク♡ゾク♡ゾク♡

俺の精液が体の中にじんわりと広がる生温かい感触が分かったのか、俺がヴィヴィ先輩の体内に中出しをした瞬間に俺の体にしがみついていたヴィヴィ先輩が心地よさそうに全身を震わせ声を上げ始める

そして依然としてお腹の中に直接広がっていくその生々しいねとねとした甘い感覚に喜ぶヴィヴィ先輩が呼吸を深く吐くと、俺から受ける中出しがよほど気持ちよかったのかそのまま彼女は俺にしがみつくようにして快感にまみれながらイッていた

「……………ユーリに♡……………だされて♡……………っ♡……………イクう♡」

ビクン♡ビクン♡

おまんこの中に直接、生で俺の精液を注ぎ込まれながらイッているヴィヴィ先輩がうっとりとした表情で青空を見上げている

俺とセックスをしながら快晴に澄んだ空気を見上げるヴィヴィ先輩の宝石みたいに輝いていた青色の碧眼は、快楽に濁りきるとドロリと暗くなってしまうていた

……。

……。

……。

「……すっごくいい♡……もつと前から♡……しておけばよかった♡」

初めての中出しを経験した直後に、俺と性器がまだ一つに繋がったままのヴィヴィ先輩がそんなことを俺に伝えてくる。彼女の心が堕ちた。そう。どつぷりと

俺はこの機に乗じて、ヴィヴィ先輩の体をもう戻れなくなるくらいにまでにどろどろに開発することにする。そのために俺は、彼女を家に呼ぶことにした

「これから俺がヴィヴィ先輩の中にいっぱい出してあげますから。今から、俺の家に移動して続きをしますか？俺の家に来ればもつと、ヴィヴィ先輩のこと気持ちよくしてあ

げられますよ?」

「……………うん♡……………今からユーリの家に行く♡」

とうとう青色のジト目にハートマークを浮かべてしまったヴィヴィ先輩を俺が誘惑すると、彼女は何の抵抗も感じることなく自ら進んで俺の家へと付いてくることになる。これで、ヴィヴィ先輩の体は俺専用の女に開発をされてしまうというわけだ

彼女の肯定の意を聞いた俺はこの後ヴィヴィ先輩を家にお持ち帰りすると、彼女の体を性的に開発しまくることにした

すでに俺と長時間セックスをすることになった彼女は俺から与えられた快樂によって全身をふにやふにやにされてしまい、今はクールで平坦な声を獣のようなアへ声に変えてしまっている

「…………ユーリ♡…………まって♡…………♡…………あつ♡」

「メチャクチャにしてほしいって言ったのは先輩ですよ」

「…………こ、こんなにすごい♡…………知らなかったから♡…………♡…………♡…………♡」

ビクン♡ビクン♡

予想をはるかに超えていた強烈すぎる快樂から逃げようとするヴィヴィ先輩の体を俺は後ろから抱きしめると、俺はベッドの上にまつすぐ寝た寝バックの体位で彼女のおまんこの内側をゴリゴリとこすり続けていく

「…………もう♡…………耐えられないからあつ♡…………っ♡…………っ♡…………っ♡」

そうやって長い間、ヴィヴィ先輩の意識がドロドロになってしまっただけで彼女の体をとろけさせていると、これまで味わったことのないような桃色の快楽にまみれたセックスに耐えきれなくなってしまうたヴィヴィ先輩がついに弱音を吐きだす

それでも俺は彼女の体を責めることをやめない。このままヴィヴィ先輩の心と体をもっとドロドロに溶かしてしまいたいからだ。俺は今日、ここで彼女を墮とすのだ

「…………あつ♡…………あつ♡…………ユーリっ♡…………おねがい♡…………もうっ♡…………わたしが♡…………壊れちゃうからあつ♡——っ♡——っ♡」

ビクン♡ビクン♡

寝バツクの体位でヴィヴィ先輩のおまんこのお肉をゴリゴリと激しくえぐり続ける俺に向かつて、彼女が泣きそうになりながらお願いしてくる。さて、ここからが本番だ。これからヴィヴィ先輩の心と体を俺専用の女に変えていくための下準備は整った

なったこのオーガズムが尋常じゃないくらいに気持ちいいことを俺に容易に教えてくれる

ヴィヴィ先輩への肉体調教の一環としてセックスの前に俺がパイパンにしてしまったヴィヴィ先輩のツルツルになったおまんこの土手には、すでに俺の淫紋が刻まれてしまっていた

もう彼女は俺から逃げられない。俺が刻んだ淫紋の効果によってヴィヴィ先輩の間には一生陰毛が生えることがなくなった。彼女は俺とセックスをするために、これから一生おまんこをパイパンのまままで過ごしていくのだ

最初は恥ずかしいと言って剃毛を断っていたヴィヴィ先輩であったが、失恋の悲しみを忘れるためには思い切ったことをしましょうよと俺が彼女をそそのかすと、俺の言葉に流されてしまったヴィヴィ先輩はお風呂場の中で羞恥に顔を真っ赤に染めながらも、俺に股間を差し出してその黒い陰毛を剃らせてくれたのだ

そしてそれからもつと体を気持ちよくする方法があるとヴィヴィ先輩に吹き込むこ

ガク♡ガク♡ガク♡

俺は強すぎる快樂と失恋によつて意識がグチャグチャにかき混ぜられてしまったヴィヴィ先輩にトドメを刺すことにする。俺の精液を子宮に注がれながらト口顔で深く絶頂をしてみたい思考が俺のチンポ色一色の染まつてしまった彼女の心に、もう戻れない楔を打ち込むのだ

「——なっ♡——なりましゅううううう♡——わらひっ♡——ユーリの女になりまひゅうううう♡——だからあ♡——っ♡——っ♡」

正常位の体位で股を開かされておまんこの奥までを俺のちんぽでゴリゴリとえぐられながら今日は何度も俺から調教をされ屈服アクメを決めることになったヴィヴィ先輩が、あつという間に俺に対して屈服の宣言をしてしまう

「じゃあ、これからもつとヴィヴィ先輩のことを気持ちよくしてあげますからね」

る。これで彼女への調教は一通り済んだようだ

今日からヴィヴィ先輩は俺の女になった。それでは俺の女だという証を刻むために、彼女の体に刻んだ淫紋をヴィヴィ先輩の体内に俺の精液を注ぐことで完成させること
しますか

……。

……。

……。

——びゅるるるる♡——びゅるるるる♡

「……♡……♡……♡なにこれっ♡……♡……♡つ♡……♡……♡わらひが♡……♡……♡おわる♡……♡……♡っ♡……♡……♡い
やああああっ♡……♡……♡わらひがあっ♡……♡……♡こわされるうううう♡……♡……♡っ♡……♡……♡っ♡……♡……♡
っ♡」

液を全身に染み渡らせながら、淫乱な女へと生まれ変わるようになった。ヴィヴィ先輩は俺の眷属へと体を作り変えたのだ

「……………あつはああああ♡……………ユーリっ♡……………これっ♡……………すっごいのおっ♡……………っ♡……………っ♡」

俺の淫紋を刻んだことによつて味わうことができるようになった桃色の素晴らしい快樂が、ヴィヴィ先輩の全身にどろりと染み渡つていく。彼女は今までの人生の中で生まれてから一度も味わつたことのないとろける蜜のような甘い多幸福感を受け、濁つた青い瞳でうつとりと天井を見上げていた。その彼女の笑顔はとても幸せそうだ

……………じゅるるるるるるっ♡……………じゅるるるるるるっ♡

「……………ユーリ♡……………もつとちようだい♡……………っ♡……………っ♡……………っ♡」

「精液を出し終えた俺がヴィヴィ先輩のグチヨグチヨした感触のおまんこからチンポを引き抜くと、彼女はもつと俺の精液を子宮に注いで欲しいとおねだりをしながら夢中

で俺のペニスにしゃぶりついてくる。ヴィヴィ先輩は素晴らしい淑女になったようだにゆうううううん♡

「——あ、はあ♡……ユーリのちんぽお♡……すっごいのお♡……もつといっぱい♡……ごりごりして♡」

ズポ♡ズポ♡

こうしてヴィヴィ先輩はクールな魔女っ子から、俺の女へと変わることになった

俺は淫乱な女に生まれ変わったヴィヴィ先輩と彼女があまりの快楽に腰をふりながら気絶をしてしまうまで、このままセックスを続けるのであった

マリアーナ完墮ち♡

「——あはあ♡——あっ♡——あっ♡」

あれから俺に肉体を調教されきったマリアーナは現在、俺との快樂漬けの日々によって暗くどろりと濁ってしまった美しい茶色の瞳でト口顔になりながら今は正常位で俺のチンポの味をおまんこで堪能している

俺のペニスによって破瓜を済ませたばかりでセックスを覚えてた頃の彼女は淑女にふさわしくないと快感を感じることに対し遠慮がちであったが、今のマリアーナははしたなくも自ら股を開いてヘコヘコと腰を振る姿を俺に披露している

順調にマリアーナの心は俺によってどつぷりと快樂色に染まってきている。俺はそんな彼女を今日、完全に墮ちとしてしまうことに決めていた

俺の淫紋を刻んだ効果によって彼女の体内で爆発的に増え始めたところけるような俺とのセックスの快楽によって、淑女を目指していたはずのマリアーナが獣なようなやり声を出し始めてしまった

そして俺とのセックスの中でさらなる強い快楽を享受することができるようになる自分の体が生まれ変わったことに気づいたマリアーナは、それを喜ぶかのように夢中になって激しく腰をへこへことして振り出していく

「——ユーリ様のちんぽおっ♡——すっごいのおっ♡——っ♡——ああああああっ♡」

淑女にあるまじき淫らなよがり声を上げながら、マリアーナが全身をぶるぶると歓喜に震わせながらも正常位の体勢で股を開きながらベッドの上で俺のチンポを堪能している

そんな彼女のうねうねと動く気持ちいい感触のおまんこは、俺とのセックスの快感に

よってドポッと染み出し始めた大量の愛液によつて中がグチャグチャに濡れきつてしまつていた

俺はマリアーナの体をさらに快感漬けにするために彼女の子宮を押しつぶすようにして体にのしかかると、ベッドの上に仰向けに寝たまま股を開き心地よさそうな顔で俺と一緒に腰を振っているマリアーナのおまんこに向かつてピストン運動を続けていくことにする

——びゆるるるるる♡——びゆるるるるる♡

「——んぐうううううっ♡——っ♡——っ♡——あゝっ♡——あゝああああああっ♡」

俺が彼女の体に大量の精液を注ぎ込むと、俺の淫紋を刻まれたことにより俺の精液を体内に吸収すると気が狂うほどの快感が全身から滲み出てくるように体の性質が変化してしまったマリアーナがその激しい快感に心を蝕まれていく。そして彼女の瞳はどつぷりと、快楽に漬かりきること淫乱な女の眼差しへと少しずつ移り変わっていく

「——んっほおおおおおっ♡……おっ♡……おっ♡……おっ♡……おっ♡……おっ♡」

俺はマリアーナの体に刻んだ淫紋を完成させるために、さらに大量の精液を彼女の体内に注いでいく。濁流のように自らの子宮から溢れ続けるドロリとした全身を蝕むような桃色に痺れる快楽にマリアーナは、次第に意識をどっぷりとしたものに変異させていった

「——わらひっ♡——ユーリさまの女になれてっ♡——しあわせれすわあっ♡——っ♡——っ♡」

俺の淫紋が完成する間近になると、強すぎる快楽によって全身からぐったりと力が抜き取られてしまったマリアーナが俺とセックスをしながら甘い幸せの中で現時点での彼女の感情を吐露し始める。俺はそんな淫乱に生まれ変わり始めたマリアーナの心を、言葉を使ってさらにグチャグチャに汚していくした

「マリアーナの体に刻んだ淫紋が完成したら、君は本当の意味で俺の女になるんだよ。

そしたらマリアーナの体はもつと気持ちよくなれるからね」

「——あはあ♡——そうなんれすのお♡——っ♡——っ♡——ユーリ様あ♡——わらひのおまんこお♡——もつときもちよくしてくらはあい♡——っ♡——んっ♡——っ♡」

ぬぼ♡ぬぼ♡

俺とのセックスにズブズブにハマり込み、もはや濁ってしまつた意識の中でマリアーナはさらなる快楽を求めて体を乱している。彼女の心はすでに快楽のことしか考えられなくなつていた。これでマリアーナは、俺の女になるにふさわしい心を持つようになったというわけだ

ではこれからマリアーナを、本当に身も心も全て俺の女に変えてしまふとしよう

「ラグーンのことはいいいのかい？」

「——あつ♡——あつ♡——あつ♡——そんなのお♡——もう♡——どうれもいいです

のお♡——っ♡——っ♡——ユーリ様のちんぽのほうがつ♡——わらひには大切なんれすからあ♡——っ♡——っ♡」

ろれつの回らなくなった声でマリアーナが腰をふりながら俺に向かって完堕ちの宣言をする。俺はそんな彼女の体に刻んだ淫紋を完成させることで、マリアーナの心にトドメを刺す準備を整えた。これで今日から彼女は俺の女だ

……。

……。

……。

「……ラグーン。……あなたこと好きでしたけど。……っ♡……わたし♡……これから♡……ユーリ様の女になります♡……もう何回もユーリ様の中で出されちゃった私の子宮に♡……今からユーリ様の精液をたくさん注いでもらって♡……このおへその下にある淫紋を♡……このまま完成させられちゃいますの♡」

俺が用意した映像記録球に向かってうっとりとした顔でラグーンへのお別れの言葉を口にかけているマリアーナの子宮に俺の精液を注ぎ込むことで、彼女の体に刻んだ俺の淫紋を完成させることにする

元ハーレムメンバーであるマリアーナの体に俺の淫紋が完成してしまうまさにこの瞬間をきちんと映像記録球に録画をして、破滅した後のラグーンにプレゼントしてあげるのだ

彼にはマリアーナが俺に寝取られた姿を見て存分に抜いてもらいたい

……とぷ♡……とぷ♡

「……あはあつ♡……ユーリ様のせーし♡……また中に出されちゃったあ♡……あなたの女になれなくてごめんね。……ラグーン。……でもお♡……わたし♡……ユーリ様の女になるほうが♡……あなたと過ごしてきた四年間よりもずっとしあわせなの。——あつ♡——あつ♡——あつ♡……ユーリ様のせーし♡……すつごく♡……気持

ちいひ♡」

きゆううううううん♡

——びゆるるる♡——びゆるるる♡

「——あはあっ♡——すっごいのお♡——これっ♡——すっごくっ♡——しあわせええ♡——っ♡……あっ♡……あっ♡……あっ♡」

俺の淫紋が完成した記念に映像記録球を向けマリアーナにラグーンへの最後のメッセージを言うように頼むと、彼女がそれに応えるようにして話し始める。ちなみにマリアーナにはすでに、ラグーンの裏の顔と彼女の実家が冤罪を受けることになった原因が全てラグーンにあることを説明している。そしてこれからその冤罪をすべて俺が晴らすこともだ

マリアーナはもう、身も心も本当の意味で俺の女になった

「……ラグーン。……わらひ♡……ユーリ様の淫紋を完全に刻まれちゃいました♡
……あなたはユーリ様とセックスをする私の体を見て♡……いっぱい♡……シコシコ
しててね♡」

そして映像記録球に完成した俺の淫紋を見せつけるようにして、マリアーナがアハ顔
ダブルピースをキメながらラグーンに向かつて最後のメッセージを吹き込んでいく。
これで彼女の心にあるトゲは消えた。これからマリアーナは俺のことしか見ない

「……ユーリ様のちんぽお♡……もつとズボズボしてくださいませえ♡……っ♡——
あっ♡——あっ♡……すっごい♡……ふつといのお♡……はいってきたああ♡——
ユーリ様のちんぽお♡——だいすき♡——んっ♡——あっ♡」

その日の俺とマリアーナのセックスは、彼女のおまんこ全部が白く泡立ちどろどろに
なってしまうことも終わることはなかった

墮ち始めたニコル♡

「くふううっ♡——っ♡——んっ♡」

俺はいつものように無理矢理自宅に呼びつけたニコルの体をいやらしく開発してしまつたために、彼女の全身にローションをたっぷり塗りと塗りたくりながらも柔肌をねつとりとこねるようにしてニコルの肉体に性感マツサージを施していく

俺がマツサージをしながらニコルの全身に塗りたくっているローションは、俺が薬液創造のスキルで作りに出した特別性だ。彼女の体が発情をしてみまう媚薬成分がたっぷりと詰まった特製のローションを俺の手で体中に塗りたくられながら、ニコルは全身を熱く火照らせようにして身悶えていた

しかしニコルの体にたっぷりローションを使ってマツサージを施しても絶対に彼女の体をイカせないように留意し、まったく気持ちよくもさせない。あくまで、彼女

の体を興奮させるだけにとどめておく

そして俺はそのえげつない行為をニコルに対して連日で行っていた。最初は自分の体が気持ちよくなりたいたいというこそばゆい欲求に耐えていた彼女であったが、毎日のように俺の手によって欲求不満を募らせられた後に放置され、そのまま俺に何もされずに帰宅させられ続けたことによってニコルの心からは少しずつ理性が壊れてきていた

現に今も施術台の上に全裸でうつ伏せになった格好で俺にお尻をマッサージされながらニコルは苦しそうに両脚をくねくねと悶えさせると、なんとか彼女は自分の体からとめどなく湧き上がってくる今までに感じたことがないくらいに強い性欲を抑え込もうとしていた

でも俺はそんなニコルの苦悶を気にすることなく、今日も彼女の体を発情させるだけの性感マッサージを施していくのであった

「……………ユーリ……………たのむ……………触ってくれ」

ついにある日、ニコルが根負けをする。彼女が施術台の上に仰向けに寝た状態で俺からの丹念なマッサージを受けていたときにポツリと、エッチがしたいとおねだりをしてしまったのだ

「……したくてたまらないんだ」

俺から執拗に受けたマッサージによって全身が火照って発情しきり、潤んだ瞳で施術台の上に仰向けに寝たまま俺を見つめるニコルが俺とセックスがしたいと懇願している。さて、ここが彼女の墮としどころだ

今までニコルは、俺の発情マッサージを受けたあとに自分の家に帰ってからこっそりと自慰をすることで何とか俺から与えられる性欲を発散させようとしていたようだが、もちろんそんなことでは俺特製の媚薬ローションによる彼女の体の発情は収まらない

ニコルの体の芯からドロドロになって湧き出してくる性欲を止めるには、彼女のおまんこを俺のペニスによって奥までグチャグチャにかき混ぜるしかないのだ。そして溜まりに溜まった性欲の分だけ、ニコルの体は俺のチンポを求めてしまうことになる

「俺の女になるならいいよ」

「……………くっ……………でも」

俺のその提案に飛びつきそうになったニコルが、何とか理性を保ちながら俺に対して拒絶の態度を見せる。彼女にとって最優先なのはソフィアへの忠誠だからな。ニコルはどうにか欲望を抑え込んで心をその場に踏みとどめたようだ

だから俺はそんな彼女の心に逃げ道を作ること、そのままニコルの理性を壊してしまふことにする

「みんなにバレるのが嫌？それともソフィア先輩のことがあるから？」

「……………」

俺の言葉に不安な表情になりながらも、何やら話し始めた俺に向かってニコルが耳を

傾けている。俺はそんな彼女の態度を無視すると、気にせずそのまま話を続けることにした。ニコルの心が、俺からの誘惑で少しずつ汚れていく

「ニコルと俺との関係は今までと何も変わらないよ。みんなに隠れてこつそりとお互いにエッチをする関係。ただ、これからは俺からの命令で無理やりじゃなく、ニコルが望んで俺とエッチしているって関係に変わるだけだ。それ以外は何も変わらない」

「……。」

肉欲と理性の間で揺れているニコルに対して、俺は彼女にとって都合がいいだけの状況を作っていく。こうして坂道を転げさせるようにして、ニコルの心を俺とのセックスに墮落させてしまうのだ。俺は無言のまま真剣な表情で俺の話に耳を傾けているニコルに向かって会話を続けていった

「ほら。いやいや俺と肉体関係を結んでいるという関係から、ニコルが望んで俺とエッチするとう関係に変わるだけでいいんだ。それに演技でもいいんだよ？うまく演技をして俺を騙して、体の不快感を発散させて、万全の体調を整えてソフィア先輩を警

護する。賢い護衛の選択じゃないかな？」

「……体調を……整える……ため？」

これは自分の利己的な行動ではなくて、ニコルの本分であるソフィアの護衛に全力であたるために体調を整える行為だという無理やりな道筋を俺が作ってしまう。普通ならありえない選択ではあるのだが、すでに我慢の限界にまで達した肉欲と目先の快樂への飢えと渇きによって、彼女の心は自分にとって都合のいい選択と解釈に逃げ込んでいくことになる

あとはそのまま俺が背中を押して、ニコルの心に言い訳をさせてしまえばいい

「ニコルはソフィア先輩を守るためには、影でどんな汚いことでもするって決めてるんでしょ？ だったら俺を利用してニコルが体のムズムズを取り除くことも、その何でもするに該当するよ。だって、ソフィア先輩を護衛するために体調を万全に整える必要がニコルにはあるんだからさ」

「これは……ソフィア……お嬢様を……守る……ため……の……こと……」

ソフィアの護衛の仕事のために、自分の体調を整えるだけというありえない言い訳を見つけてしまったニコルが、ドロリと肉欲に濁った瞳で俺からの誘惑の言葉を反芻している。これはもう堕ちたな。あとは彼女の心がどつぷりと汚れていくのを見守るだけでいい

「……わかった……でも……これはソフィアお嬢様を護衛する体調を整えるためであつて、お前に私が屈したわけじゃないからな……勘違いするなよ?」

「分かってるよ。ニコル先輩にとって最も優先すべきはソフィア先輩。その邪魔はしないよ」

「……ならいい……っ……そ、その……それで……」

ついさつきまで強気で屈しないと俺に対して宣言をしていたニコルが、久しぶりに俺とエッチすることができると期待をした途端に急にしおらしい態度を見せ始めて

しまう。どうやら彼女は俺との約束が反故されてしまう前に、なんとか俺とのセックスを済ませてしまいたいようだ。それほどまでに、今のニコルは俺とセックスがしたくてたまらないようだった

彼女の体に限界まで溜まってしまったムラムラがさぞかしつらいのだろう。さて、ではさつそく、俺のチンポでニコルの体に溜まった性欲を発散させてあげることになりますか

「……………ユーリ……………約束……………守るよな？」

ニコルは依然として物欲しそうな瞳で必死に、マッサージの施術台の上に座った格好で全裸にローションまみれの体をもじもじとさせながら俺を見つめている。俺はそんな彼女を促すと、シャワーを浴びさせたあとにベッドルームに移動することにした

……………。

……………。

……。

「……わたくしニコルは……おちんぼが欲しくて……今日から……ユーリの女になることにしましたあ……」

今、俺の目の前では青色のショートカットに澄んだ赤い瞳をしたニコルが、ベッドの上で全裸になり仰向けに寝てM字に股を開いた状態で映像記録球に向かつてはしたなくおまんこを両手で広げながら、俺の女になるという宣言している

俺は股を開いたその格好のままベッドの上から動かないニコルのおまんこに俺のチンポの先をピトリとあてがうと、まさに俺と正常位でセックスをする直前になった彼女の全裸の姿までも映像記録球に保存してしまうことにする。もちろん、俺とセックスを開始してから終わるまで俺はニコルの姿をこのまま録画するつもりだ

自分が誰かとセックスをしている場面を映像記録球に録画されてしまうという行為のあまりの恥ずかしさに顔を真っ赤に染めてしまったニコルが意識をいっばいいっば

いにしているが、彼女の心は俺と久しぶりにするセックスがすでに待ちきれないのか、ニコルの下半身はおまんこの奥からこぼれてきてしまったドロリとした大量の愛液によつてベトベトの状態になってしまっている

「演技を頑張るんでしたよね？」

「……そ、そうだ！……これはお前を満足させるための演技なんだからな！」

恥ずかしさと緊張に瞳をぐるぐると回しているニコルに俺が声をかけると、彼女はベッドの上で正常位の格好になって股を開いたままおまんこに俺のペニスをあてがわれているという状態で俺を睨みつけながら必死に言い訳を返してくる

しかしニコルはこれから俺とするセックスへの期待でよほど興奮をしているのか、彼女は興奮して荒くなった鼻息をまったく隠せていなかった

俺はそんなかわいいニコルの心をとろけるような快樂にどっぷりと漬け込んでいくために、このまま彼女と墮落のためにするセックスを開始することにした

——にゆううううううん♡

「——ちよつとっ♡——急につ♡——っ♡——っ♡……あっ♡」

俺がすでに濡れてヌルヌルになった彼女のおまんこに断りもなくペニスを挿入していくと、凜としてボーイッシュだったニコルの声俺のチンポが体内に埋まり込んだ途端に少し声色の高いメスの声に甘く変化する。俺は彼女のおまんこに半分だけ俺のペニスを埋め込んだ状態で、少しニコルに意地悪をすることにした

「じゃあ、抜こうか？」

「……っ♡……やだ♡……奥まで♡……挿れる♡」

ペニスを体内にねじ込む俺の腰の動きを途中で止められてから数秒後に、ベッドの上でぶいっつと俺から顔を反らしながらも怒った表情のニコルが俺に対しておねだりをしてしまう。さて、彼女の体はもう我慢ができなくなっているみたいだからな。ニコルの

体に溜まりに溜まった性欲を、俺のチンポで発散させてあげることになりますか

……にゅううううん♡

「……ユーリの♡……チンポおっ♡……久しぶりに♡……入ってきたあ♡……っ♡
……っ♡」

俺がニコルのおまんこの奥にまでペニスを突き込み腰を振ってそのまま彼女とのセックスを開始すると、ひさしぶりにおまんこの奥にまでいっばいに俺のペニスが埋め込まれるという気持ちよさを味わうことができたニコルは心の底から歓喜をするような声を出してしまふ

どうやらニコルはずっとムズムズとして待ち望んでいたおまんこの穴の奥までを一気に俺の太いペニスによつてポツコリと押し広げられる感触と、そのまま直接俺のチンポによつて彼女のお腹の内側にあるヌルヌルとしていて敏感で気持ちいい膣の粘膜をグチュグチュと強くこすられながら同時にかき混ぜられるという行為の心地よさと快感によつて、いきなり理性を飛ばしてしまつたようだ

「ずっと欲しかった？」

「……………うんっ♡……………っ♡……………すっごいつ♡……………きもちいい♡……………あっ♡……………あっ♡」

ずっと欲しかったおもちゃを買ってもらったばかりの女兒のように満足しきった表情で、ニコルは自らのおまんこにズボズボと連続で出入りしている俺のチンポの感触に夢中になりながらもその快感を堪能している。俺の腰の動きに合わせて上下に揺れているベッドの上に仰向けに寝た彼女の胸に大きく膨らんだ、ぷるりとして柔らかい感触のGカップの爆乳が素晴らしくエロかった

先ほどまでのニコルは俺とセックスをするために、望んで俺とセックスをしているフリをしているだけだと破綻した宣言をしていたわけだが、今はそんな矛盾も気にならないくらいに彼女は意識を自らの体内に出入りしている俺のチンポが生み出す心地よい快感と、自分の体の内側にある卑猥なお肉を肉棒によって直接こすられるという気持ちいい感触に集中させている

あれほど俺とのセックスを嫌がっていたニコルが、順調に俺とのセックスにハマり始めている。俺はさらにこれからもっと彼女の心を俺とのセックスによる快樂漬けにしてしまうために、そのままニコルのおまんこへのピストン運動を続けていくことにした

ズポ♡ズポ♡

「——おほお♡——っ♡——おっ♡——っ♡——おほお♡」

俺の手によって理性が飛んでしまうほどに体を興奮させられてしまい、さらには我慢の限界にまで肉体に欲求不満を溜めてしまった状態ですっとお預けをされていたセックスにようやくありつくことができたニコルが、そのあまりの精神的な満足にアへ声まですげ始めてしまう

極限にまで性欲を抑圧させた後にする久しぶりのセックスによる解放感と肉体の高揚によって、彼女の体はいつもの何倍以上に快感を感じてしまっているらしい。これはいい兆候である。このままニコルの心と体をどっぷりと、俺のチンポによってドロドロ

「久しぶりの中イキはどうだった？」

「……っ♡……っ♡……っ♡……っ♡……っ♡」

——ぶいっ♡

俺はようやく達することができたのである。久しぶりの絶頂の余韻に夢中になってよだれを垂らしながらベッドの上で俺に対してトコ顔を晒し続けているニコルにその感想を聞いてみる。すると、ずっと彼女のおまんこにウズウズと渦巻いていた欲求不満の霧が晴れたニコルがひどくスッキリとした表情で、恥ずかしそうに顔を反らしながら俺に対して悪態をついた

この快感を知ってしまったらもうニコルの人生は終わる。俺とのセックスで手に入るこの類の快楽をもう一度味わいたくなかった彼女は、俺からの誘いを我慢することができなくなるからだ

だからこれからのニコルは俺から受けるセックスの誘惑に対して心理的抵抗も虚しく毎回、簡単に股を開くようになるだろう。それに彼女はすでに心から望んで俺とセックスをするという体験の最初の一回目を済ませてしまったということも大きい。二回目三回目と俺との気持ちいいセックスを経験するたびに、彼女の心からは抵抗と嫌悪感が徐々に減っていくだけだからな

それにニコルの心は俺に対して少しずつデレてきている。もう彼女の心が俺とのセックス漬けになるまで、秒読みだ

「もつとするっ?」

「……うん♡……今日は♡……いっぱいしてほしい♡」

俺は快樂によってニコルの心を満足させることでさらに彼女の体を俺とのセックスに依存させてしまうために、俺のチンポが奥までヌプリとした感触で埋まりこんだままのニコルのすでにグチュグチュに濡れきってしまったおまんこに向かって、さらに俺のペニスをズポズポと気持ちよく出し挿れしていくのであった

墮落するソフィア♡

クチュ♡クチュ♡

「んふう♡——っ♡——っ♡」

俺はもう、すでに恒例となつてしまったソフィアとの性行為に今日も勤しんでいる。今の彼女は生徒会室で制服を着たままノーパンの格好になり、壁際に立つた姿で俺の右手に気持ちよく手マンをされていた。俺の右手首に当たる、ソフィアの体温と股間に生えた陰毛のやわらかい感触が心地いい。

すでにソフィアは俺に処女を奪われ、幾度も俺と肉体関係を結んでしまっている。

もちろん、最初はすごく嫌がついていたソフィアであるが、ラグーンと恋人のフリをし続けることのストレスや、自分の家族を守るために脅迫に耐えてきたことで積み重なっ

うだ。俺のチンポによつて処女も失つてしまつたし、もう、それを過去に戻つて取り戻せるわけでもない。ならば、俺とのセックスは気持ちいいしストレス発散にもなるからと、ソフィアはそう判断をしたようだ。

——にゆううううん♡

「——っ♡——んっ♡……っ♡……あっ♡……あっ♡」

ズポ♡ズポ♡

そして生徒会室の壁に立つたまま手をかけて、ふつくらとして大きいお尻を俺に向かつて差し出しているソフィアのおまんこに俺のペニスをねじ込むと、俺達は立ちバツクの体位でセックスを開始する。俺のチンポが膣の奥にまでヌツポリと埋まると、愛液によつてヌルヌルに濡れて生温かい彼女の膣肉が、ウネウネと心地よくうごめきながらネットと絡みついてきた。

「……悔しいけどっ♡……あんだとのセックスっ♡……気持ちいいわよ♡……っ♡……

俺がおまんこの中にあるソフィアの弱い部分をペニスの先でやさしく擦ってあげると、彼女は立ちバツクの姿勢で、壁に手をかけた体をのけぞらせるようにして心地良さそうな声を出し始める。それと同時に、彼女のおまんこの中が本気汁でグチュグチュに湿り始め、さらに、よほど気持ちいいのか、ソフィアの膣肉がヒクヒクと俺のチンポに与えられる快感に反射するようにしてうごめいていた。

俺はやさしいセックスを使って、少しずつソフィアの体を性的に開発している。彼女の体がイキ狂い、意識をドロドロに溶かしてしまうようないつもの俺のセックスをソフィアに経験してもらうのは、もう少し後だ。

今の俺の目的はソフィアの心を墮落させることである。そして少しずつであるが着実に、彼女は俺とセックスをすることに対して、心理的な抵抗をなくしてきていた。

「んっ♡んっ♡んっ♡イクう♡——っ♡——っ♡」

ビクン♡ビクン♡

そして今度は、ソフィアが制服を着たまま生徒会室の机の上に仰向けに寝た正常位の格好で、はしたなくも股を開いたまま激しく体を痙攣させてイッている。彼女はイキながら潮を吹き、おまんこに啜え込んだ俺のチンポをまだ離すまいと、ぎゅううつと懸命に締め付けていた。

俺はそんなソフィアの股間に向かって、彼女のリクエストに応えるようにして、立つたままピストン運動を繰り返していく。

ソフィアが普段生徒会を仕事をしている公的な場が、順調に俺との性行為の思い出によって記憶を塗りつぶされていく。こうすることで、彼女が普段、真面目な仕事をしている時や誰かのために働いている時も、ふと俺とのセックスのことが頭に思い浮かぶようになるのだ。

そして、ソフィアは俺とのセックスによって得られる快感を思い出し、それをまた味わいたくなって、ストレス発散のために俺のチンポを求めるようになる。

そうしてズブズブと、ソフィアは俺とのセックスにハマり込んでいくのだ。

「ハニー。どうしたんだい？生徒会室に鍵なんて掛けて？」

俺がそんなことを考えながら、本来なら公務をするために使う生徒会室の机の上で仰向けになって股を開いたソフィアとセックスを続けていると、間が悪いことに、ラグーンが生徒会室にやってくる。

「……………いまあ♡……………着替え中だからっ♡……………あつちいつてて♡……………っ♡……………っ♡」

俺とセックスを続けながらも、思わぬ乱入者に対してソフィアが冷静な対応をしている。でも、俺はラグーンへの対応を続ける彼女のことなど関係なく、ソフィアのおまんこへのピストン運動を続けていくことにした。

「……………んっ♡……………っ♡……………ちよつと♡……………弱いとこ突くの♡……………今はやめてよっ♡……………っ♡……………っ♡」

「どうしたんだいハニー？様子が変だよ？」

「……ちよつと♡……んっ♡……あつ♡……虫がいたから声を出しちやつただけ♡……あつ♡……あつ♡……何でもないわよっ♡……んっ♡……っ♡」

恋人の演技を続けるラグーンが、生徒会室に無理やり入ってこようとしますが、彼は入ることができないようだ。鍵のかかっていた開かないドアをガタガタと揺らしながら、施錠を開くように要求するラグーンの声を聞きながら、俺とソフィアは気持ちいいセックスを続けていった。

俺のチンポを突き込むソフィアの生温かい膺の中で、彼女の愛液と本気汁が、グチャグチャになってかき混ぜられていく。その感触をソフィアは、体をゾクゾクと震わせながら気持ちよさそうに楽しんでいた。

彼女は俺とのセックスが、すでに大好きになってしまっている。

「いいから、♡♡を開けろ！」

びゆるるるる♡びゆるるる♡

「……………っん♡……………んっ♡……………ユーリ♡……………せーひ♡……………また中に出したあ♡」

自分が脅しを使って手に入れた婚約者が、生徒会室の扉を挟んだ目の前で俺に中出しをされていることなど知る由もなく、周りに誰も居ないのをいいことに、ラグーンがソフィアに向かって罵倒をしてからその場を離れていく。

そんなラグーンを尻目に、ソフィアはラグーンがこの場に存在などしないような態度で、俺からの中出しの味を心地よさそうにとろりとした表情でゾクゾクとよだれを垂らしながら堪能していた。

「ソフィア先輩。ラグーンに隠れてエッチするの、どうでした？」

「……………興奮する♡……………えへへ♡……………続きをしましょう♡」

正常位の体位でおまんこにズツポリと俺のチンポを根本まで啜え込みながらソフィ

アが、知ってはいけない禁断のイタズラを覚えてしまった悪い顔で、快感に顔を火照らせながら楽しそうに俺と会話を続けている。

ラグーンのおかげで、また一つ、ソフィアの心が汚れることになった。彼に感謝をしなければならぬようだ。ありがとう。ラグーン。

「……ユーリのチンポ♡……すっごい気持ちいいよ♡……っ♡……っ♡」

こうして、ソフィアは俺との快楽にハマリ、どつぷりと墮ちていくことになる。

心が墮ちた彼女の体に俺の淫紋が刻まれるのは、すぐだった。

ニコルとソファイア完堕ち♡

「……………んん♡……………ああ♡……………っ♡……………あっ♡」

俺は自分の屋敷に呼び出したニコルと、いつものように自室のベッドで肌を重ねていた。すでに俺とニコルの肉体関係は恒例になり、始めは嫌々であった彼女の心もすでに俺とのセックスに慣れてしまっている。

今のニコルはベッドの上に四つん這いになって、バックの体位で俺のチンポを気持ちよさそうに体内の粘膜にヌポヌポと生で受け入れていた。表面上は嫌だと取り繕っていた態度も今はもう崩れ、俺とのセックスに虜になっているのが簡単にわかるくらいにまで、彼女の態度は変わってしまったている。

「……………ユーリのチンポ♡……………後ろからだ♡……………すっごい奥まで届く♡」

生徒会室にいるはずのソフィアの姿を、俺とセックスをしている部屋の中に見つけたニコルが慌てて俺とのセックスを中断しようとするが、俺はバックの体位でニコルの細い腰を両腕でガツシリと抱え込むとそのまま彼女の体を引き寄せ、ソフィアに見せつけるようにして、そのままニコルとのセックスを続けてしまう。

ニコルはなんとか俺から逃げようとするがもう遅い。俺はグチュグチュに濡れきってしまった彼女のおまんこを押し広げるようにして、心地いいピストン運動を続けていった。

「——ら、らめええええ♡——いまあ♡——おじようさまにみられてるからあああ♡——
——♡——♡——」

トン♡トン♡

「——はううううう♡——♡——あああああ♡——♡——♡——♡——」

俺に後ろから無理やり続けられるピストン運動から逃れようとニコルがもがくが、幾

ニコルの心も体も逃がすことなく、俺は今日、こうして蹂躪し尽くすことに決めているからだ。

……とぷ……とぷ♡

「……お嬢様あ♡……みないれえ♡……ああああ♡……っ♡……っ♡……っ♡」

ゾク♡ゾク♡ゾク♡

力なくポツリと眩きながら、耐えきれなくなったニコルが観念したように絶頂を迎え体をふるふると震わせる。尊敬するソフィアに絶対に見られたくなかった恥ずかしいイキ顔を見られてしまった状態で、体だけが極上に気持ちいいことに混乱するニコルの心がポロポロと壊れ始めていた。

俺はさらにニコルの心に追い打ちをかけるために、彼女の体内にドロドロとして気持ちいい俺の精液を大量に注ぎ込んでいく。ニコルの膣肉に俺のペニスの竿全体が温かくねっとり包まれる感触を感じながら、彼女の体内の奥深くにまで熱い精液を中出し

する感覚は最高だった。

精液をたっぷりと直接生で粘膜に注ぐためにニコルのおまんこの中に深く突きこんだ俺のペニスの先を感じる、彼女の子宮の入り口の形であらうリング状に丸いぷにぷにした肉の感触が素晴らしく心地いい。

普段は男装をして主人の護衛についている騎士の自分が女の顔でセックスをして、さらにはイキながら体内に精液を注がれるメスとしての姿をソフィアに目撃されたことで、ニコルの心の中にあつた騎士然とした自分という自己像が、ポロポロになって崩れ落ちたのが簡単に分かった。

「……………ニコル♡……………一緒に堕ちよう♡」

「……………そんなあ……………お嬢様あ」

さらに追い打ちをかけるようにして、ソフィアがニコルに歩み寄る。

バックの体位で俺に中出しをされながら気持ちよさそうに体をふるふると震わせるニコルに向かって、ベッドの横に立ってその姿を見ていたソフィアが学校の制服のスカートをまくりあげたのだ。すると彼女はスカートの中に下着を履いておらず、剃毛をされツルツルになってしまったソフィアの下半身がニコルの目の前に披露されることになった。

そのままニコルに痴態を見せつけるようにして、ソフィアは両手でつまんで持ち上げたスカートの中身を披露し続けている。学校でいつもニコルに見せていた清楚で強気なソフィアからは、想像が出来ない痴態であった。

さらにはソフィアのパイパンになった恥丘から視線を上に移すと、お腹に刻まれたピンク色に妖しく光る俺の淫紋が光り輝いている。俺に刻まれた隷属の証である淫紋を、ソフィアは楽しそうにニコルに見せつけていた。

自分の知らないところで自分の主人が俺に墮とされていたことを知ったニコルは、絶望したようにがっくりと肩を落としながら絶句をしてしまう。

しかし、自分の主人に忠義を尽くそうとするニコルの心に、邪な欲望が少しだけ生まれたことを俺は見逃さなかった。

自分の主人が墮ちた。そして、自分が忠義を尽くしている主人が、主人を墮とした男との肉体関係をさらに誘ってきている。今まではみんなに隠れながら行っていたこの気持ちいいセックスを、これからは大手を振って楽しめるかもしれない。

そんな、ニコルの心に少しだけ湧いてしまった欲望に侵入するようにして俺のスキルが発動すると、彼女の体にも俺の淫紋が刻まれてしまうことになる。

ずっと主人への忠義を守っていた誠実な女の子の心と肉体が、俺に墮ちたのはそれからすぐだった。

……

……

……

ぬぼ♡ぬぼ♡

「……ソフィアお嬢様あ♡……ユーリのチンポ♡……すつごい気持ちいいのお♡……おっ♡……おっ♡」

そこからは簡単だった。溜まっていた肉欲のダムが崩壊するようにして、ニコルは体も心もドロドロに生まれ変わりながら俺とのセックスに堕ちていった。

今のニコルは、俺との肉体関係を拒絶していた最初の頃などは嘘のような姿で、気持ちよさそうに正常位の体位で自ら望むようにして楽しそうに腰を振っている。

ベッドの上で心地よさそうに股を開くニコルのおへその下のあたりには、完全に完成した俺の淫紋がピンク色に誇らしく光り輝いていた。

綺麗な青色の髪を振り乱して気持ちよさそうに俺とセックスを続けるニコルの赤く

て美しく澄んだ瞳が、今はどろりと暗く快楽に濁っている。

「……………あつ♡……………あつ♡……………ニコルう♡……………早く交代してえ♡……………っ♡……………っ♡」

「……………だめれすう♡……………んっ♡……………あつ♡……………まだ♡……………私の順番なんれすからあ♡
……………いくらお嬢様でもお♡……………ユーリのチンポは譲れません♡……………っ♡……………っ♡」

俺と心地よさそうにセックスを続けるニコルの隣には、全裸になったソフィアが仰向けの体勢で俺の右手に手マンを受けながら、切なそうな声で早く交代してほしいとニコルにおねだりをしていた。

ソフィアの澄んでいた青色の美しい瞳の色も同じく、快楽によってどろりと暗く濁りきっている。ふたりとも、俺のチンポに心も体も気持ちよく溶かされたのだ。

ソフィアとニコルはベッドの上で手をつなぎながら、お互いに快楽に潤んだ瞳で仲睦まじく見つめ合っている。

俺はそんな二人の姿を確認しながら、ニコルの体内の奥深くに俺の熱い精液をトプトプと気持ちよく注ぎ込んでいった。ニコルは子宮からあふれ出る甘い快楽で感じる俺からの中出しに喜びながら、おまんこの奥深くで精液の味を堪能していくことになる。

「……………あはあ♡……………ユーリのせーし♡……………中に出てる♡……………つ♡……………つ♡……………すつごい♡……………気持ちいい♡」

淫紋を体に刻んだことよって、強烈な快楽を得られるようになった俺からの膣内射精を楽しみながら、ニコルがとろりと意識を混濁させていく。男装の女騎士だったニコルは、俺のチンポによつて妖艶なメスに生まれ変わった。

「……………はあああああああつ♡……………あつ♡……………あつ♡……………あつ♡……………あつ♡」

絶頂を繰り返しながら極上の快楽に意識を包まれながらニコルが、セックスの快感に疲れ果てたのか意識をフツと手放す。しかし彼女のおまんこは俺のチンポをまだ啜えていたのか、まだまだ楽しみ足りない俺にメッセージを伝えるようにして、きゆうきゆうと膣肉全体で俺のペニスに吸い付いてきていた。最高に心地いい感触である。

俺は中に出されたばかりの精液を美味しそうにヒクヒクとおまんこを痙攣させながら体内に飲み込んでいく膣肉の潤いと収縮運動の感覚をしばらくチンポで楽しんだ後に、ニコルの体内からズルリと粘液の感触を感じつつペニスを引き抜いていった。

「…………ユーリ♡…………今度は私の順番なんだからあ♡…………はむっ♡…………ちゅぷ♡…………ちゅぷ♡」

今度はニコルのおまんこから引き抜いたばかりの俺のペニスをソフィアが妖艶な顔で舐め取り、丹念なお掃除フェラをしてくれる。彼女は俺のチンポを早くおまんこに挿れてほしくて、待ちきれないようだ。

…………じゅるるる♡…………じゅるるる♡

「…………ユーリのチンポお♡…………すっごく♡…………美味しい♡」

…………ちゅぷ♡…………ちゅぷ♡

俺の股間に顔を埋めるソフィアが心の底からフェラチオという行為を楽しんでいるという態度で、うっとり俺のチンポを舐め啜え続けてくれる。真面目な生徒会の会長であった彼女からは想像もできない、信じられないような痴態であった。

ソフィアは俺に性技を仕込まれたことで、清楚だったあの頃からは想像も出来ないくらいに上達した口技と舌の動きで俺のチンポを舐め取ってくれる女の子に変わっていった。

学園のアイドルであり、真面目で清楚な生徒会会長であるソフィアの姿に憧れているエーデンリッツ学園全生徒の誰もきつと、彼女のこんな痴態を想像することは出来ないだろう。

——にゅううううん♡

「——♡——♡——♡——♡」

ベッドの上にイキ過ぎてぐったりと寝てしまったニコルの隣で、俺は再び勃起したチンポを今度はソフィアのおまんこに挿入していく。ベッドの上で楽しそうに股を開いたソフィアと正常位の体位で、俺とのセックスが今日も開始された。

ねっとりとしてヌルヌルに濡れたソフィアの膣肉を縦に裂く心地いい感覚を股間に感じながら、俺は彼女のおまんこにヌチュヌチュと音を立てながらチンポを気持ちよく出し入れしていく。

チンポを挿れたり出したりする度にソフィアの膣肉がネットネットといった感触で温かく俺のペニス全体に絡みついできて、最高に気持ちいい。ソフィアも俺のチンポによって刺激される膣肉のネチャネチャとして濡れた感触を下半身全体で楽しむようにして、正常位で股を開いたまま妖艶な吐息であえぎ声を出していた。

処女だった頃とは違い、俺と幾度もセックスを楽しんだことによつて丹念に開発されてしまった膣内の性感帯を刺激されるたびに、ソフィアが心地よさそうに体をくねくねと仰け反らせながら俺のペニスの感触を体内の粘膜で楽しむことになる。

ヒク♡ヒク♡ヒク♡

ソフィアが息も絶え絶えになりながら、快樂によつてぐったりと意識を混濁させた頃になると、体力の回復したニコルと今度は二回戦目を開始することになる。ニコルもソフィアに負けじと、俺に仕込まれたフェラチオを楽しそうに披露してくれることになった。

「——あゝっ♡——あゝっ♡——あゝあゝあゝあゝあゝっ♡——っ♡——っ♡——ん
ぐううううう♡」

ゾク♡ゾク♡ゾク♡

そしてニコルの意識が快樂によつて再び混濁すると、今度は意識を回復させたソフィアとセックスの続きを開始する。

こうして、ニコルとソフィアの心が完全に墮ちていったのだ。

「……お嬢様あ♡……私♡……堕ちてよかった♡……っ♡——あ♡っ♡——あ♡っ♡」

「……うふふ♡……ニコルのイキ顔♡……すごくエッチだよ♡」

「——あ♡っ♡——あ♡っ♡——らめえええ♡——ユーリに♡——また♡——お♡まん
（お♡——イ♡かされるううううう♡）」

「……ニコルのエッチな顔♡……もっと私に見せて♡」

「……い♡……イ♡グうううううう♡——っ♡——っ♡——っ♡——っ♡」

ビクン♡♡ビクン♡

「……あ♡ああああああっ♡……あ♡っ♡……あ♡っ♡……あ♡っ♡……あ♡っ♡」

「……お嬢様のイキ顔♡……すごくエッチです♡」

4人の美少女たちを順次俺の女にするつもりでいた。

「やあ、マリアーナ。実は大切な話があるんだ」

俺が最初に声をかけたのはマリアーナだ。こいつを奴隷化する作戦は失敗に終わったが、彼女の父親の冤罪が晴れたことでマリアーナは再び学園に通うことが可能になり、無事に卒業を迎えることができている。

冤罪事件があつてからはしばらく疎遠になっていたが、俺のことが好きだったマリアーナは俺と離れたことで、きつとさみしくて俺を求めるように心が変わっているだろう。

「すみません、ラグーン様。これから用事があるので失礼します……」

大切な話があると俺がいい雰囲気を作つて声をかけているのに、マリアーナは釣れることなくその場を離れてしまう。つまらない女だ。

まあいい。きっと何か大切な用事があるのだろう。卒業して少し経ってから、またマリアーナに声をかければいい。きっと俺と会えなくなっただことをさみしく思ったあいつは、ホイホイと俺に付いてくるだろうからな。

気持ちを切り替えた俺は、今度は時間をかけて信頼関係を作ったヴィヴィに声をかけることにする。

校内を歩き回り、校舎裏のベンチに座って体を休ませているヴィヴィの姿を発見すると、俺は彼女に歩いて近づきながら声をかけることにした。

「ヴィヴィ！実は君に、大切な話があるんだ！」

俺はいつもの誠実な紳士の演技をして、ヴィヴィに話しかける。しかし、ベンチに座っているヴィヴィの顔がなんだか火照っていて赤いな。まるで、こいつは何かさつきまで激しい運動をしていて、今は体を休ませているような感じだ。

「ごめん。ラグーン。さつきまで運動をしていて疲れてるから……もう帰るね」

そして俺の予想が当たるようにして、ヴィヴィが疲れているからと俺に声をかけるとそっけなくその場を去ってしまう。彼女が片思いをしている俺という男が大切な話があると伝えているのに、なんてことだ。そもそも、卒業式の日ヴィヴィは何の運動をしたというのだろうか。こいつは時より、よくわからないことをする。これは後で調教をしなくてはな。

「……………あつ♡……………さつき中に出されたの♡……………垂れてきちやつた♡」

去り際にヴィヴィが小さく何かをつぶやいたような気がするが、きつと気のせいだろう。彼女にも、数日後にまた声をかければいい。そこでたつぷりと、俺の女になるということがどういうことかを教えてあげよう。

毎日のように学園生活を一緒に過ごしてきた俺という存在と会えなくなつてさみしさを感じたタイミングで告白をすれば、簡単にヴィヴィは俺になびくだろうからな。それまで思う存分、あいつにはつらい思いをしてもらえばいい。

次に俺が声をかけることにしたのはニコルだ。彼女は生徒会室で何かの作業をしているソフィアを待つて、教室に待機している。

ソフィアを生徒会室に呼び出したのは俺だ。許嫁契約について話があるからな。そしてソフィアと話をする前に、俺はニコルの心も俺のものにするつもりだ。

自分が護衛を務める主人が婚約者と生徒会室で大切な話をしていると思ひ嫉妬しているところに、突然俺が現れて本当はお前が好きだと告白する。俺に片思いをしているニコルは、簡単に俺になびくだろう。

「ニコル。実は大切な話があつて」

「すまん、ラグーン。実はこれから大切な用事があつて、ようやく私の順番が回ってきたところなんだ。失礼する」

しかしニコルも、俺の話を最後まで聞くことなく順番待ちをしていた何かのために、その場を離れていくことになる。いつも俺が声をかけると犬みたいに喜んで俺に付い

てきていた女たちの様子が、今日は何だか変だ。

まあ。きっとニコルは有名なお菓子を売るお店に予約でも入れていたんだろう。その時間がきたから教室を出て行つたと。きっと卒業式だから、少しくらいハメを外したいと思つての行動だろう。

ニコルはソフィアの護衛だ。ソフィアと結婚をする予定の俺には、彼女にアプローチをするチャンスはいくらでもある。

ソフィアの婚約者なのに、護衛であるニコルを好きになつてしまったと悲劇の主人公を演じれば、きっと馬鹿なあいつは俺になびくはずだ。

そうだ、分かつた。きっとマリアーナ、ヴィヴィ、ニコルの三人は、後で俺に何かサプライズプレゼントをするために泣く泣く俺にそつけない態度を取っているに違いない。頭の切れる俺は理解してしまった。そうではくは、あいつらが俺からの誘いを断る理由を説明できないからな。

これはプレゼントを受け取りつつ、俺からの誘いを断るとどうなるかを後であいつらに教育しなくてはならないようだ。これからは俺の所有物になる女たちなんだから、俺の好みを完全に理解してもらうためには丁度いいだろう。

予定外のトラブルの連続でまだ一人もターゲットにしていた女を俺の所有物にできないという事件はあつたが、それらは無事に解決したようだ。さて、生徒会室で俺を待つソフィアのもとに向かうとしよう。まずは手始めに、あいつから籠絡するのもいい。

学園を卒業をしたのだから、もう周りの評価を気にして演技をする必要もない。これからは思う存分に美人でスタイルのいいソフィアの体を俺の好き勝手にできることを楽しみにして、俺は生徒会室へと向かう。

「ソフィア。入るぞで」

俺が生徒会室に入ると、生徒会室の窓が全開になつていくことに気づく。まるで、室内の空気を全部入れ替えているかのようであった。生徒会室の匂いを俺に嗅がれると、

何か困ることもあるのだろうか。

まあ、きつと真面目なソフィアは今までお世話になった生徒会室の掃除をしようと考えて、室内の清掃でもしていたんだろう。今日で卒業をするからもう自分が生徒会室使うこともないのに、その部屋を掃除するなんてやっぱりこいつは馬鹿だ。

だから、彼女は生徒会室の窓を全開にして換気をしていると。一人で掃除を頑張ったからなのか、ソフィアの着ている学校の制服が少し着崩れ、顔が赤く火照り、こいつは暑そうに手で顔を扇いでいる。

その光景を見て俺はあることに気づく。きつとヴィヴィも生徒会室の掃除を手伝ったから、外のベンチで疲れたように体を火照らせ休んでいたのだ。だから彼女は俺からの誘いを断ったと。これは、ソフィアに調教をしなければならぬ。これから俺の所有物になる女なのだから、余計なことをすると罰が与えられるということをここで知ってもらった方がいい。

「おい、お前！余計なことばかりするな！」

早速、俺はソフィアを思いっきり怒鳴りつけることにする。もう学園を卒業したんだ。我慢することはない。これからソフィアに、お互いの立場の違いをしつかり教えてやらなくてはならないのだから丁度いいだろう。

そうだ。せっかくだし、こいつをレイプするのも面白い。卒業までは手を出さないと
いう約束だったが、今日で卒業をしたのだから関係ない。これは、いい思いつきだ。

制服姿のソフィアの処女をいただくことで、俺という男の所有物だということをこいつに教え込んでやるのだ。これはしつけであり、暴力ではない。正当な行為だ。

そう考えた俺が無理やりソフィアの制服を脱がしてやろうと思いつくと、最低なことにソフィアはそれを拒絶することになる。俺という存在を拒絶するなんて、やはりこいつは頭のおかしい女だ。

「おい！馬鹿女！ふざけるなよ！」

これは、ソフィアに対してもっと強いしつけが必要なようだ。俺は馬鹿女に教育をするために、儀礼用に身に着けていた腰の剣を抜くと彼女に突きつけることにする。なに、少し痛めつけてやるだけさ。ソフィアの体は俺の所有物だから、俺には傷つける権利がある。

しかし、ソフィアに剣を突きつけたところで、俺の意識は途絶えることになった。そこからの記憶がないから、俺の身に何が起きたのかはわからない。

気がつくと俺は何故か一人、どこかのダンジョンに放置されていた。

ラグーンの冒険♡

※ラグーン視点

気がつくとは俺はダンジョンに1人だけ取り残されていた。今の俺の周りには肉のよ
うな材質で作られた不気味な廊下が続いていて、俺がどこかのダンジョンに置き去りに
されてしまったという現実と不安を突きつけてくる。

だが、少しここで嘆いていても仕方ない。なんとかここから脱出をして生き残らなけ
れば。俺は気持ちを切り替えると、脱出ルートを探すことにする。

幸いなことに、俺の手にはソフィアに突きつけていた剣がそのまま握られていた。こ
の武器があれば、ダンジョン内のモンスターと戦うことができるだろう。

大方ソフィアが俺を始末するために、気絶した俺をダンジョン内に運び込んだに違い

ない。気絶した人間を運び込むという労力を考えれば、俺が居る場所はダンジョンの浅い部分だということが予想される。

ダンジョンに置き去りにしたと思った俺が無事に戻ってきたら、ソフィアはさぞ驚くことだろう。これは、ソフィアに対するいい脅しの材料を手に入れることができた。このことを材料に、これからはソフィアを一生俺の奴隷としてこき使ってやる。

俺は自分が置かれた状況を冷静に分析しながら、ソフィアへの復讐を誓いつつダンジョンからの脱出を試みる。

「——おっ！宝箱だ！」

しばらくダンジョンを探索していると、面白いことに俺は宝箱を発見した。宝箱の中身によつては、ダンジョンから脱出した後のお金稼ぎに使えるかもしれない。そう考えた俺は、慎重に警戒をしながら宝箱の中身を確認してみることにする。

「中身は、映像記録球か」

宝箱の中に入っていたのは、何かの動画を記録した映像記録球だった。ダンジョンから発掘される映像記録球は、記録されている中身によつては大金になるといふ情報を思ひ出す。動画の内容によつては、好事家に高く売れるからだ。これは中身を確認するのが楽しみになってきた。

その後、俺はダンジョンを探索しながら安全そうな小部屋を見つけると、休憩がてら映像記録球の中身を確認してみることにする。

「……………あつ♡……………んっ♡……………はあつ♡」

ダンジョン内で俺が見つけた映像記録球を再生してみると、隠蔽魔法で顔は隠されているが、黒髪で小柄な女の子が男とセックスをしている映像が映し出されることになる。

どうやら、俺が見つけた映像記録球の中身は大当たりのようだ。男女の痴態を記録した映像記録球が、好事家に一番高く売れるのだ。

「…………やべえ…………クソエロい！」

しかも、内容のクオリティが抜群に高い。俺はダンジョン内だと言うことを忘れ、その映像記録球に釘付けになってしまう程だった。これは掘り出し物である。俺が個人的に所有してもいいくらいだ。映像記録球の中でセックスをしている女の子がヴィヴィに似ているという点も、最高に俺を興奮させてくれる。

「…………はぁ…………○○のチンポ…………すっ（いい…………気持ちいい♡）」

一部の情報が隠蔽魔法で隠されてはいるが、映像記録球の中に記録されている女の子は明らかにセックスが大好きな様子が態度から丸わりの様子で、喜ぶようにしてベツドの上でどこかの男とセックスをしている。

俺のモノよりかなりでかい男のイチモツが、隠蔽魔法で顔が隠されたヴィヴィに似た黒髪で小柄の女の子のおまんこの中にスポスポと出入りしている様子が映像記録球の中にどアツプで映し出されていく。

そしてその映像のあまりの卑猥さに、ヴィヴィに似た女の子のおまんこに男のイチモツがやわらかそうな膣肉を押し広げながらヌチャヌチャといった感触で出入りする淫乱な映像から俺は目が離せなくなってしまった。

俺のモノよりも大きなチンポがズブズブと彼女のおまんこをめくりあげるくらいに激しく出し入れされる度に、それを受け止めるヴィヴィに似た女の子のおまんこの穴からは彼女が本気で快感を味わっている証である大量の本気汁があふれ出てきている。

鮮明な画像でこのセックスの映像が記録されているおかげで、ヴィヴィに似た女の子のおまんこの周りをベチャベチャに濡らす愛液の生温かくてヌルヌルしていてトトロ口にヌメるような感触が動画からでも簡単に分かるくらいなのがまた良い。

俺は映像記録球の中で心の底から喜ぶようにしてセックスをしている顔のわからない黒髪の女の子に俺のことが好きなヴィヴィの姿を重ねながら、ダンジョン内にもかかわらず夢中になって動画を見続けてしまうことになる。

「……………あつ♡……………つ♡……………あはあつ♡……………あつ♡……………あつ♡」

次に映像記録球の場面が切り替わると記録されていたのは、マリアーナに似た茶髪の女の子が同じ男とセックスしている映像だった。

「……………主人さまのチンポ♡……………奥つ♡……………とどいてるう♡……………あつ♡……………あつ♡」

相変わらずに隠蔽魔法によってセックスをしている二人の顔はわからないが、マリアーナ似の女の子とセックスをしている男の雰囲気を見るに、ヴィヴィ似の女の子とセックスをしていた男と同一人物だということが予想される。どうやらこの映像記録球は過去にどこかで、ある男が記録したものようだ。

ダンジョン内には、過去に存在した遺物が宝物として出現することがまれにある。アーティファクトと呼ばれるもので、過去に紛失された物質を世界の記憶からダンジョンが再生していると学園では教わった。

俺が見つけた映像記録球も、大昔にこの映像を記録し紛失した遺物をダンジョンが世

界の記憶から復元したということだろう。だから、ダンジョン内の宝箱にこの映像記録球が入っていたと。

ダンジョン内から発掘される男女がセックスをしている姿を記録した魔道具は、オークションなどで高値で取引されている。しかし最初はこの映像記録球をオークションに出すことで一儲けしようと考えたが、あまりにもクオリティが高いのでこのまま所有するものいいかもしれないと俺の気が変わってきた。

まあ細かいことは置いておいて、映像記録球の続きを見ることにしよう。

映像記録球の中ではマリアーナに似た女の子が巨乳をぶるんぶるんと震わせながら、騎乗位で男の下半身の上にはまたがり気持ちよさそうに腰を前後に振り続けている。

「……………様子のチンポお♡……………あっ♡……………あっ♡……………大好きい♡」

俺は映像記録球の中の女の子に、今度はマリアーナの姿を重ねることになる。

お淑やかで破廉恥なことが大嫌いなマリアーナでは絶対にしないような妖艶な行為を、映像記録球の中で心の底から気持ちよさそうにセックスを続けているマリアーナに似た女の子がたくさんしているという光景を俺は楽しんだ。

「ラグーン様！はしたないですわよ！」

何度かマリアーナにセクハラをしようとしたら、そう言っただけで俺は彼女にかなり怒られたのを覚えている。

だから淑やかなマリアーナは、絶対にこんな風に俺の上にまたがって楽しそうに腰を振ってはくれないだろう。女の子にそんな恥ずかしいことをさせないでくださいと、彼女に怒られるだけだ。

俺もマリアーナにこんなことをしてもらいたい。そんなことを考えながら俺は映像記録球の中で男の腰にまたがり、騎乗位になって妖艶に腰をクネクネと動かしながら熱く濡れたおまんこでチンポを又チュリと啜え込み、硬い肉棒の味をやわらかい膣肉で又ルヌルと存分に楽しむ女の子の姿に釘付けになっていく。

相変わらず騎乗位で楽しそうに腰を振るマリアーナ似の女の子のおまんこがお尻側からドアップで映像記録球に映し出されると、どこかの男と楽しそうにセックスをしながらヌチャヌチャと卑猥に巨根を出入りさせている彼女のヌメる愛液でネバネバとしたおまんこの穴が丸くヌトリと開いた様子が鮮明に記録されていた。

マリアーナに似た映像記録球の女の子がこのセックスで本気に気持ちよくなつていくという証拠であるドロドロに白く泡立つ大量の本気汁が、ヌチュヌチュといった感触で気持ちよさそうにチンポが出入りしている彼女のおまんこの穴の縁から染み出るようにしてドロリとかき混ぜられながらあふれ出てきている。

さらには、巨根によつてグチャグチャに押しつぶされている彼女のおまんこがやわらかくてとても気持ちいいことが映像からでも簡単にわかるくらいに、ニチャニチャといった様子でマリアーナに似た女の子のうるおいきつた膣肉が卑猥に出入りし続けるチンポの形に大きく押し広げられてしまっていた。俺はその映像に、大興奮を覚えることになる。

俺もいつか自分の所有物にしたマリアーナにこんなことをしてもらいたいと想像をしながら、さらに俺は映像記録球の続きを確かめていく。

動画の場面が切り替わると、次に記録されていたのはニコルに似た青いショートヘアの女の子が同じく男とセックスをしている映像だった。

映像記録球の中ではニコルに似た女の子が正常位の体位になってベッドの上で心地よさそうに股を開き、爆乳をフルフルと揺らしながら男のピストン運動を卑猥におまんこで受け止めている。

普段は男装をしており騎士然としたニコルは、きつとこんな恥ずかしい格好はしてくれないだろう。映像記録球の中ではしたなく股を開き、おまんこに俺より大きなチンポをスポスポと心地よさそうに出入りさせながら甘い嬌声を上げているニコルに似た女の子の姿を見ながら、俺はあのニコルは絶対にこんなことしないだろうと妄想を重ねていく。

映像記録球の中では依然として、男のイチモツが前後に動く度に彼女のおまんこの穴

がペニスによつてグニヤリとやわらかく押し広げられている。さらには、グチュグチュに湿りほぐれてやわらかく濡れた淫猥な膣肉を又チャ又チャといった感触でこすられる度に生まれる快感を楽しんでいるニコル似の女の子の、やわらかそうな爆乳がベッドの上で男にピストン運動をされる度にふにゆふにゆした液体みたいになつてプルプルと前後に揺れる光景が抜群にエロい。

俺に片思いをしている、ニコルのおっぱいの感触もこんな感じなんだろうか。俺はもうすぐ自分の手に入りそうなニコルの爆乳をこの手で揉み込むときの感触と体温を妄想しながら、映像記録球の中で男に爆乳を鷲掴みにされて両胸を楽しそうにグニユグニユと揉まれている女の子の大きなおっぱいとニコルの姿を重ねていく。

女の子の爆乳を揉み込む男の両手がふにゆりと乳房の中に消えるようにして埋まるくらいに、ニコルに似た女の子のおっぱいは映像の中でやわらかく変形していた。俺もあのおっぱいを触りたい。映像記録球の中で男の手のひらの形にふにやりと歪んでふるふるに揺れるニコル似の女の子の爆乳を見ながら、俺はそう思った。

……じゅるるるる♡……じゅるるるる♡

さらに次の場面に映像記録球が切り替わると、今度はソフィアに似た金髪の女の子が同じ男の巨根を美味しそうにフェラしている映像が流れ出す。

「……○○のチンポ♡……すっごく♡……美味しい♡」

……れる♡……れる♡……ちゅぶ♡……ちゅぶ♡

真面目な生徒会長であり、俺からの肉体関係の誘いを何度も断ったソフィアでは絶対にできないだろう素晴らしいテクニクとエロさで、映像記録球の中の女の子は巨根を舐め啜っていた。

俺はソフィアに似た金髪の女の子が男のイチモツを舐め啜える生温かそうな舌と口を使つてグポグポと亀頭を気持ちよさそうに責める卑猥な映像を見ながら、ソフィアのやわらかそうな唇を映像に重ねつつあいつにフェラされたらどんな感触なんだろうかということをつい想像してしまう。

きつとまだ処女で性経験のないソフィアは、映像記録球の中の女の子みたいには誰かにフェラをすることはできないだろう。でも俺がダンジョンから脱出したら、今度こそ俺をダンジョンに置き去りにしたことを脅しの材料にしてあいつには肉体関係を結んでもらうことになる。

つまりこれから俺は、ソフィアの口に初めてイチモツを啜えさせた男になるというわけだ。そして初めて、ソフィアにフェラのやり方を教える男にもなると。

ソフィアの処女を俺が奪い、あいつの体に初めてセックスの味を教える男に俺がなるのが今から楽しみで仕方がない。

そんなことを思いながら俺は映像記録球の中で男のイチモツを卑猥に舐め続ける女の子の姿に、何度も俺との肉体関係を断ってきたソフィアの姿を重ねていく。気の強いソフィアは、絶対に映像記録球の中の女の子みたいに喜んでフェラなんてしない。俺はそう確信しながら、ソフィアが自ら望んで誰かのチンポを舐め啜えるという絶対に起こり得ないことを妄想した。

そして映像記録球の中のソフィアに似た女の子は舐め啜っていた男の巨根がいきり立ったのを確認すると、ちゅぷりとした生々しい音を立てつつチンポから名残惜しそうに口を離していく。その際に映し出された彼女の唇から糸を引く温かそうな唾液と、フェラを終えたばかりでテカテカに濡れてムワリと熱く湿った口内の様子が最高にエロかった。

次にソフィアに似た女の子は立ちバックの体勢で壁に手をかけ濡れたおまんこを差し出すと、動画の中で男の巨根を挿れてとおねだりすることになる。それはもう、素晴らしい光景だった。

あの反抗的なソフィアに、俺もこんなことをしてもらいたい。俺は映像記録球を見ながら、羨ましく思った。意思が強く清楚なソフィアが男にチンポをおねだりするなど絶対に起こり得ないことだと分かっているながら、俺はその光景を妄想することになる。

そしてズボズボと立ちバックの体勢でセックスをするソフィアに似た女の子のおまんこを真下から見上げるといふ最高にエロいアングルで、映像記録球の動画が続いていく。

「……………あつ♡……………あつ♡……………あ、あああああつ♡……………あ、っ♡……………あ、っ♡」

立ちバツクの体位で女の子のおまんこに巨根が突きこまれる度に、ソフィアに似た女の子が獣のような声をあげていた。あの気が強いソフィアでは絶対に出さないであろう、甘くてかわいい女の子が本気でよがる声だ。

彼女が大きな吐息であえいでいるその声は、映像記録球を見ているだけの俺にもソフィアに似た女の子が今現在とろけるように気持ちいい極上の快楽を全身で味わい尽くしていることを簡単に教えてくれている。本物のセックスが、そこにあつた。

あの真面目なソフィアでは絶対に出さないような、本当に心の底からおまんこにチンポを挿れるのが大好きな女の子の声を映像記録球の中でセックスを楽しむソフィアに似た女の子は出し続けている。

「……………あつ♡……………あ、あつ♡……………奥に♡……………チンポ♡……………すっごい♡……………届いてる♡」

…：又チユ♡…：又チユ♡

俺はソフィアに似た女の子の股間に粘液質な愛液の糸を引かせながら奥深くにまでズブズブと男の巨根が出入りしていく様子と、ムワリと生温かそうですごくヌルヌルに湿った感触の卑猥なおまんこを立ちバツクの体勢で男にズポズポと突かれる度に彼女の大きなおっぱいがブルンブルンとやわらかく前後に揺れる最高の光景を映像記録球で真下から見上げ続けることになった。

そしてソフィアに似た女の子が本気で今感じていることが丸わかりといった様子で、立ちバツクでセックスをしている彼女のおまんこからはねっとりとして生温かそうな愛液が白く泡立ちドロドロになってグチュグチュとあふれ垂れ落ち続けているのだ。さらにはソフィアに似た女の子のおまんこから長く垂れたトロトロの濃い愛液が、バツクから男の巨根を突きこまれる度にぶるぶると前後にリズムよく揺れていく。

まさに、最高の映像記録球であった。

俺が見つけた映像記録球を保存した男を、俺は本気で羨ましいと思った。ダンジョン

から帰ったら俺もソフィア、ヴィヴィ、ニコル、マリアーナの4人と好きだけセックスができるんだ。俺はそんな事を考えながら、ダンジョン内の小部屋で映像記録球を見続ける。

実は俺はダンジョン内でこの映像記録球の他に、別の魔道具も手に入れていた。それは、映像記録球に施された隠蔽魔法を解除する素晴らしい魔道具だ。隠蔽魔法除去機という名称である。

隠蔽魔法除去機はその名の通り、隠蔽魔法が施された映像記録から隠蔽魔法を除去することができる魔道具だ。

この魔道具を使うことで隠蔽魔法によって隠された女の子の顔などを映像記録球の中でもはつきりと拝むことができるようになるので、隠蔽魔法除去機は好事家に高値で取引されている。

本当は換金用にとっておいたのだが、映像記録球に記録されていた動画のあまりの卑猥さに我慢できなくなった俺は、ここで隠蔽魔法除去機を使うことにした。

ここはダンジョン内であるが、まあいいだろう。俺が休憩している小部屋は安全なよ
うだ。この部屋に入っただけでしばらく経ったのだが、特に危険な様子はない。いわゆるセー
フティールームというやつなのだろう。

ダンジョン内にはモンスターが入ってこない、トラップもないセーフティールームが
存在するというのが世の中の常識だ。何のためにダンジョン内にセーフティールーム
があるのはわからないが、冒険者はセーフティールームで休憩をしながらダンジョン
を探索するというのが一般的になっている。

俺がいる小部屋がセーフティールームだということを確認した俺は、隠蔽魔法を解除
したあとに女の子の顔を拝みながら自慰をするつもりでいた。やはり映像記録球は、何
も隠蔽されていない無修正の状態で楽しむのが一番だからな。

「……………んっ♡……………ふくうっ……………♡……………あっ♡」

映像記録球の場面が切り替わり、今度はベッドの上でバックの体勢になって後ろから

ズチユ♡ズチユ♡

いつも無表情でめったに表情を変えないあのヴィヴィが気持ちよさそうに顔を弛緩させト口顔になり、よだれを垂らしながら俺以外の男とのセックスを心の底から楽しむようにして甘い喘ぎ声は出している。なんだこれは。

「——んくうううううっ♡——っ♡——っ♡」

そしてヴィヴィは、俺以外の男のチンポで気持ちよさそうにイッた。彼女はバックの体位で俺ではない男とセックスをしながら、猫が伸びをするようにして気持ちよさそうにゾクゾクと体をのけぞらせてる。彼女はこの男とセックスをすることに慣れてきているのだ。それが簡単にわかる光景だった。

俺はヴィヴィが見せる痴態に啞然としてしまう。俺の知らないところで、ヴィヴィは誰かと楽しそうにセックスをしていた。それが全てだ。

実は俺が見つけた映像記録球は古代の遺物ではなく、最近記録されたものだった。つまりダンジョンに置き去りにされた俺は宝箱を見つけるように仕組まれ、罠に嵌められていた。そのことに、俺は誰かとセックスをしているヴィヴィの映像によって気付かされる。最悪だった。

俺はさつきまで、ずっと狙っていた女の子が他の男と楽しそうにセックスをしている映像で興奮していたのだ。

「……………あつ♡……………つ♡……………あああああああつ♡」

……………と。ぶ♡……………と。ぶ♡

さらに最悪なことに映像記録球の中では、ヴィヴィが俺以外の男によってあつけなく中出しをされてしまった。お腹の中に俺ではない男の精液を直接生で注ぎ込まれながら、映像の中でヴィヴィはトロリと気持ちよさそうに顔を弛緩させてしまっている。最低な光景だった。

「……んふううう♡……おまんこの奥♡……あつたかい♡……せーし♡……いっぱい出てる♡」

俺以外の男の精液をおまんこに生で注がれているはずなのに、当のヴィヴィは心の底からそれを楽しむようにしてうつとりと快楽を享受している。彼女は俺のことが好きだったのではないのか。そういう素振りを、俺は今までの学園生活で幾度も確認していた。なのに何で、俺の知らないところでヴィヴィは俺以外の男と気持ちよさそうにセックスをしているんだ。訳がわからない。

「そんな……」

さらに俺ではない男から調教を受けたのかヴィヴィの陰部は剃毛されており、映像記録球の中で彼女の恥部がツルツルのパイパンになってしまっているのがはつきりと確認できる。あのマイペースで他人に影響をされない女の子だったヴィヴィが、俺以外の男に心を染められていた。

「……お♡っ♡……お♡っ♡……お♡っ♡……これ♡……すっごい♡……んふうううう♡」

♡
「

俺に淡い片思いをしていたはずのヴィヴィが裏では俺以外の男とセックスを楽しみ、いつの間にか心を変えられてしまっている。最低だった。俺が4年間かけても変えられなかった彼女のクールな心が、俺以外の男によって簡単に変わったのだ。

……ずるるる♡……にゅぽん♡

「……………♡……………♡……………あっ♡」

ついに俺ではない男のチンポに中出しをされ終わると、ヴィヴィのおまんこからペニスガズルリと粘液質な感触を感じさせながら引き抜かれていく。そのときのヴィヴィは、とてもさみしそうな表情をしていた。俺はヴィヴィに、あんな風に求められたことはない。なんて最低な映像だ。

俺ではない男のペニスが引き抜かれたばかりでぼっこりと丸い穴の開いているヴィヴィの卑猥な様子のおまんこからは、彼女の愛液と誰かの精液がドロドロに混ざり合っ

た液体がネットネットになって垂れ落ちてきている。

しかも綺麗に剃毛をされているおかげで、ヴィヴィのおまんこの周りの陰唇のピラピラや質感、やわらかさや感触までもが簡単に映像から想像できてしまうのだ。俺が触ったこともない、見たこともないヴィヴィのおまんこを、映像記録球の中で俺は俺ではない男に教えられることになった。

「……………ユーリのセーし♡……………すっごい♡……………気持ちよかった♡」

そしてヴィヴィは、自分のおまんこに感じるその卑猥な感触を満足そうな顔で楽しんでいる。俺じゃない男に中出しをされたのに、俺に片思いをしていたはずのヴィヴィが喜んでいた。なんて最低な光景だ。

「そ、そんな……………」

俺の知らないところで行われていた痴態に、俺は絶句することしかできなかつた。さらにヴィヴィ以外にもマリアーナ、ニコル、ソフィアまでもが俺以外の男に中出しをさ

れ、その行為を気持ちよさそうに楽しんでいる動画が映像記録球の中に保存されている。俺は、あいつらに裏切られていた。

そして、俺の方が先に仲良くなつたはずの女の子たちと俺の知らないところで思う存分にセックスをしたのは、マリアーナを奴隷化する計画を邪魔したあの男だった。

「……ラグーン……ユーリのチンポお♡……すっごい気持ちいいよお♡……私♡……ユーリに変えられちゃった♡」

……ぬぶ♡……ぬぶ♡

映像記録球の中ではヴィヴィがベッドの上で全裸になり、正常位の体位で股を開いてユーリとセックスをしながら、うながされるようにして俺へのメッセージを伝えてきている。完全に俺は、蚊帳の外だった。

「……ユーリのせーし♡……また♡……中に出てきた♡……ラグーン……これ……すっごい♡……気持ちいいんだよお♡……あつ♡」

ゾク♡ゾク♡ゾク♡

映像記録球の中では心の底から望んで快楽を得ているような顔で中出しをされながら、全裸のヴィヴィが俺ではない男のチンポをおまんこに咥えこんだ状態で俺へのメッセージをつぶやいている。そしてそのまま、ヴィヴィは俺ではない男の精液を生で体内に注ぎ込まれながら心地よさそうに意識を濁してイッていた。

……じゅるるる♡……じゅるるる♡

「……はむ♡……あむ♡……っ♡……れろっ♡」

さらには俺ではない男のチンポを、映像記録球の中のヴィヴィが美味しそうな顔でジユプジユプと口に咥え舐めている。あのクールで無表情なヴィヴィが、自ら望んであんなことをするなんて信じられない。彼女はちよつと肌を露出するだけでも、すつごく恥ずかしかがっていた女の子のはずだ。それがいつの間にか、俺ではない男に変えられたのだ。

そして、お掃除フェラを続けるヴィヴィの姿を後ろから記録する映像に画面が切り替わると、彼女が剃毛をされパイパンになったおまんこから精液を淫猥にドロリと垂らしながら、ユーリの股間に顔をうずめながら顔を上下させている光景が映し出された。

俺は小柄でかわいい顔をしたヴィヴィの全裸を、俺は初めて見ることになる。俺以外の男と、彼女が楽しそうにセックスをしている映像でだ。

無毛のパイパンにされたことで、ヴィヴィのおまんこの穴がポツコリと俺ではない男のチンポの形に丸く広がり卑猥なまま戻っていないという光景を俺は映像の中ではつきりと見せつけられてしまう。ふにゆりとしていてやわらかそうな彼女の陰唇のピラピラにねつとりと、俺ではない男のチンポの形に穴の空いたヴィヴィの膣穴から大量に垂れ落ちたベトベトと泡立つ本気汁がヌルヌルになって絡みついていた。

「……………あつ♡……………あつ♡……………ラグーン……………私たちはもう♡……………ユーリの女になったから♡」

マリアーナ、ヴィヴィ、ニコル、ソフィアの4人がユーリのイチモツをうっとりとした顔で取り合うようにフェラしながら、手マンをされつつ片手間に俺への最後のあいさつを終えていく。俺のことが大好きで俺を取り合っていた女たちが、俺の知らないところで、俺ではない男とみんな楽しくセックスをしていた。

俺が4年をかけてじつくりと築き上げてきたハーレムが、他の男によってあつという間に寝取られた。俺のことが好きだった女たちは4人ともお腹にお揃いの淫紋を刻んで、俺以外の男とセックスを楽しんでいる。最低だった。

「——ちくしょう！全員ぶっ殺してやる！」

その光景を見た俺は悔しさのあまり映像記録球を止めようとするが、それは叶うことはなかった。

実は俺が安全な部屋だと思っていた小部屋はトラップルームだったようで、映像記録球の隠蔽が解けると同時に突然室内に出現した触手によって俺は四肢を拘束されてしまふことになったからだ。俺は完全に、誰かの手のひらの上で踊っていただけらしい。

「——くそおおお！——離せ！」

なんとか触手を振りほどこうと暴れてみるが、びくともしない。そして身動きの取れなくなつた俺は、映像記録球から流れてくるソフィア、ニコル、ヴィヴィ、マリアーナが寝取られていく光景をただ見続けることしかできなかった。

「……あはあ♡……ユーリのチンポ♡……最高♡」

映像記録球の中では、幾度も俺と肉体関係を結ぶことを拒絶してきたソフィアがベッドの上で自ら望んで股を開き、正常位の体勢でセックスを楽しんでいる。

ゾク♡ゾク♡ゾク♡

「……はああああああん♡……ラグーンには一回もエッチさせてあげなかつたよね……絶対にラグーンとはエッチしたくないけど、私とユーリがエッチしてる動画でラグーンがシコシコするくらいならいいよ♡……あのね……ラグーン……ユーリのチンポ♡」

……すつごく気持ちいいのお♡」

……とぷ♡……とぷ♡

「……あつ♡……ユーリのせーし♡……中に♡……出てきたあ♡……最高に♡……幸せえ♡……あつ♡……あつ♡」

そして俺の目の前で容赦なく、ソフィアのおまんこにユーリの精液が注ぎ込まれていく。

俺ではない男の子種を体内に注ぎ込まれているのに、ソフィアは映像記録球の中で幸せそうにうつとりと微笑んでいた。俺はその光景を、ただ見ることしかできなかった。

「……あつ♡……あつ♡……あつ♡……あつ♡……あああああああつ♡」

次の映像では、いつも冷静で感情に起伏がないと思っていたヴィヴィが激しく体を振り乱しながら、俺ではない男とセックスをしてよがり狂っている。

小柄なヴィヴィの小さなおまんこの穴をぼっこりと俺ではない男のイチモツが押し広げ、俺ではない男に向かって嬉しそうに股を開いたヴィヴィが、ベッドの上で仰向けになって俺ではない男と楽しそうにセックスを続けていった。

……とぷ♡……とぷ♡

「……はああああああつ♡……つ♡……つ♡……つ♡」

そしてユーリの精液をおまんこに注ぎ込まれながら、うっとりとした顔でヴィヴィはゾクゾクと体を気持ちよさそうに震わせることになる。俺への片思いに悩んでいたあの頃のヴィヴィは、もうどこにもいなかった。

「……ラグーン……私のおまんこは♡……ユーリ専用のおまんこに変えられちゃいました♡……ごめんね♡……あつ♡……あつ♡……あつ♡……あつ♡」

ヒク♡ヒク♡ヒク♡

俺への別れの言葉を告げながら、ユーリに中出しされたヴィヴィが気持ちよさそうに絶頂を迎えている。今、彼女の中で俺への気持ち完全に消えたのが、おまんこをヒクヒクと気持ちよさそうに痙攣させながらユーリの精液を直接生で膣内に出されるネットトした快楽を楽しむヴィヴィの卑猥な姿からわかつてしまった。

そしてヴィヴィが俺を好きだと言っていた頃にさえ俺が一度も見たことがないデレた表情を映像記録球の中でユーリに見せながら、彼女は心の底から気持ちよさそうな態度でセックスを続けていった。

「……かわいそうだから、ラグーンにオカズを用意してあげるって?……もう……しよ
うがないわね……」

そう言いながら次に映像記録球に登場したのは、全裸になったニコルとマリアーナだ。映像記録球の中ではムッチリとしていて張りのある大きなおっぱいを持つマリアーナと、とろけるような美爆乳を持つニコルがお互いに向かい合うようにして俺ではない男のイチモツを乳房を使って挟み込んでいく。

そして二人で息を合わせるようにして、両手で鷲掴みにした自分のおっぱいをリズムよく上下に揺らしながらユーリのペニスをムニユムニユと卑猥に刺激していった。

……ふに♡……ふに♡……ふに♡

「ご主人さまに私達がご奉仕する光景を見て、ラグーンは一人でシコシコしてね♡」

……むにゆ♡……むにゆ♡……むにゆ♡

「本当はラグーンに私の乳房を見せたくないんだけど……仕方がないからユーリにパイズリしている映像を見て、一人さみしくシコシコしてもいいぞ♡」

……ふに♡ふに♡ふに♡……むにゆ♡むにゆ♡むにゆ♡

マリアーナは俺を挑発しながら、ニコルはブツブツと文句を言いながら、ユーリへのパイズリを楽しそうに続けていく。

映像記録球の中では、フニフニとしていてやわらかそうなマリアーナとニコルのおっぱいがユーリのイチモツ全体を淫猥にもっちりと包み込み、ゆさゆさと上下に心地よく揺らされていった。二人に奉仕をされながら股間に感じるあの大きなおっぱいの体温とやわらかさは、さぞかし極上なのだろう。そのことが、簡単に想像させられる光景だった。

映像の中でパイズリをする彼女たちの慣れた様子から、この前まで俺のことが好きだということに悩んでいた二人は、俺の知らないうちに俺を裏切りユーリによってたくさんの性技を仕込まれていたことが簡単に理解できてしまう。

映像記録球に保存されていたふると卑猥に揺れ続ける二人のおっぱいは、歯噛みするくらいにエロかった。本当は俺が、この二人を手に入れていたはずなのに。そのことがひどく口惜しい。

……ぬぶ♡……ぬぶ♡

「……………あはあ♡……………御主人様のチンポお♡……………私のおまんこに♡……………もつとズポズポしててください♡」

……………くちゅ♡……………くちゅ♡

「……………あつ♡……………あつ♡……………あつ♡……………ユーリのせーし♡……………私の中に♡……………いっぱい出して♡」

そして順次ご褒美として、マリアーナとニコルが映像記録球の中で楽しそうにユーリとセックスを開始する。あれだけ俺が望んでも彼女たち4人は清い関係をとって俺には一度もセックスをさせてくれなかったのに、ユーリに対しては全員が簡単に股を開いてしまっている。そのことに、俺は唾然とさせられることになった。

又チャ又チャと愛液の糸を引きながらユーリのチンポが出入りする4人のおまんこを、俺は映像で見るとしかできない。彼女たちのおまんこに入っているのは、俺のチンポではなかった。

そして映像記録球の中で行われている彼女たちのセックスは、俺の意志を無視して幸せそうに続いていく。

……とぷ♡……とぷ♡

「……ラグーン……わたし♡……いまあ♡……ご主人さまのせい♡……中に出されてるの♡……あっ♡……すっごく気持ちいい♡……ラグーンは中出しされてる私を見て……いっぱいシコシコしてね♡」

うつとりとした顔でユーリからの中出しを楽しみながら、マリアーナが俺に別れの言葉を告げる。過去に俺への片思いを諦めないと真剣な顔で告白してくれた彼女の心はもう、完全に俺以外の男へと向けられてしまっていた。

マリアーナのおまんこが、気持ちよさそうにヒクヒクと痙攣しながら俺以外の男のペニス心地よさそうに啜えこんでいる。

そしてマリアーナのおまんこからユーリのペニスが引き抜かれると、ドロリとした大

量の精液がマリアーナの膣から分泌された本気汁と混じり合ってヌルリと垂れ落ちてくるのだ。

先程まで入り込んでいた男のチンポの形にポツカリと穴が空いた生温かそうに濡れたマリアーナの膣穴から見える彼女のヒダヒダした膣肉の感触を、ユーリは生のペニスで思う存分に味わっていたのだと俺は思い知らされる。

……とぶ♡……とぶ♡

「……ラグーン……私♡……ユーリのチンポで♡……メスに変えられちゃったあ♡……ラグーンは女に生まれ変わった私とユーリがエッチしてるところを見て……しつかりとシコシコするんだぞ♡」

男装をしていつもキリツとした表情を崩さなかったニコルが、完全にメスの顔になって体内に生で受け入れたユーリのチンポの感触と中出しによって生まれるお腹の中に引つかかるようなネトネトした快樂をおまんこで楽しんでいる。意志の強いニコルでもあんな風にとロリと気持ちよさそうな顔をするんだと、俺は映像記録球の中で思い知

らされた。俺は、ニコルのあんな顔を知らない。

ニコルのグチュグチュに濡れた陰唇と膣穴から垂れ落ちる精液。そして先程まで本気でセックスを楽しんでいたことを如実に伝えるようにして、映像記録球に映る彼女のおまんこには湯気が立つような体温が感じられていた。

……じゅるるるる♡……じゅるるるる♡

あの騎士のように凛々しい態度を崩さないニコルが、映像記録球の中で今は女の顔になってユーリのペニスに望んでお掃除フェラをしている。ねつとりとヌメる唾液をクチュクチュと絡めながら生温かそうな吐息をムワリと口から卑猥に漏らしつつ、彼女はジユプジユプとユーリのチンポを美味しそうに舐め啜えていった。

俺が知る気高く自分を曲げないニコルがしているとは信じられないよう、卑猥な舌使いと唇の動きによるフェラチオだった。信じられないことにすでに彼女はユーリによつて淫技をたくさん仕込まれており、幾度もこういつた経験を積んでいることを映像から思い知らされてしまう。俺の知らないところで、ニコルはユーリと何度もセックス

をしていたんだ。

そしてしばらくニコルがユーリの股間に顔をうずめながら首を上下させている映像が続いた後に、突然ニコルの動きが止まることになった。

……とぶ♡……とぶ♡

「……………あらあ♡……ユーリ♡……くひに♡……らしたなあ♡……っ♡」

口内に無断で精液を放出されたニコルが、楽しそうに笑いながらユーリに文句を言っている。口の中に出された精液を吐き出しもしない。彼女は動きを止め、全て口内に受け止めていた。完全にニコルは、ユーリにそういった調教を受けている。つい最近まで俺に片思いをしていはずのニコルの心が俺から離れ、完全にユーリを受け入れてしまっていた。

俺の知るニコルはもういない。彼女は完全に、ユーリによって心を染められ、変えられていた。

「…………ラグーン…………ユーリのせーひ♡…………くひにらされらったよお♡」

そしてニコルはユーリに指示されると俺に見せつけるようにして、口の中に出された俺ではない男の精液をレロレロと舐め回しながら見せつけてくる。

映像記録球に向かって大口を開けているニコルの口に俺のチンポをヌチュヌチュと舐め啜えてもらえたら、どんなに気持ちいいだろう。そう勝手に想像をしてしまうくらいに、淫猥に艶めくニコルの口の中は気持ちよさそうだった。

……………♡
♡……………♡

「……………はい♡……………全部♡……………飲んら♡」

そして嫌がることもなく、美味しそうな表情でニコルがユーリの精液をうつとりと飲み干していく。こうして、俺が寝取られた女の子がユーリに心を染められていく映像がさらに続いていった。

その映像の卑猥さに無理やり興奮させられた俺は、四肢を触手に拘束されていて動けない状態なのにペニスから精液が漏れ出てしまうことになる。俺は股間に一切手を触れていないのに、寝取られた女の子たちのセックスを見せられ射精させられたのだ。

そして俺が射精をしたことがトリガーになったのか、触手がうごめく室内にガスのようなものが充満し始めると、俺は再び意識を失った。

ラグーンちゃん苗床化♡

※ラグーン視点

「——何だよこれ！」

再び意識が戻ると俺は、四肢を触手に拘束された状態でベッドのような四角い台の上に捕まってしまった。まるで、何かの実験台にされているようだ。俺がこんな風に扱われるなんて、絶対に許せない。俺はダンジョンを脱出したら、ソフィアに復讐することを誓う。

「——くそ！——離せ！」

なんとか脱出手段を探そうと俺は台の上に仰向けにされた状態で暴れてみるが、俺の四肢を押さえつける触手はびくともしない。俺はまったく、身動きが取れなくなっ

まった。

「というか、なんか俺の声が高いような……」

大声を出しながら体を動かしたことで、俺は自分の体に違和感を覚えることになる。何やら、俺の声がいつもより細く高いのだ。そして体を暴れさせたときに、何故か俺は自分の両胸に揺れる膨らみと重りのようなものを感じていた。

「えっ!?俺、女になってる!」

台の上で仰向けに寝かされ四肢を触手に拘束された状態で唯一自由に動かせる首を持ち上げるようにして自分の体を覗き込むと、俺は全裸にされていた自分の上半身に膨らんだおっぱいを見つけることになった。

「——なんだこれ!?!——どうなってる?」

下半身の状態がわからないが、いつも感じていて慣れた重みが俺の股間からは消え

去っていた。まるで、俺のアソコに何もくっついていないかのように軽いのだ。

下半身の感覚から想像するに、俺の股間からはペニスが消え去っている。信じたくはないが、俺はいつの間にかダンジョン内で女にされてしまっていた。

「誰か助けてくれええええ！ニコル！ヴィヴィ！」

こういう危険が俺に迫ったときは、いつもソフィアの護衛のニコルや強力な魔法を扱えるヴィヴィが俺を助けてくれていた。俺はいつものように彼女たちに助けを求めますが、最低なことに二人は駆けつけてくれない。

……ずるるるる

「——うわああああああ！」

俺が目を覚ましたことに気づいたのか、台の上で四肢を拘束された俺の下半身に向かって、何やらヌメヌメとした液体をまといテカテカと光る卑猥な触手がゆっくりと近

づいてくる。触手は、俺の下半身をじっくりと吟味していた。

そして触手は俺の下半身の品定めが終わったのか、ぐねぐねと淫猥にうごめく先端を俺の股間に押し付けるようにしてくっついてくる。何も無いはずの股間の中央付近にグニグニと触手の先端を押し付けられると、なぜだか俺のアソコに穴のようなものがあるのが感覚でわかってしまう。今、俺は男だったときには存在しなかった下半身にできた卑猥な穴を、ヌメヌメとしている肉のような感触のおぞましい触手にいじくられてしまっていた。

——ぐにゆうううううう♡

「やめろおおおお！俺は男だあああああ！」

完全に女の子の声が変わってしまった声で、俺は触手に向かって叫ぶ。男だった俺の体が完全に女に生まれ変わっているなんて信じたくなかった。でも、ヌルヌルとしていて生温かい感触で触手にいじくられる俺の股間には、ペニスの感覚が存在しなくなっている。これだけ股間を触手にいじくられているのに、アソコにまったく重みを感じない

——にゆううううううん♡

「——あああああああああつ！」

——ぷち♡

すると、いやらしい穴の中を肉の棒で内側からズルリと押し広げられる感覚と一緒に
なつて、俺は何かの膜のようなものが破られる感覚を下半身に感じるようになった。す
ぐにわかった。これは、処女膜だ。俺はおまんこに侵入してきた触手によって、処女を
失った。

しかし、俺のおまんこの中にあつた処女膜を破った後も触手はまったく止まることな
く、俺の存在を無視するようにして股間に空いた膣穴の奥深くにまでズルズルとお腹の
内側を無理やりこすり上げるといふ奇妙な感触でヌチュヌチュとヌメリながら出たり
入ったりを繰り返すことになる。

「——痛い！痛い！痛い！痛い！」

股間にある穴が裂けてしまったような痛みが、俺の下半身を襲う。その痛みに、俺は叫ぶことしか出来ない。拘束された四肢を暴れさせてこの場から脱出しようと試みるが俺の手足を縛る触手はまったく壊れずに、俺は為すがままになって触手に下半身を犯され続けた。

……ずるる♡……ずるる♡

「……あつ♡……なんらこれっ♡……アソコの感覚があ♡……痺れてきたあ♡」

しかしすぐに、裂けるように痛かった俺のおまんこから痛みが消えていく。俺の膣の中でうごめいていた触手から染み出してきた何かの粘液が俺の体内に染み込むような感覚と一緒に、おまんこの中にじんわりと広がると、今度は俺の下半身から痛みが消えて体がポカポカと温かくなってきたのだ。

そして俺の下半身の感覚が変わり、甘く敏感になっていく。すると俺のおまんこからは、全身がとろけてしまうくらいに強くて気持ちいい快感が伝わり始めてきた。

んかに好き勝手にされている。そのことが屈辱なのに、女の子になった俺の体はとろけて気持ちよくなる。

自分の体が女の子に変わってしまったているが、俺の心は男のままだ。なのに自分の口からメスのような声が次々と出てくることに、俺は驚きを隠せなかった。

「……あつ♡……はあつ♡……触手なんかれえ♡……俺が♡……感じるわけない♡……んっ♡……あつ♡……んくう♡……んっ♡——あああああああつ♡」

おぞましい触手におまんこを好き勝手いじくられているのに、俺のお腹に内側には次第に甘い快感が積み重なるようにしてシユワシユワと溜まっていく。そしておへその下辺りに白い痺れがとろけて甘く集まりながら強く収縮すると、俺の体がヒクヒクと勝手に痙攣をし始めてしまうのだ。

女の子になった俺の体に起きる気持ちよくて知らない感覚に、俺は為すがままでいることしかできなかった。

……くちゅ♡……くちゅ♡

「……んっ♡……くう♡……おっ♡……おっ♡」

触手が勝手に出入りし続ける俺のおまんこから、俺がまるで快感を感じているみたいに見える卑猥な水の音がクチュクチュと鳴り響いている。勝手に痙攣をし始める俺の体につられるようにして俺の呼吸が速くて一定のリズムに変わると、俺のおへその下辺りにはさらに甘くてとろけるような痺れが動くことなく大きくなって溜まっていった。俺の体が、さらにふにやけてとろけていく。

「……なんらこれえ♡……なんらこれえ♡……あっ♡……あっ♡……あっ♡」

グチュ♡グチュ♡グチュ♡

「——んくううううっ♡——っ♡——んっ♡——あっ♡——あああああああ」

ゾク♡ゾク♡ゾク♡

俺は触手によって、男のときには味わったことのない全身がゾクゾクとろけるような快楽を感じさせられてしまっている。そのことが屈辱で、俺はなんと快感を我慢しようとして努力してみるがどうにもならない。

俺の体から湧き出てくる、気持ちよくて痺れる甘い快楽が止まってくれないのだ。相変わらずに俺のおへその下には、いままで味わったことのない種類のシユワシユワとした快楽がトクトクと音を立てながら溜まり続けていた。その快楽の量が大きくなるにつれて俺の呼吸は速くなり、さらには勝手に俺の体が気持ちよく痙攣を続けていく。

俺の体に、何かの反射が起きようとしているのが全身の感覚でわかった。本能的にこの感覚をなんとか我慢しなければいけないと感じ俺は体に生まれる快感を押しさえつけるが、おぞましい触手がグチュグチュと出入りしている俺のおまんこからさらに湧き出しだしてくるとろけるような甘い痺れが、俺のお腹の内側で膨らみ続ける快楽の水風船を爆発させるようにしてさらに大きく増えていく。

グニ♡グニ♡グニ♡

絶頂を迎えてしまった俺のおまんこが勝手にヒクヒクと動き出すと、俺の膣の中に侵入している触手をおまんこのお肉がきゆうつと心地よく締めつける。グネグネとうごめく敏感になった俺の膣肉で、お腹の内側を無理やり満たしている触手の形がはつきりとわかってしまうのが最悪だった。でも、女の子になった俺の体は極上に気持ちいいのだ。

「……………あつ♡……………あつ♡……………あああああああつ♡」

(……………なんだこれ♡……………気持ちいいいいいいいい♡)

俺の目の前が快感によってチカチカと白く点滅すると、キーンとした耳鳴りとともに周囲の音が遠くなっていく。相変わらずに痺れのような素晴らしい快樂が、俺の全身を広がるようにして駆け巡っている。それと同時に、俺の全部に甘くて気持ちいいという幸福感が満ちていった。

「……………はあつ♡……………はあつ♡……………はあつ♡……………はあつ♡」

(……まだ♡……終わらないのかよおお♡……女の子の体でイクの♡……止まらない♡……ずっとイッてるみたいだ♡)

そして男のときには一瞬で終わったオーガズム独特の感覚が、女の体だとまだ終わらない。いまだに絶頂を続ける俺のおへその下辺りが気持ちよくグワングワンと揺れ続いていて、さらに俺の全身には痺れるような甘い快感がドロドロになって広がり続けている。まさに、至高の瞬間だった。

「……おっ♡……ほっ♡……おおおおおおおっ♡」

(……体が♡……ふわふわしてきた♡……女の子の体でイクのって♡……こんなに気持ちいいんだ♡)

ついには心がとろけるような気持ちよさに潤い続ける俺の体の感覚が空を飛んでいるかのようにふわふわとし始めると、俺の意識が甘く溶けて濁っていく。俺は触手にイカされたことなど忘れ、夢中になって女の子の体で初めて味わうオーガズムを味わった。

俺の目の前が、キーンとうつろに遠くなってくる。そして俺の意識は、お腹の内側で気持ちよくグワングワンと揺れる快感に甘く溶かされていった。そうしているうちにようやく、俺の全身を犯すような快樂の濁流が止まることになる。

……ズチュ♡……ズチュ♡

「——やめろおおお♡——いまはあ♡——イッて敏感になつてるからああああ♡」

しかし、そこで快感は終わらない。俺がイッたことなど関係なく、触手は俺のおまんこを犯し続けてきた。俺はイッたばかりで敏感になったおまんこを触手にズポズポと出入りされながら、ついにはよがり狂うことになる。

男のときには味わったことのない強すぎる快樂の余韻に浸ることもできずに、女の子になった俺を犯す触手がイッたばかりで敏感になった俺の膣肉をこすり続ける。俺はやめてくれと叫ぶが、触手は俺の言葉を無視するようにして俺のおまんこをネチャネチャと汚していった。

……ピク……ピク

「まさか!!!——それだけはだめだああああ!!!」

そして、女の子に変わった俺にとって最低の時がきてしまう。俺のおまんこの中を出入りしていた触手がピタリと動きを止めると、突然ピクピクと痙攣をし始めたのだ。

俺のお腹の内側に感じるおまんこが一定のリズムで膨らむ触手にピクピクと押し広げられるという感触にこれから何が起きるのか、男だった俺には思い当たることがある。

その感覚をおまんこの中に感じ取った俺は、最悪の未来を予想した。

「……触手があ♡……奥う♡……入ってきてるう♡……んっ♡……あっ♡」

グチユ♡グチユ♡

触手はこれから吐き出す液体を俺の体内の一番奥に注ぐために、ズルリとした感触で俺のおまんこの中の奥深くにまで侵入してきている。俺のお腹の中はすでに全部が、ピクピクと痙攣する触手によって満たされてしまった。触手はこれから、俺の膣内にたっぷりと射精するつもりだ。俺はその事実にも、心の底から嫌悪する。

「……………お願い!!!……………止まってええええええ!!!」

俺は触手に拘束された四肢を暴れさせななんとかこの状況から逃れようとするが、相変わらずびくともしない。俺の股間の奥深くまで侵入した触手は、ピクピクとうごめき続けている。

そしてついに、その時がきた。

——びゅるるるる♡——びゅるるるる♡

「——あつ♡——あああああああつ♡——あつ♡——あつ♡——あつ♡——うわあああああ

!!!!
「」

(……俺のお腹の中に♡……あつたかいの♡……出てきてるうううう♡)

俺の膣の中に、触手の先からピクピクと飛び出してきたドロドロに粘る液体が注ぎ込まれていく。俺のおまんこが、生温かい液体の熱によって甘く満たされていった。俺の下半身には気持ちよさと嫌悪感の混じった変な感覚が、グチャグチャと卑猥にうごめき続けている。俺のおまんこが今、触手によって蹂躪されていた。

……びゅるるる♡……びゅるるる♡

「……そんなにいっぱい♡……せーえき♡……中に♡……出すなあああ♡……あつ♡……あつ♡」

さらに触手によって体内に注ぎ込まれた生温かい粘液は俺のお腹の内側にネトネトとした感触で引っかかると、じんわりと俺のおまんこに本能的な快楽を感じさせていく。俺の心はすごく嫌なのに、触手の体液を注ぎ込まれた俺のおまんこは心地よく温か

くなりきゆうきゆうと美味しそうに触手から出てくるネバネバした液体を飲み干して
いた。

(……おまんこの中で♡……触手がピクピクしてるの♡……はつきり♡……わかつちや
うろうう♡)

「……あつ♡……あつ♡……ああああああつ♡……そんなあ♡……つ♡……つ♡」

最悪なことに、俺の体内に向かって触手の先から何かの液体が勢いよく飛び出してき
ているのがお腹の内側にある粘膜の感覚ではつきりとわかってしまう。そして俺の体
内の放出されたネトネトする感触で気持ちよくお腹の内側に引つかかるようなネバネ
バした触手の精液が、スーッと広がるようにして俺の全身に染み込んでいった。

「——あつ♡——あつ♡——あつ♡——なんらこれえ♡——気持ちいいいいいい
♡」

触手に中出しされた液体が全身に行き渡ると、俺の体には心がとろけてしまいそうな

「……おほお♡……これえ♡……しゅっごひ♡……気持ちいいのお♡……おっ♡……ほっ♡」

もつと触手に、気持ちいいあの射精を俺のおまんこにたっぷりとしてもらいたい。触手の精液で、俺のおまんこをたっぷりとネバネバにしてもらいたい。その感情が爆発すると、意識が白く甘くとろける極上の快感とともに俺の全身には何かの変化が駆け巡っていく。

ここで俺は理解した。女の子になった俺は、道具としてこの触手に調教を受けている。しかし、もう遅い。今の俺の目の前にあるのは、もつとおまんこを気持ちよくしたいという欲望だけだった。すでに俺の拘束が解かれているが、俺はまったくここから逃げる気にならない。

俺への調教は、すでに完了していた。

……ずるるるるるる♡

る。あれから、どれくらい時間が経ったかなんてわからない。触手から分泌される白い液体が栄養素になるらしく、俺は口内に注ぎ込まれるその白い液体を飲み干すことで腹を満たしている。

最初は少し小ぶりだった俺の乳房は今は立派に育ち、現在の俺の体は全身がふつくとムチムチで妖艶な女の体に変化していた。あの白い液体には、女の体を育てる効果もあるようだ。

「——ふくううううっ♡——っ♡——っ♡——っ♡——あっ♡——あっ♡」

……ずるるる♡……ずるるる♡

大きく膨らんでいた俺のお腹の中から、小さな触手が次々と生まれ出てくる。俺の体は、触手の苗床として利用されていた。

でも、触手が俺の子宮から生まれてくる時におまんこをズルズルと押し広げらる感覚が気持ちよすぎて、俺はこれを止める気にならない。

俺の心は、触手によって完全に調教されきっていた。

「……もつと♡……せーし♡……中に出してえっ♡……あっ♡……あっ♡……あっ♡……あっ♡」

女として素晴らしい肉体を手に入れた俺は、同時にダンジョン内に併設された風俗店でも働くことになる。この場所は、各国のVIPが世間に隠れて性を楽しむ場所だ。また、ダンジョン内を探索する冒険者の溜まった性欲を発散する場所でもある。その場所で俺は、色々な男のチンポの味をおまんこで楽しんでいた。

触手に調教を受けて女に生まれ変わった俺は、身も心も全てダンジョンに取り込まれたのだ。

——ぐにゅううううううっ♡

「……あっ♡……おじさまのチンポお♡……おまんこに♡……入ってきたああああ♡」

こうして女に生まれ変わった俺は、今日も気持ちよく腰を振る。

ヤバイやつをナンパ♡

「すごい人の数だな」

エーデンリッツ学園に入学して一年が経ち、今は学園の長期休みに入っていた。俺はこの休暇を利用して、カマーランドにて開催されている薄い本即売会に参加してみるところにする。

薄い本即売会とは、カマーランドにて年に数度ほど開かれる祭りのようなものだ。この祭りでは自主制作された様々な種類の本が、サークルという団体ごとに販売されていた。

会場内では、そこら中で目を血走らせた紳士淑女が目的の本を求めて歩いている。安性の観点から、市場では走ることが禁止されていた。

俺は今回の薄い本即売会に参加しているサークルのカタログを見ながら、物見遊山で辺りを物色していく。

「……………何だあれは？」

グレーのパーカーに黒いスカートを履き、黒いキャップを深くかぶった女の子が両腕に薄い本を数冊大事そうに抱えて早足で歩いている。

俺が気になったのは、その女の子のステータス鑑定の結果が変なことだった。

X X X X X X X X X X ※受肉中

X X X X X X

X X X X X X

俺がなんとなくその女の子のステータスを鑑定してみると、見事に殆どの項目が見えなくなっている。そのことに興味を持った俺は、その女の子をナンパしてみることにした。

「こんにちは」

「——な、なによ！——わたしは女神なんかじゃないわよ！」

俺がキャップを深くかぶった女の子に声をかけると、その女の子はキョドリながらおかしなことを言い出す。俺は特に気にすることなく、女の子へのナンパを続けていった。

「——私は忙しいの！」

「ふーん。女神様は忙しいのか」

「——だから、私は女神じゃないって！」

「あなたが女神様じゃないんなら、忙しくないはずだから俺とのお茶くらいには付き合えますよね？」

「…………ぐぬぬぬぬ！」

何だかよくわからないがこの女の子が女神という言葉に反応することを利用して、俺は彼女をお茶へと誘うことに成功する。そして女神じゃないなら大丈夫と、俺はその女の子をホテルに連れ込むことに成功してしまった。

ホテルの室内では深くかぶっていたキャップを脱いだ青い髪に青い瞳をした女の子が、気持ちよさそうに俺からのマッサージを受けている。最初はマッサージをされることを拒否していた彼女であったが、これは高貴な者への奉仕だと俺が伝えると彼女は喜んで俺のマッサージを受け始めたのだ。変な女の子である。

「…………あんた…………中々やるじゃない！」

無防備にタオル一枚になってベッドの上に寝転び、俺の何もしないという言葉を感じた女の子がうつ伏せの体勢で俺の両手に背中をマッサージされている。

最初は緊張していた彼女だったが手始めに俺が普通のマッサージを続けていくと、緊張が解けてきた女の子は次第に態度を大きくしていく。

「私は女神じゃないけど、きつと女神はあんたのことを褒めてるわ!」

俺からのマッサージを受けながら、青い髪の女の子がドヤ声でそんなことを宣言している。もちろん俺のマッサージが、これで終わるわけない。

ベッドの上でうつ伏せに寝転ぶ彼女の体から緊張による硬さがしつかりと取れたことを確認した俺は、今度は女の子の体を発情させるように魔力を練り込みながら少しずついやらしいマッサージへと施術を切り替えていく。

「……はあ♡……はあ♡……はあ♡……はあ♡……はあ♡」

俺からの発情マッサージを受けてしまった女の子が、今はベッドの上に仰向けになって顔を赤らめながら息を荒げていた。彼女はこういった行為に、慣れていないらしい。むしろ、無知とも言うていいだろう。そんな女の子が、俺からの発情マッサージを受け

たのだ。彼女の全身はもうトロトロに弛緩しきっており、何も抵抗ができなくなっていた。

ベッドの上で仰向けに寝た女の子の胸の上にはGカップ程の爆乳がぶるんと広がるようにして広がっていて、そのやわらかそうなおっぱいを隠すようにして少し乱れたタオル一枚を彼女は無防備に身につけているだけだ。彼女はもう、俺の毒牙にかかっている。

……クチュ♡クチュ♡クチュ♡

「……………はひいいいん♡……………んっ♡……………あっ♡……………あっ♡」

俺は満を持して、焦らしに焦らした女の子の股間をやさしく撫で始めた。発情して全身からふにやりと力が抜けてしまった女の子はだらしなく股を開いて、俺からの卑猥な愛撫に為すがままになってしまう。

俺の手によって体を強制的に発情させられた彼女はきれいな青い瞳を虚ろに濁して

しまい、すでに快樂によつてうまく判断ができなくなつてしまつていた。

「女神様のおまんこ、すつこい濡れてますよ?」

「……はああああん♡……これは♡……受肉う♡……してるからあ♡……いつもと♡
……体が違うのおおお♡」

又チュ♡又チュ♡

俺の言葉にクネクネと体を揺らしながら、気持ちよさそうに股を開いて俺の指におまんこを手マンされてる女の子が恥ずかしそうに返答をしている。俺が指でいじくつている彼女の股間の割れ目には、すでにくちゆりとした濃い愛液がまみれてしまつていた。

俺はついだし、いやらしく濡れたおまんこに愛撫をしながら彼女に女神のことを詳しく聞いてみることにする。

「やっぱり、女神様なんですか？」

「——ち、ちがううううつ♡——わたしはあつ♡——女神じゃないわあ♡——あつ♡——あつ♡——あつ♡」

俺の質問に、慌てたように女の子が否定の言葉を返してくる。よくわからない。まあ、これ以上彼女をいじめるのはかわいそうだと思った俺は、そのままうまく話を合わせることにした。

「女神様じゃないんなら、俺がこうやっておまんこを触っても問題ないですよね？」

——グニユ♡グニユ♡グニユ♡

「……はひいいいいんっ♡……だ、誰にも触られたことなんてないのにいいいい……ん♡……あつ♡……あつ♡」

初物だという女の子のおまんこの濡れてヌルヌルする生温かい感触を、俺は割れ目を

手マンをしながら指で思う存分に楽しんでいく。誰にも触られたことがないという彼女の初々しいおまんこに、俺は他人に性感帯をグチュグチュと指でかき混ぜられて気持ちよくなる感触を初めて教えていった。

女神が受肉したという美しい女の子のおまんこは俺によって初めてやわらかくほぐされ、心地よく性感帯を開発されているのだ。光栄である。

俺の手によって自称女神様は神聖な場所であるおまんこを好き勝手にいじくられると、長い時間をかけていやらしく全身をトロトロに甘く溶かされていった。

「……………はあっ♡……………はあっ♡……………なにこれえ♡……………なにこれえ♡……………なにこれえ♡……………はあっ♡……………はあっ♡……………なにこれえ♡……………なにこれえ♡……………なにこれえ♡……………」

そして俺の指に膣肉をグチャグチャにかき混ぜられてしまった女の子は全身を心地よくダラリを弛緩させ、高照らせた体が気持ちよすぎてその場所から動けなくなっている。彼女の貞操は、風前の灯だった。

ベッドの上に仰向けの体勢になったまま体がとろけてしまい恥ずかしそうに頬を赤

く染めている彼女の両脚が、くぱりとだらしなく開かれてしまっているのが素晴らしくエロい。

——くにゆり♡

「……あつ♡……だめえ♡……それは♡」

準備万端になりグチュグチュに濡れて開いた彼女のおまんこに、俺は勃起したペニスをくぱりとあてがってしまう。すると慌てたように、俺がナンパした女の子は声をかけてきた。しかし俺は言いくるめるようにして、彼女の言葉をいなしていく。

「女神様じゃないなら、問題ないはずですよね？」

「……まあって♡……やつぱり♡……私は女神いい——っ♡——ああああああ——
——っ♡——っ♡」

——にゆううううううん♡

自称女神だという女の子の言葉を最後まで聞くことなく、俺はナンパした女の子のやらわかく濡れたおまんこを縦に裂きながら気持ちよく彼女のヌルヌルした膣肉にチンポを埋め込んでいった。ああ。最高に気持ちいい。

——ぷち♡

「……………ああんっ♡……………入っちゃっ♡……………たあああ♡……………あっ♡……………あっ♡」

俺のチンポが挿入される途中で、女神様だと自称する女の子の処女膜はあっけなく破られることになる。俺は光栄なことに、ナンパした女の子が初めてエッチした相手になったというわけだ。俺は女神様の、処女を奪った男になった。

……………ぐにゅうううううう♡

「……………どうしよう♡……………私っ♡……………女神なのに♡……………人間と♡……………エッチしちやっ
たあああ♡……………んっ♡……………あっ♡」

ヌルリとしていて生温かいヒダヒダの膣肉をグチュグチュとこする感触と一緒に
なつて、俺のチンポが自称女神だという女の子のおまんこの奥にさらに少しずつ埋まり
込んりこんでいく。

そして俺のペニスの根本までもが、温かくてウネウネとうごめく自称女神様のおまん
こに温かくニユルリと包まれることになった。彼女は無事に、俺のチンポで処女を卒業
したようだ。

……ズチュ♡……ズチュ♡

「……はひひひひひ……あつ♡……あつ♡……あつ♡……あつ♡」

回復魔法をかけた自称女神様の処女を失ったおまんこに、俺は気持ちよくピストン運
動を続けていく。俺の体の下で正常位になって心地よさそうにクネクネと全身を悶え
させながら、女神様は初めておまんこで味わうチンポの気持ちいい感覚に戸惑うよう
にしてあえぎ声を出し続けていた。

俺がピストン運動をする度に彼女の無防備な爆乳が上下にプルプルと揺れる光景が最高にエロい。俺はナンパした女の子の両胸に膨らんだ爆乳がゆさゆさと俺が腰を振るリズムに揺れる姿を楽しみながら、彼女に声をかけていく。

「女神様のおまんこ、グチュグチュになってますよ。感じてるんですか？」

「……………これは人の体に受肉しててえ♡……………いつもと感覚が違うからああああ♡……………あつ♡……………あつ♡……………あつ♡……………女神の体に♡……………こんな感覚はないからああああ♡」

「じゃあ、こういうのはどうですか？」

——ヌツチュ♡ヌツチュ♡ヌツチュ♡

「——はあああああん♡——あつ♡——あつ♡——ああああああつ♡」

ゾク♡ゾク♡ゾク♡

俺はナンパした女の子に声をかけると、彼女のおまんこの奥まで深く膣肉をえぐるようにしてグネグネとチンポを出し入れしていく。すると正常位の体勢で股を開いて俺とセックスを続けていた女の子が、生まれて初めておまんこに感じる強烈な快感によって膣肉を本気汁でグチャグチャに濡らしながら意識をドロリと濁していった。

彼女の初物のおまんこが、俺のチンポの形を覚えていく。青い髪をした女神様を自称する女の子は、俺のチンポによって無事に体を開発されていた。

そして強すぎるセックスの快樂によつて体中に力が入らなくなつてしまつた青髪の女の子は、だらしなく股を開いた体勢のまま俺からのピストン運動に為すがままになつていくことになる。

ヒク♡ヒク♡ヒク♡

「……あ、っ♡……あ、っ♡……あ、っ♡……あ、っ♡……」

(女の子の初イキ、ゲット！)

俺のチンポを咥え込みながら、ネチャネチャの愛液にまみれた女の子のおまんこが今度はきゆうきゆうと心地よさそうに収縮し始めていく。その感覚を、俺と気持ちいいセックスを続ける女の子は初めて味わうと言わんばかりに困惑した顔で味わっていた。彼女は俺のチンポで、人生初の中イキを体験したのだ。

セックスをしながら観察するに、どうやら彼女は本気の初物のようだ。彼女は多分、オナニーすらも知らない女の子なのだろう。だから俺は、そんな女神様のおまんこにチンポの気持ちよさをこれから思い切り教えてあげることにする。最高の人助けだ。

……クチュ♡クチュ♡クチュ♡

「……にやにこれえ♡……こんなの♡……しらにやいいいい♡」

俺のチンポで開発され始めた性感帯をヌチュヌチュいった感触で気持ちよく突かれながら、女神様は快楽に弛緩させた顔からよだれを垂らしてしまっている。順調に、彼

おまんこをネチャネチャにかき混ぜられながら気持ちよきそうに股を開いてあえいでいる。彼女は俺から教えられる偏ったセックスの知識を信じて、無事に俺好みの女の子に成長してきていた。これだから、処女の女の子を性的に染めるのはやめられない。

しかし俺とセックスをしながら女神様ごっこを続けるなんて、興味深い女の子もいたもんだ。面白いからこれからも、彼女に対しては女神様扱いを続けてみよう。

俺はナンパした女の子の態度に合わせるようにして、セックスを続けながら彼女を女神様として扱うことにする。

「…………イク♡…………イク♡…………イク♡…………イクううううう♡」

「そうです。高貴な存在はそうして、イキそうなときはイクと叫ぶのが人間の間では義務になっています」

「…………あつ♡…………あつ♡…………あつ♡…………あつ♡…………私のおまんこお♡…………ユーリのチンポに♡…………いじめられてえ♡…………イツちやうのおお♡」

ヒク♡ヒク♡ヒク♡

セックスをしながら施した俺の調教のおかげで、女神様は立派に俺のチンポが大好きな女の子に変貌を遂げることになる。彼女は依然として正常位の体位で俺が教えたように股をはしたなく開いて気持ちよさそうに腰をへこへこ振りながら、初めてだというセックスを俺と思う存分にネチャネチャになつて楽しんでいった。

……とぶ♡……とぶ♡……とぶ♡

「……わたし♡……女神なのにい♡……人間に♡……種付けされちゃったあ♡……あつ♡……あつ♡……あつ♡」

今俺の体の下では、俺の腰にだいしゆきホールドでがつしりと両手両足でしがみついた女の子がぼつりと何やらつぶやいている。俺は女神様のおまんこに、人間でありながら初めて中出しの味を覚えさせていた。

「……にやにこれ♡……お腹の中♡……あつたかくて♡……気持ちいい♡」

……ぬぶ♡……ぬぶ♡

俺の精液がたつぷりと注ぎ込まれている彼女のおまんこは気持ちよさそうにきゆうきゆうと痙攣しており、女神様は生まれてはじめて味わう中出しの感触を膣肉でねつりと堪能している。彼女の神聖であつたおまんこは俺の精液にまみれてドロドロに汚れきり、白く泡立った本気汁と混ざって卑猥な陰部へと変貌を遂げてしまった。

女神様のおまんこが、俺のチンポの形に変わっていく。

「女神様、もう一度するので、俺のペニスを舐めてきれいにしてください」

「……高貴な私に……そんなことさせるの?」

「当然です。これが、高貴な者の義務ですので」

……

……

……

……じゅるるるる♡……じゅるるるる♡

「……こうすれば♡……いいのかしら♡……はむっ♡……あむっ♡」

フェラをしたこともないという女の子に俺は口でペニスを気持ちよくするやり方と、初めて口内射精をされる味をしっかりと教え込んでいく。こうして俺がナンパした女の子は、性に対する経験値を蓄え立派な淑女へと変わっていった。

——くばあ♡

「……ユーリのチンポ♡……私のおまんこに♡……挿れて♡」

……ムワア♡

当然、俺のセックスは一回出しただけでは終わらない。俺はおねだりのやり方を、女神様に教えてみる。すると彼女はベッドの上に仰向けに寝た体勢で両手を使って陰唇をビラリと開き、興奮と愛液で妖しい湿り気をもった膣肉をくぱりと見せつけながら俺をセックスに誘ってくれる。

女神様の美しかった陰毛は俺の手によって剃毛されパイパンになり、今は彼女の股間にある美しいビラビラとやわらかい割れ目が丸見えの状態になってしまっている。女神様の体が、俺とのセックスによってさらにドロドロに汚されていた。

——ぐにゅうううううん♡

「……あつ♡……ユーリのチンポお♡……入ってきたあ♡……気持ちいい♡……あつ♡……あつ♡……あつ♡」

その日はナンパした女の子が快楽に負けて気絶するまで、俺は彼女の体を思う存分に調教していくことになる。

慈愛の女神セーラ♡

次の日に目が覚めると、俺は一緒にホテルのベッドで寝ていた全裸の女の子に詰め寄られることになる。どうやら俺とセックスをしたあと彼女に、何かあったようだ。

「どうすんのよ！あんた！私、天界に帰れなくなっちゃったじゃない！」

慌てている女の子に話を聞くと、なんと彼女は趣味の本を買い物するために下界に下りてきていたこの世界を管理する女神様の一人らしい。

なんでも受肉していた肉体を汚したために、彼女は罰として天界から墮天させられたそうだ。

俺と一夜を共にした女神様の名前は、慈愛の神セーラという。彼女はプンプンと怒りながら、俺に説明をしてくれた。うーん。安易に彼女をナンパした俺にも責任がある

し、少しセーラの面倒を見てあげるか。

そう考えた俺は、さつきから全裸のまままで一生懸命に自分のことを説明しているセーラの巨乳がぶるぶると揺れている光景にムラムラすると、彼女と朝一番のセックスを開始することにする。こんなにも美しい女性と一晩セックスをしただけで関係を終わらせるなんて、そんなもつたいなことできるわけがないからな。

一晩だけ、一回だけという気持ちの女性もこうして朝起きたときに肉体関係を求められると、昨日の続きのように感じてなし崩し的に二回目のセックスをしてしまうのだ。こうしてズルズルと、俺はセーラと何度もエッチしてしまう関係を作るつもりでいた。

……くちゅ♡……くちゅ♡

「……あつ♡……あんたあ♡……こんなときに♡……何なのよお♡……あんつ♡……あつ♡」

俺によってパイパンにされてしまった神聖なる女神のおまんこをヌルヌルといじく

られながら、セーラが俺に苦言を伝えてくる。しかし濡れた股間をネチャネチャと俺に触られながらも彼女は嫌がる態度とは逆に両脚をパツクリと開ききっており、気持ちよさそうにねっとりとした濃い愛液でフニフニとする感触でやわらかいビラビラの割れ目を濡らしてしまっていた。どうやらセーラは、結構な好き者のようだ。

「どうする？ やっぱり、やめとく？」

「……ううん♡……する♡」

俺が勃起したイチモツを見せつつつセーラに尋ねると、彼女は昨日あれだけ楽しんだセックスの味を思い出したのか少し沈黙した後顔に赤らめながら肯定の言葉を伝えてくる。すでに慈愛の女神は、俺のチンポによって墮落し始めていた。

……じゅるるる♡……じゅるるる♡

「……チンポ♡……舐めてほひいんれしょ♡……ひようがないらあ♡」

……くぷっ♡……ぬぷっ♡

そんな慈愛の女神が、昨日俺に教わったようにして俺のチンポを生温かいねっとりとした唾液にまみれたお口でちゅぷちゅぷと舐め啜えながらフェラしてくれている。俺の股間に顔をうずめて慣れたようにくぷくぷと熱く濡れた口を上下に動かしているセーラの態度を見るに、彼女はすでにかなり淫乱なセックス好きの女性へと成長してしまつたようだ。

俺のペニスをやさしく包み込むセーラの口の中が、慈愛にあふれたように温かくて心地いい。

——にゅううううん♡

「……あつ♡……チンポお♡……入ってきたあ♡……お腹の中あ♡……すつこい♡……広がるううう♡……あつ♡……あつ♡……あつ♡」

そうして俺とセーラは、朝一から濃厚なセックスを開始する。起きたばかりでまだ体

温の高い彼女の膣肉が、ウネウネと温かい熱を持ちながらグチュグチュに濡れた状態で俺のペニスをくぐりと気持ちよく啜えこんでくれていた。

「そういえばセーラは、昨日どんな本を買ってたの？」

……又チュ♡……又チュ♡

「……あつ♡……あつ♡……そ、それはあ♡……そのお♡」

正常位の体勢でいやらしく股を開いたセーラのおまんこにピストン運動を続けながら、俺はせっかくだし趣味の話でも聞いてみることにした。すると彼女は、恥ずかしそうに悶えながら言葉を濁す。

「……ベーコンレタスの本よ♡……っ♡……あつ♡……あつ♡」

「……ああ。……B（ベーコン）L（レタス）の本かあ。な、なるほどね！」

セーラの返答を聞いた俺は踏んではいけない特大地雷を踏みぬいてしまったことを察すると、これ以上彼女の腐界に巻き込まれないように話題を変えていく。

こうしてネチャネチャの感触になって温かい粘膜の混じり合う俺たちの気持ちいいセックスは、セーラのパイパンおまんこ割れ目がべつとりと白く卑猥に汚れてしまうまで続いていった。

「……人間って♡……おっぱいでもこういう事するの？……変わってるわねえ♡……えいつ♡……えいつ♡」

……ゆっさ♡ゆっさ♡

今のセーラはふるふるに揺れる爆乳を両手に鷲掴みにして、俺のチンポにパイズリをしてくれている。ベッドに腰掛けた俺の前に膝立ちになり、興味深そうな顔で初めてパイズリをしながらゆさゆさと揺れる自分の爆乳の感覚を彼女は楽しんでた。いきり立ったイチモツをおっぱいに挟み込むときに両胸の中に感じる温かいチンポの熱を、セーラはやたらとお気に召したようだ。

——びゅるるる♡——びゅるるる♡

「……あんっ♡……せーし♡……出てきたあ♡」

自分のおっぱいを使って俺のペニスをイかせたことを、セーラは達成感に満ちた顔で喜んでいる。慈愛の女神であるだけあって彼女は自分の体を使って他人に何かをすることに対し、特に抵抗感はない様子だ。

「……うふふふ♡……ユーリのせーし♡……いっぱい出た♡」

……ふにゅ♡ふにゅ♡

俺の精液によってどろりと汚されたおっぱいを、セーラは両手で爆乳をタプタプに寄せながら嬉しそうな顔で見せつけてくる。メチャクチャにエロい。素晴らしい光景だった。

次にセーラは寄せていた爆乳を両手で左右に開くと、俺の精液でベトベトに白く汚れたおっぱいの様子をじつくりと観察させてくれることになる。

そして彼女はぶるぶるにやわらかく揺れる女神の爆乳を汚した俺の精液を、右手ですくい取りながら飲み干していった。

……ちゅぶ♡……ちゅぶ♡

「……たしか♡……こうするのが礼儀だって♡……ユーリが教えてくれたわね♡……はむ♡……れろ♡」

一心不乱にセーラが自分の谷間をべつとりと汚す俺の精液を手ですくい、舌と口を使つてきれいに舐め取っている。彼女の卑猥な行動に興奮をってしまった俺はセーラをベツドに押し倒すと、彼女とのエッチの二回戦目に突入することにした。

……

……

……

「……あつ♡……あつ♡……あんたあ♡……女神の体に淫紋なんて刻んで♡……どうなっても♡……知らないわよお♡……あつ♡……あつ♡」

「でも、気持ちいいでしょ?」

「……うんっ♡——っ♡——っ♡——あっ♡」

——ヌツチユ♡ヌツチユ♡

「——なにこれえええ♡——こんなの♡——獣みたいじゃない♡——あつ♡——あつ♡——あぁあぁあぁあつ♡」

ついには受肉した肉体に俺の淫紋を刻んでしまったセーラがベッドの上で四つん這

いになり、今度はバックの体位で俺とのセックスを続けている。俺のチンポを美味しそうにきゆうきゆうと締めつけながらネチャネチャに濡れて生温かく包み込む彼女の膣肉が、おまんこにピストン運動を続ける俺のペニスをグニグニユとした感触のヒダヒダおまんこ肉で飲み込みながらヌルヌルになってこすりあげてくれた。

……ぬぶ♡……ぬぶ♡

「……おっ♡……ほっ♡……これっ♡……チンポが入る感じが♡……昨日と♡……ぜんぜん違ううう♡……すっごい♡……おっ♡……とどいちゃっているうう♡……ああん♡……すっごひいい♡」

昨日はじめてセックスを覚えたばかりのセーラは、バックの体位でおまんこに出入りしてくるチンポの感触が昨日俺とした正常位でのセックスと違うことを楽しそうに比べていた。ネチャネチャと音を出しながら奥までズッポリと俺のペニスを飲み込んで膣肉の感覚を、彼女は本当にセックスを覚えたての女の子がする快楽に興味本位のワクワクした態度で味わい続けていく。

慈愛の女神であるセーラは、俺のチンポで女になった。

こうして俺は昨日知り合ったばかりのセーラの体にセックスの気持ちよさを、さらに詳しく教え込んでいくことになる。

……

……

……

「——ま、まずいわああああ!!!」

セックスも一段落し、ゆつたりとベッドの中でイチャイチャしていたところで突然セーラが慌てたように叫び出す。何やら、まずいことが起きたようだ。

彼女に詳しく話を聞くと、セーラの姉である戦いの女神ポーラが、墮天した彼女を連

れ戻すために下界に降りると天界通信で連絡してきたそうさ。

臍抜けた妹に罰を与ると、セーラのお姉さんはかなり怒っているらしい。

「姉は戦いしか知らないすっごい堅物で、説得なんて無理よ！——ああ！どうしよう！」

彼女いわく、今からセーラを連れ戻しにやってくるお姉さんは、オシヤレや可愛い物にも一切興味を示さずにずっと戦いにばかり明け暮れていた戦闘狂のような人物なんだそうさ。

だから罰を免除してくれるように説得することは無理だと、妹であるセーラは慌てふためいていた。うーん。でも、すでに俺の淫紋を体に刻んでしまった彼女のことを守ってあげたいしなあ。どうしよう。

俺はセーラの話聞きながら、彼女を連れ戻しに来るといふ姉への対応をどうするかを考えてみる。しかし、セーラの姉であるポーラの人となり俺にはわからない。だからしばらく、俺は状況を静観することにした。

「……あつ♡……あつ♡……私のおまんこお♡……ユーリのせーしで♡……また♡……
ベトベトに♡……汚されちゃったあ♡……これ♡……すっごい♡……気持ちいい♡」

……くばあ♡

セーラはすでに、俺にどっぷりと堕ちていた。

戦いの女神ポーラ

「……あんっ♡……あんっ♡……あっ♡」

俺がいつものようにセーラとセックスを楽しんでいると、ダンジョン内に突然強い魔力反応が現れるのがわかった。これはきつと、セーラのお姉さんのものだろう。そう思った俺は、彼女をお出迎えするために準備をすすめる。

ダンジョン内につった面会場所にお姉さんを案内すると、俺はセーラと一緒にその場所へ向かった。

「セーラ、てめえ！腑抜けやがって！」

「——びいいいいいい!!!」

目の前に現れたセーラの姿を見て怒りをあらわにしているのは、赤い髪に赤い瞳をしたギザ歯の女の子だ。彼女は爆乳を締め付けるような軽鎧を身に着け、右手には神々しい槍を手にしている。

お姉さんに怒りを向けられたセーラは、怯えるようにして身を縮こまらせてしまっていた。

「男同士がイチヤイチャする変な本ばかり集めてると思ったら、今度は受肉した体を汚すとはなあ。セーラ！帰ったら、たつぶりとお説教だからな！」

「そ、そんなあ……」

ポーラが言い放ったその言葉に、セーラはがっくりと肩を落としてしまっている。そしてポーラは、その怒りの矛先を俺にも向けてきていた。

「あとはテメーだ。かわいい妹をたぶらかしてくれた責任を、お前にはきつちりと取ってもらうからな」

ギザ歯をむき出しにして怒りながら、ポーラが俺にもケジメを取らせると宣言をしてくる。うーむ。これは、自分の身を守らなければならぬようだ。そう思った俺は彼女の興味を引くために、とある提案をすることにした。

「それでは、戦いの女神ポーラ様と戦って俺が勝ったら、責任を免除してもらおうというのはどうでしょうか？」

「——ほうー面白えー！人間が私に勝負を挑むか！いいぜえ！お前が私に勝ったら、ケジメは免除してやる。で、何で勝負をするんだ？せっかくだ、私はお前と同じ武器を使って戦ってやるよ！」

戦いが好きだというポーラに俺が勝負を挑むと、彼女は嗜虐的に微笑みながら楽しそうに俺との勝負に乗ってくる。そしてありがたいことに、彼女は俺と同じ武器を使うことで勝負をしてくれると言っていた。

どうやら戦いの女神であるポーラは、人間相手に普通に戦ったら勝負にならないと考

えて俺にハンデをくれたようだ。

実はその条件をどうやって彼女に飲ませるかというのが今回の勝負の鍵となっていたのだが、これは僥倖である。

俺は今回の勝負方法を決めるため、彼女に刃物を提示した。

「はーん、ナイフか。いいぜ。ナイフ同士での戦いだな！」

「いえ、これは包丁です。俺とは料理で勝負してもらいます」

「——はあああああ？」

俺が手渡した刃物を見てナイフ同士での勝負だと勘違いしてしまったポーラに、俺は今回の勝負方法を正しく伝える。純粋な戦闘で勝負を挑んでも、彼女に敵うわけないからな。

そもそも俺は、戦い自体が好きではない。そんなことをする時間があつたら、女の子のおっぱいを揉むために時間と体力を使いたいのだ。

ありがたいことにポーラは俺と同じ武器で戦うと宣言してくれているのだから、俺の有利な土俵に上げてしまえばいいだろう。

料理で勝負をするという俺からの言葉を聞いてあっけにと取られてしまったのか、戦いの女神であるポーラは目をパチパチとさせてしまっていた。

「——ダメよ！お姉ちゃんは料理なんかしても、真っ黒い消し炭みたいなものしか作れないんだから！」

「——馬鹿野郎！セーラ！お前、そんなこと教えるんじゃないやねえ！」

ポーラに追い打ちをかけるように、セーラが慌てながら俺たちがする料理勝負を止めようとしてくる。どうやらポーラは、戦いばかりしていて料理が苦手らしい。

これは勝ったな。二人のやり取りを見て、俺はそう確信をする。

「戦いの女神であるポーラ様が、挑まれた勝負から逃げるんですか？」

「……ぐぬぬぬ！」

そして俺は彼女を逃さないために、ダメ出しの煽りをおこなった。俺とセーラにここまで言われてしまったポーラは、俺が提示した料理勝負から逃げられなくなってしまう。

俺とポーラは勝敗を決める審判をセーラに任せると、三人でキッチンへと移動した。

……

……

……

「勝者！ユーリ！」

「ちくしょう！こんな認めねーぞ！」

謎の真つ黒な消し炭を作り出してしまったポーラが、勝敗を前にして悔しそうに地団駄を踏んでいる。俺はそんなポーラに、とある提案をすることにした。この料理勝負は、いわば前座である。ここからが、本番なのだ。

「よかったら、もうひと勝負しませんか？今度は、無手での純粋な耐久力勝負です。武器は使いません。単純な体と体をぶつかり合いを、俺としてもらいます」

「……ああ？」

勝負が終わり不完全燃焼を見せていたポーラに、俺はもう一度勝負を持ちかけてみる。上手く勝ちを拾ったはずの俺からさらに持ちかけられた勝負に、今度は警戒をあらわにしながら彼女がルールを問いかけてきた。

俺はそんなポーラに、次にする勝負のルールを提示する。

「体同士をとあるルールの中でぶつけ合い、先に音を上げたほうが負けというシンプルな戦いです。ある意味、格闘技と言っていていいでしょう」

「へえ！格闘技か！それで、その勝負が決まったらどうしたいんだ？戦いの女神である私に今度は純粹な力比べ勝負を持ちかけたんだ。私に勝ったら、特別にお前の願いを一つ聞いてやるよ！」

格闘技による力比べだと聞いたポーラが、ギザ歯をちらつかせながら楽しそうに笑っている。さらには自分の大好きな戦いで勝負だと聞いて気を良くした彼女は、俺が勝利したらご褒美に俺の願いを叶えてくれるとも宣言してくれていた。

そう。俺はポーラから、この言葉が聞きたかったのだ。俺は報酬について決めるために、彼女との話を続けていく。

「俺が勝つたら、ポーラ様にしてほしいことがあります」

「……ああ?! 私にか? 大抵の人間は強い武器がほしいってお願いしてくるもんだが、まあいいだろう。お前が勝つたら何でも一つ、私が言うことを聞いてやる!」

「本当ですか?」

「——ああ! 乙女に二言はねえ!」

聞きたかった言葉を、俺は無事にポーラから引き出した。ここからが、本番である。

今回の勝負は先程おこなった技術勝負などではなく純粋な体同士のぶつかり合いだと聞いたポーラは、攻撃的に興奮しながら俺の提案を受け入れてくれた。そして気が昂ぶってしまった彼女は、その場の勢いで俺から提示された報酬も約束してしまう。

あとはポーラとの勝負に、俺が勝てばいい。彼女とこれから戦うことができるなんて、まさに最高の気分だ。

「私にお前が体力勝負で勝つたら、何でも言うことを聞いてやるといふ条件でいいな！……で、ルールは何だ？」

早く俺とぶつかり合いの勝負がしたくて待ちきれない様子のポーラと戦うために、俺は戦闘をするために用意した特別会場へと彼女を連れて歩く。

今回の戦いは激しくことが予想されるため、セーラには別室に待機してもらうことにしていた。

「ほーん。セーラを別室に待機させるとは、本気で私とぶつかり合いたいみたいだな。いいぜえ！お前の全部を、戦いの女神である私が受け止めてやる！」

「ええ。今回は俺も、全力であなたに体をぶつけます」

激しい戦いの予感に、ポーラがギザ歯を嗜虐的にニヤつかせながらワクワクとした表情で笑みを浮かべている。そしてついに、俺とポーラがお互いの体をぶつけ合う予定の

場所にたどり着いた。

「さて、勝負を始めますか。今回のルールですが……」

俺はとある部屋に入ると、今回の戦いのルールをポーラに説明していく。

俺たちの勝負が、密室にて行われることになった。

ポーラとの勝負♡

「……て、てめえ……これのどこが勝負だ……」

俺たちは全裸で向かい合い、お互いの性器をまさぐり合っていた。俺が提示した、勝負のルールはこうだ。

お互いの性器を刺激し合って、先に音を上げた方が負け。相手を怪我をさせることは禁止。そのルール内で、俺達はお互いの耐久力を比べ合う。素晴らしくフェアな勝負だ。

……シコ……シコ

「……うう……勝手がわからねえ……」

俺のチンポをいじくるポーラの右手は、ものすごく拙い。彼女にはあまり、性経験がないのだろう。力加減がわからないといった感じで怪我をさせないように、ポーラは恐る恐ると俺の股間をいじくっていた。

初心なポーラが困った顔で俺のチンポをいじくるといふ最高の光景を観察してしばらく楽しんだ俺は、彼女の恥丘に生えた陰毛のチクチクとした感触を味わっていた右手を股間にある秘部へと移動していく。そして俺は、彼女の割れ目を右手でグチュグチュと心地よく刺激していった。

ヌチュ♡ヌチュ♡ヌチュ♡

「……はあああああん♡……っ♡……っ♡」

ビクン♡ビクン♡

勝ち気だったポーラが、俺に手マンをされた途端に甘い吐息でメス声を出す。そしてあつという間に、ポーラがイッた。

俺の右手によつて体を絶頂させられてしまったポーラが、フニヤフニヤとその場へたり込んでしまう。戦いへの耐久力はものすごいが、もしかしたら彼女のおまんこは弱いのもかもしれない。俺はそんな予感を感じた。

苦痛には耐える訓練を積んできたが、ポーラは快樂に耐える訓練など積んだことがないのだろう。イッたばかりの余韻にうつろになる彼女は、こんな感覚を味合うのは初めてといった表情で困惑してしまっていた。

「……………くう♡……………まだだぁ♡」

甘いメス声の混じった声で、負けじと気力を取り戻したポーラが立ち上がる。さすが戦いの女神。すぐに体力が回復したようだ。俺はそんな彼女に先程の行為は準備運動で、これから勝負の本番であることを説明してあげる。

そして俺たちの勝負は、本気の戦いへと移り変わっていった。

……くばあ♡

「……………」これでもいいのか？」

ヒク♡ヒク♡ヒク♡

俺から勝負方法を聞いたポーラが信じられないといった表情で恥ずかしそうに股を開き、ベッドの上で仰向けに寝ておまんこを両手で広げている。彼女が両手で広げるおまんこの穴は、とろりと粘る愛液をまとわりつかせながらヒクヒクと開いたり閉じたりを繰り返していた。

ここからが本番だ。お互いの性器をノーガードでこすりつけ合い、精神の耐久力を競う。もちろん一切の防御を捨てた戦いであるため、ゴムなどの避妊具は装着しない。避妊魔法で対策はするが、俺たちはお互いに生のままの粘膜をネチャネチャとこすりつけ合う予定だ。これは厳密な勝負のためであり、決して俺の私欲などではない。

「ではこれから、お互いの体の中で一番弱い場所をこすりつけ合う耐久力勝負を始めま

す

「……は、はやくしろお」

自分のおまんこを両手で広げるといふ格好が恥ずかしいのか、ポーラが俺に勝負の開始を催促してくる。俺は彼女の望むとおりに、お互いの性器を使った耐久力勝負を始めることにした。

——ぐにゅうううううん♡

「……あつ♡……あつ♡……は、入ってきたあ♡」

自分のお腹の中に俺のチンポが入ってきた感触を感じ、ポーラが息を熱くしながら身悶えている。俺のチンポで初めてのセックスを経験した彼女の膈肉は体を鍛えているおかげできゆうきゆうと強く締まり、俺のペニスを飲み込むようにしてクプクプと収縮しながら精液を搾り取りにきていた。戦いの女神のおまんこは、素晴らしい名器である。

……ぬぷぷ♡

「……あつ♡……アソコの中の膜が♡……ひっぱられてる♡」

——ぷち♡

勝負が開始されるとともにさっそく、俺のチンポによって彼女の処女膜が破られることになった。これが、本当のスタートの合図だ。

「——くううううっ♡——っ♡——っ♡」

自分の処女膜が破けた痛みで、ポーラがうめき声をあげている。この現象は体の構造上仕方のないことなので、相手に怪我をさせるというルール違反に当たらないと俺は事前に彼女に説明していた。だから大丈夫だ。戦いの女神であるポーラの処女を手に入れたことに、俺は満足感なんて感じていない。

そして俺のチンポで処女を失ってしまった彼女の膣内に回復魔法を掛けたあとに、俺はポーラとの真剣セックス勝負を始めていく。

ぎゅうぎゅうと俺のチンポを強く締め付けてくるポーラのおまんこに向かって腰を振るのは、最高に気持ちよかった。勝ち気でギザ歯の女性が我慢しながら、おとなしく俺の体の下で股を開いたままピストン運動を受け入れているというシチュエーションも最高に心地いい。

俺はそんな興奮を悟られないように隠しながら、ポーラとのセックスを続けていった。

……ぬぶ♡……ぬぶ♡

「……て、てめえ♡……絶対に♡……負けないからなあ♡……あつ♡……あつ♡」

俺の体の下で仰向けに寝て、股を開いた体勢でポーラが負けじと俺を睨みつけている。強気な彼女の顔は快樂によって少しトロンと虚ろになると火照って頬に熱を持ち、

心地よさそうに赤い瞳を濁らせてしまっていた。セックスに慣れていない乱暴な女性
が、少しずつ俺のチンポでメスに変わっていく。

俺のピストン運動のリズムに合わせるようにして、ポーラの上半身に膨らむ爆乳がゆ
さゆさと縦に揺れる光景が素晴らしくエロかった。

しかし残念なことに俺たちの勝負は、あつという間に決着を迎えてしまうことにな
る。ポーラのおまんこは、弱かった。

……

……

……

「……はひ♡……はひ♡……こんにゃの♡……知らにゃいいいい♡♡」

……ヌプ♡……ヌプ♡

ポーラはベッドの上に四つん這いになって、バックの体位で俺におまんこを激しく突かれ続けていた。彼女の膣内はすでに本気汁でグチュグチュに濡れきっていて、そんな白く泡立ちヌルヌルとこすれるポーラのヒダヒダなおまんこにチンポを突き込む度に、俺の股間に当たる彼女のふつくらとしたお尻の感触が心地よくパンパンと弾けている。

「……お願い♡……もう♡……許してえ♡……あっ♡……あっ♡」

ポーラはすでに、負けを宣言してしまっていた。彼女のおまんこは、最弱だった。

しかし俺はポーラに勝ったら何でも言うことを聞いてもらえろという権利を使い、彼女とのセックスを続行していく。このまま戦いの女神であるポーラを、俺はメスになるまで調教するつもりだ。

「だめだ。俺が勝ったんだから、お前はもう俺の女だ。負けたら、何でも言うことを聞くんだろ？これからたつぷりと、ポーラの体を調教をするからな」

クプ♡クプ♡クプ♡

「………そ、そんなにやあ♡………あつ♡………あつ♡」

おまんこから卑猥な水の音を響かせながら、しおらしくなってしまったポーラがバツクの体位で俺とのセックスを無理やり続けさせられている。

俺は四つん這いになった彼女のお尻を、右手を使ってパシリと叩いた。すると俺が手のひらを叩きつけたポーラのふつくらと大きい安産型の巨尻から、ぷるんぷるんとやわらかい衝撃の波紋が広がっていく。これは、メチャクチャにエロい。

——バチン♡バチン♡

「——はひひひひひひん♡——っ♡——っ♡」

俺にお尻を強く叩かれながら、ポーラは心地よさそうに腰をへこへこと動かしてし

まっている。彼女に一つ、性癖ができたようだ。こうして一つずつ、俺はポーラの体を変態に変えていく。

もつちりとして張りのあるポーラのお尻を叩く右手の感触は、素晴らしく心地よかった。やわらかい彼女のお尻が反発するようにして、衝撃を与え続ける俺の手のひらにぴつとりとモチモチに吸い付いてくるのだ。その感触が気持ちよくて、俺はポーラの巨尻を何度も叩いてしまう。

——バチ♡——バチ♡

「——ふくうううううっ♡——んんんんんんっ♡——あ、あああああああっ♡」
お尻を叩かれたのが精神的なトリガーになったのか、バツクの体位で俺とセックスをしながらポーラが歯を食いしばるようにして気持ちよさそうに身悶えている。彼女はDMだった。

セックスを続けて敏感になっていた下半身を俺の手に強く叩かれたことで、彼女の全

ンビクンと痙攣させながら身悶えてしまっている。

俺によって蹂躪されている彼女の体が、限界を超えてさらに気持ちよくなっていく。ポーラの心と体を、俺はこうして女に変えていくのだ。

——びゅるるるる♡——びゅるるるる♡

「……わらひ♡……女神にやのにい♡……人間に♡……種付けされたあ♡……あゝっ♡……あゝっ♡」

俺から中出しを受けながら、四つん這いになったポーラが弱音を吐き出した。でも、まだまだ彼女への調教は終わらない。むしろ、ここからが本番だ。勝ち気なポーラの心を快樂によって屈服させ、完全に俺の色に染めきってしまう。

……ぬぶ♡……ぬぶ♡

「……はひ♡……はひ♡……わらひは♡……これからあ♡……ユーリの♡……おんなれ

すう♡……よろしく♡……お願いしましゅうう♡」

ついにポーラがベッドの上で正常位の体位になり、だいしゆきホールドの姿勢で俺の体にしがみつきながら俺の女になると宣言をする。戦いの女神ポーラは、俺のチンポに完全敗北した。

クプクプと卑猥な音を立てて俺のチンポが出し入れされる彼女のおまんこが、俺が中に出した精液と彼女の膣肉から染み出してきたベトベトの本気汁によつて白くドロドロ口に泡立ってグチャグチャに汚れてしまっている。

……とぷ♡……とぷ♡

「……どうしよう♡……わらひ♡……淫紋を刻まれちゃつらあ♡……天界に♡……帰れなくなるう♡」

「ポーラは俺の女になったんだから、ずっとここで俺とセックスをして過ごすんだよ」

ズブ♡ズブ♡

「……はひひひひひ♡……わかりました♡……らから♡……おまんこ♡……もう♡……いじめにやいれえ♡……あつ♡……あつ♡……あつ♡……あつ♡」

俺に調教を受けてしまったポーラが、大股をぱくりと開いた体勢のまま俺の体へのしかかられた状態で屈服を宣言している。その様子を、俺とセックスをするために部屋を訪れてきたセーラが驚いた顔で観察していた。

「……お姉ちゃんがこんな風になるところ……初めてみた」

「……せ、セーラあ♡……み、見るにやあああ♡」

自分の妹に痴態を見られてしまったポーラが、恥ずかしそうに最後の抵抗を見せる。俺は彼女の心を完全に折るために、セーラに見せつけるようにしてポーラへの調教を続けていった。

「ポーラ。うるさい」

——バチン♡バチン♡

「——はひいいいいんつ♡……あつ♡……そんなにやあ♡……妹に見られてるのに♡
……お尻を叩かれて♡……わらひつ♡……い、イカされるう♡……あつ♡……
あああああああつ♡」

ビクン♡ビクン♡

お尻を叩かれながら、戦いの女神ポーラが妹の前で絶頂を迎える。そんな姉の姿を見て興奮したのか、着ていたドレスを脱ぎ捨てて全裸になったセーラが妖艶な顔に変わると俺におねだりを始めてしまった。

「……ねえ♡……ユーリ♡……私ともエッチしよ♡」

「じゃあ二人で、ポーラの体をもつと気持ちよくしてあげようか」

「……………あつ♡……………あつ♡……………ユーリのチンポは♡……………やっぱり♡……………最高ね♡」

こうして戦いの女神ポーラと慈愛の女神セーラが、俺の仲間に加わることになったのだ。

ポーラとの騎乗位エッチ♡

「……あつ♡……あつ♡……んくうううっ♡」

今日も俺はポーラのおまんこにチンポを突き込んで、彼女の温かくて気持ちいい膣肉の感触を股間で楽しんでいる。

今の俺たちは、騎乗位の体勢でお互いの下半身をヌルヌルとこすりつけ合いながら性器で気持ちよくひとつに繋がりに腰を振っていた。

「ポーラも、腰を振るのがうまくなったね」

「……う、うるせえ♡……あつ♡……はあつ♡」

俺の言葉に悪態をつきながら、戦いの女神であるポーラが騎乗位の体位で気持ちよさ

そうに腰を振っている。すでに何度も俺とのセックスを繰り返してしまった彼女は、処女だったころから比べてだいぶセックスに慣れてしまっていた。

最初は全裸になって、俺の上にまたがるなんて恥ずかしくてできないと拒絶していた彼女であるが、すでに今は慣れたように騎乗位の体勢で気持ちよさそうに腰を振り続けているのだ。

俺のチンポにあえぐ彼女のムチムチな爆乳が、腰を振るたびにぷるんぷるんと揺れていく光景はまさに絶景であった。

今日も俺はこうして、セックスを覚えたばかりのポールの練習を兼ねて彼女と肌を重ねていくのである。

「ポールのおまんこの中、めちやくちや締まって気持ちいいよ」

「……………そうか♡……………えへへ♡……………あつ♡……………んっ♡」

セックスを覚えたばかりのつたない腰つきと違い、熟練した妖艶な腰使いに変わった淫技で俺のチンポを濡れたおまんこにヌプヌプと啜えこんでるポーラが俺からの言葉を聞いて喜んでいる。

すでに彼女は俺とのセックスに悦んで腰を振るくらいにまで、俺からの調教を受け入れてしまっていた。

「ひい♡——イ、グうううう♡——っ♡——っ♡——っ♡——っ♡」

そして慣れた様子で、俺のチンポが与える快樂によって背中をガクガクとのけぞらせながら、俺の腰の上にまたがったままのポーラが絶頂する。

俺の下半身が、彼女のおまんこが俺とするセックスの気持ちよさによって分泌した愛液と本気汁によってネトネトと濡れきっているのが感覚でわかる。

すでに何度も絶頂を繰り返しているポーラのヒダヒダした気持ちいいおまんこが、再びイキながらネトネトに愛液で濡れた状態の膣肉でウニウニと俺のチンポをこす

り上げる感触は最高だった。

まるで彼女のおまんこが、早く精液を体内に注ぎ込んでもらいたいと懸命に俺のチンポを搾り取ろうとしているかのようなのである。

俺は彼女の望むままに、連続絶頂の快楽にチカチカと意識を飛ばしている。ポーラのおまんこに向かって気持ちよくネットネットと中出しをおこなうことにした。

……とぷ。……とぷ。……とぷ。

「んくううううううっ♡——あ、っ♡——あ、っ♡——あ、っ♡——あ、っ♡」

俺に中出しをされた途端に、ポーラがイキながら膣内射精の快楽によつてまた気持ちよさそうにオーガズムを迎えていく。

今度の彼女は気持ちよさそうに背中を丸めながら、絶頂と同時に味わう中出しの強すぎる快楽に耐えきれないのか舌を口から外に出して、はしたなくアへ顔をさらしてし

声をあげるポーラのへその下で、俺の精液に反応した淫紋が妖しくピンク色に光り輝いている。

俺が刻んだ淫紋による効果で何倍にも快樂が増してしまった中出しセックスに、すでにポーラの心と肉体はどっぷりとハマり込んでしまっていた。

彼女の体は俺の精液を生でおまんこに注がれると、信じられないくらいの快樂があふれ出るようにすでに調教されきっているのだ。

「——イッてるのにい♡——またっ♡——おまんこっ♡——いっ♡——イっ♡がされるっ♡」

ガク♡ガク♡ガク♡

お腹の内側をネットネットに汚す粘液質な中出しをされながら俺の腰の上にまたがる絶世の美貌を持つポーラが、胸にぶらさがる爆乳をゆらしつつも脚を左右に開いたはしたない騎乗位の格好で、背中を丸めながらガクガクと上半身を震わし膣内射精の快樂に

浸って意識をチカチカと飛ばしていく。

戦いの女神というだけあって絶頂を迎えると、厳しく鍛え上げられたポーラの肉体が持つおまんこがぎゅううと強く締まって俺のチンポを心地よく刺激してくれる。その感触が、素晴らしく爽快で心地いい。

彼女の体を持つウネウネとうごめくヒダヒダの膣肉と相まって、ポーラのおまんこは硬く勃起したチンポから気持ちよく精液を搾り取るための極上の名器となっていた。

「……………イ、ってるのに♡……………まだ♡……………イ、クの♡……………とまらにやいよお♡」

ガクン♡ガクン♡ガクン♡

そして、騎乗位の体勢のまま味わう快楽の連続によって脱力したポーラが、俺の胸元により掛かるようにして倒れ伏してしまうことになる。その体勢のまま彼女は、気持ちよさそうにおまんこをきゅうきゅうと締めながらアへ声で絶頂を繰り返していた。

その後、激しい連続絶頂を受けて動けなくなってしまうたポーラは、しばらく騎乗位の体勢で俺のチンポをおまんこに咥えこんだまま体を丸めて休憩したあとに、セックスを再開するために欲望にまみれた顔で上半身を起こすことになる。

彼女が騎乗位の体位で上半身を起こすとき、ちらりと見えた、爆乳のポーラが持つ美しい肉体の鍛え上げられた腹筋が汗ばみながら強調されているという光景が素晴らしく妖艶であった。

……ズブ♡……ズブ♡

「——まって♡——いまあ♡——下から突かれたら♡——すぐに♡——イツちやうからあああああ♡——あ、っ♡——あ、っ♡——あ、っ♡……あっ♡……イクっ♡」

ガク♡ガク♡ガク♡

そして、俺に中出しされたばかりの彼女のおまんこをねつとりとした腰使いで突き上げてあげると、すぐにポーラはおまんこをウネウネと揺らしながら絶頂を迎えてしまう

ことになる。

すでに彼女のおまんこの中の弱い部分を俺がチンポで開発しまくっているため、ポーラはこうして、俺によつて簡単に絶頂させられてしまうくらいに肉体を調教されてしまっていた。

今はさらにやさしくチンポの先で彼女のおまんこの弱い部分を刺激していくことによつて、ポーラがもつと俺とのセックスで気持ちよくイキまくれるように体を開発している段階なのである。

「——イッてる♡——いま♡——イッてるからあ♡——チンポ♡——動かすなああああ♡——あ♡っ♡——あ♡っ♡——あ♡ ああああ♡っ♡…♡イ♡グううううう♡」

ビクン♡ビクン♡

俺の腰にまたがりながら、ポーラが俺のチンポで深くて長い絶頂を気持ちよさそうに繰り返す。

こうして俺は、セックスを覚えたばかりのポーラへの調教セックスをしばらくのあいだ続けていくのであった。

……

……

……

「……………むう。これは、まずい……………」

今日のセックスを終えて、全裸のままベッドの上でイチャイチャとしながらポーラとまどろんでいると、なにかの違和感を感じ取ったポーラがぼつりとつぶやく。

ポーラが感じたその違和感は、俺にもわかった。今、俺たちがいるダンジョンから遠くの地であるが、激しく魔力が歪んでしまっている地点があるのだ。

この世界には酸素や二酸化炭素と同じように魔力が空気中に漂っていつて、その魔力が反応することによって色々と魔法的な現象を起こすことができる。

つまり、こんなに離れた地まで魔力の歪みが伝わるくらいに、大規模ななにかが遠くの地でおこなわれているということらしい。その現象の余波を、この世界の女神であるポーラが感じ取ったのだ。

「これは、異世界召喚か……」

そしてポーラが教えてくれたのだが、この遠くの地で起こっている魔力の歪みは、異世界から人間を召喚するときにかかる際に生まれる歪みだそうだ。

その歪みが俺のダンジョンにまで届くぐらいに大規模に起きているということは、これからどこかの国で、数十人規模の異世界召喚が秘密裏におこなわれようとしているのだと彼女は教えてくれた。

他者の人生を狂わせる異世界召喚は、実はみだりに実行しないように女神たちが世界に向けてお告げを出している。しかし、それを無視しての召喚がこの世界では絶えないらしい。

せめて、この世界に望まぬ召喚をされてしまった異世界人たちが苦勞しないようにと、女神たちが慈悲によつて彼らにチート能力を授けているようなのだが、その能力を求めて、この世界の人々が幾度も異世界召喚を繰り返す結果になってしまっていた。

また、女神たちにも厳しい規則があり、みだりにこの世界に干渉をしてはいけないうるルールが存在するため、ポーラいわく直接的に異世界召喚を止めることはできないらしい。

女神たちが、異世界召喚された人たちにチート能力を授けるのをやめれば召喚はなくなるのかもしれないが、それでは召喚された人たちが不憫であると、苦肉の策でこの状態が続いているようだ。

「おもしろそうだし、俺も召喚されてみようかな？」

「——は？ユーリ、何を言っているんだ？」

俺は部屋着のスウェットに着替えながら、思いついたことを実行してみることにする。なんだか楽しそうだし、俺もこの異世界召喚に混ぜてみることにしたのだ。

俺が突然伝えた突拍子もない言葉に疑問の声を返すポーラを尻目に、俺は大規模な魔力の歪みに干渉するようにして、俺の魔力をねじ込んでいった。

すると俺の足元に、光り輝く魔法陣が現れることになる。成功だ。どうやらこれで俺も、異世界召喚に混ぜることができたらしい。

「ユーリ！何をしている！」

「ちよっと、行ってくるわ。ダンジョンの留守番、よろしく」

突如、俺の足元に光り輝く魔法陣が出現したことに驚いたポーラ声をかけてくるが、

俺はのんきに言葉を返す。

そして次第に、俺の目の前が白く光って塗りつぶされていくことになった。これが、異世界召喚をされる人間に起きる現象ようだ。貴重な経験である。

「——ユーリ！待てええええええええ！」

こうして俺はセックスを終えたばかりでまだ全裸のポーラをその場に残すと、大規模な異世界召喚に潜り込んだのであった。

異世界召喚の現場

(さて、ここが異世界召喚の現場か……)

俺が召喚されたのは、床に大きな魔法陣が描かれた荘厳な一室であった。多分、ここは、どこかの国の王城の中だろう。豪華な装飾品や美術品が、室内のいたる所に飾られていることからそれが推測される。

そして俺の周囲では、紺色のブレザーを着た40人ほどの学生たちが驚きながらも周囲をキョロキョロと見渡していた。どうやら、この高校生たちが今回、異世界召喚をされてしまった者たちらしい。

「ようこそ！勇者たちよ！」

突然のできごとで驚き混乱している異世界の人々に向かって、いかにも豪華な格好を

した王様が鷹揚に歓迎の言葉を伝えている。どうやらこの男が、この異世界召喚をおこなった責任者であるのだろう。

そして、そのまま、異世界召喚をおこなった国のトップによる一方的な演説が、俺たちに向かつて続くことになった。

「まじかよ、俺たち勇者か！」

「しかも、チート能力持ちだって！」

王様から受けた説明によると、俺たちはこの世界の平和を守るために勇者として選ばれたらしい。「異世界召喚」「勇者」という単語に反応した学生たちが、ザワザワと沸き立ちながら嬉しそうに会話を始めている。

「異世界召喚きた！しかも、クラス転移！」

俺が成り行きを見守りながら周囲の話を盗み聞きしていると、どうやらこの世界に召

喚されたのは、同じ高校のクラスのメンバーたちだということがわかった。

そして、俺はそんな集団の中にひとり、スウェット姿でまぎれ込んだというわけだ。

「で、あいつ誰？」

学生たちの意識から混乱がおさまり始めた頃、クラスメイトばかりのはずの集団の中にスウェット姿の見知らぬ男がまぎれ込んでいることに気がついた人たちが、ヒソヒソと疑わしそくに内緒話を始めることになる。現在、俺は、完全に不審者として扱われてしまっていた。

まあ、クラスメイトしかいないはずの集団の中に、見知らぬスウェット姿の男がなぜかまぎれ込んでいたら誰でもそうなるだろう。

「巻き込まれ召喚ってやつだろ？」

「あいつが、一番チート持ちってこともあるぜ！」

この世界に来たときに俺の見た目は高校生くらいに変わっているため、どうやら俺は高校生たちに好意的な解釈をしてもらえたようだ。

スウエット姿の俺を見ながら、異世界召喚ものの物語に詳しそうな人たちが巻き込まれ召喚であると好意的な解釈をしてくれている。嬉しいものだ。

俺にとっても都合がいいので、俺はそのまま黙ってその場の展開を見守ることにする。

先程、王様が力強い言葉で話していた演説の中で、この世界で悪事を働く魔王を退治してもらうために勇者として彼らを召喚したと説明がされていた。そんな集団の中に、魔王である俺がまぎれ込んでしまっただか申し訳ないな。

また、王様がおこなった演説によると、勇者たちには最初に戦いの基本的なトレーニングを積んでもらったあとに、魔王に味方をしている周辺国家への攻撃が依頼されることになることだ。

俺たちへの意思確認は、まったく無しである。完全に俺たちは、侵攻の道具にされていた。

ちなみに、周辺国家が魔王に味方をしているというのは、国土内にダンジョンが存在することを黙認して、そのダンジョンから生まれる利益をそれぞれの国が享受しているという状態を指すらしい。

つまり、この国の王様は、これから勇者を利用して他国からダンジョンを奪い取り、ダンジョン産の資源を自分だけが支配するつもりなのだろう。強欲なことである。

ここで無能を演じて退場をしてもいいが、せっかくだし、もう少しだけこの集団の中にまぎれ込んでみることにしよう。

「さて、選ばれた君たちには、これからステータス鑑定の儀を受けてもらおう！」

俺がそんなことを考えていると、赤い豪華なマントをひるがえしながら偉そうな王様

が俺たちに向かって次の指示を出す。

さて、これから俺たちには、ステータス鑑定がおこなわれるようだ。

ステータス鑑定をおこなうことで、勇者たちの道具としての利用価値を測るつもりなのだろう。

（周りの勇者たちのステータスを見ながら、自分のステータスを偽造しましてと……）

俺はこのまま勇者たちの集団にまぎれ込むために、鑑定スキルを使い周囲の勇者たちのステータスに合わせながら、自分のステータスをスキルで偽造していくのであった。

ステータス鑑定の儀

(ここ)が、ステータス鑑定の儀がおこなわれる場所か……)

俺たちが案内されたのは、やたらと爆乳が強調された美しい女神像が中央に設置された一室であった。そして、そんな女神像の目の前に置かれた台座の上に、手のひら大の水晶玉が置かれているという内装の部屋である。

どうやら、女神像の前に置いてあるあの水晶玉に触れることで、水晶玉に触れた者のステータスが周囲に公開されるという仕組みらしい。それを、この国ではステータス鑑定の儀と呼んでいるようだ。

高校生勇者たちを召喚したのはガスター帝国という軍事国家で、周辺国に侵攻をしてはすぐに領土を増やそうと計画する好戦的な国であった。

ああやって、わかりやすく女神像を水晶玉の目の前に飾ることで、高校生勇者たちに自分たちが正義の側だとガスター帝国は印象付けようとしているようだが、この異世界召喚は女神とは関係のないところでおこなわれているというのが実にセコいことである。

そして、高校生の一人が恐る恐るといった様子で水晶玉に触れると、異世界の文字で彼女のステータスと所持スキルがその場に公開されていく。

こうして、高校生勇者たちへの、ステータス鑑定の儀が開始されるのであった。

レイナ・ササキ

所持スキル

瞬天の居合

異世界言語 アイテムボックス

(ふーん。ああいう風に、鑑定の儀がおこなわれていくのか……)

そのまま、俺は順次おこなわれていくステータス鑑定の儀の様子を観察しながら、おとなしく自分の順番を待つことになる。

その後、しばらくの時間をかけて、高校生たち全員へのステータス鑑定がおこなわれていくことになった。

……

……

……

そして時間が経ち、俺たち勇者の集団は、歓迎パーティーと名付けられた立食会へと招待されていた。

豪華なパーティールームのいたるところに、豪勢な食事が所せましと並べられている。その中で高校生勇者たちは自由に会話をしながら、異世界の豪華な食事に舌つづみ

をうっていた。

ちなみに、この立食会は勇者たちを歓迎するためのものと一応称されているが、その実態は国の貴族たちによる勇者の利用価値を値踏みする場であるようだ。

勇者歓迎会に参加している貴族たちがさつそく、召喚された高校生勇者たちを自らの派閥に取り込もうと胡散臭い笑顔で声をかけていた。

パーティー会場のいたるところでは、お金や名誉、性欲をちらつかせて、貴族たちがまだ若くて世間を知らない勇者たちを自分たちにとって都合のいいように手懐けようとしている場面がいくつも見受けられる。

でも、俺に声をかけてくる貴族は誰もいない。だから安心して、俺は食事に専念することができる。

その理由は、ステータスの儀によって、俺がDランク勇者として認定されたためだ。

ステータス鑑定の結果、俺たち高校生勇者はスキルの有用性に応じて帝国側から一方的なランク分けがされていた。

高校生勇者たちの中で、メチャクチャに強いスキルを持つ最高のSランクに認定されたのが1名。次点である、強力なスキルを持つとAランクに認定されたのが5名。そして、有用で強いスキルを持つBランクと認定されたのが30名という内訳だ。

そしてCランクを飛ばして、高校生勇者たちの中で唯一の最低なDランクに認定された者が1名。そう、俺である。

魔法剣という無難なスキルを所持しているとステータスを偽造してみたのだが、魔法剣など使える人間はありふれていると伝えられた後に、俺は最低ランクのDランク勇者として帝国側から任命されることになってしまった。

ただ、召喚された勇者は、時間停止機能付きのアイテムボックスを各自が所持しているので、俺は便利なパシリとして扱われるために、一応Dランク勇者としてこの国にキープされているというわけだ。

「おーい！Dランク君が、堂々とパーティーに参加してて恥ずかしくないのかよ！」

そして、帝国側からランク分けがおこわれたということは、それをいいことに他の人を見下す奴が現れるということでもある。

Dランク勇者である俺を見下しながら声をかけてきたのは、Aランクの勇者と認定された5人組の男子グループ。彼らは茶髪や金髪をしていて、紺色の学生服の下に赤色や青色のTシャツを着ている派手な男の子たちだ。

「巻き込まれ召喚をされて、Dランクとはかわいそうに……」

他の高校生勇者たちは、唯一Dランクとして認定された俺を哀れみの目でそつと見つめていた。しかし、今は異世界に突然召喚されてしまった自分たちのことで精一杯で、俺のことを気にかける余裕がないといった感じである。

まあ、異世界に来て突然チート能力を手に入れてしまった者たちの中には、暴力に

よって安易に他人を支配したいという欲求に流されてしまう者もでてくるということだろう。

こうして、普段から暴力によって他人をコントロールするクセを持つてしまっていた不良たちにとって、異世界に来て手に入れたチート能力はまさに鬼に金棒といった感覚なのだろうと想像に難くない。

「なんか言えよ！Dランク君！」

そんなことを考えている俺をヘラヘラと笑いながら、Aランク勇者に認定された5人の男の子たちが執拗に見下してくる。

まあ、俺自身としては女の子と会話をする以外のできごとなどどうでもいいので、彼らからの評価を気にすることなく、そのまま食事が続けていくことになるのであるが。

「おい、こいつ、ビビって何も言えなくなっちゃってるよ！あはは！」

しかし、俺が気にせず食事を続けていることに気を悪くしたのか、しつこく俺に絡み続けていた不良たちがついには虚栄を張り始めてしまった。

女の子相手だったらいくらでも応用が効くのに、こういう男の子相手に俺はどうしたらいいのかまったくわからない。難儀なことである。

さすがにしつこすぎるので、周りの人間たちが彼らをゴミを見るような目で見始めているのであるが、男の子たちはまだそのことに気がついていないようだ。

そのまま不良グループは周囲の様子に気づくことなく、得意げな顔で俺に向かって誹謗中傷を続けていった。

そして、そんな俺と男子グループを見かねて、1人の女の子が割り込んでくることになる。これには、本気で助かった。

「あんたたち！やめな！」

俺のことを助けに来てくれた女の子の名前を鑑定スキルで確認すると、レイナ・ササキという名前だということがわかった。

彼女は黒髪のショートカットにクールで気が強そうな瞳をしていて、一目でスポーツ少女なのだと思われる活発そうな見た目をしている女の子だ。それと同時に、利発そうな女の子でもある。

いわゆる、文武両道の理知的クール系ボーイッシュ少女という感じだった。

さらに、これは最も重要なことなのだが、レイナちゃんは着ている制服の上からでもわかるぐらいに、メチャクチャにエロい爆乳をその胸にぶらさげている。

そんな爆乳ボーイッシュな女の子が、俺を見下す男子グループに厳しい目つきで注意をうながしてくれているのだ。最高のご褒美である。

「お前、Sランクに選ばれたからって、調子に乗るなよ？俺たちのほうが、クラスのカーストでは上なんだからな！」

そんな彼女に向かって、男子グループの一人が偉ぶりながら自分たちの意見を主張し始めた。そう。実は彼らに注意をうながしているレイナちゃんが、帝国によってSランク勇者に選ばれた唯一の一人なのだ。

先程から勇者ランクによって俺を見下している彼らにとって、自分よりランクの高い人物に注意をされるといふ行為は、さぞかしバツの悪いことなのだろう。彼らの身にまとう態度から、勢いが一気になくなっていくのがわかる。

ついには苦しまぎれに謎のランク制度を持ち出す男の子たちに向かって、レイナちゃんがすぐさま大きな声で反論をすることになった。

「そのわけわかんないカーストって、あんたたちが勝手に決めた順番だろ？そんなのどうでもいいし、私には関係ないんだけど。そんなことよりも、あんたたち、みんなに笑われてるよ?」

爆乳少女のレイナちゃんが男の子たちに向かってさらに注意をうながすと、迷惑そう

な視線を向ける周囲の様子に気がついたのか、彼らは気まずそうな顔を始めてしまう。これは勝負あつたようだ。

「あーあ。世の中の仕組みを理解できない、頭の悪い女がしやしやり出てきてつまんねー」

レイナちゃんの反論を聞いて少しだけ時間が空いたあとに、めんどくさそうな態度で捨てゼリフを吐いた男子グループがその場を去っていった。どうやら、トラブルが無事に解決したようだ。

これで、俺は異世界の食事に集中することができる。こちらの世界に来てからも俺はスキルをつかってニホンの食事ばかり食べていたため、こうして異世界の貴族が食べるような豪華な食事を口にする機会というのは実は貴重な経験なのだ。

でも、その前に、俺を助けてくれた女の子にお礼をしよう。

「助かったよ。ありがとう」

「なにかあつたら私を呼んでくれれば、いつでも駆けつけるからね！」

俺が伝えた感謝の言葉を受けたレイナちゃんが、男勝りな声で俺に助け舟を出してくれる。彼女の理知的でボーイッシュな見た目とその様子から、レイナちゃんは面倒見のいい姉御肌な女の子なのだということが察せられた。まさに、素晴らしき出会いである。

そうして俺に声をかけるとすぐに、なんでもないような態度に変わった彼女が食事を続けるためにその場を離れていく。名残惜しいが、ひとまずは俺も食事に専念することにしよう。

「異世界召喚にまぎれ込んでみて、よかった……」

俺から離れていくレイナちゃんの背中を見送りながら、俺はそんなことをポツリとつぶやいた。

男の子たちに強い口調で反論したときにぶるんと揺れた、レイナちゃんの爆乳が最高だったな。ぜひ、揉んでみたいものだ。

俺はそんなことを考えながらも、今日のお礼に、彼女の身に何かあったときにはいつでも助けに向かうことを決意するのであった。

異世界召喚された次の日

豪華な食事会も終わった次の日、俺は王城内の端っこに用意された粗末な小屋の中で目を覚ます。俺以外の高校生勇者たちは、勇者専用にと王城内に作られた豪華な宿泊施設にそれぞれが宿泊をしていた。

Dランク勇者の俺だけが、他の勇者たちと違って住居を隔離されたというわけだ。

俺に与えられたのは建物は、昔、何かの用に作られてそのまま放置された用途不明の小屋だと一応説明を受けたが、それ以外のことはよくわからない。

また、食事会のあとに、高校生勇者たちには身の回りの世話をしてくれる美人メイドやイケメン執事がそれぞれに割り当てられることにもなった。文字通り、何でも言うことを聞いてくれるという特別なオプシヨン付きの従者だ。

多分、高校生勇者への監視や懐柔の目的が込められているんだろうけど、まだそういったことに気が回らない高校生たちは、自分たちに与えられた特別な権利に狂喜乱舞をできてしまっていた。

昨日の夜に、童貞や処女を捨てた人たちが大勢いるんだろうなと、俺はそんなことを思う。

ちなみに、勇者たちの中で俺にだけメイドさんが割り当てられていない。だから、これからはDランクである俺だけが自分の服は自分で洗濯をしたり、自分の食事を自分で用意をするようにと注意を受けてもいた。

こうして、俺だけを勇者の中で見せしめとして差別することで、帝国側は他の高校生勇者を言いなりにする脅しの道具として利用するつもりなのだろう。

帝国が与える試験に合格しないと、お前たちもDランクみたいに差別されるぞと間接的に勇者たちを脅しているというわけだ。

豪華な食事の豪華な部屋。そして何でも言うことを聞いてくれる見目麗しい異性の従者という存在に執着させることで、帝国側は高校生勇者たちを思い通りにコントロールしようとしていた。

まあ、俺にとっては自分だけが隔離されているこの状況のほうが、都合が良いので快適なのだが。

監視役のメイドすらが、俺の側にはいないというのが楽でいい。今の俺は帝国側にとつて監視する意味もないし、今すぐになくなくなっても困らないどうでもいい存在になつていた。

怪しいことをしていなければ特になにも気に止めれないし、自由にすることもできる。Dランクの落ちこぼれという立場は、俺にとって最高に都合がいい立場のようだ。

俺に割り当てられた粗末な小屋の内装はすでに、スキルによつて住心地よく改造しきつている。粗末なのは、カモフラージュのための外装だけだ。監視役が存在しないというシチュエーションでなくては、できない行動である。

「さてと、行きますか」

特別な食事メニューが用意されている勇者たちとは違い、自分で用意した昼食を食べ終えた俺は、帝国に指定された訓練場へと向かうことにする。

今日は、ガスター帝国による勇者たちへの訓練が開始される初日であった。

訓練開始は昼過ぎ。理由は、夜の時間は帝国側が勇者たちを性欲によって懐柔する時間として使うためだ。

訓練の時間が早朝からだったら、勇者たちが安心して巨乳メイドさんやイケメン執事とセックスをすることができなくなってしまうからな。

帝国から受ける訓練はお昼すぎからという、なんともゆるゆるなスケジュールが俺たちには与えられていた。

だから高校生勇者たちは、安心して夜遅くまで帝国側が用意した異性とするセックスを楽しむというというわけだ。

こうしてズブズブと、帝国側に勇者たちが懐柔されていく構造が作り上げられていた。

「なあ、俺たち、付き合わないか？」

粗末な小屋を出て王城内に用意された訓練場へと向かう途中に、ひと気のない建物の影で俺は誰かの話し声がすることに気づく。

どうやら誰かが、ここで愛の告白をしているようだ。

その様子が気になった俺は、こっそりと見つからないように告白の現場をのぞいてみることにする。いわゆる、野次馬根性というやつだ。

「気持ち嬉しいけどさ、あんだとは、付き合えないよ……」

ワクワクとしながら、俺がそつと見つからないように愛の告白の様子をうかがうと、ひと気のない城内の一端で告白をされていたのはレイナちゃんだということを知る。

さらに、レイナちゃんに告白をしていたのは、先日の食事会で俺に絡んできていた男子グループのリーダーらしき男であった。

しかし、会話の様子から見ると、レイナちゃんに告白をした男の子は残念なことに告白を断られてしまっているようだ。

「なんでだよ？普通付き合うなら、俺たちみたいなランクが高い者同士が付き合うもの
だろ？それを断るなんて、やっぱりお前、おかしいよ」

「この前の食事会みたいなさ、ああいうことするやつとは私、付き合えない……」

「なんだよそれ、意味わかんね……」

告白を断られてもめげずに不良グループのリーダーが追いつがるが、彼はそれすらもあつけなくレイナちゃんによって拒絶されてしまう。

不良グループのリーダーによる告白は、完全に玉砕してしまっていた。

「じゃあさ、思い出に一回だけやらせてくれよ！」

「だからさ、あんたのそういうところが、私はダメなんだって……」

告白を断られてもめげずに男の子はアプローチを続けるが、レイナちゃんは歯牙にもかけていない様子だ。

それにしても、帝国から勇者たちに与えられたトレーニングウェア姿のレイナちゃんがめちやくちやにエロかわいいな。

男子生徒にしつこく告白されながら気まずそうに断りの言葉を伝えるレイナちゃん
の姿を見て、俺はそんなことを思う。

彼女が着ているジャージのようなデザインの服の上からでもわかるくらいに、レイナちゃんの胸元にはやわらかそうな爆乳が見事にパツンとふくらんでいた。そしてその爆乳のふくらみが、彼女が着ているジャージのお腹のあたりに作るシワの様子も素晴らしくエロいのだ。

さらにはレイナちゃんの大きなお尻も、ムッチリとふくらむことで彼女がはいっているジャージを素晴らしく破壊力のあるエロい物質へと変形させてしまっているではないか。

レイナちゃんが着ている柔軟な服の生地が、彼女のおっぱいやお尻の形にふつくとふくらんでるといった様子だけでまさに絶景なのである。彼女の裸は、いったいどれくらいエロいのだろう。俺は、そのことが気になってしかたがない。

だって、スポーツによって麗しく引き締められたレイナちゃんの女体が、張りのある爆乳と巨尻によってピンと上向きに盛り上がりながら美の主張を続けているのだ。

う。そんな彼女の立ち姿を見ているだけでも、大抵の男子は股間を固くしてしまうだろう。

レイナちゃんにしつこく告白をしている男の子も、こころなしか姿勢が前かがみになってしまっているのがうかがえてしまうものな。

「もうすぐ訓練の時間だから、私、行くよ……」

「ふざけんなよ……意味わかんねー……」

そして俺がそんなこと考えていると、レイナちゃんからその場を離れるという形で男の子による告白が失敗に終わることになる。残念だけど、レイナちゃんの女体観察はこれで終わりのようだ。

彼女がその場を去ったあとも、不良グループのリーダーは自分が告白を断られた理由が見当もつかないといった様子でその場に立ちすくんでしまっていた。まあ、頑張れよ。俺は心の中で、彼に激励の言葉を伝えることにする。

(さて、俺も訓練場に向かうとするか)

しかし、俺には、男だけになってしまった場面をこれ以上のぞき見するような趣味はない。

悔しそうな顔でブツブツと独り言をつぶやいている男の子を気にすることなく、俺も訓練場に向かうためにその場をあとにする。

俺はレイナちゃんのジャージ姿を見てムラムラとしてしまった気持ちを切り替える
と、帝国に指定された集合場所へと向かうのであった。

訓練開始

勇者たちが基本的な訓練をする場所は、他国への情報流出を防ぐために王城内に用意されていた。

俺が指定された集合場所に向かうと、平らに均された地面の周りを石壁で囲まれた高校のグラウンドくらいの広さの場所にたどり着く。どうやらここが、俺たちに帝国側から戦闘訓練を施される場所のようだ。

戦闘訓練の初日である今日は、俺たちに対して剣の修行が課されることとなっていた。基本的な自衛のために、近接戦闘は必須だからだ。

その後は、勇者たちの所有スキルによって、各々が受けたい修行を受けるようカリキュラムが組まれている。まるで、学校の授業のようだ。

「全員揃ったな。それでは、基本的な近接戦闘の修業に入る！」

今回、俺たち高校生勇者に剣の稽古をつけてくれるのは、鉄のマーシヤと恐れられる女剣士。

彼女は帝国内において剣聖と呼ばれる達人で、帝国軍で少将を務めてもいる。

マーシヤさんは単純な戦闘力では、帝国最強とも呼ばれるほどの存在だ。戦場で彼女に出会おうと、生きて帰ることができない。戦場でそういった伝説が残るほどに、剣聖マーシヤは強い。

魔力が存在することによって1対多数でも戦闘において圧倒できてしまうこの世界では、出撃した最高戦力同士の戦闘で戦況が激変することがままある。

そんな戦場において、鉄のマーシヤは常勝無敗のエースオブエースとして周辺国家から非常に恐れられていた。

そんな帝国の最高戦力を俺たちのために持ち出してくるのを見ると、ガスター帝国の本気具合がうかがえるようだ。

「うわっ！めっちゃエロ！」

「あの人も、メイドみたいに頼めばやらせてくれるのかな？」

俺たちに稽古をつけてくれるマーシャさんの姿を見て、不良グループたちがヒソヒソと内緒話を始めている。

彼女は前線に出撃し続け、叩き上げで少将まで上り詰めたバチバチの武闘派だ。そんなマーシャさんに向かって気軽にやらせてくれなんて言ったら、ぶっ飛ばされるどころじゃすまないが大丈夫か？

不良たちの内緒話を盗み聞きしながら、俺はそんなことを思う。しかし、不良たちの内緒話にうなずけるくらいに、マーシャさんの体つきはめっちゃくちゃにエロかった。

教官として俺たちの前に立っているマーシャさんは落ち着いた赤い髪に白く透き通った美しい肌をしていて、力強く凛と澄んだ黄色い瞳で俺たちをジッと見つめている。

そしてスラツとして均整が取れた彼女の美しい肉体の胸元には、マーシャさんが身につけている軽鎧の上からでもわかるくらいに大きな爆乳がムツチリとふくらんでいるのだ。推定、Hカップほどだろう。その光景が、すさまじくエロい。

そんな彼女が凛々しくみんなの前に立つ姿を見て、不良グループが「美人だ」「ヤリたい」と小声で語り合ってしまう気持ちもわかる。

そして不良たちの話し声は実はマーシャさんにまで聞こえるくらいに大きいのだが、彼女は微動だにせずに厳しい目つきで俺たちを見つめ続けていた。生意気な新兵の扱いななど、彼女にとってはお手のものということなのだろう。

ああいった冷静沈着な立ち姿から、マーシャさんは鉄の女と称されるようになったのだと推測される。

いつも冷静沈着で、死の危険が迫る戦場においても合理的な判断を華麗に下す。常勝將軍マーシヤの名は、伊達ではなかった。

「これより、訓練を開始する！」

そしてマーシヤさんによる、剣の稽古が開始されることとなる。訓練が初日である今日は基本的な剣の素振りをしたあとに、今後の訓練メニューを考えるために彼女が各々の実力を知りたいと、勇者同士が二人一組で模擬戦をすることになった。

「Dランク君は、俺たちと組もうぜ！」

二人一組での模擬戦と聞いて、不良グループが俺にまた絡んでこようとす。どうやら俺は、完全に彼らのターゲットとなってしまうらしい。

しかし、そんな俺を見かねて、レイナちゃんが一緒に模擬戦を組もうと声をかけてきてくれたもいた。

「ユーリは、私と組もうよ」

不良グループかレイナちゃん。どちらと組むか、そんなの悩む必要ない。俺はジャージ服姿の上からでもわかるレイナちゃんのIカップ爆乳を視界の端で楽しみながら、一瞬で彼女と模擬戦を組む事に決める。

これで、剣を振るときにぶるんぶるんと揺れる、レイナちゃんの爆乳が拝み放題ということだ。

「いや、ちょっと待て」

しかし、俺に声をかけてくれるレイナちゃんに向かって、マーシャさんが待ったをかける。これは、なにごとだろう。

「レイナは模擬戦禁止だ。君の素振りを見せてもらったが、君は強すぎて他の者から自信を奪ってしまうとこちらで判断した。レイナは、今まで剣の経験があるのか？」

「はい……実家が居合の道場をしていて……」

マーシヤさんの質問に、レイナちゃんが困ったような顔で正直に答えていた。どうやらレイナちゃんは、一人だけ実力が違いすぎて模擬戦禁止をマーシヤさんに言い渡されてしまったようだ。

その結果、あまり物になった俺は不良グループのリーダーと模擬戦を組むことになる。

「うわー」

「Dランク君、弱わっちー」

その後、俺は不良グループのリーダーとの模擬戦に、わざと負けまくっていた。

Dランク勇者という自由な立場が気に入ってしまった俺は、これからもモブキャラに

専念するために、模擬戦にわざと負けまくることにしたのだ。

モブキャラとして活躍するためには、こういう演技は欠かせないからな。ギリギリのところまで剣を交わし、すかさずに吹っ飛ぶ。豪快さが肝だ。

しかし、わざとらしくてはならない。それでは、彼らに不評を買ってしまう。不良グループの強さを引き立てるための雑魚モブムーブにも、困難な極意があった。

モブキャラとして活躍するのも、一流の技術が必要。その経験が、なかなか新鮮で刺激的である。

そして、そのまま不良グループのリーダーは、模擬戦の決着がつかないようにわざと攻撃を外しながら、俺をいたぶるようにして剣による攻撃を続けてくるのであった。

「貴様らー！ふぬけすぎだ！」

そのあと、しばらくすると、模擬戦をダラダラと引き伸ばしながら俺をいじめている

姿に見かねたのか、マーシャさんが不良グループのリーダーに対して訓練場内の走り込みを命じることになる。これで、俺はかわいそうなモブキャラとして高校生勇者たちに認知されたことだろう。

「周りで、汚い野次を飛ばしていたお前たちもだ。走れ！」

さらには、模擬戦の周りで俺に対して汚い野次を飛ばしていた不良グループのメンバーも、連帯責任として同じく走り込みを命じられることになってしまう。

そうして、体育教師に怒られた生徒みたいな空気の中で、不良グループがしぶしぶとランニングを始めていくことになった。

「大丈夫？」

「いてて……これくらい、平気さー！」

不良グループがその場から離れていくと、地面に座り込んで引き立て役のモブキャラ

を演じ続ける俺に向かって、レイナちゃんが心配そうに声をかけてくれる。

俺は地面に座り込んだ体勢のまま、俺を心配そうに見下ろすレイナちゃんの胸にふくらむ二つの爆乳を何食わぬ顔で見上げて楽しんでいた。

これが、モブの役得である。最高だぜ。

「ユーリ！貴様もふぬけているぞ！お前は、居残りだ！」

しかし残念なことに、不良グループにいじめられていた俺は一人だけ、マーシャさんに居残りの稽古を命じられてしまうことになった。これは、モブキャラを演じすぎたのかもかもしれない。これではモブでなく、まるで成り上がり系の主人公だ。

そんなことを考えながら今後の改善点を探す俺を尻目に、高校生勇者たちによる模擬戦は続いていくのであった。

「Dランク君！お先に失礼しまーす！」

そして、初日の稽古も終わり、城内にある宿泊先の部屋に帰る生徒たちを見送りながら、俺は一人だけ居残り稽古を続けることになる。

訓練場に一人だけ居残りしている俺に向かって、不良グループが茶化しながら部屋へと帰っていった。

「やっぱり、私も居残り稽古に参加するよ……」

レイナちゃんが一人だけ居残りを命じられた俺のことを心配して一緒に参加すると言ってくれるが、俺が身振りで彼女に向かって大丈夫だと伝えると、後ろ髪を引かれながらもレイナちゃんは宿泊先に戻っていく。

そして稽古場に誰もいなくなると、マーシャさんが俺に向かってやさしく語り始めた。

「今日、お前をいたぶっていた、あいつらを見返したくはないか？大丈夫。私が、お前に

力を貸してやる」

どうやらマーシャさんは、模擬戦の中で不良グループにいじめられていた俺を強くして助けようと、居残り稽古を命じてくれたようである。

鉄の女と言われるくらいに厳しくも冷徹な態度をしているが、マーシャさんは心の底では慈愛にあふれるやさしい女性のようなのだ。一对一の状況で彼女が俺に見せる雰囲気から、俺はそんなことを思う。

「私が直に稽古をつけてやるんだ。お前は強くなれるさ」

さらには、素振りや模擬戦を見るだけであつた全体練習と違って、居残り練習では剣聖と呼ばれる彼女が直々に俺への稽古をつけてくれるようだ。これは、たいへん光栄なことである。

「最初は誰だつて弱いものだ。これから強くなればいい。実はな、いくら強くても、心が弱いやつはすぐに戦場で死んでいくんだ。ユーリはこれを心を強くする機会だと捉え

て、心を鍛えなさい。最初に心を鍛えたやつが、最後は一番強くなる。本当さ」

そして俺に剣の稽古をつけてくれながら、この世界で剣聖と呼ばれるくらいに達人なマーシャさんが俺を元気づけてくれることになった。

この、心が温まる居残り稽古は、しばらくの時間続いていくことになる。

しかし、居残り稽古が終わりを迎える頃になると、俺にとって今後の行動に影響を及ぼす、重大な転機がおとずることになった。これはもはや、事件と呼んでいいのかもしれない。

「そうだ。せっかくだし、この稽古にご褒美を用意することにしよう。もし、ユーリが模擬戦で私に一撃でも触れることができたら、何でも言うことを聞いてやるぞ？」

「え、何でもですか？」

そう。居残り稽古も一段落し、日が落ち始めた稽古場で、マーシャさんが俺にイタズ

ラを思いついたような表情でとある提案をしてきたのだ。

その内容は、今日の居残り稽古の締めくくりであるマーシャさんとの模擬戦の中で、彼女に一撃でも触れることができれば、俺にご褒美をくれるというものであった。

「年ごろの男の子には、そういったご褒美がある方がやる気が出るだろうか？」

剣聖と呼ばれる自分が、自分より一回りも年下である若者の、それも剣の素人に模擬戦で遅れを取るわけがない。そういった余裕を感じさせる態度で、マーシャさんが念を押すように尋ねる俺の質問に答えを返してくれる。

これは、本気を出さざるを得ないだろう。

マーシャさんから「何でも言うことをきく」というご褒美を提示された途端に、俺の体の中には、血がたぎるような熱とやる気が次々とみなぎり始めていた。

この国ではモブに専念しようとしていた俺ではあるが、こんなにも魅力的な目先の報

酬に釣られないわけがない。

「マーシャさん。本当に、何でもしてくれるんですよね？」

「ああ。なんでも一つだけ、ユーリの言うことを聞いてやるさ。剣聖と呼ばれる私に、今からする模擬戦でお前が一撃でも触れられたらの話だな」

居残り訓練に対する俺のやる気は、まさに最高潮に達することになる。これは、早く模擬戦がしたくてたまらない。

「どうやら、やる気が出たみたいだな」

「はい！やる気ができました！」

ご褒美を提示されたとたん、急にやる気マンマンに変わった俺の態度を見て、マーシャさんが苦笑いをしてしまっている。そんな空気の中、俺とマーシャさんによる模擬戦が始まることになった。

「マーシャさん、いきますー！」

そして、俺が今日の居残り稽古を締めくくる模擬戦のために剣を構えると、俺のやる気を受け取ったのか、マーシャさんが強くうなずきながら俺に向かって剣を構え返す。

すると、先程までの和やかな空気から一変、研ぎ澄まされた緊張感があたり一面に広がることになった。

あたり一面に広がり続けて次第に濃くなっていく、この緊張感に触れているだけでも自分の皮膚が切り裂かれてしまうと錯覚するくらいに、剣を握ったマーシャさんが放つ空気は鋭い。その様子から、彼女の持つ剣の実力は相当に高いということが推し量れた。

「よし！ユーリ、かかってこい！」

「はい！よろしくお願ひします！」

マーシャさんが大声で、俺に向かって擬戦開始の合図を送る。

俺は彼女が放つその声を機に剣を振りかぶると、勢いよく彼女に向かって走り出した。

「てやっ!」

「——えっ?!」

こうして俺とマーシャさんによる、強くなつて不良たちを見返すための厳しい居残り稽古の日々が始まったのである。

マーシャさんと食事♡

「まったく、私はまだ二十代だぞ。それを男どもはアラサーなどと。けしからん……」

今のマーシャさんは俺が宿泊している小屋の中で、ワインを飲みながらくだを巻いている。

俺は彼女の体に剣で触れたご褒美として、マーシャさんを食事へと招待させてもらっていた。そして俺が用意した食事を、彼女にふるまったというわけだ。

まさか自分が一回りも年下の若者に剣で負けると思ってもいなかった彼女は、その悔しさをまぎらわせるかのように食後のワインを大量に飲み干しまっていた。

（さて、そろそろいいかな……）

食事もひと心地ついた頃合いになると、俺は機会を見てマーシャさんに近寄り、椅子に座る彼女の体を後ろから抱きしめながらマーシャさんのくちびるを奪い濃密なキスを始める。

突然のできごとに混乱しながらも、今までの俺の口ぶりから食事のみで終わると油断していたマーシャさんは、驚き目を見開いて俺にくちびるを奪われてしまっていた。

……くちゅ♡……くちゅ♡

「……ま、まて♡……なんでも言うことを聞くといったが♡……これはあ♡」

俺とした気持ちいいキスによって声をとろんとフニヤかしながら、マーシャさんが慌てた様子で抵抗の意思を伝えてくる。

しかし俺はそんな彼女の言葉を無視すると、先程まで飲んでいたワインの香りがするマーシャさんの口内を舌を使って念入りにすみずみまでねつとりと蹂躪することにした。

俺の舌に口内を気持ちよくネロネロと刺激されるたびに、マーシャさんの体から力が抜けていくのがわかる。

俺は後ろから抱きしめる彼女の体が快楽によつてクニヤリと脱力していくのを両腕に感じながら、シンと静まり返ってしまった部屋の中で彼女のくちびるに濃密なキスを繰り返していった。

「……………ねえ♡……………初めてだから♡」

そしてついに観念したのか、マーシャさんが俺とキスをしながら小さな声で恥ずかしそうにポツリとつぶやく。

俺は椅子に座った体勢のまま恥ずかしそうに顔をそらしてしまった彼女の体を抱きかかえると、お姫様抱っこで彼女をベッドまで運ぶことにした。

「……………なあ……………ユーリ……………本当に……………私とするのか？」

「はい。なんでも言うことを聞いてくれるって、いいましたよね」

「…い、言うには言ったが……ひゃあん♡……っ♡」

俺がベッドの上に仰向けに寝かせた彼女の衣服を脱がせると、ぷるんと大きくて張りのある爆乳が俺の目の前にあらわになる。

彼女が身につけていたブラジャーのホックを外したときに、重力によってブルンと揺れた大きい質感の乳房が最高にエロかった。

さらには仰向けに寝た体勢なのに、彼女の鍛え上げられた肉体によってスライムみたいにふるふるな美しい形状を保っている爆乳が、やわらかそうな質感のままですんとは向きの姿勢を維持しているのが俺の目に入ってくる。これは、たまらない。

そんな美しく艶やかな裸体を俺にさらしながら、マーシャさんが俺の意思を確認するようにベッドの上でオドオドと俺に質問をしてきていた。

「…………わ、わたしみたいなの…………年増でいいのか？」

「でも、さつきまでマーシャさんは、軍の男どもは誰も私を女の子扱いしてくれないって怒ってましたよね？」

「…………あんっ♡…………だからっつ♡…………あっ♡…………おっばい♡…………さわるなあ♡…………あっ♡…………んっ♡」

訓練場で見せていた凛々しい女軍人の姿とは違って、今は完全に女の顔になってしまったマーシャさんの裸体を、俺は堪能するようにゆっくりと愛撫する。

…………モニユ♡…………モニユ♡

「…………んふうううう♡…………っ♡…………っ♡…………っ♡」

俺がマーシャさんのモチモチと張りのある爆乳をムニユムニユと両手で揉み始める

と、艶やかな声で彼女は恥ずかしそうに声を上げた。

幼い頃からずっと剣に打ち込んできたマーシャさんは誰よりも強くなりすぎてしま
い、その結果、今まで誰とも男性経験をするこなく生きてきたらしい。

俺は、生まれて初めて異性におっぱいを触られるという経験に気持ちよさそうな声を
あげ始めたマーシャさんの様子を見ながら、彼女の体に丁寧な愛撫を続けていった。

「……………ユーリ♡……………そ、そこはあ♡」

おっぱいや背中、おへそ周りなどへの丹念な愛撫により、さらに全身から脱力し始め
てしまったマーシャさんの秘部へと、ついに俺は手を伸ばし始める。

先程まで硬く尖った乳首の先をコリコリと気持ちよくこねていた俺の右手が、今度は
肋骨をなでながらスベスベのお腹をゆったりと通り、すでに俺によつて下着を脱がされ
てしまった彼女の下半身へと伸びると、マーシャさんは躊躇したような声をあげてしま
う。

もちろん、俺は彼女にためらうような隙を作ることなく、彼女の硬くチクチクとした陰毛をひとなでするとすぐに、マーシャさんの陰唇に向かって縦方向にいやらしく指をはわせていった。

人差し指と中指の二本の指を使って彼女の股間にある割れ目を開くようにしてゆつくりと時計回りになで回すと、俺との前戯によってマーシャさんの膣口から漏れ出てきた透明な愛液がヌルヌルと生温かい感触で彼女の陰唇全体に広がっていく。

そのままあつというまに、彼女のプニプニした陰唇のビラビラまでもがネットネットした愛液によってべつとりと透明に濡れてまみれていった。

すでにマーシャさんのおまんこは、今までの性感とこれからおこなわれる秘め事への期待によって、ムワリと妖しく淫らな湿気を帯び始めているようだ。

「——まってまってえええ♡——そこはあ♡——乙女の大切なところだからあ♡」

俺の指によつて無遠慮におまんこをなで回されながら、マーシャさんが羞恥に驚いたように声をあげている。しかし、依然として俺は彼女の心に抵抗する隙を与えることなく、そのままマーシャさんのおまんこを快楽によつて蹂躪していった。

コネ♡コネ♡コネ♡

「……ひ、ひぐううう♡——っ♡——っ♡」

ゾク♡ゾク♡ゾク♡

激しい性的興奮によつて硬く勃起してしまつた彼女のクリトリスを俺が丹念にこね回すと、マーシャさんの体が観念したように絶頂を迎えていく。

口では恥ずかしいと言いながらも、すでに俺から与えられる快楽によつて発情しきつてしまつた彼女の体は硬いなにかを求めようにベッドの上で両脚を大きく広げて、俺からの心地いい愛撫を受けやすいようにとおまんこを前面に差し出してしまつている。

少しずつマーシャさんの心から、快樂によつて自制心が消え始めていた。

……クチュ♡クチュ♡クチュ♡

「——っ♡——っ♡——あっ♡」

クリトリスでイッたばかりのマーシャさんの、膣口に今度は俺の人差し指と中指をねじり込むようにしながらグネグネと彼女が心地いいようにおまんこを刺激していく。

ねっとりヌメってヒダヒダしているマーシャさんの膣肉の生温かい体温を指に感じつつ、俺は彼女のおまんこにねじ込んだ人差し指と中指をクイクイと一定のリズムで上向きに折り曲げていった。

「……はあ♡……はあ♡……はああああああ——あっ♡——あっ♡」

今までの人生で味わったことのない異性ととの性感の連続に、軍では冷徹な態度をいつも崩さないマーシャさんがベッドの上で仰向けの体勢になって股を開いたままの格好

でとろけたメスの声をあげている。

俺は強い快楽によってヒクヒクと彼女の膣の中が収縮し始めたのをおまんこをこね回す二本の指に感じながら、ついには興奮によってぶつくりと膨らんでしまったマーシャさんのGスポットを丹念に押し込んでいった。

「……なんなんらあ♡……これえ♡——あ♡っ♡——あ♡っ♡——あ♡っ♡……イクっ♡」

異性に初めてGスポットをいじくられたのであろうマーシャさんが、ベッドの上でその未知の気持ちいい感覚に戸惑いの声をあげながら、仰向けの体勢で股を開いたまま天井を見上げてイッた。

そのまましばらく彼女は蜜のように甘い絶頂の余韻にトロンと意識を濁し、はしたなく大股を開いた格好のままぼーっと天井を見上げ続けることになる。

俺によって休むことなく与えられた性的な快楽よって、すでに彼女の黄色くて凜々し

かった瞳がとろりと暗く欲望に濁り始めていた。

「……………はあ♡……………はあ♡……………っ♡……………っ♡」

そしてマーシャさんは、ぷるんと上向きに張った爆乳を仰向けの体勢で胸に大きなスライムのように揺らしながら、初めて味わったのであろう異性の指での連続絶頂に戸惑いと精神的満足の混じった吐息を漏らしている。

その彼女を観察するに全身の脱力具合から、相当に気持ちが悪かったのだらうと簡単に推測ができる様子であった。

……………くにゅ♡

「マーシャさん。きれいですよ」

「……………っ♡、っ♡あらあ♡……………年上を♡……………からかうなあ♡」

そのまま、俺が連続絶頂に意識を飛ばしているマーシャさんの隙をついて彼女の濡れてほぐれきつたおまんこに勃起したペニスをあてがうと、ベッドの上で仰向けになった体勢のまま俺を見上げる彼女が疑問をぶつけてくる。

今まで軍人として生きてきて、周りに女扱いきれたことがなかったのであろう彼女は、いきなり発生した俺とセックスする機会にとまどつてしまっているようだ。

「俺はマーシャさんのこと、女性として好きですよ」

「……はひい♡……そ、そんなにやことお♡」

俺の甘い言葉を聞いたマーシャさんが、慣れない状況についてパニックを起こしてグルグルと瞳を回してしまう。

俺は彼女の心に生まれたその隙に乗じて腰を前に押し込むと、マーシャさんの許可を得ることなく、そのまま切なそうに濡れた彼女のおまんこに向かって俺のチンポをねじ込んでいった。

……にゅううううううん♡

「……あんっ♡……はいっちや♡……たあ♡——っ♡——っ♡」

俺のチンポがおまんこに入り込んでしまったのが感覚でわかったマーシャさんが、後悔と快楽が混ざりあったような甘い声で言葉をつぶやく。

俺は彼女のその言葉を聞きながらさらに腰を押し込むと、マーシャさんの初物おまんこに奥までチンポをねじ込み続けていった。

——ぶちっ♡

(マーシャさんの処女、いただきます)

ヌルヌルとした感触で濡れていてヒダヒダする気持ちいい摩擦のあるマーシャさんの膣の中に俺のチンポをねじ込んでいくと、亀頭の先で膜のような何かを引きちぎった

のがわかった。彼女の処女膜が、俺のチンポで失われた感触だ。

これでマーシャさんは、俺のチンポで女になった。彼女は俺のチンポで、生まれて初めてのセックスを経験したのだ。

「…………教官なのに♡…………生徒と♡…………エッチ♡…………しちゃった♡」

自分が処女を失い、大人の女性へと変わってしまったこととそのあっけなさに、彼女があ然としながらポツリと言葉をつぶやいている。

俺はそんなマーシャさんの体にこれからセックスの気持ちよさをたっぷりと教え込むために、彼女の体に回復魔法をかけて破瓜の痛みを取り除くと、そのまま彼女のおまんこに向かってゆつくりとピストン運動を開始していった。

…………ぬふ♡…………ぬふ♡

「…………あつ♡…………はあああああつ♡…………あつ♡…………あつ♡…………あつ♡…………あつ♡」

自分のお腹の中を硬く勃起した異性のチンポでゴリゴリと気持ちよくこすられるという初めての経験に、マーシャさんがベッドの上で甘い声を上げながらがり狂っている。

彼女はベッドの上で仰向けの体勢のまま股を開いておまんこの中に俺のチンポをヌポヌポと連続で出し入れしながら、気持ちよさそうに上半身を捻って人生で初めて経験するセックスの快感を味わっていた。

……モニユ♡……モニユ♡

「……んふうううううう♡——っ♡——ああああああっ♡」

そんな彼女のキュウキュウとうごめく気持ちいいおまんこに腰を振りながらマーシャさんの両胸に揺れるモチモチな爆乳を俺の両手で鷲掴みにすると、彼女はさらなる性の快楽に上半身をのけぞらせながら股を開き続ける。

俺とのセックスに慣れてやわらかくほぐれ始めた彼女の初物おまんこは、すでによりよって大量に分泌された愛液によりベトベトに濡れきってしまった。

彼女の膣口からこぼれ落ちてきた透明な愛液が、俺と彼女がセックスを続けるベッドのシーツの上にヌルヌルする大きな水たまりを作り始めている。

「——ああああっ♡——ああああああっ♡——ああああああっ♡——イクううううっ♡」

ビクン♡ビクン♡

そして俺のチンポにおまんこの中を気持ちよくこねくり回されてしまったマーシャさんが、生まれて初めての中イキを経験することになった。

順調に彼女は、俺のチンポによってセックスの経験値を増やしている。

こうして人生で初めてセックスを経験したばかりの女の子の体にセックスの気持ちよさを教え込んでいくのは、男冥利に尽きる、まさに最高に興奮する瞬間であった。

俺とセックスを続けるマーシャさんの美しい肉体が、生まれて初めて経験するセックスの快樂によつてじつとりと汗をかきながら体温を上げてきている。

性的な熱によつて真つ赤に火照つた上半身を苦しそうにねじりながら、気持ちよさそうに股を開いたマーシャさんが甘くて桃色の吐息を心地よさそうに口からたつぷりと漏らしていた。

そして、初めての中イキと同時に俺のチンポを啜えこんでいた彼女の膣肉がきゅううと締まると、マーシャさんの上半身がビクンと大きく跳ねていく。

「——はああああああつ♡——っ♡——あつ♡——あつ♡」

ビクン♡ビクン♡

セックス中に味わう初めての絶頂にマーシャさんが気持ちよさそうな大声を出しながら、シーツを両手でぎゅううと握りしめて両脚を大きく開いていた。

彼女のその姿はまさに、まだ性に対して初々しい心を残す乙女である。

マーシャさんが深い絶頂によって気持ちよさそうに開いた両脚の先では、彼女の足の親指がオーガズム特有の反射によってピンとまっすぐに伸び切っていた。

さらには、膣の収縮運動によってお腹をヒクヒクとへこませたりふくらませたりしながら、マーシャさんの体が初めて味わう中イキの快楽を記憶していく。

それからしばらくの間、俺のチンポをおまんこに啜えた体勢のままマーシャさんの体は初めての膣内オーガズムに心地よくブルブルと震え続けるのであった。

「——あはあああつ♡——あつ♡——あつ♡——あああああつ♡」

……ズポ♡……ズポ♡

初めての中イキもおさまりセックスが再開されると、チンポの快楽に慣れ始めたマー

シャさんがついには気持ちよさそうに自ら腰を振り始めていく。

最初は俺とのセックスに対して恥ずかしがっていた彼女であるが、今まで性経験から遠のいていた分までの欲求不満を補うようにして、マーシャさんは俺とのセックスを貪るようにして腰を振り始めていた。

マーシャさんの心が性に流れ、墮落した瞬間である。

「マーシャさん。気持ちいいですか？」

「……ああっ♡……まさか生徒とセックスをするとは思わなかったが♡……これは♡……すごいな♡」

精神的な余裕を取り戻し始めたことでいつもの口調に戻ったマーシャさんが、ベッドの上で俺と腰を振りながら楽しそうに返答をしてくれる。

さきほどまでの性にうとい恥ずかしげな乙女の顔ではなく、今のマーシャさんは快樂

を楽しむ肉食獣の顔をしていた。

「……うふふ♡……ユーリの♡……チンポ♡……もつと♡……私のナカに♡……出し挿れしてくれ♡」

どうやら俺とのセックスによって、彼女が心の底に押し込めていた性欲が開花してしまったようだ。

そのまま俺たちは獣みたいに激しくお互いの下半身をこすりつけ合いながら、全身を貪るようにして性器で一つにつながっていくことになる。

お互いの性器を気持ちよくこすりつけ合うことで股間に感じる二人の陰毛が擦れ合う硬くてチクチクとした感触が、素晴らしく心地よくて最高の時間であった。

「マーシャさん、出しますよ」

「……うんっ♡……出して♡」

しばらくの時間、獣のように混じり合う肉感的なセックスを堪能したあとに、俺はマーシャさんのおまんこに人生で初めて精液の味を教えるために中出しをおこなう。

甲高いメスの声で中出しを懇願するマーシャさんのおまんこに向かって俺はチンポを奥までねじ込むと、彼女の子宮に向かって大量の精液をドクドクと放出していった。

ベッドの上に仰向けになって股を開いた体勢のまま動かず体内に俺の精液を飲み込み続けるマーシャさんのおまんこの中に、たつぷりと俺の精液が注ぎ込まれていくのが中出しを続ける俺のチンポに感じる粘液質で生温かい感触で理解できる。

……とぷ……とぷ……とぷ

「——ふくうううううううっ♡——っ♡——あ、っ♡」

俺のチンポによって中イキさせられまくったマーシャさんのおまんこに向かって精液をたつぷりと注ぎ込んでいくと、彼女は生まれて初めて味わう中出しの快楽に意識を

チカチカと飛ばしながら気持ちよさそうに絶頂を始めてしまう。

マーシャさんの全身に向かってメスとしての本能的な快楽と幸福がドロドロと濁流のように暴れながら駆け巡っているのが、俺からの中出しを受けて気持ちよさそうに開いた両脚をブルブルと震わす彼女の様子からわかった。

さらに本能的な快楽を生み出す精液を貪り求めるようにして、マーシャさんは正常位の体位で両脚をはしたなく左右に大きく広げながら中出しを受け入れていく。

俺からの膣内射精を体内に受け入れ続けている彼女は、今日の訓練で彼女が見せていた冷徹な軍人姿からは想像もつかないような甘いメスの声で、気持ちよさそうにより声をあげてしまっていた。

……にゅぽん♡

「……………あんっ♡……………っ♡……………っ♡」

俺が中出しを終えたおまんこからチンポを抜き取ると、どろりと白い精液がマーシャさんの膣の奥から大量にこぼれ落ちてくる。

それと同時に、体外にこぼれ落ちてしまった精液を名残惜しく求めるようにして、彼女の膣口がヒクヒクといやらしく開いたり閉じたりを繰り返していた。

俺のチンポが抜き取られたばかりのマーシャさんのおまんこはだらしなくペニスの形に大きな穴を広げていて、もつとチンポがほしいと膣肉を見せびらかすように中をベトベトに濡らしているのが見える。

「……………もう……………終わりか？」

俺のチンポをおまんこから抜き取られてしまったマーシャさんが、ベッドの上で体を起こしながら物足りなさそうな瞳で俺に向かって質問をしてきていた。

今まで性欲を押さえつけて生きてきた彼女だ。たった一発中出しセックスをしただけでは、全然物足りないのだろう。

俺はそんなマーシャさんを墮落させるために、少し彼女の体を焦らすことにしたのだ。今から俺は、彼女の心をどっぷりと性に墮とすつもりである。

「いえ、マーシャさんのおまんこが、俺専用のおまんこに変わるまで続けます」

俺はマーシャさんにその声をかけながら、勃起したチンポを彼女に見せつけるようにしてベッドの上に仰向けに寝転がっていく。

今回、彼女としたセックスは俺へのご褒美として、俺が無理やりマーシャさんを誘ったという形だ。そうすると彼女の心は、あのときのセックスは望んだものではないという言い訳ができてしまう。それではマーシャさんの心を、どっぷりとした快樂の世界に墮とすことはできない。

だから、今度は彼女が望んで俺のチンポをおまんこに啜え込んだという実績を作ることで、俺はマーシャさんの心を俺とのセックスに対してドロドロにハマリ込ませるつもりでいた。

そのために、俺はこうして彼女の心を誘惑するよう言葉を重ねていくのである。

「マーシャさんが俺の女になるなら、朝までこの気持ちいいセックスを続けますよ。それに、毎日いつでも、あなたとセックスをします。でも、そうじゃないなら、もうおしまいにしましょう」

俺はマーシャさんに極端な選択を迫るようにして、抑揚のない声をかけていった。このように不利な選択を使って彼女の心を追い詰めることで、マーシャさんが望んで俺に股を開くように誘導していくのだ。

セックスを覚えたで、まだまだやり足りないといった欲求不満を肉体に抱えているマーシャさんが、俺の提案に心を流されながら葛藤に揺れているのが彼女の様子から簡単にわかってしまう。

俺はさらにマーシャさんの心を快楽に染めていくために、彼女との会話を続けていくことにした。

「もし俺の女になるなら、自分でこれを挿れてください」

「……………」

俺の言葉を聞いたマーシャさんが、ついには無言で考え込んでしまう。

しかし、ベッドの上に仰向けに寝た俺の股間にいきり立つチンポをジツと見つめながら、俺の言葉を聞いたマーシャさんが我慢できないといった様子で生唾を飲み込んでしまっていた。

きっと彼女は、俺のチンポをおまんこに挿れたときに味わえるあの気持ちよさを想像してしまったのだろう。

まあ、生まれて初めてのセックスで俺にイカされまくってから、さらに魔性のスキルを持つ俺のチンポをたっぷりとおまんこに啜えこんだんだ。この状態で、セックスにハマり込むという方が無理な注文なのである。

つまり、マーシャさんが肉欲をうまくコントロールできていない今が、彼女を墮とす絶好のチャンスということである。だから俺はたたみかけるようにして、マーシャさんの心をさらに墮落させていくのだ。

彼女の理性はもう、風前の灯となっていた。

「俺のチンポが萎えたら、この話は終わりにしましょう。それはマーシャさんの本音が、俺とはもう、セックスをしたくないと言ってるということですから」

俺はマーシャさんの心にとどめを刺すために、彼女の思考に短い期限をつける。もう、彼女に深く考える時間は与えない。不利な選択を押しつけることで、俺はマーシャさんの心をどっぷりと快樂に墮とす。

そして、俺の突き放すような言葉を聞いてほんの少しだけ葛藤を見せたあとに、マーシャさんは欲望に流されたメスの顔でドロリと黄色い瞳を濁しながら、俺の腰にまたがり始めていくことになる。

彼女の心が、俺のチンポを体内にニユルリと挿れたくて欲望に流れていた。マーシャさんの心が、俺に堕ちた瞬間である。

あとはマーシャさんの体と心をドロドロの快樂漬けにすることで、彼女の肉体を俺専用のメスへと調教していくだけだ。

「ユーリは、ちや、ちゃんと責任は、とれるのか？」

「はい。俺の女になるなら、俺がマーシャさんの体に極上の快樂を体験させてあげますよ」

勃起した俺のチンポを膣口にあてがいながら、欲望に流されてどろりと濁ってしまつた瞳でマーシャさんが俺に確認の言葉をぶつけてくる。

そのまま俺がやさしい口調で彼女の心にとどめを刺すと、吐息を熱く荒げたマーシャさんがゆつくりと俺の体の上に腰を落としていった。

……にゅううううん♡

「……い、いまから私はユーリの女だ♡……だから♡……いっぱい♡……気持ちよくしてくれえ♡」

欲望に流されドロリと暗く濁った美しい瞳で、騎乗位の体位で俺と一つに繋がりながら彼女がメスの顔で俺を見下ろしている。

凛々しくも強かった剣聖マーシャの美しい瞳が今、欲望に染まりきった。

俺は妖しくウネウネとうごめく彼女の膣肉の気持ちいい感触を股間に感じながら、マーシャさんとのセックスの二回戦を開始する。

俺が下から腰を動かしておまんこの奥に向かって硬く勃起したチンポを突き刺し始めると、彼女は嬉しそうな顔で騎乗位のまま腰を振り始めていった。

「今からマーシャさんの体を、俺に屈服させます」

「……うふふ♡……お前に♡……私を♡……屈服させられるかな♡」

そして覚えたての騎乗位セックスを好奇心満載な様子で楽しみながら、俺の言葉を聞いたマーシャさんが挑戦的な瞳で俺を楽しそうに見つめてくる。

俺の下半身の上にまたがりながら騎乗位で腰を振る彼女の瞳は、今日の訓練場で見せていた凛々しい軍人であったマーシャさんからは想像もつかないような、性に開放的なメスの卑猥な瞳に変わりきっていた。

「じゃあ、まずは、ポルチオの開発からいきましようか」

「……あんっ♡……ポルチオ？……なんだそれは？……あっ♡……あっ♡」

「まあ、そのうち、わかりますよ」

こうして、俺とマーシャさんの秘密のセックスは、朝まで続いていくことになる。

……

……

……

「な、なにこれえ♡——あつ♡——あつ♡——あつ♡——あつ♡——イクっ♡」

……トン♡トン♡トン♡

「ねえっ♡——ユーリ♡——おまんこのおくう♡——気持ちよすぎるからあ♡——
チンポでっ♡——トントントンって♡——キスしちやらめええええっ♡——あ、っ♡——
——あ、ああああああつ♡——またっ♡——イクうううっ♡」

ガク♡ガク♡ガク♡

「——ポルチオせつくしゆつ♡——気持ちよしゆぎてつ♡——もうむりいいいい♡——
 あっ♡——あっ♡——あっ♡——あああああああ♡——あつ♡——またあ♡——
 おまんこ♡——いっ♡——いっ♡——かっ♡——されりゆうううう♡——」

ガクン♡ガクン♡

朝になり日が昇り始めるころになると、剣聖として厳しい鍛錬で鍛え上げてきたマシューさんの肉体は、俺のチンポによつて快樂漬けのメスへと開発されきってしまった。

マーシャさんとの居残りエッチ♡

ある日の不良グループたちの会話

「あー。マーシャ先生とやりてー」

「あの人の体、マジでエロいよな！」

「でも、やらせてくれっってお願ひしても、ぶっ飛ばされるだけだもんなー」

「それに、先生はDランク君がお気に入りたいだし」

「まあ低ランクの雑魚だから、俺たちみたいにいびって遊んでるだけでしょー」

「どうする？Dランク君が先生とやってたら？」

「ありえねー！俺たちが頭下げても、マーシヤ先生はヤラせてくれないんだもん。それに、あの先生はメチャクチャ堅物って聞いたぜー。きっと、セックス自体に興味ないんだよ」

「それに、Dランク君が、あの先生とやれるわけないよ」

「今頃Dランク君。マーシヤ先生にイジられてるんだろ。かわいそうに」

「あはは！そうに違いない！」

「マーシヤ先生と誰が一番最初にやれるか、競争しようぜ！」

「いいねー。それをDランク君に見せつけて、自慢するのも追加で！」

こうして、不良グループたちの会話は続いていく。

……

……

……

ユーリ視点

「……ほらほら♡……ユーリのおちんぽ♡……ピクピクしてきだぞ♡」

……むにゅ♡……むにゅ♡

今の俺は訓練場を囲う石壁の内部にある教官準備室で、マーシャさんの爆乳にペニスをムツチリと根本まで飲み込まれてしまっていた。

居残り訓練が開始されるとすぐに、こうしてお互いの肉体を使って快楽を貪り合うという関係が俺とマーシャさんには続いている。

何度も肌を重ね合わせた俺たちにとって他の高校生勇者たちに秘密とするこの居残りセックスは、すでにいつもの日課になってしまっているものであった。

……ビュク♡……ビュク♡

「……うふふっ♡……ユーリのせーし♡……いっぱい♡……でてきた♡」

マーシャさんが爆乳パイズリで俺のチンポから丹念に精液を搾り取りながら、舌なめずりをして楽しそうに笑っている。

彼女は心地よく射精を続ける俺のチンポを根本までむっちりと挟み込んだ爆乳をゆったりと上下に動かしながら、さらに俺の精液をペニスの先から搾り取ろうとでもするかのように丁寧な刺激を続けていた。

そんな彼女の胸元にある深くてやわらかい谷間が、俺の精液でドロドロに白く汚れていく光景がひどく爽快である。

今まで抑えてきた性欲を爆発させてしまった彼女は、俺のチンポを練習台にしてフェラやパイズリなど、たくさんの淫技への才能を開花させていた。

そして今日も、マーシャさんは新たな性技を俺に教わりながら習得していくのである。

……にゅううん♡

「……………あつ♡……………はあああん♡……………ユーリ♡……………ちよつと♡……………まって♡……………誰か来た♡」

そしてしばらくの時間イチャイチャとした前戯を楽しんだあとに、俺たちが性器で一つに繋がるネットトしたセックスの快楽を楽しんでいると、マーシャさんが俺に対して待ったの声をかけることになる。どうやら訓練場に、誰かが来たようだ。

「マーシャ先生、いますかー？」

訓練場にやってきたのは、不良グループたちである。彼らは俺への居残り訓練が終わっていることを確認したあとに、マーシャさんに何かを伝えるために教官準備室を訪ねてきたらしい。

「……………な、なにからしらあ♡……………つ♡……………あつ♡」

一時セックスを中断しようとするマーシャさんを俺は止めると、教官準備室の二階の窓から顔を外に出すことで、俺は彼女に不良グループへの対応をさせることにした。

せっかくだしこの機会を利用して、俺は彼女の性癖を新たに開発させてもらうことにしたのだ。

「Dランク君への居残り訓練は終わったんですかー？」

「……………あ、ああ♡……………きようはあ♡……………早めに終わらせることにしたんだあ♡……………あつ♡……………まって♡……………ん♡……………ん♡」

そして、いつも彼らに見せている気丈な女剣士の口調で、マーシャさんが彼らと話しました。

毅然とした態度で窓から顔だけを出している彼女が実は、窓の内側ではベッドの上でDランク君である俺の下半身に騎乗位でまたがりながら、ネットネットと濡らしたおまんこを振って卑猥なセックスを続けていることに不良グループはまったく気づかないようだ。

そして誰かに秘密でなんでもない顔をしながら、影に隠れてセックスをするというイケナイ行為を覚えてしまったマーシャさんのおまんこが、俺のチンポをきゆうきゆうと気持ちよさそうに啜えこみながら興奮によって愛液を分泌しベトベトに濡れてきている。

俺はヌルヌルと気持ちよくうごめいて生温かいマーシャさんのおまんこの中を騎乗位の体勢で下からグチャグチャと突きながら、窓の外で会話を続けている不良グループにバレないように彼女とのセックスを続けていくことにした。

「先生ー。今から俺たちと、乱交エッチしましょうよー。めちやくちや気持ちいいですよー」

……又チュ♡……又チュ♡

「……ひゃああん♡……そ、そんなことお♡……わらひがあ♡……生徒とするわけないだろう♡……っ♡……あっ♡」

「ひゃあん、だって！マーシャ先生、照れちゃってかわいいなー」

マーシャさんが俺の腰の上にまたがって気持ちよさそうにおまんこをネットネットと振りながら、不良グループと会話を続けている。

俺のチンポに濡れた膣肉の弱い部分を突かれ始めてしまったマーシャさんが、快楽と興奮によってフルフルと小刻みに下半身を揺らしてしまっているのが腰の感覚でわかった。

そして、どうやら不良グループは、マーシャさんの体にご執心らしい。彼らはしつこく言葉をかけながら、彼女をセックスへと誘い続けている。

「今は先生のほうが強いですけど、そのうちAランク勇者の俺たちのほうが先生より強くなりますって。だから、今のうちに俺たちとヤッておいた方がお得ですよ！」

「それに、メイドさんたちだって俺たちとヤリまくりますから、何も気にすることありませんよ。先生も、俺たちとセックスしましょうよ！」

そのまましばらくのあいだ、不良グループはマーシャさんをセックスに誘い続けることになった。

そして、彼女は彼らの誘いを毅然とした態度で断りながら、窓の下で俺との騎乗位セックスをネットネットと続けていくことになる。

「……そ、そんな話ばかりするのだったら♡……わたしはもう♡……自分の仕事に戻る

そして窓から顔を引っ込めるとマーシャさんは、やっと邪魔者がいなくなったという態度で俺の腰を上にもたがり、夢中になって再び腰を振り始めていく。

……又チユ♡……又チユ♡

「マーシャさん。自分の仕事ってなんですか？」

「……き、きまつてるあろう♡……そ、そんなものお♡……あつ♡……ユーリの♡……チンポの♡……世話に決まっている♡……ああああんつ♡……ああああつ♡」

ガク♡ガク♡ガク♡

やっと思う存分に腰を振ることができると言った態度で、快楽に瞳をどろりと濁したマーシャさんが俺の上でおまんこをいやらしく前後に振っていく。

俺がそんなマーシャさんと一緒に気持ちよく腰を振りながら不良グループたちとの会話を蒸し返すと、彼女はおまんこで味わう俺のチンポの感触に夢中になりながら言葉

を返していた。

「マーシャさんも、あいづらに言ったみたいなのに、自制してみますか？」

「——絶対にやだあつ♡——ユーリのチンポ♡——気持ちいいんだもんっ♡」

……くちゅ♡……くちゅ♡

今の俺たちは騎乗位から座位に変わった体勢で向かいあい、お互いに濃密なキスを重ねながら腰を振りあっている。

そしてそのままマーシャさんは座位の体位で俺の体に正面からぎゅっとしがみつきのながら、ビクビクと気持ちよさそうに体を震わせて中イキをしてみた。

ビクン♡ビクン♡

「……はああああんっ♡……おまんこに♡……勃起したチンポ♡……挿れながら♡……

イクの♡……すっごく♡……好きなのお♡……おっ♡……おっ♡」

俺の体によりかかりながら、気持ちよさそうな吐息をはいてビクンビクンと上半身を痙攣させているマーシャさんの姿が素晴らしくかわいい。

オーガズムの快楽によって力を失ってしまった上半身をマーシャさんが俺に押し付けてくる圧力によって、彼女の爆乳が俺の胸元でぐにやりとやわらかく潰れてしまっていた。

プルプルのスライムのようにやわらかいマーシャさんの爆乳が俺の胸板に押し付けられて潰れている心地いい感触の中心点には、彼女の硬く勃起した乳首が俺の上半身をコチヨコチヨとこそばゆく刺激してくれている感触が混じっている。

そんなふうに彼女が俺の体にしがみつきながら、座位の体勢で股を開いて気持ちよさそうにおまんこをヒクヒクと絶頂させていく光景がまさに最高なのである。

俺はさらにマーシャさんの体に強い快楽を与えるために、心地いい絶頂を繰り返す彼

女のおまんこに向かって濃厚な中出しをキメていった。

すでに幾度も俺からの中出しを経験してしまったマーシャさんのおまんこは、俺の精液をナマで注ぎ込まれるだけでヒクヒクと気持ちよく絶頂をキメてしまうくらいに、どっぴりと卑猥に調教をされきっている。

……とぷ……とぷ

「——ユーリのっ♡——せーし♡——なかにつ♡——できたあああつ♡——これ♡——大好きiiiiii♡……あつ♡……あつ♡」

俺の精液が膣の中に直接注がれたのがおまんこの感覚でわかったマーシャさんが、嬉しそうに天井を見上げて座位の格好のまま歓喜の声をあげる。

そして彼女は俺の下半身の上に座りながら俺の体にしがみついた格好で背中を強くのけぞらせると、さらに深く気持ちいいオーガズムの世界へと旅立っていった。

実はそんな彼女のおへその下にはすでに、俺によって刻まれてしまった妖しいピンク色の淫紋がキラキラと光り輝いている。

現在進行系で俺からの中出しを感じ取った淫紋が、彼女の全身にこの世のものとは思えないような極上の快楽をゾワゾワと広げ続けているのだ。

すでにマーシャさんの肉体は俺が刻んだ淫紋によって、俺の精液を中に注がれると信じがたいほどに強烈な多幸福感を味わえるように改造されきっていた。

俺とのセックスが生んだ熱によってピンク色に火照った頬で中出しをされながら、うっとりとした表情で彼女が俺を見つめ続けている。そんなマーシャさんの、メスに変わった潤んだ瞳が素晴らしく妖しくて艶やかだった。

俺によって肉体を性的に調教されきったマーシャさんはもう、俺のチンポから離れることができないくらいに心をどつぷりと快楽色に染められてしまっているのだ。

「——はあっ♡——はあっ♡——ユーリのチンポっ♡——好きっ♡——好きっ♡——好

きいいいっ♡」

快楽にドロリと濁ったきれいな黄色い瞳にピンク色のハートマークを浮かべながら、中出しをされたばかりのマーシャさんが座位の体勢のままに腰を振る。

俺に中出しされた精液と、マーシャさんのおまんこが分泌した本気汁がお互いのピストン運動によってグチャグチャに混ざり合い、白く泡立ってベトベトの卑猥液に変わって俺たちの性器をどろりと汚していく。

根本までびったりと性器で一つに繋がり続ける俺たちの下半身には、セックスの熱によつて卑猥な湿気が温かくこもり始めていた。

その気持ちいい熱と湿度を俺は下半身に感じながら、お互いの股間が強く擦れ合うときに生まれる陰毛同士がザラザラとぶつかる感触を楽しんでいく。

「……おほおほおほおっ♡……おっ♡……おっ♡……おっ♡……おっ♡」

そして次に俺が座位の体位で腰をグラインドさせながらマーシャさんのポルチオをチンポの先で刺激していくと、彼女はまた体を前に強く丸めながら強烈な性的快樂によつてゾクゾクと全身を震わせていった。

おまんこの奥にあるポルチオ性感帯を俺のチンポで突かれる快感がよほどに気持ちいいのか、マーシャさんは獣のような喘ぎ声をあげながら無我夢中の様子で俺の体に両手両足を回してぎゅつと力強くしがみついてきている。

——トン♡トン♡トン♡

「——はひいいいっ♡——んっ♡——あっ♡——はああああああんっ♡」

ついには、俺のチンポによつて子宮に生み出された全身を暴れ狂う快樂で肉体がコントロールできなくなつてしまったマーシャさんは、座位の体勢のままでもその場から動けなくなつていた。

そして彼女は俺の体にぎゅつとしがみつきながら、気持ちよさそうに俺のチンポでポ

ルチオ性感帯を突かれ続けていくことになるのである。

「あ、っ♡——あ、っ♡——あひひひひひひっ♡——お、っ♡——お、っ♡——
 おおおおおおお、っ♡」

俺は座位の体位のまま、彼女のコリコリとしたポルチオの感触をチンポの先で丹念に楽しんでいった。

……

……

……

「あ、っ♡——あ、っ♡——これ♡——らめえっ♡——かんたんに♡——いつ♡——
 —イカされるうううっ♡——あはあああああつ♡……イクっ♡」

ガク♡ガク♡ガク♡

……

……

……

……とぷ♡……とぷ♡

「……わたしのからだあ♡……ユーリに♡……ぜんぶ♡……お、女にされちゃったあ♡……っ♡……っ♡……っ♡」

こうしてマーシャさんも無事に俺の仲間となり、彼女の体と心は俺にどっぷりと堕ちていったのである。

ずっと憧れていたボクの師匠が、異世界から来た男に簡単に股を開いて、すっごく気持ちよさそうに腰を振っていました！

シャル視点

ボクの名前はシャル。一流の魔道士を目指して、師匠の元で修業を続ける16歳の魔法使いだ。

「シャル、そろそろ出発するのじゃぞ」

そして今、ボクに向かって声をかけているのが師匠のロクサーシャさん。

ボクの師匠は絹のようにきれいでやわらかい金色の髪に、青く澄んだ瞳を持つ見た目

はかわいい女の子だ。

でも、身長140センチメートルほどの小さな体に、プルプルのEカップな巨乳をぶら下げる少女姿の彼女の見た目に騙されて、痛い目にあう男は非常に多い。

実年齢140歳であるロクサーシャ師匠を見た目通り幼い子供のように扱うと、彼女からの痛いおしおきが待っていた。

そんな師匠がいつまでも若々しい見た目を保つことができる理由には、彼女が持つ緻密な魔力コントロール技術にある。

魔力によって大抵の現象を起こすことができるこの世界では、魔力コントロールを極めると年を取ることなく長寿が可能になるのだ。

つまり、ロクサーシャ師匠は彼女が魔力のコントロールを極めた15歳の頃の見た目から100年間以上も、その若い外見をキープしているのである。

師匠ほどに魔力を自在に扱える人物は、長い歴史の中にも数人ほどしか存在しない。

ボクはそんな偉大な師匠に弟子入りして、魔法の修行をさせもらっているというわけだ。

「師匠。それでは帝都へと向かいましょう」

「はあ、それにしても、めんどくさいのう……」

そしてボクたちは現在、ボクたちが普段住む魔法研究都市から、ガスター帝国の帝都に向けて旅をしている。

理由は、師匠が所長を務める帝国魔法研究所に、帝国上層部からの手紙が届いたからだ。

その手紙には、帝国が世界を救うために勇者を召喚したため、まだ未熟な勇者たちに魔法の指導をしてほしいと書いてあった。

そんなわずらわしいことは別の人員にやらせてほしいものであるが、異世界召喚とやらに熱を入れ込む帝国政府は、帝国内に住んでいる魔法師の中で一番の実力者である口クサーシャ師匠を名指しで指名していた。

世界を救うという大義名分をかざした公的な指令書を無視してしまうと、ガスター帝国の税金を湯水のように利用して魔法に関する研究を続けている今の環境を失ってしまふと、師匠は渋々と帝都に向かうことにしたようだ。

「師匠。そろそろ、帝都に到着します」

「うむ。異世界から来たという勇者たちは、どんな若者たちなのかのう……」

そして帝都にたどり着いたボクたちは、勇者たちに魔法の指導をするために王城内へと入場していく。

「師匠、なかなか豪華ですね」

「うむ。これだけは、役得なのじゃ！」

そんなボクたちが最初に案内されたのは、王城内に用意された宿泊先の施設だ。

勇者たちに魔法を教える期間中は他国への情報流出を防ぐために、ボクと師匠は王城内に用意された宿泊施設を利用することになっていた。

普段寝泊まりをしている帝国魔法研究所にある質素な部屋と違って、豪華な王城内に宿泊できるという待遇に、ボクと師匠は歓喜の声をあげる。

ふかふかのベッドに、座りやすいソファ。そしていつでも利用可能な豪華な食事。そんないたれりつくせりの環境に、ボクと師匠は喜びながら会話をしていた。

「それでは師匠。ボクは自分の部屋も確かめてきます」

「うむ。しばらくしたら、また合流しよう」

さらに嬉しいことに、今回宿泊する王城内の部屋は相部屋ではなく、弟子であるボクにも個室が用意されているのだ。

ボクは自分の部屋の様子を確認している師匠に声をかけると、ボクのために用意された部屋へと向かうことにした。

「うわ！ボクの部屋も、すごい豪華だ！」

そしてボク専用の宿泊先として案内された部屋の中でも、ボクはその豪華さに驚くことになる。

「ふえー。このソファー、気持ちいいー」

幸いなことにも、勇者たちに教鞭をとるのは明日からだ。今日は魔法の修行と研究に忙しい日常生活から離れて、少しのんびりとした休息をしよう。

ボクは帝国から用意された宿泊先の豪華な部屋のソファでくつろぎながら、そんなことを考えていた。

ずっと憧れていたボクの師匠が、異世界から来た男に簡
単に股を開いて、すっごく気持ちよさそうに腰を振って
いました2

シャル視点

ボクと師匠が勇者たちに魔法を教え始めて、3日が経った。

最初は魔法に無知だった勇者たちであるが、ボクと師匠が魔法について訓練を始める
彼らはあるという間に、一般的な魔法使いでは太刀打ちできないくらいの熟練した実力
を見せることになる。

イメージ力がものを言う魔法の行使に関して、異世界人はこの世界の人間にはない突
飛で天才的なことをいくつも思いつくと言われているが、実際の現場に居合わせるのは

始めてであつた。

こうして魔法や知識に対して突飛な才能をみせることが、異世界召喚を様々な国がおこなう理由でもある。

今回、ボクと師匠が指導をした勇者たちも、ゲーム？とやらの必殺技と称して様々なオリジナル魔法を作り合っていた。

魔法を習い始めてたった数日でオリジナル魔法をいくつも製作してしまうなど、まさに前代未聞のできごとである。それくらいに、勇者たちの才能は凄まじかった。

しかし、魔法に関しては天才的な才能を見せる勇者たちであるが、ひとつだけ困るところがある。それは、彼らの素行だ。

「ロクサーシャ先生。エッチしようぜー。そうだ。シャルも参加して、俺と3Pしようよー！」

なんと勇者たちの多くが色を好み、訓練の時間が終わると、あろうことが世界中の魔法使いが畏怖する対象である師匠を卑猥な行為へと誘ってくるのだ。

さらには師匠だけではなく、勇者たちはボクまでも気軽に部屋に誘う始末である。勇者たちは色を好むと帝国側から事前に聞いていたが、まさかこれほどまでとは。

ボクはそんな彼らの信じられないような畜行にめまいをしながら、いつものように、大声で彼らに抗議の言葉を伝えていく。

「ふ、ふざけるな！ 師匠とボクを、そんなことに誘うんじゃない！」

こうして、ゲスな勇者が師匠を卑猥なおこないへと誘う行為は、もはや日常茶飯事となっていた。そのたびにボクが、盾となって彼らを大声で追い返している。

まったく。勇者たちの倫理観は、どうなっているのだろう。

ちなみに、ずっと魔法の道に打ち込んできた師匠は、男性経験がないとの噂だ。

その噂に関して真実を聞こうとすると、文字通り師匠から魔法でカミナリを落とされるため、真偽は確かめられずにいるのではあるが。

まあ、魔法のことばかり考えていて、まったく男つ気がない師匠だ。もしかしたら、その噂は本当なのかもしれない。

「師匠はまた、今から居残り授業ですか？」

「う、うむ。で、できの悪い生徒が一人、いるのでなあ……」

そして、今日の指導が終わり訓練場から帰っていく勇者たちを見送りながら、ボクは師匠に質問をする。

実は異世界からやってきた勇者たちはいずれも天才的な魔法使いなのであるが、一人だけ例外が存在するのだ。

彼はDランク勇者と認定されたユーリという少年で、魔法を使った模擬戦で他の勇者にコテンパンにやられるなど、かわいそうな扱いを受けていた。

それを見かねた師匠が、彼に身を守る防衛魔法を教えようと初日に居残り授業を受けさせたのだが、どうやら彼は魔法の覚えが悪いらしく、訓練が3日目になってもまだその居残り授業が続いているようなのだ。

「師匠、本当に、ボクがお手伝いをしなくて大丈夫なんですか？」

「うむ。だ、大丈夫じゃから、お主は先に部屋に帰るのじゃ」

それに、本来なら弟子であるボクが師匠のお手伝いをしなくてはならないが、なぜか居残り授業に関して彼女は絶対にお手伝いをさせてくれない。不思議なものである。

生徒の覚えが悪いのなら師匠が教えるのではなくボクが指導を代わろうかとも聞いてみたが、彼女は絶対に首を縦には振らなかった。

弟子のボクにはわからない、勇者に関する何かしらの秘密があるだろうか。そんなことを考えながら、ボクは師匠より先に宿泊先の部屋へと帰っていくことにする。

「あ、忘れ物しちゃった！」

しかし部屋へと帰る途中になって、ボクは訓練場に忘れ物をしたことに気がついた。

実は今日、勇者が訓練する様子を視察に来た王族から、差し入れとしてクッキーをいただいたのだ。しかもあれは帝都でも大人気店の商品で、滅多に手に入らないような代物である。

勇者たちへの訓練が終わったら部屋で食べようと楽しみにしていたのであるが、師匠の居残り訓練のことが気になってすっかり忘れてしまっていた。

「あーあ。ボクって、まぬけだなー。まあついでだし、師匠がしている居残り訓練の様子でものぞいてみようかな」

1646 ずっと憧れていたボクの師匠が、異世界から来た男に簡単に股を開いて、すっごちよさそうに腰を振っていました2

そしてボクは、教官準備室に置き忘れた差し入れのクッキーを取りに戻るために来た道を引き返す。

師匠は今ごろ、何をしているのかな。訓練場へ続く道を歩きながら、ボクはそんな事を考えていた。

ずっと憧れていたボクの師匠が、異世界から来た男に簡単に股を開いて、すっごく気持ちよさそうに腰を振っていました3

シャル視点

「あれ?……誰もいない?」

ボクが忘れ物のクツキーを取りに訓練場に戻ると、師匠が居残り訓練をしているはずの訓練場に誰もいないことに気づく。

たしか師匠が、ユーリという少年に今日も居残り訓練をすと言っていたはずなのだが。

「おかしいなー。休憩中なのかな？」

ボクがポツリとつぶやいた言葉が、無人となった訓練場内にむなしく響いていた。

そして、ボクは無人になった訓練場という状況にいぶかしみながらも、忘れ物を取りに教官準備室へと向かうことにする。

「……………あつ……………そこおつ……………つ……………んっ……………」

……………又チユ♡……………又チユ♡

ボクが教官準備室に向かいドアを開けようとすると、室内からなにやら物音がするのがわかった。どうやら師匠は、教官準備室でなにかをしているらしい。

ドアを開ける前にボクが外から耳を澄まして中の様子をうかがうと、微かにシャワーの音がするのが聞こえてきた。どうやら居残り訓練をすると言っていたはずの師匠は、今は教官準備室でシャワーを浴びているようだ。

実は教官準備室には簡易シャワーが取り付けられてあって、それがいつでも利用可能となっていた。

彼女がシャワールームを利用しているということは、すでに居残り訓練は終わったということだろうか？まだ居残り訓練が始まって、10分と経過してはいないはずだが。

ボクは居残り訓練をすと言っていたはずの師匠がシャワーを浴びているという状況に、違和感を覚えながらも教官準備室へと入室するためにドアに手をかける。

まあ、居残り訓練を受けることになったユウリという少年が、居残り訓練が始まってすぐに防御魔法を覚えたということもあるだろう。

それに、気になることは直接、師匠に聞けばいい

そう考えたボクは教官準備室に入ると、居残り訓練がどうなったのかを確認するために、シャワー中の師匠に聞こえるように大きな声で彼女に話しかけることにした。

教官準備室のシャワールームは一階の端にあり、ドアの代わりに水よけのカーテンが掛けられているだけというシンプルな作りをしている。だから、部屋の中から声をかければ、簡単にシャワー中の彼女と会話をすることができるのだ。

「師匠、いるんですかー?」

……にゅううううん♡

「——まてっ♡——まつのじやあっ♡——いまあっ♡——シャワーをお♡……あっ♡……浴びてるからあっ♡——んっ♡——あっ♡……はああああんっ♡……はいっ♡ちやっただ♡」

……ニチユ♡……ニチユ♡

「入るものにも、ボクは忘れ物を取りに來ただけですから、すぐに出ていきますね」

「……………んっ♡……………くふうううっ♡……………弟子につ♡……………こえっ♡……………聞こえちゃうからあ♡……………うごかすの♡……………あっ♡……………やめるのじゃあっ♡……………あんっ♡……………はわあああっ♡」

教官準備室に入室したボクが部屋の中から師匠に声をかけると、シャワー中の師匠が慌てたような声で返事を返してくる。

魔法研究所にある自室ではボクが同室にいても平気な顔をして下着姿のまま歩き回っているのに、今日の彼女は妙に慌てていた。ガサツな師匠にしては、めずらしい態度である。

ボクがいくら注意しても、室内を下着姿で歩き回るといふ師匠の行為は直らなかつたのであるが、どうやらここにきてようやく、彼女に乙女としての自覚が芽生えたらしい。

ボクはそんなことを考えながら、シャワー中にボクが入室してきたことに慌てている様子の師匠と会話を続けていく。

「それよりも師匠、なんで教官準備室でシャワーなんて浴びてるんですか？ どうせなら
宿泊施設に戻って、大浴場を利用すればいいじゃないですか。その方が、気持ちいいで
すよ？」

「——そ、それはあつ♡——きゆうきよつ♡——シャワーを浴びたくつ♡……なつてし
まつてえええ♡——んつ♡——んつ♡……まつてつ♡……イつちやうからあつ♡……
それ♡……らめえつ♡……あつ♡……だめ♡……イクつ♡……気持ちいい♡」

シャワーの音でかき消されてしまい、うまく師匠の声が聞こえない。そんな状況の中
でボクは師匠の声に耳を澄ましながら、テーブルの上に置いてある大人気シヨップの
クツキーを手を取った。

師匠がシャワーを浴びながら発言した最後の気持ちいいという言葉だけは微かに聞
き取ることができたが、その言葉から想像するに、きっと彼女は魔法研究所にある質素
なシャワールームを思い出してしまったのだろう。

豪華な大浴場でくつろいでいても、たまには質素なシャワールームでさつと熱いシャ

ワーを浴びたくなることもある。それが人の感情というものだ。

きつと師匠も、いまはそういう気分になるだろう。ボクはシャワー中の師匠と会話を続けながら、彼女の気持ちに共感していた。

そして目的にしていたクツキーを無事に手に入れたボクは、今度こそ宿泊先の部屋へと戻ることにする。

「あつた！……それじゃあ師匠、ボクは部屋に戻りますね」

「くくつ♡——つ♡——つ♡……んくううううつ♡くくつ♡」

ガク♡ガク♡ガク♡

「あれー？師匠、聞いてますー？」

しかし、ボクが退室の旨を伝えても師匠からの返事が返ってこない。そんな状況に、

ボクの心に少しだけ不安がわき上がってくる。

もしかしたら、ボクとの会話中に師匠が体調不良を起こしてしまったのかもしれない。ボクの頭に、ふとそんな不安が浮かんできた。

一応、彼女の様子を確認しておいたほうがいいかもしれない。もし、本当に師匠の体調が悪くなって倒れてでもいたら大変だ。

そう考えたボクは声をかけても返事が返ってこない師匠の様子を確認するために、簡易シャワー室の前に立つ。

恥じらないのない師匠の裸体はもう見飽きている。今さら、ボクがシャワー中の師匠を見てもトラブルもなにもないだろう。

「師匠、大丈夫ですかー？」

そしてボクは師匠に声をかけながら、水の流れる音がし続けているシャワールームの

カーテンを開けようと手をかけた。

「——な、なんなのじゃあつ♡——つ♡——まてつ♡——いまはあ♡——それをおつ♡
——つ♡——動かすなあ♡……あつ♡……あつ♡……あつ♡……あつ♡」

……クチュ♡クチュ♡クチュ♡

しかし、ボクが簡易シャワールームを遮っているカーテンを開けようとすると、中からカーテンを動かすなど師匠の慌てた声が聞こえてきた。

どうやら、師匠からの返事がなかったのは体調不良ではなく、単純にシャワーの音でボクの声が聞こえなかっただけらしい。よかった。

ボクはシャワールームのカーテンを開けないように、彼女から大声で注意を受けてしまったようだ。カーテンを開けたら、シャワーの水が飛び散って借り物の室内が濡れてしまうものな。師匠は、そういうところが妙に律儀であった。

ボクはいつもの元気な師匠の声を聞いて安心すると、シャワー室のカーテン越しに彼女との会話を続けていくことにする。

「よかった。声をかけても返事がないから、心配しちゃいましたよー！」

「……はひっ♡……はひっ♡……なんれも♡……ないからあ♡……だいじょうぶじゃあ♡……っ♡……ねえっ♡……クリ♡……つねつちやつ♡……らめらつてえ♡」

ガク♡ガク♡ガク♡

そして今度は教官準備室にいるボクに向かって、シャワールームを隠すカーテンの間から顔だけを出して、師匠が直接対応をしてくれることになった。

シャワー中の彼女の頬は熱に火照ってピンク色をしており、すごくかわいい。なんだかいつもと違って今日は変な色気までも感じさせている師匠の様子に、ボクは恥ずかしくもドキドキしてしまうことになった。今日の師匠は、すごく変だ。

「——シャワールームにいいい♡……あつ♡——近よるでない♡——つ♡——はあつ♡
——はあつ♡……そんな♡……おっきいので♡……おねがい♡……おくつ♡……突い
ちやらめえええ♡」

そしてシャワールームの中から顔だけを出した師匠が慌てて、ボクをシャワールームから離そうと声をかけてくる。

シャワールームに近づくと、なにがあるというのだろうか。そんな、いつもと違う師匠の態度に疑問を感じたボクは、それを師匠に聞いてみることにした。

「そんなこと言って師匠はいつもボクに、シャワー中に石鹸やタオルを持ってこさせてるじゃないですか？……今日は、どうしちやっただんですか？」

「——う、うるさあいっ♡……はあああああつ♡……はあああああつ♡……はあああああつ♡……
……で、弟子の前でっ♡……これ以上お♡……イカされるものかあああ♡」

そしてすごくセクシーに火照ったピンク色の頬でにらみつけながら、カーテンの隙間

から顔だけを出した師匠がボクに向かってめちやくちやなことを言ってくる。やっぱり、今日の師匠はなにかが変だ。

「変な師匠……」

「……はあっ♡……はあっ♡……どうしようっ♡……これ♡……すっごい♡」

いつもの師匠なら、お前に裸を見られてもなんとも思わんと言つてガサツさを全開にしてくるものなのであるが、今日の師匠は妙な恥じらいを持っている。

「~~~~♡~~~~♡——っ♡——っ♡——っ♡」

ゾク♡ゾク♡ゾク♡

まあ、気分屋の師匠はこうしてたまにわけのわからないこだわりを見せることがあるし、あまり彼女の言動は気にしないことにしよう。

シャワー中の師匠と会話をしながらそう思考を整理したボクは、彼女に軽くあいさつをするとその場をあとにすることにした。

師匠の無事も確認したことだし、これ以上シャワー中の彼女を拘束するのも悪いものね。

「それじゃあ、師匠。ボクは先に戻っていますね」

「……………あ、ああ♡……………わかつたのじゃあ♡……………あつ♡……………あつ♡……………そこお♡……………弱いからあ♡……………くううううううう♡」

そして、師匠にあいさつをしたボクは、シャワールームから背を向けて歩きだす。

しかし、帰る直前になって、本来なら師匠は居残り授業をしているはずだったということ进行出したボクは、一度背を向けた体勢から振り向くと再び師匠の顔を見ながら会話を続けることにした。

「そういえば師匠、居残り訓練はどうなったんですか？」

「……はわああああああ……チンポ……挿れられるの……すっごい……気持ちいいよお♡……こんなの……教えられちゃったらあ♡……もうっ♡……もとに♡……戻れないのじゃあ♡……あっ♡……あっ♡」

ボクがその場から振り返ると、一瞬だけボツ〜と気持ちよさそうな顔をしている師匠の表情が目に入ってくる。しかし、ボクが振り向いたことに気がついた師匠はおどろいた様子で表情をとりつくろうと、再び慌てた様子でボクに言葉を返してきた。

「——今日はっ♡——早めにつ♡——終わらせることにしたのじゃあっ♡——っ♡——っ♡——だからあ♡——さっさとっ♡——イクのじゃあああっ♡」

なんだか、さつきからボクの心に妙な違和感と焦りを感じるが、その正体がボクにはわからなかった。

なぜか今日は、もつと彼女の顔を見たいといった思考がボクの頭にでてくる。そ

れくらいに、今日の師匠の様子はすごく色気が感じられてセクシーだった。

でも、さすがにこれ以上、教官準備室に滞在するのは失礼だろう。ボクは退出を急かしてくる師匠の言葉に従うと、すぐに室内から退室することにする。

「それじゃあ師匠、また後で」

「……………う、うむっ♡……………わたしもシャワーを浴びたらっ♡……………すぐに♡……………イクっ♡
……………からのお♡」

そしてボクは師匠に声をかけて教官準備室をあとにすると、クツキーを小脇に抱えて宿泊先の部屋へと戻ることにした。

「……………さっさとイクってっ♡……………そういう意味じゃ♡……………ないのじゃああ♡……………
……………さっさとイクってっ♡……………あっ♡……………わらひ♡……………弟子の目の前で♡……………すっごいの♡
……………中に♡……………出されちゃったあ♡……………これ♡……………らめらあ♡……………もう♡……………がまん
……………れきない♡……………っ♡……………っ♡……………イクう♡……………」

ビクン♡ビクン♡

「……あつ♡……あつ♡……あつ♡……イツてるのに♡……おくう♡……突いちや♡……らめえ♡……え？……弟子の前でイツたから♡……これから罰としてパイパンにする？……待つのはじゃあ♡……それでは♡……わたしの威厳があ♡……あつ♡……あつ♡」

教官準備室を出るときに、後ろから微かに師匠の声が聞こえた気がしたがきつと気のせいだろう。

「それにしても、今日の師匠は妙にかわいかったなー。いつもあんな調子でいるのなら、きつと師匠のことを色々な男の人が放っておかないんだろうなー」

ピンク色に火照った師匠の小柄なかわいい顔を思い出して、ボクはそんなことを思う。

でも、なんだか師匠と会話をしてから、ボクの心には言いようのない不安感がモヤモヤと残り続けていた。そして、その不安な気持ちを感じる理由がボクには見当がつかない。こんなこと、初めての経験だった。

「さて、部屋に戻ったら紅茶を用意して、クッキーを楽しみますか！」

宿泊先に戻るために城内を歩きながら、ボクは不安な気持ちを切り替えるために独り言をつぶやく。

そうしてボクは変な焦りを感じている気分を押しさえつけるかのようにして明るい気持ちを無理やり作り出すと、部屋に戻って差し入れのクッキーを楽しむことにした。

ずっと憧れていたボクの師匠が、異世界から来た男に簡単に股を開いて、すっごく気持ちよさそうに腰を振っていました4

シャル視点

(む、侵入者！)

ボクと師匠が、異世界の勇者たちに魔法の授業を始めて5日目。夜も深まり、明日に向けて就寝しようとしているタイミングで、防犯のために宿泊施設の周囲に施しておいた結界魔法に反応が起きる。

どうやら誰かが、ボクと師匠が宿泊している建物に侵入してきたらしい。

賊の正体を確かめるために魔法を使って周囲を感知すると、建物に侵入してきたのは不良グループと呼ばれる不真面目な勇者たちの集団であることがわかった。

彼らはAランク勇者に認定されるくらいに所持スキルが強いのであるが、こうして素行に問題がある集団でもあるのだ。しかも会話を盗み聞きするに、これから彼らはボクたちをレイプをするつもりらしい。

言葉でしつこく誘ってくるだけならまだしも、こうして集団で犯罪をおこなおうとするなど言語道断だ。これは、少し彼らに痛いおしおきをしなければならぬ。

ボクと師匠は女の子であるということと若い見た目から彼らに侮られたりもしているが、本気を出せばまだまだ勇者たちなど子供扱いできるくらいには強い。今まではあくまで、教師として彼らに手加減をしていたのだ。

そう思い立ったボクは、深夜になつて野盗のような行動をしている勇者たちにお仕置きをするために、魔法の杖を手に取り部屋を出る。

「なんだよこれ?!逃げろ!」

しかしボクが彼らに手を下すまでもなく、侵入者たちは師匠が設置したのであろう魔法陣式罠によって撃退されることになった。

どうやら勇者たちは、師匠が部屋のドアに施していた結界を破ることができずに、そのまま罠によって撃退されてしまったようだ。

一応、彼らが去ったあとに周囲の状況を確認してみるが、特に被害はなさそうである。それにしても、師匠の部屋にかけられた結界は見事なものであった。

師匠の部屋のドアにかけてあるこの結界ならば、室内でどんなに大声を出しても周囲に何も聞こえないだろう。だから賊がドアに耳を当てて中の様子をうかがおうとしても、一切の無音にしか聞こえず内部の様子を知ることができないのだ。

そして無理やりドアを開けて部屋に侵入しようとする、電撃が走り賊をあつという

突然起きた賊の襲撃に興奮して眠れなくなってしまったボクは、バルコニーに出て夜風に当たりながら気分を落ち着けることにする。

それにしても、賊の襲撃があつてもぐつすり寝ている師匠の肝の太さには感心するなあ。

結界魔法に侵入者の反応があつても廊下にさえ出てこないということは、それだけ師匠は自分の魔法に自信を持っているということだ。

しかし、師匠のその自信に納得がいつてしまいうくらいに、彼女の部屋にかけられた結界魔法の魔法構築は素晴らしかった。ボクはまだまだ自分の未熟さを痛感しながら、深夜の星空を見上げる。

「……あつ♡……あんつ♡……次は♡……私が責める番なのじゃ♡」

そんなことを考えながらボクがバルコニーで深呼吸をしていると、隣りにある師匠の部屋でモゾモゾと人影が動く気配がした。

(あれ? やつぱり師匠、起きてるのかな?)

師匠の部屋の中で動き続ける人の気配が気になったボクは、いけないこととわかっていながらもバルコニーを伝ってこつそりと師匠の部屋の前に立ち、中の様子をのぞいてみることにする。

賊の襲撃があつたばかりだ。少し過敏な気がするが、ボクは師匠の様子をこの目で確かめることで、自分の心の中にわきあがってくる変な不安をなくしたかった。

(…………え? ……部屋の中に、誰がいる?)

そしてボクがバルコニー側にある窓のカーテンの隙間からこつそりと師匠の部屋へのぞくと、部屋の中に師匠以外の誰かがいるのが見える。

しかし、その人物と相對している師匠らしき小さな少女の影は、とくに騒いだりはしていない。どうやら、部屋の中にいる人物は師匠の知り合いのようだ。

こんな時間に二人がなにをしているのかが気になったボクは、部屋の中の様子を探るためにさらに集中して視界を確保しようとする。

しかし、これがまずかった。師匠の部屋の様子をのぞこうとして周囲への警戒がおろそかになったボクは、突然、誰かに後ろから首筋に冷たい刃物を突きつけられてしまったのだ。

「ご主人さまに、何の用かしら？」

そしてボクの首元に刃物を突きつけてきた人物は、ボクの体を後ろから拘束すると同時に、今度はボクの首に刃物を添えたままに質問をぶつけてくる。声の様子から、どうやらボクの体を拘束しているのは若い女の子だということだけがわかった。

「さて、ユキノ。こいつは、ご主人さまに手を出すなど言われている」

さらに気がつくのとボクの目の前には、メイド服姿の美しい女性が立っていた。どう

やつて彼女がボクに近づいたか、まったくわからない。

青くてきれいな髪に冷静沈着な紫色の瞳をした彼女は、たしか城内で孤立してしまつたDランク勇者のために、自分の教え子を救うという名目でマーシャ少将が派遣してきたメイドだつたと思う。名前は、リンネといつたつけ。

彼女の人並み外れた美しい外見と爆乳なメイド服姿を遠目に見て、さすがマーシャ少将が派遣したメイドだと感想を持ったのをボクは覚えている。

ということは、ボクの体を後ろから拘束している少女はマーシャ少将が派遣してきたもうひとりのメイドだろう。ユキノという名前の彼女は体が貧相だったが、気が強そうな赤い瞳に黒い髪、そして健康的な褐色肌と外見の美しさはやはり城内で働く他のメイドたちと比べて群を抜いていた。

Dランク勇者なんぞに手をかけるマーシャ少将はどうかしていると揶揄するものもいたが、教え子に対してならおちこぼれと言われていると深い情を持って接する。

メイドを派遣したという行為は、マーシャ少将の立派な人格がうかがえる話だった。

しかし、マーシャ少将が派遣してきたメイドがこの場所でなにをしているのだろうか。

ボクはナイフを突きつけられて後ろから体を拘束された状態で、彼女たちの狙いを探ることにする。ボクと師匠が宿泊している部屋の周囲に、なにか秘密があるとでもいうのだろうか。

ボクは自分が陥ってしまったピンチから脱出するために、状況を整理しながら思考を続けていった。

「念話で確認したのだけど、ご主人さまが部屋の中に招待するって」

しかし、一向に状況がつかめないままのボクに向かって背後から拘束を続けるメイド服姿のユキノが話しかけると、ボクの体に透明化の魔法をかけていく。これからボクは、なにをされるといふのだろうか。

さらには壁を透過する魔法までを使い、彼女はボクのことを師匠の部屋の中まで引き込んでいくではないか。

彼女はボクなんかよりもずっと格上の魔法の使い手だ。そのことがわかりゾツとしてしまうくらいに、彼女が使う魔法は素早く精密な魔法構築をしていた。

そして状況に思考が追いつかないまま体が透明になった状態で師匠の部屋に招待されると、暗く静まり返った部屋の中で二人の人物がモゾモゾとうごめいているのが見える。いったい、これがなんだというのか。

でも、師匠は、透明になって部屋の中に入ってきたボクたちのことにまったく気がついていない様子だ。

その事実を前にして、帝国一の魔法の使い手である師匠にすら気づかれない隠蔽魔法を使う人物がメイドをしているという異質さに気づき、ボクは戦慄を覚えることになる。

この場所でいったい、どんな秘密がおこなわれているのだろうか。わけがわからない。ボクはもう、怖くてたまらなかつた。

(……暗視の魔法くらいは使えるでしょ?)

(……はい)

そして今度は部屋の中で音を出さないように、念話魔法でユキノがボクに話しかけてくる。どうやら彼女は、ボクに目の前でおこなわれている行為を見せるつもりらしい。

ボクは躊躇した。こんなにも強力な戦力が警戒をしている場所でおこなわれているような秘め事を知ってしまったら、今後、ボクの身がどうなるかわからない。しかし、ここで危険に飛び込まなくては、ボクの身の安全が確保できないだろう。

そうして、しばらく考えたボクは意を決すると、部屋の中で何がおこなわれているのかをこの目で確かめるために、暗視魔法を自分自身にかけていく。

……ちゅぷ♡……ちゅぷ♡

(し、師匠……)

この日、ボクの性癖が壊れた。

ずっと憧れていたボクの師匠が、異世界から来た男に簡
単に股を開いて、すっごく気持ちよさそうに腰を振って
いました5♡

シャル視点

(……師匠……そんなあ)

暗視魔法を使って視界を確保したボクの目に飛び込んできたのは、床にひざまずい
て、ユーリという少年のチンポをうっとりとした顔で口に咥えている師匠の姿だった。

師匠の顔がユーリの下半身にびったりとくっついて、口の中でなにかをモゴモゴと舐
めるように動かしている姿がとても卑猥である。

ずっとあこがれていたボクの師匠が、誰かとセックスをしている。その現実を受け入れられないボクの意識が、グニヤリと歪んでいった。

異性のペニスを口の中に根本まで咥えている師匠の小さな頬が、羞恥と興奮によってうつとりとピンク色に火照ってしまっているのが、ボクにとってひどくショックだった。

……くぶ……くぶぶう♡……クチュ♡

縦に長くてやわらかい肉の棒が、若い少女の顔をした師匠の口の中でクプクプと舐め転がされているのが彼女の頬と舌が動く様子で簡単にわかってしまう。

師匠が卑猥な肉の棒を口の中で気持ちよさそうに舐め転がしている感触が、透明になつてのぞいているボクにも伝わってきそうな生々しい光景だった。

「……うふふふ♡……おつきくなってきたのじゃ♡」

そして、師匠の口の中に埋まり込んでいたペニスがムクムクと大きくなると、次第に彼女の口の中にはおさまりきれなくなってくる。

師匠は硬く勃起して自分の口の中におさまりきれなくなったペニスをうつつとりと眺めながら、嬉しそうな声を出していた。

そして師匠は、完全に勃起した上向きのペニスを先っぽから口にくわえ込むと、今度は顔を前後にピストン運動させながら口内で気持ちよさそうに刺激していく。

140センチメートルほどの小さな体にEカップの巨乳をプルプルと揺らしながら、金髪ロリ顔の師匠が懸命にフェラを続けている光景にボクはあ然としていた。

……とぷ♡……とぷ♡

そしてしばらくの卑猥な口淫のあとに、ペニスの先からあふれ出てくる白い液体を師匠はうつつりとした顔で口を開けながら口内に注ぎ込まれていく。

ボクがあこがれている師匠の口の中が、男の精液に汚されていた。

「……ひっぱい♡……れたのお♡……っ♡……っ♡」

……ごつくんっ♡

そして舌の上に乗った大量の精液を見せびらかすようにして口を開けっ放しにした師匠が、自分の口を使って搾り取った精液を嬉しそうに舌で舐め回したあとに、ゴクリと一気に飲み干していく。

ボクの師匠が、あの少年によっていつのまにか心を変えられてしまった。ボクは、その現実を理解する。

「ご主人さまが、これを使えって」

師匠の知らなかった痴態を見せてつけられて心の整理が追いつかないボクの顔に向かって、突然、そんな言葉とともに霧状のなにかがふきかけられることになった。

すると、その瞬間から、ボクの意識がピンク色に染められていくことになる。ボクの体が熱く火照って、自分が自分じゃないくらいに敏感になっていく。

(……挿れたい♡……挿れたい♡……挿れたい♡……あの♡……おつきいチンポ……ボクの♡……おまんこに♡……啜えたい♡)

ボクの頭から、自分でも信じられないような欲望と思考が次々とあふれでてきていた。

師匠が先程までいやらしい顔をして舐め啜っていたあの卑猥な肉の棒を、今すぐにもボクのおまんこに挿れたい。ボクの頭が、その考えだけで一色に染まっていく。

女の子二人だけで今まで築き上げてきたボクと師匠の関係が、一人の男のチンポによつていまドロドロに汚されている。

そんな状況なのに、強くうずき始めたボクのおまんこから欲望によつてトロトロに染

み出してきたヌチャヌチャの愛液が、ボクが身につけている下着をべっとり濡らしていくのが下半身の感覚でわかってしまう。

しかし、ユキノによって体を拘束され続けているボクは、自分の手でそれをさわってオナニーすることもできなかつた。

こうしてボクはおあずけをされた状態で、師匠の体がユーリによって犯されていく姿を見せつけられることになる。

「…………ユーリ♡…………しゅ♡」

……くばあ♡

小さな体をベッドの上に横たえた師匠が、両脚を左右に開いてユーリを誘っている。

師匠の胸にふくらむプルプルで張りのあるスライムみたいな巨乳が、仰向けの体勢のまま重力に垂れて体の横からムツチリとはみ出している光景がひどく卑猥だった。

そしてボクは、小さな両手でくぱあと左右に広げられた彼女のグチャグチャに濡れたおまんこが、陰毛を剃られてツルツルの無毛な姿に変えられてしまっていることに気がつく。

大人びてお姉さんのようだった幼女姿の師匠が、さらに卑猥な少女へと変わっていた。

ツルツルのパイパン姿になったことによつて、師匠が自分の両手で広げているおまんこのピラピラした陰唇のやわらかそうな感触が、彼女の痴態を近くで見ているボクにまで伝わってきてしまう。

そして、そんな師匠の小さな体の上にのしかかったユーリのペニスの先が、ボク目の前でピトリと彼女のおまんこの入り口にあてがわれていった。

性的に興奮しきってしまったボクは、荒く熱くなる自分の呼吸すらも抑えることができない。最低なことに、ボクは早く師匠がユーリとセックスを始めるのを見たくてたま

らなかった。

さらに、今すぐに濡れきったおまんこをいじりたくてしかたがないボクは、拘束された状態で立ったままヘコヘコと情けなく腰を前後に揺らしてしまっている。ボクのが、少しずつ壊れてきていた。

でも、こうでもしていないと、強くなり続けるおまんこのキュンとした切ないうずきに耐えきれずに、ボクは発狂してしまいそうだったのだ。

……にゅううううん♡

「……ユーリのチンポ♡……おつきくて♡……なか♡……すっごい♡……広がる♡」

そしてボクの目の前で、師匠の小さなおまんこの穴をぼっこりと丸く広げるようにして、ユーリのチンポがヌルリとした感触を生々しく感じさせる様子で膣の内部に侵入していく。

あんなにも大きなペニスを慣れたようにニルンとおまんこの中に啜え込む師匠の様子から、すでに幾度も、ボクの知らないところで彼女はこうしてユーリと欲望にまみれたセックスを繰り返していることがうかがえた。

でも、師匠の小さな体に正常位の体位でのしかかるユーリの気持ちよさそうなチンポがズポズポと膣穴に出入りしていく光景をただ、ボクはだまって見ていることしかできない。

「……師匠のおまんこ♡……すっごい♡……広がっているよぉ♡」

「あら、すっごい興奮しちゃってる」

ユーリのチンポがヌチュヌチュと音を立てて出入りしている師匠の卑猥なおまんこのヌルヌルな丸い穴から目が離せなくなったボクの姿をみて、ユキノがそんなことをつぶやいていた。

でも、大きなチンポをおいしそうに啜え込んで、おまんこの周りの淫肉をポツコリと

盛り広げながらネチヨネチヨと硬い肉の棒が出入りし続けている師匠の愛液でネバついた割れ目から、心が興奮しきってしまったボクはもう目が離せない。

「でも、もう少ししたら、シャルロットちゃんのおまんこにも、ご主人さまがチンポを挿れてくれるから、待っててね」

（——早く♡——挿れたい♡——もうっ♡——我慢できない♡）

ボクの耳元でユキノがささやいた言葉を聞いた瞬間に、ボクの頭から理性が飛んだのがわかった。

こうして望まぬまま体を発情させられてしまったボクの心は、師匠の体にチンポをねじ込まれている光景を見せつけられているだけで堕ちた。

ボクのおまんこがキュンと切なくうずき、まだ処女なのに、ボクは目の前で師匠とまぐわっているユーリという少年のペニスを早く肉体に啜え込みたくてたまらない。

むことになる。ボクの体にはもう、抵抗する気力がまったく残っていないかった。

まるでおもらしをしたみたいに愛液でベツトリと濡れきっていたボクの下着が、地面に座り込んだことで下半身に強く押し付けられて、それがネチヨネチヨになってボクのおまんこに張り付いてくる。

その生温かくてヌルヌルとしている自分の愛液の感触を下半身の割れ目に感じながら、ボクは先程からベッドの上で正常位のまま気持ちよさそうに股を開いて腰を振っている師匠の姿を見続けていた。

「——あつ♡——あはああああつ♡——んんんんつ♡——んくううううつ♡」

……ンヂユウ♡……グジュルつ♡……クプつ♡……クプつ♡

(……師匠のおまんこに♡……男の人のチンポが♡……ズポズポ♡……出たりはいつたりしてるの♡……すっごい♡……気持ちよさそう♡)

ベッドの上で仰向けに寝て股を開いて、ユーリの体に両手でしがみつきながらチンポを受け入れ続けている師匠の下半身から、ボクは目が離せない。

卑猥に濡れてパツクリと割れた師匠のきれいな陰唇の下部に空いた膣穴を大きな円状にぼっこりと広げて、ユーリのチンポがズポズポと出入りを繰り返していく。

そして硬く尖った肉の棒がおまんこの中に卑猥な動きで出入りするたびに、ボクの師匠はすごく気持ちよさそうな声をあげていた。

師匠がベッドの上で甘く出し続ける聞いたこともないような快楽漬けになった叫び声に、ボクの体が共鳴するようにしてさらに興奮していく。

(……師匠♡……けものみたいな♡……すっごい声だしてる♡……それだけ♡……あのチンポが♡……気持ちいいのかな♡)

そしてそんな師匠のおまんこの穴からは、白くてべつとりと泡立つ卑猥な液体がドクドクと気持ちよさそうこぼれ落ちてくるのだ。

ユキノから教えてもらったのだが、あの白く泡立つ卑猥なおまんこ汁は本気汁といって、女の子の体が本気で気持ちよくなならないとでてこないものらしい。

そしてその本気汁を、あんなにも大量におまんこからドロドロと垂れ流している師匠の体は、いまどれほど気持ちよくなっているのだろう。

ボクは彼女の痴態を眺めながら、そんなことを想像していた。

(……セックス♡……すると♡……ボクのからだ♡……どうなっちゃうのかな♡)

ボクの頭はもう、このあとユーリとする予定のセックスのことしか考えられなくなっている。

そして、ボクはベッドの上で気持ちよさそうに腰を振る師匠の姿を眺めながら、自分がベッドの上でユーリと腰を振る感触を妄想していった。

すると、さらに性的な興奮を始めたボクの下半身が、グジュグジュと濡れながら熱く
なっていく。

「……………あつ♡……………あつ♡……………そこおつ♡……………弱いからあ♡……………いまあ♡……………あつ♡……………
突いちや♡……………んっ♡……………らめえっ♡——っ♡——っ♡——おっ♡——あっ♡……………
……………イッ♡グう♡」

ガク♡ガク♡ガク♡ガク♡

(……………師匠♡……………すっく……………気持ちよさそうにイッてる♡)

そしてベッドの上でおまんこの中にズツポリとチンポをねじ込まれている師匠が、イ
キながら気持ちよさそうにビクンビクンと体を跳ねさせた。

まるで全身のコントロールが効かなくなったみたい体中に痙攣させながら、意識を
飛ばしてしまった様子の師匠がメス顔でギユツとシーツを両手で握りしめて、股を開い
たまま絶頂に達する。

その現象と同時に師匠が腹の底から出したとろけるような嬌声から彼女がいま、ユーリのチンポに与えられたオーガズムで極上の快樂と幸福を味わっていることがうかがえた。

おまんこの穴にポツコリとユーリのチンポを啜え込みながらイツた師匠を見つめるボクの頭には、今までの日々の中で彼女と過ごしてきた思い出が次々とよみがえっていた。

厳しい態度でボクに魔法の修行をつけてくれた師匠。やさしい態度でボクのことを慰めてくれた師匠。

少女のように幼い顔で楽しそうに笑う師匠の顔が、ボクの頭の中に次々と浮かんでくる。

「んっおっ♡——んっおっ♡——おっおっおっおっおっおんっ♡」

ガクン♡ガクン♡ガクン♡

でも、強くて厳しかったあの師匠が、いまボクの目の前で簡単にイカされている。

ワガママで子供っぽいけど、すごく強くて誰にも負けることのなかった、最強だと
思っていたボクの師匠が、ユーリのチンポでよがり狂っていた。

ボクのがれの師匠が、チンポに負けて、壊されていく。

その光景に絶望しているはずなのに、いますぐボクもあになりたい。ボクの体も、あ
の凶悪なチンポでめちやくちやに壊して気持ちよくしてほしい。

そんな願いが、ボクの心からドロドロとあふれ出てくるのだ。

「……あつ♡……あつ♡……あつ♡……あつ♡……中に♡……すっごいの♡……でて
るう♡」

(……師匠♡……種付け♡……されちゃった♡)

そして最強だと信じて疑わなかったボクの師匠が、ベッドの上で仰向けになつて大股を開いた体勢でおまんこに種付けされていく。ボクはその光景をみているだけで、興奮でイキそうになつた。

ポツコリと大きな穴を広げてチンポを奥まで咥え込んでいる師匠のおまんこが、精液を中出しされながらきゆうきゆうと気持ちよさそうに収縮運動を繰り返している。

そして、よだれを垂らすようにして、奥におさまりきれなかったドロドロの白い精液が、師匠のおまんこの隙間からいやらしく陰唇を汚してドロつと一気に垂れ落ちてきた。

(——すっ(っ)い♡——すっ(っ)い♡——すっ(っ)い♡)

ボクは人生で初めて目撃する男女の生々しい営みに興奮しながら、自分の体が同じことをされたときにどれくらい気持ちよくなれるのかを想像する。

ボクもあんなふうに出しされちゃったら、どうなっちゃうんだろう。そして、ボクは一刻も早く、師匠と同じように膣内射精をされる快楽を経験してみたい。

ボクの心はもう、完全に壊れていた。

「——おほおほおほおっ♡——おっ♡——おっ♡——おっ♡——おっ♡」

……とぶ♡……とぶ♡

そして、小さな体でおまんこをボツコリと丸いチンポの形に広げながら膣内射精をされてる師匠が、聞いたこともないようなよがり声をあげていく。

どうやら彼女は、中出しをされながらさらに深くイッたようだ。

イキながら膣内射精の快楽を与えられていた師匠のパイパンでツルツルなおまんこが、ぴゅっぴゅっつと情けなくイキ潮を吹き出しながらベトベトに濡れていく。

そして中出しをされながらの連続絶頂に耐えきれなかった師匠は、そのまま眠るよう
に気絶してしまった。

ベッドの上で眠ってしまった師匠のおまんこからユーリのチンポが引き抜かれると、
愛液でグチュグチュに濡れた彼女の膣穴の奥からドロつと一気に大量の精液がこぼれ
落ちてくる。

その淫猥な光景を前にして、ボクはユーリとセックスをすることを決意した。

そしてユーリとの気持ちいい中出しセックスを師匠が、幸せそうな顔で眠っている。

「じゃあ、シャルロツテの部屋に行こうか」

「……………うん♡」

師匠とのセックスを終えて服を着たユーリが、透明化を解除したボクに声をかけてく

る。

これからボクは、彼とセックスをするんだ。そう意識した途端に、ボクの体に電流のような快感が走り始めた。

その快感によって完全にメスの顔になってしまったボクは、上目遣いで彼の顔を見上げながらすべてを受け入れていく。

今からボクはユーリとセックスをする。そのために、ボクは師匠を部屋に残して、彼を自分の部屋へと案内するのだ。

(…早くユーリとエッチしたい♡…エッチしたい♡…エッチしたい♡)

自分の部屋のドアを開けてユーリを室内に招待しているボクの頭はもう、これから彼とエッチすることしか考えられなくなっていた。

そして、部屋のドアを閉めて中からカギをかけると、ボクの体がユーリに強く抱きし

められる。

その瞬間からまるで追い詰められてしまった獲物のように、ボクの体はその場からまったく動けなくなった。

……くちゅ♡……くちゅ♡

(……ひゃあああああつ♡……今からボク♡……エッチしちゃうんだ♡……こんなふう
に処女を失うなんて♡……考えたこともなかったなあ♡)

「……んっ♡……はふうううっ♡……んちゅっ♡……くちゅっ♡」

そしてボクは立った体勢のままお互いの体をまぎぐり合いながら、ユーリと口づけを
交わす。ボクがする、人生で初めてのキスだった。

……んちゅ♡……じゅるるる♡……ちゅぶう♡……ちゅぶ♡

(……キス♡……なんれこれ♡……しゅっ♡ひ♡……気持ちいい♡)

すると、ユーリとする濃密なキスによって口内をザラザラした舌で蹂躪され始めたボクの体に、信じられないくらいに気持ちいいしびれがゾワゾワと広がり続けていくのがわかった。

ボクは初めて体験する種類の快感を味わいながら、ボクの師匠がユーリとセックスを
してあってあれだけうっとりとした顔をしていたことに納得してしまう。

ユーリとキスを重ねるたびに、ボクの子宮がキュンキュンと切なくうずいてたまらな
い。早くボクは、ユーリとエッチしたくてたまらなかつた。

キスだけでこんなにも気持ちいいなら、いまから彼とするセックスはどれだけ気持ち
いいのだろう。

ボクはベッドの上で乱れ狂っていた師匠の姿を思い浮かべると、自分もあれくらいに
めちやくちやになるまで全身を犯されてしまうのだという現実を理解した。

(…………キス♡…………気持ちよすぎて♡…………止められないよお♡)

…………んちゆる♡…………じゆるるるるっ♡…………ん♡じゆるるるっ♡

夢中になって人生で初めてのキスを続けるボクのおまんこが、もうグチャグチャに濡れきっていて我慢できない。

ボクはユーリの体にしがみついて、己の意志とは無関係にむしゃぶりつくようなキスが続けてしまう自分の体をなんとか引き離すと、かわいい声を絞り出して彼におねだりをする。

「…………ねえ♡…………ユーリ♡…………ボクのこと♡…………ベッドに♡…………連れて行って♡」

(…………ボク♡…………いまから♡…………ユーリと♡…………本当に♡…………エッチしちゃうんだ♡)

こうして、ボクが人生で初めてセックスを経験する夜が、始まったのである。

シヤル処女喪失 1♡

ユーリ視点

「……………はぁ♡……………はぁっ♡」

俺はキスをしただけでぐったりと脱力してしまった身長150センチメートルほどのシヤルの体を、お姫様抱っこでベッドまで運んでいく。

銀髪に左目を隠したショートカット姿の彼女の黄色い右目が、俺としたキスの快楽によつて切なくうるみきつていた。

前髪によつて隠された彼女の右目は紫色をした魔眼であり、分子構造を観察するように魔力の構造を知ることができるといわれる能力をもっている。俺はこの世界でも稀有なスキルを持つ彼女を墮として、これから俺の仲間に加えるつもりだった。

彼女は人生で初めて経験するキスの中で、俺に舌を吸われながら気持ちよさうに上半身をビクンビクンと跳ねさせている。

俺が与えた媚薬によつてすでに体が発情しきってしまった彼女は、俺にキスされるだけでもイッてしまいそうになるくらいにまで全身の性感が敏感になっていた。

ベッドの上に仰向けに寝かされたシャルは、俺とうつとりとした顔でキスをしながら、夢中になつて俺の舌に絡みついてきている。彼女の貞操は、すでに風前の灯だった。

……する♡……する♡

そして俺はゆっくりと、彼女が着ているフリルの付いた白いノースリーブのシャツと黒いスカートとを脱がしていく。

発情した体を抑えられずに、早く俺とセックスがしたくてたまらなくなつてしまったシャルはベッドの上に仰向けに寝た体勢のまま、まったくの無抵抗で俺に服を脱がされていた。

彼女が着ている白いノースリーブシャツを脱がすと、シャルが着ているシャツを内側から卑猥に盛り上げていたGカップの爆乳がぶるんとあらわになる。

白く透き通った彼女の肌の上に、若くて上向きにぶるんと持ち上がったままの、モチモチで弾力のある美しいおっぱいがぶるんぶるんと卑猥に揺れていた。

「……………どうしよう♡……………ボクう♡……………本当に♡……………ユーリと♡……………エッチ♡……………しちゃってる♡」

ベッドの上でピンク色と白色の縞模様をしたボーダ柄のかわいいパンツ一枚姿になってしまったシャルが、仰向けの体勢のまま両腕を使って恥ずかしそうにGカップの爆乳を隠している。

俺はそんなシャルの両腕をやさしく左右にのけると、彼女の爆乳を両手でムニムニともみほぐしていった。

シヤルの爆乳を両手で鷲掴みしている俺の手のひらに、やわらかくて張り付いてくるような、マシユマロみたいに心地いいむにゆむにゆな感触が温かい体温とともに伝わってくる。

……むにゆう♡……ふにいに♡……ふにゆんっ♡……ふにゆうん♡

「……ふくううううっ♡……んっ♡……あっ♡……はあっ♡」

ベッドの上で仰向けになって目をつむったまま俺におっぱいを愛撫され始めたシヤルが、体をモジモジと揺らしながら悩ましそうに甘い声を出し始めていた。

俺の両手にやわらかい乳房をふにゆふにゆと歪められるたびに、彼女は甘い吐息で深い呼吸を繰り返す。

異性におっぱいを触られるという淫らな行為が恥ずかしいのか、俺の両手に両胸をいじくられているシヤルはベッドの上で仰向けに寝た体勢のまま羞恥に耐える表情になって、両手にシーツをギュツと握りしめていた。

俺は両胸を俺にもまれながら両脚をモジモジと内股にしている彼女の体にさらに甘い快感を与えるために、興奮によつてガチガチに勃起してしまった彼女のピンク色したきれいな乳首をきゆうつとつねつてあげる。

……コリ♡……コリ♡……ぐにゆううう♡……むにゆっ♡

「……はああああああああん♡……あっ♡……あっ♡……あっ♡……あっ♡」

俺が両手を使つてシャルの乳首を卑猥にいじくりまわし始めると、まるで全身に電流が走り始めたみたいに彼女が体をクネクネと強く乱していった。

コネコネと俺の指につねられながら乳首をふり回される感触が気持ちいいのか、シャルの呼吸が強く早く乱れていくのがわかる。

そしてそのまま俺が彼女の乳首を両手の指でこね続けていくと、シャルが気持ちよさそうに甘い吐息を吐き出しながら、乳首だけでイッた。

ゾク♡ゾク♡ゾク♡

「~~~~♡~~~~♡……えっ♡……ボクう♡……乳首だけで♡……イカされたあ♡」

自分の体が乳首の快感だけでイッたことにあ然としながら、シャルが気持ちよさそうに上半身をビクンビクンと痙攣させている。

俺は軽い絶頂によつて意識が飛んでしまったシャルの隙をついて、この淫らな行為を進めるために彼女の下半身へと右手を移動させると、そのまま彼女の下着の中に手首をねじ込んでいく。

「——ひゃあああああっ♡——っ♡——っ♡……あっ♡」

自分はいている下着の中に異性の手が侵入してきた恥ずかしさによつて、ベッドの上でシャルが叫び声を上げた。

しかし、俺はそんな彼女の声を気にすることなく、大量に分泌されてしまった愛液の水分によってピットリとおまんこにくつついてしまっていた布地を引き剥がしながら、生温かくてネトネトと濡れているシャルのピンク色と白色のボーダー柄のパンツの中に右手をねじ込んでいく。

そして、俺はヌトつとした愛液にまみれた感触の中でやわらかい彼女の陰唇のビラビラを中指と人差し指でかき分けながら、焦らすようにしてシャルのおまんこの割れ目を指先で愛撫していった。

「——んっ♡——っ♡——っ♡——んきゅんっ♡——あっ♡——あっ♡——あっ♡」

俺が中指の腹を使って割れ目の中にあつた彼女のクリトリスを探り当てると、シャルはかわいい声を出しながらビクンと上半身を跳ねさせる。

そのまま俺は、自分のおまんこを異性にいじくられるという羞恥によって恥ずかしそうに頬を真っ赤に染めてしまったシャルの表情を観察しながら、彼女のクリトリスをやさしく時計回りにコネコネといじりまわしていった。

俺の中指と人差し指によってグチュグチュといじくられる愛液にまみれたシャルの
下着の中から、無音になった室内に向かつて卑猥な音が響き渡っていた。

俺は自分の右手がシャルのおまんこをいじくるたびに、粘液質な愛液が擦れてネチャ
ネチャと糸を引く淫らな感触を楽しみながら、彼女への愛撫を続けていく。

そして、チクチクと濡れる陰毛の感触を右手の手のひらで楽しみながらシャルのかわ
いく勃起した小さなクリトリスをこね回していると、快感に耐えきれなくなった彼女が
ビクンビクンと体を痙攣させて気持ちよさそうにイッた。

「——ふくうううううんっ♡——っ♡——あっ♡——あっ♡——あっ♡——あっ♡」

ゾク♡ゾク♡ゾク♡

こうして、人生で初めてセックスを経験しているシャルは俺の手によってセックスの
快感を経験して、それを体に記憶し、心を開発されていく。

順調に、彼女の体は俺と混じり合いながら大人の階段を昇り始めていた。

そしてクリトリスから指を離れた俺は焦らすようにして、再びクニクニとやわらかい陰唇を人差し指と中指を使つてかき分けながら、シヤルのおまんこをほぐして左右に開いていく。

俺の右手におまんこを焦らされ始めた彼女は、ベッドの上に仰向けに寝た体勢で右手の人差し指を口元に添えながら、もどかしそうな甘い吐息で呼吸を続けていた。

「……………ああああん♡……………あつ♡……………んっ♡」

おまんこの穴に俺の指が入りそうになるたびに、シヤルは悩ましそうな、焦れつたいようなあえぎ声をあげ続けている。

そして、しばらくおまんこの陰唇をネチヨネチヨにいじくられたあとに、俺の人差し指と中指の先が膣穴の入り口に添えられると彼女は歓喜の声をあげた。

……ニユルン♡

「…………ふわあああああああつ♡…………あ、っ♡…………あ、っ♡…………あ、っ♡…………あ、っ♡」

そして俺の指がニユルンといった感触でおまんこの中に簡単に入り込んでいくと、敏感な粘膜を直接指でいじくられるという快感によって、シヤルが目の前をチカチカと光らせながらおどろいたような声をあげる。

俺はそんなシヤルの下半身にねじ込んだ二本の指に膣肉から伝わる生温かい体温とヒダヒダとヌルヌルの愛液が混じり合った生々しい感触を味わいながら、初物であるシヤルのおまんこをグチャグチャにほぐしていく。

俺の指がおまんこに入り込んで内側から直接彼女の気持ちいいところを刺激していく感触がよほど気持ちいいのか、俺の右手によって手マンを受け始めたシヤルの顔がはしたなくもニヤけてしまっていた。

……ンヂユ♡ンヂユ♡ンヂユ♡

「……ボクのお♡……お腹の中あ♡……ユーリの♡……指で♡……直接♡……コネられてちやつてるう♡……あゝ♡……あゝ♡……これ♡……すつ♡……い♡……気持ちいい♡」

はしたなく開いた両脚のあいだに俺の右手をねじ込まれながら、仰向けの体勢で股を開いたシャルが恍惚の表情になって天井を見上げ続けている。

愛液によってグチャグチャに濡れたシャルのおまんこの中に生温かく埋まりこんだ俺の二本の指を上向きにして心地いいリズムで折り曲げていくと、卑猥な粘液がかき混ぜられる音が彼女の膣の中から次々と響いてきた。

ベッドの上で仰向けになって股を開いた体勢のまま俺の指を下半身に埋め込まれながら、おまんこからグチュグチュと粘膜をほじくられるとき特有の音色を響かせているシャルが気持ちよさそうに上半身をねじっていく。

愛液によってベツトリと濡れたパンツの中に手をねじ込んで手マンを続ける俺の手

俺はそんな彼女のおまんこに顔を近づけると、濡れてパツクリと開き始めたシャルのやわらかい陰唇の割れ目に舌をはわせていく。

「——まってっ♡——そんなところっ♡——汚いからあっ♡——舐めちやダメえっ♡——
 っ♡——っ♡——なにこれ、っ♡——あっ♡——おまんこっ♡——とろけてるう♡」

敏感な粘膜を直接ザラザラした俺の舌で舐め取られ始めると、人生で初めて味わうクンニの快感に、シャルが桃色の吐息で呼吸を開始した。

仰向けの体勢で股を開いておまんこに俺の顔をうずめられたシャルが、悩ましそうな声をあげながら腰を浮かせてへこへこと気持ちよさそうに動かしている。

初めて体験するクンニが強すぎて、彼女は必死に快感を逃がそうと腰を浮かして気持ちいいポイントをずらそうとするが、俺は逃がすことなくシャルのおまんこにクンニを続けていく。

そうして強すぎる快感から逃げようとし続けるシャルのツンと勃起したクリトリス

を俺が口で吸い取りながら口内でコロコロと素早く転がしてあげると、彼女の体は簡単にイツた。

しかし、俺は休憩をすることなくクリイキをしてヒクヒクと痙攣しているシャルの腔穴に素早く舌をねじ込むと、そのまま彼女のおまんこにクンニを続けてしまう。

……ン　ヂユるううう　♡……グヂユルううう　♡……ジユルルルルううう　♡

「——ん　っ　♡——ん　っ　♡——それっ　♡——らめえっ　♡——らめらつてええええっ
♡」

ガク♡ガク♡ガク♡

俺の舌におまんこの穴をクンニされながら、ベッドの上で仰向けになったシャルが股を開いた格好のまま、生々しい愛撫の気持ちよさに上半身をぎゅつと強くのけぞらせていった。

——ニ、チュウウウつ♡——グヂユルウウつ♡——ンヂいつ♡——ンヂいつ♡——
ンヂいつ♡

「——ボクのお♡——おまんこ♡つ♡——ユーリにつ♡——壊されてるう♡——ボク
のからだっ♡——気持ちよすぎてえっ♡——おかしぐなりゆううつ♡——あ♡つ♡
——あ♡つ♡——あ♡ ああああああ♡つ♡」

ガクン♡ガクン♡ガクン♡

そして俺は初めてGスポットを舌先でクンニされてイッたばかりのシャルのおまんに再び人差し指と中指をねじ込むと、さらに彼女のおまんこの中をグチャグチャに氣持ちよくこねくり回していくことにする。

そのまま、俺が二本の指を使ってシャルの気持ちいい肉ヒダの壺をグップグップといつた感触で愛液ごとかき回していくと、連続絶頂の快楽に無我夢中になっていたシャルがさらによがり狂うことになった。

さらに今度は、仰向けに寝た体勢の彼女のおまんこの手前の下側にあるザラザラとした感触の裏Gスポットと呼ばれる性感帯を人差し指と中指の腹で俺がグチュグチュと左右にこすり始めると、あつというまにシャルの体が連続で絶頂に達していく。

——グチいつ♡——ニ、ジイっ♡——グジュルう♡——グジュルうっ♡

「——ひぎいいいいいつ♡——あ、っ♡——あ、っ♡——ボクのおまんこ♡——イ、グのお♡——止まってくれな、いいいいいつ♡——あ、あああああああっ♡」

——ヒクう♡——ヒクう♡——ヒクう♡

でも、まだまだ俺は彼女を休ませない。

おまんこの手前側にある裏Gスポットを責めるために下向きにしていた俺の二本の指を俺はそのままシャルのおまんこの奥までニルンとねじ込んでいくと、今度は奥裏Gスポットと呼ばれる性感帯を前後に押し込むようにして責め始める。

そして依然として、快樂によつて分泌された濃い愛液によつておまんこをベトベトに濡らしながら、仰向けの体勢で俺に下半身をいじくり回されているシャルがベッドのシーツを握りしめながら体をねじり続けていった。

「——ん、お、っ♡——ん、お、っ♡——師匠う♡——どうしよう♡——ボクの♡——おまんこおっ♡——気持ちよくてえっ♡——もうっ♡——イクのっ♡——とめられないうよおおおっ♡——あ、っ♡——あ、っ♡」

さらに、俺はなんとか強烈すぎる快樂から逃げようとともかく彼女の裏Gスポットを刺激するために裏返しにしていた手首を今度はシャルのお腹側に向けると、そのまま子宮の入口付近にある彼女の性感帯を連続して責め続けていく。

そして、シャルのおまんこに根元まで埋め込んだ二本の指を俺がそのまま上下に大きく揺さぶっていくと、俺の指によつておまんこ全体をすっごく気持ちよくグプグプとかき混ぜられてしまった彼女が仰向けの体勢のまま、大腿を開いて上半身をガチガチにのけぞらせてまたイッた。

彼女の両手に強く握られ続けて、彼女が身をよがらせ続けたベッドの白いシートが、ひどくシワだらけになっている。

そんな状態のベッドの上で、俺はシャルの下半身に空いた膣壺の奥までを指を使って丹念にかき回していく感触を指に感じながら、ふたたびシャルのおまんこを気持ちよく圧迫し続けていく。

俺から受けている手マンがよほど気持ちいいのか、俺の人指と中指を根元まで咥え込んでいるシャルのおまんこがきゆうっと反射的に締まりながら、強く一定のリズムで収縮運動を繰り返していた。

そして、膣の痙攣運動によってお腹の中が揺らされたことで、ときれときれになったシャルの甘い叫び声を聞きながら、俺は根元までねじ込んだ二本の指をグネグネと折り曲げ続けて彼女のおまんこにある性感帯を手前から奥まで一気に刺激していく。

——チュプ♡チュプ♡チュプ♡チュプ♡——チュプう♡

「——んぎぎいいいい♡——んぐううう♡——っ♡——っ♡——んゝあゝあゝあゝっ♡——おゝおゝおゝおゝおゝおゝ♡」

ガクン♡ガクン♡ガクン♡

真面目で優等生な魔法使いであった授業中のシャルの姿からは考えられないくらいにはしたない格好で両脚をM字に開いて、俺の指をおまんこに啜え込んだシャルが気持ちよさそうに今日一番、深くイク。

連続絶頂をさせられ続けてしまった彼女は俺から受ける手マンのあまりの快楽に、ついにはイキんだような叫び声を上げながら、気持ちよさそうに膣の痙攣運動を繰り返していた。

そして、初めての連続絶頂によってあふれ出たよだれと涙でベチョベチョに汚れてしまったシャルの顔を上からのぞきこみながら、服を脱いだ俺は彼女の体にのしかかるところにする。

……くぷっ♡

「——っ♡——っ♡——っ♡」

そして俺がシャルのおまんこの穴にペニスの先を押しつけると、濡れた膣穴がくぷつと広がる感触がさらに俺の亀頭に伝わってくる。

初めてするセックスに緊張してグルグルと瞳を回してしまった様子のシャルが、ベッドの上で股を開いた体勢のまま強い興奮による甘い呼吸を繰り返していた。

羞恥と快感の連続で全身がじつとりと汗ばんでしまったシャルのきれいな白い肌の鎖骨のあたりまでが、性的興奮と卑猥な運動が生んだ熱によって艶やかなピンク色に火照りきっている。

「……ねえ♡……エッチ♡……しよ♡」

緊張と羞恥の中で声を振り絞るようにして、仰向けになって俺を見上げるシャルが小

さな声をつぶやく。

正常位の格好で俺を見つめ続ける彼女のかわいい黄色と紫色のオッドアイが、欲望と快楽によってドロリと濁ってそのきれいな輝きを完全に失っていた。

「——ふうふうふうふうつ♡——ふうふうふうふうつ♡——ふうふうふうふうつ♡」

発情しきった体で体験する初めてのセックスに、期待に満ちた顔でシャルがまだチンポが入ってこないのかといった様子で、自分のおまんこをのぞき込んでいる。

もう彼女は、一刻も早く俺とセックスがしたくて待ちきれないようだ。

俺はそんな彼女の下半身に向かってあてがっていた腰を前に押し込むと、ゆつくりとシャルの初物のおまんこに勃起したチンポを挿入していく。

ついに、俺とシャルとのセックスが始まった。

シャル処女喪失 2♡

……にゅうううううんっ♡

「——はああああんっ♡——っ♡——っ♡——あっ♡」

ねっとりとした感触の膣肉の穴を開きながら、俺のチンポがシャルの体内にゆつくりと侵入していく。そして亀頭までが生温かい彼女のおまんこに埋まりこむと、体が発情しきつて早く俺とセックスを始めたい彼女が歓喜の声をあげた。

……ぴと♡

「……いっいっ……っ♡」

俺のペニスに、シャルの処女膜が引つかかるのがわかった。彼女も自分の処女膜が今

から失われようとしていることが感覚でわかるのか、ベッドの上で仰向けになって正常位の体勢で俺を見上げながら、欲望に染まった瞳で俺に肯定の言葉をつぶやく。

そして俺は股をM字に開いたまま仰向けになつて俺のチンポを待ち構えているシャルの両脚のあいだに向かって腰を押し込むと、根元まで一気にペニスを挿入していった。

(……シャルの処女、いただきます)

……ぷちっ
♡

「~~~~♡~~~~♡——っ♡——っ♡——っ♡——っ♡」

破瓜の痛みに身をねじりながら、黄色と紫色のオッドアイに涙をためたシャルがこの心地よさを待ちわびていたかのように身悶えている。無事に彼女は、俺のチンポで大人になった。

自分の体が少女から大人の女性へと変わった実感を感じながら、正常位の体勢で股を開いたままのシヤルが自分のおまんこに初めて硬い肉の棒が侵入しているという異物感を味わっている。

……グジュっ♡……ンヂユっ♡……ンヂユっ♡

「——あっ♡——あっ♡——ああああああっ♡——んっ♡——あっ♡」

そして俺は処女膜が破れた痛みを取り除くために彼女の体に回復魔法をかけると、そのまま腰を振り始める。

すると、自分が左右に開いた両脚のあいだに異性が腰を振って、おまんこの中に硬いチンポをズポズポと出し入れしていくという体験を生まれて初めて知ったばかりのシヤルが、その快感に甘い声を出しながら身をよじらせていった。

「——ボクのお腹の中♡——こすれて♡——グリユングリユンって♡——なってるうう♡——これっ♡——気持ちいいっ♡——あっ♡——あっ♡」

俺のチンポをねつとりと濡れたおまんこの中に入りさせながら、M字に股を開いたシャルが、初めてのセックスの感想をつぶやく。

俺はそんなシャルの体にさらに気持ちいい思いをさせるために、カリを使って彼女の膣肉をたつぷりと奥までえぐっていった。

「——んぎい♡——あっ♡——っ♡——これっ♡——ダメっ♡——イ、グうっ♡」

俺のチンポに気持ちよく膣肉をグチャグチャとかき混ぜられながら、人生で初めての中イキに達したシャルが優等生とは思えないようなはしたない声をベッドの上で出す。

初めての中イキによって気持ちよさそうに膣肉をヒクヒクと痙攣運動させながら、セックスの途中で深くイッたシャルがベッドの上で仰向けになった体勢で上半身を強くのけぞらせていた。

——ニ、ヂイっ♡——ニ、ヂイっ♡——ニ、ヂイっ♡

「んあっ♡——あっ♡——あっ♡——あっ♡——あっ♡」

そして俺が初めての中イキに意識を甘く飛ばしているシャルのおまんこに向かって再び腰を振り始めると、絶頂を経験してさらに敏感になった膣肉をチンポで直接こすられながら彼女がよがり狂う。

——クプうっ♡——グプうっ♡——グプうっ♡

「——チンポおおおお♡——にゃんらこれえええ♡——気持ちよしゆぎりゆうう♡」

正常位の体位になったシャルのおまんこを押しつぶすようにして、俺のペニスをグラインドさせながら彼女の体内の奥深くにまで出入りさせていくと、心地よさそうにセックスの快感によがっているシャルのおまんこがベトベトになって糸を引く愛液によって卑猥な音を出していた。

ベッドの上で股を開いて仰向けになった体勢のまま両脚をM字に開いて俺のチンポに夢中になっているシャルの両胸では、プルンプルンと俺が腰を振るリズムで揺れる爆乳がムツチリと柔らかかそうな感触のままピンク色の乳首をツンと上に向けていた。

俺はそんなシャルの美しい爆乳を両手で鷲掴みすると、さらに腰を振るペースを早めていく。

——むにゆう♡——むにゆう♡

「……あつ♡……つ♡……んっ♡……ふくうううっ♡」

おまんこの奥までペニスを啜えて腰を振りながらおっぱいを揉まれたことでさらに快感が増したのか、俺とセックスを続けている彼女はいきむようにして歯を食いしばりながら気持ちよさそうによだれを垂らしてしまった。

俺のスキルによって刻まれてしまった淫紋がうっすらと黒く、シャルのお腹に浮かび上がってきている。この淫紋が完成してピンク色に光り輝けば、彼女の体はもう俺と

セックスをすることしか考えられなくなる。

そして、俺はこの淫紋を完成させる際にシヤルの体に極上の快楽を与えるために、思いついたあることを実行してみることにした。

「……ねえっ♡……ボクの体っ♡……なにかっ♡……変だよおっ♡——あ、っ♡——あ、っ♡」

俺とセックスを続けながら自分の体に違和感を感じたシヤルが、俺に疑問をぶつけてきている。

俺は彼女とセックスをしながら邪術という種類の魔法を使い、シヤルの体が絶頂できないように封じてしまったのだ。

先程まで俺とのセックスで気持ちよくイキまくっていたシヤルは、突然、自分の体が絶頂できなくなってしまうことに戸惑いの声をあげていた。

しかし、絶頂できないといつても、俺とのセックスの気持ちよさ自体は変わらない。俺はイクことができなくなってもどかしそうによりがり声を上げ続けるシャルのおまんに向かつて、俺のチンポをグジュグジュと出入りさせていった。

——又、ヂュっ♡——又、ヂュっ♡——又、ヂュっ♡

「——ボクのおまんこお♡——気持ちいいのにつ♡——いけないっ♡——イキたいっ♡——イキたいっ♡——イキたいっ♡——イキたいっ♡——イキたいっ♡——イキたいっ♡——」

絶頂を封じられたことで解放されずに体内にたまり続ける快楽に歯を食いしばりながら、体をよじつたシャルがもどかしそうに声をあげる。

俺の邪術によって、真面目で優等生で自制心の強かったシャルが、俺のチンポをおまんこに啜え込みながらイクことしか考えられない淫乱なメスに変わってしまった。

そしてイクことができずに溜まり続けるセックスの快楽によって、シャルが気持ちよさそうに背中をのけぞらせながら上半身を痙攣させていく。

セックスの中で絶頂することができないおまんこに快感が溜まって敏感になりすぎたために、俺のピストン運動の一突き一突きが、シャルにとって全身の筋肉が硬直してしまうくらいに気持ちよくなってしまっていた。

……グジュルう♡……グジュルう♡……グジュルうううう♡

「——ボクの♡——おまんこ♡——ユーリのチンポにつ♡——こわされてる♡——んあっ♡——んぎぎいいっ♡」

おまんこの穴から俺のチンポを一突きされるたびに、ベトベトに糸を引く彼女の本気が汗が室内に卑猥な音を響かせている。

意識が飛びそうになるくらいに気持ちいいピストン運動をされながらベッドの上で俺と腰を振るセックスがお気に召したのか、無我夢中になっておまんこに俺のチンポを出入りさせているシャルは、その瞳にピンク色のハートマークをくつきりと浮かべてしまっていた。

そして、うつとりと気持ちよきそうによだれを垂らして意識を飛ばしながら正常位の体勢で天井を見つめ続ける彼女の心にとどめを刺すために、俺はシャルの子宮に精液を注ぎ込むことにする。

俺が今回彼女の中に出すのは、俺の精液が粘膜に直接触れた瞬間に先ほど俺がシャルにかけてイケなくなる邪術が解呪される浄化魔法つきの精液だ。

さぞかし、シャルは喜んでくれることだろう。

「——いいよおっ♡——ボクのっ♡——ナカにつ♡——ユーリのっ♡——せーえきっ♡
——いっばいっ♡——だしてっ♡」

俺がピストン運動を続けながら彼女に膣内射精することを伝えると、初めてのセックスを覚えたばかりのシャルが甘えながら好奇心旺盛な様子で俺に肯定の言葉を返してくる。

先程、自分の師匠がとっても気持ちよさそうに俺に中出しされる瞬間を目撃してしまった彼女は、今度は自分のおまんこに俺の精液を注ぎ込まれると、自分の体がどうなってしまうのかを体験してみたくてしかたがないようだ。

そして俺は人生で初めて味わう中出しの快楽にワクワクしながら、正常位の体位で俺と腰を振るシャルのおまんこの奥深くにペニスをねじ込むと、そのまま精液をたつぷりと放出していった。

——とぶう♡——とぶう♡——とぶう♡

「——っ♡——っ♡——なにこゝれっ♡——あゝがあああっ♡——おゝっ♡——おゝっ♡——おゝっ♡」

ガク♡ガク♡ガク♡

俺の精液を膣の中に注ぎ込まれた瞬間にシャルが気持ちよさそうに上半身をのけぞらせると、次の瞬間にはとまどいの声をあげることになる。

強すぎる快樂の波に体中の筋肉がコントロールできぬまま収縮運動を始めてしまった彼女は、深くときれときれに呼吸をしながら、そのきれいなオツドアイをどろりと快樂に濁していった。

「……くふうううううううっ♡……くふうううううううっ♡……くふうううううううっ♡」

ガク♡ガク♡ガク♡ガク♡

イキ終わったと思つたら、ふたたび引き止められていた絶頂によつて、体中が気持ちよく痙攣を繰り返していく。その終わらない絶頂の波によつて、シャルの意識が快樂に丸ごと飲み込まれてグニヤグニヤに歪んでいるのがわかった。

俺はそんな彼女の体をさらに快樂漬けにするために彼女の下半身に手をやると、膣穴に俺のチンポを咥え込んだままイッている彼女のクリトリスを親指の腹でグニグニと強く押しつぶしていく。

……グニグニグニっ♡

「——ん、あ、つつつつ♡——い、ま、あつ♡——クリつ♡——さわ、る
 なあああああつ♡——あ、アああああアつ♡——ア、ああアつ♡——あ、つ
 ♡」

ガク♡ガク♡ガク♡

強すぎる快樂に無我夢中になったシャルが、乱暴な言葉で俺を止めようとする。しかし、すぐに快樂の濁流に飲み込まれるようにして、正常位の体勢でガニ股になった彼女の体がまたイツた。

「——ん、ぐううううううつ♡——ぎぎぎいいいつ♡——つ♡——あ、あ、つ♡」
 ——ビクンつ♡——ビクンつ♡ビクンつ♡ビクンつ♡

そしてガニ股にはしたなく股をひらいた体勢のままイキんで、両手でベッドのシーツをしわくच्याに握りながら、シャルが気持ちよさそうに全身をガクンガクンとのけぞら

でみると、ふたたび自分の体におとずれた中出しの甘い快樂によつて、かわいい瞳をグルンとうわずらせながらシャルが意識を飛ばす。

もともと俺の精液には女の子を夢中にさせる媚薬成分が含まれていて、そんな俺の精液をイキ続けているおまんこにさらに注がれてしまった彼女はついに、全身を気持ちよく痙攣させながら意識を飛ばしてしまつていた。

——グヂユっ♡——グヂユっ♡——グヂユっ♡

「今日から、シャルは俺の女だ。いいな？」

「——はひいいいいっ♡——あ、っ♡——っ♡——わかりまひたあっ♡——きょうからっ♡——わらひはあっ♡——ユーリのっ♡——おんなれすううっ♡」

俺がぐったりと力が抜けてしまったシャルの体を抱きしめながらピストン運動を再開し、精液を中に注ぎ込みながら彼女の膣肉をチンポでえぐっていくと、快樂によつて精神をどろどろに濁されてしまったシャルが、うつろになつて腰を振る。

俺とのセックスが気持ちよすぎて体が動かなくなってしまう彼女、ベッドの上で仰向けに寝た体勢でガニ股に下半身を開いたまま俺のピストン運動をおまんこに受け入れていた。

勇者たちに魔法の教師をしているときの優等生で真面目な彼女の姿からは想像もできないような、卑猥なガニ股姿でおまんここと陰毛をぜんぶ俺にさらしながら、陰唇まわりをベトベトの淫液まみれにしたシヤルがベッドの上で正常位の体勢になって俺と腰を振っていく。

俺がそんな彼女の耳元で彼女の心にとどめを刺す言葉をやさしく伝えると、シヤルはうつろな意識で俺と腰を振りながら、どっぴりと快楽の世界に堕ちていった。

「シヤル、愛してるよ」

「……はああああああんっ♡……わたしもお♡……好き♡……ユーリのことお♡……大好き♡」

そして俺がそのまま彼女の耳元で愛の言葉をささやきながら腰を振り続けていくと、無我夢中になったシャルがだいしゆきほーるどで俺の全身にしがみついてくる。

そのまま俺は彼女の両手両足にしがみつかれながら子宮を押しつぶすようにしてペニスを膣穴にねじ込むと、たつぷりと彼女の中に精液を注ぎ込んでいった。

……とぶうっ♡……とぶうっ♡

「くふううううううううううっ♡——んっ♡——あっ♡——んっ♡おっ???
おっ♡——ボクのっ♡——からっだあっ?!——とろっけるうっ?!——これっ!!!
——しゆきいいっ♡——しあわせええっ♡——きもっひいいいい♡」

ゾク♡ゾク♡ゾク♡ゾク♡

最後のとどめとなった膣内射精によりシャルの体に刻んだ俺の淫紋が完成すると、さらに体の感度が増してしまった彼女が全身を快樂にとろけさせながらさらにだいしゆ

きほーるどの体勢で俺にしがみついてくる。

俺の淫紋が完成を迎えたことで、シャルのおへその下に刻み込まれていた模様がピンク色に妖しく光り輝いていた。

淫紋の効果で俺の精液を粘膜に吸収したときに意識が飛ぶような快楽を味わえるように生まれ変わったおまんこで味わう初めての膣内射精を受けて、その快楽に意識を飛ばさないように耐えるシャルが、自分の両頬がふくらんでしまうくらいに強く息を吐き出していた。

……クヂユルっ♡……ニッジュルっ♡……ジュルルううううっ♡

「……はわあああああああつ♡……ボクう♡……ユーリに♡……初めてを奪われて♡……女の子にされたあ♡」

そして俺がそんなシャルのくちびるに濃密なキスを重ねていくと、意識が溶けて消えてしまうような快楽の中でシャルが気を失っていく。どうやらここが、彼女の限界のよ

新たな仲間歓迎の気持ちを感じながらベッドから立ち上がった。

「……………、主人様あ♡」

「……………ね、ねえ♡……………わたしたちにも♡……………してくれるのよね？」

そんな俺に向かって、護衛のためにずっと俺とシヤルとのセックスを隠れて見守っていたユキノとリンネがおねだりをするように声をかけてくる。彼女たちの瞳は、とても物欲しそうに甘えながら俺のイチモツを見つめ続けていた。

「ふたりとも、部屋を移動したら、続きをしようか」

「——はい♡——ご主人さま♡」

「——えへへっ♡——いきなりどつかに転移しちゃったご主人さまとっ♡——ひさしぶりのエッチだっ♡」

俺のために仕事をしてきている彼女たちにも、ご褒美をあげなくてはならないからな。

……ジュルルうう♡……グジュルうううう♡

「……はむうっ♡……んちゅっ♡……っ♡……あっ♡……ご主人さまとのキスっ♡……ひさいしぶりいっ♡……あむっ♡……じゅるうっ♡」

「——ちよつとご主人さまっ♡——リンネのおっぱいばかり揉んでっ♡——わたしがちよつと♡——ツルペタだからっ♡——ずるいわよおっ♡——っ♡——っ♡——まっ♡——いきなりっ♡——クリっ♡——ツネられるとおっ♡——っ♡……あっ♡……イクうっ♡」

ガクン♡ガクン♡ガクン♡

俺はうれしそうにあとをついてくるユキノとリンネを俺が宿泊している小屋に連れ込むと、彼女たちとたっぷりと中出しセックスを続けるのであった。

ずっと両思いだと思っていた爆乳でボーイッシュな幼なじみが、僕の知らない所で僕以外の男に股を開いてすっごく気持ちよさそうに腰を振っていました1

ケータ視点

僕の名前は真都谷ケータ。この春、高校三年生になったばかりの健全な男子だ。僕は陸上部に所属していて、今日も激しい夏のインターハイに向けての練習に励んでいた。

「ケータ。一緒に帰ろー!」

そして僕に声をかけてくれているかわいい女の子が、幼なじみの笹木レイナ。黒髪のショートカットに気が強くてクールなツリ目をしている、美人系の女の子だ。

さらにはモデルみたいに整った顔に日カップの爆乳を持つ彼女はその美貌から、学校中の男子が狙っていると噂されるほどにモテている。

なぜ、そんな彼女と僕がこうして一緒に帰っているのかというと、僕たちの親同士が知り合いで家も近いということから、レイナと僕は小さい頃からずっと一緒に遊んだりしているからだ。

レイナと僕は小中高とずっと通う学校が同じで家も隣同士ということから、こうして一緒に家に帰ることが通例になっていた。

レイナは彼女が所属しているバスケットボール部のエースで、学校の規則によりお互いの部活が終わる時間が同じことから、こうして高校生になっても僕と彼女は一緒に家まで帰ることができている。

「おまえらー！もう、付き合っちゃえよー！」

「う、うるさい！」

高校一年生の頃からずっと一緒に帰っている僕たちの姿を目撃したクラスメイトが、いつものように僕たちをからかってくる。僕たちが毎日一緒に下校するという行為は、学校中で有名になってしまっていた。これも、レイナの美貌が持つ影響力なのだろう。

僕たちを見て楽しそうにチャカしているクラスメイトにむかって、いつものようにレイナが乱暴な言葉遣いで反論している。

気が強くて少しボーイッシュなところがある彼女は、こうしてたまに乱暴な言葉を使う癖があった。

黒髪のショートカットに部活終わりに着替えた白いワイシャツと紺色のスカート姿のレイナと、僕は暗くなつた帰り道を一緒に歩く。

もうすぐ夏を迎えようとしている時期の、少し蒸し暑い夜だった。

「ねえ。……ケータって、好きな人、いる？」

何気ない会話をしながらいつものように帰る道の中、突然、レイナが僕に真剣な声で質問をしてきた。突然のできごとに、僕は一瞬、思考停止をしてしまう。

でも、黒髪を少し汗に濡らした彼女が、真面目な表情をして黒色のきれいな瞳を僕に向けてきていた。どうやらこれは、冗談ではなく真剣な質問らしい。

もう十年以上も彼女と一緒に過ごしてきた僕は、レイナの気持ちがある程度わかるくらいにまで、彼女のことを理解している。

今のレイナは僕に、真剣な気持ちをぶつけてきているときの表情だった。

「え、どうしたのっ!? 急に!」

突然の質問が生んだ緊張感に耐えきれずに、僕はあわてながらレイナに質問を返す。

僕たちのあいだには、すごく緊張するけど、なにやら甘い感覚もする変な雰囲気流

れ始めていた。

真剣な顔になって僕の返事を待つ、彼女との距離がいつもより近い。

Hカップというすごく大きい爆乳を持つレイナが、お互いの肩がぶつかってしまいそうになるくらいに近づいてきていて、僕はすごくドキドキしてしまった。

彼女が練習後につけたのであろう、柑橘系の制汗剤の匂いが僕の鼻まで届いてきている。

そして、レイナの真剣な質問に答えを濁している僕に業を煮やしたのか、彼女は僕に向かつてさらに質問をぶつけてくることになった。

「ケータは、幼なじみ同士が恋人になるの、どう思うかな？」

レイナの質問を聞いて僕は思う。もちろん、そんなの大賛成だ。

僕の好きな人？

そんなもの、レイナに決まっている。

僕は、レイナのことはずっと好きだった。小学生の時も、中学生の時も、高校生になった今でもだ。

でも僕のその気持ちを彼女に伝えてしまうと、こうしていつも一緒に学校から帰るといふ僕たちの関係が壊れてしまうかもしれない気がして、僕はそのことが怖くてずっと言えずにいたのだ。

僕なんかのことを、美人でスタイルが良くて性格がまっすぐで、みんなに人気者のレイナが好きになるなんて絶対にありえないと思っていた。

でも、こうして話をしている、なんとなくなくだけど、彼女が僕のことを好いてくれているという気持ちが伝わってくる。

恋愛について真剣な話を続ける僕たちのあいだには、まるで僕たちが恋人同士になったような甘い空気が生まれでてきていた。

初めて体験するけど、心地よくて安心する空気。

そんな雰囲気、僕とレイナのあいだに伝わっていく。

「僕の好きな人、知りたい？」

「……………え？　だ、誰なの？」

僕がレイナに好きな人がいることを伝えると、彼女はそれを知りたいような、知りたくないような、そんな緊張をした声で僕からその人物の正体を聞き出そうとしてくる。

僕は今すぐにでも、レイナに僕の正直な気持ちを伝えたかった。きっと、彼女もそれを望んでいる。

でも、ここで彼女に正直な気持ちを打ち明けるのを僕はぐつと我慢すると、僕はとある提案をしてみることにした。

今まで僕の正直な気持ちを伝えずにいて、レイナを待たせてしまっていたことへの、ほんの少しの贖罪だった。

「夏休みになったらさ、二人で一緒に、花火大会にいこうよ。そしたら、そこで、僕の好きな人を教えてあげる」

「……………うん♡」

僕の学校に伝わる噂話には、花火大会で結ばれたカップルは結婚まで進むという、そんな有名な都市伝説があった。

僕はその都市伝説の舞台になっている地元の花火大会に、レイナを誘ったのだ。

わざわざ、しあわせなカップルが生まれる都市伝説が流れるようなお祭りにレイナの

ことを誘って、そこで好きな人が誰かを教えるなんて、もう、僕の好きな人が誰か答えを言っているようなものである。

僕からの誘いを聞いた瞬間に、レイナは頬を赤らめるとモジモジとしながら恥ずかしそうにうつむいてしまった。彼女は僕が花火大会の場でなにを伝えるつもりか、すぐに気づいたようである。

せっかくだし僕は、告白するならもつとロマンチックな場所で、レイナに告白したかった。

そして僕の言葉を聞いたレイナは、少し考えたあとに、うれしそうな顔になって僕の誘いを受け入れてくれることになる。

いつも真面目でクールな表情をしているレイナが、すごくかわいい顔で笑っていた。

「……………絶対に、約束だよ♡」

いままでずっと一緒に過ごしてきた僕でも見たことがない、かわいすぎて破壊力があまりすぎる笑顔で、うれしそうにレイナが僕に念を押す。

彼女がうれしそうに笑う顔を見ただけでも、僕の胸が信じられないくらいにドキドキと高鳴ってきて、僕はその一瞬だけで、もっとレイナのことを好きになった。

それぐらいに、僕の誘いを受けてからのレイナはかわいかった。

僕は今、すつごく幸せだ。心の底からそう思えるくらいに、今のレイナはキラキラと光り輝いている。

「まだ友達同士だけど、手をつないで帰るぐらいなら、問題ないよね？」

「……うん♡」

そうしてお互いを幼なじみと認識していたころよりも、ずっと甘くてしあわせな空気に変わった二人の関係を楽しみながら、今日も僕はレイナと一緒に帰り道を帰って

1758 ずっと両思いだと思っていた爆乳でボーイッシュな幼なじみが、僕の知らない所外の男に股を開いてすごく気持ちよさそうに腰を振っていました1

いく。

ずっと両思いだと思っていた爆乳でボーイッシュな幼なじみが、僕の知らない所で僕以外の男に股を開いてすっごく気持ちよさそうに腰を振っていました2

ケータ視点

「うわっ！なんだこれっ!？」

インターハイ予選を控えた梅雨のある日、異変は起きた。

いつものように退屈な学校の授業を受けていると、教室の中に巨大な魔法陣が出現したのだ。突然起きたできごとにより、教室の中はパニックになった。

そして目の前が白く光ったと思ったら、僕たちはどこかの城の中のような場所に一瞬

で移動してしまう。

漫画やアニメの世界でしか見たことがないような、中世の王城といった豪華な出で立ちの施設の中で、制服姿の僕たちは何もできずにたたずんでいた。

「ようこそ！勇者たちよ！」

そして僕たちが説明を受けたところ、僕たちは魔王に味方する悪の集団を倒すために勇者としてこの世界に召喚されたらしい。

小説の中の世界でしか起こり得ないと思っていたできごとが、実際に僕の身に降りかかっていた。

「ケータ、大丈夫？」

「レイナは平気？」

突然の異変に混乱しながらも、僕と同じクラスで授業を受けていたレイナが僕のもとに駆けつけてくれる。

「やった！クラス転移だ！」

アニメや漫画でよく見る異世界召喚に詳しいのであろうクラスメイトの男の子が、うれしそうに言葉をつぶやいていた。

「どうやらこの場所に召喚されたのは、僕たちクラスの生徒だけらしく、授業をしていた先生の姿は見えない。」

「で、あいつ、誰？」

でもなぜか、クラスメイトだけが召喚されたはずの集団の中に、スウェット姿の男の子がまぎれ込んでいた。

まさにモブキャラといった見た目の目立たない男の子が、興味深そうに周囲の様子を

観察している。これに関しては、まったくの謎だった。

「あいつ、巻き込まれ召喚かもよ？」

しかしクラスメイトが会話をしているのを盗み聞きするに、どうやらこういった多人数が集団で転移する展開には、部外者が一人まぎれこむのが定番のできごとらしい。

僕はそんなものなのだとか心の中で納得しながら、次の展開を待つことにする。

「では、これから、ステータス鑑定の儀をおこなう！」

そして異世界に召喚された僕たちは、最初にステータス鑑定をおこなうことになった。

自分が今、どんなステータスをしているのか、どんなスキルをもっているかの情報は、ゲームのようなこの世界では重要である。

突然、RPGのような世界に召喚された僕に与えられたスキルがどんなものかとワクワクしながら、僕は自分の順番を待つ。

……

……

……

「ケータ。ランクは帝国側が勝手に決めたことだから。自分がどう行動するかで、ランクなんてすぐ変わるし、関係ないよ」

ステータス鑑定が終わり、勇者歓迎会と称された立食会の中で、レイナが僕のことを慰めてくれていた。

「あーあ。いいよな。レイナはSランクに認定されて。ラッキーだよなー。それに比べて僕はさー」

残念なことに僕が、帝国側にBランク勇者と認定されてしまったのだ。そんな僕の気も知らないで、Sランク勇者として認定されたレイナがのんきに僕を元気づけようとしてくれている。

帝国側が認定したランクは、Bランク、Aランク、Sランクの順に高くなる。つまり僕は、最下位のランクのスキルしか、手に入れられなかったのだ。

まあ、Dランク勇者という、僕よりももっと下の立場の人物がいるが、それは論外だろう。

「おい、Dランク！ なにか言えよ！」

そしてさっそく、なぜか帝国側にAランク勇者として認定された不良グループの男の子たちが、Dランク勇者に認定されてしまったユーリというかわいそうなスウェット姿の少年に絡んでいる。

僕は巻き込まれ召喚をされ、役立たず認定をされたかわいそうな少年に同情をしながら、なるべくそれに巻き込まれないように、立食会での食事を続けていくことにした。

「あつーレイナ、ダメだつて！」

しかし、僕の静止をふりきって、あろうことかレイナがDランクの少年を助けに向かっってしまう。

面倒なことにはなるべく巻き込まれくないのに、正義感が強いというレイナの悪い面がでてしまったようだ。

僕は自分が不良たちのターゲットにならないように関係ないふりをしながら、ことの成り行きを見守っていく。

しかし、僕の心配をよそに、不良グループたちはレイナに撃退されることになった。

「あの男の子、助けられてよかった」

そしてDランク勇者を不良グループから救ったレイナが、満足そうな顔で僕のもとに戻ってくる。

僕はレイナに歩み寄ると、彼女に説教をすることにした。だって彼女は、僕の身を危険にさらしたんだ。

この場合においての正しい行動のしかたを、僕はレイナに教えてあげなくてはならな
いだろう。

「あのさ、レイナ。レイナは周りの迷惑とか、考えないの?」

「……………え?」

僕がうれしそうに笑うレイナに向かって説教をし始めると、自分が正しいことをしたと勘違いをしている彼女はおどろいたような顔をしてしまう。

やっぱりレイナには、頼りになる僕がついていなくてはならないようだ。

僕は彼女に対していまの場合はどうすべきだったかの正解を教えてあげるために、正しい行動のしかたを親切に説明してあげることにした。

「レイナがああいう面倒事に首を突っ込んだらさ、いつも一緒にいる僕にも迷惑がかかると、想像できないかなー。ああいうときは、将来恋人になる予定の僕ことを一番に優先するべきだと思わない？」

「いや、ああいうの、放っておけなかったからさ……」

僕が彼女に言い放った鋭い指摘に、レイナが答えにくそうな顔をして僕に返事を返してくる。

想像力が足りないレイナに、彼女の行動がいかにして僕に迷惑をかけているというかを、ちゃんと教えてあげなくてはならないようだ。

僕の言葉を黙って聞かずにおかしい言い訳を始めたレイナに向かって、僕はさらに説教を続けていく。

「ふーん、レイナは僕よりも、Dランク君を取るんだ？」

「ケータ。他人を馬鹿にするような言い方はダメだよ……」

しかしあろうことが、レイナは話をそらすことで、僕を不快な気持ちにしたという責任から逃げようとしてくる。最低な奴だな。

僕は無責任な態度を取り続ける彼女に怒りを覚えながら、そらされた話をもとに戻すために会話を修正していった。

「はいはい。話をそらして、自分の間違いから逃げるなよ」

「でもさ、私の行動は、これからも私が決めるよ。私の行動は、私がぜんぶ責任を取るから。ケータには迷惑はかけない……」

なんとレイナは、僕の気持ちを考えることなく、自分のことは自分で決めると馬鹿なことを言い出してしまふ。僕の恋人になる予定の女性にしては、あるまじき態度だ。

僕はそんな彼女の考え方が間違っていることを証明するために、正しい行動について、さらに親切丁寧に説明を続けていくことにする。もしかして、レイナって馬鹿？

「いや、もう、迷惑がかかってるんだけど？レイナのせいで、こうして僕が不快になるというトラブルが起きてるじゃん。レイナがなにもしなければ、起きなかったトラブルだけど。僕の言うとおりにしないから、余計なトラブルが起きてるって理解してる？」

「……」

そして僕が馬鹿な言い訳を続けるレイナを簡単に論破すると、僕の言っていることの正しさがようやくわかったのか、彼女は黙り込んでしまった。

これで、僕の言うとおりにしないから、こうして恋人になる予定の二人の間に不快な

空気が生まれたのだということが彼女にも理解できただろう。

僕の言うとおりに動かないと、余計なトラブルが生まれてしまう。その正しい現実を理解したレイナは、これから僕の期待通りに動いてくれるに違いない。

僕に論破されて恥ずかしいのか、彼女は悲しい顔をしたまま無言になってしまった。

僕は言い負かされて落ち込んだ顔をしているレイナの姿を確認すると、今後、彼女は僕の言うとおりに行動をすると確信をしながら立食会での食事を再開する。

（僕に簡単に論破されて何も言い返せなくなるなんて、ひよっとして、レイナって馬鹿？もしかしたら、言いなりにできるかも。Sランク勇者が実力を発揮できるのは、実は裏で指示を出してる僕のおかげということになったら、最高じゃん！）

「僕はさ、レイナのが好きで、心配だから言ってるんだよ？」

「……………うん」

僕は暗くなってしまった二人の空気を明るくするために、気を遣った言葉を彼女に伝えてあげる。本来ならば間違った行動をしたレイナの方から歩み寄る場面なのに、なんて僕は心が広くてやさしいんだろう。

こうして、深いコミュニケーションによってお互いの価値感を理解し、より親密になった二人の関係に満足しながら、僕はレイナと楽しく食事を続けるのであった。

ずっと両思いだと思っていた爆乳でボーイッシュな幼なじみが、僕の知らない所で僕以外の男に股を開いてすっごく気持ちよさそうに腰を振っていました3

ケータ視点

「うわー！すっごいなあ！」

食事会が無事に終わったあとに、僕たち勇者は専用の宿泊施設と名付けられた豪華な施設へと招待されることになる。

一階から二階が男子生徒、三階から四階が女子生徒たちが利用できるという構造の施設は、まるで高級ホテルのような素晴らしい内装をしていた。

クラス全員で同じ施設に泊まるという、まるで修学旅行をしているような状況の中、僕たち高校生勇者はワクワクとしながら各自の部屋に案内されていく。

風紀維持のために、異性が利用している階層へは原則移動禁止というルールがあるのも、僕たちのあいだに修学旅行気分を強めていた。

「ふー。とりあえず、座ろっかな」

広々とした部屋の中に高級な質感のソファードとふかふかのベッドが用意されたこの一室が、これから僕が個人部屋として利用できる部屋らしい。

僕はとても快適そうな部屋の内装を見渡しながら、優越感を感じていた。

しかも僕たち勇者は、ホテルのルームサービスのようにならでもメイドさんを呼べて、食事も些細な雑用も頼み放題だそうだ。

僕は勇者として帝国から与えられた素晴らしい待遇に感激しながら、部屋のソファア

に座って食後の一段落をする。

しかし、残念なことに、Dランクと認定されたユーリという少年だけが、この施設の利用を禁止されていた。彼は城内の外れになる、ボロ小屋に押し込められたそうだ。

僕はこの世界に来たときに手に入れた才能の違いに鼻高々になりながら、Dランクの
ような底辺にはならないと決意する。

……

……

……

そして夜も遅くなり、そろそろ眠ろうかと考えていた頃に、僕の部屋に誰かがやって
きた。

「あれ？どうしたんですか？」

「勇者様に、特別なサービスがございました」

僕の部屋に訪ねてきたのは、メイドのエマさんであった。

藍色の髪をポニーテールにしてきれいな青色の瞳をしたメイド服姿の彼女が、ドアを開けた僕の部屋に入りながら要件を伝えてくる。

そんな状況の中、特に呼び出しのベルも鳴らしていないのにこんな時間に何の用だろうと疑問に思っている僕の目の前で、おもむろにエマさんがメイド服を脱ぎだしていった。

「な、な、な、なんですか！」

女の人の裸なんてスマホでしか見たことがなかった僕は、あわてながら全裸になってしまったエマさんを止めようとする。

しかし、理知的ですごく頭の回転が早そうな見た目をしたクールな表情のエマさんが、冷静な態度のまま全裸になって僕のもとに詰め寄ってきていた。

「勇者さまを癒すのが私の仕事ですから、私の体、好きにしていいいんですよ」

そしてやわらかくて巨乳な体で僕にギュッと抱きつきながら、全裸のエマさんが僕の耳元で妖しく言葉をつぶやく。

「他の勇者様たちも、いまごろ、私たちと同じことを楽しんでますから」

エマさんが耳元で僕を誘うようにつぶやいた言葉を聞いて、僕の頭にはレイナのこと
が浮かんだ。

「レイナも、もしかして誰かとうとういうことをしてるの？もし、僕に隠れて浮気なんかしたら、絶対に許せない！」

男女関係なく、勇者たちはいまごろ、帝国が用意した性のプロフェッショナルと同じことをして楽しんでるというエマさんの説明を聞いて、僕の頭に、もしレイナが浮気をしていたら絶対に許せないという怒りの感情が浮かぶ。

しかし、そんなふうになり怒りに燃える僕に向かってエマさんがクスクスと笑いながら、Sランク勇者であるレイナがこのサービスを断ったことをやさしく教えてくれた。

「あら？ ケータさんはレイナさんがお好きなんですか？ たしか彼女はサービスを提案した美形執事を、ものすごい形相で追い返したそうですよ。自分には好きな人がいるんだと、大声で叫びながら今後このようなサービスは絶対にしないようにと私たちは注意を受けてしまいました」

そして、そのできごとについてなんでもないことのように笑いながら、僕の体に卑猥に抱きついているエマさんがレイナの状況を詳しく伝えてくれる。

僕はそんな彼女に、僕とレイナの間を詳しく説明してあげることにした。

「僕とレイナは、恋人同士なんだ。だから、浮気なんて許せないよ」

「あら、それならば、私の体で、夜の行為の練習をしなければなりませんね」

Fカップだと僕にこっそりと伝えてくれた爆乳を僕の胸元にふにゆふにゆと押し付けながら、エマさんが僕の耳元でそんなことを小さくささやいてくる。

突然、彼女から伝えられた夜の練習という言葉に興味を持った僕は、そのことをエマさんに質問してみることにした。

「夜の練習？」

「殿方はこういったことが上手な方が、女性に好かれますから。それに、ケータさんが私の体で性行為の練習をすれば、レイナさんと結ばれたときに彼女がすっごく喜びますよ？」

僕の足元にひざまずいた彼女が、僕がはいている寝間着をスルスルと引き下ろしながら

ら、女性の心について教えてくれる。

「レイナさんはこういったサービスを受けないため、今後ウブな少女のままみんなに取り残されていきます。そのレイナさんを、私の体で性行為の練習をしたケータさんがたくさん気持ちよくよがらせてあげる。そうすればレイナさんは、ケータさんから絶対に離れることができなくなります。Sランク勇者の彼女を、あなたのおちんちんで支配したくありませんか？」

そして今度は床にひざまずいた体勢のまま僕の下着をゆっくりと焦らすように両手で引きずり下ろしながら、エマさんが僕にすごくいい提案をしてくれていた。

エマさんの体でセックスの練習をすれば、レイナに対してアドバンテージが取れる。性に対してウブなレイナを、僕がリードしてあげられるんだ。

僕の体で気持ちよさそうによがるレイナの姿を想像した僕は、エマさんの提案をぜひ実現したいという欲望を抱く。

「それに、ベッドの上で女性をリードしてあげられなくては、レイナさんとエッチしたときにケータさんが恥をかきますよ？」

さらに床に膝立ちになって僕を見上げながら楽しそうに伝えてくるエマさんの言葉を聞いて、僕の頭の中に、エッチをしたことがない僕を馬鹿にするレイナの姿が浮かんだ。

絶対に、レイナにそんなことされたくない。ここでセックスの練習をして、レイナの体を思う存分に気持ちよくしてあげたい。そういった親切心が浮かんできた僕は、このままエマさんの提案に乗ることを決めた。

「え、エマさんっ！」

「……あら♡……かわいらしい♡……おちんちんですこと♡」

……ちゅぶっ♡……ちゅぶっ♡

うと、一気に僕の精液が彼女の口内に搾り取られてしまう。

一人でするオナニーでは味わえない、最高に気持ちよくて興奮する男女の生々しい性行為を初めて経験した僕は、その快感によって興奮を最高潮にまであげていった。

「……………ケータさんは♡……………お若いのですから♡……………まだまだ♡……………できますよね♡」

……………くばぁ♡

そして口の中に搾り取った僕の精液を妖しい笑顔で舌なめずりをしながらおいしそうに飲み干した彼女が、今度はベッドの上に移動して僕を誘う。

初めて生で見るビラビラした女性器と、それをいやらしく両手で左右に広げて僕を誘うエマさんの美しさに耐えきれずに、僕はベッドの上に寝そべる彼女に抱きつく、そのまま夢中になって腰を振った。

……………へこ……………へこ

「……………あん……………ケータさん……………すつごいつ」

(……………おまんこの中……………ヌルヌルしてて……………すごく気持ちいい！)

その日の夜、僕はエマさんの体で童貞を卒業することになる。

そしてベッドの上で僕のチンポでよがるエマさんの姿を見下ろしながら、僕は男としての自信を付けていくのであった。

ずっと両思いだと思っていた爆乳でボーイッシュな幼なじみが、僕の知らない所で僕以外の男に股を開いてすっごく気持ちよさそうに腰を振っていました4

ケータ視点

「…………ふあああ、眠いなー」

昨日、夜遅くまでメイドのエマさんとエッチをしてしまった僕は、眠い目をこすりながら昼過ぎの城内を歩いていく。

「お前、昨日メイドさんとヤツた？」

「お前も？マジ、ヤバイよな！」

僕は自分が童貞を捨てた証であるそのかくわしい香りに興奮しながら、クラスメイトたちと、まるで学校に登校するときのような空気感の中で訓練場へと向かう。

……

……

……

「これより、訓練を開始する！」

そして、勇者として魔族を倒すための訓練が始まる。初日の今日は、軽く剣を振ったあとに各々の実力を測るために模擬戦をするらしい。

僕たちに剣を教えてくれているのは、若い女性のマーシャ先生。彼女は赤い髪にきれいな黄色い瞳をしていて、彼女が身につけている軽鎧の上からでもわかる立派な爆乳を

していた。

僕は昨日エマさんの体で童貞を捨てたことを思い出し、次はマーシャさんの体を味わってみたいと欲望を持つ。

今まで自分は女の子に見向きもされない人間だと思い込んでいたけど、この世界では、女の子たちと本当になんでもやりたい放題できる。

せっかくだし、僕はいろんな女性の体を思う存分に味見してみたかった。

「ケート、訓練頑張ろう！」

そんな僕の気も知らない訓練服姿のレイナが、剣の素振りの時間になって僕の隣にやってくる。

帝国が勇者たちに用意した高校のジャージのようなデザインの新訓練服姿になった、レイナの爆乳姿はすごくかわいかった。

そんな彼女の姿を見て、学校の体育の授業のときに、体操服姿になったレイナのおっぱいが揺れる様子を必死になって見ようと群がっていた男子生徒たちの姿を思い出す。

でも、今は恋人である僕だけに、レイナの爆乳を揉む権利がある。そのことを思うと、僕は周りのクラスメイトに対して優越感を感じることができた。

「あのさ、ケータ……」

そんなことを考えている僕に向かって、なにか言いにくそうな顔をしたレイナが要件を伝えようとしてくる。

きつとこれは、昨日の夜の件だろう。彼女は僕が浮気をしなかったか、心配なのだ。だから、僕はレイナを安心させてあげるために、都合のいい嘘をつくことにする。

ここで彼女とトラブルを起こしても、面倒くさいだけだからね。

「クラスメイトのみんなは色々してるみたいだけど、僕はちゃんと断ったよ。だって、僕はレイナの恋人になる男だからね！」

「……そつか……えへへ♡」

僕の堂々とした宣言を聞いたレイナは、すぐくうれしそうに笑っていた。まったく、こいつは信じられないくらいに馬鹿である。

（うわー。レイナ、僕の嘘を簡単に信じちゃったよ。やっぱり、レイナって馬鹿だよね！）

僕の嘘を簡単に信じてしまったレイナを僕は内心馬鹿にしながらも、今後、彼女を利用するために笑顔をとりつくろうことにした。

こうして、のんびりとした体育の授業のような雰囲気の中、訓練の時間が進んでいく。

今から、レイナの体でセックスをするのが楽しみでしかたがない。僕の頭の中は、訓

練中もそのことでいっばいだった。

あいかわらず、レイナはDランク君を気にかけてるみたいだけど、彼女は格下の底辺なんて相手にする時間は無駄だって気づかないのかな。

訓練の終わりに、居残り訓練を言い渡されたDランク君と一緒に自分も居残り訓練を受けるとレイナが言い出したときには正直、彼女の正気を疑った。けれど、それに関しては、これから僕が彼女を都合よく調教していけばいい。

そして僕は訓練からの帰り道に、レイナへの調教を今日も開始する。

「レイナはさ、彼氏である僕より、Dランク君を優先するってわけ？」

「やっぱり、私はああいう不当なことが放っておけないから……」

「でも、彼氏である僕をないがしろにするっていう、不当なことをレイナはしてるけど。それについては、レイナはどう責任とるの？」

「…………え…………それとこれとは、違う…………」

こうして僕は訓練場からの帰り道、レイナを言い負かして僕に都合のいいように変えていくつもりだ。

僕の嘘を簡単に信じる女だ。こうやって嘘をつき続けていけば、今日の嘘もいつか信じて、こいつは僕の奴隷みたいに価値感が変わっていくだろう。

こうして少しずつ、僕の言いなりにならないと、二人の間にトラブルが起きるつてことを悪口を言いながら彼女に教え込んでいけばいい。

そのうち黙って、レイナは僕の言うことを聞く奴隷に生まれ変わるはずさ。

「ごめん。今日は私、先に一人で帰る。ケータが落ち着いたら、もういつかい話し合おう…………」

「おい、話し合いから逃げるな！無責任女！」

しかし残念なことに、レイナは僕との話し合いの途中に、話し合いを放棄して逃げ出してしまった。訓練からの帰り道に、さっそく恋人同士で仲良くエッチしようと思つたのに、最低な女である。

（あーあ、レイナと帰り道で仲良くセックスしようと思つてたけど、先に帰るなんて使えないな。部屋に帰ったら、エマさんに抜いてもらうか）

でも、あの美人なレイナにフェラしてもらったり、パイズリをしてもらえたら最高だろうな。僕は一人になった宿泊施設への帰り道に、そんなことを思う。しかもそれが、近い内に実現するのだ。

だって彼氏である僕には、レイナの体に奉仕してもらう権利がある。

（レイナとエッチするの、楽しみだなー！）

僕は今日も悪口を言つて心を追い詰めたレイナが、いつか僕に奴隸に変わる未来を想像する。

いつか言いなりになった彼女の体を、僕が好き勝手にこき使うときの快感を思い浮かべながら、僕はワクワクとして部屋に帰るのであった。

もちろん、今日も僕は、エマさんとセックスをした。

ずっと両思いだと思っていた爆乳でボーイッシュな幼なじみが、僕の知らない所で僕以外の男に股を開いてすっごく気持ちよさそうに腰を振っていました5

ケータ視点

僕たち勇者への訓練が始まって一週間が経ち、今日は始めての野外演習の日となった。

剣の訓練も魔法の訓練も一通り受けた僕たちは、今度はレベルを上げるために帝都近くの森に来ている。まるで本当に、RPGの世界のようであった。

帝都の森近郊ではゴブリンなどの雑魚モンスターしか出現しないために、チートスキルを持った僕たちなら問題にならないと出発前に帝国から説明を受けている。

劍の訓練を受け持つマーシャ先生や、魔法の訓練を受け持つロクサーシャ先生とシャル先生が護衛としてついてきてくれているため、予定外の強力なモンスターが出現してしまうというトラブルが起きても大丈夫。

そして護衛の騎士たちが不測の事態に備えて森の中を散策しているために、なにかあつてもすぐに彼らが駆けつけてくれる。そうやって何重にも安全対策がされた中で、僕たちは初めてのモンスター狩りをするのだ。

「ケータ。気をつけてね！」

「レイナも気をつけるんだよ！」

野外訓練が始まり、レイナが僕に激励の言葉をかけてくれる。彼女の言葉を聞いて、僕も彼女に応援の言葉を返した。

僕が調教を始めてから少しギクシャクしてしまった二人の関係を元に戻すために、い

まはレイナにアメを与えている最中だ。

異世界に召喚されて一週間が経ち、僕たちの関係は恋人同士になる前くらいの親密さ
にようやく戻っている。

どうやら、恋人になったからといっていきなり、家族としての待遇をレイナに求めて
はいけないらしい。

そういう親密な関係を求めるのは結婚をしてからするものだと、僕はここで学習し
た。だから今は、我慢の時期だ。

まあしばらくは、周囲への僕の評価を上げるためのアクセサリーとして彼女には役に
立ってもらうことにしよう。レイナみたいな美女を恋人にしている僕は、みんなから尊
敬されるべき存在だからね。

「さて、ゴブリン狩りといきますか！」

そして僕は森の中を散策する。今回おこなわれる帝都近郊での野外演習は、同じランクの勇者同士でパーティーを組んでモンスターと戦う予定だ。だからBランク勇者の僕は、同じBランクの勇者とメンバーを組んでいた。

Sランク勇者であるレイナは、ソロでの戦闘を言い渡されている。むしろ他のメンバーは彼女の足手まといになるので、近づかないようにとも僕たち勇者は注意を受けていた。

そして野外訓練が始まって少し経ち、休憩の時間となる。

森の入り口にある広場の中に野営場が用意されていて、僕たち勇者にお昼ごはんが提供されていた。

そこで昼食を食べていると、僕は不良グループたちが端っこの方でコソコソと内緒話をしていることに気づく。

彼らが何を話しているのか気になった僕は、自分のスキルを使って彼らの話を盗み聞

きしてみることにした。

僕がこの世界に来て手に入れたのは索敵系のスキルで、こうして遠くの会話を簡単に盗み聞きすることができる。すごく便利な能力だ。

また、この能力以外には、僕は魔力を使って遠くにいる人とビデオ通話をするスキルも手に入れていた。

「レイナ、Sランクだからって調子に乗っててムカつくよな」

「お昼が終わったら。あいつのことレイプしちゃおーぜ」

「俺たちのレベルも上がったことだし、もう俺たちを止められるような奴はいないって」

「これからは、もつとヤリ放題できるもんな」

Aランク同士で討伐パーティーを組んでいる不良グループたちが、どうやら隠れて悪

事を働くつもりのようなのだ。

彼らの話を聞いて、僕は怒りに燃える。だって彼氏である僕ですら、まだレイナとセックスすることができていないのだ。

この世界に来てから何回も僕が彼女をセックスに誘っても、ちゃんと恋人同士になつてからじゃないと嫌だと、僕はレイナに断られてしまつていた。

好きだけどもまだ気持ちの整理がつかないといつて、僕はレイナにお預けを食らつていく。それなのに、不良グループたちに彼女の処女を奪われるなんて絶対に許せない。

(レイナ、こんな奴らに、絶対に負けるなよ！)

不良グループたちの話を盗み聞きした僕は、心の中でレイナを応援する。

Bランク勇者の僕ではAランク勇者の不良グループにかなわないけど、Sランクの勇者であるレイナなら、一人で彼らを撃退可能だろう。

レイナに告げ口をして、僕が不良グループに目をつけられても困る。だから僕は、僕とレイナの清い関係のために、余計な事をせずに黙ってなりゆきを見守ることにしたのだ。

……

……

……

そして僕が午後のモンスタースター狩りを頑張っていると、森の中から不良グループたちの声が聞こえてきた。索敵スキルを使って周囲を探索している僕にしか聞こえない、すごく小さな声だ。

「いたか？」

「くそ！逃げられた！」

「あいつ、転移魔法なんて使えるのかよ！」

どうやら彼らの口ぶりから、レイナは無事に逃げ延びたということがわかる。

怒りをあらわにしながら大声で話している彼らの会話によると、五人がかりで獲物を追いつめていたら、急に目の前からターゲットが消えてしまったらしい。

言葉を濁しているが、獲物とは多分レイナのことだ。そしてレイナは転移魔法を使って、軽々と不良グループから逃げ延びたと。

いつのまに、レイナが転移魔法を使えるようになったのか僕にはわからないが、どうやらSランク勇者はすごい能力を持っているらしい。そんな彼女がいつか僕の恋人になる予定だと思うと、僕は周囲のクラスメイトたちに優越感を感じずにはいられなかった。

そして、僕は余計なトラブルが無事に解決したことに安堵しながら、野外演習を続けていく。

……

……

……

「レイナ、どうしたの？」

「な、なんでもない……」

野外演習からの帰り道、僕はレイナと並んで王城内を歩きながら、何も知らないフリをして彼女に質問をする。

野外演習が終わって集合場所に現れた彼女は、軽鎧姿に体を火照らせてすごくセ

クシーだった。

ゴブリンのような雑魚モンスター狩りといっても、真面目なレイナは全力を尽くしたのだろう。激しい運動後の熱に全身を火照らせた彼女は、荒い呼吸をしながら乱れた息を整えている。

そして帰り道になってもまだ熱が引かないのか、レイナは息苦しそうに体をモジモジさせながら、悩ましそうな呼吸を続けていた。

「……………どうしよう♡……………あわててノーブラのまま来ちゃったから♡……………こすれるっ♡」

「レイナ、なにか言った？」

「……………えへへ♡……………なんでもない♡」

野外演習でかいた汗でショートカットの髪を濡らしながら、いつもよりもなぜか乙女な態度をしているレイナがぼつりと何かをつぶやいている。

魔力の節約のために索敵スキルは使用していないために、彼女が何を言ったかまでは僕には聞こえなかった。

黒くてきれいな髪を少し汗で濡らした、レイナのピンク色に火照り続ける顔がなぜか、いつもより何倍もエッチだった。

そして彼女はもう野外演習が終わったのに、胸元に身に着けている軽鎧を脱ごうとしない。

鎧を取り外せば身軽になって気持ちいいし、脱いだ鎧はアイテムボックスに入れてしまえば荷物にもならない。

僕たちと同じく宿泊施設に戻るために王城内を歩くクラスメイトたちはみんな、すでに鎧を脱いでしまっていた。

「レイナは、鎧を脱がないの？」

「…………え、えへへ♡…………まだ♡…………着てたいから♡」

初めて身につけた軽鎧の息苦しさから解放されたクラスメイトたちが周囲で安堵の息を漏らしている中、依然として軽鎧を身に着け続けるレイナが、僕の質問に困ったような顔で返答をしている。

彼女のその顔を見て、僕にはすぐわかった。

きつと不良グループに襲われそうになったレイナは、まだ警戒を解いていないのだ。

だから、彼女はいつ不良グループたちに襲われても大丈夫なように、まだ軽鎧を身に着け続けていると。

そう考えた僕は、実は不良グループの計画を知っていたけれど何も協力をしなかったということもレイナに隠すために、それ以上はなにも追求しないことにする。

それに、いきなり不良グループが襲いかかってきたときに僕を守ってもらったために、むしろ彼女には武装し続けてもらった方がいい。僕は一瞬で、そう計算した。

「じゃあ、レイナ、またね！」

「ケータ、またね♡……っ♡」

そして宿泊施設までたどり着いた僕たちは、親密なあいさつを交わすとお互いの部屋に戻っていく。

（さて、エマさんにエッチしてもらおう！）

部屋にたどり着いた僕は一日の疲れをエマさんに癒やしてもらったために、室内のベルを鳴らして彼女を呼び出すのであった。

ずっと両思いだと思っていた爆乳でボーイツシユな幼なじみが、僕の知らない所で僕以外の男に股を開いてすっごく気持ちよさそうに腰を振っていました6

ケータ視点

僕たち勇者への訓練が始まって、二週間目が経つ。今日は二回目の野外演習の日だ。

二回目の野外演習である今日は、帝都近郊にあるリゾート地に出向いて野外宿泊の訓練をする予定になっていた。

僕たち勇者は行軍訓練という名目で馬車での移動を初めて体験し、きれいな湖の近くに建設されたコテージで各々の討伐グループごとに宿泊をする。

各ランクごとの討伐グループが五日間泊まり込みでモンスター退治をする、移動を含めて合計七日間の野外訓練である。

まるで高校の宿泊学習のような雰囲気の中でおこなわれるレベル上げの訓練に、僕たち勇者はワクワクしっぱなしだった。

そして僕たちは同じランク同士で組んだ五人グループの討伐パーティーで、野外調理の訓練でキャンプのようなことをしたり、夜は宿泊学習の部屋割のような感じで同じコテージに宿泊していく。

こうして僕たちのあいだに、ワイワイと楽しい野外訓練の時間が過ぎていった。

「なあ、ケート、お前、レイナとやりまくってるの？」

「もちろん！」

「いいなー。俺のレイナの爆乳、揉んでみてー！」

「それは、彼氏である僕の特権だから！」

宿泊学習のような雰囲気の夜に、今日も僕は同じ討伐グループの男友達と夜ふかしをしていた。今の話題は、僕とレイナの関係についてである。

レイナの彼氏であると周囲に認知されてきた僕は、こうしてたびたび周囲にからかわれるようになっていた。Sランク勇者で美女で、爆乳であるレイナの彼氏であると宣言するたびに、僕は周りの男友達に対して優越感を感じまくっている。

本当はレイナと僕はまだ恋人同士になっていないしセックスもしていないけど、こうして周囲に既成事実を作っていけば、周りの評価と自分の立場がまったく違うことに焦ったレイナが僕と恋人同士になってくれるだろう。

もしレイナが僕と恋人になることを断ってきたとしても、あいつに騙された、浮気されたと嘘をついてしまえば僕の立場は守られる。

計算高い僕は、馬鹿なレイナと違ってこういう根回しをかかさない。

こうして僕はコツコツと、レイナが僕の彼女にならなくてはいけないような空気を周りに作ることで、僕たちが恋人同士になれる確率を上げていた。

ちなみに、唯一のSランク勇者であるレイナは、今回の野外訓練においては一人部屋が割り当てられている。野外演習の監督役である、マーシャ先生の指示だ。

なんでもSランク勇者である彼女には夜に別の訓練メニューが用意されているらしく、一人だけ遠くに離れたコテージに宿泊する必要があるとのことだった。

それと昼間のモンスター退治も、レイナだけは特別メニューがあるらしく、僕は今回の野外演習で彼女のことは一度も目撃していない。

完全に一人だけ別行動になってしまったレイナが僕の知らないところでなにをしているのかを考えると、僕は少しだけ不安な気持ちになった。

でも、今回に限っては、みんなでワイワイと騒ぎながら同じコテージに泊まることのできるBランク勇者の立場でよかったと僕は思う。

それに、僕たち勇者のなかでぶつちぎりに強いレイナをどうこうできる男なんていないので、結局、僕は特に彼女を心配することなく、宿泊訓練を楽しむことにしていた。

「みんなは、メイドさんとセックスしてる？」

「おう！めつちや気持ちいい！」

「僕は彼女がいるから、断ったよ？」

「ケータは余裕だな！レイナちゃんを、幸せにしてあげなよ？」

「もちろん！まかせてよ！」

こうして、僕たち勇者に、楽しい宿泊学習のような夜が続いていく。

いまごろレイナは、一人で宿泊しているコテージの中でなにをしているのかな。男友達と会話しながら、僕はそんなことを考える。

きつと真面目な彼女は、夜ふかしもせず明日に備えて寝ていることだろう。

早くレイナとエッチしたい。彼女の爆乳を揉みまくりたい。レイナがベッドの上で股を開いて、気持ちよさそうに腰を振っている姿をこの目で見たい。

僕は男友達との会話を続けながら、妄想を重ねるのであった。

ずっと両思いだと思っていた爆乳でボーイツシユな幼なじみが、僕の知らない所で僕以外の男に股を開いてすっごく気持ちよさそうに腰を振っていました♡

ケータ視点

ある日、いつものようにベッドに仰向けに寝てエマさんにフェラチオをしてもらっていると、僕の股間になにか違和感を感じる。

なにか重いものでペニスを締めつけられているような感じがした僕が不思議に思っ
て体を起こし、その違和感を確認してみると、なんと僕の股間には金属の輪っかのよう
なものがくくりつけられてしまっていた。

「なんだこれ!?!」

「……………うふふふ♡……………そろそろ♡……………こういう管理も必要かと思ひまして♡」

僕のペニスの根元を締め付けるように取り付けられた金属のリングを両手で取り外そうとするが、吸い付くように僕のペニスにくっついていて金属の輪っかがどうしても取れない。

そして、いつのまにか装着されてしまった金属のリングをペニスの根元からあわてて取り外そうとしている僕を見下ろして、エマさんがクールな表情に嗜虐的な笑みを浮かべていた。

「うわっ!?!」

そして僕が取り外そうとしていた金属のリングが妖しく光り輝くと、そのまま僕のペニスの中に吸収されていくように消えていく。すると僕の金玉袋に、謎の紫色した模様が浮かび上がってきた。

「破壊工作のために人間の国に潜り込んでいたら、とてもいい奴隷を見つけました♡」

「くそっ！お前なんか、やっつけてやる！」

「うるさい。四つん這いになりなさい」

「——はいいいい!!!」

僕は暴力を使って事態の解決を図るが、エマさんに冷たく命令された途端に彼女の言うことを聞かなくなてはいけない気がして、僕の体が勝手に四つん這いになってしまう。まるで僕の体が、僕の意味とは無関係に動いているようだった。

そして僕は全裸のままベッドの上に四つん這いになった体勢で、まったく身動きが取れなくなる。

「……チンポは雑魚ですけど♡……勇者だけあって上質な魔力が搾り取れますからね♡
……あなたにはこれから♡……魔族の国でサキユバス用搾精タンクとして働いてもら

います♡」

医者が身につける薄いゴム手袋のようなものを伸ばすようにして両手に装着しながら、エマさんが無機質な言葉で僕に冷たく語りかけてくる。

いつもの丁寧で献身的な彼女の態度と違って、いまのエマさんはとても嗜虐的で支配的だった。

「……さて、奴隷紋の効果を確認めますか♡」

僕にそう言うと、彼女は薄いゴム手袋をつけた両手に今度はヌルヌルとしたローションを伸ばしながら、僕の下半身に魔法をかけていく。

すると僕のペニスの根本がズクズクと熱くうずき始めて、あつというまに射精感がこみ上げてきた。

——びゅうううう——びゅうううう

「うわああああああ！」

「……………あはあつ♡……………雑魚チンポから♡……………ザーメン♡……………飛び出てきた♡」

そして僕は四つん這いの体勢で、まるで牛の乳搾りのような感じでエマさんの右手にペニスをシゴかれながら精液を搾り取られていく。

薄いゴム手袋をつけたエマさんの右手とヌルヌルしたローションにこすられ続ける勃起した僕のペニスの先から、ベッドのシートに向かってドロドロとしたザーメンが大量にこぼれ落ちていた。

「……………く、そお……………レイナ……………助けて……………」

奴隷紋の効果なのか、エマさんに対してまったく抵抗ができなくなってしまうことに危機感を覚えた僕は、なんとか最後の力を振り絞ると遠隔通話スキルを使い、恋人であるレイナに魔力通信をつなぐ。

僕が持つ遠隔通話のスキルは、スマホのないこの世界でも空中に相手の様子を動画で映しながら会話ができる、とても貴重なスキルだ。

僕はこの世界に来てから何度も、この遠隔通話スキルでレイナと恋人同士の会話をしている。

最近はずいぶんレイナが応答してくれないことが増えてきたが、きっと彼女なら僕のピンチに駆けつけてくれるはずだ。だって僕たちは、両思いなんだ。

僕はレイナに小さな望みを託すと、スキルを使って彼女に魔力通信をおこなった。するとベッドの上に四つん這いになった僕の目の前に、いま現在のレイナの姿が映像になって浮かび上がってくる。

……クチュ♡……ニ、ヂュ♡……ムチュウ♡

「——あはあああ♡——っ♡——これ、っ♡——気持ちいい、いつ♡——っ♡——あ、っ

♡
」

ガク♡ガク♡ガク♡

「そ、そんな、レイナ……僕を……裏切った……のか……」

しかし、最悪のピンチに陥った僕の目の前に動画として浮かび上がってきたのは、僕と両思いであるはずのレイナが、ベッドの上で他の男と楽しそうに腰を振る姿だった。

ベッドの上に仰向けに寝た全裸の彼女が気持ちよさそうに股を開いて、グチュグチュに濡れたおまんこの中に僕のモノより二周り以上も大きなペニスをズポズポと何度もねじ込まれている。

僕と一緒にいるときはいつもクールな態度を崩さないレイナが、僕以外の男と一緒に腰を振る動画の中では、乱れた顔で頬をピンク色に染めながらしあわせそうな瞳をしていた。

あんなにもしあわせそうな表情をしたレイナの顔なんて、幼なじみとしてずっと一緒に過ごしてきたはずなのに、僕は見たことがない。

「好きな人はいいの？」

「……もういいのお♡……ケータより♡……こつちの♡……チンポの方が大切だから♡……ユーリのチンポ♡……大好きい♡……私♡……ユーリの女になるう♡……それにあつちは♡……勝手に恋人宣言してただけで♡……まだ告白もされてないし♡……恋人にもなっていないからああ♡——あゝっ♡——おくっ♡——すっごいっ!!!——こすらゝれてるっ♡」

ビクン♡ビクン♡ビクン♡

正常位の体位でネチャネチャとおまんこの穴に白くて粘液質な本気汁を大量に糸引かせながら、僕がDランク君と馬鹿にしていたユーリとレイナが腰を振り続けている。

そして僕の遠隔通信スキルは何かの魔力干渉によって、僕からはあちらの様子が見え

るけど、レイナ側からは僕の様子が一切見えないように変質させられてしまっていた。しかも、スキルを取り消そうとしても、なぜか消えずに映像が僕の目の前に残り続けている。

どうやら僕は、レイナが他の男と気持ちよさそうにセックスをしている光景を、ベッドの上に情けなく四つん這いにされた状態でずっと見続けなくてはならないようだ。

そのまま僕はベッドの上に四つん這いになった体勢のまま、レイナが他の男と腰を振る映像を目の前で強制的に見せつけられ続けていく。

「……あらあら♡……あなたが恋人だと宣言していたレイナさん♡……他の男の子とエッチしちゃってますね♡……しかも♡……すつごく気持ちよさそう♡」

……にゆううん

「やめ、やめろお……」

Sランク勇者のレイナが僕の恋人であると自慢しまくっていた過去を馬鹿にしながら、今度はエマさんが僕のお尻の穴に指を入れてくる。

するとエマさんの指に僕のお腹の中をかき混ぜられる感覚と一緒に、僕の体の中には知らない快感がドロドロとわきあがってきた。

そして、その快感はあつというまに、僕の全身を蝕むようにしてトロトロと甘く広がっていく。

「ぐうううう!!!」

「……………うふふ♡……………ケータさん♡……………男の子なのに♡……………アナルでメスイキしちゃいましたか♡……………勇者といえど♡……………奴隷になればこんなものですね♡」

ゴム手袋を装着したエマさんの指にお尻の中をいじくられてしまった僕の体の中には、射精するときよりも何倍も気持ちいい感覚がドバッと一気にあふれ出てきていた。

さらに不思議なことに、その知らない快感によってイッてるという感覚が体の奥にあるのに、絶頂によって全体が甘く痺れている僕のペニスからは精液が飛び出てくる感覚がまったくしない。

お腹の中から甘い感覚が泉のようにわき出てくる快感と一緒にあって、僕の意識がキーンと甘く飛んでいく。

「……恋人であるレイナさんが他の男と腰を振る姿を見ながら♡……ケータさんは♡……ザーメン♡……ベッドのシーツに無駄撃ちしましょうね♡」

しかし、そんな知らない快感の中にまどろむ意識の中で、今度はエマさんが指を使って僕のお腹の中を内側から強く押し込んできた。

すると僕のペニスの根元から、精液がどろどろとトコロテンのように押し出されてくるのがわかる。エマさんが強く僕のお腹の中を押し込むリズムと一緒にあって、硬く勃起した僕のペニスが根元からブルブルと揺らされていた。

射精感とは違った甘い快感と、硬く勃起したペニスの中をドロドロした精液が熱く通り抜けていく感覚の中で、四つん這いになった体勢のまま動けない僕は、後ろから指でアナルをいじくられながら次々とエマさんに精液を搾り取られていく。

そして僕は、両思いだったはずの美人なレイナが他の男に中出しをされる光景を見ながら、むなしくベッドのシーツの上に精液をこぼれ落とし続けることになった。

……とぶう♡……とぶう♡

「……………あつ♡……………ユーリのっ♡……………せーしっ♡……………すっごいつ♡……………中にでてるうっ♡……………おっ♡……………おっ♡」

ガク♡ガク♡ガク♡

僕の目の前で無理やり公開され続ける動画の中で、Dランク君の体にだいしゆきほーるどですがみついたレイナがすっごいトク顔になって口から舌を出し、気持ちよさそうな表情でおまんこの奥にたっぷりと中出しを受け入れていた。

そして、僕はレイナが他の男にされる膣内射精の快楽に体をビクンビクンと痙攣させる姿を見ながら、エマさんに精液を無理やり搾り取られていく。

レイナの膣の中に入りきらなかった中出しされた僕ではない他の男の精液が、彼女のおまんこの穴からドロつと卑猥にこぼれ落ちていくペースと一緒にあって、エマさんに無駄撃ちさせられている僕の精液が虚しく僕の部屋のシーツを汚していった。

依然として動画の中では、ずっと僕が見たいと思っていたレイナの爆乳が、僕ではない男が振る腰のリズムと一緒にあって下半身をゆさゆさと振る彼女の胸元で卑猥に揺れ続けている。

「……今度は貞操帯システムの管理をしましょう♡……ほらほら♡……ザーメン♡……出てこなくて♡……苦しいですか♡」

「うわああああ!!!」

さらに僕はレイナが他の男のチンポをおまんこにぬっぷりと啜え込んでいる映像を見ながら、エマさんにペニスとアナルを無理やりいじくられていく。

いまの僕は貞操帯システムの実験とやらで、射精を禁止されてしまっていた。

先程までは乳搾りのようにペニスをしごかれたり、お尻の穴に入れられた指をグネグネと動かされれば僕の体がうずいて簡単に射精していたのに、いまはどう頑張っても射精ができない。

精液を体の外に放出したくても、どうしても出てこないもどかしさが僕のペニスに溜まり続けていて、僕の気が狂いそうになった。

そして、そのもどかしさに耐えきれなかった僕は、精液を外に出したいとエマさんに懇願をしてしまうことになる。僕の体は完全に、エマさんのオモチャにされていた。

「出したい!!精液、出させて!!!お願いします!!!」

「……いい声ですわ♡……これでザーメンの無駄撃ちがしたくて♡……なんでも私たちの言うことを聞く雑魚チンポ奴隷の完成です♡……あら♡……あちら側も♡……終わったようですよ♡」

エマさんの言葉を聞いて僕が目の中の動画に目をやると、ベッドの上に仰向けに寝て股を開いたレイナのお腹には、ピンク色の模様が浮かび上がり、妖しく光り輝いていた。

それなのに彼女は、すっごくしあわせそうな顔のままDランク君のチンポを愛液と精液まみれになったおまんこに啜え込んで、動画の中で彼とセックスをし続けている。

ずっと両思いだと思っていた爆乳でボーイッシュな幼なじみが、僕の知らない所で、僕以外の男に股を開いてすっごく気持ちよさそうに腰を振っていた。

僕は理解する。僕がどれだけわがままを言っても側に居続けようとしてくれていたレイナの心の中にはもう、僕は存在しない。

彼女は、僕ではない男の所有物になった。

「まさか、別口でこの国に魔族種の侵入者がいるとは。どこの勢力かしら。Sランクの勇者を寝取られたのは痛いけど、こちらは優秀なザーメンタンクを六名確保したし、おあいことしましょうか」

「レイナ……レイナ……助けて」

「……ケータの恋人にならなくてよかつたあ♡……だつてユーリのチンポ♡……すっごい♡……気持ちいいんだもん♡……あつ♡……あつ♡」

「……うふふ。どーせあなたの雑魚チンポじゃ、レイナさんの体は満足させられなかつたわよ。だつて、あなたの粗チンには何の利用価値もないから、搾精タンクとして再利用することになったのですもの」

僕はレイナに向かって助けを求めるが、僕ではない男のチンポに夢中になってベッドの上で腰を振る彼女は、僕の言葉にまったく気づいてくれない。

そして、僕と一緒にいこうと約束した花火大会のことなど、とつくの昔に忘れてしまったレイナが、僕ではない男に股を開いておまんこにネチャネチャと愛液を糸引かせながら、僕以外の男のチンポを気持ちよきように敏感な膣肉の奥まで受け入れ、膣内射精を悦んで子宮に受け取っている。

僕に一途だったレイナが、寝取られた。

「……中に♡……すっごいの♡……出されちゃった♡……ごめんね♡……ケータ♡……わたし♡……あなたのじゃない♡……男の人の♡……せーしで♡……おまんこ……きゆうきゆうって♡……気持ちよくなつて♡……もう♡……いつ♡……イクう♡」

ヒク♡ヒク♡ヒク♡

僕ではない男の膣内射精にしあわせそうな表情をトロトロに溶かしたレイナがイキながら発したその言葉とともに、魔力通信が強制終了する。

僕が何度もスキルを使って彼女と連絡を取ろうとしても、再び繋がることはなかつ

た。

「さて、そろそろ撤退時でしょうね。搾精タンクが無駄な魔力通信をおこなったことで、私の存在もバレてしまったことですし。このままじゃ、あの男の子のチンポで私も墮とされてしまいそうですもの。あの男の子の部下が、私を確保しにここに向かってきてるみたいだし、急ぎましょう」

そう言うのとエマさんはメイド服を脱ぎ捨て、頭に黒い角と背中に黒い翼を生やしたビキニアーマー姿に変わる。

「……………うふふ♡……………これからあなたは♡……………チンポから射精することしか考えられない♡……………搾精奴隷として♡……………サキュバスの国で生きるのよ♡」

こうして僕は、魔族の国に連れ去られて、搾精牧場で飼われることになった。

レイナちゃん寝取り1♡

少し時はさかのぼり、勇者たちが初めての野外演習を帝都近郊の森でおこなっていたころ。

……

……

……

「……その、ありがとう」

不良グループたちに追いかけて回されていたレイナちゃんを転移魔法で救い出し、いまの俺たちは俺が宿泊している小屋の中で休憩をしていた。

訓練着の上の軽鎧を身につけた彼女が、落ち込んだ顔で俺にお礼の言葉を言っている。

レイナちゃんの実力なら不良グループぐらい簡単に倒せてしまうはずなのだが、暴力行為に慣れていないために、彼女はクラスメイトである仲間にも反撃することができずに、そのまま森の中で追いつめられてしまっていた。

さすがに不良グループたちの行為を見過ぎすわけにはいかなかったため、俺がこっそりと、転移魔法でレイナちゃんを救い出したというわけだ。

「あのさ、お礼って、何すればいいかな？男の子が喜ぶようなことって、よくわからなくて……」

おずおずと、律儀な態度でレイナが助けてもらったことへのお礼を俺に申し出てくる。

森の中を走り回ったことで、少し汗をかけた彼女の濡れた黒髪がすごくエッチだった。

「じゃあ、おっぱい触らせて」

「……まったく、男ってやつは……」

俺が助けたお礼としておっぱいを触りたいとレイナちゃんに伝えると、彼女は一瞬だけ怒った顔をしたあとに、呆れたようにポツリと言葉をつぶやく。

そして無言になって少し考えたあとに、レイナちゃんは俺に肯定の言葉を返してきた。

最悪のピンチを助けてもらったお礼に何をすればいいのかわからなかった彼女は、しぶしぶであるが俺の提案に従うことにしたようだ。

「その、いいよ……。でも、わたし、好きな人がいるからさ。今日だけだよ……」

気が強そうな瞳を困惑させつつ、いまの状況が恥ずかしいのか、レイナちゃんは俺から顔を逸らして返事を伝えてきていた。

「よかつたら、転移魔法を教えようか？今回みたいなことがあっても、レイナちゃんがすぐに逃げられるように。お代は、魔法を教えた日にはおっぱいをもませてもらうこと」

「——このっ！……わかった。教えてほしい」

さらに俺がついでのように、おっぱいをもませてもらう代わりに転移魔法を教えることをレイナちゃんに提案すると、彼女は怒りながらも、俺に転移魔法を教えてほしいとお願いしてくる。

まあ、一回胸をもまれることに踏ん切りがつかないままえば、二、三回もまれるのも同じような感覚になってしまいうからな。俺は少しだけ弛んだ彼女の心のタガを利用して、レイナちゃんとの関係を一步深めていた。

「絶対に、転移魔法を教えてもらう期間だけだからね……」

そして意を決した顔のレイナちゃんが体から身につけている軽鎧を外すと、彼女はインナーとして着ていたジャージのような訓練着だけの姿になる。

俺はそんな彼女をベッドの上に誘導すると、ベッドのフチに座った俺の両脚のあいだにチヨコンと座らせた。

「あの、汗、かいてるから……」

恥ずかしそうにうつむきながら言葉を伝えてくるレイナちゃんを気にすることなく、俺は後ろから両腕を回すようにして彼女が上半身に着ている訓練着とブラジャーを脱がせていく。

レイナちゃんが着ている上着を脱がそうとしたときに、彼女が無言のまま両手を上げて協力をしてきている空気感が心地よかった。

そしてベッドのフチに腰掛ける俺の目の前には、訓練技のズボンだけを身に着けて、上半身を裸にしたメチャクチャにエッチなレイナちゃんが恥ずかしそうに座ることになる。

……むにゆう♡……むにゆう♡

「……はうううう♡……んっ♡……あっ♡」

俺が体の後ろから回した両手でレイナちゃんの爆乳を無遠慮にワシづかみにすると、彼女は悩ましそうな声をあげた。

白く透明感のあるキメ細かい美肌に青色のきれいな血管がいくつか浮き出ているレイナちゃんの爆乳は、ムツチリとしたその質量を重力に逆らわせるようして、見事な乳房を上向きに咲かせている。

そして俺が彼女のおっぱいを両手でもみだすと、俺の両手を開いたり閉じたりするたびに俺の指先がむにゆりと彼女の乳房の中に埋まりこみ、さらにムニユムニユともみ込

むたびに、レイナちゃんの爆乳がやわらかくトロトロに形を歪めていく。

俺に体を差し出す前に好きな人がいると言っていたレイナちゃんであるが、俺の両手におっぱいを触られる感触が気持ちいいのか、ベッドに腰掛ける俺の目に前にちよこんと座りながらも肩をすくませて、そのまま爆乳をもまれる快感によつて彼女は体を少し前かがみにしてしまっていた。

しかし、ここまではまだ準備運動である。

次に俺は焦らすようにしてずっと触らずにいたレイナちゃんの乳首の周りを少しだけ、指先で円を描くようになで回すことにした。

「……んんんっ♡……なにこれっ♡……はうううっ♡」

すると乳首の周りから自然とわき出してくる甘い快感に我慢ができなくなったのか、彼女は快感が強くなり始めた自分の乳首から俺の指を逃がそうと、体をねじりながら悩ましい声をあげていた。

しかし、俺はそのタイミングで、すでに興奮によってガチガチに硬く勃起し始めてしまったレイナちゃんのピンと張ったピンク色の乳首を、一気に指先でつまんでクニクニとこねくり回していく。

……こね……こね♡

「はううううんっ♡——んくううううっ♡——っ♡——あっ♡——あっ♡——あっ♡——あっ♡——あっ♡」

俺に焦らされ続けていた体に突然快感の電流が流れ始めたかの様子で、レイナちゃんがビクンビクンと一気に上半身を痙攣させていった。

そうして、俺から受ける乳首責めに快感の声をあげつつ全身を気持ちよさそうにゾクゾクと跳ねさせながら、彼女は後ろから俺の両手に体を抱えられた状態で爆乳を好き勝手手にいじくられ続けていく。

好きでもない人に自分のおっぱいを好き勝手にもまれるという状況が恥ずかしいのか、レイナちゃんは声を我慢しようとして右手で必死に口元を抑えているが、我慢しきれなくなつてしまつた彼女のあえぎ声は俺たちがいる小屋の中に大きく響き渡つていた。

……むにゆううう♡……クニ♡……クニ♡

「——ん、ん、ん、っ♡——っ♡——あ、っ♡——あ、あああ、あっ♡」

さらに俺がレイナちゃんの乳首を指先でいじめながらおっぱいをグニヤグニヤにもみ込んでいくと、ビクンビクンと気持ちよさそうに体を痙攣させていた彼女が今度は快感に耐えきれないといった様子で体を前かがみにしてしまう。

しかし、体の後ろから両手を回すようにして俺がレイナちゃんのおっぱいをもんでいするため、彼女は体を前かがみにしても、体を左右にねじつても、どうやつても俺の指が生み出す快感から逃げるできない。

乳首をもまれることで体にたまり続ける切ない快感に耐えきれない彼女の体が、さら

に小刻みにヒクヒクと痙攣を続けている。

前かがみになった体勢のまますっごく気持ちよさそうに俺に乳首をいじくられているレイナちゃんの口の中からは、透明なよだれがト口おと糸を引いてだらしなく垂れ落ちてきていた。

……むにゆうう♡……ふにゆう♡……クニユ♡……クニユ♡

「——ふぐううううっ♡——なにこれえっ♡——なにかあっ♡——くるう♡」

ビクン♡ビクン♡ビクン♡

そして俺の両腕の中で前かがみになって、両手で口を抑えながらあえぎ声を懸命に抑えようとしていた彼女が、突然小さく疑問の言葉をつぶやく。

すると、次の一瞬にレイナちゃんがビクンと一気に上半身をのけぞらせると、そのままの彼女は、天井を見上げながら心地よさそうに深い呼吸をし始めた。

どうやらレイナちゃんは、俺に爆乳をもまれただけでイッたようだ。

多分、彼女にとっての、初めての乳首イキだろう。

レイナちゃんは俺の両手の中で、自分の体が乳首だけでイッたことが信じられないといった様子でポーっと意識を濁しながら絶頂の余韻を味わっていた。

最初は遠慮がちに俺の体の前に座っていた彼女であるが、いまは体を密着させあったことで俺への親密度が増したのか、乳首イキの余韻に意識をとろかしながら天井を見あげるレイナちゃんが、彼女の体を後ろから抱きかかえる俺の体に全体重を預けるようにして甘えてきている。

彼女の心からなにかひとつ、俺への警戒心が解けていた。

…:クニユウ♡…:クニユウ♡

「……………はううううん♡……………ねえ♡……………イツたから♡……………おしまい♡……………こらあ♡」

そして、俺が乳首イキの甘い余韻を気持ちよさそうに堪能しているレイナちゃんのおっぱいを再びもみ始めると、一回イツたからもうおしまいだと勘違いをしていた彼女が俺に向かって文句を言い始める。

俺との行為は、一回イツただけで終わりということはないからな。

俺はこれから続く予定の気持ちいい行為に対して彼女に慣れてもらうために、そのまま彼女のおっぱいと乳首をいじめまくることにしていた。

「……………ふうううううう♡……………ふうううううう♡……………ふうううううう♡」

そして、もうすぐ野外演習が終わり集合時間が近づいてくるころになると、乳首責めの快感に甘く意識を飛ばしてしまったレイナちゃんが、全身をぐつたりとさせながら俺のなすがままになっている。

俺からの乳首責めが終わった途端に、ヘトヘトになってベッドの上に仰向けの体勢で倒れ込んだ彼女の気の強い黒い瞳が、快樂の蜜に漬けられて甘く溶けたようにドロドロに濁っていて、そのまま気持ちよさそうに虚空を見上げ続けていた。

レイナちゃんが下半身に身につけたままであった訓練着のズボンが、彼女のアソコから分泌された愛液によって、まるでおもらしをしたみたいに下着ごとベトベトに濡れて一部分が液体色に変色してしまっている。

しかし、今回さわっていいのはおっぱいだけという約束なので、俺は彼女の下半身には一切触れていない。それに、いまずぐ集合場所に向かわなくてはならない時間だ。

さすがにおもらしをしたみたいに下半身をベットリと愛液で濡らす彼女をそのまま送り出すのはかわいそうなので、俺は彼女の体にクリーンの魔法をかけてあげる。

そして、俺からの乳首責めによつて甘く意識を飛ばしたままベッドの上から動けなくなってしまったレイナちゃんに声をかけると、俺は集合時間が迫っていることを彼女に伝えた。

俺の言葉を聞いて、ハツと意識を取り戻したレイナちゃんが急いで上着と軽鎧を身に着けたのを確認すると、俺は彼女と一緒に帝都近郊の森へと転移し、何食わぬ顔で野外演習の集合場所に合流する。

遅刻しないようにあわてていたのか、レイナちゃんが着替えるときにブラジャーをつけ忘れてることに俺は気づいたが、おもしろいので特に声をかけなかった。

そして集合場所に到着してから、自分がノーブラなことに気がついたレイナちゃんが、周りにバレないように恥ずかしそうな顔をしながら、体をモジモジとさせている様子を俺は遠くから観察して楽しむ。

こうして俺たち勇者の、初めての野外演習の日程が終わった。

レイナちゃん寝取り2♡

……むにゆう♡……むにゆう♡

「……ふうふうんっ♡……んくうううっ♡……んああああっ♡」

野外演習が終わった後に、忘れ物のブラジャーを取りに俺の小屋を訪ねてきたレイナちゃんに転移魔法を教えてあげると、俺はまた、謝礼と称して彼女の爆乳をもみまくっていた。

実は、この世界での転移魔法は習得難易度が高く、本来なら数十年の修行をしてようやく身につけることができるような高度な魔法だ。

レイナちゃんは、この世界にチート能力と天才的な才能を持ってやってきた転移勇者である。しかし、そんな彼女でも、転移魔法を習得するまでおよそ一週間ほどかかるだ

ろう。

つまり、これから俺は、彼女の爆乳を一週間くらい自由にもみまかれるということだ。役得である。

俺は今後の予定を楽しみにしながら、レイナちゃんの両胸に膨らんだやわらかくてもっちりとした張りのあるマシユマロおっぱいを両手でワシづかみにして、そのムニユムニユとする卑猥な感触を楽しんでいく。

「……………あの……………その」

「どうしたの？帰らないの？」

そして時間が経ち、今日の分の爆乳の感触を思う存分に楽しんだ俺がレイナちゃんの体を解放しても、彼女は一向に俺の小屋から帰ろうとしない。

その理由は、俺が爆乳をもみまくったあとに彼女の体にクリーンの魔法をかけずにい

るために、今回も乳首イキを何度もしてしまったレイナちゃんのズボンが、アソコからしみ出してきた愛液で下着ごとべつとりと濡れたままだからだ。

「これじゃ、帰れない……」

自分のアソコが分泌した愛液で、自分がいっている下着と訓練着がヌルヌルに濡れてしまっていることを恥ずかしがりながら、彼女が野外演習中に胸をもまれたときにように、クリーンの魔法をかけてほしいと俺にお願いしてくる。

本来ならば自分でクリーンの魔法をかければ良いのであるが、勇者たちから自立能力を奪い帝国に依存させることで彼らをコントロールしたいガスター帝国は、生活魔法のような簡単に習得できる便利な魔法を、勇者たちに存在すら教えていなかった。

「じゃあ、俺がいまからレイナちゃんに、クリーンの魔法を教えてあげるよ。そのかわり……」

「……そのかわり？」

そして、俺はレイナちゃんにクリーンの魔法を教えてあげる代わりに、今度は下半身を好き勝手に触らせてほしいと、彼女に条件を持ち出す。

俺に突きつけられた条件を聞いて一時は激怒していた彼女であるが、このままでは、おもらしをしたかのように愛液で濡れた下半身のまま同級生たちが泊まる宿泊施設に帰らなくてはならないため、背に腹は変えられないと、彼女は俺の条件をしぶしぶと飲むことになった。

「……………ねえ♡……………本当に♡……………今日だけだからね♡」

そして、上半身を裸にして濡れた訓練着のズボンだけを履いたエッチな格好のまま、再びレイナちゃんがベッドの上で後ろから、俺に体を抱きかかえられることになる。

……………スリ♡……………スリ♡

「……………んふうううううう♡……………んっ♡……………あっ♡」

俺が訓練着の上から彼女のおまんこを縦方向にいやらしく指先でこすっていくと、ベッドの上に座って俺の両腕に背後から体を抱きかかえられた格好で、レイナちゃんが上半身を気持ちよさそうにのけぞらせていく。

そのまま、俺は中指の先を濡れた訓練着の上から彼女の割れ目に沿うようにゆっくりと縦に動かしていき、人差し指と薬指を左右に添えながら、スリスリと上下にレイナちゃんのおまんこをさすっていった。

「レイナちゃんのアソコ、すごい濡れてるよ？」

「……い、言わないで♡……んっ♡……あっ♡……はううううんっ♡」

俺が訓練着の上から中指の腹で彼女のおまんこの割れ目を上下にさするたびに、レイナちゃんがいっているズボンの繊維の隙間から、次々と新たな愛液がトロトロになってしみ出してくる。

そしてあつというまに、彼女がはいているジャージのような質感の訓練着にできた愛液の染みが、水たまりみたいになって大きく彼女の下半身に広がっていった。

……クチュ♡クチュ♡クチュ♡

「……はあああああん♡……んぐうううっ♡……んっ♡……あっ♡」

訓練着越しに円を描くようにして、俺の中指、人差し指、薬指の三本の指によっていやらしくおまんこをこねられ始めたレイナちゃんが、快感に耐えきれないといった様子で甘い声を漏らす。

俺の指によって卑猥な動きでこねくり回されている、彼女の訓練着の下にある割れ目からは、粘液質な愛液がかき混ぜられる淫猥な音が、無言の室内に響き渡ってきていた。

レイナちゃんは、自分のおまんこがこんなにも愛液を大量に分泌してしまったという目の前のできごとが信じられないといった様子で、俺に下半身を愛撫されながら甘く息を乱している。

自分の下半身にあるやわらかい割れ目がクニクニと俺の指によって歪められるたびに、彼女は気持ちよさそうに体をクネクネと乱しながら、切ない声を漏らしていた。

……コネ♡……コネ♡

「——ねえっ♡——ちよつとっ♡——まってっ♡——んっ♡——あ、あああっ♡——
——いっ♡くう♡」

ガク♡ガク♡ガク♡

そして、俺が訓練着の上からレイナちゃんのおまんこを的確にコネ続けていると、苦しそうに身悶えをし始めた彼女が簡単にイッた。

下半身を愛液でベトベトに濡らしたままのレイナちゃんが、ベッドの上に座って後ろから体を俺に抱きかかえられた体勢で、気持ちよさそうに上半身をのけぞらせながら、ビクビクとオーガズム中の体を痙攣させ続けている。

訓練着の上から俺の指に濡れたおまんこをいじくられ続けた彼女の下半身が、甘くて気持ちいい快感に耐えきれなかったのか、好きな人がいると言つて俺からの愛撫を嫌がっていたレイナちゃんの言動とは裏腹に、彼女の両脚はパツクリと卑猥にガニ股を開いてしまっていた。

レイナちゃんの心が、少しずつ快樂と欲望に流れ始めていく。

……クニい♡クニい♡クニい♡

「……はひいひいんっ♡……ちよつと♡……まつて♡……あっ♡……お願いいいい♡……ん、あ、っ♡……あ、っ♡……あ、っ♡」

そして、俺がおまんこをガニ股に開いたまま意識を甘く飛ばしてしまっているレイナちゃんの間をついて、彼女の濡れた下着の中にまで一気に右手をねじ込んでいくと、快樂に体を脱力させて座った体勢のまま後ろにいる俺の体上半身をぐつたりと預けていたレイナちゃんが、戸惑ったような声をあげる。

ナちゃん、強い絶頂の余韻に全身をビクンビクンと跳ねさせながらも、苦しいけどそれ以上に気持ちいいという強烈な性の快感の中で、切なくて甘い呼吸を懸命に繰り返していた。

彼女の下半身を心地いいオーガズムに導いたことに満足した俺は、まだ続く絶頂に意識を飛ばしてビクンビクンとイキ続けているレイナちゃん下着の中から、ねじ込んでいた右手を抜き取ることにする。

すると、彼女のおまんこの卑猥な体温が残る俺の五本の指には、粘液質で透明な彼女の愛液がベツトリと、大量の糸を引いてデロデロに広がっていた。

まあ、今日はこれくらいにしておいて、少しずつレイナちゃんの体を開発していこう。

そう思った俺は、深いクリイキに達してまだ体を痙攣させ続けているレイナちゃんの爆乳を気持ちよく後ろから両手でもみながら、彼女が人生で初めて味わったであろう強い性の快楽によってチカチカと飛んでしまったレイナちゃんの意識が元に戻るのを待つことにした。

そして、少し時間が経過したあとに、生活魔法一式を習得したレイナちゃんが、俺の小屋から帰っていくことになる。

……むにゆう♡……むにゆう♡

「……はううううん♡……んっ♡……あゝっ♡……あゝっ♡……なんれえ♡……わらひ♡……乳首れえ♡……簡単にい♡……イカされるのお♡……あっ♡……らめっ♡……またあ♡……イクっ♡」

ガク♡ガク♡ガク♡

もちろん、その次の日も、レイナちゃんに転移魔法の修行をつけてあげた俺は、彼女の爆乳の感触を思う存分に両手で楽しむことになる。

「……今日はあ♡……クリーンの魔法を自分で使うからあ♡……アソコを触るのはダメだからね♡」

ヒク♡ヒク♡ヒク♡

こうして、しばらくのあいだ、俺がレイナちゃんに転移魔法を教える日々が続いていくのであった。

レイナちゃん寝取り3♡

レイナちゃんに転移魔法を教え始めて一週間が経ち、今の俺たちは、二回目の野外演習のために帝都近くのリゾート地にやってきていた。

レイナちゃんが転移魔法を習得するために集中したいと直談判したため、今回の野外演習を監督するマーシャさんのはからいによつて、Sランク勇者である彼女は一人だけ別行動となる。

詳しく説明すると、一般的な観光客が宿泊するコテージに高校生勇者たちが訓練をしながら泊まり、貴族が宿泊する離れた場所にある豪華コテージに、レイナちゃんが一人で宿泊するという形だ

そして、唯一の最低ランク、Dランク勇者である俺も訓練に値しないため別行動させるとマーシャさんに周囲に宣言してもらい、野外演習では常に、俺とレイナちゃんが一緒に行動することになる。

高級コテージゆえ周囲に建物もなく、中で大きな声を出しても誰にも聞こえない室内で、俺がレイナちゃんに転移魔法を教える予定となった。

あとで、ごまかしに協力してくれたマーシャさんには、たつぷりとお礼をしておこう。きれいな湖近くのリゾート地でおこなわれる二回目の野外演習を頑張る高校生勇者から少し離れたコテージ内で、俺はレイナちゃんに転移魔法の訓練を続けるのであった。

……クニ♡クニ♡クニ♡

「——んあああああああつ♡——あああああああつ♡——イクっ♡」

ヒク♡ヒク♡ヒク♡

もちろん、一日の終わりに謝礼と称して俺はコテージの中でレイナちゃんの爆乳をのみ、彼女の体をイかせまくっている。

俺に乳首だけを執拗に触られ続けているレイナちゃんの体に、もつと違う部分も触って気持ちよくしてほしいという欲求不満が溜まってきているのがわかった。

……

……

……

「——やった！できた！」

野外演習三日目になり、レイナちゃんが無事に転移魔法を習得する。

普通なら数十年の修業が必要な転移魔法をわずか一週間足らずで習得したレイナ

ちゃんを称賛すると、俺は彼女と一緒にお祝いをすることにした。

「……………え？ ……何もしないの？ ふーん……………」

そして、転移魔法習得のお祝いと称した食事会も終わると、そのまま俺は就寝する。

「……………これで……………いいんだよね……………約束だし……………もう……………エツチなことも……………されなくて……………いいし……………」

転移魔法を覚えた謝礼として、俺からどんな卑猥な行為を要求されるのかと身構えていたレイナちゃんは、何もせずに別々のベッドに入り眠る俺に驚き、キョトンとした表情をしながらあつけにとられていた。

「……………ケータを……………裏切らなくて済むし……………これで……………いいんだ……………」

すでに、いつもの習慣となつてしまつていた俺からの愛撫をもう受けなくてもいいという嬉しいはずの状況なのに、煮えきらないような、残念そうな顔をしたまま、レイナちゃんはこれでいいんだと自分の心に言い聞かせ続けている。

そして、特に何も起きることなく、野外演習の三日目が終わる。

……

……

……

「——絶対に、何もしないからね！」

勇者たちへの野外演習が始まり四日目の夜。俺とレイナちゃんは、コテージに備え付けの温泉に二人で入浴していた。

Sランク勇者であるレイナちゃんが宿泊している貴族が利用するような高級コテージには、豪華な設備の温泉が隣接されている。

乳首を触る関係ではあるが、それ以上の関係でもない俺たちは、いつもは別々に温泉に入浴しているが、今日は親睦会と称して、彼女が入浴中に俺が無理やり押しかけた。

「転移魔法習得おめでとう」

「うん。ありがとう……」

温泉が白く濁っているので入浴中は体が見えないため、俺に押し切られる形になって、レイナちゃんは俺と一緒に同じ温泉に浸かることを許可してくれることになる。

そして、温泉に二人でゆっくりと浸かりながら、俺とレイナちゃんは当たり障りのない会話を続けていった。

……

……

……

……クチュ♡……クチュ♡

「……ねえ♡……何もしないって♡……言ったよね♡……あつ♡……んっ♡」

しかし、約束を破った俺が彼女の体を引き寄せると、レイナちゃんの体を後ろから抱きしめながら、彼女の乳首をいじり始めていく。

温泉に浸かって火照った体で、レイナちゃんは裸のまま俺の指におっぱいをまさぐられ続けた。

「……………んっ♡……………もう♡……………しかたないなあ♡……………んっ♡……………くううう♡」

口では拒絶しながらも、俺から連日に受けていた愛撫に心を侵食されていた彼女は、一日ぶりに味わう気持ちよくて卑猥な行為に、満足そうに体を乱し始めている。

「……………あんっ♡……………そこお♡……………ダメだつて♡……………ねっ♡……………んくうううっ♡」

……………クニ♡クニ♡

俺が温泉の中でレイナちゃんのおまんこに右手を入れても、彼女は体裁を取り繕うように悪態をつくが、まったく拒絶をしなかった。

俺がレイナちゃんのチクチクとした陰毛をかき分けて硬く勃起し始めてきたクリトリスを中指の腹でコネコネと時計回りに刺激していくと、欲求不満に凝り固まっていた心を溶かされるようにして、一気に彼女の態度が変わっていく。

「……………ふううう♡……………ふうううう♡……………イクう♡……………っ……………えっ?」

しかし、久しぶりに味わう甘いクリイキによだれを垂らして、気持ちよさそうに体を痙攣させていくレイナちゃんの様子を観察すると、俺は彼女の体がイク直前になって愛

撫を止めてしまう。

「レイナちゃんがダメだって言うし、もう終わりにするよ」

「……うん」

俺の愛撫を切実に求めるようにして、卑猥にもガニ股になってしまっているレイナちゃんの両脚の間から右手を引き抜くと、俺は突き放すようにして彼女に冷たい声をかけた。

「じゃあ、俺は先に上がるから」

「……わかった」

下半身にある気持ちいい所を俺の指で刺激されたことで、少しだけとろりと暗く濁った瞳で、レイナちゃんが名残惜しそうに温泉から先に上がる俺の言葉に返事をしていく。

欲求不満が解消される寸前になって、俺のせいできさらに体と心に欲求不満を溜められてしまったレイナちゃんが、温泉から上がる俺の巨根を物欲しそうな瞳で見つめた。

「……ねえ、今日も……何もしないの？」

「うん。約束だから、もう、何もしないよ」

もつと体が気持ちよくなりたいたいという欲望に流され始めてしまったレイナちゃんが、

就寝のために暗くした室内で、別々のベッドの中から俺に声をかけてくる。

実は彼女と同じコテージで過ごしている間中ずっと、俺は快樂魔法を使い、女の子がエッチな気分になって発情してしまう魔力を室内に満たし続けているのだが、レイナちゃんがそれに気づくことはなかった。

「……………んっ♡……………我慢っ♡……………しなきゃあ♡……………あと数日♡……………だからあ♡」

エッチに発情してしまい、ムズムズと切なくうずき続けている自分のおまんこに困り果てているけれども、俺と同室のため羞恥心からオナニーをすることもできずに、必死に性欲に耐えているレイナちゃんの小さな声が、深夜の静まり返ったコテージ内に響いている。

「……………ケータのために……………わたし♡……………絶対に♡……………我慢するう♡」

レイナちゃんを墮とす計画が、あと少しで始まる。

レイナちゃん寝取り4♡

二回目の野外演習が終わってから三日が経つ。

「……………んっ♡……………ゆーり♡……………なにかよう？ ……はあ♡……………はあ♡」

俺の快樂魔法によって、全身を完全に発情させられてしまったレイナちゃんが、俺が住む城内外れの小屋を訪ねてきていた。

時刻は夜。

こんな時間に小屋まで呼び出されたことを警戒することもなく、彼女は無防備な制服姿で俺と二人きりになっている。

むしろ、これから自分がどんなイケナイことをされてしまうのかとレイナちゃんは期待し、欲望に流された濁った暗い瞳で、トロンと俺を見つめてすらいた。

さて、彼女の心を墮とそうか。

……………クチュ♡……………クチュ♡

「……………はああああ♡……………はああああ♡……………はああああ♡……………はあ♡」

俺が無言のままレイナちゃんの体を引き寄せて、彼女がはいている紺色の学生スカ―

トをまくりあげて下着の中に右手を入れると、彼女が待つてましたとばかりの態度で俺の愛撫を受け入れる。

俺が右手をねじ込んだレイナちゃんの下着の中はすでに愛液でドロドロに濡れきっており、クリトリスを硬く敏感に勃起させてしまっていた。

「……………んっ♡……………んっ♡……………そこお♡……………もっ♡……………さわって♡」

そして、突然、俺の右手に無遠慮におまんこを触られることを拒絶することもなく、彼女は気持ちよさそうな顔でガニ股になって、立ったまま俺からの手マンの心地よさを楽しんでいく。

……………クニ♡……………クニ♡

「……………んふううううっ♡……………んっ♡……………くううううう♡……………あっ♡……………あっ♡」

俺はレイナちゃんの体に、オナニーをしても絶対に性欲を発散させることができない快樂魔法を、数日間かけ続けた。

きつと、レイナちゃんは、野外演習から帰ってきてから自分の部屋でこっそりオナニーをしても、どうしても性欲を発散することができずに、おまんこの切なさが消えず、この数日間、苦しみ続けたはずだ。

さらに、その快樂魔法によって、俺は彼女の深層心理にまで、俺とセックスをしないと体のうずきが消えずに残り続けるという意識を練り込んでもいる。

「……どうしよう♡……ケータじゃない人なのに……おまんこ♡……触られるの♡……すつごい♡……気持ちいい♡……体が♡……喜んじやってる♡……はああああん♡」

この世界に転移してきてから時間も経ち、魔法技術に精通し、スキルレベルが世界一高くなった俺の快樂魔法を体にまとわせ続けたことで、彼女はもう、俺とセックスをしないではその欲望が消えないように魔力を変質させてしまつてすらいる。

「……えへへ♡……これはあ♡……転移魔法を♡……教えてもらつた♡……お礼だからあ♡……浮気じゃ♡……ない♡……大丈夫♡……大丈夫♡」

彼女の体を覆う俺の魔力によつて外部から魔力干渉ができなくなり、レイナちゃんの幼なじみの男の子が使う通信魔法を俺の魔法が弾き返し、しばらくの時間、二人は会話ができていないようだった。

「……最近♡……ケータから……連絡もないしい♡……少しくらい♡……また♡……エツチなこと♡……されても♡……いいよね♡……んっ♡……あっ♡……あっ♡」

幼なじみの男の子としばらくの時間会話ができていないことで、レイナちゃんを縛る心の執着が着実に薄れてきている。

レイナちゃんの強かった心が、快樂に壊れる一歩手前まで弱つていた。

俺はこのチャンスに、彼女の心を墮とし、全てを手に入れるつもりだ。

「レイナちゃんのこと、すつごい濡れてるよ?」

「……………言わないでえええ♡……………あああああん♡……………んくうううう♡」

俺に痴態を指摘されたことで、さらに興奮をし始めたレイナちゃんの理性が一気に崩れ落ちていく。

俺はそのチャンス逃すことなく、彼女の腰に手を回し、体を引き寄せると、右手で手マンを続けながら、レイナちゃんのやわらかい唇にキスを重ねた。

……………ちゅぷう♡……………ちゅぷう♡

「……………ふくううう♡……………んっ♡……………んっ♡……………はあああん♡」

魔力を口から体内に大量に送り込み、彼女の理性を壊す、とろけるように気持ちいい魔法のキスによつて、レイナちゃんの心から、快感と欲望に抵抗する力が抜け始めていった。

まるで、恋人同士がするような甘いキスを続けているのに、彼女は俺に対して一切抵抗を見せることなく、快楽に身を任せるまま、トロンと気持ちよさそうに黒くてきれいな瞳を欲望に濁していく。

「……………はああ♡……………はああ♡……………むちゅう♡……………くちゅ♡……………くちゅう♡」

そして、自ら望んで快感を貪るようなキスを心地よさそうに続けながら、彼女は欲望のままに快楽を求めて、俺の体に両手両脚を力強く絡みつけてきた。

俺たちは無言のまま、お互いに求め合いながら、恋人同士の甘いキスを続けていく。

「…………どうしよう♡……………こんなの♡……………初めて♡」

快樂魔法を大量に使った、意識が飛ぶくらいに心地いいキスによつて切なく潤んだ瞳と唇を濡らしながら、レイナちゃんがうつとりと、俺に聞こえないように小さな声でつぶやいていた。

すでに、彼女の心は崩壊する寸前になった。

俺はレイナちゃんの心にトドメを刺して、快樂によつて完膚無きまでに、グチャグチャに彼女の心を壊しきるために、さらに入念な準備を進めていく。

「……………そんなあ♡……………ねえっ♡……………さわって♡……………お願いいいいい♡」

何度もわざと、イキそうになる直前に、俺は濡れきったレイナちゃんのおまんこへの愛撫を止め続けた。

そして、ついに彼女が壊れたように、俺に愛撫を懇願してくることになる。

こうして、レイナちゃんの心が壊れた。

「でも、レイナちゃんには、彼氏がいるんでしょ？」

「……………ケータとは……………まだ付き合っていないっていうか♡……………付き合う約束をしただけっていうか♡……………でも♡……………でもお♡」

俺が冷たく突き放すようにしてレイナちゃんの心をさらに壊していくと、最後の一握りだけ心の中に残った自制心を振り絞って、彼女は俺と気持ちいいことをするための言

い訳を夢中で探す。

俺に向かつて必死に手マンを懇願している今の彼女の表情は欲望に暗く笑っていて、俺と気持ちいい行為をする理由を作り出すことだけで、頭と心の全部が埋まっていた。

「そうだ。レイナちゃんに、見てもらいたいものがあるんだ」

俺は、このままレイナちゃんの心に残った理性を粉々に破壊しきるために、ユキノとリンネに頼んで録画してもらった、とある特別な映像記録球を彼女に見せることにする。

「……………なにこれ？ ……映像記録球？」

高校生勇者たちが宿泊している寮に潜入して記録してきた、とっておきの映像記録球だ。

……………へこ……………へこ

「……………ケータさん……………あつ……………あつ……………気持ちいい……………すっごい……………」

「……………そんな……………ケータ……………」

俺が起動した映像記録球から流れ出した、レイナちゃんと幼なじみの男の子がメイドの女性とセックスを楽しんでいる映像を見て、レイナちゃんが驚いた顔で固まってしまった。

「……………なんで……………なんで……………なんで……………わたしは……………すっごい……………我慢してたのにい

「……ケータは……なんで……裏切ったのお……」

恋人になると約束をしたはずの幼なじみが、自分ではない別の女とベッドの上で楽しそうに腰を振っている映像を見て、レイナちゃんの心が、簡単にグチャグチャになって壊れていった。

「……あはは♡……じゃあ♡……もう♡……わたし♡……我慢しなくて♡……いいんだよね♡」

でも、俺が今まで心地いい快樂によつてとろとろに潰け込んできたせいで、彼女の心はまったく傷つくことがない。

むしろ、自分がずっと幼なじみのためにと我慢してきた俺との気持ちよくてイケナイ行為が、シてもいい行為に変わったことへの歓喜に、彼女の心が満ちあふれていく。

レイナちゃんの心はもう、全部壊れていた。

「……えへへ♡……ユーリ♡……抱いて♡……私のこと♡……ぜんぶ♡……めっちゃくちゃに♡……して♡」

幼なじみが自分以外の女性とセックスをしていたことで、むしろ自分にまったく必要のない束縛が外れたことに喜び、レイナちゃんが欲望に流された瞳で薄暗く笑っている。

そして、彼女は心がグチャグチャに壊れた自分の体を癒やし、慰めてほしいと、俺に

懇願してきていた。

「…………わたしの体♡…………すつごく♡…………気持ちよくして♡」

今のレイナちゃんは泣きながら笑い、わけがわからなくなった感情を収めるために、俺とのセックスを切実に求めている。

あとは、彼女の体をセックスでとろかしていき、快楽でどっぷりと破壊して、レイナちゃんの心と体が元に戻れなくなるくらいにまで、気持ちよく墮とすだけだ。

「…………ユーリ♡…………好き♡…………好き♡…………好き♡」

ありがとう。ケータくん。

ケータくんの軽率な行動のおかげで、こうして俺は、レイナちゃんの心を手に入れることができたよ。

「…………ケータのこと…………ぜんぶ♡…………忘れさせて♡…………お願い♡」

(ケータくん。レイナちゃんのお礼を言いながら、恋人になる約束をしていたはずの、自分を裏切っていた幼なじみのことを全部忘れたくなったレイナちゃんの処女を奪うために、彼女と仲良く並んで、ベッドに向かって歩いていく。)

レイナちゃん寝取り5♡

「……………いよ……………いよ……………」

制服を脱ぎ捨て、全裸の姿になったレイナちゃんが、ベッドの上に仰向けに寝て、うるんだ瞳で俺を見つめている。

白くて透き通った肌にふくらむ、ぷるんとして張りのある彼女のIカップの爆乳が、若くてかわいいピンク色の乳首を卑猥に勃起させていた。

……………むにゅ……………むにゅ……………

「……………はああああんっ……………んっ……………んっ……………」

ベッドの上に仰向けに寝ていても、体の横から垂れ落ちることなく、マシユマロみたいにやわらかな質感でその大きさを淫らに主張しているレイナちゃんの爆乳を俺が右手でもむと、彼女は快感と興奮に歓喜の声をあげる。

……………ぴと……………

「……………あーあ……………ユーリと……………エッチするなんて……………思わなかったなあ……………」

俺と、これからセックスをするという事実への期待と興奮でグチャグチャに濡れている

るレイナちゃんのおまんこに正常位の体勢でペニスを押し当てると、彼女は感慨深そうに、少し後悔もしているように感じられる複雑な表情で、ベッドの上で言葉をつぶやいた。

「…………わたし♡…………ユーリに♡…………墮とされちゃったあ♡」

転移魔法を教える謝礼におっぱいをもませろと要求してくる俺を、真面目なレイナちゃんは最初、嫌がって拒絶していた。

しかし、俺に乳首をとるところに気持ちよく開発され、心を誘導されたことで、今の彼女はベッドの上で正常位の体勢になって、俺とのセックスが開始されるのを今か今かと待ち構えている。

誠実で一途な心を持ち、ケータくんという恋人になる約束をした幼なじみが存在する以上、絶対に起こり得なかったはずの淫らな状況が、今、俺の目の前においしく用意されていた。

俺は、目の前の欲望に簡単に流されて、レイナちゃんという素晴らしい獲物を取り逃がしたケータくんの中に感謝しながら、彼女の処女を奪う準備を進めていく。

……………くにゆううう♡

「……………んっ♡……………んっ♡……………あっ♡」

濡れそぼったレイナちゃんの膣口に俺のペニスの先を少しだけ押し込むと、気が強く

てボーイッシュな顔をピンク色に火照らせて、美しくも凛々しいツリ目を彼女がギュツと心地よさそうにつむった。

そして、俺は容赦することなく一気に、レイナちゃんのおまんこの奥まで、硬く勃起した俺のチンポをねじ込む。

ケータクん。ありがとう。

レイナちゃんのおまんこ、すつごく、ウネウネしてて、気持ちいいよ。

——ぷちっ♡

……にゅうううううん♡

「……………ふくううううん♡……………ユーリと♡……………エツチ♡……………本当に♡……………しちゃったね♡

……………えへへ♡……………わたしの♡……………初めて♡……………ユーリに♡……………奪われちゃった♡」

正常位の体位で卑猥に股を左右に開きながら、人生で一度だけ体験することができ、処女を失う感触を愛おしそうにレイナちゃんが味わっている。

自分のおまんこに異性のチンポが実際に入っていることへの好奇心から、彼女は上半身をベッドの上から少しだけ起こして、自分の下半身を興奮した瞳でのぞき込んでいた。

俺は、楽しそうな顔で初めて経験するセックスの感触に興味津々になっているレイナちゃんに向かって、彼女のおまんここと性器でひとつに繋がりながら声をかける。

俺のペニスによって気持ちよく、人生で初めての中イキを体に教えられしまった彼女は、ベッドの上で正常位の体位になったまま心地よさそうによだれを垂らして、その快樂に、高校スポーツで鍛え上げられた美しい肉体を甘く火照らせて、ガクガクと全身を痙攣させていく。

そして、そのまま俺は、切れ長の瞳をした美しい顔をとろけるような快感でピンク色に火照らせているレイナちゃんと、仲睦まじくベッドの上で腰を振り続けた。

『……レイナ……助けて……レイナ……』

実は、さっきから、遠距離通信のスキルを使ったケータくんは、俺とレイナちゃんと気持ちいいセックスをのぞき見られているのだが、俺とレイナちゃんとの関係に嫉妬で今後一切干渉されぬよう、彼の心を壊すために、あえて見せつけるようにして、俺はレイナちゃんとの心地いいセックスを続けていく。

『そ、そんな、レイナ……僕を……裏切った……のか……』

俺がスキルに干渉することで、ケータくんはレイナちゃんが俺とセックスしている姿をのぞき見れるが、レイナちゃんは、今の彼の状況を知ることができないようにスキルの効果を検じ曲げた。

だから、ケータくんの声が、レイナちゃんに届くことは今後、絶対はない。

「……ユーリのチンポお♡……硬くて♡……おつきくてえ♡……すっごい♡……気持ち

いいよお♡……ケータなんかと……付き合わなくて……よかったあ♡……だって♡
……そうしたら♡……ユーリのチンポと♡……こんなにも♡……気持ちいい♡……
セックスが♡……できなくなるもん♡……あつ♡……あつ♡……ああああああ♡
……イクっ♡……イクっ♡……イクっ♡」
せつかく、レイナちゃんが俺とのセックスに溺れているのに、それに水をさされたら
最悪だからな。

『……ピッチ女があ……僕を裏切りやがつて……早く……僕を……助けるよお……』
なにやら、ケータくんは魔族に襲われていて今ピンチのようだが、そんなこと、俺に
はどうでもいい。

彼は、レイナちゃんが素行の悪いAランク勇者五人組に襲われてピンチだったとき
に、怖いからという理由で助けに駆けつけなかった。

だから、レイナちゃんが俺とのセックスが楽しいから、ベッドの上で気持ちよく腰を
振り続けてケータくんのことを助けに向かわなくても、彼はまったく気にしないだろ
う。

「好きな人はいいの？」

「……もういいのお♡……ケータより……こつちの♡……チンポの方が大切だから♡
……ユーリのチンポ♡……大好きい♡……私♡……ユーリの女になるう♡……それに

あつちは♡……勝手に恋人宣言してただけで♡……まだ告白もされてないし♡……恋人にもなっていないからああ♡——あ、っ♡——おく、っ♡——すっこいつ!!——こすら、れてるっ♡……イクっ♡……イクっ♡……イクっ♡……イクう♡」

ビクン♡ビクン♡ビクン♡

俺の寝取りチンポスキルによつてさらに心を侵食されて、ついには切れ長で美しい黒い瞳の中にピンク色のハートマークまでを浮かべてしまったレイナちゃんが、ベッドの上で正常位の格好のまま、愛おしそうな顔で俺と楽しく腰を振る。

俺に快感を与えられるたびに、俺のことがさらに好きになっていく寝取りチンポの効果で、彼女の心の中にあつたケータくんへの思いが粉々に破壊されて、俺への愛で上塗りされていった。

……ニユルン♡……ニユルン♡

「……どうしよう♡……ユーリのこと♡……すっこい♡……好きになつちやつたあ♡……好き♡……好き♡……好き♡……好き♡」

今のレイナちゃんは正常位の体勢のまま両脚を使つて俺の腰をがっしりと抱きかかえて、だいしゆきホールドの形になつたまま、気持ちいい俺のチンポをおまんこから絶対に離したくないと夢中になつて、よだれを垂らして俺とのセックスを楽しんでいる。

快樂魔法を使つた俺とのセックスが生み出す凄まじい快感によつて、心をさらに破壊

されていくレイナちゃんの気が強くてきれいだった瞳が、快楽と欲望に染まってドロドロに暗く濁り始めていた。

……とぶう♡……とぶう♡

「……あつ♡……ユーリのつ♡……せーしつ♡……すつごいつ♡……中にでてるうつ♡……お♡つ♡……お♡つ♡」

ガク♡ガク♡ガク♡

俺が、容赦なくレイナちゃんのおまんこに膣内射精をしていくと、この世で一番愛おしい物質を体内に受け入れたような表情になった彼女が、甘くてしあわせで気持ちいい世界に、意識をうつとりと旅立たせていく。

『レイナ……レイナ……助けて』

「……ケータの恋人にならなくてよかったあ……だつてユーリのチンポ♡……すつごい♡……気持ちいいんだもん♡……あつ♡……あつ♡」

元カレにすらなれなかつたケータくんから届くメッセージに気づくことなく、レイナちゃんは人生で初めて味わう俺からの中出しが生み出す本能的で幸福な快感を大量にともなう多幸感に、うつとりとした顔でさらに、瞳を暗く濁らせる。

どうやら、恋人になる約束をしていた幼なじみに裏切られた心の傷も、無事に彼女の
中で癒えたようだ。

その証拠に、おまんこの中に大量に出される俺の精液の感触を、人生で一番しあわせな時間を味わうかのような顔で心地よく、心の底からレイナちゃんは楽しんでいた。

「……………中に♡……………すつ♡いの♡……………出されちゃった♡……………ごめんね♡……………ケータ♡……………わたし♡……………あなたのじゃない♡……………男の人の♡……………せーしで♡……………おまんこ♡……………きゆうきゆうつて♡……………気持ちよくなつて♡……………もう♡……………いつ♡……………イクう♡」

ヒク♡ヒク♡ヒク♡

俺のリクエストに応えて、レイナちゃんがおまんこの奥までを俺の精液でどろどろに白く汚しながら、しあわせそうな顔で、心の中のケータくんに向かって別れの言葉を言い放つ。

そして、そろそろ頃合いだろうと判断した俺は、レイナちゃんにバレぬように魔力通信を使って、姿を隠して俺の護衛を務めているユキノとリンネに指示を出すと、王城内に潜入していた魔族の捕獲ではなく、逃亡先までの追跡を、彼女たちにお願する。

「ユキノ、リンネ、頼む」

「……………ご主人さまあ♡……………帰つたら♡……………ご褒美に♡……………私たちにも♡……………おまんこ♡……………してよね♡」

「……………た、頼むぞ♡……………ご主人さまあ♡」

隠蔽魔法を使って室内で俺の護衛を務めながら、内股になつてもじもじと物欲しそう

な瞳で俺のチンポを見ていたユキノとリンネがこっそりと任務に出発するのを見送ると、俺はレイナちゃんとの気持ちいいセックスを再開した。

——きいいいいん♡

「……………はあ♡……………はあ♡……………はあ♡」

膣内射精されたばかりの俺のチンポを心地よさそうに啜え続けるレイナちゃんのお腹に、ピンク色の淫紋が妖しく光り輝いている。

快樂魔法や精液を経由して俺の魔力を大量に体内に取り込んだことで、すべての魔力が変質しきつてしまい、彼女の体が俺の所有物となった証だ。

もう、レイナちゃんは異世界からやってきた勇者ではなく、魔王ユーリの眷属として、体も心も完全に支配されていた。

「……………わたし♡……………ユーリと♡……………ひとつになれてるう♡……………すっごい♡……………うれしい♡……………しあわせええええ♡」

俺の眷属になることで得られる、人間の限界を超えた甘い甘い快樂の世界に、レイナちゃんがしあわせそうに黒い瞳をどろりと濁らせて、狂気を含み、意識の芯ごとがあつという間にとろけていく寝取りチンポの快感に全身を震わせている。

……………ぬぶう♡……………ぬぶう♡

「……………あゝ♡……………まゝ♡……………なゝ♡……………これえ♡……………わゝ♡……………たしのお♡……………おゝ♡……………まん

こお♡……ユーリのチンポに♡……中から、あ♡……食べら、れてるう♡……す、っ
 ごい♡……気持ちいい、いいいい♡……ん、あ、っ♡……あ、っ♡……あ、っ♡……

俺の淫紋を刻んだことで感度が何倍にも増したおまんこの中に、再び俺は硬く勃起したチンポを出し入れし始めた。

レイナちゃんのおまんこの中から体内に魔力の繋がりを作り、快樂神経までを俺が直接刺激し始めたことで、彼女はまるで、俺のチンポにおまんこを内側から食べられてい
 るような快感を貪り味わうことになる。

……にゅううう♡……にゅううう♡

「……イ、ッてるう♡……イ、ッてる、から、あ♡……なの、に、い♡……イ、グの
 ♪お♡……とま、っ♡……とま、っ♡……ないいいいい♡……んぐうううう♡
 ……あ、あ、あ、あ、っ♡……またあ♡……イ、クっ♡……イ、クっ♡……イ、
 クううううう♡」

ガク♡ガク♡ガク♡

俺の眷属になったことで、ついに本番が開始された俺とのセックスの激しくも甘い気
 持ちよさよさよによって、レイナちゃんが全身を激しく痙攣させながら、意識が根本まで滅び
 とろけていく快樂の世界に、身も心もどっぷりとしあわせに包み込まれていく。

……ぐちゅう♡……ぐちゅう♡

始めた極上の快感によって、レイナちゃんの意識がどろどろに溶けて甘く濁りきり、壊れた。

俺の魔力が彼女の体内を快樂漬けにしながら暴れまわり、彼女の思い出も、人格も、すべてを快感だけで上塗りして、暴風のように一瞬で破壊しつくしていく。

——きいいいいいん♡

「……わたしがあ♡……わたしじゃあ♡……なくなってくう♡……なにこれえええええ♡……すっごい♡……気持ちいいいいいい♡……こころがあ♡……溶けて♡……消えていく♡……みたい♡……あつ♡……あつ♡……あつ♡」

レイナちゃんの心が、純粹な快樂の中に、淡く甘く溶けて消えていった。

そのあとになってこの世界に残るのは、俺の眷属として生まれ変わった、彼女だけだ。

「……はあああああ♡……はあああああ♡……はあああああ♡……なにこれ♡……わたし♡……生まれ変わったあ♡……これ♡……すっごい♡……気持ちいい♡……あつ♡……イクっ♡……イクっ♡……イクっ♡」

ヒク♡ヒク♡ヒク♡

俺の精液を大量に体内に取り込んだことで、魂と肉体に刻んだばかりのレイナちゃん
の淫紋がピンク色に妖しく光り輝き、彼女の体内に、とろけるようにしあわせで心地い
快感を撒き散らしていく。

「……どうしよう……ユーリの……すべてが……愛おしいよ」
 こうして、レイナちゃんの心は、この異世界で完全に生まれ変わった。

快樂魔法を使って作り出された大量の精液を膣内射精されたことで、まるで妊娠したかのように膨らんでしまった自分のお腹を、俺と性器でひとつに繋がったまま、レイナちゃんは愛おしそうな顔でなでている。

「……えへへ……ユーリ……大好き」

子宮の中にたつぷりと射精された俺の精液が、彼女の心と意識を快樂でさらに壊して、しあわせで気持ちいいだけの世界に、どつぷりと墮とし満たしていく。

もう、レイナちゃんの心に、元カレ未満の存在だった幼なじみのことなど、ひとかけらも残ってはいない。

「……こんなの……知っちゃったらあ……もう……わたし……ユーリから……一生……離れられない」

そう言つて、愛おしそうな顔で言葉を発した直後に、おまんこが気持ちよすぎるといふ理由で、レイナちゃんがしあわせそうに意識を手放した。

……にゅぼん

……どろお

「……っっ……っっ……あっ……あっ……」

最高に心地いい膣内射精を終えた俺が彼女のおまんこからペニスを抜き取ると、妖しい熱気とともに、中に出されたばかりの俺の精液が、レイナちゃんのおまんこの奥から一気にドロつと垂れ落ちてくる。

そして、俺はしあわせそうな顔で眠るレイナちゃんの体にクリーンの魔法をかけてあげると、そつとやさしく布団をかけた。

「……すう♡……すう♡」

これでレイナちゃんは、俺の眷属となり、仲間の一員となった。

そして、そのあとすぐに、魔力通信で連絡を取ったところ、ユキノとリンネは無事にバレルことなく、高校生勇者六名を誘拐した魔族を追跡しているようだ。

勇者たちを誘拐したエマという魔族と関わるのは、彼女の所属する組織と、本拠地が判明してからでもいいだろう。

「さて、次は何をして遊ぼう」

スースーとしあわせそうな寝息を立てているレイナちゃんの髪をなでながら、俺は次にする楽しい遊びは何にしようかと、考えていた。

隠し部屋

「やっぱり、次はこっちかな？」

次にする行動を考えついた俺は、さっそく、実行に移す。

現在、俺のダンジョンに建設を計画している、ウオータードラゴンランドという性のテーマパークについて考えるのもいいが、今回、俺が選んだのはこっちだ。

実は以前から、低レベルなDランク勇者である俺が住む場所としてあてがわれた城内外れのさびれた小屋の中に、隠し部屋を見つけていた。

今回、この隠し部屋の先になにかがあるのかを、確認してみることにしたのだ。

「さて、隠し部屋の先がどこに繋がっているのか、確かめてみますか」

人生で初めて体験した俺とのセックスに疲れてしあわせそうに寝てるレイナちゃんを起こさないように、俺は音を立てずに静かに、床に魔法で何重にも隠蔽してある隠し扉を開ける。

すると、隠し扉の先にあったのは、小さな石造りの下り階段の中に、朽ちて効果を失った魔法陣がポツンと一つだけある隠し部屋だった。

そして、部屋の中に残る朽ちた魔法陣を調べてみると、王城内のどこかに転移するために刻まれた魔法陣だということが判明する。

推測するに、この部屋は過去に王族たちが緊急時に脱出するための通路として利用されていた、転移魔法陣の隠し場所なのだろう。

過去に廃棄された王族たちの秘密の通路という理由のため、王城の外れにある小屋の存在理由が誰にもわからずに、でも、なぜか壊すことなかれとも厳命されているために、そのまま、このボロ小屋として放置されていたようだ。

「よし、魔法陣の再生完了！」

隠し部屋から転移できる先に興味を持った俺はさつそく、過去に朽ちて効果を失ったはずの魔法陣を再生する。

俺が魔法陣に手を加えると、効果を失いボロボロになっていた魔法陣が光り輝き、過去の栄華を思い出すかのように再起動した。

そして、俺はさつそく、王族が使う秘密の通路へと転移する。

「ここは、どこに出たのかな？」

俺が転移したのは、人が一人だけ入れるような、明かりもなく真つ暗な、小さな石造りの部屋の中だった。

索敵魔法で周囲の様子をうかがってみると、俺が転移したのは王城内に建設された塔

の頂上にある、隠し部屋だということが判明する。

たしか、王城内に建つ塔は嚴重な警備がされていて、ある程度自由な行動を許されている高校生勇者ですら、絶対に近づけなかった。

そして、塔の最上階にある牢屋のように扉が硬く閉ざされた部屋の中に、女性が一人だけ幽閉されている。

この塔に幽閉されているのは、帝国の歴史の中で最低最悪の悪女と称される、エルザ・フォン・ガスターだったはずだ。

この帝国に勇者として呼び寄せられたときに、絶対に悪女エルザと会話をするなど王様に厳命されたっけ。

たしか、彼女は、先代の王様と王妃を暗殺して、自分の兄弟までを殺そうとしたと世間では言い伝えられている。

そして、そんな悪女エルザを塔に幽閉したのが、勇氣と誠実さを合わせ持つ彼女の兄であり、今代の王様というわけだ。

小さな頃から絶世の美貌を持ち、さらには黄金の知恵を持つと称される程に賢く美しい王女が錯乱したと、当時は本当に大騒ぎになったと聞いた。

どうやら、悪女エルザが幽閉されている部屋の中にある隠し部屋に、俺は転移してきたようだ。

「せっかくだし、最低最悪と称される悪女エルザに、あいさつしていこうかな」

本来ならば見張りの人間がいるのだろうが、今は魔族に高校生勇者が六人も誘拐されたと、城内が混乱して大騒ぎになっているため、部屋の周囲には幽閉されたエルザ以外、誰もいなくなっている。

さて、鬼が出るか蛇が出るか。

俺は廃棄されたはずの秘密の抜け道の先にある部屋の扉を、ワクワクとしながら開けた。

悪女エルザ

「あら？ 今日の大騒ぎはあなたが？」

隠し扉を開けて部屋の中に入ってみると、悪女と世界で噂されるエルザが俺を出迎えてくれる。

突然、部屋の中にあつた隠し扉が開いたことに彼女は驚くこともなく、白くて高級そうなテーブルに座つて優雅に紅茶を飲みながら、笑顔で俺のことを歓迎していた。

今年で十五歳になるエルザは、身長百五十センチメートルの体に早熟なGカップの爆乳を膨らませて、水色のきれいなドレスを身につけている。

そして、ピンク色が混じつた細く美しい金色の髪を背中まで伸ばし、深く青い瞳で、俺のことを観察するようにじつと見つめていた。

彼女の青い瞳を見ると、まるで俺の意識が彼女の中に吸い込まれていき、そのまま心の奥底まで、すべてを見透かされてしまうような印象を受ける。

これが、黄金の知恵を持つ賢者とも、恐ろしい悪魔とも称されてるエルザとの初対面だった。

「私のことを助けに……来てくれたというわけでは、ありませんね」

俺のことを観察し終えたのか、エルザはくりんとしていて無邪気な青色の瞳を輝かせると、貼り付けた笑顔で俺に話しかけてくる。

「あら？　伝説の悪女がこんな感じで、ガツカリしました？」

そして、顎に人差し指をそえて、人好きのする笑顔でかわいく首を傾けながら、彼女は俺を茶化すように笑いかけてきた。

まるで、こういう仕草が人間には受けるのでしょうかという知識を披露するように、エルザはとても愛らしい振る舞いをコロコロと変えながら、俺との会話を続けていく。

普通の人間なら、彼女の何気ない仕草に触れているだけで無意識に信頼を寄せていき、そのまま、エルザに深い忠誠を誓うまでになるのだろう。

俺は鑑定スキルを使って、現在の彼女のステータスを目の前に表示する。

ステータス

エルザ・フォン・ガスター

状態：憑依（九尾の狐タマモ）

エルザの心には、底知れぬ怪物が潜んでいた。

エルザと会話を続けてわかったことは、先代の王様と王妃を暗殺したのは、実は今代の王様だということ。

エルザは国王と王妃の暗殺の罪を被せられて、この塔に幽閉されていた。

それと、今代の国王が政治を動かすようになってから、周辺国家や魔族の国への強硬的な侵攻が開始されていること。

どうやら、独占欲と支配欲が強い今代の王は、世界制覇を狙っているらしい。

そして、他国との戦争で、都合のいい戦力として利用するために、高校生勇者たちの集団召喚がされた。

エルザ以外の王族たちは、今代の王様に暗殺されぬように、国中に散り散りになって避難しているということだった。

自分だけが国の政治を独占することが今代の王様にとって重要らしく、政治に干渉できなくらいに遠い場所にまで避難すれば、暗殺の追手はやってこないようだ。

では、なぜエルザがこの塔に幽閉されているかという点、彼女が持つ知恵を、今代の王が利用するため。

そして、先代の王が暗殺されてから五年間、エルザはこの部屋に一人で幽閉されることになった。

この部屋に、どんな怪物が封印されているのかも知らずに。

「ここから出してくれたら、何でもしますよ?」

突如、国内の政治情勢について親切に教えてくれていたエルザが、何でもないことの

ように、俺に条件を持ち出す。

清纯で無垢な王女を演じていた彼女の雰囲気が変わると、妖しく男をたぶらかす、傾国の美女へと様変わりした。

少しずつ、彼女の中の怪物が、本性を現している。

「え？ 何でも？」

「ええ、なんでも」

俺が追加で質問をしても、エルザはニツコリと清纯な笑顔を貼り付けたまま笑っていた。

人間の男など簡単に支配し、洗脳できると高をくくっているのか、彼女は初対面の俺に対して、まったく警戒をしていない。

「で、でも、俺は、Dランク勇者だし……童貞だし……」

せつかくだから、おもしろそうだし、俺はエルザに心を誘惑されていくウブな男の子を演じるようにして、彼女との会話を進めていくことにした。

「……うふふ……大丈夫……あなたは……ギユつて目をつむっていれば……お姉さんが……すつごく……気持ちよくしてあげるから♡」

ここが墮とし所だと判断したのか、テーブルを挟んで紅茶を飲みながら俺と会話をしていた彼女が立ち上がると、俺の体にくつつき、耳元に甘い吐息をぶつけて俺を誘惑し

てくる。

エルザのやわらかい爆乳が俺の右腕に押しつけられて、ぷにゅんと気持ちよく潰れていた。

最高の感触である。

「……………わたしの体♡……………まだ♡……………処女なんです♡……………この体♡……………あなたの好きに♡……………したく♡……………ありませんか？」

「……………ど、ど、ど、ど、どうしよう……………」

俺は誘惑に乗りたくても、自分に自信がなくて、あと一歩がどうしても踏み出せない男の子を演じながら、エルザとの会話を続けていく。

「あなたが、あの魔法陣の封印を解いたんでしよう？ 実は私の体にも、あの魔法陣と同じ封印があつて、その魔法を解かない限り、この場所から出られないんです……………」
そんな俺の心に最後のトドメを刺すために、すごく悲しそうな表情に変わったエルザが、今の自分の状況を深刻そうに告白した。

「どうやらここが、俺たちの化かし合いの、最終局面のようだ。」

「……………もう、こんな場所に、閉じ込められたくない」

そして、年相応に若い少女の顔に表情を変えたエルザが、俺の目の前で、しくしくと悲しそうに泣き崩れていく。

「……私を助けてくれるのは、もう……あなたしかいないの……お願い、なんでもするから」

そのまま、最後の力を振り絞るようにして、彼女は泣きながら、ピトリと俺の体につきついた。

はつきり言つて、今のエルザの姿はめちやくちやにエロい。

並みの男なら、ここで彼女に同情して、完膚なきまでに心を握り潰されてしまうだろう。

だから、俺はエルザに誘惑されてしまった男の子を演じながら、彼女を助ける宣言をする。

「わかりました！ 俺、エルザさんのこと、絶対に助けます！」

「……うふふ♡……ありがとう♡」

一瞬だけ、本性が出たのか嗜虐的な顔に変わったエルザが、そのDSな表情を隠すようにして、手元にあった扇子を広げて口元を隠すと、期待に満ちた妖しく光る瞳で俺を見つめている。

エルザの体はこの塔から脱出できるが、彼女に憑依している怪物は、封印を解除しなくてはこの部屋から出られないみたいだからな。

せっかくだし、彼女のこと、おいしく俺のダンジョンまでお持ち帰りさせてもらお

う。

だって、彼女も、何でもしてくれらって、俺に言ったもんね。

「べ、別に、エツチなこと目的とか、じゃないですからね！」

「……………うふふ♡……………そうですか♡」

エツチなことが目的ではないと表面では取り繕いながらも、実はエツチなことをする気満々なのが丸わかりな男の子の演技を続けながら、俺はエルザの体にかかっていた封印を解いていく。

「……………でも♡……………ちゃんとお礼はしますよ♡」

「……………え、えへへ」

そして、俺はこの部屋に転移してきた魔法陣で、エルザと一緒に塔から脱出を果たした。

エルザとタマモ

エルザ視点

私がタマモと出会ったのは五歳の時。

まだ幼かった私がお城の中を探検していて、絶対に入ってはいけないよと言われていた塔に入ったときだ。

絵本で読んであこがれた、初めての探検にワクワクと心が燃える幼い私が塔の頂上にある部屋の中に入って最初に目にしたのは、それはもう、美しいお姉さんだった。

ピンク色のきれいな髪を背中まで伸ばして、金色の瞳をつややかに光らせるタマモは、お城の中で私がいとも出会う女性たちが着ているような、きらびやかなドレスではなく、紺色の少し変わった形のドレスを身につけていた。

彼女が着ているドレスはワフクと呼ばれるもので、竜人族の人たちが民族衣装にしてる服だと、私はタマモに教えてもらう。

それから、ひと目を盗んでは塔に通いつめる私に、タマモはたくさんのお話をしてくれた。

しかし、彼女から教えてもらった話をみんなに自慢すると、黄金の知恵を持つ少女だと、私は周囲に持ち上げられてしまうことになる。

幼かった私の大きな失敗だ。

タマモとの楽しい関係を、誰にも秘密にすることができなかったのだ。

そして、塔の部屋に封印されているタマモは、私以外には存在を認識できなかった。

タマモの存在には、封印をされたときに高度な隠蔽魔法が何重にも重ねがけされていて、彼女の話術にハマリ、たぶらかされる人が出ないようにと処置がされている。

では、なぜ、タマモの姿を私だけが認識できるのかというと、私が過去に生きた英雄の血を、濃く受け継いでいるから。

それも、全部、タマモに教えてもらった。

私とタマモが出会って五年が経ち、私が十歳になったとき、私のことをいつも隠れていじめていた次男の兄によって厳格だった父と母が殺されて、ガスター帝国に暗黒と呼ばれる時代がおとずれることになる。

小さかった私をとても可愛がってくれていた、やさしい兄様たちや姉様たちを殺さないことを交換条件に、私は城の中に幽閉されることを選んだ。

今代の王は世界制覇のために、私が持つと言われる黄金の知恵を利用するつもりなのだ。

でも、見晴らしがいい場所に幽閉されたいと条件をつけることで、私は塔の中に幽閉されて、タマモと合流することに成功する。

塔に幽閉されてしまった私を見て、タマモはひどく悲しみ、私のことを絶対に助け出すと約束してくれた。

それから五年間、私は塔の中に幽閉され続けた。

でも、全然さみしくはない。

だって、やさしくて、何でも教えてくれるタマモと、毎日一緒に居れるから。

私が自分の置かれた境遇に耐えきれずに泣いてしまったときは、彼女は九本のしっぽがある狐の姿に変身して、私を温かく包み込んでくれた。

いい匂いがして、もふもふなタマモの毛皮に体を包み込まれていると、全身がぬくぬくと温かくなって、幼い私は心を癒やされた。

たまに、黄金の知恵を求めてやってくる今代の王は、私の体に憑依したタマモが簡単にあしらってくれる。

そうして、五年の月日が経ち、十五歳になった私とタマモは今やもう、親友と呼べるくらいにまで完全に打ち解けていた。

「タマモ！ 私の体で変なこと言わないでよ！」

「……………うふふ……………大丈夫じゃって！ このユーリという少年は、童貞そうだし！」

「そういう問題じゃない！」

隠し部屋にあった、朽ちた魔法陣が突然再起動して、中から人がやってきたときに私はすごく慌ててしまった。

そんな私の体に憑依して、ゆうゆうと転移してきた男の子と脱出する交渉までしてくれたタマモに感謝しつつも、私は彼女がユーリという名前の男の子とした約束に文句を言う。

私とタマモの会話は憑依をした魂の中でおこなわれているため、誰にも聞かれる心配はない。

だからそのまま、私は、私の体に憑依したタマモと会話を続けていく。

「わ、わ、私の体を好きにしていって……タマモ！ あんた、なんてこと約束してるの！」

「……大丈夫じゃやて♡……ユーリは童貞じゃし、エルザがイチモツを握って、シコシコとしてあげれば♡……満足するじゃろ♡」

「そんな恥ずかしいこと、できるわけないじゃない！」

それに、脱出の糸口を探す私とタマモが五年をかけても、どうしても再起動できなかった隠し部屋の魔法陣を再生した男の子なら、タマモの体にかけられた封印も解けるのではないかと期待をしていた。

私だけが塔から脱出するのは絶対に嫌だ。

だから、タマモの封印が解けないなら、私はここに残るつもりでいる。

この塔から外の世界に出るのは、タマモと一緒に。そして、今代の愚王を打倒し、暗黒の時代と呼ばれる帝国を立て直す。

私は、そう決めていた。

「……おろろ……エルザには前に、殿方へのシコシコのやり方は教えてあげたじゃろ？
顔を真っ赤にして、興味津々に聞いていたのは誰じゃったかのう？」

「で、で、でもお……」

そんな私の決意などつゆ知らずに、ユーリという少年に対して私の体を好きにしてい
いとまで、タマモが交渉の中で約束をしてしまったことに私は驚く。

「それに、わらわの封印も解いてももらえるのじゃ。それくらい、サービスせぬか」

「うううう……」

でも、嬉しいことに、ユーリという男の子は、タマモにかけられた封印も解けるよう
だ。

きつと彼は、凄腕の解呪魔法使いなのだろう。

「でも、これで、タマモと一緒に外に出れるね！」

「そうじゃのう！」

とりあえずは、目の前に生まれてしまった私の貞操の問題は置いておき、タマモと一緒に塔から脱出できることを、私は素直に喜ぶことにする。

「いざというときは、お主の体に憑依したわらわがあしらってやるから安心せい。童貞など、三〇すり半で射精させられるわ♡」

「でも、私の体を使うっていうのは、恥ずかしいよお……」

「それに、王女であるエルザの体を、言われたからって本当に好きにする無謀な人間などおらんじやろ。せいぜい、絶世の美貌を持つお主が頬に祝福の口づけをしてやれば、うぶな童貞ならきつと満足するはずじゃ」

「うーん。それくらいだったら、してもいいかも……」

そして、私は、タマモと一緒に塔からの脱出を果たした。

聖女エルザと悪女タマモの物語

タマモ視点

魔物であつたわらわが自我を持ったのは、いつだったか。

世界のとある場所に、暗黒と呼ばれる巨大な洞窟がある。

原初のダンジョンとして伝説になっている暗黒の洞窟は、そこで生まれた魔物たちが殺し合いを続けるだけの場所。

どこまで深く続くかわからない洞窟の中で、狡猾な知恵を持つ狐の魔物として生まれ、たわらわは、終わらない殺し合いの中で強くなるたびに尻尾を増やし、その本数が九本になったときに、自我を持った。

そして、殺し合いだけの日々を飽きたわらわは、常に洞窟の最深部を目指そうと殺氣立つ本能に逆らい、暗黒の洞窟から抜け出すことにする。

すさまじく強力な魔力とスキルをあわせ持ち、結局、最後まで洞窟での殺し合いに決着をつけられなかった、わらわとライバルだった魔物たちも、自我を持ち、次々と暗黒から抜け出していった。

人の心を腐らせる毒女　ククルウ

空を統べる魔竜天女　ホワイト・プリン

時空すらも凍りつかせる雪の妖怪　紅雪姫フブキ

世界が見た悪夢　フリードニヒ8世ちゃん

昼と夜のすべてを飲み込む光と闇の双子　ルナとソラ

永遠の十六歳　シラユリ・ノバラ

かつて、暗黒の中で出会うたびにわらわと殺し合いをしていた、懐かしい魔物たちの名前を思い出す。

フリードニヒ8世ちゃんという例外はあるが、わらわたちは皆、自我を持った瞬間に、人間の女性の姿に変化していた。

そして、暗黒の洞窟から抜け出したわらわたちは、暴力の化身と呼べるほどの魔力とスキルを持つことから、人間たちに八大悪女と呼ばれ、その存在を恐れられることとなる。

いや、正確には、七人の悪女と一人の悪魔と名付けられそうになったところを、フリードニヒ8世ちゃんが自分は女性だと強硬に主張し始めて、世界を滅ぼしそうになるまで暴れまわったために、わらわたちは八人の悪女と呼ばれるようになった。

そういうえば最近になって、フリードニヒ8世ちゃんが、誰にも見せることのなかった

女性の姿をついに披露したと噂話で聞いた。

どうやら、世界を滅ぼすほどに怒り狂い、自分は女性だと主張していたフリードニヒ8世ちゃんの言葉は、本当だったようじゃ。

ソラが放った光魔法は暗黒に巨大な太陽を作り、ルナが放った闇魔法は、暗黒の洞窟の中に、光魔法すらも届かぬさらなる混沌の闇を作った。

シラユリ・ノバラにいたっては、自分は高校の教室で授業中に居眠りをしていたら、気がつくくと洞窟で魔物になっていたと騒いでおったな。

フブキの魔法に凍らされた魔物は、あまりの低温に体が粉々になって砕け散り、紅色の吹雪として空気中を舞うため、彼女には紅雪姫という異名がついた。

爆裂する光線魔法を好むホワイト・プリンは、魔物を殺すときに、いつも数億の光の雨を天から振らせていた。彼女が使う数々の神々しい魔法から、ホワイト・プリンには魔竜天女という異名が付く。

毒女ククルウは、なぜかフリードニヒ8世ちゃんと意気投合をしていて、いつか人の心を腐らせる本を自主制作すると息巻いていた。

暗黒の洞窟での、懐かしい日々を思い出す。

暗黒の洞窟から抜け出したあと、すぐに、わらは行き倒れの子供を拾った。

何の気まぐれか、暗黒の洞窟から抜け出せたことに気分が高揚していたわらは、エ

ルザと名乗った五歳の少女を自分が育てることに決める。

そして、わらわは、持ち前の話術と美貌を利用して商売をしながら街を渡り歩き、エルザと世界中を旅した。

それはもう、しあわせな時間だった。

エルザは旅の途中でいつも余計なことに首を突っ込み、色々な人を助け回っていた。初めはわらわが彼女のお願いを聞いてトラブルを解決していたが、時が経ち、成長するにつれて、エルザは自分で人を救うことができるようになる。

誰にでも分け隔てなく愛を与える聖女エルザと、誰からでも分け隔てなくお金をふんだくる悪女タマモ。

気がつくと、わらわたち二人組は、世界中で有名になっていた。

しかし、エルザが十五歳になったある日、わらわたちに、不幸がおとずれる。

ガスター帝国に滞在していたおりに、わらわたちの美貌に目をつけた王が人民を人質に取って、わらわとエルザの体を手に入れようと計画したのじゃ。

実際に兵を使い、街の人々を切りつけながら、わらわとエルザに城まで来るように伝言が伝えられる。

城まで来ぬなら、街の人々を、これから百人処刑するという伝言も一緒に。

そんな脅しなど無視してすぐに街から逃げ出せばよかったのじゃが、聖女と呼ばれる

までに人々を愛し、助けまわっているエルザに、そんなことはできなかった。

そして、悲しいことに、人々の命と自分の純潔を守るために、エルザは王様の目の前で自害することを選んだ。

誰にも、わらわにすら相談せずに、突然、自らの体に刃を突き立てたエルザを、わらわは止めることができなかつた。まさか、エルザがそんな行動をするとは、つゆほども思つてはいなかつた。

魂喰らいの悪女と呼ばれ、人の心を底まで見透かすと恐れられたわらわは、最も愛しい人の気持ちが見通せていなかつたのじゃ。

「……ごめんね、タマモ」

周りにいる兵を蹴散らし、彼女の元に駆けよつたわらわに、エルザは愛に満ちた瞳で謝罪する。

悪女と呼ばれることにおごり、油断していた自分をわらわは責めた。

そして、エルザを守るために、わらわは自分の魂に刻まれた魔力まで使い切り、転生の呪術を彼女にかける。

わらわの呪術をかけられたエルザの体が消えていき、遙か未来に転生して、生まれ変わることになる魔法じゃ。

そして、転生の呪術をかけるために全魔力を使い果たしたわらわは、王の怒りを買ひ、

その場から逃げ出すこともできずに、そのまま城内にあった塔に封印されてしまった。それから、何百年が経ったのか。

聖女エルザの名も忘れられて、わらわを封印するために建てられた塔の存在理由も忘れ去られたころ、幼い少女が、わらわが封印され続けていた部屋にやってくる。

まるで、エルザの生き写しのような少女は、名前をエルザと名乗った。

「ほう、エルザという名前なのか。わらわは、タマモと言う。よしなに！」

わらわは今度こそ、この少女を守ろう。そう誓った。

それから五年後。十歳になった彼女は幽閉されて、五年間、わらわと同じ部屋で過ごすことになる。

エルザと話していると、しあわせだった時間を思い出し、すべてを失い絶望していた心の傷が癒えていった。

そんなある日、暗く閉ざされていた隠し部屋の中からユーリという少年が現れて、わらわたちに光が指す。

そして、わらわとエルザは、封印された塔からの脱出を果たした。

帝国での事件解決と高校生勇者たちのその後

幽閉されていた塔を出たエルザ王女を見た城の兵士やメイドたちは、まさに大騒ぎだった。

高校生勇者が六人も魔族に誘拐されてひどく混乱を極める王城の中を、エルザは今代の王に会うために進む。

世界制覇を目指すために高校生勇者を異世界から召喚し、隣国への侵攻を繰り返していた王様であるが、王城に侵入してきたサキュバス族の呪術によつて骨抜きにされて、寿命すらも吸い取られ、生きた屍のようになっていた。

それでも、サキュバスが化けていたメイドと腰を振りたいたいとわめき散らす王様が、エルザの指示でどこかに幽閉されていく。

聖女のような慈しみを持ち、悪女のような黄金の知恵を使うエルザに圧倒された大臣や宰相たちは、誰も彼女に逆らうことができなかつた。

エルザに説明されたが、今代の王は、過去に世界制覇をしようと悪逆の限りを尽くしていた愚王の生まれ変わりらしい。

過去に失敗に終わった世界制覇を諦めきれなかった愚王は、時渡りの秘術を発動させて、この時代に転生してきていた。

しかし、なぜ、エルザがそんなことを知っているのかを、今は追求しないことにする。そして、魔族に誘拐されるといふ失態を犯した、奴隸として自覚のない高校生勇者たちを見せしめのために何人か殺せと怒り狂う王様は、どこかで処刑された。

世間では病死となっているが、どこかのダンジョンの奥深くで、彼から彼女に変わった王様は、魔物たちの苗床にされたようだ。

転生の魔法を使えるくらいに巨大な魔力を持ち、まさに一騎当千という呼び名がふさわしいほどに魔法戦闘に長けていた愚王は、強力な魔法生物を生み出すのに適した道具に変わった。

それと、城に潜入していたサキユバス族だっと思われるメイド数名であるが、全員すでに、王城内から姿を消している。

でも、エルザは特に、城に潜入していた魔族たちの行方を追うつもりはないらしい。つまりは、これにて一件落着である。

王様が処刑されたことで、ガスター帝国内の政治は、優しい心を持つエルザの兄が引き継ぐことになった。

世界制覇のための戦争に国民が駆り出され続けて、疲弊していく人々を憂いた長兄

が、政権奪取のためにクーデターの準備をしていたところ、今代の王の病死が世間に公表されて、彼はすぐさま城に駆けつけることになる。

守れなくてすまなかったと、エルザに再会した長兄は謝罪し、戦争に疲弊しているガスター帝国の復興を彼女に約束していた。

そして、エルザであるが、俺が封印を解いたことで、彼女の魂の底に眠っていた生まれ変わる前の記憶がよみがえることになる。

どうやら、死ぬ直前に転生の魔法を発動したことで、記憶の転移が上手くいかずに、彼女の魂の底に、過去の記憶がとどまり続けてしまっていたようだ。

過去の記憶を取り戻したエルザは泣き笑いながら、まるで念話でもするかのよう、心の中でうれしそうに誰かと会話をしている。

こうして、遠い未来で歴史の教科書に、ガスター帝国事変という名で刻まれる大事件は終りを迎えた。

世界制覇の駒として異世界に召喚されてしまった高校生勇者たちであるが、俺とフリードニヒ8世ちゃんまで預かることになった。

俺が運営するダンジョンの周囲には街ができていて、俺のダンジョンから産出する二ホンの物資が大量に出回っているため、高校生勇者たちは基本的に俺の街に移り住むことを選んだ。

また、一部の熱心な紳士淑女たちは、この異世界で薄い本の聖地とされている、フリードニヒ8世ちゃんが運営するカマーランドへの移住を希望した。

そして、何人かの高校生勇者たちは、召喚されたときに手に入れた勇者としての強力なスキルと能力を活かし、冒険者になってこの異世界を旅して回ることに決めたようだ。

俺とフリードニヒ8世ちゃんの肩入れによって、男の子の何人かは女の子にTS転生して、女の子の何人かは、男の子にTS転生することになった。

一人の愚王の欲望によって異世界に無理やり勇者として召喚されてしまったけれども、せっかくだし、高校生たちにはこの世界で楽しく生きてほしい。俺とフリードニヒ8世ちゃんの願いでもある。

俺のダンジョンから産出する数々のポーションによって、高校生たちはおっぱいを大きくしたり、巨根を手に入れたり、瞳の具合を調整することも自由自在だ。

また、勇者として召喚されたときに、全員が病気になるスキルを手に入れているため、一部の人間はTS転生した肉体を、さっそく楽しみまくっている。

高校生勇者たちへの援助はフリードニヒ8世ちゃんが主導してくれたため、Dランク勇者だった俺の正体がダンジョンマスターであると、高校生たちにバレることはなかった。

「なあ、ユーリ。女体化したから、みんなと乱交してみるようになったんだけど、お前も混ざってる?」

「いや、俺はやめておくよ」

「そっか。やりたくなつたらいつでも言えよ?」

だからこうして、高校生勇者たちとは、俺は今も気軽な関係を続けられている。

Dランク勇者だった俺のことを馬鹿にしていたのは一部の人間だけで、他の高校生たちは、基本的に自分の身を守ることと精一杯だった善良な人間だ。

ちなみに、魔族に誘拐されたAランクの勇者五人組とケータくんの合計六人の男の子たちであるが、あとになって彼らを発見した際に、誰も搾精工場から出たいとは望まなかった。

搾精工場で彼らは、サキュバス族の秘術によってふたなりのかわいい女の子にされて、三食昼寝付きでサキュバスたちとセックスをしまくる、搾精ふたなりTS生活を送っているようだ。

かわいい女の子の見た目をした、ふたなりTS勇者たちが住むサキュバス族の搾精牧場は、魔族の国で有名な観光地となった。

特に大人気なのは、Kカップの爆乳を持つTS勇者ケーちゃん、彼女のかわいいおちんちんを根本までニユルンと啜えてあげると、TS勇者ケーちゃんは全身をビクンビ

クンと痙攣させながらすぐに射精してしまうため、サキユバス族たちの嗜虐心を刺激して大人気らしい。

かわいいペニスを持った女の子勇者たちが出す良質な魔力を含む精液を求めて、世界中から、サキユバス族が搾精牧場にやってきていた。

たまにはセックス以外のこともして遊んでほしいと、俺はダンジョンから生み出したニンタンドースイツチャという携帯ゲーム機を、彼女たち六人に差し入れとして送っておくことにする。

それから少し時間が経ち、帝国事変も落ち着いて、悪女の汚名が晴れたエルザであるが、世間的には城にそのまま住んでいることにして、俺のダンジョンに遊びに来ていた。

過去の記憶を取り戻したエルザは、目新しいものばかりが集まる俺のダンジョン都市で、少し遊んでみたいようだ。

そして、今の俺はダンジョンの自室で、新しく俺の仲間になったレイナちゃんの心をさらに快樂の世界に漬け込むために、彼女のお尻の穴を執拗に開発している。

「……………ん、お、っ♡……………お、っ♡……………お、お、お、お、お、お、お、お、お、お、っ♡」

ヒク♡ヒク♡ヒク♡

今日のレイナちゃんへのアナル調教を終えると、お尻の穴のとろけるような快樂を俺に初めて教えられて、気持ちよくイキまくってしあわせそうに意識を失った彼女をベッ

ドの上に残し、俺は部屋を出た。

「さて、約束通り、エルザに、これから何でもしてもらいますか」

夜になり、俺は塔の部屋でエルザとした約束を果たすために、彼女が宿泊している部屋へと向かう。

さて、王女のおまんこを思う存分に、これから楽しむことにしよう。

タマモと中出しエッチ♡

「……あの、たしかに、何でもするとは、言ったけどお……」

夜になり、何でもする約束を守ってもらいにきたと俺がエルザの部屋をたずねると、彼女はしどろもどろになりながら、どうしようかと悩みだす。

「頬にキスするのじゃ、ダメ？」

そして、何でもするという俺との約束をごまかすように、かわいい上目遣いでエルザが俺におねだりをしてくるが、俺は特に何も気にすることなく、彼女の体をお姫様抱っこにしてベッドに運んでいった。

「……うふふ♡……いけずじやのう♡」

すると、まるでエルザの肉体を操作する内側の人物が変わったかのように、身にまとう空気を妖しく変えた彼女が俺にお姫様抱っこされたまま、俺の体に両腕でからみつくように抱きついてくる。

そして、エルザの青くてきれいな瞳が金色に輝いて、俺に催眠魔法をかけてきた。

しかし、この異世界に来てから、俺とセックスをした女の子が持つ能力を吸収して入

手できるという寝取りチンポのスキルを使い、幾人ものチート級の女の子とセックスを繰り返してきた俺には、そんな魔法は効かない。

「……えっ？　ちよつと、これは、予想外じゃてえ……」

簡単に制御することができると思っていた俺に催眠魔法が効かないことに、焦ったような声がエルザから聞こえてくる。

「わ、わ、わ、タマモお……」

そして今度は、再び十五歳の若い女の子に雰囲気に戻ったエルザの中から、一人の美女が飛び出してきた。

さて、これからが本番だ。

「……ふふ♡……すまぬのう♡……エルザは、わらわが何をしても守ると決めたのじゃ」
身長百五十センチメートル程のかわいい体に、ピンク色のきれいな髪を背中まで伸ばして、金色の妖しい瞳を輝かせた美女は、エルザがやさしく仰向けに寝かされたベッドに腰掛けると、そのまま俺に話しかけてくる。

エルザの中から飛び出てきたタマモと名乗る妖艶な美女の頭には狐耳が生えていて、彼女が身に着けている紺色の和服のようなドレスの胸元から、Hカップほどの爆乳がたわわにはみ出していた。

「……わらわの膺壺は♡……心地よいぞ♡」

そして、エルザから気をそらすようにして、俺を優美に色ごとに誘い始める。

「……約束じゃからのお♡……エルザの分まで♡……わらわが♡……童貞のお主に♡……なんでもしてやる♡」

どうやら、タマモは、俺のことを簡単に射精させられる童貞だと勘違いしてくれているようだ。

狐耳をピクピクとかわいく動かして、タマモが俺の体に絡みつきのながら、俺の心を淫らに誘惑していた。

俺を誘惑している間、タマモのキツネ耳と金色の瞳から、俺に向かって強力な催眠魔法がかけられ続けている。

しかし、寝取りチンポスキルを持つ俺には、そんなもの一切効かない。

そのまま、俺は魔法で作りに出したスライム製のやわらかいソファアールの上にタマモを座らせると、正常位の体位で彼女に股を開いてもらった。

俺が作り出したスライム製のソファアールは人を墮落させるソファアールで、丸い形をしたソファアールの上に座ると程よくお尻が沈み込み、一生立ち上がりたくなくなるほど、座った者をとろとろに気持ちよくしてくれる。

俺に押されるようにして、スライムソファアールのくぼんだ部分に座ったタマモのお尻から背中までがヌツプリと飲み込まれると、まるで淫らな愛撫をするかのように人を墮落

させるソファァーがウネウネと動き、タマモの体をゾワゾワと心地よくしていく。

「……はううううう♡」

お尻から背中にかけてを、人を墮落させるソファァーに気持ちよく丸ごと飲み込まれてしまったタマモは、その場からまったく身動きが取れなくなり、俺に何でもされるという選択肢しか選べなくなった。

そして、タマモが着ている紺色の和服ドレスを脱がせると、すべての準備が整う。

「……そのお、エルザには……」

「何でもするって言ったよね？」

「うう……」

一度、催眠魔法を使って何でもするという約束を破ろうとしたことを責めると、タマモはしおらしい態度で俺の命令に従ってくれる。

俺がタマモに命令したのは、エルザに見られながら俺とセックスをすること。

そして、自分が保護者になって、小さい女の子だったころからやさしく育て上げてきたエルザに見守られながら、タマモが俺とのセックスを開始する。

「タマモの……、すっ……濡れてるけど？」

「……あつ♡……ユーリい♡……お主が魔法で作ったソファァー♡……なんか♡……変じゃぞお♡……あつ♡……あつ♡……あつ♡」

口カツプで極上の感触にやわらかい、天上の宝物のような美しい爆乳をふるふると揺らしながら、スライムソファアの上で悩ましそうに腰をくねらせている傾国の美貌を持つタマモが素晴らしくエロい。

——ヌチュ♡ヌチュ♡ヌチュ♡

「——っ♡——はあああああんっ♡——んっ♡——あああああああつ♡——あつ♡——あつ♡——あああああああああつ♡——」

そのまま、彼女への手マンを続けながら、俺が見つけたタマモの膣の中にある気持ちいいポイントで位置を固定して、執拗にクイクイと指先を折り曲げ続けて彼女のおまんこを内側からグチャグチャに心地よく刺激していくと、タマモは白く透き通った美しい頬をピンク色に火照らせて、観念したようにあえぎ声をあげる。

そして、これからする、心が壊れるくらいに気持ちいいセックスのための前戯を終えた俺がタマモのおまんこから二本の指をニルンと引き抜くと、今すぐ奥まで硬い何かを喰えたいと求めてヒクヒクと淫らに動き続ける彼女の膣穴から糸を引いた大量の愛液が、ドロリと生々しく垂れ伸びていた。

——びと♡

「……ひひひひひ♡……まつのじゃあ♡……お主のマラはあ♡……大きすぎるう♡……そんなものお♡……わらわの膣壺にい♡……入らぬ♡……入らぬ♡……入らぬううう♡」

♡
」

俺が勃起したペニスを濡れたタマモの膣口に押し付けると、彼女は俺のチンポのサイズを見て、あわてたように騒ぎ出す。

そして彼女は、スライムソフアーに体を飲み込まれたまま、だだっ子のように騒ぎ始めた。

しかし、俺が魔力を通すことで、突然形を変えたスライムソフアーに四肢を完全に拘束されてしまったタマモはもう、逃げることも、抵抗することも、何もかもができない。そのまま、正常位の体勢で左右に股をぱっくりと開いて、仰向けになった卑猥な格好のままソフアーの上からまったく動けなくなつた彼女のおまんこに、俺はペニスをゆつくりと押し込んでいく。

……ぷち♡

「……んっ♡……あっ♡」

百戦錬磨の顔をして、俺をたぶらかさそうとしていたタマモの処女膜が、俺のチンポで破れた。

どうやら、童貞の俺など三こすり半で射精させられるとイキついていたタマモは、耳年増のタイプだったようだ。

さて、自分の正体がバレて、頭の上にある狐耳を恥ずかしそうにピクピクと動かし続

けている、耳年増な傾国の美貌を持つタマモのおまんこのネットネットとした心地いい感触を、おいしく俺のチンポで味わうことにしますか。

「……わらわが処女で♡……おどろいたか♡……戦いにばかり♡……あけてくれておつての♡」

スライムソファアの上に座つて卑猥に股を開き、正常位の体勢になつて俺のチンポの先を濡れたおまんこにヌツトリと啣え込んだタマモが、処女膜が破れた痛みに涙目になりつつも、いたずらに成功したような楽しそうな瞳で俺に話しかけてくる。

彼女はどうしても、俺に対して心理的に優位な立場に立ち続けていたらしい。

まるで、自分の計略が上手く成功したかのような得意げな顔で、おまんこの入り口に俺のチンポをくにゅんと挿れられたタマモが強がっていた。

彼女は、自分が保護者という立場を務めるエルザに対して弱い姿を見せたくない、完璧な姿を保つために強がっているようだ。

でも、俺は、そんなタマモの心をチンポで黙らせるために、彼女とのセックスを開始する。

これから、タマモが今までずっと隠し続けてきた弱い部分も何もかも全部、ここでエルザに見せつけてしまおう。

……くにゅうううん♡

「——んっ♡——んっ♡——んんんんんんっ♡」

俺が腰を前に押し付けると、もどかしそうに腰を振るタマモのおまんこが俺のペニスをニユルンと極上の感触で包み込み、膣壁の奥深くにまでトロトロに啜え込んでいった。

そして、ネットリとした感触で生温かくまとわりついてくる、心地よくウネウネと動き濡れたタマモのおまんこに、俺のチンポが根本までニユルリと一気に気持ちよく飲み込まれる。

傾国の美貌を持つ、人喰らいの悪女タマモの初体験を奪ったのは、光栄なことに俺のチンポだった。

「……………うふふ♡……………ユーリのチンポ♡……………わらわの♡……………おまんこに♡……………本当に♡……………せいんぶ♡……………入って♡……………しまったのう♡」

スライムソファァーに腰掛けた正常位の体勢で、好奇心に満ちた瞳になったタマモが、自分のおまんこに俺のチンポが根本まで全部入ってしまった卑猥な光景をのぞき込んでいる。

「……………わらわの膣壺♡……………気持ちええか♡……………存分に♡……………楽しむがよいぞ♡」

依然として、タマモは上から俺に言葉をぶつけてきていた。

さて、生意気な狐娘のタマモのおまんこを気持ちよくして、俺のチンポで黙らせませ

か。

そして、俺は正常位の体位で腰を動かすと、生温かい愛液に濡れた膈壁が幾千ものヌルヌルとした極上のヒダヒダを作り、ウネウネとうごめく最高の名器であったタマモのおまんこに、勃起したチンポをヌポヌポと遠慮なく出し入れし始めた。

……ぬぷう♡……ぬぷう♡

「……はああああ♡……ああああ♡……んにゅう♡……つくううう♡」

回復魔法をかけたことで、すでにタマモの体からは破瓜の痛みが消え去っており、彼女は俺とのセックスが生み出すとろけるような快楽に瞳をうるませながら、腰を振る。

「……んっ♡……エルザあ♡……見るなあ♡……お願いじゃあ♡……はあああっ♡……あっ♡」

しかし、自分が保護者を務めるエルザに見つめられながら、俺とセックスをしてとろとろに体を乱すほどの快感を感じるのが恥ずかしいのか、タマモは振り絞るような声で、エルザに自分の痴態を見ないようにお願いしていた。

実はこれが、今回、タマモを墮とすために俺が立てた作戦だ。

悪賢い知恵を持つタマモを二人っきりの場面で屈服させても、彼女が俺になびくことはない。

せいぜい、俺のチンポを都合よく利用されておしまいだ。

しかし、そんなタマモが持つ強みであり、弱みであるのがエルザである。

タマモがいつも完璧な姿を見せていたいと思っているエルザに見られながら、俺のチンポを気持ちよく膣穴にヌトヌトと出し入れされて、おまんこをグチャグチャに濡らしてフニャフニャにイキまくるという痴態を晒すことで、タマモの心に楔を打ち、そのまま彼女を心地よい快楽でドロドロに墮としていく。

悪賢いタマモは俺とのセックスを学習してしまい、二回目からは墮ちることがないのだ。

だから、最初の一回目が最後のチャンスであり、タマモの心を墮とすために何でも言うことを聞くという約束を使って、俺はエルザにタマモがセックスをしている光景を見守ってもらっている。

……にゆううう♡……にゆううう♡

「……エルザ♡……ごしようじゃっ♡……からあ♡……わらわをお♡……み、見るなあ♡……あっ♡……あっ♡……あっ♡……あっ♡……イクう♡」

ヒク♡ヒク♡ヒク♡

十五歳という年頃のエルザにとって、傾国の美女であるタマモが誰かとセックスをしている姿がすごく気になるのか、彼女はベッドの上で内股の体勢になって座り、両脚をモジモジとさせながら動けなくなり、俺とタマモがスライムソファアの上でセックスを

している光景から目が離せないでいた。

そして、何をしてでも守りたい存在である愛おしいエルザに自分の恥ずかしい姿を晒し続けているタマモの心が、少しずつ弱り始めて、隙間を作っていく。

俺はタマモの心にでき始めた弱みを無理やり広げるようにして、彼女の体内に、すぐくどくど口にしていて気持ちいい快樂魔法を大量に送り込んだ。

……にゅうううううん♡

「……んほおおおおおお♡……イクっ♡……イクっ♡……イクっ♡……んっ♡……イクうううううう♡」

ガク♡ガク♡ガク♡

いつも何でも知っていて、いつも何をお願いしても、絶対に助けしてくれるという完璧な保護者の姿を見せ続けていたタマモのおまんこに、俺のチンポがニルンニルンとヌメリながらいとも簡単に、そしてすぐく気持ちよさそうに、卑猥で濃密な愛液の糸を引きながら出たり入ったりを繰り返していく。

いつも完璧だと思っていたタマモが、スライムソファアに四肢を拘束されて、もどかしそうに異性と腰を振りながら、何度も何度も簡単に、そしてとても心地よさそうな表情で太いペニスに無理やりおまんこを絶頂させられ続けるという衝撃的な光景を見て、エルザが興奮と驚きに頬をピンク色の火照らせて固まっていた。

……クニユン♡……クニユン♡

「……ユーリ♡……まで♡まで♡までえええ♡……まつのじゃあ♡……い、いまあ♡……イッたあ♡……ばかりじゃからあ♡……おまんこお♡……敏感になつて♡……はああああん♡……ん、っ♡……ん、っ♡」

性の知識に疎いエルザに見せつけるようにして、さらに、イッたばかりでウネウネと内側の膣肉を濡らしてネットネットと心地よくヒクつかせるタマモのおまんこに、俺は勃起したペニスを出し入れさせ続けていく。

ヌプうヌプうと音を立てて俺のチンポを気持ちよく出し入れされ続けるタマモのおまんこが丸い形にポツコリと広がっていて、下半身にある本気汁まみれになった膣肉のいやらしい穴を、やわらかい感触で割れ目ごと卑猥なピンク色にむわりと妖しく広げていた。

「……んくううううっ♡……はあああああつ♡……はあああああつ♡」

クニユンというやわらかい感触で、俺のチンポの形に丸く広がったままの膣穴の奥からペニス一気に引き抜かれ、再びニユルンという感触で、膣壁とビラビラした割れ目を丸い穴の形にポツコリと左右に淫らに広げて、硬く勃起したペニスを根本まで体内にヌププリと心地よさそうに啜え込むタマモの濡れたおまんこを、エルザは見つめ続ける。

そして、しばらくの時間、いつも完璧な姿を見せ続けていたエルザという愛しい存在に見つめられながら、スライムソファーの上に正常位の体位で寝たタマモが、心地よさそうに連続絶頂を繰り返していた。

……にゅぷう♡……にゅぷう♡

「……エルザあ♡……見るなあ♡……見る♡……なあ♡……ん♡お♡つ♡……あ♡つ♡……あ♡つ♡……あ♡あああああああつ♡……イ♡クううううう♡」

ガクン♡ガクン♡ガクン♡

初めて知る、すごく気持ちよさそうなセックスという行為に興味津々になりながら、エルザは、タマモのおまんこに俺のチンポが出し入れされる様子をベッドの上に座って固まったままガン見し続けていた。

イツたばかりで敏感になったおまんこの中に、グチャグチャと愛液をかき混ぜる俺の巨根を心地よくヌプヌプと出し入れさせ続けて、魂喰らいのタマモがフニャフニャに全身を甘く脱力させながら、快樂にとろけた意識をどろりと気持ちよく濁していく。

魂までがとろけてふわふわと溶けていく、俺との気持ちいいセックスの快感にタマモは精神的な余裕がなくなってきた様子で、正常位の体位で股を開き、スライムソファーの上で背中をガクガクと仰け反らせながら全身をグワングワンと心地よさそうに痙攣絶頂させて、うっとり天井を見上げ続けていた。

チンポ♡……無理やり♡……ズポズポされるのお♡……すっごい♡……気持ちいい♡……あはああ♡……あ♡……あ♡……あ♡……あ♡……

そして、魂食いの悪女と恐れられたタマモの心が快楽に溶けて堕ちていく。

彼女は俺とのセックスが生み出す甘い快楽に心の底からのめり込み始めていて、完璧ではない自分の存在を許容するかのよう、スライムソファアの上で俺と一緒に腰を振り始めた。

「……はああああ♡……はああああ♡……はああああ♡……でも♡……待つのはやあ♡……エルザの前で♡……それだけはあ♡……お♡……お♡……お♡……お♡……お♡……」

しかし、俺が膣内射精をするために、タマモのおまんこの中でペニスをプクリと大きく膨らませて準備をすると、本能的にその行為が何を示すかがわかったのか、自分が種付けをされる姿をエルザに見られたくないと、タマモは懇願し始める。

タマモの心が女として俺に屈服してしまう瞬間を、彼女はエルザに見られたくなかった。

ところが、当のエルザであるが、タマモが誰かに種付けをされてしまういやらしい瞬間を、見たくて見たくてたまらない様子だ。

まばたきをするのも嫌だと言わんばかりにエルザは目をカッと見開いて、両手で口元を隠したまま、タマモのおまんこに俺のチンポが出入りしている光景を恥ずかしそうに

見続けている。

真面目そうなエルザであるが、実は意外とむつつりな女の子だった。

これは、タマモを調教したあとに、エルザの体をおいしくいたただく瞬間が楽しみなってきた。

「……あつ♡……わらわあ♡……エルザの目の前で♡……ユーリに♡……種付け♡……されるう♡」

スライムソファーに正常位の体位で腰掛けたまま、身動きができないタマモがうつとりとした顔になって、観念したかのように甘い声をつぶやく。

そして、男を狂わせるほどに心地いいタマモのおまんこの奥深くにまで、俺は硬く勃起したペニスをニユルンと一気に突き込むと、ネットと愛液でうるおう彼女の膣の一番奥深くに、俺の精液を中出しした。

……とぶう♡……とぶう♡

「……はああああああ♡……あ、っ♡……あ、っ♡……あ、っ♡……ああああああつ♡」

ガク♡ガク♡ガク♡

快樂物質を大量に含む俺の精液がトロトロに甘く膣内射精されると、全身をガクガクと気持ちよさそうに震わせながら、正常位の体位でタマモがおまんこを心地よく中イキさせる。

マモは、俺の精液をおまんこに中出しされるドロドロの爽快感から逃げる事ができない。

そして、タマモは、俺に膣内射精されながら、ガクガクと全身を痙攣させて、絶対に完璧な姿を見せ続けたいエルザの前で深くイッた。

……とぶう♡……とぶう♡

「…………お、ほおっ♡…………お、っ♡…………お、っ♡…………お、おおおおおおおっ♡」

ガクン♡ガクン♡ガクン♡

金色の妖しい瞳をグルンと上ずらせて、俺に膣内射精をされ続けるタマモが、心地よさそうにガクガクと膣肉を濡らし締めつけ、甘くてとろける中イキ痙攣絶頂を繰り返す。

そうして、俺の快樂魔法を大量に含む心地いい精液をおまんこの中に膣内射精され終わると、タマモのお尻にキツネの尻尾が一本生えることになった。

彼女の体に生えたふさふさの尻尾はスライムソファーに飲み込まれて、スライムの中でふるふると心地よさそうに震えている。

魂喰らいの悪女タマモといったら、九本の尻尾を持つ妖女であると、この世界では伝説になっているからな。

過去のエルザに転生の呪術をかけたときに魔力の大半を失ったタマモは、人間の姿の

ときに魔法の媒介に使う九本の尻尾をすべて失っていた。

そして、俺の魔力を含む精液を大量に体内に吸収したことで、タマモの魔力が回復し、彼女は尻尾を一本、肉体に取り戻すことになる。

「……………ふうふう♡……………ふうふう♡……………ふうふう♡……………わらわの尻尾が♡……………復活したあ♡……………じゃとお♡」

ということとは、やることは一つ。

タマモの体に九本の尻尾が戻るまで、俺は彼女のおまんこにトロトロとした感触で気持ちいい膣内射精をし続ける。

……………ニユルン♡……………ニユルン♡

「……………ふうしょうじゃあ♡……………休憩♡……………させて♡……………たもれえ♡……………あつ♡……………あつ♡」

俺との中出しセックスに疲れてヘトヘトになっているタマモのおまんこに俺が硬く勃起し続けているペニスのピストン運動を再開すると、俺の精液でドロドロに汚れたおまんこをキュウキュウと心地よく痙攣させて締めつけながら、快楽に意識をグチャグチャに濁したタマモがうつとりとした顔で懇願してくる。

しかし、たった一回の膣内射精を受け入れたくらいで疲れていては、俺との本番セックスは楽しめない。

タマモのお尻に、六本目の尻尾が生えた。

俺はタマモのおまんこに、そのまま七回目の気持ちいい中出しをおこなっていく。

……ビュク♡……ビュク♡

「……んほおおおおおおつ♡……ユーリい♡……もつとお♡……わらわの♡……おまんこに♡……気持ちいい♡……せーえき♡……ぴゅーつぴゅーつ♡……出してたもれ♡」

俺から七回目の心地いい膣内射精を受けるところになると、タマモは自ら俺の精液をおまんこに欲しいと求めるように変わった。

何度も俺の精液をとろとろに心地よく飲み込み続けて、卑猥に濡れたおまんこをへこへこと揺らし、彼女は今までエルザの目の前では見せなかつたような、おねだりまでしてしまふ。

俺のペニスに栓をされたまま中出しを続けられるタマモのお腹が俺の精液で膨らみ続けて、まるで妊娠が進むかのように大きくなり始めていた。

そして、タマモのお尻に、七本目の尻尾が生える。

俺は無遠慮に、俺の精液であわせそうにポテ腹になり始めたタマモのおまんこに、八回目の気持ちいい中出しを続けていった。

……びゅううううう♡……びゅううううう♡

の魔力を含む精液を大量に吸収し続けたことで、ピンク色に光り輝く俺の淫紋が、しっかりと彼女のお腹に刻み込まれている。

「……………あはあああああ……………わらわ……………ユーリの……………女に……………されたあ……………うふふ……………」

すつごく気持ちいい俺の精液を中出しされ続けたことで臨月のように膨らんだお腹を満足そうに見下ろしながら、人生で初めて体験した俺との連続膣内射精セックスの快楽にうっとりとした顔になって、タマモがスライムソフアーの上に座って股を左右に開いた卑猥な正常位の格好になったまま、金色の瞳をドロリとしあわせに輝かせていた。

……………にゅぼん♡

……………どろお♡

「……………はあああああつ♡……………あつ♡……………あつ♡……………あつ♡……………イクう……………」

俺がタマモのおまんこの奥から、気持ちいい中出しをし終わったペニスをニユルンと一気に引き抜くと、硬い栓を引き抜かれた彼女の膣の奥から、俺の精液がドロドロと卑猥な動きで大量にこぼれ落ちてくる。

そのまま、膣の奥から垂れ落ち続ける精液の余韻で、タマモが心地よさそうに全身を痙攣させながら、甘くてしあわせなザーメンオーガズムに達していた。

そして、意識をグチャグチャに快楽で濁したまま、タマモが悪女の声を発する。

「……え、エルザもお♡……ユーリの女にしてもええ♡……将来♡……誰かと夫婦になるのなら♡……この男が一番いい♡……女なら♡……絶対にいい♡……しあわせになれるう♡」

タマモの心も体も快樂によつてどつぷりと墮として支配しつくした俺が、次の獲物となったエルザの処女を奪うために彼女に近づくと、タマモは妖しく笑いながら、スライムソファアーに体を拘束され続けたままの格好で、これからセックスを始めようとする俺とエルザに向かつて肯定の言葉をかけてきた。

「どうやら、保護者のお墨付きをもらえたことだし、エルザの処女も、このまま、俺がおいしくいただくことにしよう。」

「……えっ? ……えっ? ……まって? ……ええええええええ!」

突然、俺とセックスをすることになってしまったエルザが、混乱しながら、俺とタマモの顔をキョロキョロと見渡していた。

そして、タマモの愛液と俺の精液でベドベトに汚れた、勃起したままの俺のチンポをガン見しながら、エルザが恥ずかしそうな態度でベッドの上に座ったまま後ずさる。

しかし、そんなエルザの顔は、目の前でタマモが味わいつくしていた、イキ狂い、心がドロドロに墮ちきるほどに気持ちいい中出しセックスの快樂を自分も味わつてみたという、期待と欲望に満ちた美しい表情をしていた。

「……あ、あの♡……その♡……初めてだから♡……やさしく♡……してください♡」

そして、おどおどと、恥ずかしそうな顔で、エルザが俺に言葉をかけてくる。

そのまま俺に体をやさしく押されると、ベッドの上に仰向けに寝て、追い詰められた獲物のようにちよこんと小さく体を縮めてしまったエルザの体に、俺は遠慮なく覆いかぶさった。

さて、次は、聖女エルザの処女をおいしく、味わいますか。

タマモをスライムで調教♡

「……あのお♡……そのお♡」

モジモジと内股になってベッドの上に寝転がっているエルザとセックスをする前に、俺は初体験の中出しセックスを終えたばかりで息も絶え絶えになってぐったりと疲れしているタマモが腰かけているスライムソファアーに魔力を通す。

せっかくだし、このままタマモの体を調教して、改造まで済ませてしまおうことにしたのだ。

俺が魔法をかけると、タマモが座っているスライムソファアーが突如変形し、数百の触手を生やしながらタマモの体をぬつぷりと飲み込んでいった。

「んんんんんんっ♡——んんんんんんっ♡」

数百本の触手に上半身をグチャグチャに気持ちよく愛撫されながらスライムソファアーの内部に下半身を飲み込まれていくタマモが、甘い吐息で呼吸をすると同時にビクンビクンと体を痙攣させている。

そのあとすぐ、腰から下までが全部スライムソファアーに飲み込まれてしまったタマモ

のおまんこに、スライムの体が心地よさそうにニルンと侵入を開始した。

……にゆうううん♡

「……んあああああつ♡……あつ♡……あつ♡……あつ♡……あああああああつ♡」

透明な色のスライムに内側から心地よく押し広げられたタマモのおまんこが、ぼつこりと丸い形に広がっていく。

そして、スライムが中に侵入するリズムで、タマモのおまんこがにゅぷにゅぷと卑猥に穴を開いたり閉じたりを繰り返した。

「……待つんじゃない♡……いまはあ♡……敏感だからあ♡……あつ♡……あつ♡……あつ♡」

タマモが甘い声であえぎながらスライムソファーに懇願するが、俺の命令で動くスライムソファーはタマモの体をそのまま愛撫し続けていく。

……にゅぷう♡……にゅぷう♡

「……おほお♡……おっ♡……おほおおおおおおおおっ♡……おっ♡……ほお♡」

タマモのおまんこに侵入しているスライムの体が透明なため、ニルンと内側から心地いい感触でスライムに押し広げられているタマモのヌルヌルしたピンク色の膣肉が、外から見ると卑猥なヒダヒダごと丸見えになってしまっていた。

スライムの中から押し広げられているタマモのおまんこの内側にあるニルニルの膣肉が、スライムの体に押しつぶされてピトリと平たく押し伸ばされながらピンク色

の淫らな穴をボツコリと丸い形に広げている様子が素晴らしくエロい。

タマモの体内に侵入させているスライムのサイズは俺のペニスの大きさと同じにしているため、俺のチンポを咥え込んでいるとき、タマモのおまんこはこういう風に変形してニルンニルンと内側からこすられているのかと知ることができる。

「……………んおつ♡……………いひひいひいひい♡……………なにかあ♡……………おまんこからあ♡……………
 出ちやうううう♡」

——びゅううううう♡——びゅううううう♡

スライムの触手に好き勝手におまんこをいじくられる強い快感に耐えきれなかったのか、タマモのおまんこが勢いよく潮を吹いた。

「……………はひい♡……………なにこれ♡……………なにこれ♡……………なにこれ♡……………おまんこが………
 勝手に♡……………潮♡……………吹いてるう♡……………んっ♡……………あっ♡……………
 ああああああああ♡」

——びゆるるるる♡——びゆるるるる♡

そのまま、透明なスライムによつて子宮の入り口が丸見えになるまでピンク色の膣肉をニルンニルンと広げられているタマモのおまんこから心地よさそうに飛び出した潮吹き透明な液体が、スライムの体の中にじんわりと広がっていった。

……………にゅぶうううう♡

「……はああああ♡……はああああ♡……んちゆう♡……じゆるるう♡……くちゆう♡……くちゆう♡……じゆるるるう♡」

ベッドの上に仰向けに寝かされたまま俺とする甘いキスの快感によって、俺に差し出した舌をニユルニユルと心地よく絡め取られるエルザの体から、緊張と恐怖が抜けていく。

「……はあ♡……はあ♡……ねえ♡……ユーリ♡……わたしのこと♡……めちやくちやにして♡」

俺とのキスをし終えた口から、ヌルリと糸引く透明な唾液を垂らして、エルザがピンク色に火照った頬で俺におねだりをした。

どうやら、エルザの心の中で、このまま俺に堕ちる準備が整ったようだ。

「……んはああああああ♡……あつ♡……あつ♡……あああああああつ♡」

そして、俺とキスの初体験をしただけで、すでにぐったりと脱力をしたままベッドの上から仰向けの体勢で動けなくなってしまったエルザの心と体に、俺は調教をするためのセックスを開始する。

エルザの初体験中出しエッチ♡

——ぷちっ♡

……にゅうううん♡

「……あっ♡……あっ♡……ユーリと♡……本当に♡……エッチしちやったあ♡」

ベッドの上で全裸になり、仰向けになって股を開いたエルザのおまんこに正常位の体位で俺の勃起したチンポをニルンと押し込んでいくと、ニチュニチュに濡れた膣肉をかき分ける感覚と一緒に、エルザの処女膜が破ける感覚を俺のペニスの先に感じる。

「……お腹の中に♡……硬くて♡……おっきいの♡……すっごい♡……入ってるう♡」

金色のきれいな髪に青く澄んだ気品のある瞳をした顔を淫らなピンク色に火照らせるエルザが、ベッドの上で股を左右に開いて、初めて自分のおまんこに異性のチンポを啜え込んだ感触を感慨深そうに味わっていた。

……又チュ♡……又チュ♡

「……んっ♡……んあああああ♡……あんっ♡……あっ♡……あっ♡」

そして、回復魔法をかけて破瓜の痛みを取り除いた彼女のおまんこに俺が心地よく硬いペニスを出入れし始めると、俺のチンポによつておまんこを又チュ又チュと又メリ押し広げられながら気持ちよく膣肉をほじくられる快感のリズムと一緒になつて、エルザが甘い声を出す。

まだみずみずしい彼女の十五歳の体に膨らむ垂れのないGカップの爆乳が、マシユマ口みたいな感触でぶよんぶよんと俺が腰を振るリズムで上下に揺れていた。

異性のチンポを啜え込む卑猥な快感を覚えてしまった王女エルザのおまんこが、俺のペニスの形にグチュグチュと変形しながら、処女であつたその形を、俺の勃起したチンポの形に変えていく。

……にゆうう♡……にゆうう♡

「……ん♡っ♡……ん♡ん♡ん♡っ♡……あああああっ♡……イクう♡」

ガク♡ガク♡ガク♡

俺のペニスでエルザの膣肉にある敏感な部分を気持ちよく丹念にこすつてあげると、弱々しく息を吐き出すように今の感覚を小声でつぶやいたエルザが、初めての中イキを覚えた。

白く透き通つた美しい肌を俺とのセックスの快感で淫らなピンク色に火照らせたエルザが、正常位の体位で硬いチンポをおまんこに啜えながら、ガクガクと全身を心地よ

ビク♡ビク♡ビク♡

中イキしたばかりのおまんこの敏感すぎる部分を俺のチンポが激しくえぐるように動き、気持ちいいピストン運動をベッドの上で続けていくと、中イキしながらエルザが腰をガクガクと痙攣させて、本番を迎え始めた俺とのセックスに甘い声をあげる。

先程まで、覚えてたのやさしいセックスを楽しんでニコニコと腰を振りながら正常位の格好で笑っていたエルザの顔が強すぎる快樂に歪み、ボワつと一気に赤く火照りきつた。

……又ジユウ♡……又ジユウ♡

「……………んお♡っ♡……………お♡っ♡……………お♡お♡お♡お♡お♡お♡お♡お♡っ

♡……………イクう♡……………イクう♡……………イクううううううううう♡」

俺との本気ピストンセックスを続けるうちに、興奮と快感で本気汁にまみれになってグチャグチャな白い泡を垂らし濡れてしまった股間のやわらかいピラピラと割れ目を俺のチンポに硬く心地よく何度も何度も繰り返しほじくられながら、王女とは思えないはしたない声をあげ続けるエルザのおまんこが数度目の中イキに達する。

それでも、俺は彼女のおまんこへのすつごく気持ちいいピストン運動を止めない。

このまま、エルザの心をどつぷりと快樂漬けにするために、彼女のおまんこをグチャグチャに気持ちよくほじくりまくる。

「……………すう♡……………すう♡」

俺はそのまましあわせそうに寝息を立ててベッドの上で眠ってしまったエルザの体にクリーンの魔法をかけてあげると、きれいになった彼女の体にやさしく布団をかける。

「……………はあああああああつ♡……………あ、っ♡……………あ、っ♡」

そして同じく、俺が作り出したスライムソファアーに肉体を改造されきったタマモの体にもクリーンの魔法をかけてきれいにしてあげると、俺はやさしくエルザのとなりにもタマモを寝かせた。

悪女タマモと聖女エルザの二人は、俺とのセックスに疲れきりつつも、しあわせそうな顔で寝息を立てながら二人並んでベッドの上で眠っている。

スライムソファアーによるエルザの肉体改造は、また今度にしておこう。

俺はベッドの中でしあわせそうに眠るエルザとタマモの姿を見て、これから彼女たちにする調教について計画を練る。

「さて、これから何をしよう」

これにて、ガスター帝国による異世界からのクラス転移は一段落となるだろう。

悪女タマモと聖女エルザの二人をダンジョンの新たな仲間として加えた俺は、次にする遊びを考えることにする。

さて、次は何をして遊ぼうか。

ハマっていたネットゲームの低身長Hカッププロり爆乳生意気メスガキキャラで異世界に転移したので、異世界の大人たちをわからせて遊ぶことにしました。

シラユリ・ノバラ視点

「ばーか♡」

ボクの名前シラユリ・ノバラ。異世界に転移した元女子高生だ。

ネットでハマっていたゲームのキャラで異世界に突然転移したボクは、チートな能力を使って今は冒険者として生活している。

この世界に転移させられた時は、魔物だらけの謎の洞窟の中に閉じ込められて困っていたけれど、人外の力を手に入れることで、ボクはその穴蔵から脱出することに成功していた。

ボクがゲームの中で使っていたキャラは真っ白い雪のようなロングヘヤーに薔薇のように真っ赤な妖しい瞳、身長一四〇センチメートルの低身長爆乳生意気メスガキキャラ

ラだったため、ボクはこの異世界で、まるでロリのような見た目で生活をしている。

そして、暴力的な文化がまだ残るこの異世界では、低身長メスガキなボクのことを見下してくる男たちが多かったため、ボクはチート能力を使って、今日も異世界の大人たちをわからせて遊んでいるのだ。

「ギャーッ♡」

今日もヘンタイの男が、爆乳ロリガキの見た目をしたボクをレイプしようとしてきたため、簡単に返り討ちにしてやった。

この異世界に来てから、ボクは何度も男に襲われそうになっている。どうやら、今のボクの見た目である爆乳ロリが好きなのヘンタイがこの異世界には多いようだ。

しかし、チート能力を手に入れて異世界に転移したボクは全戦全勝。今日も、ザコの大人たちをわからせまくっている。

「……おっさんのチンポ♡……弱すぎ♡」

ボクが返り討ちにしたおっさんを魔法で作り出した糸で拘束しながら、同じくボクが魔法で作り出したヌルヌルのローションでシコシコとチンポをしごいて手コキをしてあげると、ボクを襲おうとしてきたおっさんが簡単に射精してしまう。

こうして、暴力でわからせた後に男を拘束して、無理やり賢者タイムにしてやると、罪悪感にかられた男たちはボクにお金をわたして逃げ出すことが多い。

それに、こうしていつも周囲に威張り散らしている暴力的な男が、ボクにチンポをしごかれたくらいで弱気になって簡単にビクンビクンと痙攣する姿を見るのがすごく興奮して楽しかった。

「今日も儲かつちやった♡」

チートな能力を活かして冒険者家業をのんびりと続けながら、ボクはこうして秘密の副業でも、お金を稼ぎまくっている。

そして、この異世界でボクにはもう一つの趣味がある。

それは、童貞狩りだ。

童貞の男の子のかわいいうちんぽをボクの爆乳にニルンと啜え込んで、たくさんの子のうちんぽを奪い、大人の男にしてあげるのだ。

……ふにゅん♡……ふにゅん♡

「……えへへ♡……ボクのおっぱい♡……気持ちいいかな♡」

こうして今日も、ボクは街で見つけた思春期の男の子のうちんぽを爆乳で挟み込み、パイズリで気持ちよく射精させてあげている。

……びゅるる♡……びゅるる♡

「……あーあ♡……ボクのおっぱい♡……君のせーしで♡……こんなに汚れちゃった

よお♡」

もちろん、パイズリをされて興奮した男の子がボクに襲いかかってきても、ゲームのチートキャラで異世界に転移したボクには簡単に返り討ちにすることができる。

童貞狩りのパイズリ狭射は、ボクのドSな性癖を満たすことができる、楽しい遊びだった。

「……あつたかい♡……君のせーえき♡……ぴゅっぴゅっ♡……ボクのおっぱいに♡……いっぱい出したね♡……これで♡……君にも自信がついたかい？ ……好きな女の子をデートに誘って♡……今度は♡……ちゃんと童貞を卒業するんだよ♡」

ボクのパイズリで金玉に溜まった精液をたつぷりと抜いてもらって、スツキリとした思春期の男の子が、恥ずかしそうな顔をしながらボクから走って離れていく。

こうして、ボクはずっと処女を守りながら、メスガキビッチとしての異世界生活を楽しんでいた。

そんなボクが、今おとずれているのが、欲望のダンジョンと呼ばれる最近生まれたダンジョン。

なんと、このダンジョンでは、懐かしきニホンの食材たちが手に入ると噂で聞いた。ボクが異世界に来てから、もう数え切れないくらいの時間が経っている。

そのため、懐かしきニホンの食事が恋しくなったボクは、遠路はるばる旅をして、欲望のダンジョンをおとずれることにしたのだ。

「ウォータードラゴンランド、近日オープン? ……なんだ、これ?」

まるでテーマパークのような施設が並ぶ欲望のダンジョンで、ボクはひさしぶりのニホン食であるラーメン店に座りながら、周りに貼ってある広告を見渡す。

しかし、ボクの意識はすぐに、目の前に運ばれてきた湯気立つラーメンに集中することになった。

モチモチの森という名前のお店のカウンターに座るボクの前に、注文した魚介醤油ラーメンが運ばれてきたのだ。

「うわ〜! メチャクチャに美味しい!」

粉末にされた魚介が香る熱々の醤油ラーメンを口に運んだボクに、懐かしきニホンでのJk生活がよみがえってくる。

この店の魚介醤油ラーメンに乗せられているチャーシューとメンマも、かなりレベルが高く美味しい。高校の友達と学校帰りに並んで食べた、街のラーメン店を思い出す味だ。

親友のレイナは元気かな。ボクだけが突然教室から消えて、異世界に転移したことも知らずにニホンでおどろいてるんだろうな。

ラーメンを食べながらボクは、高校三年生のインターハイに出場するためにバスケットボール部と一緒に練習を頑張っていた、親友の爆乳ボーイッシュな女の子のことを思

い出していた。

この異世界に来てからはゲームのキャラの設定である永遠の一六歳を自称しているが、ボクがこの異世界にやってくるまでは、普通の高校三年生の女の子だった。

そして、ボクはずっと昔になってしまった高校生のころの記憶を思い出しながら、追加で注文した焼き餃子と一緒に、おいしい魚介醤油ラーメンを一気に食べ終えた。

「いや、お腹いっぱいになったあ！ さて、お腹もふくれたことだし、食後のデザートといきますか♡」

そして、ひさしぶりに好物である魚介醤油ラーメンを食べて満腹になったボクは、今度は食後のデザートを探すことにする。

ボクは旅の間にできていなかった、童貞の男の子へのパイズリを久々に街で楽しむことにしたので。

「お！——獲物発見！」

そして、欲望のダンジョンの周辺にできている街を歩きながら、ボクは丁度いい獲物を発見した。

「ねえねえ！ 君、今ヒマかい？」

ユーリという名前の、見た目ですぐに童貞だとわかる男の子をナンパすると、ボクは宿泊している部屋に彼をお持ち帰りすることに成功する。

「うわっ！ ユーリのチンポ、今まで見た中で一番、でっかいね！」

ボクが今まで見てきた中で、ユーリのアソコが一番禍々しくて大きいことに驚いてしまふというハプニングはあったが、ボクはそれを特に気にすること無く、ユーリの童貞チンポにパイズリをして遊ぶことにした。

「……え？ ……一〇分間、ボクのパイズリで射精しなかったら、ボクと生でエッチさせてほしい？ それって、ボクと勝負するってこと？ もし、射精しちやったら、なんでもボクの言うことを一つ聞くって？」

しかし、ボクが上半身に着ている服を脱いでユーリのチンポにパイズリをしようとする、彼はボクに勝負を持ちかけてくる。

今までボクは何万人もの男の子をパイズリで射精させてきたけれど、初めての展開だ。

でも、ボクのHカップの爆乳にパイズリされて、今まで三分すらも耐えられた男の子はいない。

だから、ボクはその経験から特に気にすること無く、ユーリに提示された勝負をうけることにした。

それに、こうしてボクに勝負を挑んでくる男の子を返り討ちにすると、ボクのドSな性癖が刺激されて、すごく興奮することができるからね。

「……………いいよ〜♡……………ボクのパイズリに一〇分間耐えられたら、生で中出しエッチしてあげるよ♡……………そのかわりに、ボクが勝ったら、ユーリにはパイズリで一〇〇回くらい射精してもらうからね♡……………久しぶりにパイズリをするから、ボクも溜まってるんだ〜♡」

ズボンを脱いで、ベッドの上に横たわるユーリのチンポをボクの爆乳でむにゅんとやわらかく挟み込みながら、ボクは気軽に彼との勝負に承諾する。

この異世界に来てから、ボクは今まで、どんな勝負でも全戦全勝だった。

今回の勝負も、どうせボクが勝つに決まってるさ。

……………むにゅう♡……………むにゅう♡

「……………えへへ〜♡……………ユーリのチンポ♡……………すっごく熱いよ♡……………ボクのおっぱい♡……………ヤケドしそう♡」

そして、ボクとユーリとの、中出し生エッチを賭けたパイズリ勝負が始まる。

ユーリとシラユリのパイズリ勝負♡

シラユリ・ノバラ視点

「……………えへへ♡……………ボクのパイズリ♡……………すつごく♡……………気持ちいいからね♡」

ボクは口の中に魔法で作り出したローションをよだれのようにだらりと垂らしながら、ボクの爆乳に向かって、ホットケーキにかけるはちみつのようにたっぷりとヌルヌルの液体をかけていく。

ボクの口から垂れ落ちたローションがダムのように谷間に溜まると、ボクの爆乳にむにゅりと挟まれているユーリの巨根が卑猥に濡れていった。

直接ボクのおっぱいの間に魔法でローションを作り出してもいいけれど、こうして口の中に作り出したローションを上から垂らしてあげるサービスをすると、男の子は興奮して喜ぶ。

……………むにゅ♡……………むにゅ♡

「……………ボクのおっぱい♡……………どうかな♡……………やわらかい？」

両手のひらでギュッとボクの爆乳を挟み込みながらゆさゆさと上下に揺らし、ベッド

の上に仰向けになって寝たユーリのチンポへのパイズリを開始する。

それにしてもユーリの巨根はおつきくて、射精させがいがありそうなチンポをしてる。

ボクは爆乳を使ってむにゅんむにゅんと心地よくパイズリを繰り返しながら、ユーリのチンポの太さと大きさをおっぱいで直接感じていた。

ユーリのペニスは亀頭も太くて、このチンポをおまんこに挿入したら、女の子は気持ちよすぎて大変なことになってしまいそうだ。

ボクはそんなことを思いながら、ユーリへのパイズリを続けていく。

……ふにゅん♡……ふにゅん♡

「……ほらあ♡……もうそろそろ♡……射精するんじや♡……ないかなあ♡」

今までの経験上、男の子がボクの谷間に熱い精液を射精する時間になると、ボクはユーリを挑発するように煽りながら気持ちいいパイズリを続ける。

(……それにしても♡……ユーリのチンポ♡……デカすぎだろ♡……見てるだけで♡

……ボクの体♡……興奮してきちやうなく♡)

ボクの爆乳の間でぬちゅぬちゅつといやらしい音を立てながら擦られるユーリのデカマラ。

そして、ボクの谷間からはみ出ている亀頭からは、ボクのパイズリで弱ってきている

証拠である我慢汁がドクドクとあふれ出してきていた。

そのヌルヌルとした熱い感触を感じながら、ボクはさらにユーリの巨根を挟んだまま激しくおっぱいをこすり動かしていく。

……ゆっさ♡……ゆっさ♡

「……んっふっふっ♡……どう？ ……ユーリ♡……ボクのおっぱいで♡……おちんぼ♡

……むにゅむにゅって♡……気持ちよく♡……挟まれて♡……幸せかい？」

ボクは挑発するように声をかけながら、さらにユーリへのパイズリを強めていった。

そして、彼のチンポにとどめを刺すために、ボクはユーリの亀頭をパクツと口に含むと、舌先でペロペロと舐め始める。

ボクの特別テクのパイズリフェラだ。

じゅるるるう♡むにゅ♡あむっ♡じゅるるるう♡むにゅ♡——ズゾゾお♡

「……えへへ♡……もう♡……でちやいそうでしょ♡」

ユーリのでっかい亀頭を口に含みながら、ボクは爆乳をゆさゆさと揺らし彼のペニス全体に甘い刺激を続けていく。

ボクがフェラをしながらニルンニルンと動かすパイズリにより、プルンプルンと揺れ続けるボクのたわわな乳房を見て、ユーリはますます興奮しているようだ。

ボクはそろそろユーリがイクぞと思いつつ、ベッドの上に仰向けに寝ている彼の顔

をのぞき込んだ。

しかし、当のユーリは気持ちよさそうにボクのパイズリを堪能しているが、チンポの先から精液を射精するような気配を一切見せていない。

こんなにも手応えのない経験は、初めてだった。

「……………ねえ、出してえ♡……………ボクのおっぱいに♡……………ユーリのせーし♡……………いっぱい♡……………かけてえ♡」

ボクは甘い声でおねだりをすると、パイズリをしながらユーリの亀頭にチュツチュツとこそばゆいキスをする。

それに合わせて、ボクのおっぱいを両側から押さえつけていた手の力を強めると、さらに彼のチンポを挟み込む乳圧を強めて、世界一気持ちいいと自負するパイズリを続け続けた。

ボクの爆乳に挟まれているユーリのチンポが、めちやくちやに熱くてなんだかすつごく興奮する。

太すぎるユーリの亀頭を一生懸命ボクの口に咥えていると、なんだかボクのおまんこが興奮で濡れてしまっているのがわかった。

「……………んっ……………んふうー♡……………んちゅっ♡……………んぶあつ！……………あはっ♡……………もう限界？♡……………いいよお♡……………このまま口の中に出してえ♡……………んあつ♡」

しかし、ボクの自慢の舌テクでユーリの亀頭を舐めまくっていると、ぷくつと彼のチンポが膨らむのが口の中でわかった。

今まで何人もの男の子をパイズリで射精をさせてきたボクにはわかる。これは射精の前兆だ。

勝負の約束である十分間まで残り時間も少ないが、パイズリと同時にフェラチオを続ける、普段は絶対にしない特別サービスをユーリのチンポにしてあげたかいたがあつたみたいだね。

「……………ほらあ♡……………出せ♡出せ♡……………ボクのおっぱいの中で♡……………ザーメン♡……………びゅっびゅしろお♡……………ボクのこと犯したいんでしょ♡……………でも残念♡……………ボクのパイズリで♡……………ユーリはあ♡……………このまま♡……………気持ちよく射精しようね♡……………もうイケ♡……………イツちやえ♡」

ボクはユーリを射精させるために極上の乳圧を強めながら、何万人もの男の子をあっというまに射精させてきた世界一のパイズリフェラを続けていく。

「——じゅぶるう♡れるお♡あむう♡あむう♡じゅるん♡——ずぞぞオオオ♡……………むにゆう♡……………むにゆう♡——んぷあつ♡——んあつ♡」

そして、ラストスパートをするように、ボクは最高のパイズリをユーリのチンポにサービスしてあげる。

……ゆっさ♡……ゆっさ♡

「……ユーリのでっかいチンポからでてくる♡……我慢汁すっごいよく♡……れるお♡
……濃くて♡……おいしい♡……ほーら♡……ボクのおっぱいの中に♡……あつたか
い♡……ザーメン♡……いっぱい♡……ぴゅっぴゅ♡……しようね♡」

今までボクは何万人もの男の子のチンポを爆乳に挟んで射精させてきたけれども、こんなにも射精させがいのあるチンポは初めてだった。

でも、これでボクの勝ちだね♡

ボクはそう確信していた。

しかし、無情にも、ボクはユーリのチンポをパイズリで射精させられないまま勝負に負けることになる。

大好きなパイズリに夢中になっていて気づかなかつたけれど、もうとつくに、約束の時間である十分間が過ぎてしまっていた。

「……なんでだよお♡……ボクのパイズリがあ♡……負けるなんてえ♡」

でも、自慢のテクで男の子を射精させられなかつたことをすぐに信じることができなかつたボクが時間切れになつてもそのままパイズリを続けていくと、ユーリの巨根がぶつくりとボクの爆乳の中でふくらみ、今度は大量の精液を一気に放出し始めた。

まるで、制限時間ギリギリまで耐えてから、ボクのパイズリの気持ちよさを余裕を

持つて堪能したような感じだ。

彼が持つ圧倒的なオスとしての力を見せつけるようにして、ボクの爆乳の中で、ユーリのチンポが乳内射精をドクドクと繰り返していく。

——びゅーっ♡——とぶう♡——びゅるるるう♡

「——きゃあんっ?!?!♡」

ボクの爆乳に挟まっていた巨大な肉棒から、ボクの体にむかつて大量のザーメンが発射されていた。

今までパイズリで射精させてきた数万本のチンポの中で、一番精液の量が多く、すごく魅力的な射精だった。

熱い白濁液がボクの顔や胸に飛び散っていくと、あまりの量の多さに、ボクのHカップの爆乳の谷間からもドロオっつと大量の精液がこぼれ落ちてくることになる。

(……すごくいいいっ♡……すごくい量だよおおっ♡)

ボクは爆乳を使つて一生懸命、ユーリの精液を受け止め続けた。

(……ああ♡……この匂い好きいい♡)

自分の爆乳にかけられたザーメンの匂いがボクの鼻に届くと、ユーリの精液が、その香りだけでボクの体を強制的に発情させてしまう。こんなパイズリ狭射は初めてだった。

「……………んっ♡……………おいしい♡」

そしてユーリが出したザーメンを爆乳で全部受け止めたボクは、それを手に取ってペロペロしながら、その味を楽しむようにゆっくりと飲み込んでいく。

そのままボクはユーリのチンポを口に含むと、尿道に残った彼の精子を全て吸い出すようにして掃除していった。

……………ズゾゾゾゾお♡……………じゅるるるう♡

「——じゅるっ♡れろっ♡れるっ♡んっ♡」

さらに、ボクは爆乳に飛び散ったユーリのザーメンを指ですくい、それを残さずペロりと舐める。

ボクを初めて負かした男の子が出した精液は、ボクよりも格上の男の味と匂いがして、ボクの心と体を本能的に屈服させてしまった。

「……………はあ♡……………はあ♡……………どうしよう♡……………ボク♡……………まだ♡……………処女なの♡♡」

そうしてユーリとのパイズリ勝負に負けたボクは、そのまま部屋のベッドの上に全裸で寝かされてしまう。

「……………まさか♡……………勝負が終わってすぐに♡……………ユーリに♡……………中出しエッチまでされちゃうなんて♡……………ねえ♡……………ボク♡……………まだ♡……………心の準備ができてないんだけど♡」

腕力なら今からでもユーリに敵うかもしれないが、どうしてもそうする気にはなれない。

ユーリにだったら、ボクの処女をあげちゃってもいいかなって、ボクはベッドの上でそんなことまで思っていた。

……にゆううう ♡

「……あっ♡」

ずっと処女を守り続けてきたボクのおまんこに、ユーリの巨根がゆっくりと押し付けられる。

えへへ♡すっごく気持ちいい♡

そして、この日、ボクは大人の女になった。

堕ちるシラユリ♡

シラユリ・ノバラ視点

……にゅううん♡

(ああ、とうとうボクも大人の女になるんだ)

ボクは緊張と期待が入り混じった複雑な感情を抱きながら、正常位の格好で、お腹の奥がきゅんきゅんとうずいて子宮口が開いちやう不思議な感覚を味わっていた。

ボクの体のメスとしての本能が、ユーリのチンポをおまんこに求めてしかたがない。

そんなボクの気持ちを知ってか知らずか、焦らすようにペニスの先でボクの割れ目をクニユ♡クニユ♡といやらしく開いていたユーリの腰がゆつくりと前に動き出す。

……にゅうううん♡

……ぶち♡

「……えへへ♡……ユーリのチンポ♡……ボクのおまんこに……ぜんぶ♡……入っちゃたね♡」

おまんこがヒクヒクと動きながら待ち望んでいた硬いモノがようやくやく入ってきたう

れしきで、ボクはつい変な笑い方をしてしまった。

ボクの処女膜がユーリの硬いチンポで破れた感触がはつきりとわかった。

そして、人生で初めて男を受け入れたボクのおまんこの中は、その興奮と快感の愛液でたっぷりと濡れている。

ユーリが回復魔法をかけてくれて、ボクの体から破瓜の痛みを取り除いてくれた。

これくらい痛い痛みはどうってことないんだけど、ユーリが見せるやさしさに胸がキュンとなる。

今まで男の人に殺されそうになったことはたくさんあるけど、こうして男の子にやさしくされたことは少ない。

多分、ボクのおまんこはこれからユーリにたくさんいじめられちゃうんだろうけど、前戯で激しい快楽責めをしてきているときにも、実はユーリがボクの体をすごく大切に扱ってくれていることがわかった。

だから安心して、ボクはベッドの上でユーリに肉体のすべてを任せられる。

そして、ボクたちは正常位の体位でひとつに繋がりが合い、お互いを貪るように求め合った。

ばちゅん♡ ばちゅん♡ ぱんっぱんっ♡

「……………んっ♡……………ユーリのチンポお♡……………ボクのお腹の中あ♡……………すっごい♡……………ゴリ

そして、ベッドの上には、ボクたちの結合部から飛び散った大量の本気汁がベチョベチョに飛び散っているのだ。

セックスって最高だ。

ボクはおまんこの形をユーリ専用の形に変えられながら、そのことを彼にたつぷりと教えられていた。

ぐちよぐちよに湿ったボクたちの股間で、お互いの性器がヌルヌルとこそばゆく絡み合っている。

「ユーリい♡ ボク♡ 絶対に♡ イかないからね♡ あっ♡ んっ♡ はああっ♡ さっきの♡ 仕返し♡」

ぱちゅ♡ ぱちゅ♡ にゆるう♡ くちゅ♡ にゆるん♡ ぞりい♡

今まで感じたことがないくらい気持ちいい快樂のせいで、ボクは腰の動きを止められない。

正常位の格好で、ユーリのかわいい顔を見上げておまんこをキュン♡キュン♡とさせながらボクは意識を甘く濁して腰を振り続ける。

くちゅつくちゅつとボクのおまんこからエツチな水の音が鳴り響く部屋の中で、ユーリはボクが一番感じる部分をチンポでグチャグチャと心地よくほじくってくれた。

コリッ♡

「ひゃうん?!?!」

しかし突然、ユーリの指にクリトリスを強く転がされて、思わずボクの声が出てしま
う。

そして、今度はいつの間にか、またユーリの手が伸びてきていて、ボクの乳首でコリ
コリと遊び始めた。

ボクの乳首とクリトリスは、彼としているセックスの興奮で恥ずかしいくらいに硬く
勃起していて、それをいじくられるボクの全身に甘い甘い快感がブワリと一気に広がっ
ていく。

くにゅっ♡くりくり♡カリッカリッ♡グリグリ♡

「……………んん〜！ んんん〜！ —っ♡—っ♡—それ♡—らめえええ♡……………おま
んこに♡……………ユーリの♡……………おつきいチンポ♡……………ズボズボしながらあ♡……………乳首と
クリちゃん♡……………一緒に♡……………いじるの♡……………反則だよお♡……………あゝっ♡……………あゝっ
♡……………あゝあゝ♡……………あゝあゝあゝ♡……………あゝあゝ♡」

ベッドの上で腰を振り、乳首をペろペろと舐められながらクリトリスを指でグリグリ
と押し潰すように同時に責められて、ボクの頭がおかしくなりそうなほどの快感に襲わ
れる。

しかしそれでも、ボクはまだ絶頂しないように我慢を続けていた。

なぜならば、これはさつき負けたゲームの仕返しだ。

簡単にボクの体をイカされて、これ以上、ユーリを調子づかせるわけにはいかないからね。

だから、ボクは必死になってイクことだけは耐え続けた。

コリツコリコリツ♡クニユウウツ!!

「んんんんんううううううううう!!」

でも、ユーリの指先が容赦なくボクの勃起したクリトリスをコリ♡コリ♡と押し潰し続け、同時に子宮口を太い亀頭で思いつきり突かれたことで、とうとうボクに限界がおとずれてしまった。

どびゆるるるっ♡びゅーっ♡びゆるるっ♡ぴゅっぴゅっ♡

「……………あ……………♡は……………♡……………あ……………♡」

そしてボクの限界を見極めると、ユーリの熱いザーメンがトドメのようにボクの子宮を満たしていく。

(……………あっ♡……………これっ♡……………イクっ♡)

全身が甘い快感でしびれる中、おまんこの奥に熱いものが大量に注がれていく感覚に、ボクは呆けた顔をしながら震えていた。

とぶう♡とぶう♡びゅー♡びゆるう♡

「…………イクツ♡…………イクツ♡…………イクツ♡…………イクツ♡…………イクツ♡」

ガク♡ガク♡ガク♡

(…………どうしよう♡…………ユーリに♡…………セックスで♡…………絶対に負ける♡…………それに♡…………初めての中出し♡…………めちやくちや♡…………気持ちいいよお♡…………ボクのぜんぶが♡…………ダメにされてるううう♡)

生まれて初めて経験する女の子としての最高の幸福感と、お腹の中の赤ちゃんを育てるための場所を熱い精液で汚されてしまった背徳感が入り混じって、ボクの思考回路がめちやくちやに壊れていった。

しかし、精液と愛液が混ざり合うボクのおまんこに、ユーリは止まらずに勃起したままのペニスを叩きつけてくる。

こんなの初めてだ。

ぬぼっ♡ ぶちゅんっ♡ ぐりゅんっ♡ ずぼずぼずぼずぶっ♡

「…………あつ♡…………やめえ♡…………まだ♡…………イッてるからあ♡…………だめだよお♡…………」

(…………えへへ♡…………ユーリのエッチ♡…………すすすぎる♡)

ボクは息も絶え絶えになりながら、ベッドの上でユーリにされるがままになっていった。

こんなにも凄まじい量の射精をされたら、絶対に妊娠してしまう。

避妊の魔法をかけているからそれは絶対にないんだけど、本能的にそう感じさせられてしまう、ものすごく気持ちいい膣内射精だった。

でも、ボクは不思議と嫌な気分ではなかった。

むしろ、ボクの心の中には、ユーリの赤ちゃんを妊娠したら絶対に嬉しいという感情が芽生えていたほどだ。

そして、ユーリは正常位の格好でベッドの上から動けなくなったボクのおまんこに向かって、また激しくピストン運動を繰り返してくる。

ボクの心が、ユーリのチンポに屈服し始めていた。

パンツ♡ パンツ♡ パンツ♡

「んんんんんっ♡——んっ♡——んっ♡——んっ♡——んっ♡」

ユーリのチンポに次々とほじくられるおまんこのあまりの気持ちよさに、ボクはアヘ顔になって舌を出して悶絶していた。

ユーリとの勝負に負けたボクはずっとユーリの巨根に気持ちよく犯され続けて、ボクはもう、完全に心までトロトロに墮とされた。

ボクのことをイカせまくって、ユーリは何度も何度も膣穴を気持ちよくチンポでほじくってくる。

ボクの体は既にユーリのもので、ボクの子宮もすっかり下に降りきってしまったてい

て、この気持ちいい男の子の精子をさらに欲しがっていた。

「……ユーリい♡……ねえ♡……もつと♡……ザーメン♡……ボクのおまんこに♡……ちようだい♡」

ボクは甘えるようにユーリを見つめながら、彼の背中に腕と脚を絡ませて、全身で抱きつくようにして彼に密着した。

すると、ユーリのペニスはより大きく膨らんで、ボクのおまんこの奥にまで入ってくる。

にゆるん♡ ずぼお♡ ぐぶう♡ ずちゅ♡

「……あつ♡……これ♡……す♡い♡」

子宮口が無理やりこじ開けられるような強烈な快感が襲ってきて、ボクはそれだけで再び絶頂に達してしまう。

「……んんうううっ♡……イクっ♡……イクっ♡……イクっ♡」

(……ボクの子宮♡……ユーリのせーしが欲しくて♡……降りてきちゃったあ♡)

そして、ユーリの熱い精液が、ボクの子宮にたっぷりと注ぎ込まれていった。

とぶう♡びゆるるう♡びゅうう♡

「……ユーリの♡……せーえき♡……ボクの♡……おまんこに♡……いっぱい♡……でてるうううう♡……これ♡……す♡い♡……気持ちいいいいいい♡」

ボクのおまんこが痙攣するようにうごめいて、ユーリのをぎゅつと締め付けている。

「……………あはあ♡ ……ボク♡……………ユーリの硬いチンポで♡ ……処女なのに♡……………もう♡……………何回も♡……………イっちゃったあ♡」

初めて経験した中出しエッチで、ボクはすっかりユーリに魅了されてしまった。

しかも、二回戦目のエッチが終わっても、ユーリのペニスはまだまだ元気いっぱいみたいだ。

それなら、次はどんなエッチをしてくれるんだろう？

ボクは期待に胸を弾ませる。

「ねえ♡ ユーリ♡ ボクのこと♡ またエッチな目にあわせてよ♡ ボク♡ ユーリにエッチなことされるの♡ 大好きみたい♡」

ボクはもうすっかりユーリのセックスにはまってしまっていて、自分から彼を求めて媚びるように甘い声を出していた。

正常位の体勢でボクは膣内射精し終わった彼のペニスをおまんこに啜えたまま、次のエッチをおねだりする。

するとユーリは、ボクのおっぱいを揉みながらやさしいキスをしてくれた。

ちゅっ♡ むにゅっ♡ ちゅぱっ♡

「ふあん♡ えへへ♡ ユーリい♡ 好きい♡ 好きだよ♡ んちゅっ♡」

ボクたちはお互いを求め合うような、激しいディープキスを交わした。

ボクとユーリの舌が絡み合い、透明な唾液の糸をだらりと垂らし合う。

そしてそのまま、ユーリはボクの子宮を硬いチンポの先でゴリゴリと押し潰してもくれる。

ぐりゆう♡ ぐりゆう♡ ぬぷう♡ ぬっぽお♡ ぐちゆるう♡

「ああん♡ ああっ♡ そこお♡ 好きい♡ ユーリの♡ チンポに♡ 子宮口♡ ゴ

リゴリされりゅのお♡ 大好きい♡ あっ♡ あっ♡ あっ♡」

ボクは、ユーリのおつきな亀頭に子宮をちゅっ♡ちゅっ♡とキスされて、トロトロの声で感じてしまう。

二回も中出しエッチを終えているのに、ユーリのペニスは全然勢いが衰えない。

それどころか、ますます硬く、熱くなっている気がする。

ボクはもう、ユーリのエッチな責めにメロメロにされていた。

「ユーリい♡ ボクもう♡ ダメだよ♡ イクッ♡ イクッ♡ イクッ♡」

そのまま、ボクの体はユーリに何度も何度も絶頂へと導かれていった。

しかしそれでも、ユーリの腰の動きは止まらない。

ぱんっぱんっ♡ パンッ♡ パンッ♡ パンッ♡

「やああんっ♡ ユーリい♡ もう♡ もう許してえ♡ ボクのおまんこ♡ 壊れちゃうからあ♡ ああああっ♡ あっ♡」

ボクはベッドの上で四つん這いになったバックの体勢で、ユーリの容赦のない中出しエッチを受け続けていた。

「あああんっ♡ イクっ♡ また♡ イっちゃうっ♡」

ガク♡ ガク♡ ガク♡

ユーリは、ボクのお尻側から自分の大きなちんちんを突き刺したまま、何度も何度も腰を打ち付けてくる。

もう何回も何十回も同じことをされているのに、ボクの子宮は飽きることなくユーリの精液を受け止める準備をしていた。

「ユーリい♡ お願い♡ もっと♡ ボクのおまんこ♡ イかせてください♡」

ボクはお尻の穴をおまんこのように恥ずかしくヒクつかせて、四つん這いのままユーリの凶悪なチンポに媚びてしまう。

ユーリはそんなボクのお尻を両手で掴むと、太い亀頭を一气におまんこの奥まで突き入れてきた。

ずぶぶっ……♡ ぐちゅりゅっ♡

「あひいひいひいっ♡ きたあ♡ おちんぽ♡ 子宮の中まで♡ きちやっただああっ

♡」

ボクは後ろから激しく突かれて、背中を大きく仰け反らせる。

まるで、入ってはいけない場所に彼のチンポが入り込んでしまったような背徳的で強烈な快感に、ボクの目の前が白くチカチカと光った後にキーンと霧ががっていった。ボクのお腹の中に、熱い塊のようなユーリのものがズプリと入ってくる。

それは、ボクのおまんこの中の肉壁を押し広げて、どンドン大きくなっていった。

ぐりゅん♡ ずぶう♡ ずぼお♡ ぐぶう♡

「なにこれ♡ なにこれ♡ なにこれえええええ♡ 気持ちいい♡ 気持ちいい♡ 気持ちいい♡ 気持ちいい♡ 気持ちいい♡ 気持ちいい♡ 気持ちいい♡ 気持ちいい♡ 気持ちいい♡ 気持ちいい♡」

ボクはシーツを強く握りしめて、甘い快感に必死に耐え続ける。

「ふわあつ♡ らめええつ♡ こんな無理だよおおおつ♡ あつ♡ あつ♡ あつ♡」

ボクの頭の中が全部真っ白になって、何も考えられなくなる。

ボクの全身がおまんこになったみたい気持ちよすぎて、もう、おかしくなりそうだった。

「だめえええつ♡ いやあああああつ♡」

ボクがいくら叫んでも、ユーリは全く聞いてくれない。

むしろボクの叫び声を聞いてさらに興奮したように、彼の腰の動きが激しくなるだけだった。

どびゆるるるっ……♡♡♡

「あうううっ♡ あついっ♡ 出てるううう♡ いっぱい♡ ユーリのせーし♡ 中で出されてるよおおっ♡」

ボクはユーリの射精を受けて、また絶頂を迎える。

頭がクラクラして、目の前がチカチカと気持ちよく揺れた。

(もう♡……ダメえ♡)

ボクの体の中にユーリの魔力が巡っていき、ボクの全身を支配しているのがわかった。

そして、ボクのお腹には彼の淫紋が刻まれて、ボクは本当にユーリの所有物にされてしまう。

でも、それはボクが望んだこと。

ボクは魔力の防御を解き、それを彼に伝えることで、ボクをユーリの女にしてもらった。

ボクは彼の淫紋を刻んだことでより敏感になったおまんこで、自分の中に入っているユーリの大きなチンポをはつきりと感じ取る。

「あ……♡ はあんっ♡……すげいい♡」

ユーリの長いペニス、ボクの一歩深いところに当たっている。

そこはもうこれ以上入らないってくらいなのに、まだ奥があるみたいに感じられた。

「ユーリ♡ ねえ♡ 好き♡ 好き♡ 好き♡ 好き♡ 好き♡ ボクのこと♡ そんなに

所有物にしたかったのかい？ あっ♡ あっ♡ あっ♡ えへへ♡でもお♡ ボク

♡ しあわせだよ♡」

ボクはゆっくりと腰を動かして、ユーリのものを味わう。

ボクのおまんこにこされるユーリの亀頭の表面にあるザラザラや、竿の部分の皮膚の感触までを、ボクはヌルヌルしている愛液ごしに楽しんでいく。

ユーリの先っぽの部分でぐりつとこすられたGスポットが気持ちよかったことを彼はすぐに察して、そこに当てるように意識しながらグリグリとボクのおまんこの中で気持ちよくチンポを動かしてくる。

ぐりい♡ ぞりい♡ ぐっぷう♡ ぬっぷう♡ ずちゅう♡ ちゅうう♡

「あっ♡ そこお♡ ダメ♡ ダメなのお♡ イクっ♡ イクっ♡ イクっ♡ イクっ♡」

ボクはその快感に耐えられず、ユーリの太いものを入れたまま上半身を倒して、ベッドの上に倒れ込んでしまう。

すると今度は、ボクのおまんこからユーリのイチモツが抜けてしまいそうになった。

いいいいいい♡」

うつ伏せに寝てシーツに顔を押し付けながら、ボクは獣のように後ろから犯される。

ユーリの腰が強く当たりボクのお尻がふにゆんと潰れて、その衝撃でボクのクリトリスがベッドのシーツにゴリゴリと気持ちよくこすれた。

ボクはもう、ユーリにされるがままだった。

そして、四つん這いの体勢になったボクの全身が、今度はユーリに抱えられて宙に浮く。

ユーリはボクの両足を無理やり左右に大きく開かせると、駅弁スタイルでボクの体を持ち上げながら、ボクのおまんこに硬いペニスをどちゅどちゅと心地よく打ち付けてくる。

ボクの全体重がおまんこに集中するような快感に、ボクは思わず大きな絶叫をあげた。

ぐぢゅう♡ ずつぽお♡ ぬるう♡ にゆるう♡ どちゅ♡ どちゅう♡

「ふわああああんっ♡ これえ♡ すごいいいいいい♡ おまんこお♡ 潰れてるううう♡ はあああああ♡」

ガクン♡ガクン♡

ボクはおまんこをヒクヒクと痙攣させながら、ユーリの太いチンポで膣穴をズポズポ

のように膨らんでいて、その表面にはピンク色の淫紋がはつきりと刻み込まれていた。ボクが獲物だと考えていたユーリは童貞などではなくて、逆にボクのほうが、ユーリにとつて簡単に屈服させることができる処女の獲物だったという現実を知る。

ボクはユーリのメスになった。

「はあ……♡ ああ……♡」

そしてユーリに向かって、ボクはおねだりをする。

「ねえ、ユーリ♡……キスして♡」

ボクが甘えた声でそう言うと、ユーリは正常位の体勢にボクの体をやさしく寝かせてくれて、ベッドの上のボクの体にそつと覆いかぶさってくる。

「ちゅぷ♡ちゅぷ♡」

ユーリの唇がボクの口に重ねられる。

ボクはユーリとのキスに夢中になりながらも、その手は自然とお腹の方へと伸びていく。

ボクは自分の指先で、お腹の淫紋をなぞり上げた。

世界で一番愛おしい人に刻み込まれた、ボクたちの愛の証だ。

「んちゅっ♡ ふあっ♡……んんっ♡」

ボクはユーリの舌を受け入れながら、うつとりと意識を快楽に濁していった。

「はあっ♡……はあっ♡」

(あああっ♡……気持ちいい♡)

そして、ユーリがボクのおまんこに、勃起したチンポをピストン運動させていく。

ずぶう♡ズチュ♡ズチュ♡にゆるう♡ぬっぽお♡

「んんんっ♡むううっ♡えへへ♡これ♡大好き♡気持ちいい♡あん♡

あっ♡」

ボクはユーリのチンポをおまんこに挿入されながら、同時に彼の大きな両手でおっぱいをむにゅっ♡むにゅっ♡と揉まれていた。

「ああっ♡だめええっ♡」

ボクは乳首をつままれた状態で、ユーリからの激しいピストン運動を受ける。

ボクの両ふとももの間に、ユーリの体が割り込んでいる感覚がすっごく心地いい。

「んんっ♡んっ♡」

淫紋を刻んだことで、何倍にも感度が上がった乳首が、白目をむきそうになるくらいに気持ちよくユーリの手にギュツとつねられる。

ボクはユーリの腰に強く押されるように足をM字に開いた恥ずかしい格好で、彼のチンポをおまんこに受け入れ続けた。

「ああっ♡やあっ♡」

ユーリの魔力がボクの体に注ぎ込まれて、ボクの全身がドロつと火照って熱くなつた。

「ああ……………あああ……………」

ボクはおまんこの中も、頭の中も、意識もすべてが真っ白になる。

「はあ……………はあ……………」

ボクの全身が痙攣しながら気持ちよく絶頂し続けて、ボクの両目が強すぎる快樂にぐると勝手に上をむいた。

（……………ユーリの♡……………せーえき♡……………気持ちよすぎて♡……………これ♡……………ボクの体が♡……………ぜんぶ♡……………負けるう♡）

ヒク♡ヒク♡ヒク♡

おまんこが気持ちよすぎるという理由で人生で初めて、ボクは口の端から白い泡をガクガクと吹いた。

そして、ユーリはボクの体の中にたつぷりと射精したあと、ボクの中からゆつくりとチンポを引き抜いていく。

「ん……………」

ピクンと体が反応するけれど、ボクはベッドの上で仰向けになつたまま動けない。

ユーリはそんなボクのお腹の上に手をかざすと、そこに刻まれた淫紋をさらに濃いピ

ンク色に変化させていった。

ボクの心と体のすべてが、ユーリに完全に支配されていく。

「ああ……♡……んんっ♡」

ボクは体の中にユーリの魔力が流れ込んでくるのを感じて、甘くて切なげな声を上げた。

ボクはおまんこから、ドロリとした精液の塊があふれてくるのがわかる。

でも、子宮にユーリの精液を溜め続けたくて、ボクは必死におまんこを締めて、これ以上彼のザーメンが外に漏れ出ないように頑張ってしまった。

……とろお♡

「あっ♡……あああっ♡」

ボクのおまんこから流れ出たユーリの精液は、ボクのおまんこの割れ目を垂れ落ちて、ドロドロと大量にシートの上にこぼれ落ちていく。

ユーリの魔力を帯びた精液がボクの性器から次々と吸収されて、淫紋が熱く輝いている。

ボクはベッドの上で仰向けに寝たまま、呼吸を整えながらその余韻に浸っていた。

「はあ……♡はあっ……♡」

ボクはまだ一度も経験したことのない中出しエッチを体験して、心の奥底まで

ユーリに支配されてしまった。

こうしてボクは、欲望のダンジョンのダンジョンマスターであるユーリの女となった。

閑話 ロクサーシャの処女喪失セックス♡

ロクサーシャ視点。

私の名前はロクサーシャ。魔導の道を極めようと日夜励む女じゃ。

生まれたときから魔法の天才であった私は魔力操作を極めた一四歳のときに体の成長が止まり、それ以来一四〇歳になっても若い肉体を維持し続けている。

魔法の練習ばかりしていたため恋愛経験をせずにこの歳になってしまったが、後悔はしていない。

これが、私の生き方じゃ。

「シャル、そろそろ出発するのじゃぞ」

ある日、ガスター帝国から面倒くさい依頼が来ることになる。

異世界から召喚した勇者たちに、私が直接魔法を教えてほしいという依頼じゃ。

本来なら断りたい所じゃが、ガスター帝国の魔法顧問として国に所属することで研究費をいつも貴族たちからふんだくっているため、最高機密として下された今回の依頼は断れそうにない。

仕方なく、私はガスター帝国の首都に愛弟子で女の子のシャルと共に向かうことになる。

しかし、そこで私は思わぬトラブルに見舞われた。

「こ、これは、失伝された古代の魔法陣じゃぞ。それを、完璧に復元したのか……」

Dランク勇者と認定され、落ちこぼれ扱いされていたユーリという名の少年を励ますために彼に宿題を与えたところ、なんと彼はあつという間にそれを終わらせてしまったのじゃ。

しかも、ユーリが天狗にならぬように次の宿題として出した、発見されてから百年もの間、誰にも復元できなかった古代の魔法陣を彼は復元してしまった。

なんで、こんな魔法の天才児がDランク勇者に認定されているのじゃ。

帝国の目は節穴か？

しかし、今はそんなことよりもまずいことがある。

「うーむ。どうしよう……」

絶対に古代の魔法陣を復元できないと考えていた私は、もし魔法陣を復元できたらユーリに何でもすると約束してしまった。

「たしかに、何でもすると約束したが……」

こんなにも魔法知識に秀でているのに帝国からDランク勇者に認定されているユー

りは、きっと私に勇者ランクをアップする後押しを頼んでくるじやろう。

帝国の貴族共と交渉するのは少々面倒くさいが仕方ない。

何でもするという約束じゃからな。

ユーリのSランク勇者へのランクアップを後押ししてやるか。

そう考えて、各所への根回しと貴族との交渉などを頭の中でシミュレーションをしてきた私にユーリからかけられた言葉は私の想像外のものであり、それは私の思考を停止させた。

「…………え？ 私を抱かせろ？ は？」

ユーリが私に望んだことは、私を抱かせろというお願いじやった。

「わ、わ、私を…………!!? 抱くのか!? 勇者ランクを上げるのではなくて!?! ……勇者ランクを上げれば、女など好きなだけ抱き放題じゃぞ!?!」

ユーリからの突然の要求に、私の思考が一時停止してしまう。

たしかに何でもするとは言ったが、まさかこんな頼みごとをされるとは。

「わ、わたしは見た目より年を取ってる…………それに…………処女だし…………私を抱いても…………楽しくないぞ…………?」

青春などとうの昔に捨てた私を抱いても楽しくないとユーリに伝えるが、ユーリはむしろ、それがいいと言って親指を立てていた。

「な!? 他の女はどうでもよくて、どうしても私を抱きたいじゃとお!? ユーリ、お主、何を言っておるのじゃ!？」

そして私は、混乱する思考を整理することができぬまま、あれよあれよという間に、ユーリが宿泊している部屋へと連れ込まれてしまう。

「さて、落ち着け!! ユーリは何を考えとる!？」

「何って……ナニだけど?」

「そうじゃないわ!! そういうことではなくてだな!？」

私の体を抱くことに何か高度で政治的な意図があるのかと裏を読むが、私にはユーリの考えていることがどうしてもわからない。

「ちよつと! 待つて! やっぱ! 待つてのじゃああ!」

「もう、無理」

そして、必死に抵抗しようとするも、ユーリは私の体をやさしくベッドに押し倒してくる。

「なんで、お主は女をベッドに押し倒す技術がそんなにうまいのじゃあ! このつ!

離せっ!」

「さて、なんでだろうねー」

私の反撃を簡単にあしらいながら、ユーリは私がつけている魔法のローブを脱が

せてくる。

私の着ている服を脱がす技術が高すぎて、ユーリにまったく抵抗できない。

まさかこんなにも、ユーリの体術が強いとは。

接近戦に弱いという魔法使いの弱点を克服した私は、Sランク冒険者を魔法を使わずとも軽く撃退できるくらいには強い。

そんな帝国最強の戦力としての魔法知識と武力を持つこの私が、誰かを押し返すことができない経験など初めてじゃった。

この男、一体どれほどの力を持っている？

なぜこの男がDランク勇者という落第者として、帝国に扱われておるのじゃ？

いや、今はそんなことはどうでもいい。

「やめろお！ いたいけなおなごを！ 全裸にするではない！」

「でも、ロクサーシャは何でもするって言ったじゃん」

「そ、それはそのお……」

「サーシャって呼んでもいい？」

「いいけど……」

「サーシャ。セックスしよっか」

「もう……お主は……はあ……」

それよりも、この状況をなんとかせねば。

すでに、私はあれよあれよというまに、ユーリに全裸にされてしまった。

このままでは、本当に……。

「ひゃああ ♡ 恥ずかしいからああ ♡」

私は今までエッチな本で見えてきたような、M字に股を開いて、男の子の体を両足の間に挟み込むという形でベッドの上で仰向けになっている。

(言い訳するようであるが、決して、私はよこしまな目的でエッチな本を見たわけではない。人間の営みを学ぶためである……)

……ちゅぷう ♡ ……ちゅぷう ♡

「乳首い ♡ 舐めるなあ ♡ あっ ♡ おっぱい ♡ もむな ♡ んっ ♡ はぁ ♡」

そして、私はベッドの上で必死に抵抗するものの、まるでか弱い女の子のように、ユーリに簡単に組み伏せられ続けていた。

(ああ…… ♡ もうだめか…… ♡)

どうやら、覚悟を決めるしかないようじゃ。

(何でもするって言ったのは、私だし、仕方ないか……)

そうして、決心をした私は最後の足掻きをするべく言葉を口にする。

「……ねえ ♡ ……初めてだから ♡ ……やさしくして ♡」

私の口から出てきたのは、懇願の言葉だった。
 なんとも情けない話である。

ひとたび戦場に出れば数万の兵を一人で殺戮できる魔将として世界に恐れられた魔女ロクサーシャが、実はベッドの上では生娘。

いくらなんでも、これはないじやろう。

しかし、今の私にはこう言うしかなかった。

ちゅぷう♡ ちゅゅ♡ ちゅゆう♡ じゅるう♡

「……………こらあ♡ ……キス♡ ……初めて♡ ……らからあ♡ ……らめつ♡ ……んぷう♡ ……ちゅぶるう♡ ……くちゅう♡ ……ぶばあ♡ ……れろ♡」

そして、ベッドの上で私の肯定の言葉を聞いたユーリは、そのまま、私にやさしいキスをしてくる。

(……………キス♡ ……えへへ♡ ……気持ちいい♡)

その瞬間に、私の意識が快楽でドロリと濁った。

私が人生で初めて経験したキスはとても気持ちよくて、抗うことができないほどの快感であった。

「……………んっ♡ ……魔将♡ ……ロクサーシャの体をお♡ ……くうう♡ ……気安く♡ ……さわるなあ♡ ……あっ♡ ……あっ♡」

そしてそのまま、私は無抵抗でユーリに愛撫され続けた。

「……………ひやああん♡ ……乳首♡ ……硬くなってるう？ い、言うな♡ ……あつ♡ ……んっ♡」

この世に生まれ落ちて一四〇年間、まだ誰にも触られたことのないEカップの胸を揉まれ、乳首を吸われ、秘所を指でいじくられる。

くちゅ♡ くちゅ♡ コリ♡ グリグリ♡

「……………んはあ♡ ……あつ♡ ……んんんんっ♡ ……んくうううう♡」

(……………クリトリス♡ ……ユーリに♡ ……触られるのお♡ ……めちやくちや♡ ……気持ちいい♡)

私が魔法に身を捧げていた今までの人生では、感じたことの無いような快楽が私の全身を襲うと、私の目の前が甘く溶けて、体がビクビクと痙攣する。

不思議な時間。

でも、しあわせな時間。

にゅぷう♡ くちゅ♡ くちゅ♡ にゆるん♡

「……………おまんこお♡ ……指で♡ ……ほじくつちや♡ ……らめえ♡ ……あつ♡ ……んっ♡」

(……………ユーリに♡ ……手マンされるの♡ ……自分で♡ ……オナニーするより♡

……すっごい♡ ……気持ちいいいいいいいい♡)

実はエッチな本を読んで密かにあこがれていた、男の子に手マンされるといいう行為に私は心をとろかしていく。

くちゅ♡ にゆるん♡ にゆうう♡ くぷう♡

「んっ♡ あっ♡ あっ♡ んくううう♡ んああああ♡ ……あっ♡」

ユーリの指が私の膣の中に侵入すると、私のお腹の中を丹念に内側からほじくり、やわらかく何度もネットネットとほぐす。

「はひいい♡ んっ♡ あっ♡ はああ♡ らめっ♡ それっ♡ あっ♡」

帝国最強の戦力として世界から恐怖されている私の口からは桃色の吐息が出続けて、戦人ではなく、女としての快楽をユーリに私は徹底的に教え込まれていった。

丹念に膣肉を愛撫されたことで私のおまんこが愛液まみれにヌルヌルと濡れて、簡単にユーリの指を体内の敏感な粘膜に受け入れている。

にゆるん♡ にぢゅう♡ ぐちゅ♡ くにゆうう♡

「んんんんっ♡ ユーリ♡ お主♡ 指が♡ 上手すぎるう♡ おまんこお♡ もう♡

ほじくるなあ♡ あっ♡ あっ♡ あっ♡ イクっ♡」

ヒク♡ ヒク♡ ヒク♡

私のお腹の中にある敏感な部分を、直接ユーリの指でニユルンと何度もほじくられる

感触は、文字通り全身がとろけていく快感であった。

「はぁー♡ はぁー♡ はぁー♡ はぁー♡ ……あつ♡ ……らめえ♡
……イクっ♡」

ガク♡ ガク♡ ガク♡

戦場では休むことなく何日も徹夜で動ける私が、おまんこをユーリの指にほじくられただけで、全身から力が抜けて、ベッドの上からまったく動けなくなる。

（おまんこ♡ イツた♡ 誰かに手マンされるの♡ 自分でオナニーのより♡ すっごい♡ 気持ちいい♡）

私の膣の中が、ユーリの指をもつともつとと求めるように濡れながらギュウギュウと締めつけていて、私は自分の体を制御することができなくなっていた。

こんなこと、初めての経験である。

「えっ♡ いまからあ♡ わたしの♡ Gスポットを♡ 責めるって？♡ Gスポットって♡ なんなのじゃあ？♡」

「ハハ、ハハのハハ」

ぐぢゅ♡ ぐぢゅ♡ にぢゅ♡ にぢゅうう♡

「んっ♡ らめっ♡ そこ♡ 押しちゃ♡ らめっ♡ 気持ちいい♡ なにこれ♡ ひぎいい♡ こんなの♡ おまんこ♡ イクっ♡ すぐ♡ イクっ♡ らめっ♡

はあ♡ イクっ♡ まてっ♡ イクっ♡ いやらあ♡ また♡ イクっ♡ あああ
 ……♡ イクっ♡ あっ♡ これ♡ またあ♡ イクううう…♡」

ぐちゅ♡ ぐちゅ♡ ぐちゅ♡ くちゅ♡

「あっへえ♡ あへええ♡ これ♡ らめええ♡ Gスポット♡ らめっ♡ あっへ♡
 イクっ♡ はあ♡ イクっ♡ んおっ♡ イクっ♡ ……ああ♡ ……イ
 クう♡」

ビクン♡ ビクン♡ ビクン♡

そのまま、私はみつともない声を上げながら、ベッドの上で仰向けになって両脚を左
 右に開いた格好のまま、すさまじく心地いい痙攣絶頂を経験してしまう。

「おまんこから♡ なんか♡ れたあ♡ なんれ♡ Gスポットお♡ こんなに♡ き
 もひいのおお♡ あっ♡ らめっ♡ また♡ イクっ♡ ……あっ♡ イクっ♡」
 びゅー♡ びゅー♡

そうして、ユーリの二本指に心地よく膣肉をほじくられている私のおまんこから、水
 属性の生物が潮を吹くかのように、透明な液体が吹き出していく。

卑猥であるが、それが、すさまじく気持ちいい。

こんなこと、初めての経験じゃった。

「あっへ♡ ユーリ♡ わらひの♡ おまんこ♡ 潮♡ ふかせるなあ♡ らめっ♡

恥ずかしい♡ のじゃあ♡ やめろお♡ はあ♡ あっ♡ あっ♡ あっ♡ 出
 るう♡ おまんこ♡ また♡ 潮♡ 吹く♡ らめえええ♡ おっ♡ おっ♡
 おっ♡ イ、クっ♡♡♡」

びゅー♡ びゅー♡

そのまま、私はユーリの指におまんこを気持ちよくほじくられ続けると、情けなく舌を出しながら、何度もびゅーっといキ潮を吹いた。

「あへええ♡ おっほっ♡ あっへえ……♡」

びゅっ♡ びゅっ♡ びゅっ♡

(……やばい♡ ……おまんこに♡ ……今すぐ♡ ……チンポ♡ ……挿れたい♡)

ユーリの指におまんこをやわらかくトロトロにほぐされたことで、私の体が完全に発情しきっているのがわかった。

いますぐ、ユーリのチンポがおまんこに欲しくてたまらない。

そんな思いだけが、私の頭を支配していく。

私はベッドの上で仰向けに寝て、何度もユーリの手マンでイッた体を痙攣させながら、両脚を開いたままの格好で動けなくなっていた。

セックスという行為がますます大きく気持ちいい経験であると、私は年下であるユーリに教えられてしまう。

本来なら、私が魔法を教える立場であつた若者にである。

そして、私はただただ本能のままに、ユーリの肉体を求め続ける。

「あんっ♡ 欲しいっ♡ チンポ♡ これっ♡ これがほしいのじゃ♡ おまんこに♡
ユーリのチンポ♡ 挿りたい♡ じゆるう♡ ちゅぷう♡ れろお♡ ぷつはあ♡
はむう♡ ずぞぞぞ♡」

私の目の前にユーリが見せつけてきた勃起チンポを視界に入れると、欲望のままにむしやぶりついた。

「へえー、淫乱なんだねサーシャは」

「いんらんでも♡ かまわんっ♡ おチンポ♡ おまんこに♡ ほしいのじゃ♡ だか
らっ♡ はやくう♡ ユーリの♡ 勃起チンポ♡ おまんこに♡ 挿れて♡ じゆる
る♡ いれへ♡ ちゅぷうう♡ ちゅぷう♡」

まるで、私の気づかぬうちに快楽魔法をかけられて、私の肉体が魅了されたかのように意識がドロドロと甘く濁っていく。

もはや私は、理性を完全に手放していた。

しかし、ユーリとセックスをするためにすべてを投げ出す行為が、今の私にとって、すさまじく心地いい。

「ユーリの♡ チンポ♡ おつききて♡ あご♡ 外れちやう♡ 絶対に♡ こんな

のお♡ わたしの♡ おまんこに♡ 入らないのじゃ♡ れも♡ 挿れたい♡ ちゅぷう♡ くぷう♡ じゆるるる♡ ぷっはあ♡ れろお♡ はむう♡ ずぞおお♡

私は夢中になって、ユーリのペニスを舐め啜えた。

人生で初めて口に啜える異性のチンポはともおいしくて、私の意識をさらに発情させる、私のおまんこを愛液でトロトロに濡らしていく。

「はあ♡ はあ♡ ……あっ♡ んっ♡ ……はああ♡」

そうして、いよいよその時がきた。

(どうしよう♡ ユーリと♡ エッチ♡ しちやう♡ 処女♡ 奪われちやう♡)

今の私はベッドの上に仰向けに寝て、両脚をぱっくりと左右に開いた格好で、ユーリの硬いペニスが濡れに濡れたおまんこに入ってくるのを今か今かと待ち構えていた。

私のお腹の上に乗せられたユーリのイチモツは、私のお腹のおへその辺りまで簡単に到達するくらいにデカくて長い。

(ユーリのチンポ♡ ぜったいに♡ 子宮まで♡ とどくう♡)

お腹の上を感じる卑猥な熱量が、私の心にセックスという行為を強く想像させてくる。

私は今から処女を失い、ユーリとセックスをする。

まだ王城内で仕事をしている弟子のシャルに隠れて、師匠である私がユーリとセック

スをして楽しむことに少し罪悪感を覚えるが、それは、今は考えないでおこう。

私はベッドの上で愛液まみれになったおまんこを広げながら、そんなことを考える。

そして、ユーリのでっかいペニスの先が、私のおまんこに押し当てられた。

「サーシャ、入れるよ」

「うんっ♡ 挿れて♡」

先程まで私のおまんこを愛撫していたユーリの指とは違う、圧倒的に太くて質量のある肉の棒が、私の股間をくにゆり♡と押ししている。

……にゅううううん♡

「……あんっ♡ ……ユーリのチンポ♡ ……おまんこに♡ ……入ってきたあ♡」

……ぷち♡

そして、私が生まれてから一四〇年間ずっと守ってきた、処女膜が破れた感触がした。さらに、ユーリの腰が私に向かって押し出されると、私のおまんこが信じられないくらいに大きな穴を広げて、ユーリのチンポをニルンと飲み込んでいく。

私のおまんこが、お腹の中にある敏感な粘膜が、ユーリの硬いチンポの形に少しずつぼっこりと広がっていく感触が、すさまじく気持ちよかった。

「えへへー♡ ユーリと♡ 本当に♡ エッチ♡ しちゃったあ♡」

まさか帝国に依頼されて勇者に魔法を教えに来た先で、その教え子である若者に処女

を奪われることになるとは。

人生とは、ままならないものである。

「教え子と生でセックスしちゃうなんて、サーシャはエッチだなあ」

「い、いうなあ♡ はああ♡ おまんこお♡ ユーリの♡ チンポで♡ すっごい♡
広がってるう♡ これ♡ きもひいい♡」

避妊の魔法はかけているが、魔法の教え子と生で流されセックスをってしまった私を、ユーリがからかってくる。

「あんっ♡ 奥まで♡ ユーリのチンポ♡ 入ってくるう♡ あっ♡ はああ♡ ん
くろう♡」

さらに、私の股間にある膣穴を太いチンポの形にメリメリと広げながら、私のお腹の中に、ユーリの硬いイチモツが甘い感触でゆううつと挿入されていくのがわかる。

そうして、ユーリのチンポを、私のおまんこがぬっぷりと根本まで飲み込んでしまった。

「お、おっ♡ きたあっ♡ ふほおおおっ♡ ユーリの♡ チンポ♡ 子宮まで♡
簡単に♡ 届いてるう♡」

ユーリのペニスが私の膣の一番奥までヌルヌルと挿入されると同時に、私の子宮が、ユーリの亀頭にちゅっ♡ちゅっ♡と甘いキスをされているのが簡単に理解できた。

私がセックスをしている実感をも強めてくれる、濃い愛液が穴からあふれ垂れ落ちるおまんこの感触。

その感覚だけで、私は軽くイキそうになる。

「サーシャ、初めてするセックスの感想は？」

「……聞くなあ♡ ……もう♡ ……おまんこに♡ ……チンポ♡ ……入れるの♡

……すつごい♡ ……気持ちいい♡」

私のおまんこの一番奥にある大切な子宮を押し潰すように侵入しているユーリのチンポを、私の膈壁が逃さないようにヒクヒクと締めつけている。

そのあと、ユーリは私の体とひとつに繋がってすぐは動かずにいたが、私のおまんこに回復魔法をかけて破瓜の痛みを取り除くと、そのままゆっくりと腰を動かし始めた。

こうして、私が人生で初めて体験する、セックスが始まる。

すると私の目の前が、おまんこをユーリの硬いチンポに何度もこすられる快感で、一気に甘い桃色に染まった。

にゅぷう♡ くぷう♡ にゆるん♡ にゆるうう♡

「なにこれ♡ チンポで♡ おまんこ♡ ごりごり♡ こすられるのお♡ すつごい♡
気持ちいい♡ はああ♡ あっ♡ あっ♡ イクっ♡ これ♡ すぐ♡ イクっ

♡」

私はベッドの上で正常位になった格好で、夢中になつて腰を振つた。

今までシャルに隠れてこつそりと自室でしていたオナニー（※実は何回かバレてる。シャルはやさしいので、そつとドアを閉めました。）とは、明らかに違う快樂の質感。

太くて硬い肉の棒が私のおまんこの一番奥までをニユルン♡ニユルン♡と何度も広げながら強くこすつてくる感触は、正直、めちやくちやに気持ちよかつた。

（こんなの知らない♡ すごい♡ セックスつて♡ チンポで♡ おまんこ擦られて♡ 気持ちよくなる♡ だけじゃなくてえ♡ 心まで♡ 満たされるのじゃあ♡ ああ♡ これ♡ 好き♡ もつと♡ いっぱい♡ してほしい♡）

私は生まれて初めて味わうセックスの快感に意識をぐにやりと心地よく濁すと、そのまましあわせな感覚の中で、ユーリのチンポを濡れたおまんこに何度も啜え込む気持ちよさに溺れていった。

にゅっぶ♡ にゅぶう♡ にゅっぶ♡ にゅぶっ♡

「ユーリ♡ わらひの♡ おまんこ♡ きもちいい? ……んっ♡ あっ♡ あっ♡

あっ♡ あっ♡

「サーシャのおまんこ、すごくいいよ。めっちゃ締まる」

ユーリが私のおまんこにピストン運動を繰り返すたびに、私の全身に甘い快樂が走り続けていく。

ユーリがベッドの上で腰を振ると、私のおまんこがニユルンという感触でぼっこりと膣穴を広げて、お腹の中がとろけるように気持ちよくなる。

(ユーリのチンポで♡ わたしの♡ お腹の中♡ ぼっこり♡ 広がったあ♡)

そして、ユーリのチンポが私のおまんこの一番奥まで入ったあとに引き抜かれて外に出ていくと、私の膣肉がニユルン♡と思いつきりこすられて、私の視界が快樂でチカチカと光った。

「ユーリのチンポお♡ しゅごいつ♡ おほおお♡ おまんこお♡ ズボズボされて♡ 気持ちよすぎるうううう♡♡♡」

あまりの快感に私の頭の中が真っ白になり、思わず私は生娘のようにユーリに抱きついてしまう。

そして、そのまま私はユーリの腰に両脚を絡ませると、おまんこに硬いチンポを根本までぬっぷりと咥え込む快樂の中、夢中になってベッドの上で繰り返し腰を振った。

ぬっぷ♡ ぐっぷ♡ にゅっぷ♡ にゅっぷ♡ にゅっぷ♡

「あっ♡ あひっ♡ らめっ♡ らめええ♡ ユーリの♡ チンポ♡ ふつとい♡ 気持ちいい♡ あっへ♡ イクっ♡ はあ♡ これ♡ もう♡ イクううう♡」

(「こんな気持ちよすぎてる♡ もう何も考えられない♡)

私はおまんこの奥深くにまで届くほどに、長くて太いユーリのチンポに子宮を思いつ

きり押し潰されながら、ベッドの上で何度も深い絶頂を繰り返す。

（ユーリの♡ チンポで♡ おまんこ♡ 気持ちよすぎて♡ こんな♡ おかしくなっちゃおう♡）

私のおまんこに、熱くて硬いユーリのペニスが甘く気持ちよく出入りを繰り返していくと、私の膣内が激しくヌルヌルとした卑猥な感触でかき回され続けて、私の頭の中が快楽でピンク色に濁りドロドロに染まっていた。

そんなセックスの中、ユーリが私にやさしいキスをしてくる。

「んっ……♡ ちゅぷう♡ はあ……れろお♡ ちゅぷう♡」

（ユーリの舌♡ 甘くて美味しい♡）

ユーリの舌が私の口の中をねっとり舐め回すと、それだけでも、私の脳がしびれてイキそうになるくらい、ユーリとするキスは極上だった。

私の舌の根元が快感と興奮であつという間に甘くしびれて、ユーリとする恋人同士みたいなキスを本能的に求め続けてしまう。

じゅるうう♡ ちゅばあ♡ れろお♡ ちゅばあ♡ ちゅぷう♡

「はあ♡ ユーリの唇♡ 柔らかくてえ♡ おいしいのじゃあ♡」

私はトロンとした目つきで、キスをしながらベッドの上でユーリのことを見つめてしまっていた。

ずっと昔に忘れたはずの乙女のような気持ちを、はるか年下のユーリに私は思い起こされてしまう。

私はすでに、ユーリに恋していた。

「サーシャ、俺の女になりなよ」

「んはあ♡ お主♡ 年上の先生を♡ 口説くなあ♡ あっ♡ んっ♡ あっ♡」

私は自分が魔法を教える立場のはずだった若者に口説かれながら、ベッドの上でいやししく腰を振る。

すでに、私の気持ちは決まっていた。

もう、私の心はユーリに墮とされている。

そうして、覚悟を決めた私の意識が快樂の世界に墮ち始めると、私は思考を甘く濁らせていった。

「俺の女になれば、こういう気持ちいいことがずっとできるよ」

「なるう♡ わらひ♡ ユーリの♡ 女に♡ んっ♡ なるう♡ のじゃ♡ あっ♡ あっ♡」

こうして、まるで邪神のように私の心を魅了するユーリに、私は墮とされた。

なんと、私は生徒であつたはずの、年下のユーリの女にされてしまう。

「じゃあ、今からサーシャのおまんこ、俺の精液で墮とすから」

んっ♡ されりゆのお♡ おまんこお♡ きもちよすぎりゆううう♡」

そんな私を見ながら、ユーリがチンポに魔力を集中させていく。

すると、私の全身から力が抜けて、セックスのことしか考えられなくなるくらいに、おまんこが気持ちよくなった。

「ユーリ♡ きさま♡ わらひに♡ いんもん♡ きざんなあ♡」

私の子宮からあふれ出る魔力の混じった快感に、私は自分の体にユーリの淫紋が刻まれたことをすぐに理解する。

そして、その効果は絶大であった。

にゆうう♡ くにゆうう♡ にゆうう♡

「これえ♡ しゅごすぎいい♡ いんもん♡ せつくしゅ♡ 意識♡ 飛ぶ♡ しあわせ♡ これ♡ しあわせええ♡」

子宮に淫紋を刻まれたことをユーリに抗議する暇もなく、私の頭の中が快楽色だけで桃色に染まっていく。

通常の快楽魔法とは違う、明らかに深淵の技術。

そしてそれは、魔法のことばかりを考えて生きてきた私の人生を簡単に変えるくらいに、おまんこが気持ちよかった。

にゆうう♡ にゆうう♡ にゆうう♡

「ユーリの♡ チンポ♡ 奥まで♡ 突いちや♡ らめっ♡ いんもん♡ せつくす♡
 きもち♡ よしゆぎいい♡ 私の♡ おまんこ♡ よろこんじやつてるう♡ 子
 宮で♡ しきゆうで♡ イクっ♡ これ♡ きもちよすぎて♡ おまんこお♡ しあ
 わせええ♡」

ユーリのチンポが私のおまんこの奥までねじ込まれると、私の子宮がきゅん♡とうずいて、私の全身が子宮から脳天までを貫くような快感でピクンと勝手に跳ねてしまう。それは、今まで経験したことのないくらいにしあわせな快樂であった。

「ユーリの♡ チンポで♡ おまんこ♡ しあわせええ♡ なにこれ♡ きもひいい♡ おまんこお♡ とろけてるう♡ ユーリと♡ 腰振って♡ ベッドの上で♡ ぱんぱんって♡ しゆるのお♡ しあわせえ♡ おまんこお♡ しゅっごい♡ きもちいいいいいい♡」

ユーリとベッドの上で一緒に腰を振り合っていた私の意識が一瞬で飛ぶと、私の頭の中は、おまんこに出入りするユーリの硬くて大きなチンポのニルニルとした気持ちよさしか考えられなくなる。

「サーシャ、出すよ」

「いんもんせつくしゆれ♡ 中出し♡ やばい♡ これ♡ おまんこ♡ 死ぬ♡ わらひの♡ おまんこ♡ 壊れるう♡ おまんこお♡ らめっ♡ せーえき♡ らめっ♡」

言葉で拒絶する私の理性とは裏腹に、今にもユーリの精液を受け入れようとしている私の子宮はおまんこのお肉を奥までヒクヒクと心地よく痙攣させ続けていて、ユーリの精液を切実に求めていた。

こうして、私は身も心もユーリの女に生まれ変わることになる。

その一瞬あとに、私の理性は、子宮に注ぎ込まれるユーリのすつごく気持ちいい精液でぜんぶ飛んだ。

どびゅ♡びゅるるる♡どくっ♡びくっ♡

「おっほおおおおおお♡♡♡♡!! ユーリの♡♡♡♡ セーえき♡♡♡ おまんこに♡♡♡ 出てるう♡♡♡ んほおおお♡♡♡ 初めての♡♡♡ 中出し♡♡♡ すっごい♡♡♡ これ♡♡♡ すっごい♡♡♡ きもひいいいい♡♡♡ えへ♡♡♡ きもひいいいい♡♡♡」

ユーリの精液が私の子宮の中に直接注ぎ込まれると、私の全身が今まで味わったことのないような、甘い幸福であつという間に満たされていった。

私の頭の中がトロトロとした快感で甘く溶けてジンワリとしびれると、私の顔が勝手にゆるみ、しあわせな笑顔に変わる。

びゅるるう♡びゅー♡びゅく♡びゅく♡

「んほおお♡れてるう♡あつたかいの♡おまんこに♡いっぱい♡でて

るうっ♡ ユーリの♡ セーえき♡ あっへえ♡ きもひいい♡ これ♡ 人生♡
 変わる♡ あはあ♡ もう♡ わらひ♡ ユーリとする♡ 中出し♡ せつくしゆの
 ことしか♡ 考えられなくなるう♡ あはあ♡ しあわせえ♡」
 どくん♡どくん♡と何度も脈打ちながら、私のお腹の中でユーリのチンポが大量の精
 液をねとねとに出している。

そのたびに、私の心がユーリにこの身を一生捧げたく変わり、私の全身が甘い多幸感
 に包み込まれていった。

「あっへえ♡ いんもん♡ 中出し♡ せつくしゆ♡ すごすぎりゆう♡ おまんこ
 きもひいいいい♡ ユーリの♡ セーえき♡ しきゆうに♡ だされながら♡
 おまんこ♡ とろけて♡ 気持ちよくて♡ これっ♡ イクっ♡ はあ……♡ イ
 クっ♡ おまんこお♡ イクっ♡ やばい♡ あはあ♡ イクっ♡ んっ♡ らめ
 らあ♡ イクっ♡ しあわせれ♡ イクう……♡」

ガク♡ ガク♡ ガク♡

ユーリに淫紋を刻み込まれながらベッドの上で股を開いて膣内射精をされるのは、私
 が今までの人生で体験した中で確実に一番しあわせな時間だと確信できる、格が違う快
 楽であった。

……とぶう♡ ……とぶう♡

「はあ……♡ すっごい……♡ ユーリの♡ セーえきで♡ おまんこお♡ しあわせ♡ ユーリ♡ 好き♡ はあ♡ 大好き♡」

（わらひ♡ 女に♡ 生まれてよかつたあ♡ だつて♡ ユーリの♡ チンポ♡ おまんこに♡ 挿れられるもん♡）

セックスとは、こんなにも気持ち良いものだったのか。

私は知らなかった快樂の世界に、ユーリによつてどつぷりと墮とされていた。

そうして、私は膣内射精を続けているユーリのチンポの感触をおまんこの中に感じながら、ベッドの上で股を開いた正常位の体勢でうっとり意識を濁していく。

「さて、これからサーシヤの体も心も、俺が調教するから」

「はへえ……♡ なんれえ……♡」

しかし、人生で初めて膣内射精された気持ちよさに感動している私に向かってユーリがそう言うと、再び私の中で動き始めた。

私のお腹の中に出されたばかりの精液が、まだまだ硬さを保っているユーリの巨大なイチモツにかき混ぜられると、私の膣肉がヌルヌルとした愛液とは違う、いやらしい感触で何度もこすられていく。

にゅぷう♡ にゅつぷ♡ にゅうう♡

「えっ?♡ ちよつ……!?!♡ まてっ!♡ もう♡ 十分じやろおおお?!♡」

「いや、これからが本番だから。サーシャの体、気絶するまで気持ちよくするからさ」

「ひいつ……!?!」 ♡ それ ♡ あひつ ♡ らめえつ ♡ いま ♡ 中出し ♡ された ♡ ばかりで ♡ 敏感らからあ ♡ おまんこ ♡ おかしくなるうっ ♡ 壊れるう ♡ あっ ♡

んっ ♡ もう ♡ らめつ ♡ はああ ♡ イクっ ♡ イクっ ♡ イクっ ♡

「大丈夫。サーシャの心、俺が快楽でぜんぶ壊すから」

「んっほお ♡ らめえ ♡ 連続 ♡ 中出し ♡ せつくしゅ ♡ らめつ ♡ らめつ ♡ らめえええ ♡ ……あっ ♡ これ ♡ 気持ちいい ♡ イクっ ♡ はあん ♡ イクっ ♡ もう ♡ イクの ♡ らめつ ♡ イクっ ♡ あっ ♡ はあ ♡ イクっ ♡ んっ ♡ イクっ ♡」

それから、どれだけ時間が経っただろうか。

数え切れないほどにユーリの精液を受け止めた私のお腹は、まるで妊娠したかのように大きく膨らんでしまっていた。

そして、ユーリの精液で膨らんでいるお腹の感覚が、すさまじく心地よくてしあわせだった。

ユーリの魔力によって私の体に変質してきているのに、この快楽にもっと浸かりきっていたい私は、もうそれを止めることができない。

「んんっ…… ♡ はあっ…… ♡ あああっ…… ♡ イクう…… ♡ おまんこお…… ♡

イクう……♡」

ガク♡ ガク♡ ガク♡

人生で今まで体験したことのないようなすさまじく気持ちいい絶頂を何度も迎えたことで、私はもうベッドの上で、指一本すら動かすことができなくなっていた。

でもそれが、とてもしあわせで、気持ちいい。

「ちゅぷう♡ じゅるるう♡ ちゅぷう♡ れろお♡ あむう♡」

(……ユーリとするキス♡ ……気持ちいい♡)

そんな状況で様々な体位を体験した私は今は再び正常位になって股を左右に開き、ベッドの上でユーリとキスをしながら意識をとろとろに濁して、ユーリのされるがままになっている。

「うーん……そろそろかな……」

「はああ……♡ ……♡ ……♡ あっ……♡ んああ……♡」

そして、その言葉と同時に、突然ユーリが膨大な魔力を私の肉体に込めてきた。

「へっ……♡？♡ えっ……♡？♡ ちよつと待つれ……！♡ ユーリい……♡ ……♡ なに

か魔法をお!!♡」

「今からサーシャを、俺の女にするから」

そのまま、私はユーリを止めたり何かを判断する暇もなく、全身をユーリの魔力で心

と快樂がグチャグチャのドロドロに気持ちよくかき混ぜていく。

「わらひい♡ ユーリのお♡ おんなに♡ なっちゃったあ♡ えへへ♡ しあわせ♡」

そうして、私のお腹にユーリの淫紋が完成すると、私の全身の感度が一気に上がり、ユーリとベッドの上で腰をふるのが気持ちよすぎて、私は欲望を止められなくなってしまう。

身も心もユーリの女に生まれ変わってから経験する中出しセックスは、天国をふわふわと泳ぐように甘くて極上だった。

「はひっ♡ はひい♡ んっ♡ あはああ♡ あっ♡ あっ♡ はああ♡ あっ♡」

ユーリと私の性器同士が生で気持ちよくニルニルとこすれ合うたびに、私の心の中で、どんどん自分が自分ではなくなっていく。

でも、それも悪くないと思えた。

にゆうう♡ くにゆうう♡ にゆぷうう♡

「はあー♡ あああー♡ イクっ♡ はああ♡ イクっ♡ ユーリの♡ チンポで♡ んああ♡ おまんこお♡ また♡ イクううう♡」

ヒク♡ ヒク♡ ヒク♡

ただ、こうして、ひたすらにユーリとセックスしていたい。

今の私は、そのことだけしか考えられなくなっていた。

ぱちゅん♡ ぱちゅつ♡ にゆるう♡

「んはあ♡ これ♡ すっごい♡ しあわせ♡ わらひ♡ ユーリの♡ 眷属に♡

なつて♡ よかったあ♡ せつくしゅ♡ きもちいい♡ おまんこ♡ きもちいい♡

イクつ♡ はああ♡ しあわせえええ♡ イクつ♡ イクつ♡ イクつ♡

私はユーリと強く体を抱きしめ合いながら、体と心がひとつに混ざり合う連続膣内射精セックスに、意識をとろとろに甘く濁した。

ベッドの上で夢中になって股を開いて腰を振る私の意識が、ユーリのチンポによって、ぐちゃぐちゃの快楽で気持ちよく上塗りされていく。

「ユーリい♡ 私のおまんこお♡ ユーリのチンポの形♡ 覚えちゃったあ♡ もう♡

ユーリの♡ チンポの形から♡ おまんこ♡ 戻らなくなったあ♡ 責任とつ

てえええ♡」

「うん、サーシャは俺と、ずっと一緒だよ」

「えへへー♡ ユーリのチンポで♡ わらひの♡ おまんこお♡ もつと♡ ズポズ

ポつて♡ 気持ちよくしてえ♡ ン、おっ♡ ン、おっ♡ それ♡ イクつ♡

はああ♡ きもちいい♡ イクつ♡ ああ♡ イクう♡」

そうして、私のお腹にユーリの淫紋が完成すると、私はダンジョンマスターの眷属という、二度と後戻りできない深淵の世界に堕ちた。

でも、それでよかったと、私は心の底から思える。

ぱちゅうう♡ ぱちゅうう♡ ぱちゅん♡ ぱあん♡

「んっ♡ イクっ♡ ユーリの♡ チンポでえ♡ おまんこ♡ またあ♡ イクっ♡ ……これ♡ すっごい♡ 気持ちいい♡ はぁー♡ はぁー♡ ……あつ

らめっ♡ イクっ♡ おまんこ♡ きもちよすぎてえ♡ イクっ♡ ……あつ♡ ……イクっ♡」

だって、私の心にあつたのは、しあわせな気持ちだけだったから。

ぱちゅん♡ ぱちゅん♡

「あっ♡ あっ♡ そこお♡ いまあ♡ チンポでえ♡ ついちやあ♡ らめっ♡

イクっ♡ これ♡ すぐっ♡ イクっ♡ あっ♡ イクううう♡」

にゆるうう♡ にゆるうう♡ にゆるん♡

「………♡ イツた♡ いまあ♡ おまんこ♡ イツた♡ からあ♡ きゆうけい♡

ねっ♡ んはあ♡ おっ♡ おっ♡ おっ♡ ほっ♡ イクっ♡ またあ♡

おまんこ♡ イクっ♡ ユーリの♡ チンポで♡ おまんこ♡ きもち

よく♡ イクっ♡ かされるう♡ ううう♡ あっ♡ ……♡ ……♡ んっ♡ イクっ♡

クっ♡」

ガク♡ ガク♡ ガク♡

(……シヤル♡ ……ごめんねえ♡ ……わらひ♡ ……ユーリの♡ ……チンポに♡

……墮とされちやつたあ♡)

愛する愛弟子のシヤルに秘密ができてしまったのが、唯一の心残りであるが。

こうして私は、ユーリの女になった。

……

……

……

「いやあ♡ わらひ♡ ししよう♡ さらさら♡ シヤルに♡ 見られながら♡ イキ
たかう♡ ないいい♡ んっ♡ ああ♡ はああ♡ もう♡ むりい♡ イクっ♡
のお♡ がまん♡ れき……ない♡ んはあー♡ んはあー♡ イクっ♡ あ
っ♡ イクっ♡ んっ♡ んっ♡ おまんこお♡ シヤルに♡ 見られなが
らあ♡ イクっ♡ イクっ♡ イクうううう♡」

ガクン♡ ガクン♡ ガクン♡

この数日後、私が師匠をしている女の子の愛弟子であるシヤルもユーリに墮とされ
て、結局、三人でセックスをすることになるのは、また別の話。

世界最悪の都市ロストエデン

大国同士の権力が及ばぬ緩衝地帯。

そこに、国を追われた犯罪者たちが集い、暴力による楽園を作った。

犯罪都市、ロストエデン。

通称、世界最悪の都市。

どこの国の法律も効力を発揮しない治外法権。

世界で最悪の治安を誇る、極悪人たちの吹き溜まり。

彼らにとつては天国であり、地獄に一直線に繋がっている最低の街。

数々のマフィア、犯罪組織が根城を作るロストエデンが持つ暴力は日々巨大に膨れ上がり、今や誰も手が出せなくなっていた。

毎日、世界最悪の都市では縄張り争いが起きて、人々が殺し合いを繰り返している。

その結果、軍事国家ですら手を出せないほどに、強力な武力を持つ達人が何人もロストエデン内に生まれた。

そして、今も殺し合いの中で、新たな達人が生まれ続けている。

様々な国が国家の安全のために諜報員を秘密裏に送り込んでいるが、ロストエデンが持つ武力の総数はいまだに明らかになっていない。

ロストエデンを都市ごと壊滅させるためには、数万におよぶ軍隊を派遣する必要がある。

しかし、軍事国同士の国境沿いに存在する犯罪都市に軍を派遣すれば、それは都合のいい戦争の理由に変わり、国同士の殺し合いにまで発展する。

それに、ロストエデンを破壊しても、強大な武力を持つ犯罪者たちは結局逃げ延びて、世界中に悪が散らばることになる。

一国の軍隊でも滅ぼせない個人の武力が、ロストエデンにはいくつも集結していた。

そのため、犯罪者同士が地方都市内で殺し合いをしている分にはむしろ都合がよいと、ロストエデンは世界中から放置される結果となる。

ロストエデンは犯罪者たちの天国でもあり、国でも手を出せない悪逆人を一つの場所に閉じ込めている、封殺された都市まるごとの監獄でもある。

そんな、世界から放置されたロストエデンの一角に、街の外から帰還した女性がいた。彼女の名前はエマ・ローゼンス。

エマとはある魔族の国からロストエデンへの諜報員として送り込まれた、スパイであつた。

エマは自分が所属する本国に、ガスター帝国から誘拐した勇者たちを無事に送ると、本来の任務であるロストエデン内の調査の任務に戻る。

エマが帰還したのは、ロストエデンで淫魔教会と呼ばれる教会である。

淫魔教会はロストエデン内のサキュバスたちが集う場所であり、サキュバスとしての活動を利用した情報屋と、世界中から横流しされた武器の密売をおこなう施設であった。

淫魔教会は、ロストエデン内などの組織にも所属していない、独立した場所でもある。

エマは淫魔教会に所属する情報屋として表で活動を行いながら、とある魔族の国の諜報員として裏で活動している。

「エマ先輩！ おかえりなさい！」

そんな、街の中にあるさびれた教会の前で、長身の女性がエマを出迎えている。

エマを笑顔で出迎えている女の子の名前は、ベニコ・シノノメ。

ロストエデンに魔族の国から一緒に任務としてやってきた、エマの部下である。

ベニコの年齢は二十歳。エマの四歳年下。

ベニコの身長は一七〇センチメートルと、女性にしては大きい。

肩まで伸びた白くてきれいなウェーブした髪に、ピンク色の元気な瞳。額に伸びる二本の鬼の角。

エマを淫魔教会の前で出迎えるベニコは、黒いスーツと白いワイシャツに紺色のネクタイ姿であった。

ベニコが着ているジャケットとワイシャツの下には、Hカップの爆乳がたつぷりと膨らんでいる。

ベニコが身につけている白いワイシャツの下はノーブラのようで、ピンク色の乳首が、二つのふくらみの先にうっすらと透けていた。

「先輩！　なんで私も連れて行ってくれなかったんですかー！」

「ただいま、ベニコ。あなた、また、シスター服を脱いでるのね……」

「だって、スーツ姿のほうが、用心棒をしてかっこいいじゃないですかー！」

「あなたは戦うことばかり考えて諜報には向かないから、淫魔教会においていったのよ。もしあなたを連れて行ったら、絶対にガスター帝国で勇者にも戦いを挑むでしょ？」

「ええー、強いやつと戦うの、楽しいじゃないですかー」

「だからよ……」

ガスター帝国での諜報活動に置いていかれて拗ねているベニコに苦い顔をしながら、エマが言葉を返している。

貴種サキユバスと鬼人族のハーフであるベニコは、鬼人族が先祖返りした古代種鬼神族が持つ怪力の血と、貴種サキユバスが持つ高い魔法適正を同時に持ち、生まれたとき

から強大な暴力の才能を手に入れていた。

その代わりに、ベニコは本来サキユバスが持つはずの性欲を、強い暴力欲求として所持しているのであるが……。

そんなベニコは淫魔教会では、暴力行為を担当する用心棒の役割をしており、サキユバスを武力で従わせようとする犯罪者をすべて撃退している。

鬼神族の力を受け継ぐベニコが持つ怪力は常人にはまったく太刀打ちすることができずに、戦いにすらなる前に、ベニコのパンチ一発で多くの力自慢が命を落とす。

「それで、先輩、彼は先輩のお客さんですか？」

諜報に使っていたガスター帝国のメイド服姿から、淫魔教会の制服である黒いシスター服に着替えると、教会の敷地内でゆっくりと紅茶を嗜むエマ。

そんな、久しぶりに心安らぐ時間を過ごしているエマに、ベニコがきよとした顔で質問をしていた。

ちなみに、淫魔教会にはシスターしかない。

「え、お客……？」

自分への来客に心当たりのないエマは、不審に思いながらも、ベニコが指差す方向に顔を向けた。

「やあ、ココが、メイドさんの本拠地かな？」

「なっ?! 貴様っ! どうしてここが!」

エマに気軽な感じで声をかけてきたのは、ガスター帝国内でSランクの女勇者をたぶらかしていた、ユーリという名の少年だった。

さえない黒髪に、さえない黒い瞳。

出会って次の日には顔すらも忘れてしまいそうな、印象の薄い顔。

覇気のない立ち姿。

そんなユーリが、緑色のジャージ姿でのんびりと淫魔教会の敷地内を歩いていた。

「へー。エマ先輩が追跡されるのって、珍しいですね! じゃあ、あいつ、ぶっ飛ばしてもいいつすよね!」

「ちよつと! 待ちなさい! ベニコ!」

エマの警戒する態度を受けて、ユーリを淫魔教会の敵として認定したベニコが、エマが言葉をかけるよりも前に、ユーリに向かって殴りかかっていく。

ベニコは紺色のネクタイとボタンをはずした黒いジャケットを風になびかせながら、右手を脇の下に振りかぶっている。

「しやあああああ!」

ドゴン!

ユーリに向かってベニコが右手を振り抜くと、巨大な岩石が崩落したような打撃音が

周囲に鳴り響いた。

ロストエデンに響き渡る名物音。

ベニコが誰かと戦っていると、どこからでも聞くことができる風物詩である。

「うわ！ すっごい威力！」

並のSランク冒険者程度なら一撃で戦闘不能にすることができるベニコの一撃を腕をクロスして防御しながら、ユーリが覇気なく笑っている。

「ベニコ！ あなたが戦闘をすると教会を壊すから、もつと遠くで戦いなさい！」

「はい！ おい！ 少年！ エマ先輩の命令だから、遠くに吹っ飛ばー！」

エマの言葉を聞くと、ベニコはユーリの着ている服を掴み、空に向かって力まかせに放り投げた。

すると、ユーリの体が、街の外にある森にまで勢いよく飛んでいく。

「うわー」

「じゃあ、先輩、行ってきますー！」

「ベニコ、気をつけるのよ……」

ユーリという少年はベニコの一撃に耐えるあたり、それなりに実力を持っているのだろう。

しかし、一撃は回避することができても、止まらぬ乱打の前に戦闘になることすらな

く、いつも実力者たちはベニコに撃破されていく。

淫魔教会の最強戦力であるベニコなら今回の戦闘行為も大丈夫だろうと考えて、エマは街の外まで一足で飛んでいくベニコを見送った。

「まあ、ベニコになら、からめ手も通じないでしょう……」

あのユーリという少年は女性を快楽で墮とす技術が高いようだが、脳が暴力でできている、淫魔族なのにまったくセックスに興味を持たないベニコをどうこうすることはできないはず。

「さて、せっかくの任務達成の高級茶葉なんだから、ゆっくりと味わわなくっちゃー」

そう冷静に分析しながらエマはティーカップに残る紅茶を口にすると、淫魔教会の敷地にあるおしゃれなテーブルに座って、ひさしぶりの休息をのんびりと楽しむのであった。

ベニコとの戦闘♡

「少年！ さあ、殺し合おう！」

「俺はユーリっていうんだ」

「そっか！ 私はベニコだ！ よろしく！ ユーリ！ そして！ 死ぬー！」

ドゴン！

世界最悪の都市ロストエデンの城壁の外、誰もいない森の中で、ユーリとベニコが対峙していた。

ベニコが力任せに両腕を振り回すたびに、それを防御するユーリの腕から凶悪な打撃音が鳴り響いている。

ユーリとベニコが戦う異質な戦闘音を聞いてすぐに、森の中で活動をしていた人間や、森に住む魔物たちが、その場から緊急避難を開始していた。

すでに、ユーリとベニコが戦闘を続ける周囲数キロメートル圏内に、ふたり以外の生物は存在していない。

白いウェーブした肩までの髪、額にある鬼の角、ピンク色の瞳を笑顔にしたベニコが

黒色のジャケットと紺色のネクタイをなびかせて、ユーリに鬼修羅の暴力を振るう。

ベニコの胸に膨らむHカップの爆乳が、ノーブラで身につけている彼女のワイシャツの下でかわいい乳首をピンク色に透かしながら、相当な質量と張りを持って、プルンプルンと左右に揺れていた。

「おっ！ ユーリ！ 組技か！ でも、私のパンチは地面に寝たままでも強烈だぜー！」
そんなベニコの腰に体当たりをすると、ユーリはベニコの体を地面に仰向けに寝転ばす。

とつさにベニコは両脚を左右に開くとユーリに向かい合って、格闘技のマウントポジションに対応する防御姿勢を取った。

ユーリの腰を両脚で挟み込み、ユーリが自分の体に馬乗りできないように守る形だ。

「ユーリ！ かかってこいよー！」

地面に仰向けに寝転んだ状態で、ベニコは両腕を構えてユーリを迎え撃とうと笑っている。

無双の怪力を持つベニコは、地面に仰向けに寝転んだ状態で振るう腕力だけでも、Sランクの冒険者ですら簡単に吹き飛ばす実力を持つ。

並の悪漢なら、即死させることも可能だ。

まさに、暴力を振るうためにこの世に生まれてきたような存在。

そんな、生まれ持った天性の格闘センスを持つベニコは地面に仰向けで寝た体勢で、ユーリの攻撃を迎撃するべく待っていた。

しかし、暴力のことしか頭にないベニコは知らない。

この世には、セックスのことだけしか考えていない存在がいるということ。

「お、スキだらけじゃん」

「私の防御に、スキなんかないぜ！」

地面に仰向けに寝た状態で両脚を左右に広げて、ユーリと正面から向かい合う格好はベニコにとっては戦闘行為での防御姿勢であるが、ユーリにとっては、男女の営みをおこなうための正常位の体勢であった。

ユーリのことを地面からのぞき込むように上体を起こしたベニコのはいているスラックスのウエスト部分から右手をねじ込むと、ユーリはベニコのおまんこを気軽に愛撫していく。

くにゆう♡ くにゆう♡

「んっ♡ ユーリい♡ お前♡ なにしてるう♡ んはあ♡ あっ♡」

ユーリが突然おこなった意味の分からない行為に、戦闘のことしか考えていなかったベニコは面食らいながらも、クリトリスをユーリの指にコリコリと愛撫されてしまった。

くにい♡ くにい♡

「はひい♡ このお♡ んはあ♡ あっ♡ これ♡ まずい♡ パンチ♡ 届かない♡
あっ♡ らめっ♡ んっ♡ ふうう♡」

混乱しつつも、地面に仰向けになった体勢のままユーリに反撃しようとするが、マウ
ントポジションに対する防御姿勢を取っているため、ベニコからの攻撃はユーリに届か
ない。

「んっ♡ このお♡ 私と♡ やり合え♡ バカ♡」

「うん、ベニコとやりたい」

くちゅ♡ くちゅ♡

「ふざけ——♡ んはあああ♡ それ♡ らめっ♡ ああああ♡ あっ♡ あっ♡」

本来ならば体を起こしてユーリからの愛撫を回避すればいいのであるが、今まで自分
が遭遇したことのない未知の展開によって、その場から動くことなく、ベニコは自分が
最も頼りにしている腕力でユーリに反撃を試みるという選択をしてしまう。

その結果、体から力が抜けるくらいにまで、ベニコはユーリにクリトリスを愛撫され
てしまっていた。

「ユーリい♡ 私とお♡ 戦ええ♡」

ようやく、上半身を起こした殴りかかったことで、ユーリによるクリトリスへの愛撫

から抜け出したベニコであるが、すでにベニコの下着の中はねっとりとした愛液で濡れており、彼女がはいているスラックスの生地までを透明な液体で湿らせていた。

「ふうー♡ ふうー♡ なんだあ♡ 体が♡ 熱い♡」

そして、戦闘時の興奮と相まって、ベニコの肉体はかなり発情してしまっていた。

サキュバスの持つ性欲を暴力欲求に引つ張られているベニコは、戦闘をしながら下着の中を愛液でたっぷり濡らす性癖を持っている。

そんなベニコが大好きな戦闘行為中に、おまんこにヌルヌルと心地いい愛撫をされたことで、彼女の体は今までにないほどに興奮してしまったのだ。

「んっ♡ くうう♡ また♡ このお♡」

再びユーリがベニコの腰に正面から組み付くと、今度はベニコの背中側に素早く回り込む。

ベニコは腕を振り回してユーリを引き離そうとするが、いとも簡単に、お尻側にまでユーリに回り込まれてしまった。

ベニコが今まで出会ってきた強敵の中で、一番の技術を持つ体さばきである。

そしてそれを、セックスのためだけに使っている変態が、ユーリであった。

「んっ♡ このっ♡ やめっ♡」

そうして、ベニコを押し倒すと、地面に四つん這いになったベニコの腰を、ユーリが

お尻側から両腕で抱える体勢となる。

「こらああ♡ 戦闘中に♡ 硬いの♡ わたしの♡ おまんこに♡ あてるなあ♡」

ユーリは自分の勃起したイチモツをベニコの膣口に押しつけると、ベニコの体をさらに発情させていく。

「いや、俺はベニコとセックスがしたいから。その勝負だし……」

「じゃあ♡ 戦い中に♡ セックスに持ち込まれた♡ わたしの♡ 負けって♡ ことお?♡」

「うん。ベニコの負け」

「ふざけ……♡ あっ♡ スポン……♡ 脱がすなあ……♡」

「ベニコ、めっちゃ濡れてるじゃん」

「うるさい……♡」

そして、ユーリがベニコのはいている黒いストラップスと下着を脱がすと、濃い愛液がたっぷり糸を引きながら、ベニコの下半身が森の中に露出された。

そのあとすぐに、ユーリはベニコの膣穴に人差し指と中指をねじ込むと、ニユルリと濡れた温かい膣肉の感触を心地よく二本の指に感じながら、ベニコのGスポットを思いつき刺激していった。

にぢゅ♡ にぢゅ♡ にぢゅ♡

「んはああ♡ なにこれ♡ んああああ♡ はああ♡ あっ♡ あっ♡ あっ♡」

びゅー♡♡ びゅびゅー♡

ベニコは森の中で四つん這いにされた格好で、あつという間に、ユーリの手マンでおまんこから潮を吹かされてしまう。

そんなこと、初めての経験であった。

「んはあー♡ んはあー♡ おまんこお♡ 指で♡ くちゆくちゅ♡ するなあ♡」

「でも、ベニコの声、めつちや気持ちよさそうだけど」

「ああん♡ それはあ♡ 気持ちいいけどお……♡ あっ♡ あっ♡ あっ♡ あっ♡」

「じゃあ、いいじゃん」

「らめらつてえ♡ エマ先輩に♡ あとで♡ 怒られるんだからあ♡ はああ♡ ユー

リ♡ 指♡ うますぎ♡ あっ♡ それっ♡ イクっ♡ イクっ♡ イクっ♡♡」

びゅっ♡ びゅっ♡

「ベニコのここ、めつちや潮吹くねー。これ、気持ちいい?」

ぐぢゅ♡ ぐぢゅ♡ にぢゅう♡

「そこお♡ 押すのお♡ やめろお♡ あっ♡ あっ♡ らめっ♡ はああ♡ またっ

♡ これっ♡ イクっ♡♡」

ガク♡ ガク♡ ガク♡

そのまま、ベニコは四つん這いの格好でユーリの親指の腹にクリトリスをぐりぐりと心地よく押しつぶされながら、同時にユーリの二本の指にGスポットを何度も押しつぶされていった。

くにゆう♡ くにゆう♡ ぐにゆつ♡ ぐにゆつ♡

「ん、っ♡ おまんこと♡ クリ♡ 同時はあ♡ やめろお♡ あっ♡ らめっ♡ これ♡ 気持ちよすぎい♡ すぐっ♡ イクう♡ んはあー♡ んああー♡ イクっ!!!♡♡♡」

ヒク♡ ヒク♡ ヒク♡

ユーリの中指と薬指をおまんこにぬつぶりと飲み込みながら、ベニコの膣肉がヒクヒクと絶頂して、気持ちよさそうに痙攣運動を繰り返している。

そうして、ベニコは黒のスーツ姿でストラックスをずり降ろされて、森の中で四つん這いにされた格好で、ユーリの指におまんこを気持ちよく何度も絶頂させられていった。

「はあー♡ はあー♡ なにこれえ♡ なにこれえ♡」

さらにユーリの快樂魔法を肉体にかけられたことで、ベニコは四つん這いの格好から地面に倒れ込み、うつ伏せになつてお尻を突き上げた体勢のままついに、動けなくなる。

じゅるるう♡ ちゅぶう♡ じゅるるるう♡

「ユーリい♡ おまんこお♡ 舐めるなあ♡ あっ♡ はあ♡ あっ♡ イクっ♡ イクっ♡ イクっ♡」

地面にうつ伏せになってお尻を天高く突き上げた体勢で、ベニコはユーリにクンニされる。再びおまんこを気持ちよく絶頂させる。

じゅるるう♡ ちゅぷう♡ ちゅぷう♡

「んはああ♡ あっ♡ イクっ♡ これっ♡ イクっ♡ らめっ♡ イクっ♡ イクっ♡
♡ イクっ♡ あっはあ♡ イッた♡ イッたかあ♡ あっ♡ イクっ♡ またあ♡
……イクっ♡ ……あああ♡ おまんこ♡ イクう♡」

性的興奮で硬く勃起したクリトリスをユーリの舌と唇にトロトロに舐め転がされながら、ベニコは、ユーリの人差し指と中指にさらにGスポットを気持ちよく押しつぶされていく。

すでに、ベニコのおまんこはユーリから与えられる快楽によって、透明な愛液をお尻から太ももまでたっぷりと垂れ落としていた。

……ぴと♡

「んつくうう♡ んはああ♡ やめっ♡ 逃げ♡ 逃げなきやあ♡」

そうして、暴力ばかりを考えて生きてきたベニコの無垢な処女のおまんこに、ユーリの勃起したペニスが押し当てられる。

今のベニコは黒いストラックスと紫色のレースの下着を完全に脱がされて、黒の上質なジャケットと白いワイシャツを上半身に着ているだけであった。

快感によって力の抜けた体で懸命に逃げ出そうとしているベニコであるが、すでにユーリの手のひらの上である。

……にゅぷうう♡

「んっ♡ あっ♡ らめっ♡ ユーリの♡ 硬いの♡ おまんこに♡ 当たってるう♡」

四つん這いの格好でユーリの両手に腰をがっしりと固定されたまま、硬く尖った肉の棒がベニコの膣の入り口を探り当てる。

するとそのまま、ベニコの濡れたおまんこをゆっくりと広げながら、ユーリのペニスがベニコの体内に侵入してきた。

「ユーリい♡ お前♡ ここでするのかよお♡ あとで♡ 私と戦えよお♡ もう♡」

サキユバスと鬼人族とのハーフであるベニコは、処女であってもユーリとのセックスが楽しめるくらいに、性行為への適性は高い。

「ベニコの中、めっちゃ締まる！ やっぱ、怪力系の女の子はすごいなー！」

「私の怪力を♡ そんなことに♡ 利用するなあ♡ あっ♡ ふつとい♡ ユーリ♡

お前♡ チンポ♡ 太すぎい♡」

「世界で一番気持ちいいチンポだからな」

「ふざけんなあ♡ あっ♡ れも♡ 気持ちいい♡」

サキュバス族であるため、ベニコは誰かといきなりセックスをすることに特に忌避感を持つてはおらず、むしろベニコは、自分のことを簡単に組み伏せたユーリとのセックスに興味すら抱いていた。

——ぷち♡

「ベニコの処女、いただきまーす♡」

「あんっ♡ ユーリの♡ チンポ♡ はいっっちゃ……ったあ♡ 初めてなのに……♡」

ユーリのペニスの先に、ベニコの処女膜を破る心地いい感触が伝わってくる。

そしてすぐに、ユーリのチンポを物欲しそうに膣肉をヒクつかさされているベニコのおまんこの中に、ユーリは勃起したイチモツが根本までニルンと温かく啜えこまれていく。

……にゆるうん♡

「あー、ベニコのおまんこ、すっげえ気持ちいい……」

「んっはあ……♡ ユーリのチンポ♡ デツカ♡ ふっと♡ やっばい♡ これ♡ めっつっっちゃ♡ 気持ちいい♡」

暴力のみに特化していて、今まで開くことのなかったベニコのサキユバスの血が、ユーリのチンポによって開花されていく。

にゆるう♡ にゆぶん♡ にゆうう♡

「んあつ♡ んつくううう♡ おつきい♡ ユーリい♡ お前の♡ デカチン♡ 気持ちよすぎるって♡」

そうして、ユーリはベニコの腰を両手でつかんだまま、バックの体位で激しくピストン運動を開始する。

ユーリの巨大な肉の棒がベニコの膣内を奥まで連続でヌルヌルと粘膜を甘くこすりながらかき混ぜていくと、ベニコはユーリとするセックスの快楽に顔を真っ赤に染めて、ユーリの極悪な巨根の気持ちよさに酔いしれていた。

「あつ♡ あつ♡ あつ♡ やばい♡ ユーリい♡ お前とお♡ 体の相性♡ 最高かも♡ セックス♡ すっごい♡ 気持ちいい♡」

ユーリの腰の動きに合わせて、ベニコは心地よさそうによだれを垂らして髪を振り乱しながら、四つん這いの格好で快感の声を上げ続ける。

そんなベニコのおまんこからは大量の愛液がこぼれ落ちていて、ユーリの巨大なチンポを根本までヌプヌプと何度も体内に心地よく受け入れ続けていた。

にゆうう♡ にゆぶう♡ にゆるう♡

「……あつ♡ ユーリい♡ 私♡ そろそろ♡ イキそう♡ イクつ♡ イクつ♡ イクつ♡」

森の中で下半身を露出して、黒いジャケットと白いワイシャツを着たベニコが、四つん這いのままユーリのチンポを体内に受け入れ続けていく。

ユーリが腰を振るリズムに合わせて、ベニコのワイシャツの下に膨らんだ爆乳と、彼女が身につけた紺色のネクタイが卑猥な動きで揺れていた。

ベニコのHカップの爆乳が乳首をいやらしく勃起させて、白いワイシャツの生地をぶつくりと卑猥にふくらませている。

ユーリは森の中でベニコと腰を振りながら、四つん這いになったベニコのHカップの爆乳の張りともみ心地、そして、かわいい乳首のつまみ心地を指先でむにゅ♡むにゅ♡こり♡こり♡と思いつきり楽しんだ。

ぱちゅん♡ ぱちゅうっ♡ ぱちゅうっ♡

「はああ♡ あつ♡ んっ♡ あつ♡ はああ♡ ユーリい♡ この格好♡ エッチだな♡ あはあ♡ あんっ♡」

それからしばらく時間が経つと、ユーリとのセックスをすっかり楽しみ始めたベニコは、今は木に背中を預けながら、立ったまま左足を持ち上げられた体勢で、ユーリと立位でのセックスをしていた。

「やべー♡ 淫魔教会の敵♡ セックス♡ しちゃった♡ ちゅぷう♡ れろお♡」
 強靱な肉体とバランス感覚を持つベニコとだからできる、野外でのセックス。

ユーリと気軽にねっとりとしたキスを重ねながら、ベニコが頬をピンク色に染めて、甘い吐息であえいでいる。

にゆるう♡ にゆるう♡

「まあ、今は何も気にせず、セックスしようや」

「うーん……♡ まあ♡ つかあ……♡ あっ♡ はあんっ♡ ユーリとはあ♡ 一

時休戦♡ つてことで♡ ちゅぷう♡ れろお♡」

セックスで打ち解けたのか、ベニコは気軽な感じでユーリと会話を続けていく。

「ベニコの家に、俺のこと泊めてよ。ロストエデンを何日か観光したいから」

「ええー♡ エマ先輩に♡ 怒られるって♡」

「そこをなんとか！ セックスした仲じゃん！」

「んっ♡ もうっ♡ しょうがないなあ♡ 絶対に♡ エマ先輩に♡ バレるなよお♡」

そうして、ベニコはユーリを自分の部屋に泊めることになる。

普段は暴力のことばかり考えているが、ベニコは一度肉体関係を持った人間に、情がわくタイプであった。

ぱちゅう♡ ぱちゅう♡ ぱちゅん♡

「はぁー♡ はぁー♡ ユーリ♡ これ♡ やっぱ♡ まんこ♡ すっげえ♡
気持ちいい♡」

セックスをしながら打ち解けたベニコの両足を抱えて今度は腰を持ち上げると、ユーリはベニコの体を木に押し付けながら駆弁の体位で、彼女のおまんこに硬いペニスを激しく打ち付けていく。

自分の全体重がヌルヌルとしたおまんこに思いつきりかかるような激しいセックスで、ベニコのピンク色の瞳がうつとりと快感色に濁ると、彼女は夢中になってユーリと腰を振った。

ばあん♡ ばあん♡ ばあん♡ ばあん♡ ばあん♡

「ああぁー♡ これ♡ すっごい♡ イクっ♡ やばい♡ イクって♡ あっ♡
はぁぁ♡ おまんこ♡ イクううう♡」

セックスが好きなサキュバスの血を開花させながら、ベニコは駆弁の体位で両脚を左右に大きく広げてユーリの背中に抱きつくと、卑猥な格好で、ユーリのペニスを体内に心地よくニルン♡ニルン♡と何度も飲み込んでいく。

にゅぷう♡ にゅるう♡ にゅるん♡

「ユーリの♡ チンポお♡ おまんこのお♡ 一番♡ 奥まで♡ とどいてるう♡ あ

はあ♡ これ♡ 気持ちいい♡ えへへ♡ やっぱいい♡ おまんこ♡ 気持ちよすぎ
 ぎてえ♡ 目の前♡ チカチカって♡ 光ってるう♡ こんなの♡ 初めてえええ♡

あつ♡ あつ♡ あつ♡

ユーリのペニスを駆弁の体位のまま何度も膣肉でヌルリと受け入れているベニコのおまんこは、白い本気汁を割れ目からダラダラと大量に垂れ落としていた。

ベニコのおまんこが本気で気持ちよくなって、ただ単純に、ユーリとのセックスを心から楽しんでいる証拠。

「ベニコ、中に出すよ」

「んっ♡ 私はサキユバスだから♡ 妊娠しないし♡ いいけどさあ♡ お前♡ 気軽に♡ 中出し♡ しすぎだっ♡」

「まあ、俺も避妊の魔法を使えるし」

そんなふうには軽口をたたきながら、ベニコのおまんこの一番奥までペニスを突きこむと、ユーリはまだ誰の精液も受け入れたことのないベニコの子宮に、たつぷりと精液を注ぎ込んでいった。

……どぶう♡ ……どぶう♡

「んっ♡ ユーリの♡ セーえき♡ 中に♡ 出てきたあ♡ はああ♡ ユーリの♡
 セーえき♡ めっちゃやくちや♡ おいしい♡ サキユバスの私が♡ 言うんだから♡

間違いない♡ あっはあ♡」

おまんこの中に生温かい感触で大量に広がっていくユーリの精液を、ベニコはうつとりとした顔をして、ネットネットで股間の割れ目で楽しんでる。

ビュク♡ ビュク♡ ビュク♡

「んっ♡ んっ♡ ユーリ♡ セーえき♡ 出しすぎ♡ 私のおまんこ♡ そんなに気持ちよかつたか?♡」

「めっちゃ気持ちいい。すげー締まる」

「そっかあ♡ うれしい♡ ちゅぶう♡ じゆるう♡ はむう♡ れろお♡」

そのまま、森の中で駅弁の体位になって、おまんこに気軽な中出しをされ続けながら、ベニコはユーリと親友同士のような会話を続けていた。

……とろお♡

「えへへ♡ ユーリの♡ セーえき♡ めっちゃ♡ おまんこから♡ 垂れてきた♡」

膣内射精をし終えたユーリがベニコの膣奥からペニスを引き抜いた途端に、ベニコのおまんこから、大量の精液がだらりと垂れ落ちてきた。

「うはあ♡ いっぱい♡ 垂れてくるう♡ にししー♡ これ♡ めっちゃ♡ 気持ちいい♡」

緑が周囲に広がる大自然の中で、中出しされたばかりの愛液でヌルヌルと濡れたおまんこから大量に精液を垂れ落としながら、満足そうにベニコが笑っている。

中出しセックスを終えたばかりの、汗ばんだ黒いジャケツトに紺色のネクタイと白いワイシャツ姿。

そして、セックスで火照った顔をピンク色に染めながら、下半身は素っ裸になっているベニコの鍛え上げられた肉体が、とてもセクシーであった。

「もう……♡ ユーリに♡ 処女と♡ 初めてのの中出し♡ 奪われたあ♡」

「まあ、俺とベニコの仲ってことで」

「なんだそれ♡」

ユーリに対する親密な表情を見せながら、ベニコは中出しセックスをし終えた火照った体で、森の中に脱ぎ捨てていた紫色の下着と黒いストラックスを身につけていく。

「じゃあ、ベニコの家に泊めてよ」

「ちよつと散らかってるけど、いいか？」

「へーきー！ へーきー！」

「エマ先輩には、秘密だからな♡」

こうして、ロストエデンでの、ユーリの滞在先が決定した。

ロストエデン散策

世界最悪の都市。ロストエデン。

犯罪者のエリートたちが集う街の中を、緑色のジャージ姿で歩く異質な存在がいた。

さえない黒髪に、さえない黒い瞳。

覇気のない歩き姿。

本来ならば、ロストエデンを歩いて数十秒で死体に変わる獲物であるが、その隣に歩くのは、ロストエデンの中でも特に凶悪とされている生物。

黒いスーツ姿に紺色のネクタイをなびかせるベニコ・シノノメに護衛をされながら、ユーリがロストエデンの街を歩く。

そんなベニコがスーツの内側にはいている紫色の下着の中は、ユーリに中出しされたばかりの精液で卑猥にねっとり濡れているのであるが、街に住む住人はそんなことは想像もできない。

目を合わせただけで半殺しにされる、サキユバスなのにセックスにまったく興味がないうと噂される淫魔教会のベニコをやり過ぎそうと、ロストエデンの住人はひたすらに視

線を避けていた。

「へー、ここが世界最悪の街、ロストエデンかー」

今もユーリののだらしないジャージ姿を見て恐喝をしようと思いついた悪漢が近寄ろうとするが、ベニコの姿を確認すると、恐怖に引きつった顔で一目散に逃げていく。

ロストエデンとはある軍事国家の国境が重なる緩衝地帯、海岸沿いに作られた街で、海運を使い運ばれてくる豊富な物資が街中にあふれていた。

世界中から盗品、禁制品、禁忌物などが流れ込んでくる違法都市。

ロストエデンでは街のそこら中に食べ物や屋台、武器、果ては他の国での違法品まで、隠すことなく商売がされている。

それらを取り締まる法律など存在しないからだ。

「この串焼き屋台は、ちゃんとした肉を使ってるからおいしいぞ！ 下水に流れるゴミを集めて再生した最低のカス肉を使ってる店もあるから注意しろな。ユーリは騙されやすそうだし」

「ふーん。おっ！ うまい！」

「なっ！ ここはうまいんだよ！」

ベニコに勧められた屋台で串焼き肉を買うと、ユーリはワクワクとしながら一口かじる。

すると、ユーリの口の中にはじゅわっとした肉の脂の甘みと、ほどよく効いた塩コショウの味に混じった炭火のかぐわしい香りが広がった。

「もう一本食べよ。……ベニコも食う？ 俺のおごり」

「食う！」

何の肉かはわからないが、串焼き屋台の味が気に入ったユーリは、ベニコともう一本串焼き肉を食べることにする。

甘い脂肪の味がありつつも、ほどよくたんぱくな焼き鳥といった感じか。

そんなことを考えながら串焼き肉を食べるユーリのベニコと森でセックスをして疲れた体に、串焼き肉の栄養が染みわたった。

「ふうー！ 運動をしたあとは、串焼き肉がうまい！」

それはベニコも同じようで、ユーリと森で激しい運動をした体で五臓六腑に染み渡るような笑顔になり、串焼き肉を頬張っている。

（ん？ あの女の子は、ベニコを見ても逃げないな……）

串焼き肉を頬張る笑顔のベニコを見て逃げ出す悪人顔が多数の中、その喧騒を気にせずには歩く少女の姿がユーリの目に留まった。

背中まで伸びたうるわしい銀髪に冷徹そうな真紅の瞳。

女の子の身長は一四〇センチメートルくらいで、黒と紅の生地で作られたゴシツ

クロリータ調のドレスを着ていた。

小柄な女の子の体型はツルペタの幼女体型で、犯罪者が集うロストエデンでは恰好の獲物になりそうな見た目をしているが、誰も彼女に目を合わせようとはしていない。

そして、ツルペタ幼女は太い葉巻を慣れた態度で嘔むと右手に持ち、濃い煙を吐きながら街を歩いている。

すさまじい貫禄である。

「おい、あのおばさんは、私でも勝てないから気をつける……」

そんな、ツルペタ幼女をチラチラと見ているユーリに、ベニコが小声で注意してきた。銀髪ツルペタ幼女は吸血鬼の真祖であり、ロストエデン最強武力の一角。

ヴァンパイアが作ったマフィア組織。

ホテル・ヴァンパイアの支配人であると、ユーリはベニコから説明される。

「ほら、あれが、ホテル・ヴァンパイアだ！」

ベニコが指差す先には、ロストエデンの街並みの中でも特に目立つ巨大な王城があった。

白い宮殿の見た目をしている豪華な建築物は、ヴァンパイアマフィアが実際に経営している宿泊施設であり、難攻不落の警備と、最高級の居心地を保証していた。

縄張り争いに殺し合いが日常であるロストエデンは、夜襲に暗殺が当たり前の手段と

して抗争に利用されている。

しかし、ホテル・ヴァンパイアの宿泊客に対する襲撃は組織のメンツを潰したと判断されて、ヴァンパイアマフィアたちによる報復の対象となる。

ホテル・ヴァンパイアの警備を軽視してターゲットである宿泊客に襲撃をおこなった実行犯はもちろん惨殺されて、実行犯を送りつけた組織はいくつも壊滅させられてきた。

自分たちが経営している宿泊施設への矜持を持つホテル・ヴァンパイアは、ロストエデンの歴史を作る強大な組織の一つである。

「へー、すごい女の子もいるもんだねー」

「ユーリは軽すぎだつて。ホテル・ヴァンパイアの支配人をナンパでもしたら、絶対に殺されるだけだからやめとけよ……知らなかったじゃ、済まないからな」

「ふーん」

ロストエデンの組織均衡と危険な場所や人物に関する知識をまったく持っていないユーリのことを、ベニコが心配している。

「それよりさ……」

「ん、なんだ？」

そうして、串焼き肉を食べて一息ついて街をのんびり歩いていると、ユーリが軽い口

調でベニコに声をかけた。

「ベニコに、フェラしてもらいたくなつた」

「はああ……お前、まじかよ……」

「まあ、舐めてよ」

「もう♡ ユーリは♡ しょうがねーなあ……♡」

サキュバスとしての血が目覚め始めているベニコはユーリの言葉に満更でもない顔をする、フェラをする興奮を想像して舌なめずりをし始める。

「ここに、サキュバスたちがよく利用する休憩所があるからさ……」

「じゃあ、そこに入ろっか。少し歩いたし、休憩つてね」

「そうだな♡ 休憩な♡」

そうして、ひと気のない路地裏にある休憩所に、ユーリとベニコのふたりはこつそりと入っていく。

ベニコと路地裏の休憩所で♡

「はあー♡ もう♡ しようがねーなあ♡」

ロストエデンの路地裏にある、とある休憩所。

ユーリが身につけている緑色のジャージを両手で下ろすと、スーツ姿のベニコがユーリの股間に顔をうずめていく。

「ユーリのチンポ♡ まじで♡ でかい♡ ……いい匂い♡」

そうして、ベッドの上で仰向けに寝転んでいるユーリの正面に座りながら、ベニコが舌なめずりをする、ユーリのペニスにフェラチオを開始した。

「……じゅるるう♡ ……ちゅぷう♡ ……ちゅぷう♡」

黒いスーツ姿のベニコが身につけているジャケットの下の白いワイシャツのすき間から、Hカップの爆乳がチラリと見えるのがとてもセクシーだ。

「……んふう♡ はあむ♡ れろお……♡」

また勃起していないユーリの肉の棒をベニコは楽しそうな顔でぱくりと口に咥えると、アメ玉を舐め転がすように気軽な感じで、口の中でコロコロと舐めしやぶっている。

すると、ユーリの股間に、生温かくてヌルヌルとしているベニコの口の中の感触と、肉厚でねっとりとしているざらざらな舌の感触が同時に気持ちよく広がる。

「あつ♡ ユーリの♡ チンポ♡ 勃った♡ ちゅぱあ♡ じゅるるう♡ ちゅぷう♡」

ベニコは自らの口で舐め転がしているユーリのチンポがむくむくと大きくなつていく感触に、笑顔になりながらフェラを続けていった。

「……んっ♡……んうっ♡ ……ユーリの♡ チンポ♡ やっぱり♡ でかすぎ♡」

そして、ユーリのペニスとベニコの口の中で完全に勃起しきると、今度は顔を前後に動かして、ベニコは口の中に含んだユーリのイチモツを刺激していく。

両手の指先を使って、ユーリの長いペニスと口の中で暴れないように根本で支えながら、笑顔でベニコはいやらしくもねっとりとしたフェラチオを続けた。

「じゅぷぷぷう♡ じゅるるう♡ じゅぷるう♡」

太い亀頭をくちびるに咥えて、ベニコは丹念に心地よくユーリのペニスをジユルジユルと吸い取っていく。

そのすぐあと、ユーリのペニス全体をゆっくりと喉奥まで飲み込んでいくと、口の中を動かして、はむはむと気持ちいい刺激を与え続ける。

そして、亀頭の先までまた口の中からユーリのペニスを引き抜いて、舌先を使い裏筋

やカリ首を丁寧になぶっていく。

すでに、ユーリのチンポはベニコの唾液で、卑猥にヌルヌルと濡れて輝いていた。

ベニコの口技が気持ちいいのか、ユーリの勃起したペニスが、ベニコの口の中で何度も跳ねているが見える。

……じゅぷう♡ ……ずぞぞぞお♡ ……じゅるう♡

「ゆーりい♡ わたひのふえら♡ きもひいいかあ♡ じゅぷぷう♡ じゅぷう♡ ……じゅつぷ♡ ……じゅつぷ♡」

ベニコは上目遣いでユーリを見つめながら、得意げな顔で勃起したチンポにフェラを続けていた。

ユーリのチンポを根本までぐっぽりと啜えるたびに、ユーリの股間に直接キスをしながら口の中をモゴモゴと動かして、ユーリのペニスを心地いい射精に導こうと誘惑していく。

「ユーリ♡ こっちも♡ きもちよく♡ 舐めるからな♡」

そうして、ベニコが右手を使ってユーリのペニスをシコシコと上下に刺激しながら、今度はユーリの金玉を口に啜えて、ちゅぱ♡ちゅぱ♡と卑猥に舐め転がしていく。

ちゅぷう♡ れろお♡ あむう♡ じゅるるう♡

「えへへー♡ ユーリの♡ 金玉♡ おいしい♡ ちゅぱあ♡ ちゅぱあ♡」

まるで無邪気な子供がおいしい飴玉を舐め転がすように、ベニコはユーリのペニスを右手でシコシコと卑猥なリズムでしごきながら、ねろねろと丸い睾丸を舐め回す。

ユーリとセックスを経験するまで処女であったベニコであるが、サキュバスが持つ本能によって、どうすれば男が気持ちよくなるかを感覚で理解していた。

「……あむっ♡ ……ちゅっ♡ ……れろっ♡ ……ちゅーううう♡♡♡」

そして、右手の動きを止めて、もう一度ユーリの勃起したチンポを口に啜えると、ベニコは喉の奥までユーリのイチモツを唾液まみれにしながら、じゅるる♡と心地よく飲み込んでいく。

「……ちゅぶう♡ ……ちゅぶう♡ ……ちゅぶう♡」

そのまま、ユーリのペニスを根本まで、ヌルヌルとした唾液で満たされているすっごく温かい口でやさしく包み込みながら、ベニコは笑顔でちゅう♡ちゅう♡と甘く肉竿に吸いついて、心地いい射精に誘うようなりズムでいやらしい刺激を続けていく。

ベニコが喉の奥までユーリのイチモツを飲み込んだことで、部屋の中におとずれる無言の瞬間がとても卑猥だった。

そうして、ベニコはユーリの亀頭を喉の奥できゅう♡と締めるように刺激しながら、ヌルヌルとしている生温かい口で根本まで甘く包み込み、ユーリのチンポをいやらしい舌使いでニルン♡ニルン♡と何回も舐め回す。

「……ちゅっぷう♡　じゅるるう♡　ずずずう♡　あっ♡　また♡　ユーリのチンポ♡　ビクンって♡　口の中で跳ねた♡　これ♡　気持ちいいのーか？♡　……じゅぷう♡　……じゅっつぷうう♡♡♡」

喉の奥までユーリのチンポをぬっぷりと唾えながら、上目遣いでベニコが笑っている。

そんなベニコの頬はフェラをする興奮でピンク色に火照りきり、妖しい笑顔をユーリに見せていた。

ぐっぷう♡　ぐっぽお♡　ぐっぽお♡　じゅるるう♡

「ほらー♡　ユーリ♡　イけ♡　わたしの♡　口の中で♡　チンポ♡　ビクンって♡　跳ねされて♡　きもちよーく♡　イっちゃえよー♡　せーえき♡　びゅーって♡　頭の中あ♡　トロトロにして♡　いっばい♡　らしちゃえってー♡」

そして次は、いやらしい唾液の音を立てながらベニコがユーリの股間で顔を素早く前後させると、すさまじくヌルヌルとしていて、たっぷりと気持ちいいフェラを続けていく。

「……んぷう♡　……れえ♡　……ちゅぶう♡　……んっ！♡♡♡　んんっ！！♡♡♡　ユーリのチンポ♡　口の中で♡　ビクンって♡　動いてる♡」

ユーリの亀頭の先端を刺激するようにして、ベニコは笑顔で舌先を伸ばすと、ユーリ

の尿道口をネロネロとほじくっている。

(やつべえ♡ フェラするの♡ わたし♡ 好きかも♡)

今までの人生では暴力のことばかり考えて生きてきたベニコであるが、ユーリと一緒にいるとどうしてもサキュバスの血が騒ぎ、エッチなことばかりを考えてしまう。

こんな経験、初めてだった。

こうして、ベニコは処女と初めての中出しを奪われただけではなく、フェラをする快感も、ユーリのチンポにたつぷりと教えられてしまう。

そして、そんなベニコの頭を優しくなでってくれるユーリの手が、とても心地いい。

「あっ……♡ ユーリ♡ もう出る？♡ 出ちゃう？♡ セーえき♡ でそうらろおにししー♡ じゅぷう♡ じゅっぷ♡」

そのまま、ベニコが舌をねぶってこそばゆくフェラを続けていると、サキュバスとしての感覚で、ユーリのペニスが射精しそうになっているのがすぐにわかった。

「えへへー♡ ユーリ♡ わらひのくちの中に♡ ざーめん♡ たくさん♡ びゅーって♡ らせよー♡ えんりよすんなって♡ ……ちゅぱあ♡ ……ちゅぱあ♡」

ベニコは、自分の口を使ってこれからユーリを射精させるといふ実感と興奮で、ゾクゾクと体が熱くなるのを感じた。

黒いスーツ姿のままフェラを続けているベニコの下着の中が、興奮の愛液でドロドロに濃く濡れている。

「ちゅぷう♡ ユーリの♡ チンポ♡ ビクンって♡ 動いてきたあ♡ わたしの♡
口の中に♡ セーえき♡ きもちよーく♡ いっぱい♡ らせ♡ ぜんぶ♡ 飲むから♡ 気にすんな♡」

そうして、根本まではきれんばかりに勃起したユーリのペニスが、ベニコの生温かくて唾液でヌルヌルとしている、とつても心地いい口の中で、たつぷりと射精し始めた。

びゅく♡ びゅく♡ びゅく♡

「……んんっ♡ ユーリの♡ セーえき♡ れてきた♡ ……♡ ……♡ ……おいひい♡ えへへー♡ あむ♡ あむ♡」

ユーリの凶悪で大きいチンポが自分の口の中で気持ちよさそうに跳ね回るのを感じると、ベニコは笑顔で口をすぼめて、亀頭の中から出てくるおいしい液体を舌の上でぜんぶ受け止めていく。

……とぷう♡ ……とぷう♡

「えへへ♡ 初めて♡ フェラで♡ チンポ♡ イかせた♡」

サキュバスとして生まれ持った本能によって、ベニコがユーリのペニスに口内射精をされながら、うっとりとした顔で嬉しそうに微笑んでいた。

「……じゅるるう♡ ……ちゅぷう♡ ……ずぞぞお♡」

そのまま、ベニコはユーリのおいしい精液を尿道に残った最後の一滴までぜんぶ搾り取るように、丁寧でぬっとりとしたフェラを続けていく。

「ほらー♡ ユーリの♡ セーえき♡ ぜんぶ♡ くひに♡ 受け止めらぞ♡」

そうして、ベニコは笑顔のままユーリのペニスから顔を離すと、大口を開けて、舌の上に受け止めた白い精液を嬉しそうに見せつけてくる。

ユーリのチンポをずっと口に咥えて、いやらしいフェラチオを続けたことで生まれた卑猥な熱と湿気が、ベニコの口の中から妖しくあふれていた。

「ユーリのセーえき♡ おいひい♡ ぐちそうさま♡ ……ごつくん♡」

サキュバスの本能により、口淫でユーリから精液を搾り取ったことを誇らしく思いながら、ベニコは舌の上に溜まった液体を一気に飲み込んでいく。

「……ふはあ♡ ……セーえき♡ いっぱい♡ れたな♡ ユーリ♡ わたしの口♡ 気持ちよかつたか?♡」

「うん。ベニコはフェラの才能ある」

「ええー♡ 私としては、暴力の才能のほうがいいんだけどなー♡」

「いや、ベニコはフェラの才能がすごい。俺が保証する」

「そっかー♡ ユーリにそう言われると♡ うれしいかも♡」

そのまま、ベニコはサキユバスの力でユーリの精液を魔力に変換すると、自分の体内に循環させていった。

「なあ♡ ユーリい♡ フェラしたら♡ エッチしたくなった♡」

精液をたつぷりと飲み干したことでサキユバスの血が騒いってしまったベニコは、ユーリにおねだりをするようにセックスを求めてしまう。

暴力のことばかり考えて生きてきたベニコが取る、初めての態度であった。

すでに、ベニコが身につけている黒いストラップスは興奮によって生まれた愛液で、グチャグチャに濡れてしまっている。

……にゆううん♡

「あん♡ ユーリのチンポ♡ おまんこに♡ 入ってきたあ♡」

ベッドの上に四つん這いになって、お尻をふりふりと揺らしてユーリをセックスに誘っているベニコのおまんこに、ユーリが勃起したペニスをゆっくりと挿入していく。

にゆううん♡ にゆう♡ にゆるん♡

「あん♡ ユーリの♡ チンポ♡ あつい♡ はっ♡ はっ♡」

ユーリがベッドの上で腰を前後に動かすたびに、ベニコは甘い声を出して、体を気持ちよさそうにくねらせていた。

「ああ♡ そこ♡ やばい♡ もっと♡ 突いて♡ ん♡ あっ♡ あっ♡ あっ♡

♡ あっ♡ あっ♡ あっ♡ あっ♡

ユーリがベニコの子宮口まで届くような激しいピストン運動をおこなうと、ベニコは獣のようなあえぎ声を出しながら、快楽を貪っていく。

ベニコの鍛え上げられた、ふっくらとしている巨尻にユーリのお腹がぶつかるたびに、ユーリはベニコの肉体の極上の抱き心地を股間で味わっていた。

ばあん♡ ばあん♡ ばあん♡

「ふうう♡ ふうう♡ ユーリの♡ ザーメン♡ 子宮に♡ ほしい♡ 出して♡

ユーリの♡ 濃厚ミルク♡ わらひに♡ いっぱい♡ ちょうだい♡♡♡」

ベニコはユーリに向かってお尻を突き出すようにして、バックの体位でユーリからの種付けをねだる。

そして、ベニコのおねだりに応えるように、ユーリはニルニルとしたピストン運動を早めていった。

にゅぷう♡ ぱちゅん♡ ぐぢゅう♡ ぐっぷ♡

「……ああ♡ イクっ♡ イツちやうっ♡ ユーリのチンポで♡ わらひ♡ イグウウ

ウツ♡♡♡」

そのまま、ベニコは四つん這いにした体を大きくのけ反らせて絶頂すると、うつ伏せでベッドの上にぐったりと倒れ込んでしまう。

そのすぐあとに、ユーリは後ろからベニコの爆乳を両手でわし掴みにすると、まだ硬いままのペニスを挿入したまま、ベニコの体に覆いかぶさる。

そうして、ベニコのおっぱいを両手でむにゅむにゅともみながら、ユーリはさらに腰を動かすと、ベニコとのセックスを続けていった。

ぬぷう♡ ぬぷう♡ ぬつぶ♡

「……あああ♡ らめえええ♡♡♡♡♡ イった♡ いまあ♡ イった♡ から♡ らめつ♡ ユーリ♡ おまんこ♡ ぱんぱん♡ いまは♡ らめつ♡」

Hカップの爆乳をノーブラで身につけている白いワイシャツの上からユーリの両手に卑猥な動きでもまれながら、ベッドの上うつ伏せに寝たベニコが大きな声であえぐ。

ぐぢゅ♡ ぐぢゅ♡ ぐぢゅ♡

「ひぐうう♡ あっ♡ それ♡ イ、クっ♡ んはああ♡ イ、クっ♡ あっ♡ イ、クっ♡ くうう♡♡♡♡♡ イ、クっ♡ はあ♡ おまんこ♡ イ、クううう♡」

さらに、敏感になった乳首やクリトリスをユーリの指に刺激されると、ベニコはうつ伏せのままベッドの上で身もだえる。

そのまま、ベニコは子宮まで届く、ユーリのすつごく気持ちいいピストン運動におまんこをニユルニユルと何度も気持ちよくこすられると、シーツに顔を埋めて、瞳をうわ

ずらせながら深くイッた。

「はああ♡ これっ♡ 深い♡ きもひいい♡ あああーっ♡ あああーっ♡
はああーっ♡ ……♡ ……♡ あっ♡ あっ♡ あっ♡ あっ♡ あっ♡」

ガク♡ ガク♡ ガク♡

人生で初めて深くて心地いい絶頂を迎えてしまったベニコは、うつ伏せのままベッドのシーツを両手でぎゅつと強く握りしめて、甘い快感にもだえている。

そんなベニコのおまんこは、ユーリとの激しいセックスによる快楽で生まれた白くてドロドロと泡立った淫らな本気汁で、たつぷりとネトネトに割れ目を濡らしていた。

にゅうう♡ にゅうう♡ にゅうう♡

「……あっ♡ ああっ♡ あああああ♡ ……いくうううううううう♡♡♡」

ベッドの上うつ伏せで寝転んだ状態で、イッたばかりの敏感なおまんこをグチュグチュとユーリの硬いチンポにさらにかき混ぜられると、全身を大きくビクンと心地よさそうに痙攣させながら、意識を濁したベニコが甘い声を出してイク。

そのまま、ベニコの両腕を両手でぎゅつと固定するようにユーリが抱きしめると、体同士を密着させながら、ユーリはベニコに本日二回目の膣内射精をおこなった。

びゅく♡ びゅくう♡ びゅつく♡

と話しながら、ユーリはベニコが着ている黒いスーツにクリーンの魔法をかけて、汚れをきれいに落としてあげている。

「私のおまんこは♡ 魔法できれいにしてくれないのか?♡」

「俺の精液を子宮に入れたまま、隣を歩いてもらうのが好きだからしない」

「わかった♡ じゃあ♡ 私もそうする♡」

そして、セックスで乱れた服装を整え終わると、ベニコとユーリは並んで休憩所をあとにした。

ユーリとベニコの会話

路地裏にあるサキュバス族が行きつけにしている休憩所を出て、ベニコはユーリと街を歩いていった。

「じゃあ、ユーリ、飯はどうする……って、いない？」

しかし、街を歩きながらユーリに話しかけようとする、ベニコはユーリが近くにいないことに気づく。

「まじか……どこに？」

ユーリの姿が街の中で突然消えたことに混乱するベニコであるが、前から歩いてくる人物を視界に入れると、そちらに意識を向ける。

「ベニコ、ターゲットは殺害したの？」

「あ……エマ先輩……」

なんと、黒いシスター服から私服に着替えたエマが、多くの人々で賑わう道の正面から歩いてきたのだ。

ベニコはとっさにユーリの存在を隠そうとするが、幸運なことに、迷子になったらし

いユーリの姿は自分の近くには見えない。

ベニコに話しかけるエマの私服は黒いサングラスを顔にかけて、紫色のスーツとスカートの上に薄手の暗黒色コートを羽織った、かなりいかつくもセクシーな服装であった。

コートの裾から見える黒のストッキングと、紫色のハイヒールを履いたエマの両脚がうるわしい。

「こんな時間まで戻ってこれないなんて、かなり手こずったのね?」

「はあ……まあ……」

淫魔教会の敵として撃退を命じられた相手と、実はさつき中出しセックスしちやいましてなどと上司に報告できるわけもなく、ベニコはエマにあいまいな返事をするることしかできない。

「今日はこのまま家に直帰かしら?」

「はい……その予定です……」

そして、ユーリと今から一緒に自分の家に帰って、さらに朝まで中出しセックスを楽しむ予定だとエマに正直に教えるわけにもいかずに、ベニコはエマに生返事をしてしまう。

「ご苦労さま……これ、少ないけど、おいしいものでも食べて」

「ありがとうございます……」

エマはひと仕事を終えたベニコにねぎらいの言葉をかけると、金貨を三枚手渡してくれた。

庶民では見ることもできない高額のお金を三枚も、エマはベニコに何でもないことのように、ポケットマネーから贈ってくれている。

エマは後輩思いの、素晴らしい上司なのであった。

「それじゃあ、また明日……」

「エマ先輩も、お疲れ様です……」

ベニコに挨拶をすると、エマは帰宅のため、街の雑踏の中に消えていく。

「ベニコ！ あっちにおいしそうな屋台があるから、行こうぜ！」

そうして、エマの姿が見えなくなつてすぐあとになると、上司に仕事の報告をごまかしてしまったことに対して罪悪感を抱いているベニコに向かって、気楽な態度でユーリが声をかけてきた。

なんてタイミングのいい男なのだろう。

「ユーリ！ どこに行つてたんだよ！ いきなりいなくなつて、心配したんだぞ！」

「いやー、めっちゃおいしそうな匂いがあるからそっちに歩いていったら、ベニコが隣に
いなくなつて、焦つたよ」

「おい！ 勝手にふらふら歩くなよ！ この街はいつでもどこで犯罪に巻き込まれても、おかしくないんだからな！」

運がいいのか悪いのか、ふらふらと屋台に誘われて迷子になっていたユーリに脱力しながら、ベニコはユーリにロストエデンの危険性を改めて説明する。

「いやー、あつちになぎの蒲焼みたいな匂いがするからさー」

「うなぎ？ ああ、この匂いはウニユークか！ ウニユークの串焼きはおいしいぞ！ それに、精がつく！」

ユーリが指差す方向から、うねうねと動くへびみたいな見た目をした魚の串焼きの匂いがしてくるのをベニコは鼻で感じた。

これは、最近ロストエデンで流行しているショークタレの匂いだろう。

ショークは今まで一部の好事家しか手に入れることのできない嗜好品であったが、この大陸に生まれた新ダンジョンからも手に入るようになったことで、ロストエデンにも安く流通するようになったのだ。

それまでは、ショークは凶悪な海竜が生息する海を超えて、東の果てにある竜人族の国から輸入することでしか、手に入らない品物であった。

しかし、ショークが同じ大陸にあるダンジョンから産出するようになったことで市場価格が下がり、街の串焼肉屋もショーク味のタレを気軽に使えるようになるくらいに、

ロストエデンの経済が変わったのである。

ベニコはユーリと話していて、そんなことを思い出した。

「最近、ショーユ味のタレが流行ってて、それでウニユもよく喰われるようになったんだよ！ 最近できたダンジョンから手に入った、ウニユのさばき方が書かれた本のおかげらしい。それまで、ウニユはぶつ切りにして、ゼリーに入れるしかこの街では食い方がなかったからな！」

「ふーん」

「たしか、欲望のダンジョンって名前だっけなあ……ユーリは行ったことある？」

「あるよ」

ショーユから派生した話題のついでに、ベニコがユーリに新ダンジョンに行ったことがあるかを聞くと、ユーリはなんでもないことのようにあると答えた。

ベニコが噂でしか聞いたことのない場所にユーリが実際に行ったことがあるとわかると、最近生まれたばかりのダンジョンに関する情報に興味津々になって、ベニコはユーリに質問をする。

莫大な金が動くことになる新ダンジョンについての本物の情報は、この街では誰もが知りたがる、貴重なものとなっていた。

ロストエデンでは、誰もが嘘をつく。

「まじか！ 欲望のダンジョンはサキュバス族のために生まれたようなダンジョンだつて噂されてるから、一回遊びに行つてみたかったんだよなー。どんなダンジョンなんだ？」

「今度、ウォータードラゴンランドつていうテーマパークがダンジョンにオープンするから、現在、従業員を募集中」

「ウォータードラゴン？ 水龍？ なんだそれ……？」

「性のテーマパーク。まるで食事を楽しむように、みんながセックスを楽しめる場所」

「まるで、サキュバス族のためのテーマパークじゃねえか！」

「だから、サキュバス族の従業員をこれから大量に雇用する予定なんだ」

「なんで、ユーリはそんなにダンジョンについて詳しいんだ？」

「この前ダンジョンに行つたときに、従業員募集の張り紙がいくつも貼つてあつた」

「なんだその変なダンジョン……」

「よく言われるよ」

ウニユ一の串焼きを頬張りながら、ユーリとベニコが他愛も無い会話を続けていく。

「そんなことよりさ、夜はベニコをたつぷりと楽しませるから」

ウニユ一の串焼きを食べ終えると、ユーリはベニコに向かって、人差し指と中指の二本の指をクニクニとリズムよく折り曲げながら見せつけてくる。

「もう♡ バカ♡」

何度も機械的に折り曲げられるユーリの二本の指のリズムを見て、ユーリにされた手マンの気持ちよさを体に思い出してしまったベニコは、照れたように視線をそらしていた。

「そうだ！ 夕飯はあそこにしよう！ 臨時収入が入ったんだ！ 私のおごりでいーぜ！」

しかし、体が火照っていく中、ベニコはひと仕事を終えたことで上司から臨時収入を得たことを思い出し、ユーリと食べる夕飯のことを提案する。

ベニコが行きつけにしている食堂に、ユーリを連れて行くことにしたのだ。

「サンキュー、ベニコ」

「少し歩いて腹ごなししたら、夕飯を食いにいこーぜ！」

「それまで、ベニコのおっぱい、もんでいい？」

「今はだめ♡」

「じゃあ、夜にたっぷりとは？」

「いいよ♡」

「夜は、おっぱいだけで、ベニコをイカせる」

「はあー♡ さすがに♡ おっぱいだけじゃイカねーよ♡」

「じゃあ、おっぱいだけでイッたら、ベニコは俺の女になってくれる？」

「いいぜ♡ ヘヘ♡ まあ♡ 無理だろうけどな♡」

そうして、ベニコとユーリは、ロストエデンの都市をのんびりと歩くのであった。

血まみれのキリノ

「へへー！　ここだぜー！」

ロストエデンの路地裏にあるさびれたお店。

そこで夕食を食べるために、ベニコとユーリが店内に入る。

ベニコとユーリは休憩所で中出しセックスをたつぷりと楽しんだり、のんびりと街を歩いていたため、辺りはすっかり暗くなり、ロストエデンの街には夜の時間がおとずれている。

入り口の扉を開けると、テーブル席とカウンター席にわけられた明るい店内には、ちらほらと食事をする他の客が見えた。

「いらつしやーい……」

そして、ベニコとユーリを迎える女店主の暗い声が、店の中に聞こえる。

「なんだ……ベニコか……」

女店主とベニコは知り合いらしく、ベニコを視界に入れると他人行儀な対応から、親しい人に対する気軽な態度に変わってベニコに声をかけた。

「ベニコが男を連れてくるなんて珍しい……」

「いや、私も、男友達くらいいるって！ キリノ！」

ベニコと話すキリノという名前の女の子は、身長一五〇センチメートルくらいの体にクセのある紫がかかった黒髪を肩まで伸ばして、暗い青色の瞳をしていた。

キリノの目の下には不健康そうな、真つ黒なクマがくつきりとできていた。

ダウンナーな雰囲気を持つキリノは黒いつなぎの上半身部分を腰に結びつけていて、ズボンのようにつなぎをはいていた。

そして、キリノはへそを出した黒いハーフトップを上半身に身に着けて、濃いオリーブグリーンのエプロンをお腹の前に結んでいる。

ハーフトップ姿でお腹に巻いたエプロンからはみ出している、キリノのIカップの爆乳が健康的で美しい。

「こいつは、ユーリっていうんだ！」

「ユーリ、よろしく……。私はキリノ。ベニコとは腐れ縁……」

人見知りをするらしく、ベニコに紹介されたユーリに向かって、キリノはおどおどと返事を返していた。

「キリノはそんなんだから、処女なんだって！」

「ベニコも処女……」

ベニコの軽口にキリノも言葉を返すが、ベニコの余裕そうな態度を見て、キリノに嫌な予感が走る。

「ベニコ、ユーリとヤツたな……？」

「や、ヤツてないって……♡」

店内に何人か食事をしている人間がいるため、ベニコはとつさにキリノからの質問を否定していた。

悪魔のように暴力を振るうベニコが男とヤツたという情報を聞いて、店内にいる客の何人かは、口に含んでいた食事を吹き出すと盛大に咳き込んでいる。

「じゃあ、このあと、ユーリとセックスするつもりだな……？」

「し、しないよぉ♡」

そして、キリノににらみつけられながら、ベニコが恥ずかしそうに頬を火照らせている。

「その態度は嘘。ヤツた」

いつもはひょうひょうと言葉を返してくるはずのベニコの態度に、キリノはベニコの嘘を簡単に見破った。

「ま、周りに他の客もいるからさあ……」

「ベニコに、これから非処女自慢をされるのが、許せない」

誰しもが口の軽いロストエデンでは、ベニコが誰かとセックスをしたという噂は、翌日には街中に広まっているだろう。

もの好きな男がいるという尾ひれ付きで。

ベニコとキリノはロストエデンでは、誰も男が寄り付かないくらいに恐れられている。

ベニコは無双の如き怪力と、好戦的な性格のため。

ユーリと仲良く街を歩いている姿がすでに、ロストエデンの住人には奇跡であった。

そして、キリノは……。

「ん、待って、仕事……」

キリノがベニコと話している隙を突いて、食い逃げをしようとしている男がいた。

ロストエデンの飲食店では、日常茶飯事の光景。

慣れた様子でキリノはエプロンを脱いでカウンターに置くと、腰に結んでいた黒いつなぎを上半身にも身につけ、ジッパーを上げる。

キリノが上半身まで身につけた黒いつなぎの下にふくらむ、むっちりとした爆乳が素晴らしい。

そして、キリノは壁にかけられていた赤色のチェーンソーを右手に取ると、魔力を込めて、凶悪な回転刃を起動した。

に居場所を特定され続けるため、結局は、キリノに食事の代金を支払うまで追い回されることになる。

だから、街の住人たちから恐れられているキリノのお店で食い逃げをするのはよほどのバカか、この街にやってきたばかりで無知な新参者くらいであった。

しかし、キリノの作る料理はおいしいし、食事の代金をきちんと支払えば特に襲われることもないので、キリノが経営しているお店はロストエデンではそれなりに繁盛している。

そして、しばらくすると、遠くから男の悲鳴が聞こえた。

「くひひひひひ!!」

少しすると、チェーンソーと黒いつなぎを返り血で真っ赤に染めたキリノが店内に帰ってくる。

「キリノの店で食い逃げをするやつは、ひきしぶりだな」

「でも、お金を持ってたから、許した……」

戦闘をおこなうと、チェーンソーの返り血ですぐに全身が真っ赤に染まることから、キリノはロストエデン内で「血まみれのキリノ」と呼ばれていた。

「いつ見ても、すっげえ武器だな……」

「私はかわいいと思うけど……」

そして、黒いつなぎを上半身だけ脱いで腰に結び、いつもと何も変わらないダウンナーな感じに戻ったエプロン姿のキリノと、特に何も起きていなかったような平然とした顔のベニコが会話を続けていく。

キリノが身につけている黒いつなぎと壁にかけられた赤いチェーンソーであるが、洗浄魔法が自動で発動するようで、ベニコと会話をしていると、真つ赤な返り血があつという間に消えていった。

「でも、ここに、食い逃げ歓迎って書いてあるけど？」

「ああ、それか……」

「それは、バカを騙すための張り紙……」

壁にかけられたチェーンソーの隣に、食い逃げ歓迎の張り紙がしてあるのをユーリが指摘する。

そして、その張り紙には『店主から一時間逃げ切ったら料金は無料。しかし、失敗したら料金は一〇〇〇倍』との文字が大きく書いてあった。

「それ、紙のはしつこに小さく毎日一時間書いてあるんだよ……よほどのバカじゃなきゃ騙されないし、大抵はすぐにキリノに捕まるけど」

「私から逃げられるような人は実力があつてお金持ちだから、毎日しつこくしていると、めんどくさくなくなって私にお金を払ってくれる。いい小遣い稼ぎ……食事や千皿作るよ

りいい……」

「でも、この街の実力者で、こんな子供だましの張り紙に騙されるバカはいねーだろ？」

「うん、ベニコぐらい……」

「うるせー！ それは昔の話だろ！」

そんな話をしながら、キリノはテーブル席を清掃して、ベニコとユーリを案内する。

「あのときは一ヶ月くらい、毎日キリノと戦ってたな！」

「最終的にはエマさんが、ベニコが食べた食事代を支払ってくれた」

ベニコとキリノの会話を隣で聞いて、ベニコの尻拭いに苦い顔をしているエマの顔をユーリは思い浮かべる。

できる女であるエマは、意外と苦勞人であった。

「今日は早めに店じまいするから、ベニコとユーリの貸し切りでいい。私も、ベニコに色々と話を聞きたいし……」

ベニコとユーリ以外にキリノの店を利用していた客の最後の一人が、精算を終えて、店の外に出ていく。

すると、キリノは店の外に向けた看板を閉店中に変えてから、ドアに鍵をかけた。

「逃さない……」

暗いクマができた青い瞳で、キリノが嫉妬のこもった視線をベニコに向けている。

「まあ、その前に、飯を作ってくれや」

しかし、ベニコはキリノの態度を気にすることなく、食事の催促をする。

昼から何発も中出しセックスを楽しみまくったベニコとユーリは、すでに腹ペコだった。

「それもそうか……何食べる？」

「メニューを見てから決める！」

ベニコの催促を受けて、料理人モードに顔が切り替わったキリノは厨房に入ると、食事を作る準備を始める。

そうして、外の景色がすっかりと暗くなった夜の時間に、キリノのお店の中には、ベニコとキリノとユーリの三人だけとなった。

キリノのお店で食事

「おっ！ ついにミソラーメンがメニューに乗ったのか！」

キリノのお店にあるメニュー表を見て、ベニコが嬉しそうに声をあげる。

キリノがロストエデンで経営しているお店は、この世界に召喚される勇者たちがよく好物としてあげる食べ物だと人々に有名な、ラーメンを出すお店だった。

「シヨージュに続いて、ミソも、ロストエデンに安く流通するようになった……」

現在キリノの店では、勇者たちが残した口伝や書物を利用して、塩ラーメン、シヨージュラーメン、ミソラーメンが再現されて、飲食メニューとして提供されている。

「最初は塩ラーメンだけだったけど、便利になったなー」

キリノのお店は、開店当初は塩ラーメンのみが提供されていた。

しかし、新たに大陸に生まれたダンジョンからシヨージュとミソが手に入るようになったため、キリノの店に、シヨージュラーメンとミソラーメンが新メニューとして登場したのだ。

以前までは、シヨージュもミソも東の果てにある竜人族の国から輸入するという手段し

か入手経路がなく、高級品であったために、街の食堂で気軽に使えるものではなかったためである。

「ダンジョンのおかげで、新メニューが増えた……」

お店のメニューを眺めているベニコに、キリノが嬉しそうに報告している。

「ユーリ、この店では、ラーメンっていう勇者の国の料理が食えるんだよ！」

「ふっ……俺はラーメンにはうるさいぜ……」

ベニコがユーリに勇者の好物であるラーメンを紹介すると、ユーリは気取った笑みを浮かべていた。

「ついに、伝説のショーユラーメンとミソラーメンも、この街で気軽に食べられるのか
！」

今まで書物でしか読んだことのなかったショーユラーメンとミソラーメンが、キリノの店に新メニューとして登場したことを思い、ベニコはよだれを垂らして喜んでいる。

「この店にはギョーザとチャーハンもあって、勇者の国にあるとされるラーメン屋の再現を目指してるんだ！ 実物を見たことがないから、本物はどんな感じかわからないけど！」

キリノのこだわりが全面に出たラーメン屋経営を、ベニコはべた褒めしている。

そんなベニコに、ユーリはキリノの店のおすすめメニューを聞いてみることにした。

「ベニコのおすすめは？」

「私はこの店の大葉ギョーザが大好きなんだけど、普通のギョーザも肉汁がすごくてうまい！」

「大葉ギョーザはお店の人気メニュー……」

ベニコのおすすめの言葉に、キリノもお店の人気メニューだと伝えて、ユーリに太鼓判を押している。

「ギョーザとラーメンを同時に頼むのがいいぜ！ 今日はおごりだから、遠慮すんな！」

「サンキューベニコ」

そうして、ベニコとユーリは、キリノのお店でミソラーメンの大盛りと大葉ギョーザのセットを頼むことになった。

「おまたせ……」

「よっしゃー！ うまそーだ！」

少しすると、カウンターの席に座りキリノと向かい合うベニコとユーリの目の前に、ミソラーメンの大盛りと大葉ギョーザのセットが提供される。

湯気立つ濃厚なミソスープに小麦色の手打ち麺がおだやかに浮いて、器にはポリウムのある煮込みチャーシューが豪快にそえられていた。

うるわしい麺の上にはラードで炒められた熱々の野菜炒めが彩り、みずみずしいメンマとトロトロの煮卵が横に盛りつけられている。

鼻孔をくすぐるミソラーメンスープの香りだけで、ベニコとユーリの口の中はよだれでいっぱいになった。

そして、黄金色のミソラーメンの隣には、程よい焼き色がついた大葉ギョーザが白い皿に並べられていて、灼熱の熱さを主張するとベニコとユーリの胃袋を見た目だけでうずうずと刺激する。

すぐに店内にある割り箸を手にとると、ベニコとユーリはまず最初に、キリノ特製のミソラーメンにかぶりついた。

ズズズズ……！

「これがミソラーメンか！ すごいーうまいー！」

「めちやくちや、うまい……！」

ミソラーメンを口に頬張り、ベニコとユーリが舌鼓をうっている。

特に、人生で初めてミソラーメンを食べたベニコは瞳をうるませて、感動すらしていた。

「大葉ギョーザもうめー！ ショーユとも相性がいい！」

満面の笑顔のまま、次にベニコが大葉ギョーザを頬張ると、ベニコの口の中いっぱい、

肉汁の旨味と野菜の甘味がじんわりと広がっていく。

今まで、キリノの店でベニコは塩と酢をつけてギョーザを食べていたが、ショーユが解禁されたことで、酢醤油で大葉ギョーザを食べることも可能になっている。

ベニコはさつそく、酢と醤油を混ぜ合わせた酢醤油を作り、大葉ギョーザの味を存分に堪能していた。

「ふうまかった！ ぐちそうさまー！」

「ぐちそうさまでした……」

そうして、ベニコとユーリはキリノの店のミソラーメン大盛りと大葉ギョーザをペロりと食べ終えると、お腹をおいしくいっぱい膨らませる。

至福の時間だった。

「ユーリ、キリノの店のラーメンはうまいだろー！」

「めちやくちやうまい。勇者の国でもやっていけるくらいだ」

ベニコの自慢げな言葉に、キリノのお店のラーメンとギョーザを堪能したユーリは肯定の言葉を返す。

しかし、ベニコの問に勇者の国でもやっていけるという答えを返したユーリの態度に疑問を持ったベニコは、ユーリに質問を試してみることにした。

まるでユーリは、勇者の国のことを全部知っているかのようなのである。

もしかして、ユーリは……。

「へー、なんで勇者の国でもキリノのラーメンが通じるってわかるんだ？　もしかして、ユーリって勇者か？　私の攻撃を防御できるくらいだし」

「いや、俺は勇者じゃないけど」

ベニコの質問に、ユーリはなんでもないような態度で否定の言葉を返す。

「そういえば勇者だったら、戦う前にエマ先輩にユーリは勇者だって注意されるか……じゃあ、ユーリって勇者オタク？」

「うーん。それでいいや」

「ユーリって、セックス以外にも興味あることあったんだな……」

一瞬だけ、ベニコはユーリのことを勇者だと考えるが、ユーリと戦う前、頼れる上司であるエマに特に何も注意されなかったことを思い出し、ユーリは勇者ではないとベニコは心の中で結論づける。

勇者の国でもキリノのラーメンが通じるという話題は、ただの褒め言葉としてユーリが出した例え話だと、ベニコは考えた。

そのまま何も疑問に思うことなく、ベニコはユーリとの会話を続けていく。

「ユーリは、ラーメンをよく食うのか？」

「ラーメンは好きでよく食ってるよ、とんこつラーメンとか」

「トンコツラーメン!？」

そして今度は、ベニコとの会話の中で、ユーリの口から聞こえたトンコツラーメンという単語にキリノが食いついた。

「私の店で、トンコツラーメンのレシピはまだ手に入れてないの。名前だけでは、トンコツの『トン』の部分は何なのかわからない。ミソやショーユは名前でわかるけど、トンコツラーメンは見た目もわからない……」

三種類のラーメンを提供するキリノの店であるが、今はトンコツラーメンのレシピを探していた。

そのタイミングで、トンコツラーメンをよく食べているというユーリの言葉を聞いて、キリノはトンコツラーメンについて、ユーリに聞きたくなったのだ。

「俺はラーメンには詳しいぜ。豚骨醤油とか、魚介系とか、ベジポタ系とか、家系とか、トマトラーメンとか、トマトチーズラーメンとか」

「なにそれ! 知らない名前なのラーメンばかり。トマトとチーズを使ったラーメンなんて、本当にあるの?」

ユーリが話す知らないラーメンの数々に、ラーメン屋さんを営むキリノは引き込まれるように興味津々になっていく。

「あるよ。あとは、ヤサイマシニンニクアブラオオメとか」

「そ、それは……勇者が残した言語が難解すぎて、まだ誰にも解読できていないジロークー!? ユーリは、ジロークーのヤサイマシニンクアブラオオメについても知ってるの!? アブラナシヤサイマシカラメニンクメンスクナメについても!」

「全部知ってる」

「それについて教えてくれたら、私、ユーリに何でもする!」

「なんでも、だと……」

未知のラーメンについての知識の連続に、キリノの情熱が爆発していた。

黒いつなぎをはだけたエプロン姿でカウンターから身を乗り出すと、Iカップの爆乳をぶるんと揺らし、キリノは食いつくようにユーリに頼み事をしている。

「ちよつと、私、キリノと竿姉妹は嫌だぜー」

「ベニコはちよつと黙って……いま大事な話をしてるから……」

閉店時間を過ぎた店内にはすでに、ベニコとユーリ以外の客はいない。

ベニコはキリノに隠し事をすることなく、おおつぴらな会話を繰り広げていた。

「今日はこのあと用事があるから、明日は?」

「明日の昼。お願い! ラーメンについて教えて!」

「おい! ユーリ! はあ……これは、キリノと竿姉妹コースかあ……」

ラーメンについて教えてくれたら何でもするという交渉に了承の意を伝えている

ユーリの姿を見て、ベニコは嫌な予感を覚えた。

しかし、ユーリとキリノが話す会話の途中で、あとはこれから家に帰ってユーリと中出しセックスを楽しむだけだという今の状況に気がつくのと、ベニコは下着の中を密かに愛液で濡らす。

「今日のお代はいいから！」

新しいラーメンに関する知識を手に入れる予定ができたことで上機嫌になったキリノに見送られながら、ベニコとユーリはキリノのお店をあとにする。

「じゃあ、ベニコの家に泊めてよ」

「うん♡」

夜のとぼりの中、しおらしい態度に変わったベニコが、ユーリの言葉に返事をする。

「キリノには、ダンジョンでラーメン屋さんを経営してもらおう」

「んっ？ ユーリ、何か言ったか？」

「いや、ベニコの中の感触を、指で思い出してた」

「♡♡♡」

ユーリが何か言葉を小さくつぶやいたような気がしたが、それをはぐらかされてしま
う。

しかし、そのことを特に気にすることなく、ベニコはユーリとイチチャイチャし始めた。

「ベニコは何回くらいイキたい？」

「いっぱい♡」

「じゃあ、ベニコが気絶するくらいにするか」

「もう♡ 私を気絶させるなんて♡ 無理だって♡ 私より強いエマ先輩でも、私を殴って気絶はさせられないし♡」

「いや、ベニコは俺のチンポで気絶するよ」

「ユーリ♡ おまえ♡ バカだろ♡」

そうして、ベニコはユーリと、夜になったロストエデンの街をふたり並んで歩く。

このあと、ベニコは本当に、おまんこが気持ちいいという理由でユーリに気絶させられることも知らずに……。

ベニコの調教 「乳首責め」 ♡

「ふうー♡、ふうー♡」

ベニコが住むマンションの一室。

家に帰って寝ることだけを目的にしたシンプルな部屋の中のベッドの上で、裸になつたベニコが甘い息を口から漏らす。

「んっ♡ くうう♡、ふうー♡ はあー♡」

ベッドの上うつ伏せに寝たベニコは、ユーリからのマッサージを受けながら体を甘く火照らせていた。

ベニコのお尻から伸びる、サキユバス族の黒いしつぽがうるわしい。

「ユーリ♡ お前のマッサージ♡、なんか変だよお♡」

「でも、気持ちいいでしょ？」

「うん♡」

ユーリの声をかけながら、ベニコは体をさらに甘く弛緩させていた。

背中や太ももをユーリの手になややかにやさしくなでられているだけで、ベニコの体がどんどん

と発情していくのである。

ユーリの指はベニコの敏感な部分には、一切触れてくれない。

それなのに、ベニコの体には、ユーリのより与えられる快感が重なり蓄積されていく。それをもどかしく思いながらも、ユーリの指に焦らすように太ももを上向きになでられて、背中にこそばゆいキスされると、ベニコの全身は熱く火照っていった。

「んっ♡ んっ♡ あっ♡ あっ♡ はあ♡ あっ♡ んっ♡」

(やばい♡ ユーリのマツサージ♡ めっちゃ♡ 気持ちいい♡)

ベッドの上でうつつ伏せになった体勢で背中をゆつくりとユーリの手でマツサージされているだけで、ベニコの体からはあつという間に力が抜けていき、ベニコの頭の中が白く濁って何も考えられなくなっていく。

ふにゆ♡ ふにゆ♡

「わきの下♡ 気持ちいい♡ なんら♡ これえ♡」

すごく不思議な感じなのに、ベニコの心と体はまったくユーリに抵抗できない。

(腰も♡ お腹も♡ 背中も♡ ぜんぶ♡ 気持ちいいよ♡ 私の体あ♡ どうしちやっただあ♡)

そのまま、ベニコはユーリの指によって、敏感な部分以外の全身をあまらせることなくマツサージされていく。

するとそのうちに、ベニコは全身をまったく動かせなくなるくらいに、ユーリのマツサージによって体の感覚をトロトロに溶かされていった。

「はあー♡ はあー♡」

快楽の世界にどっぷりと浸かりきり、頬をピンク色に染めたままぐったりとしてしまったベニコのうつ伏せになった体をやさしく抱き起こすと、ユーリはベッドの上に座りながら、ベニコの肉体を両手を使つて後ろから抱きかかえる。

無防備になった自分の背中を誰かに預けるなんて、ベニコには初めての体験だった。

もにゅ♡ もにゅ♡

「んふうう♡ なにこれえ♡ きもちいい♡」

そうして、ユーリの両腕にHカップの爆乳を後ろからわし掴みにされると、突然の快感に、ベニコは背中をビクンとのけ反らせる。

ユーリにもまれている自分のおっぱいが、自らの両胸に膨らむものだと思じられないくらいに気持ちよかった。

ふにゅ♡ ふにゅ♡

「あはああ♡ あっ♡ なに♡ これ♡ おっぱい♡ すっごい♡ 気持ちいい♡ これ♡ らめっ♡ びんかん♡ すぎるう♡」

いつもより数倍も敏感になったおっぱいをユーリの指にモニユモニユともまれてい

るだけで、ベニコの体には、信じられないくらいに快楽が次々と襲いかかってきた。

すでに、昼間にユーリと楽しんだセックスよりも、ベニコの体は何倍も気持ちよくなつてすらいる。

「なに♡ これ♡ おっぱい♡ きもちよしゆぎるう♡ らめつ♡ これ♡ らめつ♡ おっぱい♡ らめええ♡」

そして、あまりにしあわせな快楽に混乱しながらも、すでに力の入らなくなった肉体では何も抵抗することができずに、ベニコはHカップの爆乳をユーリの指にむにゅむにゅともまれ続けていく。

ふにゅう♡ むにゅう♡

「あつ♡ あつ♡ ああああ♡♡♡♡♡♡♡♡」

ぷしやああああああああああつ♡♡♡

ユーリの両手の指をムチムチとしたHカップの爆乳にやわらかく沈み込ませながら、ベニコは情けなくおまんこから潮を吹いた。

こんなにも体も心も気持ちいいのは、ベニコの人生で初めての経験である。

今までの人生で一度も感じたことのないような激しい甘イキ痙攣によつて、ベニコの視界がドロリと心地よく濁つた。

「うーん。ベニコを乳首だけでイカせるつもりが、おっぱいだけでイッちやつたかあ」

「ユーリィ♡ なにこれ♡ んっ♡ なにこれええ♡ あっ♡ はああ♡」

乳首イキなのに数十秒も続く深い絶頂の中でベニコは背中を強くのけ反らせると、全体重を後ろのユーリィに預けながらも桃色の声を上げている。

そんなベニコの様子を気にすることなく、ユーリィはベニコの乳首をそのまま両手の指でぎゅつとつまんだ。

ふにゅん♡ ふにゅん♡ くりゅ♡ くりゅ♡

「ひううう♡ そこお♡ いまあ♡ だめええ♡♡♡ あああー♡」

あああー♡」

甘くイッたことでさらに敏感になってしまった乳首を何度もユーリィの指につままれると、ベニコはアへ顔で舌を出しながら、身も心もトロトロに気持ちよく溶かして連続で震わせる。

ユーリィの指が、コリツコリツと勃起したベニコの乳首をつまみ上げるリズムで、後ろに座るユーリィに全体重を預けてアヒル座りになったベニコの全身が、ガクガクと気持ちよく痙攣している。

まるで全身の快樂神経を直接いじられているかのように、ユーリィの指先が触れる場所のすべてが今のベニコにとって気持ちよかった。

こり♡ こり♡ ふにゅ♡

「はああああ♡ イク♡ またあ♡ イグウウウツツツ♡♡♡」

ぶしゅつ♡♡♡♡♡ じよばああああ♡♡♡♡♡ ガク♡♡ ガク♡♡

ユーリの両腕に体を抱えられて後ろから両乳首をつねられながら、ベニコはまた激しく全身を痙攣させると、イキ潮をおまんこから盛大に吹き出している。

ベニコが今まで体験したことがない、圧倒的な力によって誰かに肉体を屈服させられているような感覚だった。

しかし、ユーリの指に乳首をいじられている今が、ベニコにとつて、とてもしあわせでもある。

「ふううー♡♡♡♡♡ ふううー♡♡♡♡♡ ふううー♡♡♡♡♡」

ベニコが座るベッドのシーツ周辺が透明に濡れきるほどに、ベニコはおまんこから大量に愛液を吹き出していた。

長く何度も続く深イキによってお腹をふくらませたりへこませたりしながら、ベニコは無意識に腰をへこへこ前後に揺らし続けている。

ベニコの暴力的だったピンク色の瞳は快楽で甘く濁りきってうわずり、舌を出したアヘ顔で肩をすくませて、今までの人生で経験したこともない盛大な絶頂の中、ベニコは意識をグチャグチャでしあわせにとろかした。

「ベニコを乳首だけでイカせるって、約束したからな」

「それはあ♡ ……ちゅぽあ♡ ……ちゅぷう♡ ……くちゅう♡」

いきなりの快感に文句を言おうとするベニコであるが、後ろからユーリの唇に口をふさがれると、口の中で舌を絡ませ合いながらユーリとする濃密なキスの快感によって、心を一瞬で濁した。

(やばいい♡ ユーリの唇♡ 気持ちよすぎる♡)

「ちゅるう♡ ちゅっぽ♡ れろっ♡ くちゅ♡ じゅるるる♡♡♡」

お互いに無言になって何度も口の中で舌を絡め合わせていると、ユーリとキスを続けるベニコの頭の中がとろけるような快楽に埋めつくされていき、ベニコの舌の根から脳の芯までが、甘く切なくしびれていった。

「ぷはあー♡ はあー♡ はあー♡」

うっとり顔をゆるませたベニコの口からユーリの口が離れていくと、透明な唾液の糸がいやらしく伸びる。

「もう♡ からだあ♡ 支えられないいい…♡」

そのまま、脱力しきった体でベッドの上に仰向けで寝転がったベニコは、両足を大きく広げてうっとりとした顔をしている。

ぐちゅり♡

「ああ…♡」

正面に回り込んだユーリの右手に股間の割れ目をさわられると、ベニコの秘部からは、粘っていた水音が聞こえてきた。

「乳首だけでイッたら、俺の女になるって約束したからさ」

「えへへー♡ ユーリの♡ 女にされたあ♡ でも♡ 私をユーリの女にして♡ どうするんだ？♡」

乳首だけでイッた体で意識を濁らせながら、ベニコはベッドの上に仰向けに寝たままユーリの顔を見上げる。

暴力ばかりに興味を持って生きてきたことで恋愛経験などないベニコは、ユーリに自分をどうしたいのか質問をする。

「こうする」

「んひひひひひ♡ あっ♡ あっ♡ あっ♡ ああああっ♡」

そして、ユーリがベニコのお腹に手をかざすと、ベニコのお腹にユーリの淫紋が刻み込まれていった。

「バカ！♡ サキユバスの子宮に淫紋を刻むのは♡ 一生をともに生きるって意味になるんだぞ？♡」

突然、自分のお腹に淫紋を刻み始めたユーリに向かって、ベニコはサキユバス族の掟を教える。

一時的にセックスを楽しむための淫紋など、この世界にはいくらでもある。

しかし、性を貪るサキユバス族にとつて、体に淫紋を刻むのは、人族が異性にプロポーズの指輪を送るのと同じ意味であった。

サキユバス族の肉体に淫紋を刻んでやり逃げするのは、結婚詐欺と同じ。

地の果てまで追いかけられてサキユバスたちに殺されても、文句は言えないのだ。

「そういう意味だけど、ベニコは嫌か？」

「いや、いいけど……」

しかし、ユーリはベニコの言葉にあっけらかんとしながら、ベニコと一生をともに過ごすことを当たり前のことのように約束してくれていた。

「じゃあ、いいじゃん」

「うん♡ ……ちゅばあ♡ ……くちゅ♡ ……れろお♡」

ベニコはひよんなことから、ユーリと一生をともに過ごすことになったことに驚きながらも、ユーリの言葉に流されるまま、甘いキスによつて心と体をベッドの上でしあわせにとろかさされていく。

ベニコの心が、初めて異性と交わるしあわせで満ちた。

くにい♡♡ くに♡♡

「んはああ♡ あ♡ つ♡ はああああ♡」

もうずっとイキ続けているというのに、いまだに終わらない連続乳首イキの中で、ベニコはベッドの上で体を弓なりにそらして絶叫する。

すでに、乳首でイッている途中で、さらに何度も重ねてユーリの指に乳首イキさせられているベニコは、快感で濁った意識でおまんこをグチャグチャに濡らしきっていた。

そんなベニコの全身は強い快感によってしっとり汗がにじみ、ピンク色に発熱した白い肌をつややかに潤ませている。

ベニコの全身から立ち上るのはサキユバス族特有の、匂いだけでオスを発情させる濃厚なメスの香り。

性に無知だったはずのベニコの体からは、歴戦の最上級サキユバスが発するような禁忌に類するフェロモンが、ふわりとただよい始めていた。

暴力ばかりに生きてきたベニコの体が、ユーリによつて現在進行系で、歴史上で最高のサキユバスに作り変えられている。

「んひいひいひいひいっ♡♡♡♡ お、おおおっつ!!♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡ お、っ♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡」

ぶしゅっつ♡♡♡♡♡ ぶしゅううっつ♡♡♡♡♡

ベニコはおまんこから盛大にイキ潮を吹き出しながら、アへ顔で舌を出してユーリの指に乳首をイカされ、全身を芯から気持ちよく震えさせる。

いまだにユーリの指に触れられていないベニコのおまんこは、すでに透明な愛液と潮

ガクン♡ ガクン♡ ガクン♡

再び、休む間もなくユーリの指に乳首をいじられたことで、ベッドの上でベニコの体が大きくそり返る。

そうして、連続で乳首イキしたベニコはまた、濡れに濡れたおまんこから大量に愛液と潮を吹き出すのだった。

「あへええ♡ あつへえ♡ あつへえ……♡」

「さて、そろそろいいか」

ユーリの指に乳首をいじられただけで、意識が前後不覚になるほどに全身が気持ちよくなつてしまったベニコであるが、ようやくユーリの言葉とともに、連続乳首イキの快楽から解放される。

「今日は、ベニコの体をたっぷりと開発するから」

「はへえ……♡」

そして、なんでもないことのように、ベニコの体にさらに快楽を与えようとするユーリであるが、乳首イキの快感だけでろれつが回らなくなつたベニコは、ユーリの言葉に何も言い返すことができない。

「さて、次はこっちの穴もね」

「ん……♡ んはあ……♡ あ……♡」

連続乳首イキによって力が抜けて動かせなくなった体をユーリにやさしく抱き起こされると、ベニコはベッドの上にうつ伏せで寝かされた。

「大丈夫。こっちの穴もすつごく気持ちいいから」

「あへえ♡ あへ♡ あっへえ♡」

暴力しか知らなかったベニコの体に、ユーリによる卑猥な調教が進んでいく。

ベニコの調教「アナル墮ち」♡

「ユーリイ♡ そつちは♡ 恥ずかしい♡ からあ♡」

ベッドの上でうつ伏せに寝た体勢で、お尻から生えたサキュバスの黒いシツポをフリフリとしながら、ベニコが恥ずかしそうな声をあげている。

乳首を触られただけですでに何回も深くイッたベニコの体からは力が抜けきつていて、まったく動かすことができなくなっていた。

そんな、ベニコのふつくらとした巨尻を両手で広げると、ユーリはベニコのお尻の穴をあらわにする。

そして、ユーリは魔法を使って手のひらに触手を作り出すと、ベニコのお尻の穴にその触手をズツプリとねじ込んだ。

ぐぢゅるう♡ にぢゅう♡ じゅるう♡

「んっ…あつ♡ あひいいいい♡♡♡ おひっ♡ おしりっ♡ らめええ♡♡」

にゆるりと勢いよくお尻の穴に入ってきた触手の感触に、ベニコが甘い声であえい

ぷしやああああ♡♡♡

ベッドの上うつ伏せに寝た状態のベニコは、お尻の穴で気持ちよくイキながら、おまんこから盛大に潮を吹いていた。

しかし、ユーリによるベニコへのアナル責めはまだまだ終わらない。

ぐぢゅう♡　ぐぢゆるう♡　にぢゅうう♡

「ま、待って♡　まだ♡　イツてるからあ♡　お願いだから♡　お尻の穴♡　くちゆくちゆしちや♡　らめっ♡」

アナルでイカされてしまったベニコは息も絶え絶えといった様子で、お尻の穴を触手にほじくられながらユーリに懇願する。

しかし、その願いを聞くつもりはないとばかりに、ユーリは触手を使ってベニコのお尻の穴を何度もグチャグチャと音を立てて心地よくかき混ぜ続けた。

にぢゆ♡　にぢゆ♡　にぢゆ♡

「だめっ♡　また♡　おひり♡　でええ♡　イツちやうううう♡♡♡　はああ♡♡♡
イクっ♡♡♡」

ガクン♡　ガクン♡　ガクン♡

アナルで再び絶頂を迎えてしまったベニコは快感でピンク色の瞳をどろつと濁すと、体をビクンと何度も跳ねさせた。

にゆぶっ♡ にゆぶうう♡ にゆぼん♡

「おしりい♡ わたし♡ おしりのあな♡ ユーリに♡ ほじくられて♡ きもちよく♡ なつちやつてるう♡ ああ♡ あんっ♡ あはあ♡ あっ♡ はあん♡ あっ♡」
 それでもなお、ベニコのお尻の穴を責め立てるユーリの触手の動きが止まることはない。

それどころか、今度は別の形をした触手を作り出して、それをベニコの乳首にはわせ始めた。

くにい♡ くにい♡ にゆぶうん♡ にゆうう♡

「いまっ♡ 乳首♡ さわっちゃ♡ らめっ♡ おしりい♡ くちゆくちゅ♡ ほじくるなあ♡」

ユーリの淫紋をお腹に刻まれたことで感度が増してしまったアナルをほじくられながら、ベニコはまた、お尻の穴が気持ちいいという理由で絶頂を繰り返す。

ユーリの触手魔法によって、ベニコのお尻の穴に快楽神経が増やされていくと、ベニコのアナルはユーリ専用のいやらしい性器へと改造され始めていた。

ずぼん♡ ずぶん♡ ずぶうう♡

「んはあー♡ んああー♡ はああー♡ あああー♡」

(お尻の穴♡ すっごい♡ 気持ちいいいい♡ こんなのだ……♡ 知らない……♡)

ユーリの触手にお尻の穴を何度もほじくられているベニコはそのあまりの快楽に、自分の意思とは関係なく勝手に腰がへこへこと動いていくのを感じた。

今まで経験したことのないアナル責めの感触に戸惑いながらも、ベニコはその強い快感を受け入れていく。

「ふうー♡ ふうー♡ あはあー♡ あああー♡」

そうして、ユーリの触手によってほぐされてしまったベニコのアナルが、いやらしい穴をほつきりと空けていた。

まるで、もうひとつのおまんこのように、硬い何かを求めてベニコのお尻の穴がヒクヒクと動いている。

……ぴと♡

「んっ♡ おしり♡ あついの♡ 当たってる♡」

ベッドの上うつ伏せになったまま動けないベニコのお尻の穴に、ユーリの勃起した巨根が押し当てられる。

「そ、そんな太いの♡ 絶対に♡ お尻に♡ 入らない♡」

お尻の穴をユーリのペニスの形にゆっくりと押し広げられながら、ベニコはユーリにお願いをしている。

暴力で今まで男を支配する側に立っていたベニコであるが、アナルにユーリの巨根を

激しい腰使いでユーリのチンポに尻の穴を犯されるたびに、ベニコの喉から情けない声漏れる。

ベッドの上でうつ伏せになったまま後ろからアナルをユーリに突かれているベニコは尻穴セックスのニルニルとした快感によって、まるで獣のような声をあげて口からよだれを垂らしていた。

にゅちゅう♡ にゅるうう♡ にゅうう♡

「あひい♡♡♡ おしりい♡♡♡ すつ♡い♡♡♡ 広がってるううう♡」

ユーリの太くて凶悪な巨根の形に、ベニコのアナルがぼっこりと穴を広げている。

そのまま、ユーリのチンポの形に丸く広がったベニコのお尻の穴をヌルヌルと心地よく内側から何度もこすられるすさまじい異物感と快感の中、ベニコは初めてのアナルセックスによって、心と体をトロトロに気持ちよくとろかされていく。

ぱあん♡ ぱあん♡ ぱあん♡

「イグウウウウ♡♡♡ おしり♡ きもちよくて♡ イクつ♡ これ♡ らめつ♡ な

こと♡ 覚えちやうう♡ イクつ♡ あああ♡ イ、クううう♡」

ガク♡ ガク♡ ガク♡

ぱちゅんぱちゅんと音を立てながら激しくお尻の穴をユーリのチンポに突き上げられると、ベニコは甘い声をあげながら体を震えさせた。

ガクン♡ ガクン♡ ガクン♡

あまりの気持ちよさに、ついには涙を流しながら、ベニコはユーリのペニスにお尻の穴を責められ続けていく。

暴力の天才としてずっと生きてきたベニコは、アナルで泣いた。

それどころか、ベニコはユーリの太いチンポにお尻の穴をズポズポと連続でほじくられることによって得られる快楽に、どんどんハマってすらきている。

そんなベニコの心にトドメをさすかのように、ユーリがさらに腰の動きを加速する。

パンパンツパンツ♡♡♡♡♡ ドチュツ！♡♡ グチユウウウツツ！！！！♡♡♡♡

「んひいひいっつっつ！！！！♡♡♡♡♡♡♡♡」

（これだめっ♡ もう無理っ♡）

今まで感じたことのないほどの強烈な快楽に飲み込まれた瞬間、ベニコは白目をむいてアナルで深くイッた。

「はああ♡ あああ♡ ふうー♡ ふうー♡ ふくううう♡ ううう……♡」

ガク♡ ガク♡ ガク♡

そして、それと同時に、激しいピストン運動を続けていたユーリの腰がベニコのお尻の穴に勃起したペニスを根本までねじ込んだ状態で止まる。

（あっ♡ やばい♡ せーえき♡ お尻の穴に♡ だされる♡）

ベニコの頭の中に浮かぶ、サキユバスとしての直感。

するとそのすぐあとに、太い亀頭をふくらませて、凶悪な竿をビクンと脈動させながら、ベニコのお尻の穴の中にユーリが精液をたつぷりと注ぎ込んでいった。

…………どぶう♡…………どぶう♡

「あはああ♡ あああ♡ んああ♡ あっ♡ あああ♡ んはあ♡ イクっ♡

はあ♡ お尻に♡ ユーリの♡ セーえき♡ 出されながらあ♡ アナルう♡ お

っ♡ イクっ♡」

ヒク♡ ヒク♡ ヒク♡

(お尻の穴…………♡ 熱い…………♡ きもちいい…………♡)

ユーリが射精している間中、ずっと絶頂し続けることになったベニコの頭の中がぐちゃぐちゃに乱れてしびれていく。

しかし、お腹の中に感じる精液の甘い熱だけは、ベニコははつきりと意識に感じ取る
ことができていた。

「はあー♡ はあー♡ はあー♡ んあっ♡ あああ…………♡」

それからしばらくして、ようやくユーリによる尻穴中出しが落ち着くと、ベニコはうつ伏せになった体勢のまま、ベッドの上でとろける呼吸だけを繰り返すことになる。

「はあ…………♡ あ…………♡ ん…………♡」

りの二本の腕だけであった。

そして、お尻の穴にユーリーのペニスが入り込んで深く突き刺さる光景を披露するかのようになり、ベニコは両脚を左右に思いっきり広げられている。

そんな体勢になった中で、重力に従って下に落ちる力によってより深いところまで、ユーリーの巨根がアナルに入り込んでくるのだ。

暴力的な快楽によって意識を飛ばされそうになりながらもベニコはなんとか耐え続けていくが、全身を上下に揺らされながらさらにお尻の穴をユーリーのチンポに気持ちよくほじくられると、ベニコはピンク色の瞳をより目にして、アナルで深く絶頂した。

ズブズブツツ!!!♡♡♡♡♡ バチュンツツツ!!!♡♡♡♡♡ パンツパンツパンツパンツツツツ!!!♡♡♡♡♡

♡♡♡♡♡ 「それつつつ!!!♡♡♡♡♡ らめええええつつつ!!!♡♡♡♡♡ きもひい
 いいいいいい!!!♡♡♡♡♡」

びゅううううう♡♡♡♡♡ びゆるうううう♡♡♡♡♡

そのまま、ユーリーの両腕に抱えられた両脚を左右に大きく広げた格好で、アナルを下から何度もほじくられながら、ベニコはおまんこから盛大にイキ潮を吹き散らす。

背面駆弁の上下の動きによってアナル全体を強くこすられ始めたベニコは、あまりの快感に絶叫しながらより目になったまま、何度も絶頂を繰り返している。

にほじくられながら、腰を振ってよがりによがり狂った。

その後も、ベニコは何度も何度もユーリにアナルを犯され続けていき、ロストエデンの街に朝日が昇るころ。

「……………ああ♡♡♡♡♡♡ ……はああ♡♡♡♡♡♡ ……ん♡♡♡♡♡♡ ……んああ♡♡♡♡♡♡
♡ ……ああ♡♡♡♡♡♡ ……あ♡♡♡♡♡♡」

ばしやああああああああつ!!!♡♡♡♡♡ じよろよろろろおおおおおおつっつ!!!♡♡

背面駆弁の体位でユーリに体を持ち上げられながら、ベニコは情けなくおまんこからおもらしをすると、白目を剥いて、体を完全に脱力させてしまう。

アナルセックスの快楽で、ベニコが気絶したのだ。

ベニコが、ついに限界を迎えていた。

「……………♡♡♡♡♡ ……ああ♡♡♡♡♡ ……あ♡♡♡♡♡」

ようやく背面駆弁の体位から解放されたベニコは、そのままベッドの上に力なくうつぶせになって倒れ込む。

三日三晩戦場で戦っても疲れることのないベニコは、たった一晩、ユーリとアナルセックスをしただけで気絶していた。

「……………♡♡♡♡♡ ……ああ♡♡♡♡♡ あ♡♡♡♡♡ あ♡♡♡♡♡」

体力の限界を迎えたベニコのアナルからは、まるで噴水のようにユーリに出された精液が勢いよく吹き出している。

こうして、ベニコはユーリと一生を共に生きる、ダンジョンマスターの眷属として生まれ変わった。

「あはあ……♡♡♡ あ……♡♡♡ ん……♡♡♡ あああ……♡♡♡」

お尻の穴で気持ちよくイッた余韻で、ベニコは快楽で濁ったピンク色の瞳をうわずらせて、ガクガクと全身を痙攣させ続けている。

ユーリはベニコの体にクリーンの魔法をかけてきれいにしてあげると、そのまま眠ってしまったベニコの体にやさしく布団をかけた。

「さてと……」

そして、キリノとの約束のために、ユーリはひとりでロストエデンの街に繰り出していく。

「ユーリイ……♡ 好き……♡」

ユーリに身も心も墮とされたベニコであるが、心の底から、しあせそうな顔をしている。

ベニコが目を覚ましたあとに、さらにユーリによるおまんこ中出しセックスで快楽調教が続くことを、今のベニコは知らない。

キリノとエツチ♡

ベニコと朝までセックスした後。

やり疲れて眠ってしまったベニコを一人置いて、俺はロストエデンの街に繰り出す。

朝日が出始めた街に活気は少なく、むしろ飲み疲れたマフィアたちがへろへろになつて帰路についている。

そして、俺はラーメンの作り方を教えると約束したキリノと合流した。

……

……

……

ラーメンの作り方を教えた後の夜。

俺とキリノはホテルヴァンパイアに宿泊していた。

「え……本当にエツチするの？」

豪華なVIPルームの中で、キリノがドン引きした瞳で俺を見つめている。

ラーメンのレシピを教えたお礼として、俺はキリノとセックスしたいと申し出たの

だ。

紫がかった黒髪と暗い青色の瞳で、キリノがおどおどと恥ずかしそうにしていた。

「恥ずかしいからあ……」

一緒にお風呂に入りながら、俺はキリノのIカップの爆乳を見て楽しむ。

そして、ふつくらと張りのあるマシユマロみたいなおっぱいを下から覗きながら、俺はキリノの陰毛を剃り、パイパンに整えていった。

「へ、変態……」

ツルツルのパイパンになった裸体で、キリノがVIPルームのベッドの上に寝転がる。

さて、キリノの体を楽しもうか。

「そこ、汚いからあー!」

仰向けになったキリノの両足を広げると、俺はクンニを始める。

「んっ♡ んはあ♡ あっ♡」

血生臭い戦いには慣れてるが、キリノはこういう行為には慣れていないらしい。

俺にクンニをされながら、彼女は恥ずかしそうに体を震わせていた。

「んはああ♡ なにこれえ♡ あっ♡ んんんっ♡」

クリトリスを舌先で転がしてあげると、キリノは背中をゾクゾクとのけぞらせる。

そのまま両足の根本をもどかしそうに動かしながら、キリノは気持ちよさそうにイッた。

「ああああ♡ らめえええ♡ んあああ♡」

イッている最中の乳首を両手でつねると、キリノはもどかしそうな声を出す。

パイパンになったおまんこからは、次々とトロトロの愛液があふれ出してきている。

そして、人差し指と中指をおまんこに入れると、ニユルンと生温かい膣壁が俺の指をネトネットに濡らしながら包み込んだ。

すぐく、興奮する感触だ。

くちゅ♡ くちゅ♡ くちゅ♡

「んはああああ♡ んああああ♡ はああああ♡」

そのまま、おまんこの中で指をぐねぐねと動かすと、キリノがとろけた声で叫んだ。

俺が指を動かす度に、キリノの膣穴がヒクヒクと心地よさそうに動いてくる。

そうして、Gスポットを甘く刺激しながら、俺はキリノのクリトリスを口で包み込んだ。

ちゅばあ♡ れろお♡ くちゅう♡

「んおっ♡ あはあ♡ あっ♡ イクう♡」

クンニと手マンによって気持ちいい部分を同時に責められながら、キリノは全身をガ

クガクと震わせる。

足先をピンと伸ばして、俺におまんこを思いつきりいじくられながら、キリノがまた心地よさそうにイッた。

「んっ♡ んはああ♡ あっ♡」

ガク♡ ガク♡ ガク♡

あまり性的な経験をしたことがないのだろう。

キリノは青い瞳をとろかしながら、ポーッと意識を濁して虚空を見つめ続けている。イッて愛液まみれになったおまんこをさらに指を使ってかき混ぜると、俺はキリノの体を性的に開発していく。

「らめっ♡ らめええ♡ んはああ♡ ……あっ♡ あっ♡ あああ♡」

俺に指におまんこをくちゆくちゆと刺激されながら、キリノが背中をのけぞらせる。すでにキリノのパイパンおまんこはとろとろに濡れきって、準備万端に整っていた。俺の指の動きでキリノの膣穴がグニグニと動き、きゆうきゆうと収縮する。

愛液をだらりと垂らす膣壁から指を抜き出すと、ぽっかりと心地よさそうな穴が割れ目に空いたままになった。

ぴと♡

「んっ♡ 生で♡ するのぉ♡」

勃起したチンポを正常位になったキリノのおまんこに押し付けると、むにゆりと膣壁が広がる。

そのまま避妊魔法をかけてあげると、キリノの体内に俺のチンポを押し込んだ。

……ぷち♡ にゆるううん♡

「はああ♡ ユーリの♡ チンポ♡ 入っちゃったあ♡」

処女膜を破り、俺のチンポが体内の奥深くまで入ると、キリノは悩ましい声を出す。そのまま、キリノの体に回復魔法をかけてあげると、俺はベッドの上で腰を振った。

にゅぷ♡ にゅくくう♡

「んっ♡ あっ♡ はああ♡ あん♡ んはあ♡」

ズボズボと膣穴を押し広げながら、俺のチンポがキリノの体内に出入りする。

ニルニルとした感覚でキリノのおまんこが絡みついてきて、股間がとても心地いい感触だ。

「あっ♡ あっ♡ んはあ♡ あっ♡ んんんんっ♡」

俺がキリノの弱い場所をチンポの先で突き始めると、甘い声がベッドの上で響いた。

「んはあ♡ あああ♡ あん♡ また♡ イクっ♡ イッちやう♡」

ガク♡ ガク♡ ガク♡

俺のチンポにGスポットを押しつぶされながら、キリノが瞳を暗く濡らす。

キリノのパイパンおまんこは白濁した本気汁まみれになって、ヒクヒクと気持ちよさそうに痙攣していた。

ツルツルのパイパンおまんこで両足を左右に広げながら、必死にキリノが快感を逃がそうと悶えている。

ぬぷう♡ ぬぷう♡

「んああああ♡ いまはあ♡ おまんこお♡ 突いちややあ♡ らめええ♡」
 イツたばかりのおまんこをさらにチンポで突いていくと、キリノが大きな声であえぐ。

敏感になった膣壁を俺の亀頭でゴリゴリとめくられると、キリノは視点をガクガクと気持ちよさそうに揺らした。

「お、っ♡ お、っ♡ お、ほおおお♡」

本気汁まみれのおまんこを俺のチンポに広げられながら、キリノが全身で快感を逃がそうと暴れる。

そんな正常位のキリノの体内に、俺は容赦なく勃起したチンポを突き刺しまくった。
 キリノの膣壁が快感でニユルニユルに濡れて、ヒクヒクと収縮を繰り返す。

「もう♡ イツたあ♡ もうイツたからあああ♡ あ、っ♡ あ、っ♡ あ
 あああああつ♡ ……イ、クっ♡」

ガクン♡ ガクン♡ ガクン♡

必死に両脚を左右に広げながら、キリノがまた絶頂する。

キリノの白い肌が快感で赤く火照り、彼女の体はしつとりと汗ばんでいた。

にゅぷう♡ にゅぷぷう♡

「もう♡ おまんこお♡ ズポズポ♡ しちやあ♡ らめえええ♡」

さらに、俺はキリノのGスポットをペニスの先で刺激する。

すると、ガクガクとおまんこの穴を閉じたり開いたりしながら、キリノはまたイッた。

「んんんんっ♡ んあっ♡ あああああっ♡ ん、はああああ♡」

ガク♡ ガク♡ ガク♡

キリノが青い瞳を寄り目にして、気持ちよさそうに絶頂している。

俺とのセックスの快楽に身悶えながら、キリノはベッドのシーツを両手でギュツと掴

んでいた。

「ん？っ♡ ん？っ♡ ん？ん？ん？ん？ん？ん？ん？っ♡」

俺のチンポを美味しそうにおまんこで啜え込みながら、キリノがお腹の底からとろけ

た声を出す。

火照った白い肌の先にあるキリノのピンク色の乳首が、興奮と快感でガチガチに勃起

しきっていた。

「あ、はああつ♡んっ♡んはああ♡あ、あああああつ♡」

両手でやわらかい爆乳を揉みながら、俺はキリノと一緒にベッドの上で腰を振る。

キリノの両乳首をクニクニとつまみながら、俺のチンポでおまんこをズポズポと広げてあげると、キリノはとろけた瞳をぐるぐると心地よさそうに揺らす。

「んふううう♡んくううう♡んはあああ♡」

おまんこが気持ちいいという理由で意識をどろどろに濁しながら、キリノはベッドの上で俺のチンポのなすがままになった。

とん♡とん♡とん♡

「はっ♡はっ♡はっ♡あっ♡」

今度はチンポの先を使ってポルチオ性感帯をリズムよく突いてあげると、キリノが幸せそうな声で鳴いた。

「んっ♡ふう♡あっ♡はあ♡」

さらに、ポルチオ性感帯をやさしく押しつぶしてあげると、キリノの体が快感でふにやりと脱力していく。

この快感を知ってしまうと、キリノはもう、俺のチンポから逃げることができなくなる。

「あっ♡あっ♡あっ♡」

キリノの心が、俺のチンポで幸せに溶けていく。

そのままキリノの体は、ポルチオセックスのとろけるような快感に漬け込まれていった。

「ふあああ♡ はああ♡ あはあああ♡」

二ヘラと笑いながら、正常位の格好でキリノが白目をむく。

さらにポルチオ性感帯をぬちゅぬちゅとやさしく押しつぶしてあげると、キリノは背中をのけぞらせて甘くイッた。

「いひひい♡ んくううう♡ はあああ♡」

ガクン♡ ガクン♡ ガクン♡

グルンと瞳を上ずらせながら、子宮をチンポに押しつぶされる幸せの中、キリノは連続絶頂を経験する。

キリノのおまんこはありえないくらいに強い快感を体験したことで分泌された本気汗により、ドロドロに濡れきっていた。

くにゆうう♡

「ん♡っ♡ん♡っ♡ん♡っ♡ ああああ♡」

圧倒的な快樂に蹂躪されるキリノの子宮にチンポを押し付けながら、俺は射精の準備に入る。

キリノの心を屈服させ、セックスの快感で無意識の領域までをぐちゃぐちゃに壊すドメの甘い蜜。

びゅるるう♡ びゅくう♡

「あつ♡ あつ♡ あつ♡ あああああつ♡」

子宮の中に俺の精液が注ぎ込まれ始めると、キリノは体の底を幸せそうに震わせた。

「あへええ♡ ん♡ つ♡ あへえ♡」

快樂物質を大量に含む俺の精液が子宮から体内に吸収され始めると、キリノは甘い甘い気持ちいいだけの世界に意識を落としていく。

「ん♡ お♡ つ♡ お♡ つ♡ お♡ つ♡」

おまんこの奥深くまでを心地よく痙攣絶頂させながら、キリノの全身はとろけた快感に飲み込まれていった。

俺の精液を吸収したことによって、キリノのお腹にピンク色の淫紋が浮かび上がり始める。

「なに♡ これえええ♡ いやあ♡ ん♡ つ♡ あ♡ あああ♡」

淫紋の効果で、俺の精液を体内に吸収すると、心が壊れるくらいの快樂を得られるようにキリノの体が変わ質していく。

そのあまりの快感に、キリノはお腹を何度もへこへことへこませ膨らませながら、お

くのだ。

「ん、お、っ♡お、っ♡お、お、お、お、お、っ♡」

ガク♡ ガク♡ ガク♡

俺の精液がキリノの子宮をパンパンに満たすと、あまりの快感にキリノは口から泡を吐きながら、意識を失っていく。

彼女の今の顔は、とても幸せそうだ。

こうして、キリノはさらに俺とのセックスを楽しめる肉体を手に入れるのである。

ちゅばあ♡ ちゅばあ♡ じゅるるう♡

「……んっ♡ ……ちゅぶるるう♡ ……れろお♡」

膣内射精を終えた俺のチンポを、キリノが丁寧にお掃除フェラをしてくれている。

俺のチンポが抜き取られたキリノのおまんこからは、愛液と混じり合った白い精液がドロドロとこぼれ落ちてきていた。

「こ、こうするのが♡ 気持ちいいの?♡」

「Iカップの爆乳を使って、キリノが俺のチンポをパイズリしてくれる。

性的な知識を何も知らなかった女の子の心に、こうして卑猥な知識を教え混んでいくのは、やはり最高である。

にゅくうう♡

「んああああ♡ ユーリの♡ チンポ♡ また♡ 入ってきたあ♡」

今度はベッドの上で四つん這いになったキリノのおまんこに、俺のチンポを挿入していく。

俺が腰を降るリズムで、キリノの爆乳がブルンブルンと前後に揺れているのがすさまじくエロい。

ぱちゅ♡ ぱちゅ♡ ぱあん♡

「んっ♡ はああ♡ あああああ♡ んくううう♡」

ベッドの上に四つん這いになった格好で、キリノがセックスの快感を俺のチンポですらに覚えていく。

俺のチンポにおまんこをポッコリと押し広げられながら、セックスの甘い快樂によって、キリノは猫が背伸びをするように背中をのけぞらせていた。

ぐりゅ♡ ぬにゆうん♡

「んんんんんっ♡ っ♡ っ♡」

勃起した俺のチンポをグリグリと子宮に押し付けながらクリトリスを指で刺激してあげると、キリノがおまんこをへこへこと痙攣させた。

びゅくう♡ びゆるるう♡

「ああああああっ♡ はああああああ♡ ……んっ♡ ……んっ♡」

俺の精液を子宮で受け止めながら、キリノが幸せそうな声で絶頂を繰り返す。

「せつくす♡ 気持ちいい♡ 気持ちいい♡ 気持ちいい♡ 気持ちいい♡ 気持ちいい♡ 気持ちいい♡

♡♡」

こうして、キリノの忘れられない初体験は、朝まで続くのであった。

ベニコとキリノと3P♡

「んあっ♡ あっ♡ はああ♡」

「あはは！ キリノはなさけねーな！」

ホテルヴァンパイアのVIPルームにて。

今の俺は、ベニコとキリノと3Pをしていた。

三人で寝ても余りある大きなベッドの上では、バツクの体制になって俺のチンポでイキまくるキリノを見ながら、ベニコが笑っている。

くちゅ♡ ぬちゅ♡ くちゅ♡

「あんっ♡ あっ♡ んああ♡」

「んあっ♡ ユーリ♡ ちよつと♡ まって♡」

しかし、キリノの隣に四つん這いにさせたベニコに右手で手マンをすると、あつという間に余裕はなくなり、ベニコが恥ずかしそうに絶頂する。

ベニコの肉厚なおまんこが、俺の指にヒクヒクと絡みついてきてエロい。

「んっ♡ あっ♡」

「ほら、ちゃんとキリノにも見えるようになる」

「やめっ♡みるなあ♡んっ♡んっ♡イクっ♡」

イキ顔をキリノに見られると、ベニコが恥ずかしそうな顔をしながら俺の手マンで絶頂している。

セックスのことなど知らなかったベニコとキリノにたっぷりと調教をした結果、彼女たちは、今は俺とのセックスにどっぷりとハマり込んだ。

「んっ♡んっ♡あっ♡あっ♡あっ♡ああああっ♡」

キリノの腰をしつかりとつかんでから高速でピストン運動すると、快感の逃げ場がなくなつたキリノは獣のような声であえいだ。

キリノのGスポットから子宮口までを、俺は亀頭を使って丹念に心地よく刺激していき。

ぱちゅん♡ぱちゅん♡ぱあん♡

「っ!♡あっ♡あっ♡あああ♡イクっ♡あっ♡……イクっ♡」

ガク♡ガク♡ガク♡

俺のチンポにおまんこの気持ちいい場所を何度も突かれると、全身をビクンビクンと痙攣させながら、キリノの意識はすぐに快楽に染まっていった。

「ユーリい♡あっ♡おくっ♡んおっ♡おっ♡」

もうすっかりイキ癖がついたのか、キリノはちよつと突いただけで簡単にイッてしまふようになった。

そんなキリノをさらに追い詰めるように俺が両手で乳首をつまみ上げると、キリノは悲鳴のような嬌声を上げる。

くにゆ♡ くりい♡ ぱちゅん♡ ぱあん♡

「おっ♡ おっ♡ おおっ♡ んあ♡ ああ♡」

ガクン♡ ガクン♡

乳首をいじくられ、おまんこを突かれるたびに、キリノの膣がキュツと締まる。

その感触がたまらなく気持ちいい。

「ひあ♡ あ♡ ああああ♡」

おっぱいとおまんこを同時に責められ、ベッドの上でキリノは獣のような声を上げてイキ狂う。

その声が、俺の興奮を高めていく。

「あっ♡ あ♡ ああっ♡ おくっ♡ んお♡ おお♡」

俺はキリノの両手をつかむと、ベッドから彼女の体を引っ張り上げるようにようにしてピストン運動を続ける。

すると、より深くチンポが挿入され、キリノの子宮口をゴリツと押し潰したような感

覚があった。

コリユンコリユンと潰れて逃げる子宮の感触をチンポの先で楽しみながら、俺はキリノのおまんこのヌルヌルとした感触を楽しむ。

にゅぷう♡ にゅくく♡

「あ、っ♡ あ、あ、あ、っ♡ んお、おお♡」

子宮口を連続で押し潰した瞬間、キリノは白目を剥き、舌を突き出してイキ狂った。キリノの膣が痙攣するように震え、俺のチンポを締め付けてくる。

ポルチオ性感帯を開発され尽くしてしまったキリノは、もう俺の寝取りチンポからは逃げられないのだ。

「んお、おおお♡ ああああ♡」

俺にポルチオ性感帯を刺激され続けたキリノは、ビクビクと痙攣しながら盛大に絶頂を迎えた。

そして、ぐったりと意識を濁して、ベッドの上にうつ伏せになって倒れ伏してしまう。全身をとろけさせたような心地いい呼吸で、キリノがお腹をビクビクと震わせている。

「ちよつとお♡ ユーリ♡ これ♡ 止めて♡」

その隣では、おまんこにパイプを固定されたベニコが振動に悶えていた。

「やだ♡ んあ、ああ♡ 止めて♡」

俺はさらにキリノのおまんこをバツクで突きながら、ベニコのクリトリスを電マで刺激する。

「お、っ♡ お、おおっ♡ ああああ♡」

バイブと電マに敏感な部分を同時に振動させられる容赦ない責めに、ベニコは獣のよな声であえぎ、快楽に身悶える。

その隣で、イッたばかりのおまんこを容赦なく俺のチンポにニユルニユルと広げられるキリノは、体の奥深くからガクガクと心地よさそうに痙攣させていた。

「んあ、ああっ♡ ユーリい♡ もうむりいっ♡」

イキすぎて限界を迎えたのか、ベニコが懇願するように叫んだ。

そんなベニコを見おろしながら、俺はキリノの体内の奥深くにチンポをねじ込むと、気持ちよく膣内射精をしていく。

どふう♡ びゆくくう♡ びゆるん♡

「あ、っ♡ あああああ♡ あ、っ♡ んあ、ああああっ♡」

キリノの膣内に、俺の精液が勢いよく注ぎ込まれていく。

子宮をパンパンにふくらませるくらいに俺の精液を注ぎ込まれながら、キリノの体がしあわせな快楽で全身をビクンビクンと震えていた。

射精している間もゆっくりとピストン運動を続け、最後の一滴まで精液を出し切ったところで、俺はキリノからチンポを引き抜く。

そして、そのまま俺は隣で悶えるベニコへと体を向ける。

「ユーリい♡ この変なの♡ もうむりだつてえ♡」

甘い声をあげるベニコに構わず、俺はクリトリスへ押し当てた電マの出力を上げた。

びいびいん♡

「ひああああつ?!♡♡♡♡」

すると、ベニコはビクンツと体を跳ねさせ、絶叫をあげる。

俺はそのままベニコのクリトリスを容赦なく責め立て続けた。

「お、っ♡ お、お♡ ああああつ♡」

電マを当てられたベニコのクリトリスが、すぐに限界まで勃起する。

その状態で電マを押し当て続けると、ベニコは白目を剥きながら獣のような声をあげ続けた。

「んあ、ああつ♡ むりい♡ もうイクうう♡♡」

次の瞬間、ベニコは盛大に潮を吹きながら絶頂を迎える。

そんなベニコに構わず、今度は現在進行系でヒクヒクとぬめりイッているベニコのおまんこに、俺は勃起したペニスをニユルニユルとねじ込む。

……にゆぶぶぶう♡

「ひああああつ!?♡」

正常位の格好で、俺のチンポがベニコのおまんこにヌプヌプと生温かく包み込まれた。

挿入と同時にズリユンとポルチオを刺激されたことで、ベニコの全身がガクガクと痙攣する。

「おっ♡おっ♡おっ♡おっ♡おっ♡おっ♡おっ♡おっ♡」

俺のチンポの先にポルチオを突かれるたびに、ベニコは獣のような声を上げ、全身を震わせて絶頂する。

俺のチンポが出入りを繰り返すたびに、ベニコのおまんこから愛液がドロドロと飛び散っていた。

俺の太い亀頭に膣壁をこすられると、ベニコの膣穴がヒクヒクと心地よさそうに収縮する。

「んあ、ああっ♡ああああつ♡」

限界を超えた快樂に、ベニコは絶叫しながらイキ狂う。

そんなベニコに構わず、俺は正常位の体位でピストン運動を続けた。

「ひああああつ♡もうむりい♡♡」

ベニコは涙を流しながら、ガクガクと全身を痙攣させる。

そんなベニコのクリトリスを電マで刺激しながら、俺はピストン運動を速めていった。

「お、っ♡ お、おおっ♡ ああああ♡」

ベニコは獣のような声を上げて、全身を震わせて絶頂する。

「あ、ああっ♡ むりい♡ もうイクのやらあ♡♡」

ガク♡ ガク♡ ガク♡

そんなベニコに構わず、俺はさらに激しくピストン運動を繰り返す。

「んあ、ああっ♡ ああああっ♡」

ポルチオを突き上げ、クリトリスを押し潰し、ベニコがイキ狂う中、俺は精液を膣内へ吐き出す。

にゆるにゆるしていて生温かいベニコの膣穴に根本まで全部を包み込まれながら、俺はチンポから心地よく精液を吐き出した。

びゆく♡ びゆるるう♡

「お、っ……♡ お、おおお……♡」

ベニコは力なくあえぎ声を上げながら、全身をビクビクと痙攣させる。

子宮に俺の精液をたっぷり注ぎ込まれるベニコの瞳が、快樂でうつとりと暗く濁っ

ていく。

俺に精液を中出しされながら、ペニコは全身のコントロールを快感によって失うと、ビクンビクンと何度も深く震えていた。

「はあ♡ はあ♡」

イキすぎて失神したペニコからチンポを引き抜くと、キリノが物欲しそうな目で俺のペニスを見つめていた。

「ユーリい♡ おまんこに♡ チンポ♡ ちょうだい♡」

ベッドの上で仰向けになった俺にまたがり、キリノが淫らに腰をくねらせる。

俺のペニスがキリノの股間に挟まれ、膣口とクリトリスにヌルヌルと刺激されて気持ちいい。

そして、そのまま腰を動かし、キリノは亀頭を膣口にこすりつけてくる。

……ぬぶぶふう♡

「あんっ♡ ユーリの♡ チンポ♡ 入ってきたあ♡」

キリノの膣肉に、俺の勃起チンポがニルニルと飲み込まれていく。

そのまま腰を上下に動かすと、キリノのおまんこに包み込まれた俺のチンポがヌプヌプとこすれて気持ちいい。

キリノのIカップの爆乳が、俺の上でぶるんぶるんと淫らに揺れている。

パンツ♡ パアンツ♡ パアンツ♡

「んおっ♡ おおっ♡」

肌同士がぶつかり合う音が部屋中に響き渡り、三人の体液でぐちよぐちよになったシーツの上にキリノの愛液が飛び散る。

そのまま、俺が騎乗位の体勢で下からチンポを激しく突き上げ始めると、キリノは頭を振り乱してイキ狂った。

「おっ♡ おおっ♡ イクっ♡」

ガク♡ ガク♡ ガク♡

俺が腰を突き上げるたびに、キリノの腰が快感でビクンビクンと痙攣し、Iカップの爆乳がブルンブルンと揺れ動く。

「んあ、ああっ♡ ああああっ♡」

キリノの膣がヒクヒクと収縮するように俺のチンポを締め付け、俺に射精をうながしてくる。

イキ過ぎて全身に力が入らなくなったキリノは前かがみになってぐったりとしたまま、俺のピストン運動になすがまだ。

「ん、おっ♡ おっ♡ おおおっ♡」

俺はキリノの子宮に、たつぷりと精液をぶちまけた。

俺のチンポの形に丸く穴が広がったキリノのおまんこが、ビクビクと気持ちよさそうに震えている。

びゆく♡ びゆるるう♡

「ああああ♡ ああああ♡」

勢いよく放たれた俺の精液を子宮で受け止めながら、キリノは盛大にイッた。

キリノの青色の瞳がぐるりと上を向いて、快感だけの世界に飛んでいく。

そのままキリノは力なく、俺の上で意識を手放した。

そうして、膣内射精を終えたペニスを引き抜くと、ごぼつと音を立てて、キリノのおまんこから大量の精液が流れ出す。

「はあ♡ はあ♡」

イキすぎて息も絶え絶えのキリノを、俺はベッドの上にやさしく寝かせる。

「ユーリ♡ 次はこっち♡」

その隣では、体力が回復したベニコが四つん這いになり、お尻をふりふりとして俺をセックスに誘っている。

ムチムチで大きいベニコのお尻をムニユリとわし掴みにしながら、俺はバックの体位でベニコの体内にチンポを挿れた。

ぬっぷりとした感触で俺のチンポが体内に進むたびに、ベニコのおまんこがニユルン

と心地よく広がっていく。

ぬぶう♡ぬぶう♡

「んおっ♡おっ♡おっ♡」

子宮口までチンポを一気に突き入れ、俺はベニコのポルチオを亀頭でグリグリと刺激する。

むっちりでむにゅむにゅでニユルニユルのベニコのおまんこが俺のチンポに絡みついてきて、その感触を味わうのが最高に気持ちいい。

そして、俺がそのままピストン運動を始めると、ベニコはすぐに全身を震わせていった。

ベニコの子宮もおまんこの全身の性感帯も、俺が開発し尽くしている。

ぱちゅ♡ぬぶう♡くぶう♡

「おっ♡おっ♡おっ♡あああっ♡」

ガク♡ガク♡ガク♡

イキ狂うベニコのおまんこに、俺は容赦なくピストン運動を続ける。

連続絶頂するベニコの膣壁が、ぎゅつと俺のチンポを締め付けてきて最高の抱き心地だ。

「おっ♡おっ♡おっ♡」

そして、俺はピストン運動を続けながら、ベニコのクリトリスに手を伸ばす。そのまま、俺は正常位の格好でクリトリスをグリグリと押し潰すと、さらにベニコをイかせまくる。

「あゝっ♡ ああああっ♡ んあゝ ああああ♡」

そんな俺の責めに耐えきれず、すぐにベニコは限界を迎えた。

しかし、俺はそれでもなお、ベニコのおまんこにピストン運動を続ける。

「ユーリい♡ おまんこ♡ こわれる♡ こわれちゃう♡」

ベッドの上で股を開いたま動けないベニコは、俺に対し必死に訴えかけてきた。

しかし、俺はそんなベニコの体を持ち上げると、おまんこの奥までをチンポでゴリゴリと連続で押し広げていく。

俺の亀頭がベニコの膣壁をヌプヌプと何度もめくると、ベニコは全身を力なく何度も震わせる。

そのまま、ベニコは正常位の格好でブリッジをするように背中をのけぞらせると、ピンク色の瞳を上げずらせながら、心地よさそうな吐息を漏らして深くイッた。

「おゝっ♡ おゝおおっ♡ ああああっ♡」

俺のチンポの先にポルチオ性感帯を突かれるたびに、ベニコは獣のような声を上げてイキ狂う。

「あ、っ♡ ああああっ♡ ……お、っ♡♡♡ ……イ、クっ♡♡♡」

ガクン♡ ガクン♡ ガクン♡

そのまま、ポルチオイキしながら俺に膣内射精されると、体中を痙攣させながら絶頂を迎えたベニコは意識を失った。

ガクガクと全身を揺らすベニコのおまんこが、にゅくにゅくと俺のペニスに吸い付いてくる。

そうして、中出しを終えた俺がチンポをニユプリと抜き取ると、ゴポリと音を立てて、ベニコのおまんこからドロドロの精液がこぼれ落ちた。

……

……

……

ふにゅ♡ むにゅ♡ ぷるん♡ ぷるん♡

「ユーリい♡ ほら♡ イケ♡ イツちやえ♡」

「ユーリは……こうされるのがいいの♡」

今の俺はベッドに横になり、キリノとベニコの二人にパイズリされている。

勃起した俺のチンポを両脇から、キリノとベニコのおっぱいが包み込む体勢だ。

ベニコのHカップの爆乳とキリノのIカップの爆乳にもつちりと挟まれて、俺のチン

ポは幸せになった。

「……ちゅばあ♡ ……ちゆるう♡」

「……んちゅ♡ ……くちゅ♡ ……じゆるるう♡」

そして、キリノとベニコは二人同時に、俺のチンポにフェラを始める。

ベニコの生温かくて柔らかい舌が俺の龟头を包み込み、キリノの丹念な口が、俺の金玉をやさしくねぶってくる。

仰向けに寝たままの俺に、ベニコがパイズリフェラを続けながら、その下ではキリノが俺の金玉をとろけるように舐め尽くす。

ここは、天国だった。

ちゅぶるう♡ ちゅばあ♡

「……ベニコ♡ ……交代♡」

「……んはあ♡ ……しようがねーなあ♡」

今度はキリノが俺にパイズリフェラをする下で、ベニコが俺の金玉をちゆるちゆると舐めてくれる。

おっぱいにチンポを挟まれながら、二人の舌で交互に龟头を舐められると、腰が溶けそうなほど気持ちいい。

「……ユーリのチンポ♡ ……ピクピクって♡ ……してる♡」

「ユーリ♡ セーえき♡ 金玉から♡ 気持ちよーく♡ びゆくびゆくつて♡ 出しちやえよ♡」

キリノとベニコの声に責められながら、俺はダブルパイズリフェラをされていく。

ベニコの口が俺の金玉に吸い付いてきて、心地よく口内でちゅるちゅると舐め転がしてくる。

そうして、次の瞬間には、再びキリノとベニコの爆乳が俺のチンポをムニユムニユと包み込む。

チンポが爆発しそうになるくらいに幸せな時間。

俺は快楽に身を任せると、そのまま射精した。

びゆく♡ びゆく♡

「えへへ♡ ユーリのセーえき♡ もーらい♡」

「……あつ♡ ……ベニコずるい♡」

射精する瞬間、笑顔のベニコが俺の亀頭に吸い付いてきた。

ちゅぱちゅぱと吸い付いてくる温かいベニコの口の中に、俺は大量の精液を流し込む。

生温かくてヌルヌルしたベニコの口の中をチンポで味わいながらする、最高に気持ちいい射精。

そんなベニコに負けじと、キリノは俺の竿をペロペロと丁寧舐めて、心地いい射精をうながしてくれていた。

キリノの生温かい舌の感触を竿と金玉でネロネロと味わいながら、俺はとてつもなく心地いい射精を経験する。

くちゅ♡ れろお♡ じゅるるう♡

「キリノ♡ お前♡ やめっ♡ ……ちゅばあ♡ ……れろお♡」

「うるさい♡ ズルしたベニコが悪い♡ ……じゅるるう♡ ……ちゅるう♡」

そうして、射精を終えたベニコの口にキリノが吸い付くと、二人は俺の精液を奪い合う。

キリノとベニコはお互いの舌を舐め回すようにして、ちゅばちゅばと俺の精液を奪い合っていた。

お互いの口を吸い合うようにして舐め回した俺の精液を、キリノとベニコは口移しで交換していく。

そして、ようやく顔を離れたキリノとベニコの口には、俺の精液が白く糸を引いていた。

「はあ♡ はあ♡」

「……ユーリい♡ ……次はアタシの番♡」

そのまま、競い合うように、キリノとベニコが俺のチンポに吸い付いてくる。

戦いのことしか知らずに生きてきたキリノとベニコの二人は、今や完全に俺のチンポに調教されきっていた。

「……………んちゅ♡ ……んむ♡」

「はむっ♡ ……ちゅっ♡」

そんな二人に気持ちいいフェラをされると、俺のチンポはあつという間に元気を取り戻す。

俺のチンポが自分たちの口で勃起したのを喜ぶと、キリノとベニコは自分のおっぱいを持ち上げて、その谷間に俺のチンポを挟み込んでいく。

ムニユリとしていて、温かく質量のあるおっぱいに、また俺にチンポが包み込まれる。

「……………ユーリ♡ もうイキそう?♡」

「ユーリ♡ アタシたちのおっぱい♡ 気持ちいい?♡」

俺にそう問いかけると、キリノとベニコの二人は同時にパイズリフェラを始める。

ちゅばあ♡ れろお♡ じゅるう♡ くちゅう♡

「……………んはあ♡ ……はむっ♡」

「……………あむうう♡ ……んああ♡」

生温かい二人の舌が、俺のチンポに絡みついてネロネロヌルヌルと心地いい快感を与

えてくれる。

そのまま、俺は再び勢いよく射精した。

びゆく♡ びゆるるう♡

「……んちゆう♡ ……ちゆうぶ♡ ……ちゆるるう♡」

「……れろお♡ ちゆうぶう♡ ちゆるるう♡」

今度は、キリノが俺の亀頭に吸い付いて、口の中に出てくる精液を楽しんでいる。

キリノの温かい口に亀頭をニユルニユルと包み込まれながら、ドクドクと射精する甘い感覚を俺はチンポで味わう。

その下では、俺が心地よく射精できるように、ベニコが俺に金玉から竿にかけてをとりける舌使いでちゆくくと舐め回していた。

ベニコの口が俺のチンポの根本に吸い付いてきて、ちゆうちゆうヌルヌルと俺に心地いい射精をうながす。

「んちゆう♡ れろお♡ あむう♡」

「ちゆうぶるう♡ ちゆるるる♡ はむう♡」

そうして、腰がゾクゾクと碎けるような射精が終わると、キリノとベニコはお互いの口から俺の精液を奪い合うようにして、キスをして舌を絡め合う。

くちゆう♡ れろお♡ ちゆるるるう♡

「……んはあ♡」

「あむう♡ ……くちゅ♡」

ベニコとキリノが口から俺の精液をダラリと垂れ落とす姿を見てみると、俺のチンポがあつという間に元気を取り戻す。

「ねえ♡ ユーリ♡ おまんこに♡ 挿れて♡」

「……ユーリ♡ ……こつちのおまんこに♡ ……挿れて♡」

俺のチンポが元気を取り戻したのを確認すると、ベッドの上で二人は同時に自らの性器を指で開き、俺に見せつけてくる。

俺は正常位の格好でM字に股を開いたベニコの膣口に龟头をあてがい、そのままヌププと挿入した。

「にゅぷう♡ ずちゅつ♡ ぬちやあ♡ ぐちゅう♡」

「ああああつ♡ ユーリ♡」

生温かいベニコのおまんこに俺のチンポ全体が包み込まれて、最高の快感だ。

「……ああん♡ ああああつ♡」

そんなベニコに腰を振りながら、キリノのおまんこに俺は手マンする。

「ユーリ♡ おくつ♡ おくう♡ 突いちや♡ らめつ♡」

そして、次は俺はキリノのおまんこにチンポをねじ込み、生温かい膣穴のヌルヌルと

した感触を楽しむ。

俺に調教されたキリノの膣肉がネトネトぬるぬるにヌメって、俺のチンポをくぶくぶと味わっている。

……とぶっ♡ ……とぶぶう♡

「ああああっ♡ ああああっ♡」

……くぶぶう♡ ……びゅくん♡

「あゝあんっ♡ あゝああっ♡」

こうして、俺はベニコとキリノとの3Pセックスは、二人が気絶して起きられなくなる朝まで、たっぷりと続くのだった。